

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第179集

# 池島・福万寺遺跡 5

(池島Ⅱ期地区04-2調査区)

—一級河川恩智川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書—

2008年3月

財団法人 大阪府文化財センター

# 池島・福万寺遺跡5

(池島Ⅱ期地区04-2調査区)

—一級河川恩智川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書—



調査地遠景（南東から）



縄文晩期～弥生前期の墓域（北から）



縄文晩期～弥生前期の木棺墓・土壙墓（北から）



433木棺墓（南東から）



浮線文系土器 (339落ち込み)



弥生土器 壺・鉢 (366土器棺墓)



祭祀関連遺物



弥生土器・突帯文土器

# 序 文

本書は、当センターが1989年以来発掘調査を進めてまいりました恩智川治水緑地建設に伴う発掘調査の報告書です。治水緑地の調査は、これまでに福万寺Ⅰ期地区・池島Ⅰ期地区の調査を終了し、現在は福万寺Ⅱ期地区・池島Ⅱ期地区の調査を進めております。本書は、池島・福万寺遺跡の池島Ⅱ期地区で最初の調査区の発掘調査報告書となります。

河内平野は、列島でも早くから稲作が定着した地域のひとつとして知られています。大阪では、平野や生駒山地の扇状地を中心に数多くの人間生活の痕跡が確認されています。

本遺跡も、既往の調査において弥生時代前期から現代に至る各時代の農耕関係の遺構が確認されています。これまでの調査で、弥生時代各時期の水田をはじめ、古代の条里制に伴う水田区画など、日本列島の農耕を考える豊富な資料に恵まれた遺跡であることが明らかになっています。

本書に収められた、池島・福万寺遺跡Ⅱ（その2-1）調査区では、既往の調査同様に現代から弥生時代に至る各時期の遺構が確認されました。また、この調査で最も特筆されるのは、弥生文化がこの平野に定着する縄文時代からの転換期に人々が居住していたと考えられる遺構や、葬られた墓が確認されたことです。

その墓地では、縄文時代からの伝統的な墓と弥生時代以降に広まったと考えられる木棺墓が混在した状況でした。現段階では、それらについての十分な分析・評価には至りませんが、今後周辺の遺跡も含めた検討により、縄文時代から弥生時代への転換の様子が明らかになるものと期待されます。

最後になりましたが、調査の過程でお世話になった地元の皆様をはじめ大阪府土木部、同部寝屋川水系改修工営所、同南部工区、大阪府教育委員会、東大阪市教育委員会など関係諸機関、指導助言を賜った多くの方々に厚く御礼申し上げますとともに、今後とも当センターの調査にご理解とご協力を賜りますようお願いいたします。

平成20年3月

財団法人 大阪府文化財センター  
理事長 水野正好

# 例 言

- 1 本書は、東大阪市池島町地内に計画された恩智川治水緑地建設に伴う池島・福万寺遺跡04-2発掘調査報告書である。
- 2 調査は、大阪府寝屋川水系改修工営所から財団法人大阪府文化財センターが一級河川恩智川治水緑地池島・福万寺遺跡Ⅱ（その2-1）として平成16年10月1日～平成18年8月31日の間委託を受け、平成16年12月8日～平成18年8月7日まで調査を実施し、平成19年度に本書の刊行をもってすべての業務を完了した。
- 3 調査は、財団法人大阪府文化財センター調査部長 赤木克視、中部調査事務所所長 小野久隆、池島支所支所長 國乗和雄（平成18年3月まで）、寺川史郎（平成18年4月から）、調査第1係長 廣瀬雅信の指示の下、調査第1係技師 田中龍男 同専門調査員 鬼頭 彰を担当者として実施した。
- 4 発掘作業については(株)福田組に工事請負発注して実施した。当調査に関わる航空写真測量については、(株)アコードに委託して行った。撮影原版は同社で保管している。また、花粉・珪藻・植物珪酸体分析、軟X線分析については(株)パリノ・サーヴェイが、放射性炭素年代測定（AMS）分析は(株)パレオラボに委託して行った。また、貝類等の同定は、池田 研氏（財団法人大阪市文化財協会）をお願いした。分析結果については、本文中にその結果をもとにまとめた形で掲載している。
- 5 本書の執筆は、田中龍男・林日佐子・廣瀬時習・島崎久恵・後川恵太郎・内田真雄・飯田浩光・乾哲也が分担して行った。執筆分担については、各文章の文末に記載している。編集は、廣瀬時習が行なった。
- 6 発掘調査および遺物整理に要した費用は、全額大阪府土木部が負担した。
- 7 調査の実施にあたっては、大阪府寝屋川水系改修工営所、同所南部工区、大阪府教育委員会、東大阪市教育委員会、八尾市教育委員会、財団法人八尾市文化財調査研究会などの関係諸機関の協力を得た。また、調査の過程や整理事業の過程で多くの方々にご指導・ご助言をいただいた。本書末尾に謝辞として氏名を順不同で列挙させていただいた。

# 凡 例

- 1 本書で用いた北は座標北を基準とした。ちなみに磁北は西に6° 18′、真北は東に0° 12′ 振っている。なお、座標は世界測地系に準拠している。
- 2 本文中の遺構位置などの表記においては、第1章3節で記述した区割にしたがって表記しているが、本文中ではこのうちの第Ⅳ区画のみを「4 e・5 f」などと表記している。
- 2 標高は、東京湾平均海面（T.P.）を基準とする。
- 3 遺構全体平面図は400分の1、遺構図は20分の1、遺物実測図の縮尺は2分の1・4分の1を原則とする。ただし、一部必要に応じて任意の縮尺を設定しており、その都度スケールを表示している。
- 4 土色表示は小山正忠・竹原秀雄編 農林水産省農林水産技術会議事務局監修 財団法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帖』2004年版を用いて行った。
- 5 本文中では、引用および参考とした文献を「(●●●●1990)」という形で記載した。これについては、本文末尾に引用・参考文献一覧を掲載しており、これを参照されたい。



# 目 次

巻頭図版

序文

例言

凡例

目次

## 第1章 調査にいたる経緯と経過

1. 池島・福万寺遺跡の位置と調査…………… 1
2. 調査の経緯…………… 2
3. 調査方法…………… 4

## 第2章 地理的環境・歴史的環境

1. 地理的環境…………… 5
2. 歴史的環境…………… 7

## 第3章 基本層序と遺構面

1. 遺構面の認識と観察視点…………… 10
2. 基本層序…………… 11

## 第4章 調査成果

### 1. 現代～古墳時代面の調査

- 1) 第1面・第1面ベース（第1b面）…………… 16
- 2) 第2面…………… 18
- 3) 第3面…………… 20
- 4) 第4面…………… 23
- 5) 第5面…………… 23
- 6) 第6面…………… 25
- 7) 第7面…………… 27
- 8) 第8面…………… 30
- 9) 第9面…………… 32
- 10) 第10面…………… 38

### 2. 弥生時代～縄文時代面の調査

- 1) 第11面・第11面ベース（第11b面）…………… 43
- 2) 第12面・第12面ベース（第12b面）…………… 48
- 3) 第13面…………… 59
- 4) 第14-1面…………… 64
- 5) 第14-2面ベース（第14-2b面）…………… 83
- 6) 第15面…………… 111

7) 各遺構および包含層出土の石器と石製品	115
第5章 池島・福万寺遺跡04-2 自然科学分析	
1. はじめに	129
2. 自然科学分析の概要	129
3. 各分析の結果	131
4. 自然科学分析の成果と検討	148
第6章 総括	
1. 検出遺構と遺構面	155
2. 突帯文土器の分類と変遷	159
掲載遺物一覧表	173
写真図版	
報告書抄録	

# 挿図目次

図1	池島・福万寺遺跡の位置	1	図45	第13面平面図	59
図2	調査地の位置	2	図46	第13面遺構図	60
図3	調査区地区割図	3	図47	第13面(358流路)出土遺物	61
図4	池島・福万寺遺跡と周辺の遺跡	6	図48	第13面・13層・13b面・13b層出土遺物	62
図5	断面模式図(X=-149,860ライン東西断面)	12・13	図49	第14-1面平面図	64
図6	第1b面平面図	17	図50	第14-1面(339落ち込み)出土遺物(1)	66
図7	第1b面(1b土坑)出土遺物	18	図51	第14-1面(339落ち込み)出土遺物(2)	67
図8	第2面平面図	19	図52	第14-1面(339落ち込み)出土遺物(3)	69
図9	第3面平面図	21	図53	第14-1面(339落ち込み)出土遺物(4)	71
図10	第4面平面図	22	図54	第14-1面(339落ち込み)出土遺物(5)	73
図11	第4層出土遺物	23	図55	第14-1面(339落ち込み)出土遺物(6)	74
図12	第5面平面図	24	図56	第14-1面(339落ち込み)出土遺物(7)	75
図13	第5層出土遺物	25	図57	第14-1面・14-1層出土遺物	76
図14	第6面平面図	26	図58	第14-1面・14-1層・14層出土遺物	77
図15	第6層出土遺物	27	図59	第14-1層出土遺物	78
図16	第7面平面図	28	図60	第14層関連出土遺物	79
図17	第7面ピット断面図	29	図61	第14-2層出土遺物	82
図18	第7層出土遺物	30	図62	第14-2b面平面図	84・85
図19	12ピット断面図	30	図63	第14-2b面掘立柱建物1遺構図	86
図20	第8面平面図	31	図64	第14-2b面掘立柱建物2遺構図	87
図21	第8層出土遺物	32	図65	第14-2b面433木棺墓遺構図	88
図22	第9面平面図	33	図66	第14-2b面447木棺墓遺構図	90
図23	第9面遺構図(1)	34	図67	第14-2b面467木棺墓遺構図	91
図24	第9面遺構図(2)	35	図68	第14-2b面446木棺墓遺構図	92
図25	第9面・9層出土遺物	36	図69	第14-2b面366土器棺墓・366土坑・486A・B土坑遺構図	93
図26	第9層関連出土遺物	36	図70	第14-2b面374土坑遺構図	94
図27	第10面平面図	38	図71	第14-2b面432土坑遺構図	96
図28	第10面遺構図(1)	39	図72	第14-2b面454土坑・453土坑・480土坑遺構図	97
図29	第10面遺構図(2)	40	図73	第14-2b面459土坑・460土坑・506土坑遺構図	98
図30	第10面遺構図(3)	41	図74	第14-2b面遺構図(1)	100
図31	第10面・10層出土遺物	42	図75	第14-2b面遺構図(2)	101
図32	第11面平面図	43	図76	第14-2b面遺構図(3)	102
図33	第11b面(208溝)・11b層出土遺物	44	図77	第14-2b面遺構図(4)	103
図34	第11b面平面図	45	図78	第14-2b面出土遺物	106
図35	第11b面遺構図	46	図79	第14-2b面(433木棺墓)出土遺物	107
図36	第12面平面図	48	図80	第14-2b面(366土器棺墓・366土坑)出土遺物	108
図37	第12面遺構図	49	図81	第15面平面図	111
図38	第12面(229流路)出土遺物(1)	51	図82	第14-2b層出土遺物	112
図39	第12面(229流路)出土遺物(2)	52	図83	第15-2面・15-2層・15-3b層出土遺物	113
図40	第12面(213大畦畔)出土遺物	53	図84	石器(1)石鏃・石槍・石錐・石匙・削器	116
図41	第12層・12b層出土遺物	54	図85	石器(2)楔形石器	117
図42	第12b面平面図	55			
図43	第12b面遺構図(1)	56			
図44	第12b面遺構図(2)	57			

図86	石器 (3) 楔形石器	118	図105	PLD6048暦年較正結果	144
図87	石器 (4) 楔形石器・剥片	119	図106	PLD6049暦年較正結果	144
図88	石器 (5) 剥片・板状剥片	120	図107	PLD6050暦年較正結果	145
図89	石器 (6) 石斧	121	図108	PLD6051暦年較正結果	145
図90	石器 (7) 叩石・石皿	122	図109	PLD6052暦年較正結果	146
図91	石器 (8) 叩石・磨石	123	図110	PLD6053暦年較正結果	146
図92	石器 (9) 叩石	124	図111	PLD6054暦年較正結果	147
図93	石器 (10) 石棒	125	図112	PLD6055暦年較正結果	147
図94	石器 (11) 石棒	126	図113	突帯文土器の分類	160
図95	石器 (12) 石錘	127	図114	底部形状	161
図96	石器 (13) 叩石・板状礫	128	図115	器形別の突帯貼付位置 (口縁部)	164
図97	調査地点の模式柱状図と分析試料採取地点平面図 (第14 a 面)	130	図116	器形別の突帯断面形状 (口縁部)	164
図98	主要珪藻化石群集の層位分布	132	図117	器形別の突帯刻目形状 (口縁部)	164
図99	花粉化石群集の層位分布	133	図118	突帯大・小D字形刻目の大きさ (器形不明分を含む全口縁部)	164
図100	植物珪酸体含量の層位分布	134	図119	器形別の口径	164
図101	7地点の軟X線写真と主な構造トレース図	136	図120	器形・突帯貼付位置・突帯断面形状・突帯刻目形状 (口縁部)	164
図102	6地点の軟X線写真と主な構造トレース図	138	図121	器形・突帯貼付位置・突帯断面形状・突帯刻目形状 (器形不明分を含む全口縁部)	166
図103	5地点の軟X線写真と主な構造トレース図	139			
図104	出土した大型植物化石	141			

## 挿入表目次

表1	大型植物化石一覧表	140	表4	測定試料および処理	143
表2	動物遺体一覧表	140	表5	放射性炭素年代測定および暦年較正の結果	143
表3	貝類種名一覧表	140			

## 巻頭図版目次

巻頭図版1	調査地遠景 (南東から)	巻頭図版3	浮線文系土器 (339落ち込み)
巻頭図版2	縄文晩期～弥生前期の墓域 (北から)	巻頭図版4	弥生土器 壺・鉢 (366土器棺墓)
433木棺墓 (南東から)		祭祀関連遺物	
		弥生土器・突帯文土器	

## 挿入写真目次

写真1	1 島島西肩断面 (南から)	20	写真9	467木棺墓断面 (北東から)	89
写真2	2 島島西肩断面 (南から)	20	写真10	467木棺墓歯検出状況 (北西から)	89
写真3	第7面西半 (南西から)	29	写真11	366土器棺墓断面(東から)	94
写真4	南法面第1～11 b 層 (北東から)	29	写真12	48 B 土坑検出状況(北から)	94
写真5	433木棺墓検出状況 (北から)	88	写真13	432土坑断面(南西から)	96
写真6	433木棺墓小口断面 (西から)	88	写真14	383土坑断面(南から)	104
写真7	447木棺墓歯検出状況 (南西から)	89	写真15	479ピット断面 (南から)	104
写真8	467木棺墓検出状況 (西から)	89			

# 写真図版目次

## 図版1 遺構

第2面東半 全景（東から）

第2面西半 全景（南から）

## 図版2 遺構

第5面西半 全景（南から）

第7面西半 全景（南から）

## 図版3 遺構

第8面西半 全景（南から）

第9面東半 全景（南から）

## 図版4 遺構

第9面西半 全景（南から）

第10面東半 全景（南から）

## 図版5 遺構

第10面西半 全景（南から）

第11面西半 全景（西から）

## 図版6 遺構

第11b面東半 全景（南から）

第12面東半 全景（東から）

## 図版7 遺構

第12面西半 全景（西から）

229流路断面（南から）

## 図版8 遺構

第12b面東半 全景（南から）

第13面西半 全景（南から）

## 図版9 遺構

第14-1面東半 全景（東から）

第14-1面西半 全景（南から）

## 図版10 遺構

側溝内 土器出土状況（東から）

第14-2b面東半 全景（東から）

## 図版11 遺構

第14-2b面西半 遺構検出状況（北から）

第14-2b面西半 467・447・506土坑検出状況（北西から）

## 図版12 遺構

第14-2b面西半 467・447・446・506土坑検出状況（東から）

第14-2b面西半 366土器棺墓・366土坑検出状況（東から）

## 図版13 遺構

第14-2b面西半 366土器棺墓検出状況（東から）

第14-2b面西半 432土坑検出状況（南東から）

## 図版14 遺構

第14-2b面西半 433木棺墓木棺検出状況（西から）

第14-2b面西半 446土坑検出状況（北から）

## 図版15 遺構

第14-2b面西半 447木棺墓完掘状況（北東から）

第14-2b面西半 453土坑検出状況（東から）

## 図版16 遺構

第14-2b面西半 453土坑歯検出状況（東から）

第14-2b面西半 454土坑検出状況（東から）

## 図版17 遺構

第14-2b面西半 467木棺墓検出状況（西から）

第14-2b面西半 467木棺墓断面（東から）

## 図版18 遺構

第14-2b面西半 467木棺墓木棺検出状況（東から）

第14-2b面西半 467木棺墓完掘状況（東から）

## 図版19 遺構

第14-2b面西半 506土坑土器出土状況（北から）  
04-2調査区北側 砂堆積状況（西から）

## 図版20 遺構

第15面西半 全景（南から）

調査区南法面（北から）

## 図版21 遺物

第1b面（1b土坑）・5・6・7・9層出土遺物  
第9層関連出土遺物

## 図版22 遺物

第9層関連出土遺物

第10面（116土坑・177溝・104溝）・10層出土遺物

## 図版23 遺物

第12面（229流路）出土遺物

## 図版24 遺物

第12面（229流路・213大畦畔）・12層出土遺物

## 図版25 遺物

第13面（358流路）出土遺物

第13面・13層・13b層出土遺物

## 図版26 遺物

第13面・13層・13b面・13b層出土遺物

## 図版27 遺物

第14-1面（339落ち込み）出土遺物

## 図版28 遺物

第14-1面（339落ち込み）出土遺物

## 図版29 遺物

第14-1面（339落ち込み）出土遺物

## 図版30 遺物

第14-1面（339落ち込み）出土遺物

## 図版31 遺物

第14-1面（339落ち込み）出土遺物

## 図版32 遺物

第14-1面（339落ち込み）出土遺物

図版33 遺物

第14-1面(339落ち込み)出土遺物

図版34 遺物

第14-1面(339落ち込み)出土遺物

第14-1面・14-1層出土遺物

図版35 遺物

第14-1面・14-1層・14層関連出土遺物

図版36 遺物

第14-1層出土遺物

図版37 遺物

第14-1層・14層出土遺物

図版38 遺物

第14-1層・14層・14層関連出土遺物

図版39 遺物

第14-2b面(506土坑・459土坑・447木棺墓)出土遺物

図版40 遺物

第14-2b面(486A・B土坑・374土坑・460土坑・432土坑・467木棺墓・495ピット)・14-2層出土遺物

図版41 遺物

第14-2b面(433木棺墓)出土遺物

図版42 遺物

第14-2b面(366土器棺墓)・14-2b層出土遺物

図版43 遺物

第14-2b層出土遺物

第15-2面・15-2層・15-3b層出土遺物

図版44 遺物

石器(石鏃・石槍・石錐・石匙・削器)

図版45 遺物

石器(楔形石器)

図版46 遺物

石器(楔形石器)

図版47 遺物

石器(楔形石器・剥片・板状剥片)

図版48 遺物

石器(石斧・叩石・石皿)

図版49 遺物

石器(叩石・磨石)

図版50 遺物

石器(石棒)

図版51 遺物

石器(石錘・叩石・板状礫)

# 第1章 調査にいたる経緯と経過

## 1. 池島・福万寺遺跡の位置と調査

池島・福万寺遺跡は、八尾市福万寺町と東大阪市池島町にまたがって所在する遺跡である。近年まで条里地割が明瞭に残る地域として著名である。現在の景観は、玉串川が天井川化し河道が固定された中世以降の状況と考えられる。遺跡中央を北流する恩智川については、条里地割に組み込まれた直線的な人工河川と推定され、条里地割施行以降のものと推定されている。遺跡の規模は東西約1.2km、南北1.7km、総面積130haの広範囲に及ぶ。

当遺跡は、恩智川治水緑地建設に伴う発掘調査が1982年度より継続して実施されている。恩智川治水



図1 池島・福万寺遺跡の位置

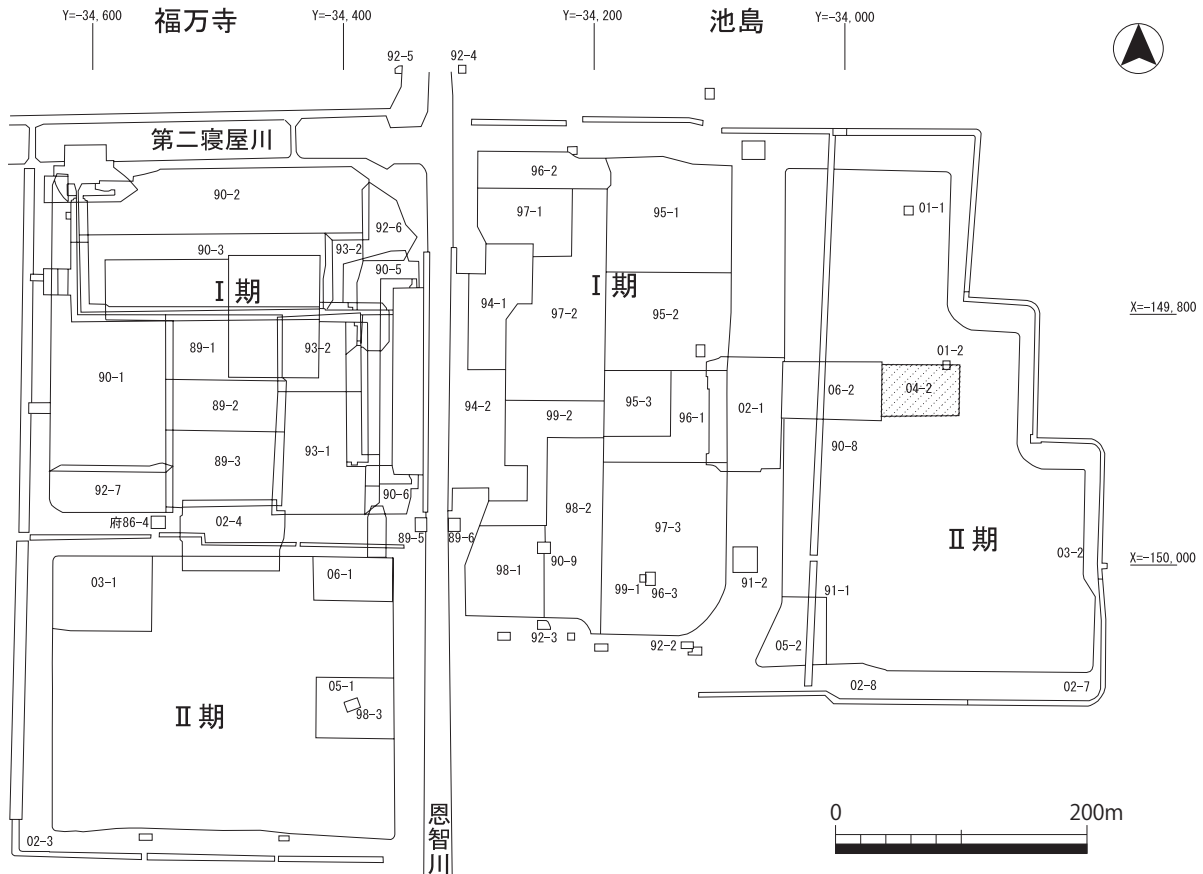


図2 調査地の位置

緑地建設にあたり、40.2haが調査対象地となっている。現在まで、大阪府教育委員会および当センターにより約20haの発掘調査が終了している。

これまで当センターが実施した発掘調査では、遺構・遺物の調査とともに地形環境との関連性やその変遷について積極的に検討を行ってきた。そのなかでは関連諸科学研究との連携に大きな力を注ぎ、発掘調査データの蓄積と検討から、現在までに福万寺地区を中心に時期的な景観変遷の理解が進んでいる。これまでの調査成果については概要報告書および報告書等が刊行されている。(田中・廣瀬)

## 2. 調査の経緯

池島・福万寺遺跡の発掘調査は、恩智川治水緑地の建設に先立って行われている。この治水緑地は、下流の大阪市および周辺の市町村を洪水被害から守るために造られた多目的遊水地であり、豪雨時には増水した河川の水を一時的に貯留する。また平素は、公園や緑地・グラウンドとしての機能を持ち、市民に広く開放されている。

当遺跡は、先述のように条里地割が良好に残る地域として周知され、治水緑地建設計画以前にも東大阪市遺跡保護調査会による調査が行なわれている。治水緑地建設にあたっては、1981年から大阪府教育委員会によって試掘調査2箇所、発掘調査が5箇所で行われている。その後1989年から大阪府教育委員会の指示により福万寺I期地区・池島I期地区の池床部の調査については、財団法人大阪文化財センター（現 財団法人大阪府文化財センター）が行うことに決定した。

福万寺I期地区については1989年4月から調査を開始し、1995年3月に調査を終了した。また池島I



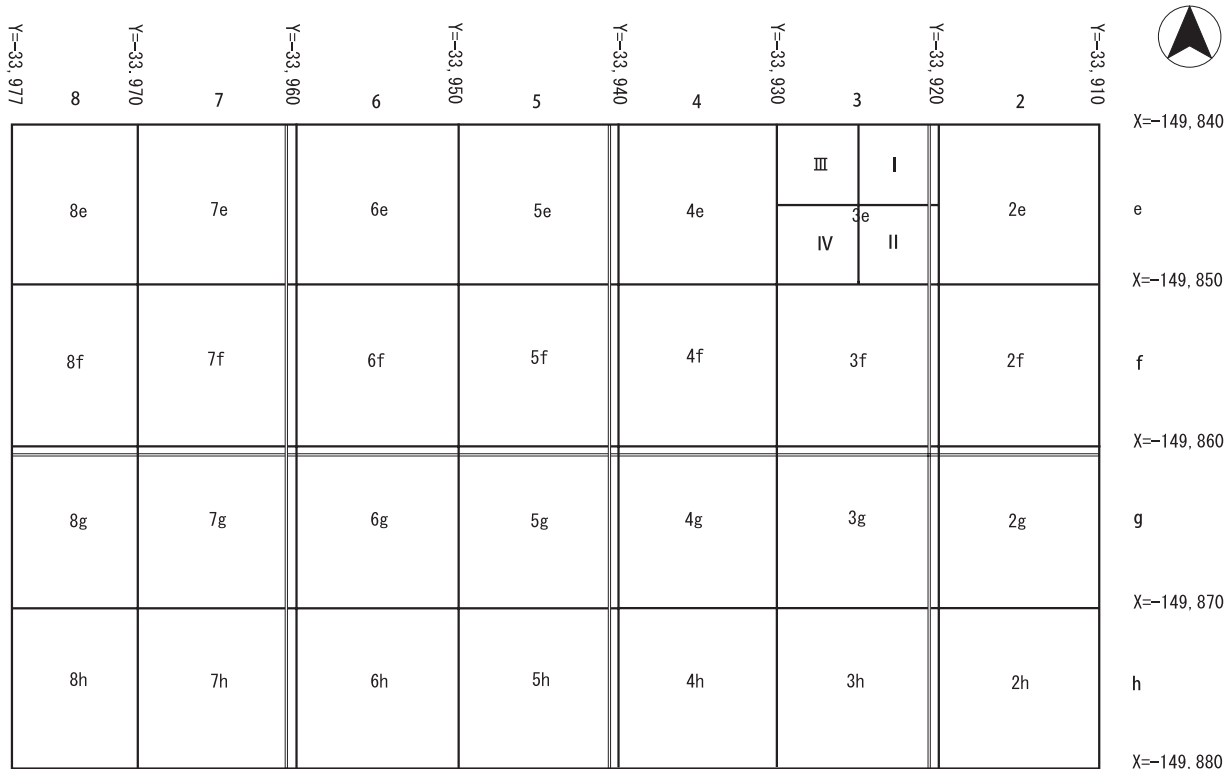


図3 調査区地区割図

期地区については、1989年から当センターによって部分的な確認調査が実施され、1994年から施設部といわれる恩智川に面した越流堤部分から調査を開始し、2002年3月をもって池床部のすべての調査を終了した。

2002年2月からは、池島Ⅰ期地区の調査の終了に合わせて、当調査の関わる池島Ⅰ・Ⅱ期地区間の諸施設建設に先立つ調査が開始された。現在では、福万寺Ⅰ・Ⅱ期地区間の諸施設の建設にともなう調査も2003年2月から始めており、福万寺Ⅱ期地区では池床部の調査が開始されている。

当調査区の調査は、2004年9月29日に大阪府土木部と当センターが契約を締結した2004年10月1日～2006年8月31日の3年度にわたる債務契約に基づく発掘調査である。現地での調査は、2005年2月2日に開始し、2006年6月2日をもって終了した。調査は、近代・近世面の確認のためのトレンチ調査である人力掘削3から開始し、その成果をうけて機械掘削を行なった。機械掘削ののち、2005年2月28日より人力掘削1を開始し、現代～縄文時代後期まで遺構面を検出し約22面の面的な調査を行った。

調査は、2005年3月8日から本格的に遺構面の検出を開始し、2005年3月31日には近世後期の第2面東半の航空測量にともなう空撮を行い、続いて4月5日に同面西半の空撮を行った。7月29日に第10面東半の空撮を行い、8月4日に同面西半の空撮を行った。以降、調査は弥生時代の各面におよび8月11日には第11面東半、同月30日には同面西半の空撮を行った。9月8日には第11b面東半の空撮を行った。11月17日には弥生時代中期の水田である第12面東半、同月25日には同面西半の空撮を行った。11月30日には弥生時代前期の第13面東半の空撮を行い、続いて12月9日に同面西半の空撮を行った。2006年に入り、1月11日には第14面東半の空撮を行い、同月26日には同面西半の空撮を行った。この後、2月15日に縄文時代晩期から弥生時代前期の墓域・居住域が検出された第14-2b面西半、3月15日に同面東半の空撮を行った。(田中・廣瀬)

### 3. 調査方法

池島・福万寺遺跡では、各調査区に調査開始年度と請負契約に記された工区数字の順に略称を付与している。当調査区の場合は、04-2調査区と呼称され、本書では文中に関連する周辺調査区をも含めてこうした呼称に統一して説明を行う。

通常、当遺跡の工期が複数年度にまたがる調査にあたっては、各年度ごとに調査区を設定し分割して調査を行うが、面積の関係上当調査区では調査区を1つのトレンチとして東半・西半とに分けて調査を行った。写真撮影、測量などについては、この東半・西半を境に東西に分けて調査を行っている。

当遺跡の調査にあたっては、当センターの2003年8月刊行の『遺跡調査基本マニュアル（暫定版）』に沿って調査を行っている。調査にあたっては、2002年度より座標値が国際基準に基づく世界測地系に変更されたため、当調査でも世界測地系に基づいて調査を行い、本報告にあたってはすべてその方式に従った。しかし、今までに刊行されている当遺跡に関わる『池島・福万寺遺跡』1・2・3の報告書では日本測地系によって位置関係が報告されている。『池島・福万寺遺跡』4の報告書および本書に関して先述のように世界測地系を採用して位置情報を記載しているため、位置の照合にあたっては注意を要する。

当センターの発掘調査においては、通常、まず現代の盛土とその下の用地買収以前の耕作土をバックフォーにて除去し、そこから人力掘削を開始する。しかし、当調査区においては、先述のように近代から近世遺構面について、幅1mのトレンチ調査を行ない確認を行なったうえで、近世後期の遺構面の直上まで機械掘削を行った。このため調査開始にあたって、世界測地系に沿って、図に示したようにX=-149,860ライン、Y=-33,920・-33,940・-33,960ラインの各座標下二桁の偶数ラインにトレンチを設定し掘削して、分層を行い調査を進め機械掘削の深度を確認した。ただし、当調査区の場合、実際にはほぼ全域が近世後期の第2層直上であったため、バックフォーによる掘削は表土を僅かに除去しただけであった。

調査区の区割りについては、世界測地系に準じた国土座標第Ⅵ系に基づき、G-6と表記される第Ⅰ～Ⅱ区画、2,500分の1地形図の北東隅を起点とした1N・20Nなどと表記される100m四方の区画の第Ⅲ区画、それをさらに10等分し南北軸にアルファベット小文字（a～j）、東西軸にアラビア数字（1～10）を与えた10m四方の区画のⅣ区画を用いて、遺物の取り上げなどの位置を表記して調査を進めた。具体的には「G6-16-1N-6j」などと表記される。ただし、本書では遺構・遺物などの位置を示すにあたり、Ⅳ区画のみを記載している。また、標高は東京湾平均海面（T.P.）を基準としている。

各遺構面の測量にあたっては、縮尺100分の1の平板測量を基本とし、周辺調査区との関連を含めた重要な面に関しては航空測量に伴う空撮を実施した。遺構図に関しては、各遺構によって任意の縮尺を設定し、平面図・断面図などを作成した。

調査は、機械掘削終了面を第1b面として開始し、部分的な遺構面の検出を含めると19面の調査を行っている。第11層以下の各層については土壌層上面とともに下面の自然堆積層上面である「b面」の調査を行っている。b面は土壌化がおよばなかった部分の上面である。「b面」の調査は、土壌層上面では検出できない最終景観以前の遺構の痕跡や自然地形の復元を目的として行った。（田中・廣瀬）

## 第2章 地理的環境・歴史的環境

### 1. 地理的環境

当遺跡は、河内平野の南東部に位置し、生駒山西麓から派生する扇状地と低地との境界に立地する。生駒山から流下する箕後川・長門川などの小河川、および旧大和川水系の玉串川・恩智川などがもたらす土砂が、遺跡形成に多大な影響を与えてきた。高橋 学氏は、河内平野沖積面の地形について扇状地帯、土石流扇状地帯、三角州Ⅰa帯、三角州Ⅰb帯、三角州Ⅱ帯、砂堆帯の6類型に分類しているが、当遺跡は三角州Ⅰa帯、つまり弥生時代中期頃までに河川の搬出した土砂で陸化した場所に該当するという（高橋1991）。河角龍典氏は、当遺跡周辺についてさらに詳細な微地形分類を試みており、生駒山西麓の扇状地帯、自然堤防、後背湿地、旧河道について形成時期から類型化を行っている。それによれば、池島Ⅱ期地区の位置は、鎌倉時代以降に形成された扇状地帯と天井川化した玉串川との間の排水不良になりやすい後背湿地に相当する（河角1999）。

梶山彦太郎氏・市原 実氏は、河内平野の古環境を復元し、河内湾、河内潟、河内湖への変遷過程を明らかにしている（梶山・市原1986）。両氏の設定した時代区分のうちの「河内湾Ⅰの時代」（約7000～6000年前）は縄文海進の時期であり、当遺跡でも池島Ⅰ期地区において海成層がみられ、海成層下底近くに約6300年前のアカホヤ火山灰が確認されている。また放射性炭素年代測定で、この海成層最上部の年代が4300cal.y. B. P.（縄文時代中期初頭）と判明し、当遺跡で出土した最古の土器が縄文時代中期末葉の北白川C式であることから、この時期以降、当遺跡周辺が陸化していくとされる（高橋1997、河角2002）。その後、縄文時代晩期から弥生時代前期にかけて河内潟は河内湖へと淡水化し、また湖岸線も後退していき、当遺跡付近は低湿地へと変貌する（地学団体研究会大阪支部編1999）。この低湿地に、当遺跡でも確認されている初期水田が営まれる。弥生時代中期頃には、生駒山西麓から流下する小河川のもたらす土砂により、遺跡周辺はさらに陸地化が進む。当遺跡ではこの時期から近・現代に至るまで、頻発する洪水の痕跡と洪水を克服した水田開発の跡が交互に認められる。弥生時代後期には、河内湖の水面の上昇や河川の氾濫の頻発に伴い、当遺跡周辺の低地部に位置していた集落は、生駒山麓の扇状地など比較的高い場所へと後退していく。耕作地跡が多くを占める当遺跡において希少な集落跡は、古墳時代前期に池島Ⅰ期地区で、古墳時代中期から後期に福万寺Ⅰ期地区において確認されている。池島Ⅰ期地区の例は、弥生時代中期後半に形成された微高地に、福万寺Ⅰ期地区の例は、弥生時代後期前半の流路堆積物などによって生じた微高地にそれぞれ営まれている。古代から中世にかけて、佐堂遺跡や水走遺跡で堰や堤防の跡が確認されており、地方豪族や国司の支配下での局地的な河川改修により、この地域一体の川筋が固定されていった（地学団体研究会大阪支部編1999）。

遺跡西側を流れる旧大和川水系の玉串川については、宝永元年（1704）の大和川付け替え直前のルートを流れるようになった時期を、古代の条里型土地割の施工以降とする説（高橋1995）と、古墳時代中期とする説（阪田1997）がある。この川は中世後半から近世初頭にかけて天井川化し、度重なる氾濫による堆積物をもたらし、その土砂を利用して島島が営まれた（高橋1995）。また、当遺跡のほぼ中央を流れる恩智川については、周囲における条里遺構の坪境線の方角などから、10世紀前半から12世紀後半頃のいずれかの時期に人工的に設定された排水河川（井上2002）であったと考えられている。（飯田）

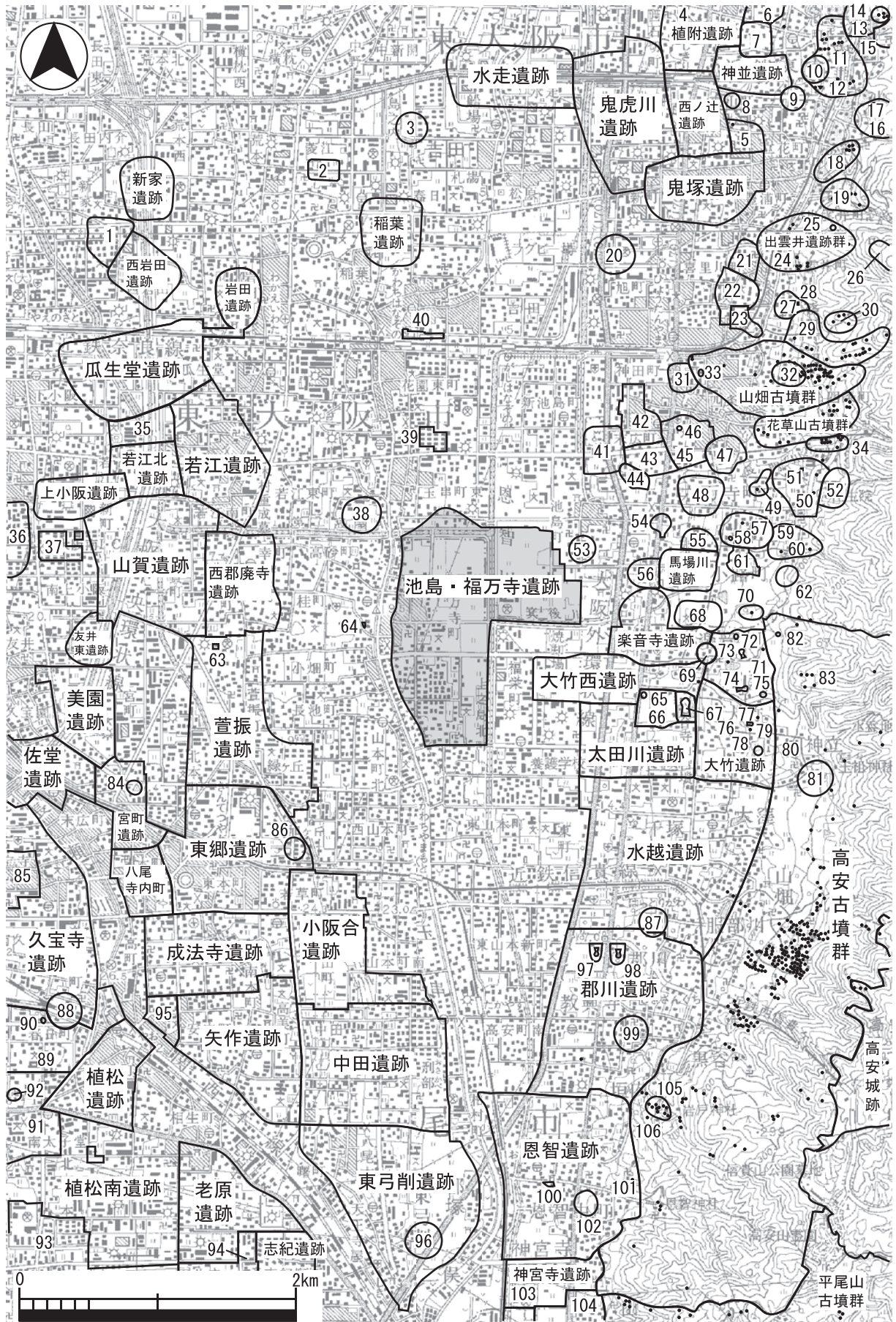


図4 池島・福万寺遺跡と周辺の遺跡

## 2. 歴史的環境

生駒山西麓では、神並遺跡、正興寺山遺跡、山畑遺跡などで後期旧石器時代のナイフ形石器が採集されており、この頃から人間の活動の痕跡が認められる。

縄文時代早期には、神並遺跡で集石土坑や焼土坑、土偶が確認され、集落の存在が想定されている。恩智遺跡では前期から晩期にいたる各時期の土器が出土しており、縄文時代の拠点集落と位置付けられている。後期には、縄手遺跡で堅穴住居や埋甕などが確認されており、集落が継続的に営まれていたようである。

縄文時代晩期前半には馬場川遺跡や恩智遺跡などの集落が扇状地に展開しているが、後半には鬼虎川遺跡、水走遺跡などのように、集落が沖積地にも出現するようになる。鬼虎川遺跡の東隣に位置する鬼塚遺跡では、滋賀里Ⅳ式後半期の土器に靱圧痕が認められ、水稻耕作の存在を示唆する。しかし、明瞭な水田遺構が確認できるのは弥生時代前期中葉からであり、当遺跡のほか、若江北遺跡、山賀遺跡、志紀遺跡などで初期水田が検出されている。

弥生時代前期前葉から中葉にかけて、山賀遺跡、美園遺跡、跡部遺跡、中田遺跡、大竹西遺跡など、主に平野部に位置する遺跡において集落が営まれ始める。ただし、これら集落の多くは前期の間に廃絶し、替わって中期には鬼虎川遺跡、亀井遺跡などの大規模な環濠集落や、瓜生堂遺跡、水越遺跡、恩智遺跡などの拠点集落が成立する。また、大阪市加美遺跡や瓜生堂遺跡の方形周溝墓のように規模の卓越した墳墓もこの時期に出現している。

弥生時代後期に至り、中期に成立した沖積地の環濠集落が次第に衰退していくなか、生駒山西麓の扇状地周辺において比較的小規模な集落が数多く認められるようになる。鬼塚遺跡、山畑遺跡、上六万寺遺跡、岩滝山遺跡、北鳥池遺跡、馬場川遺跡、花岡山遺跡、大竹遺跡、太田川遺跡、水越遺跡など、当遺跡東側の山麓沿いに集落が分布する。このうち山畑遺跡と岩滝山遺跡の集落は、標高80~100mの山麓に突如出現し、弥生時代の終わりには姿を消す典型的な高地性集落である。遺跡西方の平野側では、亀井遺跡、田井中遺跡、恩智遺跡などの集落が後期前半から後半まで存続する一方で、新たに若江北遺跡、西郡廃寺遺跡、萱振遺跡、中田遺跡、久宝寺遺跡、弓削遺跡などの集落遺跡が現れる。

1 意岐部遺跡	23 河内寺跡	45 縄手遺跡	67 心合寺山古墳	89 跡部遺跡
2 菱江寺跡	24 松本塚古墳	46 えの木塚古墳	68 西の口遺跡	90 跡部銅鐸出土地
3 吉田遺跡	25 丸山古墳	47 上六万寺遺跡	69 楽音寺跡	91 太子堂遺跡
4 塚山古墳	26 神津嶽祭祀遺跡	48 船山遺跡	70 萩山古墳	92 勝軍寺跡
5 額田寺跡	27 水走氏館跡	49 桜井古墳群	71 大光寺山遺跡	93 木の本遺跡
6 辻子谷遺跡	28 五条古墳	50 岩滝山遺跡	72 禿山古墳	94 田井中遺跡
7 法通寺跡	29 客坊山遺跡群	51 二本松古墳	73 西の山古墳	95 竜華寺跡
8 舳古墳群	30 五条山古墳群	52 往生院金堂跡	74 花岡山古墳	96 弓削寺跡
9 若宮古墳群	31 市尻遺跡	53 池島東遺跡	75 花岡山遺跡	97 郡川西塚古墳
10 正興寺山遺跡	32 山畑遺跡	54 コモ田遺跡	76 向山1号墳	98 郡川東塚古墳
11 神並古墳群	33 瓢箪山古墳	55 北屋敷遺跡	77 向山2号墳	99 教興寺跡
12 夫婦塚古墳	34 五里山古墳群	56 西代遺跡	78 向山瓦窯跡	100 恩智弥生時代遺跡
13 千手寺山遺跡	35 巨摩廃寺遺跡	57 半堂遺跡	79 双子塚古墳	101 恩智銅鐸出土地
14 墓尾古墳群	36 小若江遺跡	58 大賀世古墳	80 愛宕塚古墳	102 恩智城跡
15 辻子谷古墳群	37 新上小阪遺跡	59 浄土寺谷古墳群	81 蘭光寺跡	103 大県都条里遺跡
16 額田山古墳群	38 玉串遺跡	60 常光寺古墳	82 核山古墳	104 山ノ井遺跡
17 つぼ塚古墳	39 花園遺跡	61 貝花遺跡	83 中谷山古墳	105 岩戸古墳群
18 みかん山古墳群	40 花屋敷遺跡	62 浄土寺跡	84 穴太廃寺	106 信貴霊苑内古墳
19 豊浦谷古墳群	41 北鳥池遺跡	63 萱振1号墳	85 久宝寺寺内町	
20 鶴立遺跡	42 五合田遺跡	64 山本町北遺跡	86 東郷廃寺	
21 狐塚遺跡	43 段上遺跡	65 鏡塚古墳	87 高麗寺跡	
22 皿池遺跡	44 下六万寺遺跡	66 心合寺跡	88 渋川廃寺	

### 遺跡地名一覧

古墳時代の庄内式期から布留式前半期には、弥生時代後期に営まれた扇状地の集落群が、馬場川遺跡、水越遺跡などを除いて衰退するのに対し、沖積平野の集落遺跡は飛躍的に発達し、他地域に先駆けて庄内形甕を使用している。とりわけ長瀬川右岸の東郷遺跡、成法寺遺跡、小阪合遺跡、矢作遺跡、中田遺跡、東弓削遺跡は、「中田遺跡群」として1遺跡で把握すべきとされる大規模集落であり（山田1994、市村2006）、加美遺跡、久宝寺遺跡の大集落とともに卓越した存在である。また、これら集落からは瀬戸内海沿岸地域や山陰地域を中心とした外来系土器が多量に出土しており、このような列島規模での活発な交流が、この遺跡群の隆盛を裏付ける。

布留式後半期には、平野部の大集落群は、萱振遺跡や久宝寺遺跡の一部などを除いて姿を消す。ただし小阪合遺跡では、最近の調査において当該期の河川跡から内行花文鏡、鹿角装刀剣、鉄鉾、玉類、有孔円板、ミニチュア土器などから構成される祭祀遺構が発見されており（樋口2007）、今後周辺で大規模な集落が発見される可能性は否定できない。一方、生駒山西麓の扇状地では、前期から中期にかけて楽音寺・大竹古墳群が造営される。向山古墳、西ノ山古墳、花岡山古墳、中ノ谷古墳、心合寺山古墳、鏡塚古墳の順に、前期から中期まで連綿と首長墓級の古墳が築造され続ける。心合寺山古墳では、導水施設を表現した家形埴輪が出土しているが、神並・西ノ辻遺跡や鬼塚遺跡の中期の集落では、実際に導水施設が確認されている。このような導水施設は近年近畿各地や関東でも確認されているが、首長による土地と水の占有・支配を象徴するこうした遺構が、洪水の頻発する当地域において確認されたことは興味深い。低地部では、心合寺山古墳にやや先行して、靱形埴輪の出土で知られる萱振1号墳や、精巧な家形埴輪が出土した美園古墳などの小形の方墳が確認されている。

古墳時代中期から後期にかけては、当遺跡の福万寺I期地区でも集落跡が確認されている。移動式竈や羽釜・甑からなる炊飯具セットや韓式系土器が出土し、渡来系集団の居住が想定されている。周辺の集落遺跡でも、北鳥池遺跡、縄手遺跡などで韓式系土器が、また段上遺跡の2基の小方墳から韓式系土器や馬歯が出土し、さらに郡川遺跡では馬歯や製塩土器など馬匹生産を窺わせる遺物が出土しており、これら集落の展開に渡来人の関与が想定される。

郡川遺跡内では、中期終わりから後期初頭頃にかけて、首長墓級の前方後円墳である郡川西塚古墳と郡川東塚古墳が築かれる。2基ともこの地域では先駆けて主体部に横穴式石室を採用している。5世紀末から7世紀初頭頃にかけて、山畑古墳群、高安古墳群などの群集墳が、生駒山西麓沿いに累々と造営される。高安古墳群は、破壊された古墳を含めれば300~400基は存在したとされる大阪府最大規模の群集墳であり、ミニチュア炊飯具形土器を副葬する古墳がみられるなど、やはり渡来系集団の関わりが看取される。山畑古墳群の2号墳は6世紀後半の上円下方墳であり、大阪府最大の全長16.6mの横穴式石室を有する。また6世紀末に、楽音寺・大竹古墳群の南側でも、大阪府最大級の全長15.7mの横穴式石室を有する愛宕塚古墳が築造される。

7世紀代、この地域では中央政権との結び付きを示す施設が目立つようになる。生駒山西麓の東高野街道沿いでは、古代寺院が数多く建立される。河内寺廢寺では素弁八葉蓮華文軒丸瓦が出土しており、早くも7世紀前半頃にはこの地域に仏教文化が浸透していたようである。当遺跡の南東1kmにも心合寺跡が所在し、7世紀中葉頃の単弁八葉蓮華文軒丸瓦が出土している。7世紀後半には高安山中に古代山城の高安城が、白村江の戦いを契機に築城される。『日本書紀』では667年の築城とされ、調査で倉庫と考えられる礎石建物跡が確認されている。

当遺跡は、現地表面に条里地割が明瞭に残ることでよく知られている。この地割は10世紀前半まで遡

り、それとは別の正方位地割が7世紀中頃から後半にかけて施工された可能性のあることが発掘調査結果から想定されている。7世紀代の地割については、律令国家主導による施工とされている。中河内では当遺跡のほか、志紀遺跡や美園遺跡などで7世紀代に遡る条里遺構が確認されている。

平安時代には、当遺跡一帯は莊園「玉櫛莊」の範囲に位置することになる。「玉櫛莊」は当初摂関家の所領であったが、1137（保延3）年、宇治平等院の建立の際、平等院に寄進され、以後室町時代にかけて平等院領となっている。先述の当遺跡における10世紀前半施工の条里地割は、この莊園開発との関わりが指摘されている。また池島Ⅰ期地区では、楠葉型瓦器碗の埋納遺構が確認され、ほぼ同時期の宇治市街地遺跡でも河内系の土器が出土しており、さらに当遺跡の南東約2kmに位置する向山瓦窯跡では、平等院における初期の河内系瓦と同範の資料が確認されている。当地域と平等院との密接な関係が考古資料からも裏付けられつつある。

鎌倉時代に至り、この地域一帯は開発領主の水走氏の所領となる。水走氏の地名が残る東大阪市水走遺跡では、12世紀後半の大溝や13世紀前半の土坑墓、さらには13世紀中葉から15世紀にかけての集落が確認されており、同氏の繁栄の一端を窺い知ることができる。池島・福万寺遺跡では、(財)八尾市文化財研究会による調査で13世紀前半から15世紀前半の掘立柱建物、井戸、土坑などが確認されており、屋敷地跡と考えられている。

南北朝時代、玉櫛莊は楠木氏の支配下に入り、当遺跡周辺も同氏の拠点であったようである。南北朝合一ののちは、畠山氏が河内国守護に就き、この地域一帯を支配するようになる。当遺跡の北西約2kmに位置する若江遺跡では、畠山氏が築いた若江城の遺構と考えられる15世紀前半の溝や井戸、土坑などが確認されている。若江城は、その後16世紀中頃に三好氏の居城となるが、この時期に至って、幅5mを超える溝が巡る方形区画や2棟の建物、礎石や石垣など、城郭に相応しい遺構が検出されている。

江戸時代に入ると、「池ノ島村」は幕府領に、「福万寺村」は狭山藩北条氏領となる。宝永元年の大和川付け替え工事は、当地域一帯の農業に多大な影響をもたらした。旧河床地帯に多くの畑地が開発され、砂地に適している木綿の栽培が盛んに行なわれるようになる。当遺跡でも木綿栽培などが行なわれたと考えられる島畠が多数確認されている。(飯田)

## 第3章 基本層序と遺構面

### 1. 遺構面の認識と観察視点

池島・福万寺遺跡は、先述のように河内平野東部に位置し、生駒山西麓の扇状地末端部に所在する。地形分類によると、当遺跡周辺は大きく三角州帯と扇状地帯に分類され、当治水緑地周辺は三角州帯自然堤防および後背湿地に立地する。沖積低地に立地する遺跡の場合、氾濫による水成堆積物が頻繁にもたらされ、分厚い堆積が進行する環境にあったことが知られている。当遺跡の調査においても、後述するように縄文時代以降の重層的な堆積物の累積が明らかとなっている。

低湿地遺跡の場合、地形環境の変遷と人間活動である土地利用の関わりを明らかにすることは発掘調査における課題の一つと考えられる。当遺跡における発掘調査にあたっては、こうした観点から、遺跡形成過程の復元をも想定して層位的な調査を行ってきた。調査における基本的な層序認識については、『池島・福万寺遺跡調査概報Ⅱ』（(財)大阪府文化財調査研究センター1991)において明確に示されており、以下同文を再掲載することによって遺構面の認識の基準として提示したい。

「この遺跡の場合、主に「洪水堆積物に覆われた耕作面の復旧」の繰り返しによって遺構面が形成されている。調査においては、作土の上面で遺構を検出することを原則とした。遺構面が洪水砂などの洪水堆積物で覆われている時は、洪水によって作土が多少なりとも流出しているとしても、本来の耕作面にきわめて近い面で遺構を検出することができる。すなわち、洪水により水田廃絶直前の景観が良好な形で認識できるのである。ただし洪水砂で覆われている場合でも、洪水の浸食を受けて作土が大きく流出している部分もあり、注意が必要である。また、上面の耕作が深くまでおよび、洪水堆積物だけでなく下の作土の一部まで攪拌されてしまうことがしばしばある。この場合、検出された遺構面は厳密に言えば耕作面ではない。従って、畦畔などには消滅しているものもあると考えられる。また土坑などは、上から掘り込まれたものであっても、攪拌によって掘り込み面が分からなくなり、この面でしか検出できないということもありうる。この場合は遺構の所属などを考える際には注意が必要である。さらに、作土・土壤層の下面で溝などが検出されることがある。これについても場合によっては遺構面としているが、この中には攪拌・土壌化のために本来の掘り込み面がわからなくなったものが多いと考えられる。」

調査にあたっては、池島Ⅰ期地区との連続性に注意を払い、基本的に層序認識の統一を図った。しかし、当調査区の調査では古代以降の堆積環境が既往の調査成果と大きく異なる部分があり、その層序的な連続性を十分に確認できなかった。そのため、当調査区では混乱を避けるため調査区単独の層呼称を設定して調査を行なった。このため、当遺跡の基本層序との対照には注意を要するが、本書では本文中で基本層序との関連性について、推察を含めて言及し、今後の調査における成果を待ちたい。

遺構面の名称は機械掘削終了面を第2面として、以下上から順に第3面、第4面というように番号を付加している。第2層の上面が第2面である。くわえて、これまでの層序の認識の中で単一層と考えられてきた層が、さらに細分されることが明らかとなった場合、2-1・2-2・2-3などと枝番を付して層名(面呼称)としている。

また、当遺跡の調査では水成堆積物による旧地表面の埋積、地表面となった水成堆積物の上部の攪



乱・土壌化を1サイクルとした繰り返しの結果として層位的な状況を示していることを基本とすることから、各層の土壌とその母材を認識することに力点をおいてきた。このため、調査では各層の土壌部分をa層、母材となった自然堆積層をb層として呼称し、同一層番号のa層・b層として（例：第2-1 a層・2-1 b層・12 a層・12 b層など）と呼称して調査を行ってきた。本文中では、各層序や遺構面に対し、「第12 a層・12 a面・12 b層・12 b面」などと表記している。（田中・廣瀬）

## 2. 基本層序

ここでは、当調査区の基本層序について記述する。当調査区では、従前の調査方法とは異なり現代耕作土と第1層を除去した面から開始した。調査は機械掘削の深度を確認するため、現地表面に20mメッシュで幅1mのトレンチを設定した。第2面上面まで人力掘削によって確認後に、全体を機械によって掘削し、以下は人力掘削によって調査を実施した。ただし、実際にはこの調査区部分は上部が調査開始以前に現代耕作土やその下部の盛土・旧耕作土を除去された状態であった。このため、従来当遺跡の調査区によって確認されている第1層およびその下部にみられる第1 b層はほとんど確認されなかった。以下、第2層から層序に従って、土質・色調・その特徴について記述する。各文中の表現で、「●色（▲・■）」などの表記のうち「（▲・■）」等の番号は、12～13頁の断面図の土色番号に対応する。

### 第2 a層

第2 a層は灰色（1・31・90）の色調で、細砂～中砂の混じるシルトの粘性の弱い土質で、酸化鉄が目立つ土壌である。上部を以前の機械掘削で除去されている部分が多く、層厚は一定しない。ただし、現状でも0.1～0.2m前後の層厚があり、部分的には上部に第1 b層のラミナのみられる氾濫堆積物が被覆している部分があることから、あまり削平を受けていない。また、当地区の調査では砂粒の混じり方の相違として部分的にしか確認できなかったが、同層は更に細分できる可能性もある。

### 第3 a層

第3 a層は、灰色（2・32・91）の色調で、細砂～中砂の混じるシルトの粘性の弱い土質で、酸化鉄が目立つ土壌である。部分的に3mm大の極粗砂～小礫を含み、酸化鉄がみられる。上層の第2 a層との間にはb層を挟まず、上部は上層による攪乱で削平されている。

### 第4 a層

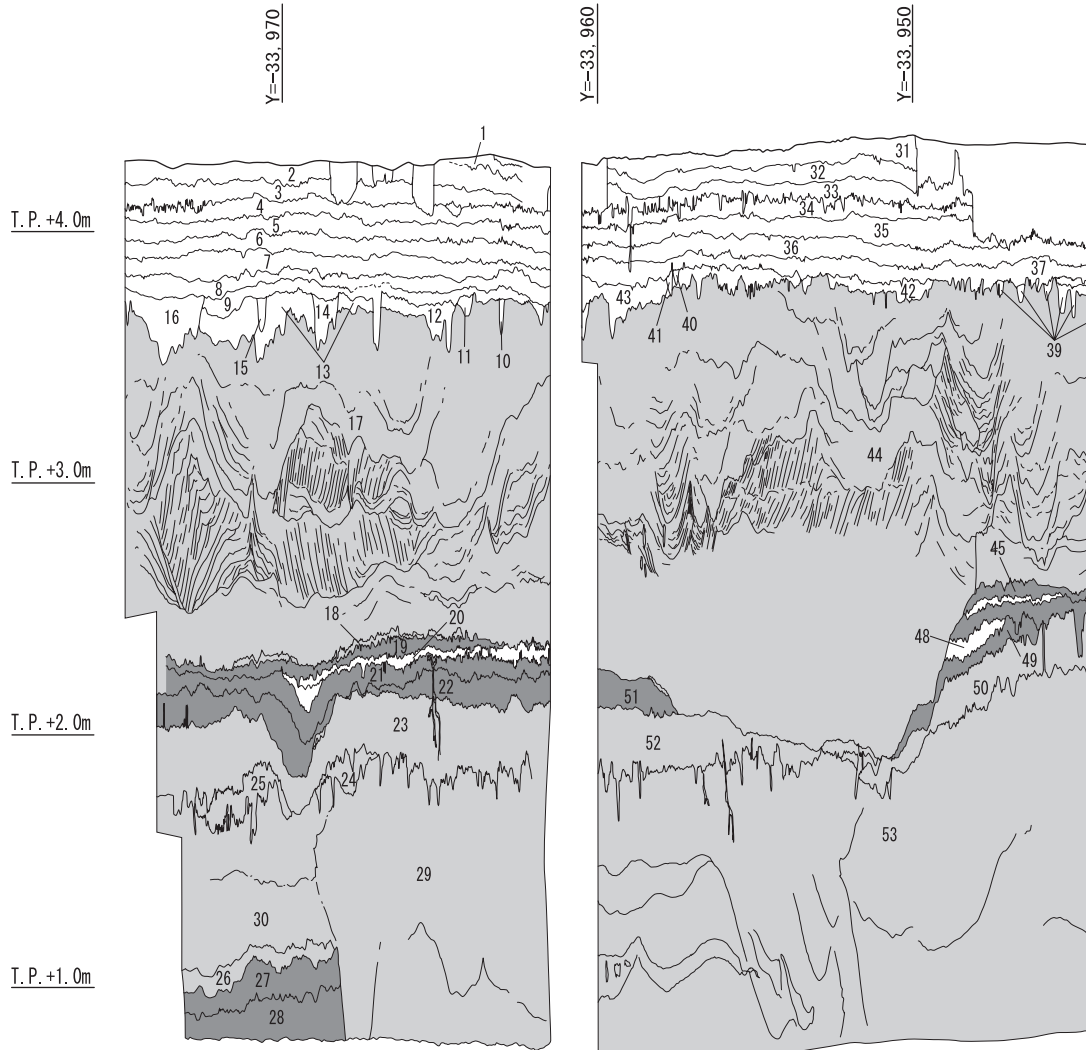
灰オリーブ色（3・33・92）の色調で、細砂～極粗砂の混じるシルトの粘性の強い土質で、酸化鉄・マンガン斑が目立つ土壌である。上層の第3 a層との間にはb層を挟んでいないことから、上部は上層による攪乱で削平されている。

### 第5 a層

第5 a層は、灰・暗オリーブ灰色（4・34・54・93）の色調で、極細砂～細砂の混じるシルトの粘性強くしりまり良い土層で、酸化鉄・マンガン斑がみられる土壌である。上層の第4 a層との間にはb層をはさんでいないことから、上部は上層による攪乱で削平されている。

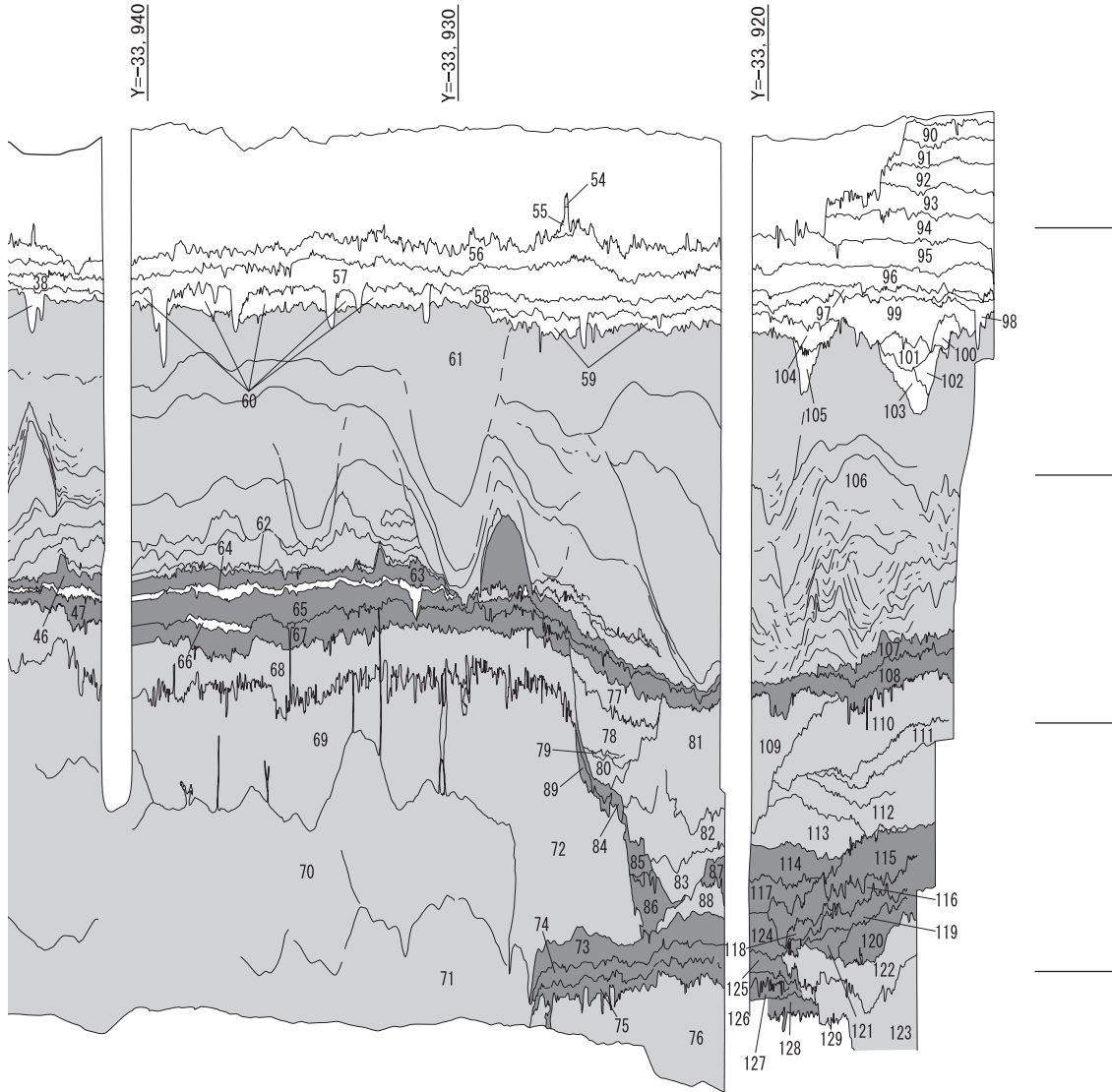
### 第6 a層

第6 a層は、灰・暗青灰・黄灰色（5・35・55・94）の色調で、極細砂の混じるシルトの粘性強くしりまり良い土質で、酸化鉄・マンガン斑文がみられる。後述するように、西側の現在調査中の池島・福万寺遺跡06-2調査区と考え合わせると、従来からの池島・福万寺遺跡の基本層序における第3層に相当



1. 灰 7.5Y5/1 細砂～中砂混シルト 粘性弱い 酸化鉄を含む 2a層
2. 灰 5Y5/1 中砂混シルト 粘性弱い 酸化鉄を含む 3a層
3. 灰 オリーブ 5Y5/2 中砂～極粗砂混シルト 粘性強い 4a層
4. 灰 7.5Y5/1 極細砂～細砂混シルト 粘性強い 酸化鉄を含む 5a層
5. 灰 7.5Y4/1 極細砂混シルト 粘性弱い 酸化鉄を含む 6a層
6. 灰 7.5Y5/1 中砂～粗砂混シルト 粘性弱い 酸化鉄を含む 7a層
7. 灰 10Y4/1 細砂混シルト 粘性強い 酸化鉄を含む 8a層
8. 灰 N4/0 極細砂混シルト 粘性強い 酸化鉄を含む 9a層
9. 緑灰 7.5GY5/1 極細砂～細砂混シルト 粘性強い 10a層
10. 緑灰 7.5GY5/1 細砂混シルト 粘性強い 酸化鉄を含む 遺構埋土
11. 緑灰 7.5GY5/1 細砂混シルト 粘性強い 酸化鉄を含む 遺構埋土
12. 緑灰 10GY5/1 細砂混シルト 粘性強い 酸化鉄を含む 11a層
13. 緑灰 10GY5/1 細砂混シルト 粘性強い 酸化鉄を含む 11a層
14. 緑灰 7.5GY5/1 細砂混シルト 粘性強い 酸化鉄を含む 遺構埋土
15. 緑灰 10GY5/1 細砂混シルト 粘性強い 酸化鉄を含む 遺構埋土
16. 暗青灰 5B4/1 シルト 極細砂を僅かに含む 粘性強い 遺構埋土
17. 浅黄～黄灰 2.5Y8/3～6/1 シルト～極細砂 ラミナ明瞭 11b層
18. 灰 N4/ シルト 5GY5/1のシルトを細片で含む 粘性強い 11b層
19. 灰 N4/ 粘質シルト 炭化物粒を含む 12a層
20. オリーブ灰 5GY5/1 粘質シルト カルシウム粒を帯状に含む 12b層
21. 灰 N4/ 粘質シルト 粘性強く炭化物を含む 13a層
22. 暗緑灰 7.5GY4/1 細砂混シルト 粘性強い 14-1a層
23. 緑黒 5G2/1 砂質シルト 粘性弱い ビビアナイト・土器片含む 14-2a層
24. 黒 2.5GY2/1 細砂 粘性弱い 14-2b層
25. 黒 2.5GY2/1 細砂 粘性弱い 14-2b層
26. オリーブ黒 7.5Y3/1 粘質シルトと細砂の互層 14-2b層
27. オリーブ黒 7.5Y3/1 粘質シルト 植物遺体を筋状に含む 15-1a層
28. 黒 7.5Y2/1 粘質シルト 15-2a層
29. 緑灰～灰 5G5/1～7.5Y6/1 細砂～小礫 ラミナ明瞭 14-2b層
30. 暗オリーブ灰 5GY4/1 シルト～中砂 部分的にラミナあり 14-2b層
31. 灰 7.5Y5/1 細砂～中砂混シルト 粘性弱い 酸化鉄を含む 2a層
32. 灰 5Y5/1 中砂混シルト 粘性弱い 酸化鉄を含む 3a層
33. 灰 オリーブ 5Y5/2 中砂～極粗砂混シルト 粘性強い 4a層
34. 灰 7.5Y5/1 極細砂～細砂混シルト 粘性強い 酸化鉄を含む 5a層
35. 暗青灰 5B4/1 極細砂混シルト 粘性強い 酸化鉄を含む 6a層
36. 暗青灰 5B4/1 極細砂混シルト 粘性強い 酸化鉄を含む 7a層
37. 暗青灰 5B3/1 極細砂混シルト 粘性強い 酸化鉄を含む 8a層
38. 暗青灰 10BG4/1 細砂混シルト 粘性強い 酸化鉄を含む 9a層
39. 青灰 5B5/1 細砂混シルト 粘性強い 酸化鉄を含む下に  
は中砂～極粗砂を多く含む 10a層
40. 暗青灰 5BG4/1 細砂～中砂混シルト 粘性強い 酸化鉄を含む 遺構埋土
41. 暗緑灰 7.5GY4/1 シルト混中砂 粘性弱い 酸化鉄を含む 遺構埋土
42. 灰 7.5Y5/1 中砂～粗砂 シルトをブロック状に含む 9a層
43. 灰 N4/ 極細砂混シルト 粘性強い 酸化鉄を含む 9a層
44. 浅黄～黄灰 2.5Y8/3～6/1 シルト～極細砂 ラミナ明瞭 11b層
45. 灰 N4/ シルト 粘性強い 植物遺体、炭化物を含む 12a層
46. オリーブ灰 5GY5/1 シルト 粘性強い カルシウム粒を含む 12b層
47. 灰 N4/ 粘土 細粒状の炭化物を含む カルシウム粒を含む 13a層
48. 暗緑灰 7.5GY4/1 細砂混シルト 粘性強い カルシウム粒を含む 13b層
49. 緑灰 5G2/1 中砂～粗砂 14-1a層
50. 暗緑灰 10GY4/1 シルト混粗砂～極粗砂 14-2a層
51. 暗灰 N3/ シルト混極細砂 14-1a層
52. 緑黒 5G2/1 極細砂～細砂 14-2a層
53. オリーブ灰 5GY5/1 極細砂～小礫 ラミナ明瞭 14-2b層
54. 灰 7.5Y5/1 極細砂混粘質シルト 鉄分を含む 5a層
55. 灰 N4/0 極細砂混粘質シルト 酸化鉄を含む 6a層
56. 灰 N4/0 細砂混粘質シルト 酸化鉄を含む 7a層
57. 暗緑灰 7.5GY4/1 極細砂混粘質シルト 酸化鉄を含む 8a層
58. 灰 7.5Y5/1 極細砂混粘質シルト 酸化鉄を含む 9a層
59. 灰 7.5Y5/1 極細砂混粘質シルト 酸化鉄を含む 10a層
60. 灰 7.5Y5/1 極細砂～中砂混粘質シルト 酸化鉄、マンガン斑を含む  
西へ向かうほど砂が多く、粒も大きくなる 9a層
61. 浅黄～黄灰 2.5Y8/3～6/1 シルト～極細砂 ラミナ明瞭 11b層
62. オリーブ灰 5GY5/1 細砂混粘質シルト 緑灰色シルト細片で含む 11b層
63. 暗灰 N3/1 粘質シルト 12a層
64. オリーブ灰 5GY5/1 粘質シルト カルシウム粒を含む 12b層
65. 暗緑灰 10G3/1～N4/ シルト～極細砂 部分的に極粗砂を含む 13a層
66. 暗緑灰 10G4/1 シルト～極細砂 13b層
67. 黒 7.5Y2/1 細砂～中砂 極粗砂を含む 14-1a層
68. 黒 N2/ シルト混粗砂～極粗砂 粘性強い 14-2a層

図5 断面模式図



- 69. 暗青灰 10BG4/1 細砂～中砂 14-2b層
- 70. 灰オリブ 7.5Y6/2 極粗砂～礫 ラミナ明瞭 14-2b層
- 71. 灰白 5Y7/1 粗砂～極細砂 ラミナ明瞭 14-2b層
- 72. オリブ灰 5GY5/1 極細砂～中砂 14-2b層
- 73. 暗オリブ灰 2.5GY3/1 粘質シルト 植物遺体筋状に含む 15-1a層
- 74. 黒 2.5GY2/1 粘質シルト 15-2a層
- 75. 暗オリブ灰 2.5GY3/1 粘質シルト 15-3a層
- 76. 暗オリブ灰 2.5GY4/1 粘質シルト 15-3b層
- 77. オリブ黒 10Y3/2 シルト～細砂 13b層
- 78. 暗オリブ灰 5GY3/1 シルト～極細砂 13b層
- 79. 暗緑灰 10G4/1 粘質シルト 13b層
- 80. 暗オリブ灰 5GY3/1 シルト～極細砂炭化物粒・植物遺体を含む 13b層
- 81. 灰オリブ～暗緑灰 7.5Y6/2～10G4/1 細砂～極粗砂 炭化物・植物遺体を含む 5G5/1のシルトをブロック状に含む ラミナ明瞭 13b層
- 82. 暗オリブ灰 5GY3/1 シルト～細砂 植物遺体を筋状に含む 13b層
- 83. オリブ黒 5GY2/1 シルト・粗砂の互層 植物遺体を含む ラミナあり 13b層
- 84. 灰オリブ 7.5Y6/2 粗砂 14-2a層
- 85. 暗灰 N3/ 粘質シルト混粗砂 緑灰色7.5GY5/1シルトブロックを含む 14-2a層
- 86. 暗灰 N3/ 粘質シルト混粗砂 シルトブロックを含む 14-2a層
- 87. 暗灰 N3/ 粗砂混粘質シルト 14-1a層
- 88. 暗緑灰 7.5GY4/1 粘質シルト～細砂 細砂を筋状に含む 14-2b層
- 89. 暗青灰 5B4/1 粘質シルト 緑灰色10G5/1 シルトブロック状に含む
- 90. 灰 7.5Y5/1 細砂混シルト 粘性弱く酸化鉄を含む 2a層
- 91. 灰 7.5Y5/1 細砂混シルト 粘性弱い 3mm大の極粗砂・酸化鉄を含む 3a層
- 92. 灰オリブ 5Y5/3 細砂混シルト 粘性強い酸化鉄・マンガン斑を多く含む 4a層
- 93. 暗オリブ灰 2.5GY4/1 極細～細砂混シルト 粘性強い酸化鉄・マンガン斑を含む 5a層
- 94. 黄灰 2.5Y5/1 シルト混極細砂～中砂 粘性強い 酸化鉄を含む 6a層
- 95. 黄灰 2.5Y5/1 細砂～中砂混シルト 粘性強い 酸化鉄を含む 7a層
- 96. 灰 10Y4/1 極細砂混シルト 粘性強い 酸化鉄を多く含む 8a層
- 97. 灰 7.5Y5/1 極細砂混シルト 粘性強い 酸化鉄・マンガン斑を多く含む 9a層
- 98. 灰 7.5Y4/1 中砂混シルト 粘性強い 酸化鉄を多く含む 遺構埋土
- 99. 黄灰 2.5Y4/1 細砂混シルト 粘性強い 酸化鉄・マンガン斑を多く含む 10a層
- 100. 灰色 7.5Y5/1 中砂～粗砂混シルト 粘性弱い 酸化鉄を多く含む 遺構埋土
- 101. 暗オリブ灰 2.5GY4/1 シルト混中砂 粘性弱い 酸化鉄を含む 遺構埋土
- 102. 灰 7.5Y4/1 中砂～粗砂混シルト 粘性弱い 酸化鉄を多く含む 遺構埋土
- 103. オリブ灰 10Y4/2 砂質シルト混中砂 酸化鉄を含む 遺構埋土
- 104. 灰 7.5Y4/1 中砂混シルト 粘性強い 酸化鉄・マンガン斑を多く含む11a層
- 105. 黄灰 2.5Y4/1 細砂混シルト 粘性強い 酸化鉄・マンガンを含む 遺構埋土
- 106. 浅黄～黄灰 2.5Y8/3～6/1 シルト～極細砂 ラミナあり 11b層
- 107. 暗灰 N3/1 粘質シルト しまり良い 12a層
- 108. 灰 N4/ シルト～極細砂 粘性強い 13a層
- 109. 暗青灰 10BG3/1 シルトと粗砂の互層 ラミナあり 13b層
- 110. 暗青灰 10BG4/1 細砂と極粗砂の互層 植物遺体を筋状に含む 13b層
- 111. 暗青灰 5BG3/1 細砂～中砂 13b層
- 112. 緑黒 10G2/1 細砂 炭化物を多く含む 13b層
- 113. 暗灰 N3/ 粗砂～極粗砂と細砂の互層 ラミナあり 13b層
- 114. 暗緑灰 10G4/1 極細砂～粗砂 炭化物を筋状に含む 13b層
- 115. 暗青灰 5BG3/1 粘質シルト～細砂 14-1a層
- 116. 暗緑灰 10G3/1 粘質シルト 極粗砂を一部に含む 14-1a層
- 117. 灰 N4/ 粗砂混粘質シルト 炭化物・植物遺体多く含む 14-1a層
- 118. 暗オリブ灰 2.5GY3/1シルト～極細砂 植物遺体多く含む14-1a層
- 119. 緑黒 10G2/1 シルト～極細砂 14-1a層
- 120. 暗灰 N3/ 粘質シルト～極細砂 炭化物を含む 14-1a層
- 121. オリブ灰 2.5GY6/1 細砂と中砂の互層 ラミナ炭化物を含む 14-1a層
- 122. オリブ灰 10Y5/2 粘質シルトと中砂～極粗砂の互層 ラミナあり 14-1b層
- 123. 暗緑灰 5G3/1 粘質シルト混粗砂～極粗砂 植物遺体、炭化物、貝を多く含む 14-2a層
- 124. 暗灰 N3/ 粘質シルト混粗砂～極粗砂 植物遺体・炭化物・貝を多く含む 14-1a層
- 125. 黒褐 2.5Y3/1 粘土 15-2a層
- 126. 黒 2.5GY2/1 粘土 15-3a層
- 127. 暗オリブ灰 2.5GY3/1 粘質シルト 15-3a層
- 128. オリブ灰 2.5GY5/1 粘質シルト 15-3a層
- 129. 緑灰 5G6/1 シルト混極細砂 粘性強い 15-3b層

(X = -149,860ライン東西断面)

すると考えられる。層相もこれまで第3層としてきた層に類似した、細粒のシルト～細砂などを主体とするやや攪拌の弱い土質である。

#### 第7 a層

第7 a層は、灰・黄灰・暗青灰色（6・36・56・95）の色調で、極細砂～中砂の混じるシルトの粘性強い土質である。部分的に細粒堆積物の多い部分と粗粒堆積物の多い部分があり、しまり悪い部分から～非常に良い部分までがみられた。酸化鉄、1～3mm大のマンガン斑がみられる。先述の第6 a層同様に、池島・福万寺遺跡の基本層序の第3層に相当する。

#### 第8 a層

第8 a層は、灰・暗青灰・暗緑灰色（7・37・57・96）の色調で、極細砂～細砂の混じるシルトの粘性強くしまり良い土質で、酸化鉄がみられる。上層の第7 a層との間にはb層を挟んでいないことから、上部は上層による攪乱で削平されている。

#### 第9 a層

第9 a層は、灰・暗青灰色（8・38・42・43・58・60・97）の色調で、極細砂～中砂が主体的に混じる粘質シルトの粘性強い土質で、酸化鉄・マンガン斑がみられる。粗粒堆積物の目立つ部分も存在している。第8 a層との間にはb層を挟まないことから、上部は上層による攪乱で削平されている。

#### 第10 a層

第10 a層は、緑灰・青灰・灰・黄灰色（9・39・59・99）の色調で、極細砂～細砂の混じるシルトの土質である。酸化鉄・マンガン斑が多くみられる。上層の第9 a層との間にはb層をはさんでいないことから、上部は上層による攪乱で削平されている。

#### 第11層（第11 a層・第11 b層）

第11 a層は、緑灰・灰色（12・13・104）の色調で、細砂～中砂の混じるシルトの粘性強くしまり良い土質で、酸化鉄・マンガン斑が多くみられる。氾濫堆積物の最上部のやや土壌化した層である。

第11 b層は、上部は細粒堆積物のシルト～細砂を主体とし、中段には粗粒堆積物が多く、下部には植物遺体を含む粘土～シルトのラミナのみられる堆積を主体とする細粒堆積物の多い氾濫堆積物層である（17・18・44・61・62・106）。調査区西半を南東から北西に流芯を持つ氾濫堆積物で、調査区全域を覆い、層厚は約2.0～1.2mを測り、平均でも1.4m前後である。流芯部を中心に極粗砂～小礫の集中する部分がみられる。従来から、当遺跡の基本層序の第11 b層に相当する土層である。

#### 第12層（第12 a層・第12 b層）

第12 a層は、灰・暗灰色（19・45・63・107）の色調で、粘土～シルトの粘性強くしまり良い、部分的に炭化物などを含む層である。従来、当遺跡の基本層序の第12層に相当し、「第2黒色粘土（泥）層」と呼称されてきたものである。層厚は、ほぼ全域で0.1m程度を測る。直上には、灰色で粘土～シルトの第11 b層の下部の堆積物が被覆しており遺存状況は非常に良好である。ただし、調査区西半部では、先述の第11 b層中の氾濫堆積物によって第12層～第14層上部までの各層が削平されて遺存していない。

第12 b層は、オリーブ灰色（20・46・64）の色調で、粘土～シルトの粘性の強くしまり良い土質の自然堆積層である。層中にはカルシウム粒を多く含んでいる。第12 a層の耕作土による土壌化のため層厚は非常に薄いほぼ全域に堆積している。

#### 第13層（第13 a層・第13 b層）

第13 a層は、灰・暗緑灰色（21・47・65・108）の色調で、極細砂を含む粘土～シルトの粘性強くし

まり良い黒色の土質で、炭化物を含んでいる。調査区全域に堆積し、層厚は0.05～0.15m程度である。従来、当遺跡の第13層に相当し、「第3黒色粘土（泥）層」と呼称されてきた層である。後述するように、調査区東半部の地形的に高い部分では、層上部は上層からの攪拌により削平をうけて凹凸が激しい。また、下部は調査区の大部分のところ、下層の第14層を若干削平している。

第13b層は、大きく2つの層相の異なる堆積物からなっている。第11a層の高い部分では暗緑灰色（48・66）の細砂の混じるシルトの粘性の強い土質で、第13a層土壌化によりほとんど遺存していない。一方、調査区東端部の第14面の339落ち込み部分には、この段階の氾濫堆積物が多量に堆積し、オリブ黒・灰オリブ・暗オリブ灰・暗緑灰・暗青灰・暗灰・緑黒色（77・78・79・80・81・82・83・109・110・111・112・113・114）の色調である。シルト～極細砂を主体とし、部分的に粗粒堆積物や炭化物などのラミナのみられる氾濫堆積物を主体とする土質である。層厚は、厚いところで0.8m程度を測る。

#### 第14層（第14a層・第14b層）

第14a層は、大きく2つの層に分層することが可能である。上部の第14-1a層は、暗緑灰・緑灰・暗灰・黒・暗青灰・灰色・暗オリブ灰・緑黒・オリブ灰色（22・49・51・67・87・115・116・117・118・119・120・121・124）の色調である。細砂が混じる粘土～シルトを主体とする粘性シルトで、非常にしまりが良い。従来当遺跡で第14層とされてきた層の一部で、「第4黒色粘土（泥）層」と呼称されてきたものである。現状では、従来第14-1層とされてきた層は確認されず、第14-2層とされてきた弥生時代前期中頃のの水田遺構が検出されてきた層に対応する。これまでの調査成果や先述の池島・福万寺遺跡Ⅱ（その6-1）調査区の調査所見をくわえて考えると、この調査区の第14面は地形的に非常に高いことが特筆され、こうした状況から、従来のヒシの実やアシなどが層中および上面に多くみられる基本層序の第14-1層の堆積はこの部分には及んでいなかった可能性が高い。

また、第14-2a層は、緑黒・暗緑灰・黒・灰オリブ・暗灰色（23・50・52・68・84・85・86・123）の細砂～中砂を非常に多く含む粘土～シルトの層である。粘性はあまり強くないが、しまりは非常に良く、層中にビビアナイトを多く含んでいる。上層との境界は不明瞭で分層が困難な部分もあった。層中から突帯文土器が出土している。

第14-2b層は、第15a層の上部に厚く堆積する氾濫堆積物で、黒・緑灰・灰・オリブ灰・灰オリブ・灰白色（24・25・29・53・70・71・72）の中砂～小礫を主体とする部分と暗緑灰色（88）の細砂の混じる粘質シルトの部分があり、下部にはオリブ黒・暗オリブ灰・暗青灰色（26・30・69）のシルト～細砂のラミナのみられる層である。シルトが若干混じる細粒堆積物で、調査区中央部は、非常に粒径が大きく極粗砂～小礫を主体としている。中央部は、水平な粗粒堆積物の堆積である。

#### 第15層（第15-1a層・第15-2a層・第15-3a層・第15-3b層）

第15層は、3層に細分が可能である。第15-1a層は、オリブ黒・暗オリブ灰色（27・73）の粘性シルトと細砂の互層で植物遺体を多く含んでいる。第15-2a層は、従来当遺跡で第15-2層とされてきた「第5黒色粘土（泥）層」で、黒・黒褐色（28・74・125）の色調の粘土のしまり良い土質である。層中には、植物遺体を含んでいる。第15-3a層は、暗オリブ灰・黒・オリブ灰色（75・126・127・128）の色調の粘性シルトのしまり良い土質である。

第15-3b層は、暗オリブ灰・緑灰色（76・129）の色調の粘性シルトのしまり良い土質である。調査深度の関係で全容を確認していない。（田中・廣瀬）

## 第4章 調査成果

### 1. 現代～古墳時代面の調査

#### 1) 第1面・第1面ベース (第1b面)

##### 第1面

第1面は、従来の調査で現代耕土を除去した旧耕作土層の上面である。当調査区では、先述のようにトレンチ調査により確認したところ、調査以前に現代耕土や旧耕作土・盛土層などが削平されており、当該層をまったく確認できなかった。したがって出土遺物も不明である。

##### 第1b面 (図6)

##### 遺構面の状況と検出遺構

第1b層は、従来から当遺跡で近世後期の氾濫堆積物として広域に被覆する層である。当調査区では、上部が近代以降の攪乱により大きく削平されており、厳密には第1b層の上面を検出していない。しかし、僅かに第2層上面に被覆していた部分もあることと、従来から第1b層上面で検出されている「1b土坑」といわれる氾濫堆積物下の耕作土を復旧するための天地返しと考えられている土坑が多数見られたことから機械掘削の終了した面を「第1b面」として遺構の検出状況を報告する。遺存状況も悪く、厚い部分でも数cmを測る程度であった。第1b層は、極細砂～細砂を主体とする層である。機械掘削の影響で地形的な状況が本来のものとは考え難いが、現状の地形は調査区中央部が高く東西にやや低くなっている。標高は凡そT.P.4.50～4.70mである。

「1b土坑」は、従来から複数種類が全域で検出され、幅0.8～1.0m、現存長さ43m(東西)・35m(南北)で、現存深さ0.1～0.6mの細長い土坑と、幅0.5～1.0m・長さ1.5～3.0m程度・現存深さ0.05～0.3mの小型の土坑の2種類が確認されている。また、細長い土坑については、調査区東Y=-33,960以東のものは東西方向が主体を占めるが、このライン以西のものは南北方向に掘削されている。また、後者の小型のものはすべてY=-33,955以西に位置するが、東西方向を長軸とした土坑が南北に3列に並んでいる。土坑は、調査区中央の北と南で掘削された深さがやや異なっていた。北側は0.5m前後、南側は0.7～0.8m前後とやや深い埋土は、いずれも第1b層の氾濫堆積物である。

全体の配置を見ると、先述の調査区西半のY=-33,955ラインのやや東側でやや空白域をおき、それより東側は前者の細長い土坑で、西側は後者の短い土坑である。この部分は、1970年代に作られた東大阪市遺跡調査会による昭和47～48年頃の土地利用状況を示す図においてもこの付近と推定される位置で土地利用形態が相違している。このほか近世後期の土地利用の状況を示す絵図等でも、この付近を境に土地利用形態に相違がみられるようである。また、この相違は後述する第2面の状況においてもみられるもので、西半部の土坑は第2面島島部分に掘削されている。従来から、「1b土坑」は当遺跡で第2-1面と呼称されている当調査区の第2面の島島部分に掘削されている場合が多く、当調査区も同様な状況と考えられる。(廣瀬)

##### 出土遺物 (図7、図版21)

「1b土坑」から出土した遺物には、陶磁器(1～6)、土師器(7・8)、瓦質土器(9・10)、土錘

(11)、瓦器、瓦がある。(1・2)は肥前京焼風碗で、前者は体部に山水文を描いている。ともに外底面の高台内に刻印を施す。肥前陶器編年Ⅳ期、17世紀末～18世紀末のものと思われる。(3)も同じく

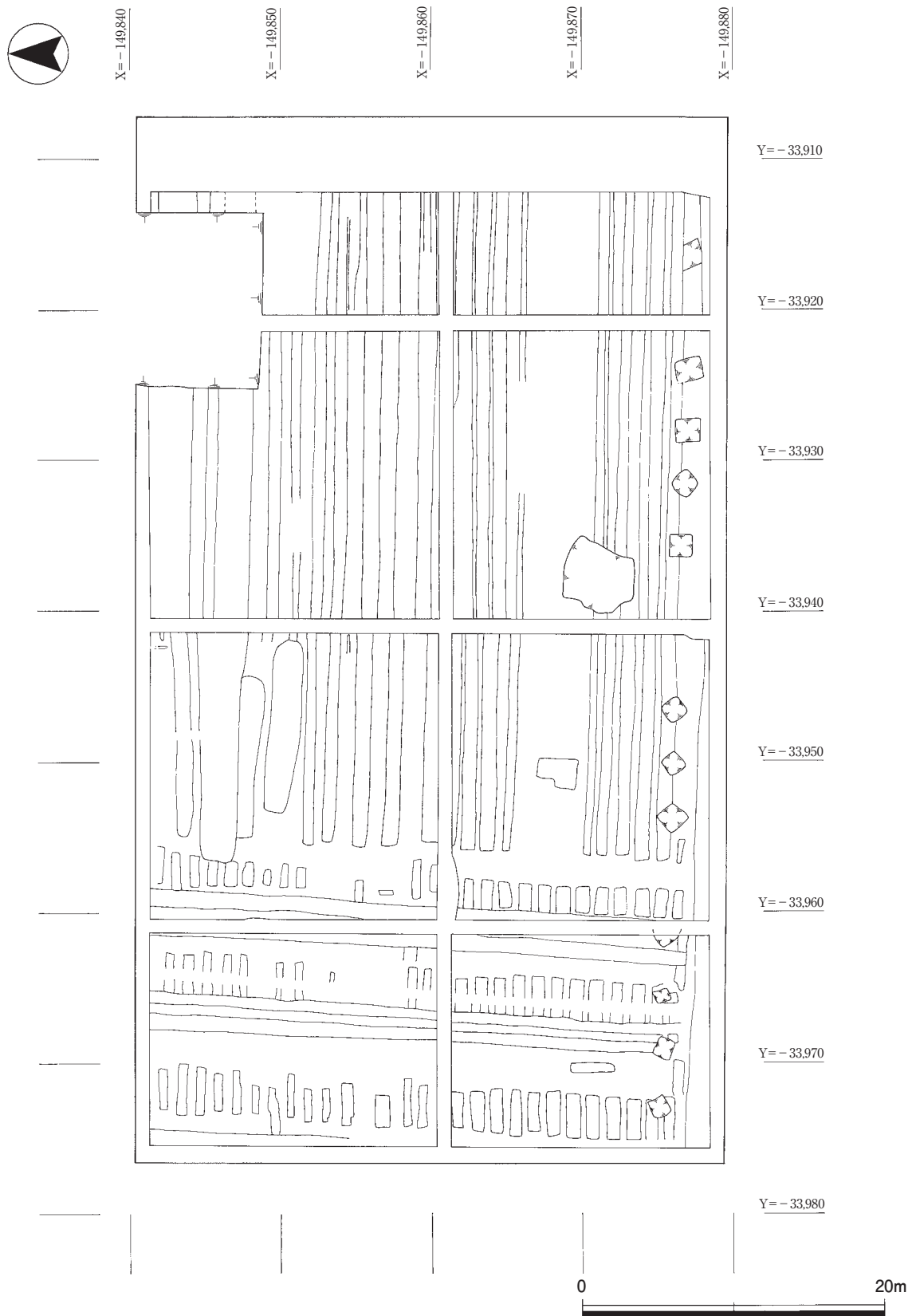


図6 第1 b面平面図

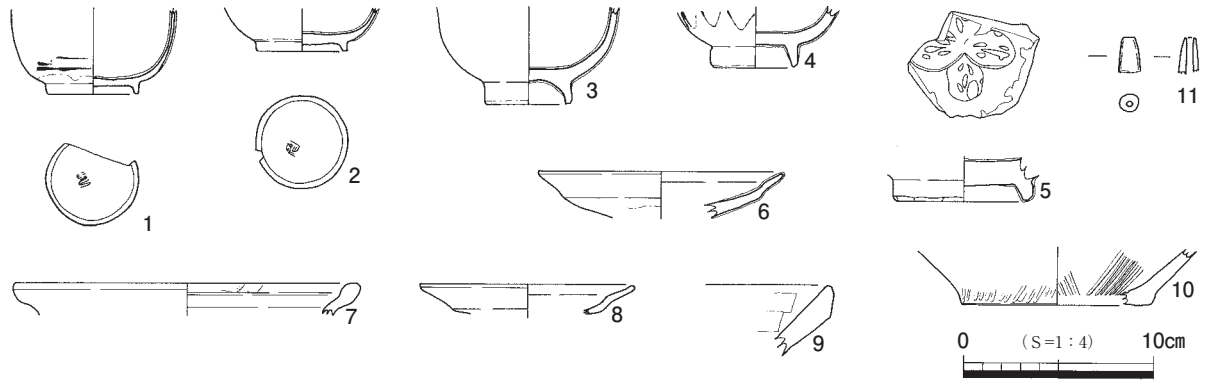


図7 第1b面（1b土坑）出土遺物

肥前呉器手碗で、同時期のものといえる。(4)は肥前網目文碗で、17世紀中頃の初期伊万里の可能性がある。(5)は中国製の龍泉窯系青磁草花文碗で、13世紀中頃～14世紀初頭とみられる。(6)は波佐見青磁折縁皿で、17世紀中頃～後半のものである。(7)は土師器の羽釜で、14世紀に属する。(8)は土師器小皿で、16世紀代といえる。(9・10)は瓦質の播鉢片で、後者の底部内面には播目が残る。14世紀に属する。(11)は土師質の土錘で、漁網に付けたものと考えられる。従来の発掘調査において、「1b土坑」は池島I期地区のほぼ全域で確認されており、主に19世紀代を中心に18・19世紀代の遺物が出土している。今回の調査区では、同時期の陶磁器類の他、前代の混入も多くみられる。(林)

## 2) 第2面（図8、図版1）

### 遺構面の状況と検出遺構

第2面は、第1b層の氾濫堆積物層を除去した面である。地形は、調査区中央部が若干高く、東はほぼ平坦であるが、西側に向かって低くなる地形である。第2面は、従来池島・福万寺遺跡で第1b層の氾濫堆積物を除去して検出される第2-1面と呼称されている面に対応する。これまでの調査では、第1b層に被覆されて近世後期と考えられる条里型水田が良好に検出されている面である。また、この面は各面において徐々に規模を拡大してきた水田区画内の氾濫堆積物等を盛り上げて造成された島島によって形成されてきた景観が大きく変容する段階である。西側の池島I期地区では、この面において逆に溝を掘削し、その掘削土を盛り上げることによって島島を造成し、この水路部分を水田とすることによって耕作が行われていた。

第2層は、灰色～緑灰色の細砂～中砂混シルトの土質で、粘性は弱いがしまり良く酸化鉄を含む土層である。後述する第1b層が被覆する部分は、従来からの第2-1層に対応すると考えられる。第3層も従来の池島・福万寺遺跡第2層中のいずれかの層と推定されるが、第2層中のいずれに対応するか限定することは困難であった。

地形は、調査区西部の島島付近が低く、南側から北東部が若干ではあるが高くなる傾向を持ち、標高は、T.P.4.21～4.48mである。

この面では、主軸を若干北東-南西に向けた南北方向の島島3基を確認した。島島は、いずれも先述のY=-33,955ラインの付近より以西に位置し、南北方向に伸びる島島が3基東西に並んでいる。先述の第1b面の小型の土坑はこの島島部に位置している。島島は、いずれも土層観察用断面部分では上層からの削平のため確認できず、北側の法面部分でのみ確認されたため、いずれも破線で表示している。



法面部分の観察によると、先述の第1 b層が、島島両肩部に擦りついている状況が認められたため認識されたものである（写真1・2）。

この島島は上部が削平されているため高さなどは不明であるが、肩部や島島下部の状況から、後述す

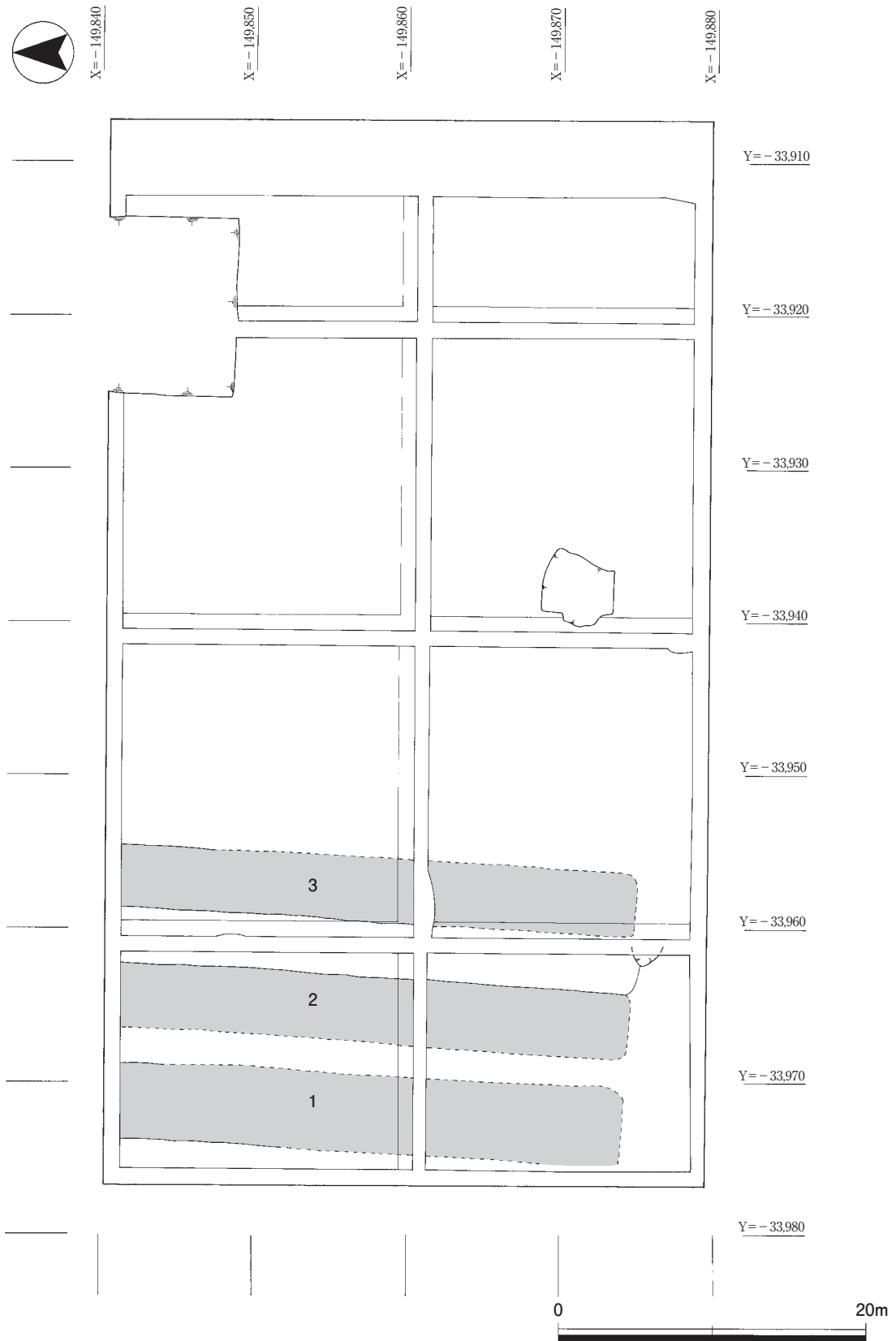


図8 第2面平面図

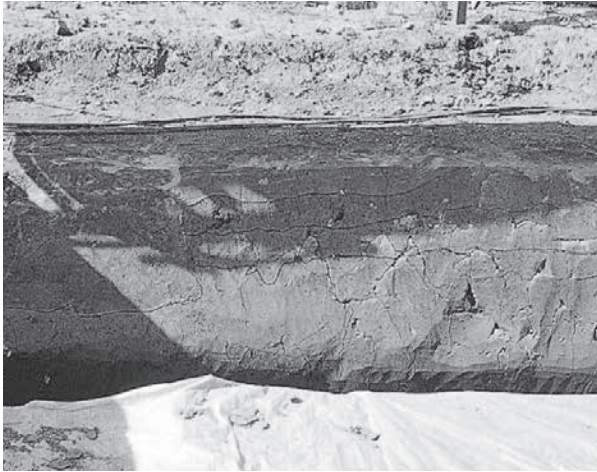


写真1 1島畠西肩断面（南から）



写真2 2島畠西肩断面（南から）

る各面には前身の島畠は存在せず、氾濫堆積物などを芯として造成されたものではないことが明らかである。こうしたことから、池島Ⅰ期地区の状況と同様にこの第2面段階に溝を掘削することによって造成されたものと考えられる。したがって、先述のように水田部分以外は、第2-1面に対応する層は削平されていたものと考えられ、当面の大半部分は削平を受けていたことになる。

第2面について再度まとめると、この面では調査区西端部に島畠3基を確認した。この東側については情報が無いが、先述の「1b土坑」がこの島畠部分の土坑底のレベルとそれ以外の部分では、島畠部分のレベルが高いことが参考になるのではないであろうか。これらの土坑が同一期間に掘削されたものとも、それらの深度が一定であったかどうかは確認できないが、島畠部分では、耕作土の検出レベルが高くなることから、掘削する深さが浅くなり、水田面部分では耕作土の検出レベルが低く、耕作土の天地返しにはより深く掘削する必要があったとは考えられないであろうか。

出土遺物も少なく時期決定が困難であるが、先述のように、従来の池島Ⅰ期地区の第2-1面に対応するものと考えられる。池島Ⅰ期地区の第2層では上層ほど18世紀代の遺物が多くなる傾向がみられ、なかでも第2-1面および層では、18世紀後半～19世紀代にかかる時期の遺物がみられる。こうしたことから考えて、当調査区の第2面は18世紀代後半～19世紀前半の時期と推定される。（廣瀬）

### 3) 第3面（図9）

#### 遺構面の状況と検出遺構

第3面は、第2層の耕作土層を除去した面である。第3層は、灰色～オリーブ灰色の色調の細砂～粗砂の混じるシルトの土質で、しまりがよい。土質的には、先述の第2層と類似している。従来、こうした土質の土壌は、先述の第2層を含む池島・福万寺遺跡の基本層序の第2層といわれる近世の耕作土層と類似している。

地形は、調査区南側から北東部にかけての地域が高く、北東方向に僅かに低くなっていく地形である。標高はT.P.4.20～4.35mである。

この面では、第2面の島畠のプリントと考えられる色調の変化した部分や、調査区東半でも原因は明らかではないが色調の変化している部分を確認した。しかし、いずれも土質的には大きな変化はなく、遺構と認識すべき状況は確認されなかった。原因については、推測をまじえれば第1b面の「1b土坑」の影響などによる色調が変化したとも考えられる可能性はある。（廣瀬）

出土遺物

第3層からは陶磁器、須恵器、土師器、瓦の小片が出土している。(林)

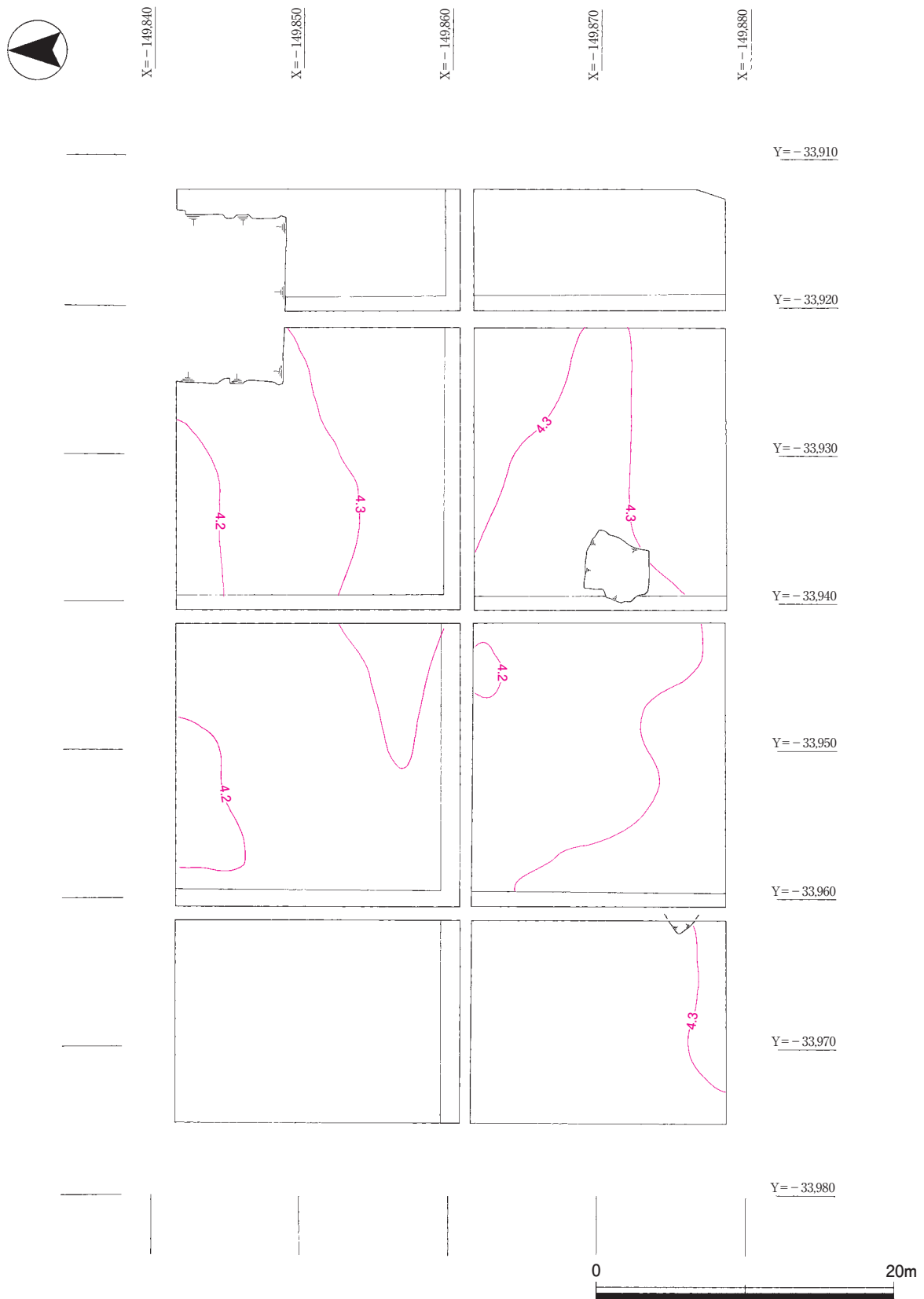


図9 第3面平面図

従来の池島・福万寺遺跡の第2層は大きく第2-1~4層に分層され、度重なる氾濫堆積物による島  
 島の増加と拡張の繰り返しがみられる層である。第2層の各層では、基本的には各層間に氾濫堆積物層

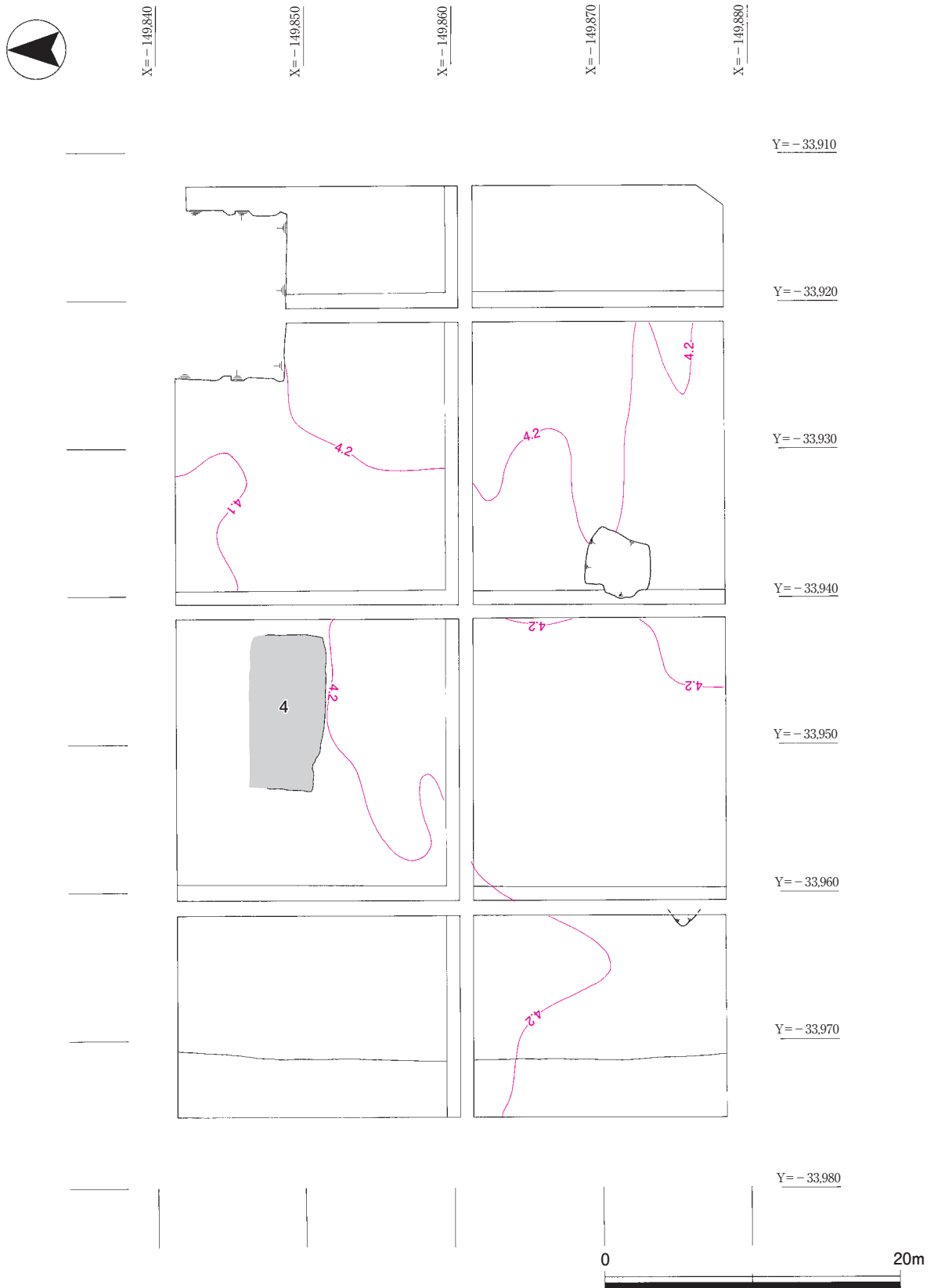


図10 第4面平面図

が遺存せず、島島の拡張部のみにみられるもので、災害と復旧の痕跡が度々確認できる。当調査区の西側の池島Ⅰ期地区とⅡ期地区の境界部に位置する02-1調査区では、第2層は4層に分層されたが、第2-1・2と、2-3・4層が土質的に類似していることから第2層は大きくは2つの段階に分けることができる。当調査区の第3層は上部の第2層と類似した土質であることから、池島Ⅰ期地区の第2-2層に対応する可能性がある。(廣瀬)

#### 4) 第4面 (図10)

##### 遺構面の状況と検出遺構

第4面は、第3層の耕作土層を除去した面である。第4層は、灰オリーブ色の色調で、中砂～粗砂の混じるシルトで、硬い土質である。先述のように、従来こうした土壌は池島・福万寺遺跡の基本層序の第2層の土質に類似しており、当調査区第3層同様に近世の耕作土層と考えられる。出土遺物も少なく、遺物の時期幅が広いため時期を特定しえない。ただし、後述するように16世紀代の陶磁器片が出土していることから、中世末頃以降と考えられ、先述の土壌の状況とをあわせて考えると、中世末から近世初頭にかけての時期と推定される。

地形は、調査区東端と中央部が南西から北東に高く、北西側にやや低くなっていく地形である。標高はT.P.4.06～4.27mで、全体の状況としては平坦な遺構面である。

遺構は、調査区中央部北側で、長方形の明黄褐色の砂で周辺とは相違する土質の輪郭を確認した。島島の芯と考えられる部分は、先述の第3面段階にも島島の可能性があるとして認識されたもので、当面においても島島であった可能性が高い。東西10.0m、南北5.0mの東西に長い長方形を呈している。芯となるため周辺に比べて氾濫堆積物と混じり合い、かなり砂質が強く、色調がやや薄かったため認識された。(廣瀬)

##### 出土遺物 (図11)

第4層から出土した遺物には、陶磁器(1)、須恵器(2)、瓦器(3・4)、土師器、瓦がある。

(1)は中国製の龍泉窯系青磁輪花皿で、16世紀代のもと考えられる。(2)は須恵器壺の底部で糸切り痕がみられる。平安時代のものである。

(3・4)は瓦器椀で、前者は12世紀末～13世紀初頭、後者は13世紀代の和泉型の瓦器椀である。

今回の調査区での遺物量は少なく、主に前代の混入とみられる。(林)

従来、池島・福万寺遺跡の第3層では、第3-2-1b層から文明13年(1481年)の卒塔婆が出土しており、第3層の時期は15～16世紀代と考えられている。こうしたことから、第4面は、中世後半の15～16世紀に相当する遺構面と考えられる。(廣瀬)

#### 5) 第5面 (図12、図版2)

##### 遺構面の状況と検出遺構

第5面は、第4層の耕作土層を除去して検出される面である。第5層は、灰色～暗オリーブ灰色の極細砂～細砂の混じるシルトの粘性の強い土層である。上部は、第4a層の耕作土に削平され、遺存状況

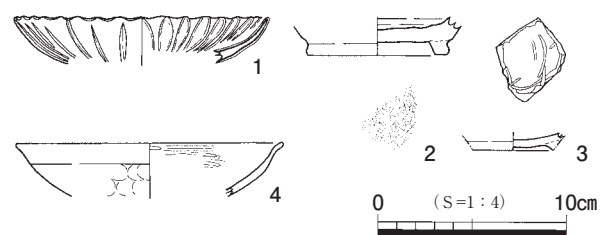


図11 第4層出土遺物

は不良である。第5面は、従来当遺跡で第3層とされてきた中世後期の遺構面の一つと考えられる。しかし、現状では周辺調査区との関係や基本層序でも述べたように、この調査区は下層の弥生時代の地層

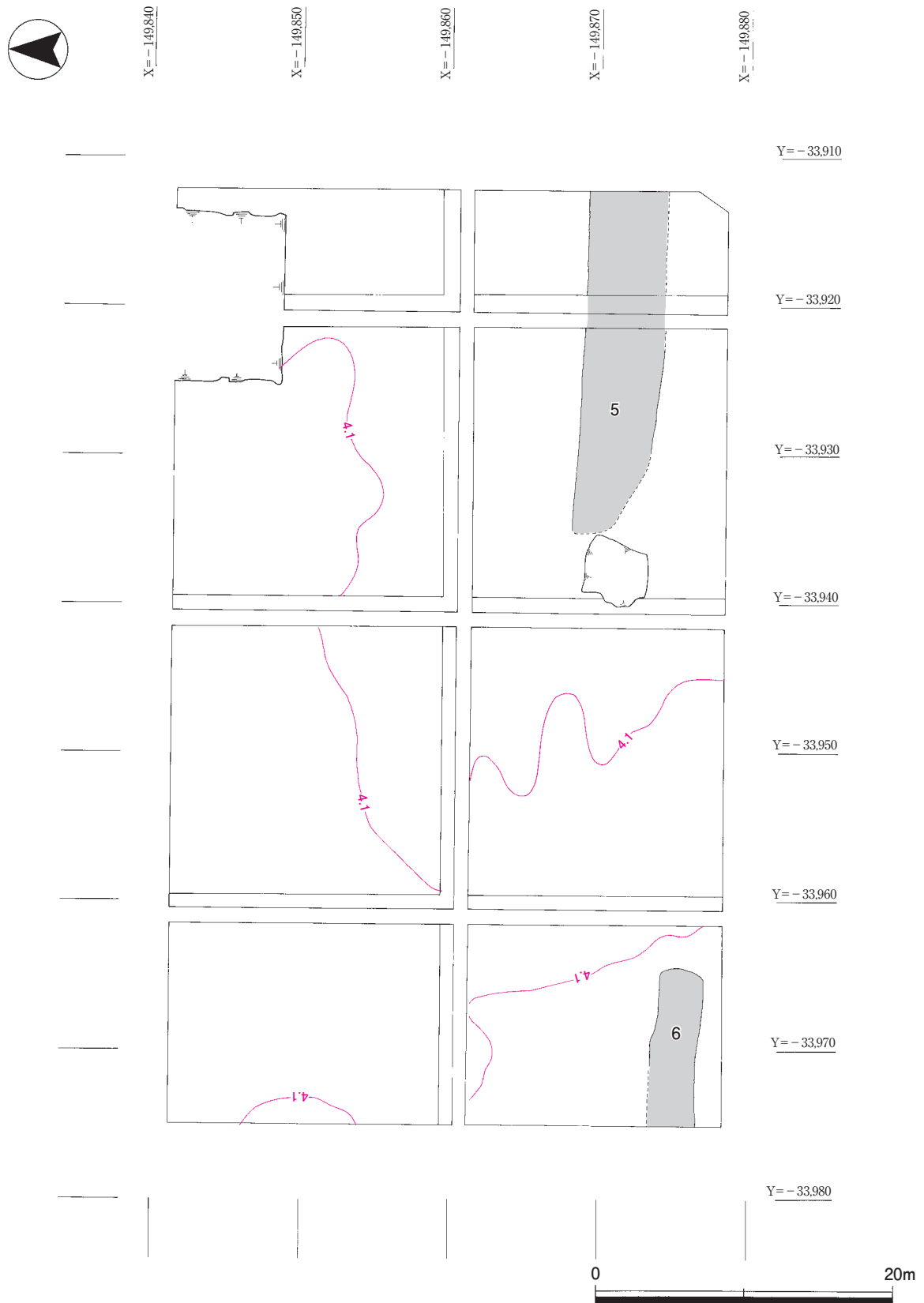


図12 第5面平面図

が非常に高く、それ以降の各時代の層序の遺存状況が悪いため、当遺跡基本層序との対比が非常に困難である。

地形は、全体的に平坦でT.P.4.01～4.17mを測る。

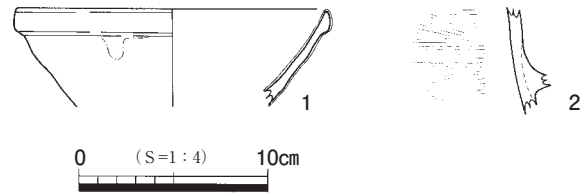


図13 第5層出土遺物

第5面では、島島2基と島島と考えられる下層の砂の盛り上がった部分1箇所を確認している。6島島は、調査区南西端部に位置し、東西に長い形態で幅3.0m、検出長で11.0mを測る。西接する06-2調査区でも第3-1面でこれにつながると考えられる下層の砂の盛り上がりを確認している。現状では、島島はほとんど上部に耕作土を持たず、高さは周辺と変わらなかった。後述する第6面ではこの部分に島島が確認されていないことから、第6面を覆った氾濫堆積物を盛り上げて島島を造成したものと考えられ、先述の細粒砂は盛り上げられた島島の芯と考えられる。

5島島は、調査区東南部に確認されたもので、東西に長い島島で最大幅5.0m、検出長22.5mである。平面形は南西部分がやや細くなっている。この島島は、下層の第6a層に類似したやや砂質の強い土壤で周辺部との色調に差が見られたことから検出された。先述の第4層に削平されているため高さは周辺とまったく同様な状況であった。しかし、土質に相違が見られその部分が第6層に類似していることから本来はこの部分に島島があったため下層の第6層が削平されずに遺存しているものと考えられる。

島島と考えられる下層の盛り上がりは調査区中央部の北側で確認された。この部分では周辺部と相違して第5層の土壤層が明瞭には確認されず、砂が目立つ状況であった。現状では通常の島島的な方形の形状を示さず、不定形な形状であったが、下層が盛り上がったような状況であることから島島の可能性を考えた。(廣瀬)

#### 出土遺物 (図13、図版21)

第5層から出土した遺物には、陶磁器(1)、瓦質土器(2)、須恵器、土師器、瓦器がある。(1)は12世紀の白磁碗である。(2)は瓦質羽釜の鏝部分の破片で、15世紀～16世紀頃のものと思われる。

第5面および第5層は、先述の第4面同様に池島・福万寺遺跡の中世後期の第3層に相当するものと推定される。出土遺物にこの時期のものがみられることから、第5面は15～16世紀頃の遺構面と考えられる。(林)

### 6) 第6面 (図14)

#### 遺構面の状況と検出遺構

第6面は、第5層の耕作土層を除去した面である。第6層は、灰色～暗青灰色のシルト～中砂である。上部は、第5層によって削平されており、遺存状況は不良である。従来の当遺跡における第3層のいずれかの面に対応する可能性があると考えられるが、現状では特定できない。

地形は、ほぼ平坦でT.P.3.92～4.08mを測る。

調査区内では、遺構は検出されなかった。ただし、遺構面の検出段階では、上層からの影響の可能性もあるが、若干の色調の相違を確認している。上層にかかわる島島等の可能性もあるが、現状では確認できなかった。(廣瀬)

出土遺物 (図15、図版21)

第6層から出土した遺物には、陶磁器 (5)、須恵質土器 (1・2)、土師器 (3)、瓦器 (4)、須恵

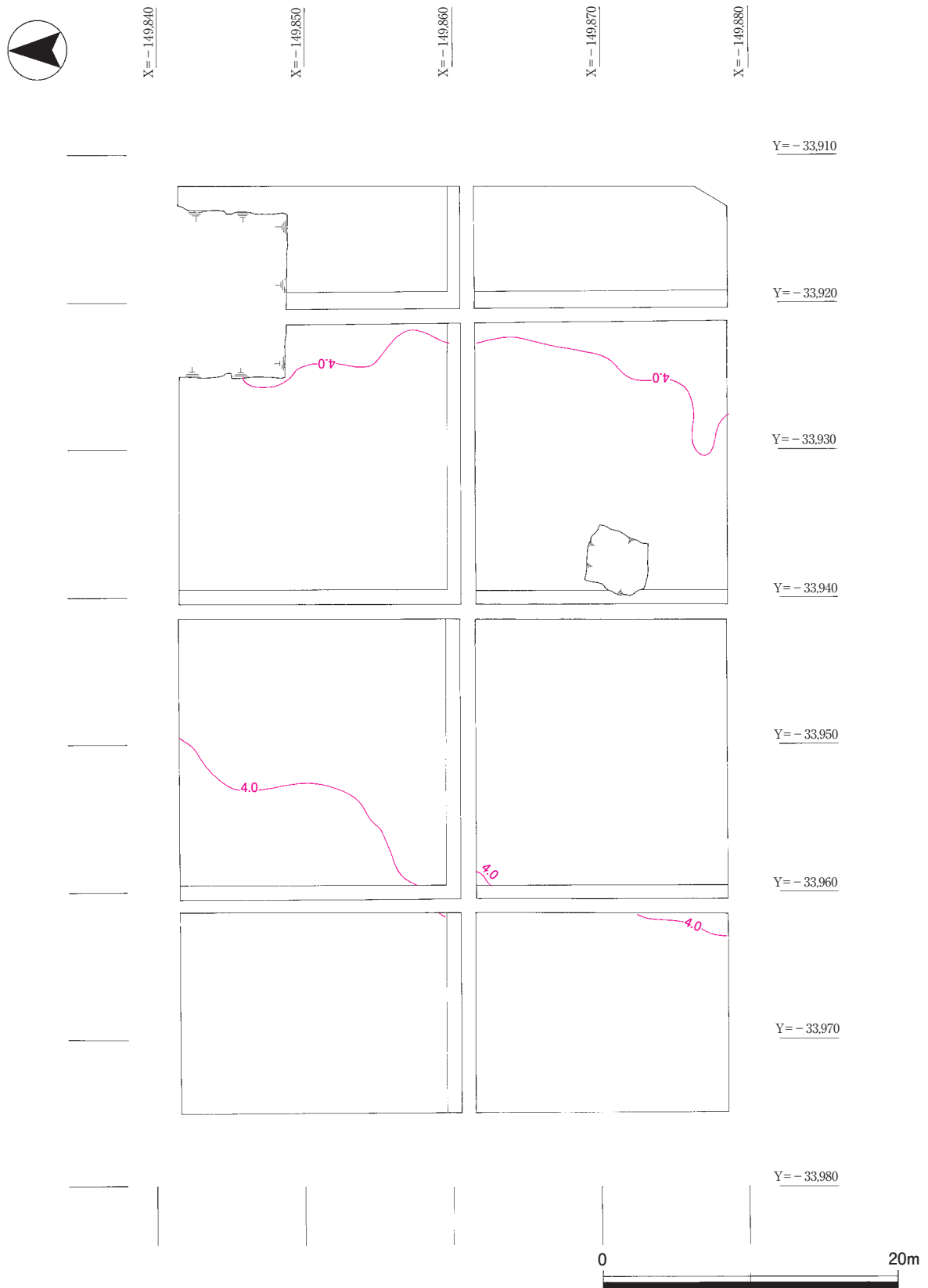


図14 第6面平面図



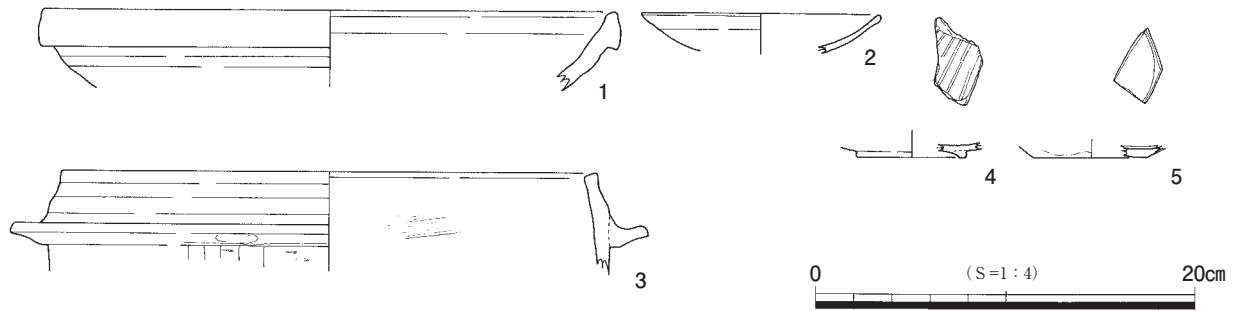


図15 第6層出土遺物

器、瓦などがある。(1)は東播系の須恵質練鉢、(2)も東播系とみられる須恵質皿で、ともに13世紀代に属するものであろう。(3)は土師器羽釜で、内外面にススが厚く付着している。14世紀後半のものである。(4)は和泉型の瓦器椀で、13世紀のものと考えられる。(5)は13世紀後半～14世紀初頭の白磁皿である。(林)

第6層は、従来から当遺跡基本層序の第3層の中世後半の細粒堆積物をベースにした層序に対応する可能性が高いが、出土遺物は13～14世紀代のものがあり齟齬がみられる。当該の遺物群は、池島I期地区では第5層～第6層から出土する遺物である。池島I期地区のこの層は、粘土～シルトを主体とする粘性の強い土壌が主体を占める層である。当調査区付近の状況は明らかではないが、後述するように下層の状況から、当該時期にも地形的に高い部分であったことが影響して、こうした土壌が形成されていた可能性も否定できない。(廣瀬)

## 7) 第7面 (図16、図版2)

### 遺構面の状況と検出遺構

第7面は、第6層の耕作土層を除去して検出される面である。第7層は、灰色の細砂を含むシルト質のあまりしまりの良くない土質である。上部は、第6層によって削平を受けて遺存状況は不良である。従来の当遺跡基本層序との対応関係は難しい。ただし、現在調査中の西接する06-2調査区では東側ほど従来の当遺跡基本層序の第4層が粘土～シルトをベースとしたものから細粒砂を多く含むシルト質の土壌に変化しており、これらのことを考えると第7層は、基本層序の第4層および下層の粘性の強い土壌に対応する可能性が高いと考えることが可能である。

地形は、ほぼ平坦でT.P.3.82～4.00mである。

遺構面の遺存状況が悪かったが、ピット4基、杭1本を確認した。また、このほか調査区中央部の南側で砂質のとくに目立つ部分が確認されている。

7ピット (図17) は調査区中央部北側の5 e に位置し、直径0.21mで深さ0.20mを測るほぼ円形のピットである。埋土は2層に分層され、いずれも細砂の混じるシルト質であるが、上部は灰色で下部は暗緑灰色の埋土である。下部はやや細粒の極細砂が多く、きめが細かい。8ピット (図17) は、調査区中央部の5 e に位置し、直径0.18mで深さ0.24mのほぼ円形のピットである。埋土は2層に分層され、いずれも細砂の混じるシルト質の埋土で、上部は灰色、下部は暗緑灰色の埋土である。下層は極細砂を多く含む粘性が強い。9ピット (図17) は、調査区中央部の5 e に位置し、直径0.21m、深さ0.26mのほぼ円形のピットである。埋土は3層に分層され、いずれも細砂の混じるシルトの埋土で、上層はオリーブ黒色で粘性が弱く、中・下層は灰色の埋土で粘性が強い。10ピット (図17) は、調査区中央部の5 e

に位置し、直径0.25mで深さ0.28mのほぼ円形のピットである。埋土は、上下2層に分層され、いずれも細砂の混じるシルトの埋土で、黒味の強いオリーブ黒色の埋土で非常に粘性が強い。

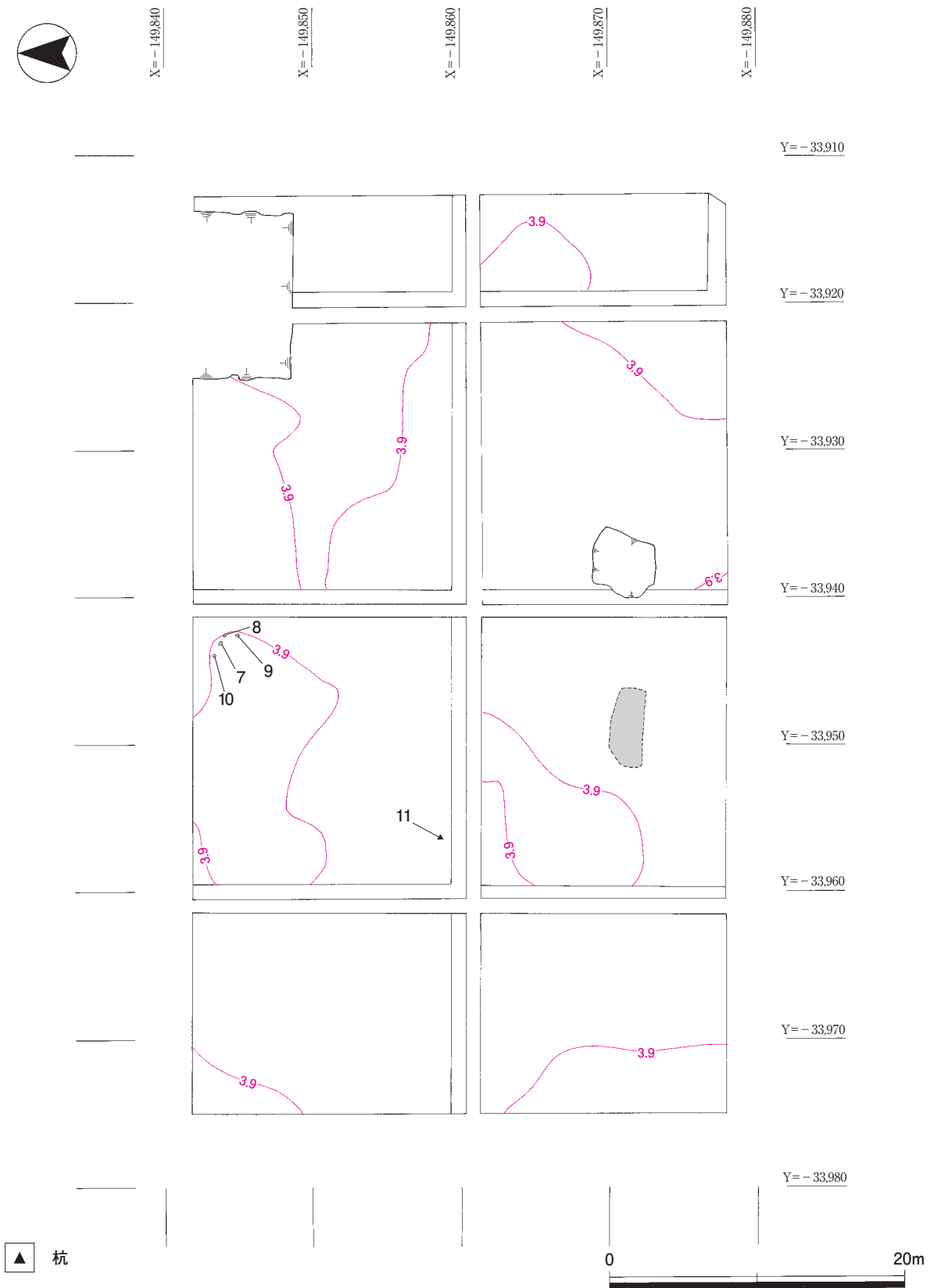


図16 第7面平面図

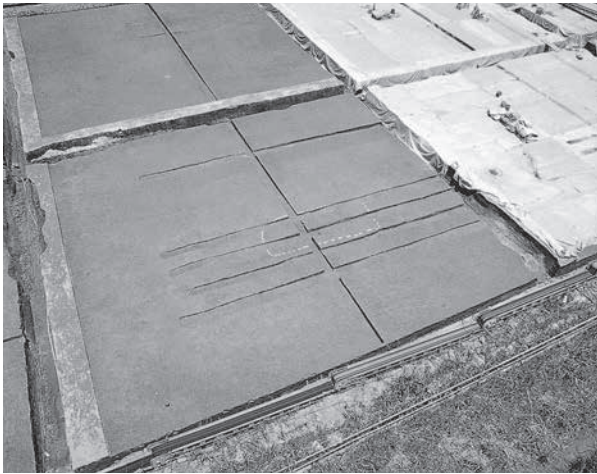


写真3 第7面西半（南西から）



写真4 南法面第1～11b層（北東から）

これら4基のピットは、調査区中央部の北端部で確認されたもので、3基（7・8・10ピット）がほぼ一直線に等間隔に並んでいる。また、9ピットのみ8ピットの南に位置してしているが、8-9ピット間の距離は、ほぼ各ピット間と同様である。4基は、全体としては「く」の字状に並んでいる。

このほか、調査区西半部の6fで腐食した杭を確認した。周辺には関連する遺構もないため詳細を記述し得ない。このほか、調査区中央部南側で細粒砂の河川堆積物の多く含まれる長方形の輪郭を確認している。検出面は当面であるが、後述する第11b層の氾濫堆積物が多く混じっているものと考えられる。従来から当面前後の遺構面の調査では島島が確認されている場合もあり注意が必要である。しかし、従来の調査では中世以前には島島は確認されておらず、現在調査中の06-2調査区でも、この前後の層序では島島が確認されていないことから、島島の可能性も低いものと考えられる。また、細粒砂が第11b層であるとする、これが島島の芯として残存する状況は考えにくい。（廣瀬）

出土遺物（図18、図版21）

第7層から出土した遺物には、陶磁器（6・7）、瓦質土器（1・2・5）、須恵質土器（3）、土師器（4）、須恵器、黒色土器（9）、瓦器、瓦、銭貨（10）、勾玉（11）等がある。（1）は瓦質羽釜で外面にススが付着する。14世紀末のものである。（2）は瓦質鉢で、同じく14世紀末頃とみられる。（3）は東播系と考えられる須恵質練鉢で、12世紀中葉～後半といえる。（4）は土師器羽釜の口縁部片とみられ、13世紀頃のものである。（5）の体部外面にていねいなヘラミガキを施す。有三足の輪高台をもつ半筒形の瓦質香炉とみられる。近世の遺物である可能性が高い。（6）は古瀬戸合子で、13世紀中頃のものともみられる。（7）は瀬戸天目茶碗で、外底面を糸切りののち、削り出し高台を設けている。15

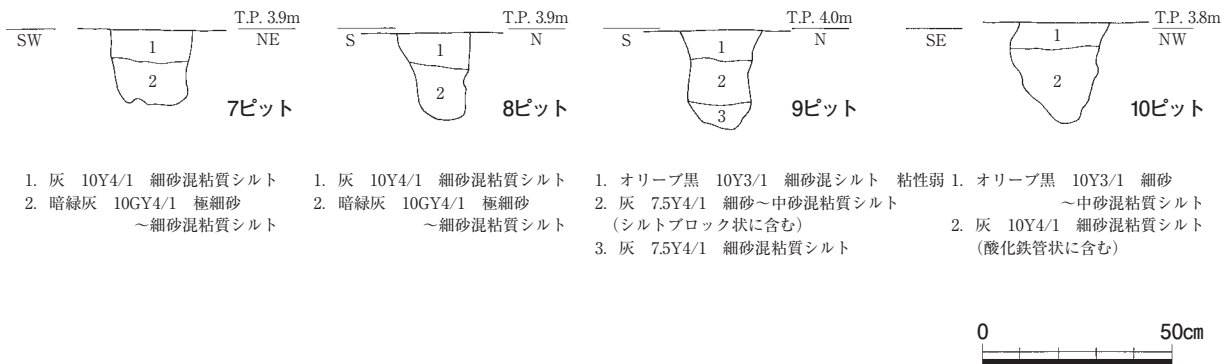


図17 第7面ピット断面図

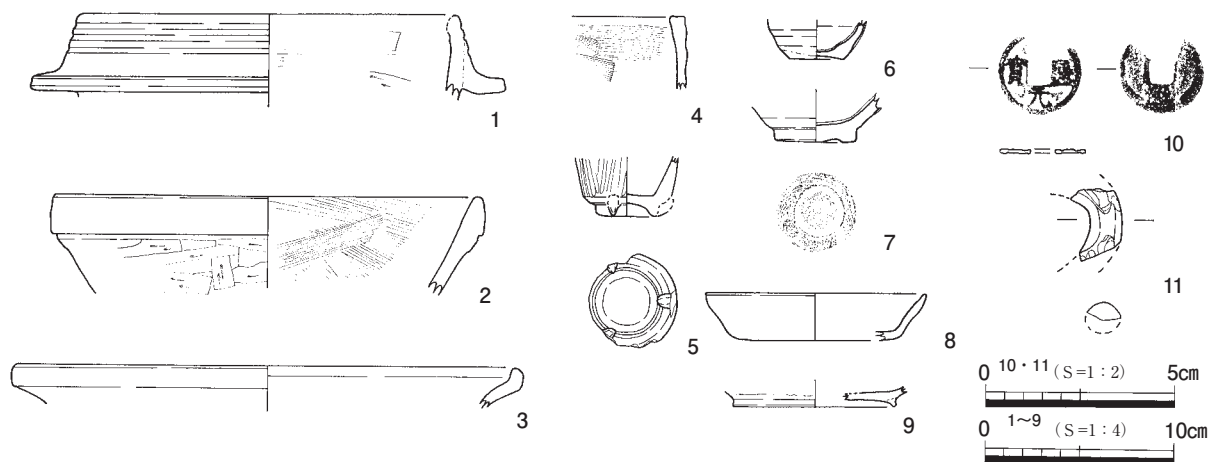


図18 第7層出土遺物

世紀のものである。(8)は土師器杯で、13世紀中頃である。(9)は黒色土器A類椀で、外底面に朱が一部残る。10世紀中頃といえる。(10)の銭貨は開元通寶(南唐 初鑄960年)である。銭径2.3cm、郭径0.6×0.5cm、厚さ0.1cmを測る。(11)は碧玉製の勾玉の破片である。深い濃緑色を呈する優美な曲線を持ち端正なつくりの製品である。外面に一部朱が付着する。付近の古墳の副葬品であったものが流されて埋没した可能性が考えられる。(林)

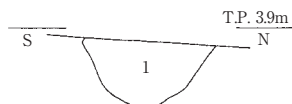
第7面は、先述のように従来の第4層およびその下層に対応する可能性が高いが、現状では明らかではない。検出された遺構には、ピットおよび氾濫堆積物の高まりがある。出土遺物からは、10～15世紀代に及ぶ時期の遺物が出土している。出土数量も少なく主体となる遺物もあまり明瞭ではないが、上層との関係も含めて14～15世紀代の遺物については混入の可能性が高いと考えられる。また、古墳時代の勾玉についても下層からの巻き上げと考えるとよい。先述の第6層との関係も含めて考えると、13～14世紀代の遺物が注目される。

これらのことから第7面は、中世の層と考えられるが、現状では詳細は不明としておきたい。(廣瀬)

## 8) 第8面 (図20、図版3)

### 遺構面の状況と検出遺構

第8面は、第7層の耕作土を除去した面である。第8層は、暗緑灰色の中砂～粗砂を多く含む粘性の強いシルトの土質で、非常にしまりが良く酸化鉄を多く含む層である。上部は、第7層によって削平をうけて遺存状況は非常に悪い。従来の層序との対比は非常に難しいが、しまりの良い粘性の強いシルト層であることや標高等を考えると従来中世前半～古代と考えられてきた第4層～8層に近い土質である。



1. 暗灰 N3/シルト混中砂



図19 12ピット断面図

地形は、中央部南から北西にかけて若干高く、南西と北東にやや低くなるが、平坦な地形で標高はT.P. 3.80～3.90m程度である。

当面では、先述の河川堆積物の広がりやピットを1基確認したが、これら以外には遺構をまったく検出していない。

12ピット(図19)は、直径0.35mで、深さ0.18mのほぼ円形である。周辺には先述の河川堆積物の高まりがみられるが、周辺には遺構もなく、出土遺物もないため性格等は不明である。(廣瀬)

出土遺物 (図21)

第8層から出土した遺物には、陶磁器 (5・8)、土師器 (1・10・11)、瓦質土器 (2・3・4)、

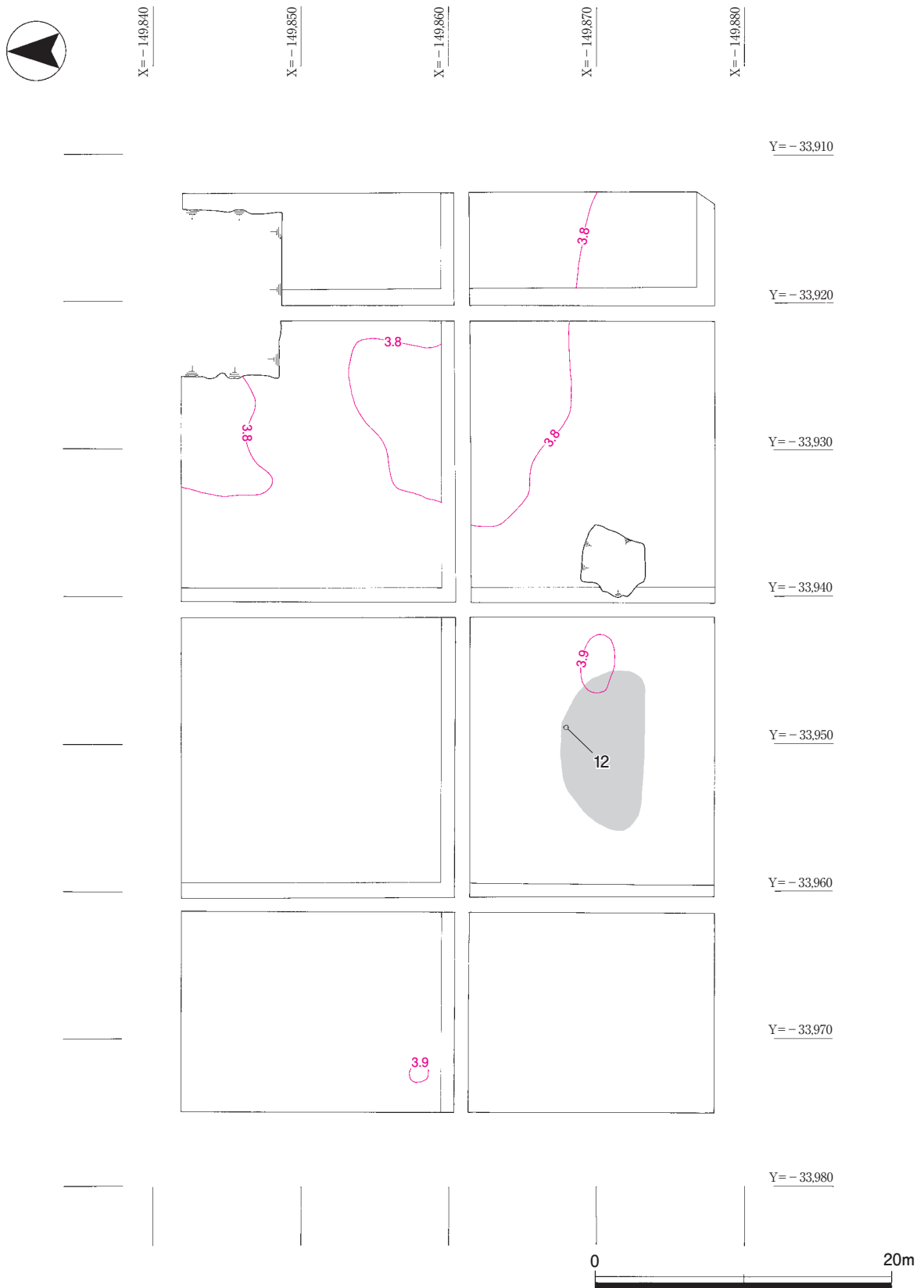


図20 第8面平面図

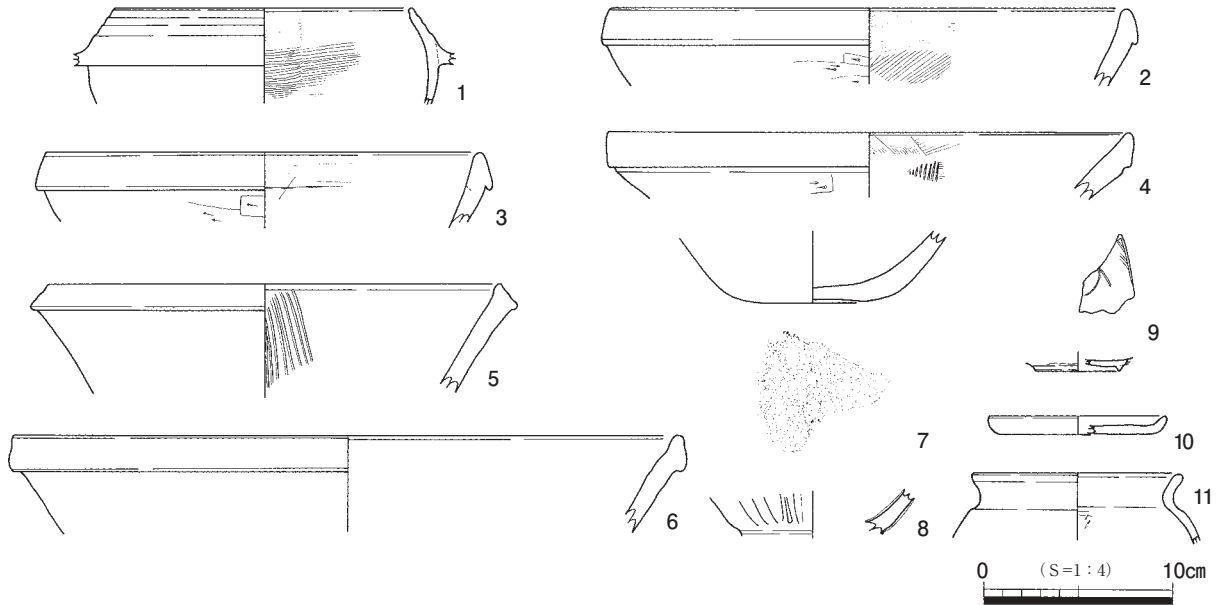


図21 第8層出土遺物

須恵質土器（6・7）、瓦器（9）、須恵器がある。（1）は土師器羽釜で、内外面にススが付着している。14世紀のものである。（2・3）は瓦質鉢、（4）瓦質播鉢で、ともに14～15世紀に属する。（5）は備前播鉢で、13世紀のものといえる。（6・7）は東播系の須恵質練鉢で、（6）は14世紀前半、（7）は外底面に糸切りの痕跡を残す。12世紀末～13世紀初頭といえる。（8）は中国製の龍泉窯系青磁碗で、底部近くの蓮弁の線はやや不明瞭となっている。13世紀前半～中葉のものである。（9）は大和型と推定される瓦器碗で、13世紀中葉～後半とみられる。（10）は土師器小皿で、13世紀のものである。（11）は土師器甕で、8世紀頃と考えられる。

従来の第8層は10世紀代を中心とする時期の遺物を包含すると考えられているが、これとは大きな齟齬がみられることは明らかである。出土遺物の内容には13～14世紀の遺物が見られ、上層の第6・7層を含めてこの時期の遺物が多い傾向にある。遺構面との関係を離れてみれば、当該時期にこの付近での人為的営為が増加し、これらの遺物が包含された可能性もある。（林）

第8層の出土遺物は、先述の第7層同様に各時期の遺物の混じりが非常に多く、時期を特定できる材料が少ない。したがって、第8面の時期については、現段階では保留し、第7面同様に13～14世紀代の幅で考えておきたい。（廣瀬）

## 9) 第9面（図22～24、図版3・4）

### 遺構面の状況と検出遺構

第9面は、第8層の耕作土層を除去した面である。第9層は、灰色の極細砂を含む粘性の強い土質である。上部は第8層によって削平を受けており、遺存状況は悪い。従来の調査における対応面は非常に難しいが、第8面およびその前後の面と対応する可能性が高い。

地形は調査区西側から南東側が高く北から北東部にかけてが低い地形で、標高はT.P.3.73～3.86mである。

この面では、溝39基、土坑4基、ピット23基を確認した。

溝は、16～20・22～39・43～46・54・55・59～64・73～76溝を検出した。いずれも東西もしくは南北

にほぼ平行するもので、後述する第10面で検出した溝と位置を同じくする溝が多いが、検出面の相違から、それぞれ検出した面に掲載した。このうち、明らかに当面にのみ帰属する溝は、非常に細く幅が

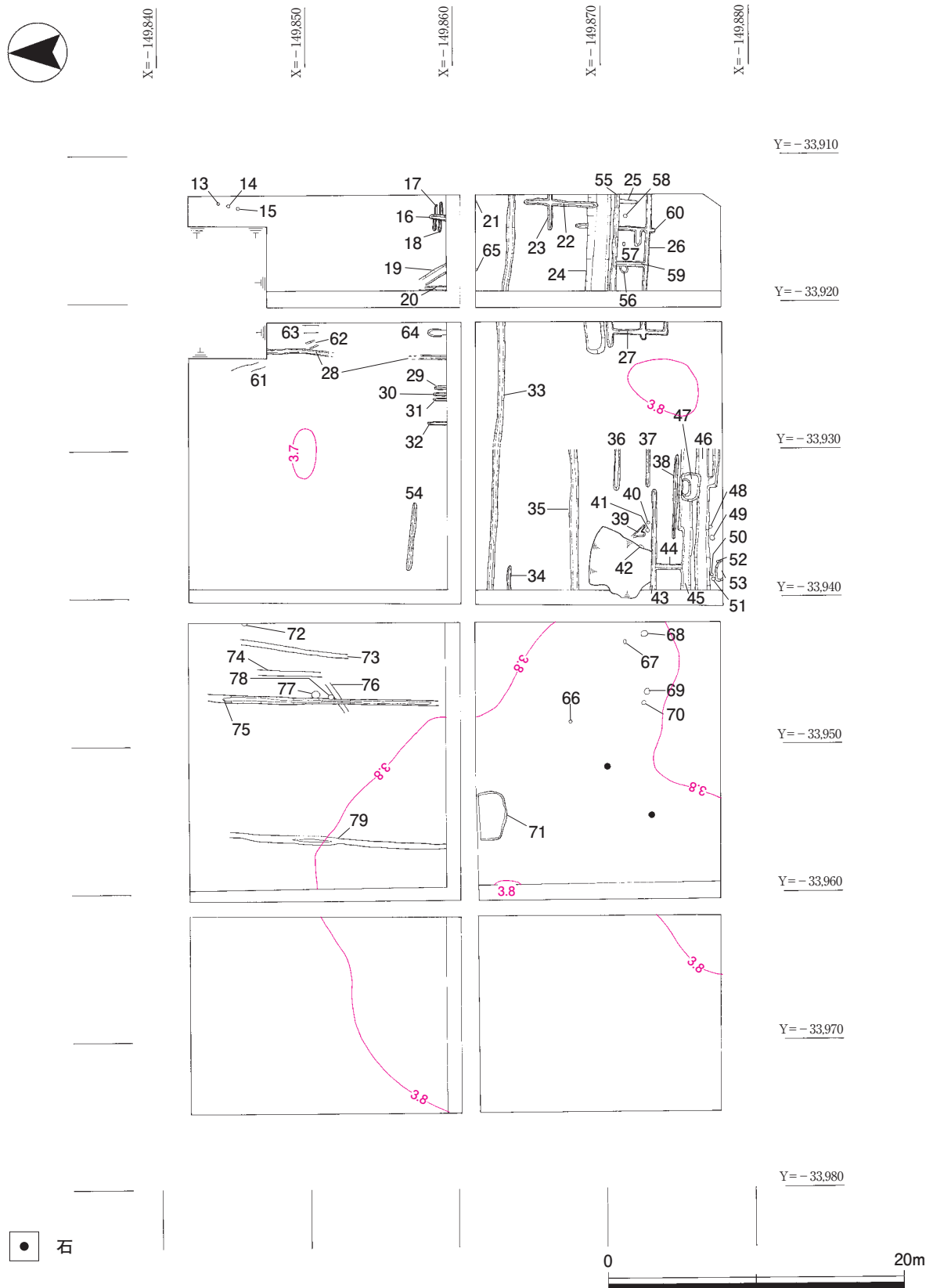


図22 第9面平面図

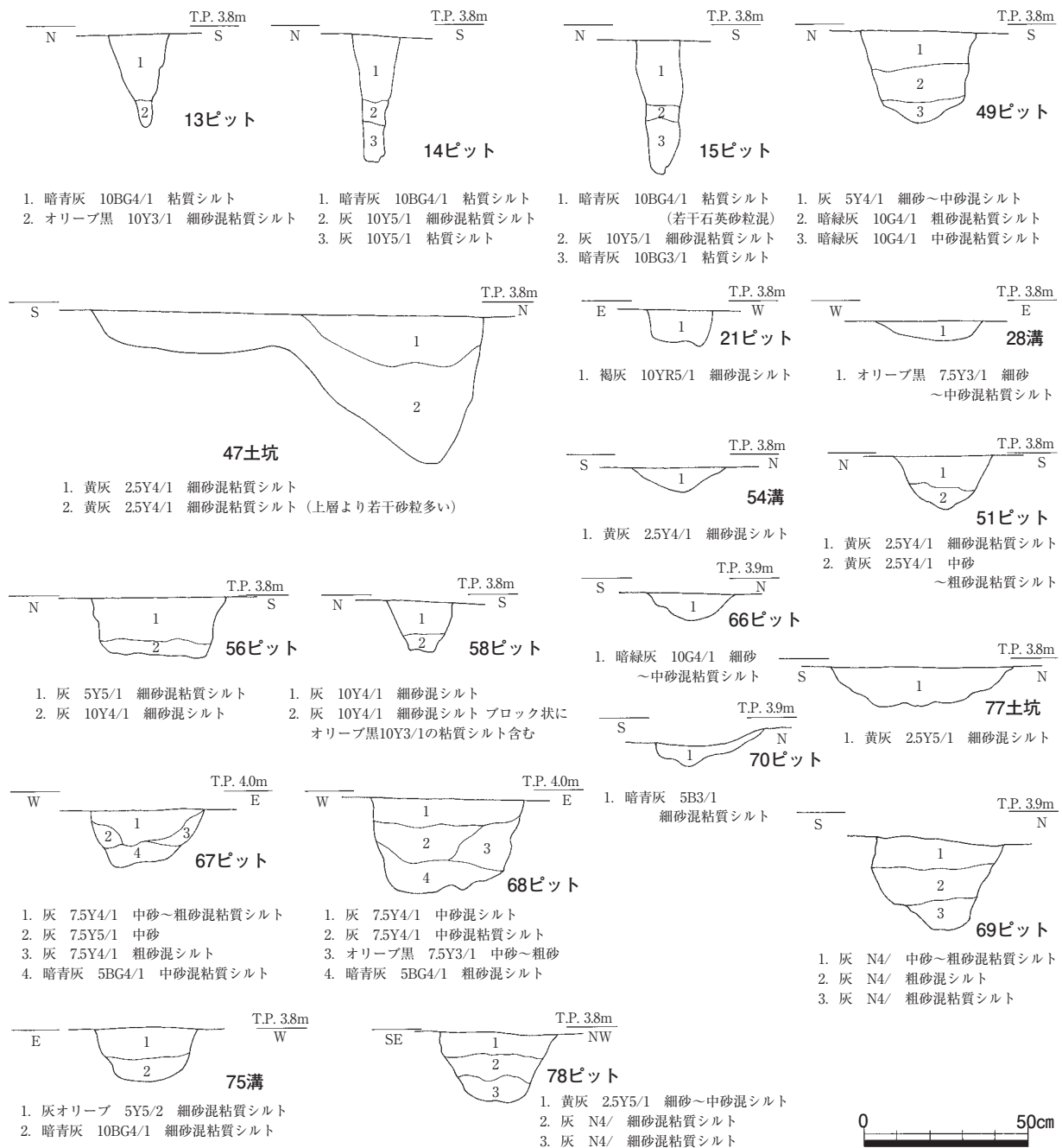


図23 第9面遺構図 (1)

0.20m内外で深さも浅く0.10m内外のものが多い。このほか、24溝などは幅が1.50m内外、深さ0.14～16mのものである。土層観察用断面からは、埋土上層と下層に大きく分かれ、下層はいくつかに分層が可能で、上層より粘質である。このほか、45・46溝など幅0.70～0.80mの広い溝があるが、いずれも深さ0.10mの浅いものである。

土坑は、47・53・71・77土坑の4基を検出している。47土坑は、7hに位置する隅丸長方形の土坑である。長軸2.40m、短軸1.10m、最大深さ0.80m程度の土坑である。埋土は2層に分層され、いずれも黄灰色の細砂を含む粘質シルトである。出土遺物はない。53土坑は、4hの調査区南端に位置する土坑で、調査区南端のため南側は調査区外に位置している。このため、現状では東西に長い長楕円形の土坑と考えられ、長さ1.50m、幅0.60mを測る。出土遺物もなく、詳細は不明である。71土坑は、長さ



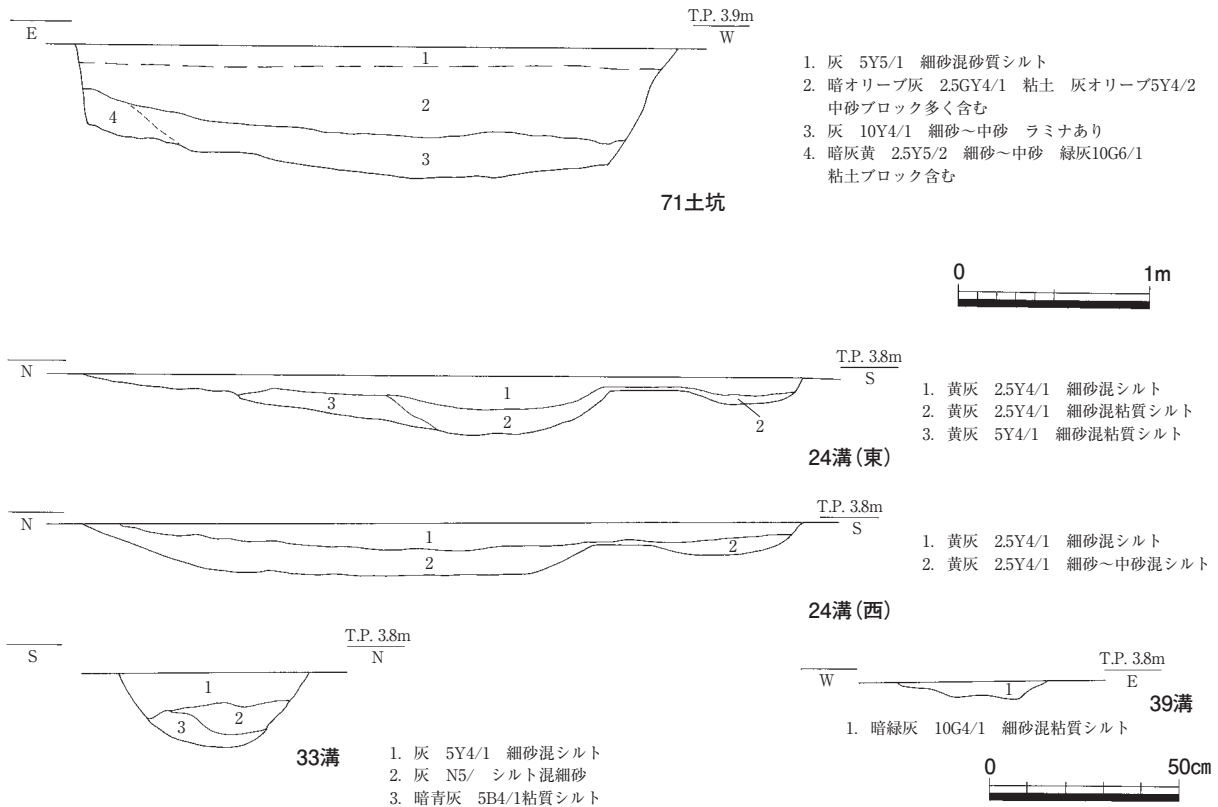


図24 第9面遺構図(2)

3.15m、現存幅1.10m、深さ0.70m程度の扁平な半円形的大型土坑である。底部は若干中央部がくぼんでいるが、底平な大型の土坑である。埋土は、上部が暗オリーブ灰色の粘土に中砂が混じったもので、下部は灰色の細～中砂に暗オリーブ灰色の粘土ブロックが混じったものである。最下層は中央に向かって流れ込んだような斜行する堆積をみせることから、一定期間オープンな状態であったものと考えられる。調査段階では掘削途中の井戸の可能性も考えたが、砂層に達していることから機能的には完成したものと捉えることも可能である。

ピットは、13・15・21・40～42・48～52・56～58・65～70・72・78である。13・14・15ピットは調査区北東端部2 eに位置する直線的に並ぶピットである。埋土も暗青灰色の粘質シルトが最上部に堆積しており、類似した状況を示している。40・41・42ピットは、調査区中央部南側の4 hに位置するほぼ一直線的に並ぶピットである。48・49・50・51・52ピットは、調査区中央部南端部4 hの46溝の南肩に位置するピットである。56・57・58ピットは、調査区東南部の2 hに位置する55溝の南側に位置するピットである。3基がほぼ一直線上に並ぶが、56ピットのみやや大きい。埋土も同様に灰色の細砂の混じる粘質シルトで、深さもほぼ同じであるが、性格等については不明である。66・67・68・69ピットは、調査区中央部南側の5 hに位置するピットである。これらのピット群の相関関係については配置も散漫で、埋土の状況も単層のものや、やや複雑な状況を呈するものなどのバリエーションがあることから不明である。(廣瀬)

#### 出土遺物(図25・図26、図版21・22)

第9面の遺構・包含層から出土した遺物には、陶磁器(7)、須恵器(1・3・4・6)、土師器(2・5)、瓦器、瓦がある。(1)は24溝出土の須恵器平瓶で、外上面は自然釉がかかり暗緑灰色を呈する。8世紀のものといえる。(2)は71土坑出土の土師器鉢とみられる。

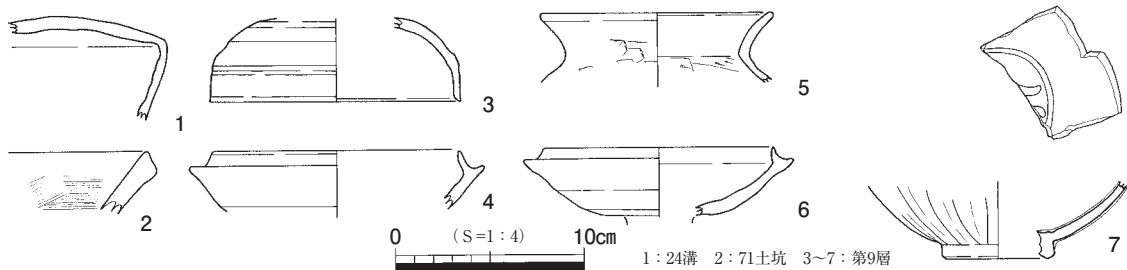


図25 第9面・9層出土遺物

(3)は須恵器杯蓋で、田辺編年MT15型式に属し、6世紀前半といえる。(4)は須恵器杯身で、TK209型式に属し、6世紀末～7世紀初頭の時期が与えられる。(5)は土師器甕で、庄内式期とみられる。(6)は須恵器有蓋高杯で、脚部は欠損している。TK217型式に属し、7世紀前半に含まれる。(7)は中国製の龍泉窯系青磁碗で、見込み部に草花文を施す。13世紀中葉～14世紀初頭のものである。従来調査によって、出土遺物から第9面は7～8世紀代が中心であるが、6世紀代にさかのぼる可能性も指摘されてきた。今回の調査区からは、第9層から庄内式期を含む8世紀までの遺物が出土している。

当調査区付近は、ここまで記述してきたように下層の弥生時代の土壌層の標高が高く、弥生時代後期以降先述の第6層にかけて層位的な混乱が多くみられる。こうしたことも原因して、今回の調査では、第11層および第11b層掘削時に本層などに関連すると思われる遺物が出土している。

第11層および第11b層で検出した遺物(図26)としては、須恵器(1・2・3・4)、土師器(5・6・7・8・9・10)、瓦器(11)が出土している。(1)は須恵器杯蓋で、TK10型式に属し、6世紀中頃といえる。(2)は須恵器杯身で、内底面中央部に同心円タタキが残る。TK47型式に属し、5世紀後半である。調査区の7hから出土している。(3)は須恵器杯蓋で、内面にヘラ記号がある。TK217型式に属し、7世紀前半である。(4)は須恵器高杯で、3方透かしをもつ脚部は大部分欠損している。

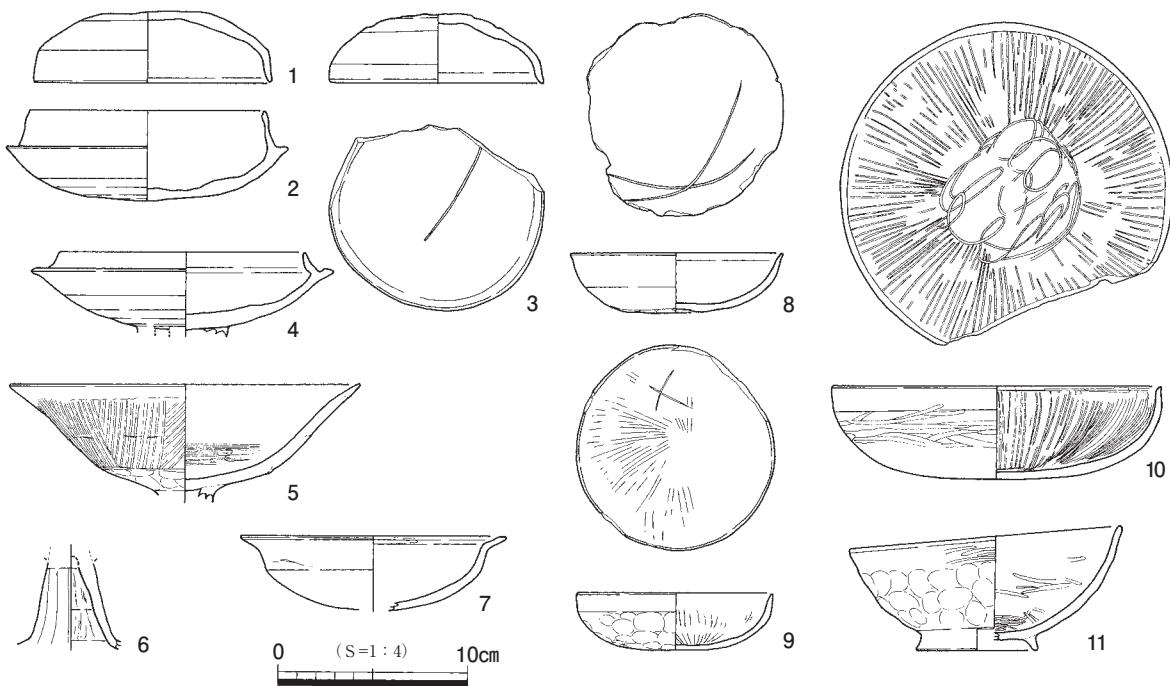


図26 第9層関連出土遺物

T K217型式に属し、7世紀前半である。(5)は庄内式土器のやや外反する有稜高杯で、杯部外面はハケで調整している。古墳時代初頭と考えられる。(6)は土師器高杯の脚部で、6世紀とみられる。(7～10)は土師器杯である。(7)は外反する口縁部をもつ土師器杯で、6世紀末～7世紀初頭である。(8)は内底面にヘラ記号がみられ、外底面には一部朱とみられる痕跡が残る。(9)は内底面に放射状暗文を施し、焼成後にヘラ記号を入れている。7hから出土している。ともに8世紀初め頃とみられる。(10)は内面にていねいな放射状暗文、見込み部に連結輪状暗文を施す。7世紀中頃とみられる。同じく7h出土である。(11)は瓦器椀で全体に歪みがみられる。和泉型Ⅱ-3段階のもので、12世紀中頃と考えられる。土層の変形等によって第7層から混入した可能性がある。

これらの出土遺物のうち、7・8世紀代のものは、器種や完形に近い残存状況、および出土地点が調査区西半部の6f・7hに偏りがみられることから、従来の調査の成果を踏まえると、第9面から掘削された土器埋納遺構の遺物が含まれる可能性が高い。今回の調査も含め、水田開発にともない広い範囲で地鎮の祭祀が行なわれていたことが推定できる。(林)

10) 第10面 (図27~30、図版4・5)

遺構面の状況と検出遺構

第10面は、第9層の耕作土層を除去した面である。第10層は、黄灰色を基調とする色調で、細砂を合

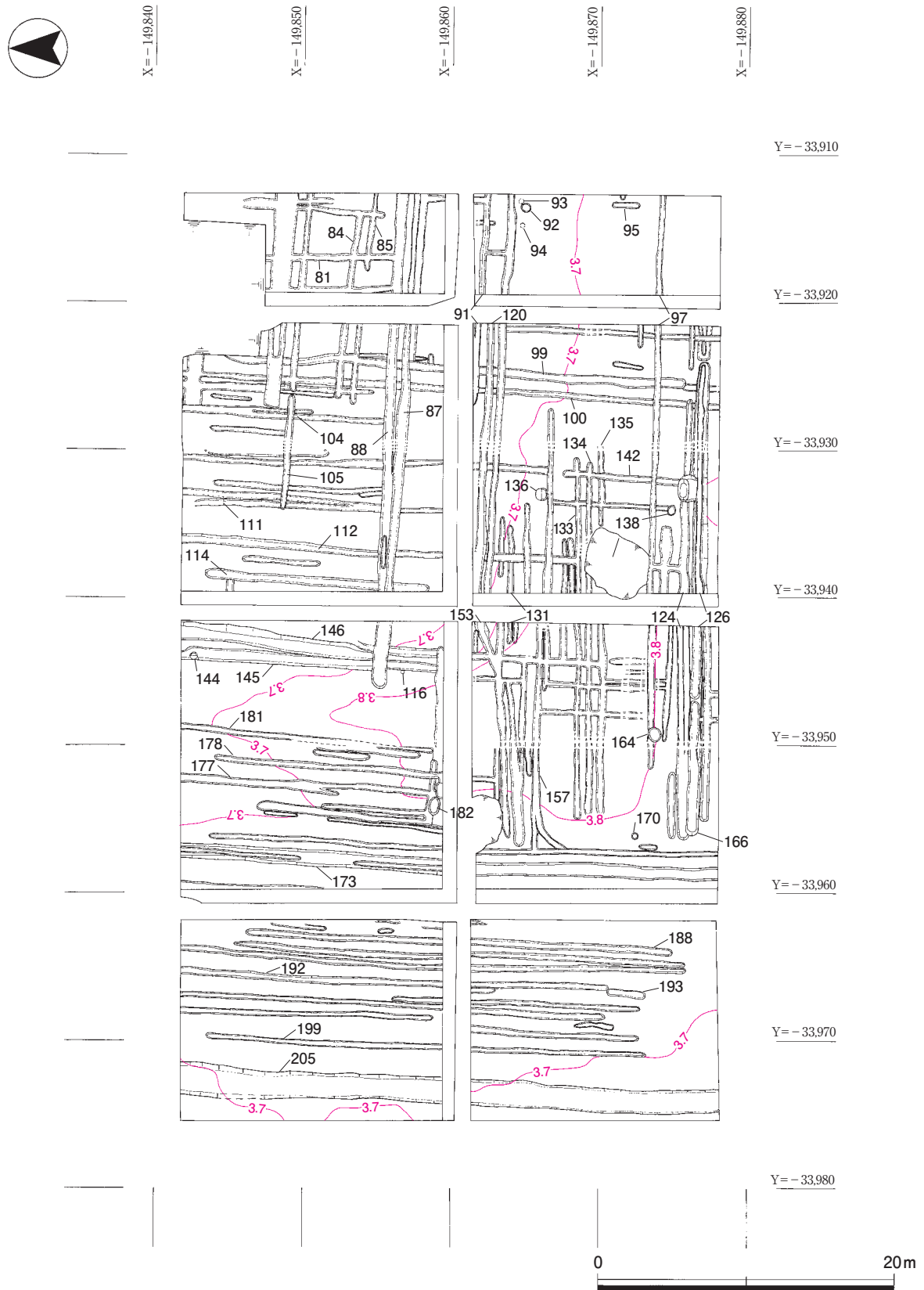


図27 第10面平面図

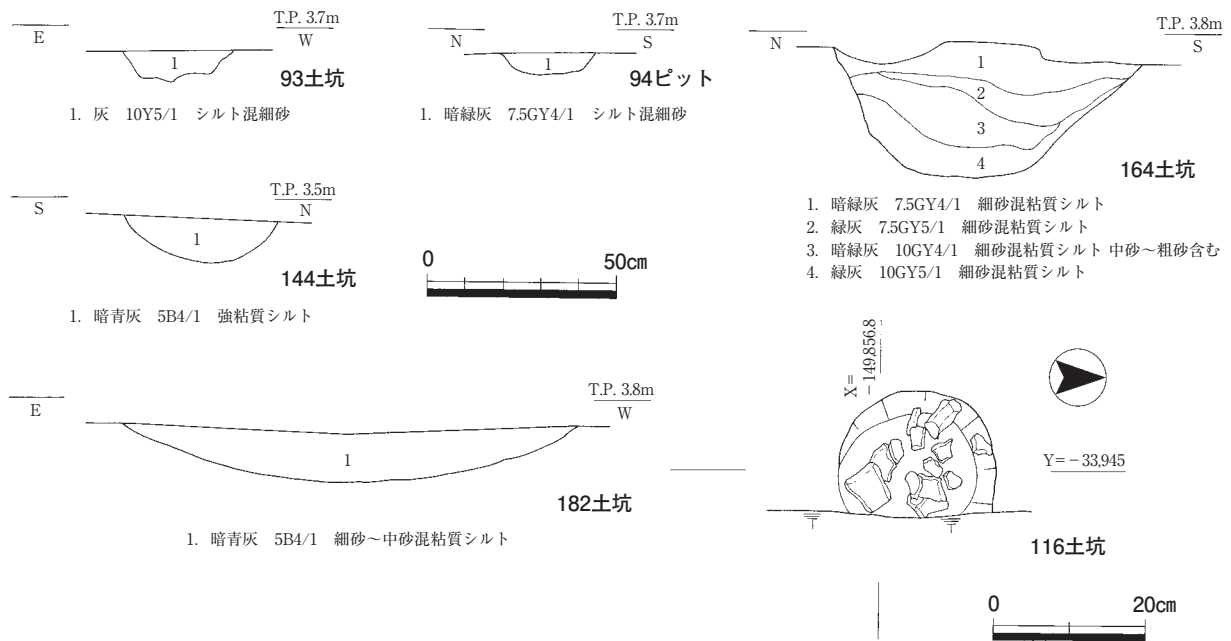


図28 第10面遺構図（1）

むシルトの土質で、酸化鉄・マンガン斑が目立つ。基本的には全体に広がっているが、調査区中央部では、後述する下層の第11b層が露出する部分などもあり、遺存状況の悪い面である。あまり粘性は強くなく、やわらかい土質である。先述の第9層では、中世前半の遺物が出土しており、当面はこの時期以前の土壌層と考えられる。

地形は、調査区中央部やや西側が高く、東西に低くなっていく地形である。中央部でも南北両端部にかけて徐々に低くなっていくようである。

当面では、119基の遺構を検出した。これらのうち、溝については一部が先述の第9面検出の溝と重なるものがみられる。これらの重なる遺構については、第9面の遺構として認識すべきものであるが、下面である当面において幅が広がるなど、別遺構の可能性も残されている。こうしたことから、現段階では当面の遺構として報告を行うこととする。

溝は、調査のための土層観察用トレンチによって分断されている部分がある場合、明瞭にわかるもの以外は別遺構として番号を与えているため、同一遺構に別番号を付与している場合もみられる。大部分は南北方向の溝であるが、3～4度ほど振っているものが多くを占め、一部は2～4度ほど東に振っている。南北方向の溝は3e～3hより西にほとんどが位置し、若干の粗密はあるが西端部を除く全域に分布している。東西方向の溝は調査区南部の4～6g・h付近に位置するものが多い。溝同士の間隔は、1.0m弱のものが多くみられるが、規則的な間隔のようにはみられない。溝同士の間隔は、0.5m程度のもので多くみられるほか、133・134・135溝のように相関関係があるようにみえる場合もある。埋土は、単層のものも多いが、単純ながら2層から3層に分層されるものも多数みられた。いずれも粘性のある灰色系のシルトを埋土とするものである。

土坑は、92・93・116・136・138・144・164・170・182土坑の9基である。いずれも周辺には同様の遺構がみられず単独で立地している。93・182土坑など単層の埋土のものもみられるが、164土坑のように複数層の埋土が観察されたものもある。164土坑は、上部を上層からの攪拌で部分的に削平されているが、4層に分層された。埋土は、いずれも細砂の混じる粘性のあるシルトである。

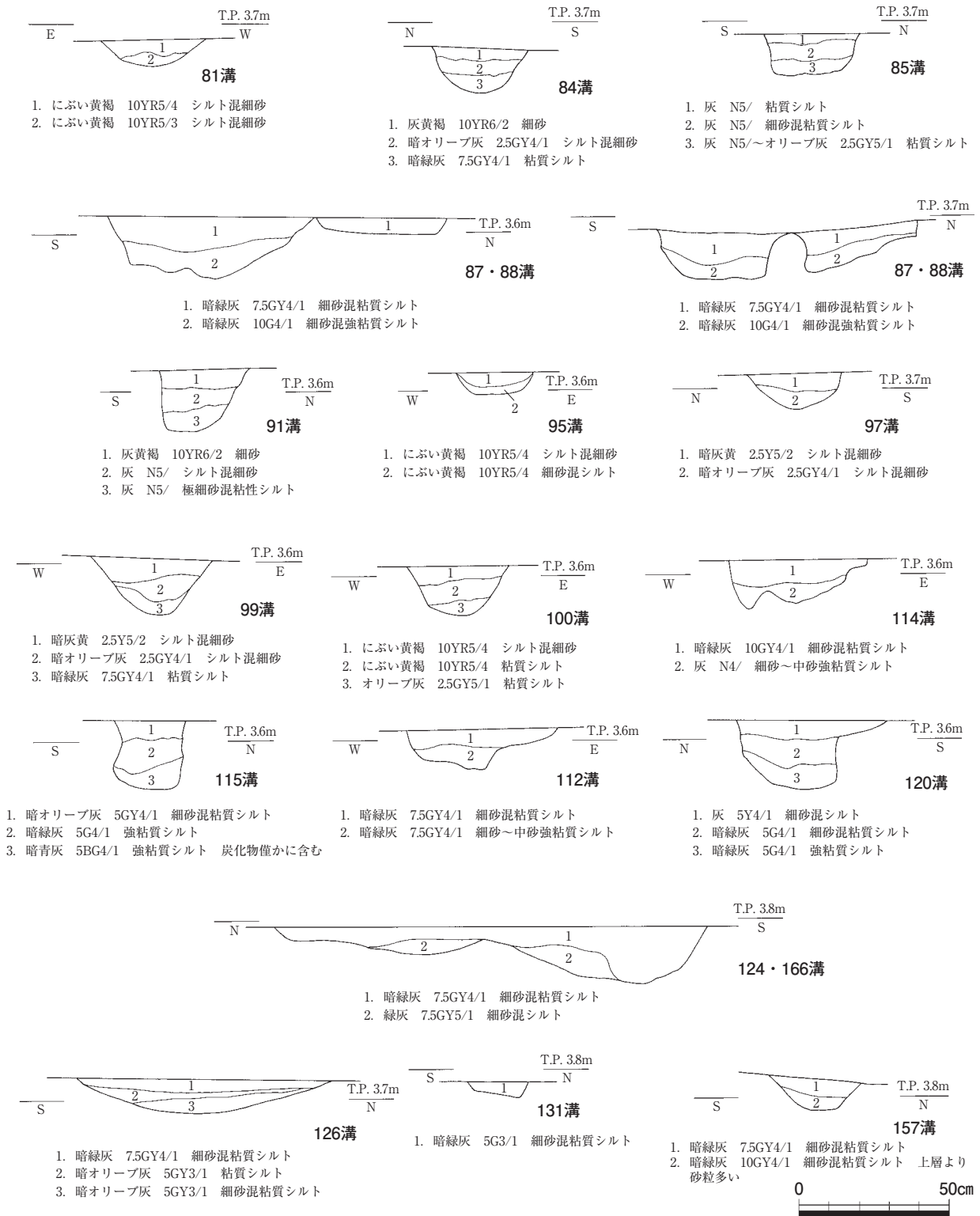


図29 第10面遺構図(2)

また、116土坑は当面で検出された溝の肩部に位置する土坑である。この部分は下層が露出していた部分である。調査段階では、当面に帰属する遺構として判断したが、埋土も周辺のベース土と同様であり明瞭な遺構としては認識できなかった。この部分は、第8層を除去した段階で後述する第11b層の弥生時代後期以前と考えられている氾濫堆積物が露出していたことから、当該の遺構もその帰属層位・時期については注意が必要な状況であった。また、出土遺物は後述するように弥生時代中期後葉の第IV

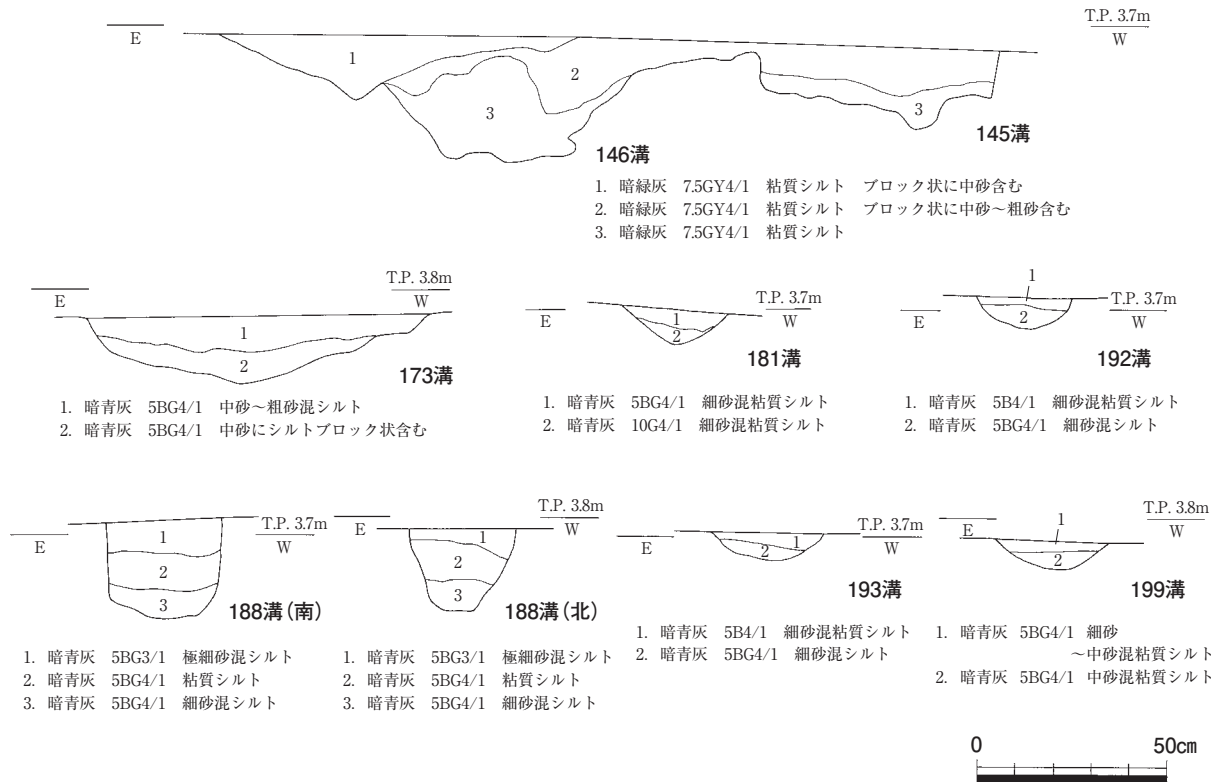


図30 第10面遺構図 (3)

様式の水差形土器の破片と考えられ、これまでの調査における成果との矛盾がみられることから注意を要する。現状では、調査段階の所見の当否を判断できないが、第11b層の氾濫堆積物中に混じった土器で、遺構にとまなうものではない可能性が高い。(廣瀬)

**出土遺物 (図31、図版22)**

第10面の遺構・包含層から出土した遺物には、弥生土器 (1・2・3・9・13)、土師器 (4・5・6・7・11・12)、須恵器 (8)、土玉 (10) がみられる。(1) は116土坑出土の水差形土器の口縁部で、同一個体とみられる把手の一部も出土している。口径はさらに小さくなる可能性がある。河内Ⅳ様式、弥生中期後葉である。(2) は177溝出土の長頸壺の口縁部で、外面に縦方向のヘラミガキを施す。河内Ⅴ様式、弥生後期である。(3) は153溝出土の壺の底部で、外底面に葉脈の圧痕が残る。弥生後期とみられる。(4) は178溝出土の土師器高杯の杯部片で、5世紀前半頃といえる。(5) は111溝出土の土師器高杯の脚部片で、4世紀中頃とみられる。(6・7) は126溝・166溝から出土している。前者は8世紀頃の杯、後者は4世紀後半の布留式甕とみられる。(8) は100溝出土の須恵器杯身で、TK209型式に属し、6世紀末～7世紀初頭の時期が考えられる。(9) は142溝出土の弥生土器甕の口縁部片である。(10) は104溝出土の横径2.45cm、縦径2.4cmのやや横長の球形を呈する土玉である。中心部上面から穿孔しているが、貫通はさせていない。生駒山西麓産の胎土である。

(11) は調査区法面から出土した第10層に包含されていた土師器の甕で、「く」字状口縁と球形の体部をもち、外面はハケ調整の後、口縁部と頸部にヨコナデ、内面口縁部にはハケ調整、体部には左上方へのヘラケズリを施す。体部外面には広範囲の黒斑がみられる。庄内式土器と布留式土器の双方の影響を受けた甕とみられる。生駒山西麓産の胎土をもつ。中河内地域の土器編年では、庄内式期Ⅳ～布留式期Ⅰに相当し、古墳時代前期にあたる。(12) も包含層から出土した土師器甕である。内外面が摩滅して

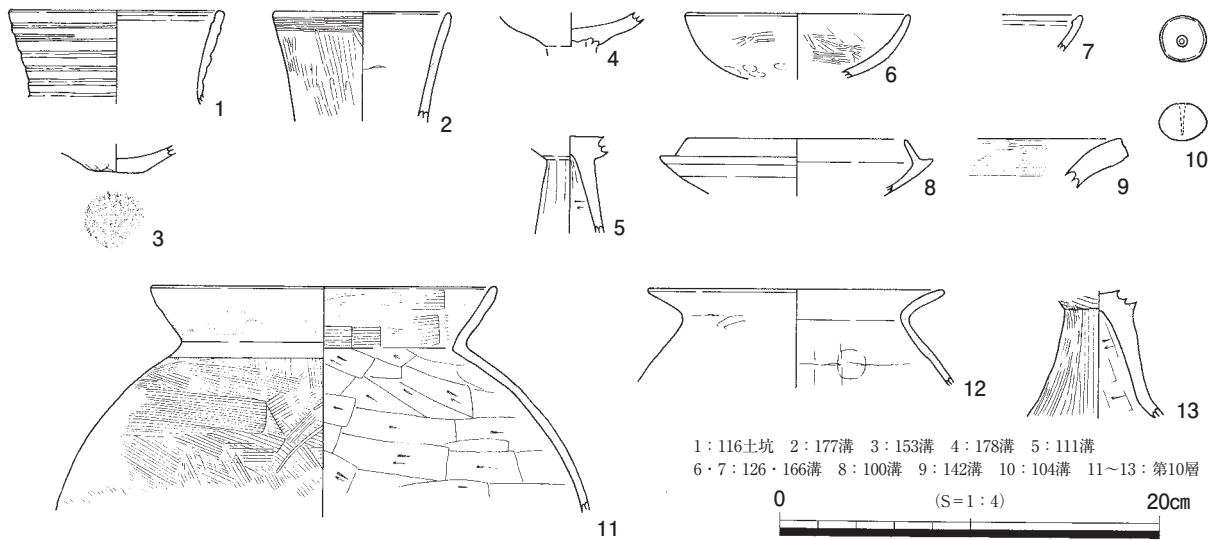


図31 第10面・10層出土遺物

いるため、調整は不明である。口縁部内面、胴部外面にススが付着する。生駒山西麓産の胎土をもつ。(11)と同様に古墳時代前期にあたる可能性が高い。(13)は弥生土器高杯の脚部とみられる。外面はハケ調整、内面は横方向のヘラケズリを施す。

従来の池島地区の調査においては、第10面からは古墳時代初～後期までの遺構が検出されており、第10層からは弥生終末期～6世紀代のものが中心となり出土している。今回の調査区からも調査区法面から、庄内式期から布留式期に移行する時期の甕が出土している。(林)

第10面は、部分的に下層が露出するなど遺存状況の悪い面である。基本的には、東西および南北を指向する遺構が多く、条里地割にともなう遺構である可能性が高い。また、第9面の遺構との関連性については、先述のように一部が重複する可能性を指摘できたこともあり注意を要する。これについては、色調には相違もみられるが第9面検出遺構と土質も類似したものもあることから、これらの溝群を第9層の下面遺構として、帰属を第9層中などに求めることも可能なのではないだろうか。(廣瀬)



2. 弥生時代～縄文時代面の調査

1) 第11面・第11面ベース (第11b面)

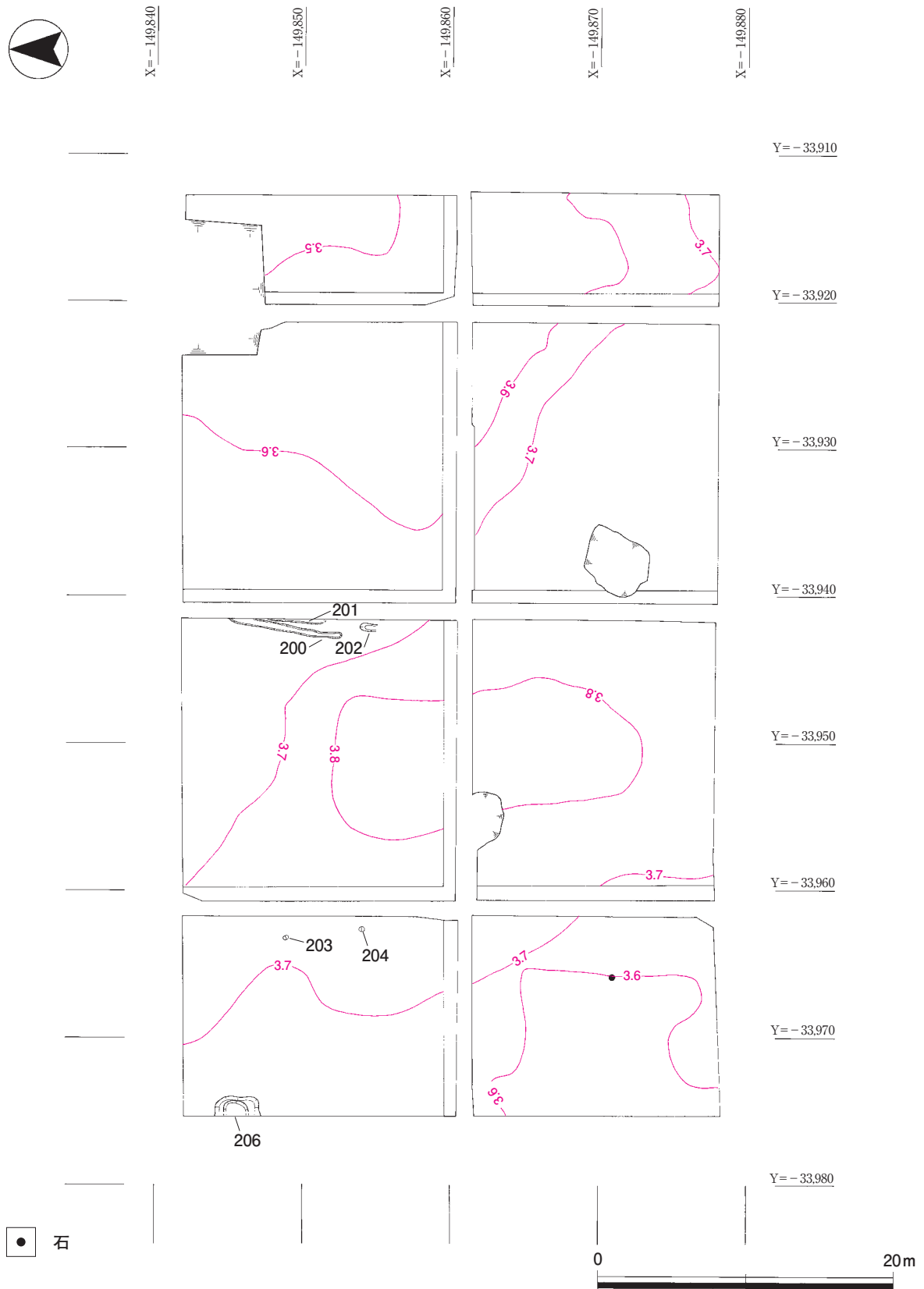


図32 第11面平面図

## 第11面（図32、図版5）

### 遺構面の状況と検出遺構

第11面は、第10層の土壤層を除去した面である。第11層は、灰色のやや中砂の混じるシルトの土質で粘性が強くしまりが良い土壤である。酸化鉄やマンガン斑が多くみられた。現状では調査区東部の2～3e～h地区付近にしか存在しない層で、特に北東端部2e～h・3e～h地区には比較的厚くみられる層である。色調はやや淡白であるが下層の第11b層の状況などから、従来の池島・福万寺遺跡基本層序の第11層に相当する土壤層の可能性が考えられる層である。

第11b層は、堆積の状況や周辺の成果から考えて、弥生時代後期以前の堆積と考えられる氾濫堆積物層である。調査区全域に分厚く堆積し、上部は細砂を主体とし調査区中央部と東端部では粗粒の中砂～極粗砂の部分がみられ、下部にはシルトや植物遺体のラミナが水平に堆積した氾濫堆積物である。

地形は、先述のように同層が調査区東端部にしか遺存していないことから、詳細は不明であるが、状況から考えて調査区中央部から西側が高く、中央部から東側に低くなり、Y=-33,930ライン付近からもう一段低くなり落ち込んで行く。同層の遺存した低い調査区東端部は、北東端部に向かって南東から傾斜した地形である。西端は若干低くなっていくが、東側とは相違して緩やかに低くなっていく。

遺構は、調査区中央部で溝を3条と西側で土坑1基、ピット2基を確認した。ただし、これらが位置する西側部分は、第11層自体が遺存していない部分もみられ、厳密な帰属面については疑問が残る遺構である。

200・201・202溝は、調査区中央部Y=-33,940ラインの西側に位置する南北方向の溝である。いずれもやや軸を北東に振り、201溝と202溝は上部が削平されているため別々の溝として検出しているが、本来は同じ溝と考えられる。上層の溝と類似した規模や方向性を持つことから上層の遺構の可能性が高い。

203ピットは、直径0.25m、深さ0.12mの楕円形のピットである。204ピットは、直径0.30mで、深さ0.13mの円形のピットである。いずれも単独で立地し、詳細は不明である。

206土坑は、西側が調査区西端部に位置するため全形を検出していないが、隅丸方形の大型の土坑である。規模は、現存長で南北3.0m、東西1.3m、最大深0.65mである。埋土は大きく2段階に考えることが可能で、流れ込み等により埋没した段階があり、その後は植物遺体などが混じるやや安定した時期がみられる。埋土は、いずれもシルトを主体とする土壤である。遺物は出土していない。（廣瀬）

## 第11面ベース（第11b面）（図34・35、図版6）

第11b面は、先述の第11層を除去した第11b層の氾濫堆積物層の上面である。当調査区では、第11層が部分的にしか遺存していなかったため、調査区東端部分と西側の一部だけが第11層を除去した部分で、これ以外の部分は第10層を除去して検出している。

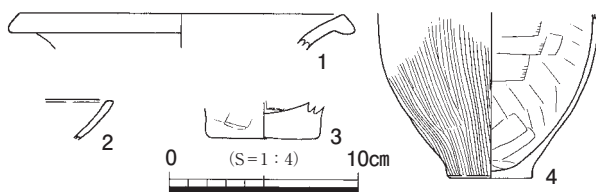


図33 第11b面（208溝）・11b層出土遺物

地形は、第11面同様に調査区中央部から西側が高く、中央部から東側に低くなり、Y=-33,930ライン付近からもう一段低くなり落ち込んでいく。低い調査区東端部は、北東端部に向かって南東から傾斜した地形である。西端は若干低くなっていくが、東側とは相違して緩やかに低くなっていく。

第11b面では、調査区東端部で溝を5条確認した。いずれも調査区東端部の、南西から北東に低くなる地形の等高線に沿って南東から北西に延びている溝である。

208溝は、当面で検出した溝のうち最も幅の広い溝である。X=-149,860ラインの南側で209溝と合

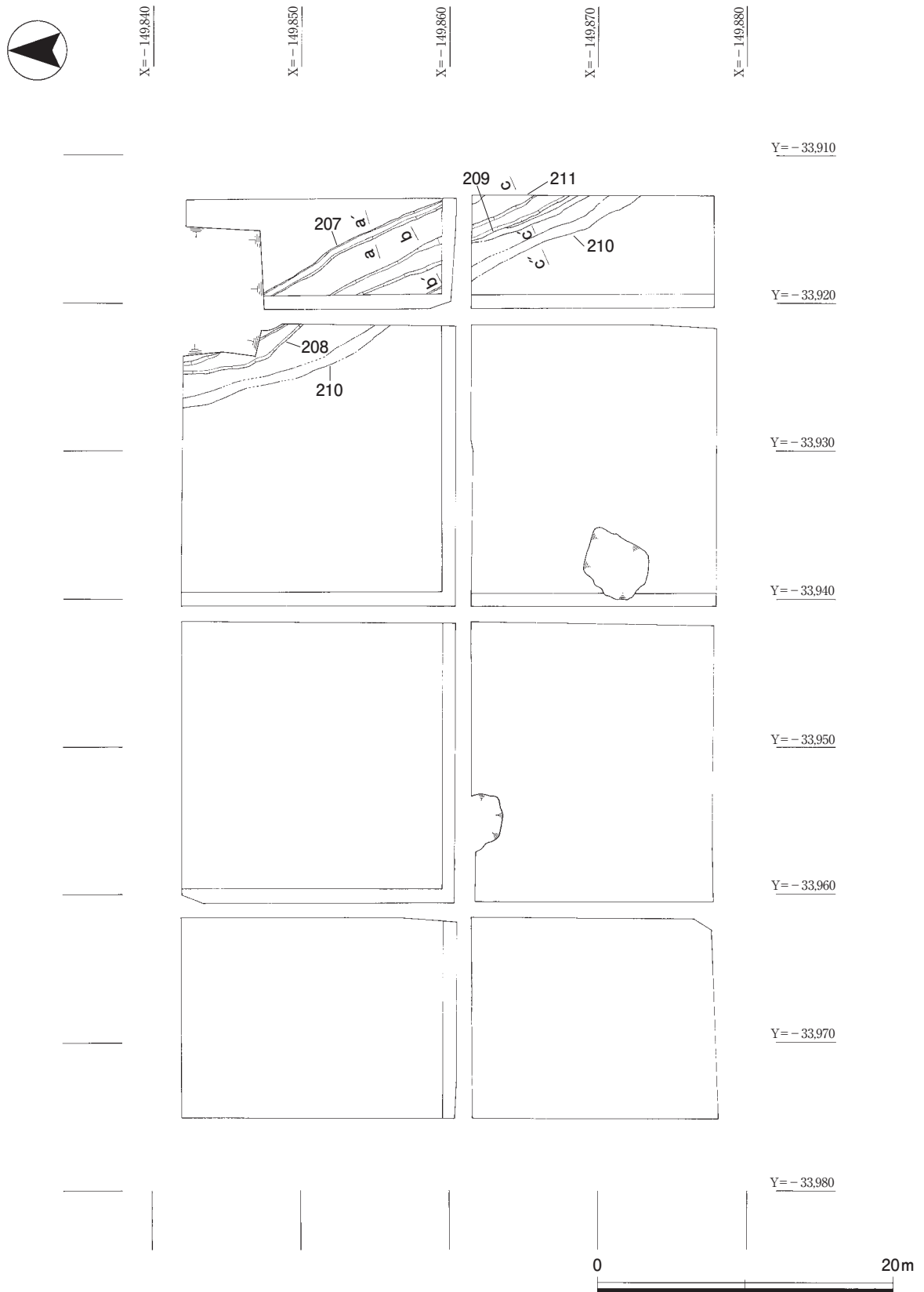
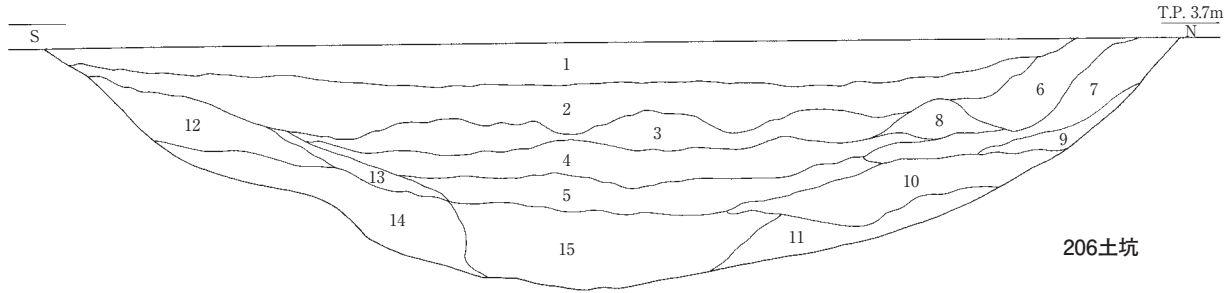


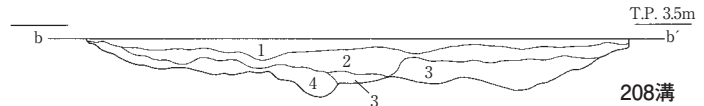
図34 第11b面平面図



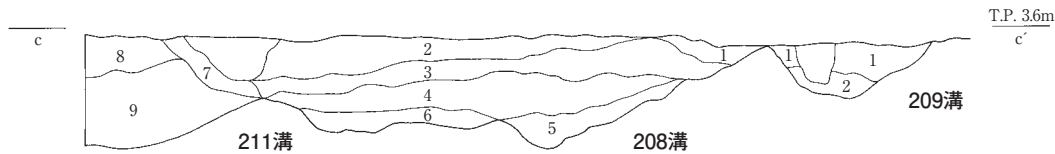
- |   |  |
|---|--|
| 1. 灰 7.5Y4/1 細砂～極粗砂混シルト しまり良い                             | 8. 暗緑灰 5G4/1 細砂～中砂 シルト僅かに含む しまり悪い                |
| 2. 暗緑灰 5G4/1 シルト混細砂～極粗砂 しまり悪い                             | 9. 暗緑灰 5G4/1 細砂混粘質シルト しまり悪い                      |
| 3. 暗緑灰 10G4/1 細砂混粘質シルト しまり良い                              | 10. 暗緑灰 7.5GY4/1 細砂～中砂混強粘質シルト しまり悪い<br>酸化鉄の沈着著しい |
| 4. 暗青灰 5B3/1 粘土 (植物遺体含む) しまり良い部分は<br>暗青灰5B4/1を呈す (斑紋状) 精良 | 11. 暗青灰 5B4/1 細砂混強粘質シルト しまり悪い                    |
| 5. 暗青灰 5B3/1 粘土 しまり良い 精良                                  | 12. 灰 N4/ 細砂多く含む強粘質シルト しまり良い                     |
| 6. 灰 7.5Y4/1 シルト混粗砂～極粗砂 下部にシルト多く含む<br>しまり悪い               | 13. 暗緑灰 5G4/1 細砂～中砂混強粘質シルト しまり良い                 |
| 7. 暗緑灰 5G4/1 シルト混細砂～粗砂 しまり悪い                              | 14. 灰 N4/ 細砂～中砂混 (一部ブロック状に含む)<br>強粘質シルト しまり悪い    |
|   | 15. 暗青灰 5B3/1 粘土 しまり良い 精良                        |



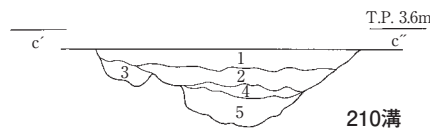
1. 暗灰黄 2.5Y5/2 シルト混粗砂～極粗砂
2. 暗オリーブ灰 5GY3/1 細砂混粘質シルト
3. 暗オリーブ灰 5GY3/1 粘質シルト 極細砂～細砂僅かに含む
4. 暗オリーブ灰 5GY3/1 粘質シルト 極細砂～細砂僅かに含む  
有機物含む



1. オリーブ灰 5GY5/1 細砂混粘質シルト
2. 暗緑灰 5G4/1 シルト混細砂
3. 灰オリーブ 7.5Y5/2 中砂～粗砂 シルトブロック状に含む
4. 暗緑灰 5G4/1 極細砂～細砂混シルト



- |   |                                     |
|---|-------------------------------------|
| 1. オリーブ灰 2.5GY5/1 中砂多く含むシルト 粘性弱い<br>酸化鉄沈着 | 5. 暗緑灰 5G4/1 細砂混粘質シルト 酸化鉄沈着         |
| 2. 灰 N5/ 極細砂～細砂多く含むシルト<br>酸化鉄 マンガン斑       | 6. 灰 N6/ 細砂混粘質シルト 酸化鉄沈着             |
| 3. 灰 10Y5/1 シルト混細砂～中砂 酸化鉄                 | 7. 灰 10Y5/1 極細砂～細砂混粘質シルト 酸化鉄沈着      |
| 4. 灰 10Y5/1 細砂～中砂多く含むシルト<br>下に粗砂～極粗砂含む    | 8. オリーブ灰 2.5GY5/1 細砂～中砂混粘質シルト 酸化鉄沈着 |
|   | 9. 青灰 5BG6/1 細砂～中砂 粘質シルト帯状に含む       |



1. オリーブ黒 7.5Y3/1 極細砂～細砂混粘質シルト
2. 暗緑灰 5G4/1 粘質シルト 部分的に細砂～中砂含む  
有機物に富む
3. 暗青灰 5BG4/1 粘質シルト 木片、炭化物多く含む
4. 暗緑灰 5G4/1 粘質シルト 中砂僅かに含む  
炭化物、植物遺体含む
5. 暗緑灰 5G4/1 粘質シルト 暗緑灰5G3/1の黒色土多く含む



図35 第11b面遺構図

流し、X=-149,850ライン付近で若干西に振り、そこから東に屈曲してわずかに北北西に向かっている。幅は約0.9～1.7m程度、深さは0.15～0.30m程度である。埋土は、シルト～細砂の細粒の土質である。

209溝は、先述のようにX=-149,860ライン付近で208溝と重なる溝で、切り合い関係から先行する溝の可能性もあるが、上部の埋土は208溝と同様な土質である。幅は0.30～0.38m程度で、深さは0.15m程度である。

210溝は、当面検出の溝のうち最も西側に位置する溝である。規模は、幅0.6～1.0m程度で、深さ0.15m程度で、若干蛇行するように延びている。埋土は5層に分層され、最下層の第5層および第4層

は当遺跡で従来第11層と考えられる、やや黒味がかった粘性の強いシルト層が混じる堆積をしていることが注目される。

211溝は、調査区東端部の溝で、東肩を検出していないため正確な規模は不明である。深さは、現存で0.30m程度である。埋土は、いずれも粘性の強いシルト層で、細砂～中砂が含まれている。(廣瀬)

#### 出土遺物 (図33)

第11b面検出遺構・包含層から出土した遺物には、弥生土器(1・3・4)と土師器(2)がある。208溝から出土した(1・2)のうち、(1)は弥生土器広口壺の口縁部で弥生中期末～後期初頭頃、(2)は土師器甕の口縁部で、古墳前期頃とみられる。(3)は弥生前期の甕の底部で、生駒山西麓産の土器である。下層からの混入とみられる。(4)は弥生土器甕である。体部外面にはていねいな縦方向のハケを施す。内外面にススが付着する。河内Ⅳ様式に属し、弥生中期後葉といえる。(林)

2) 第12面・第12面ベース (第12b面)

第12面 (図36、図版6・7)

遺構面の状況と検出遺構

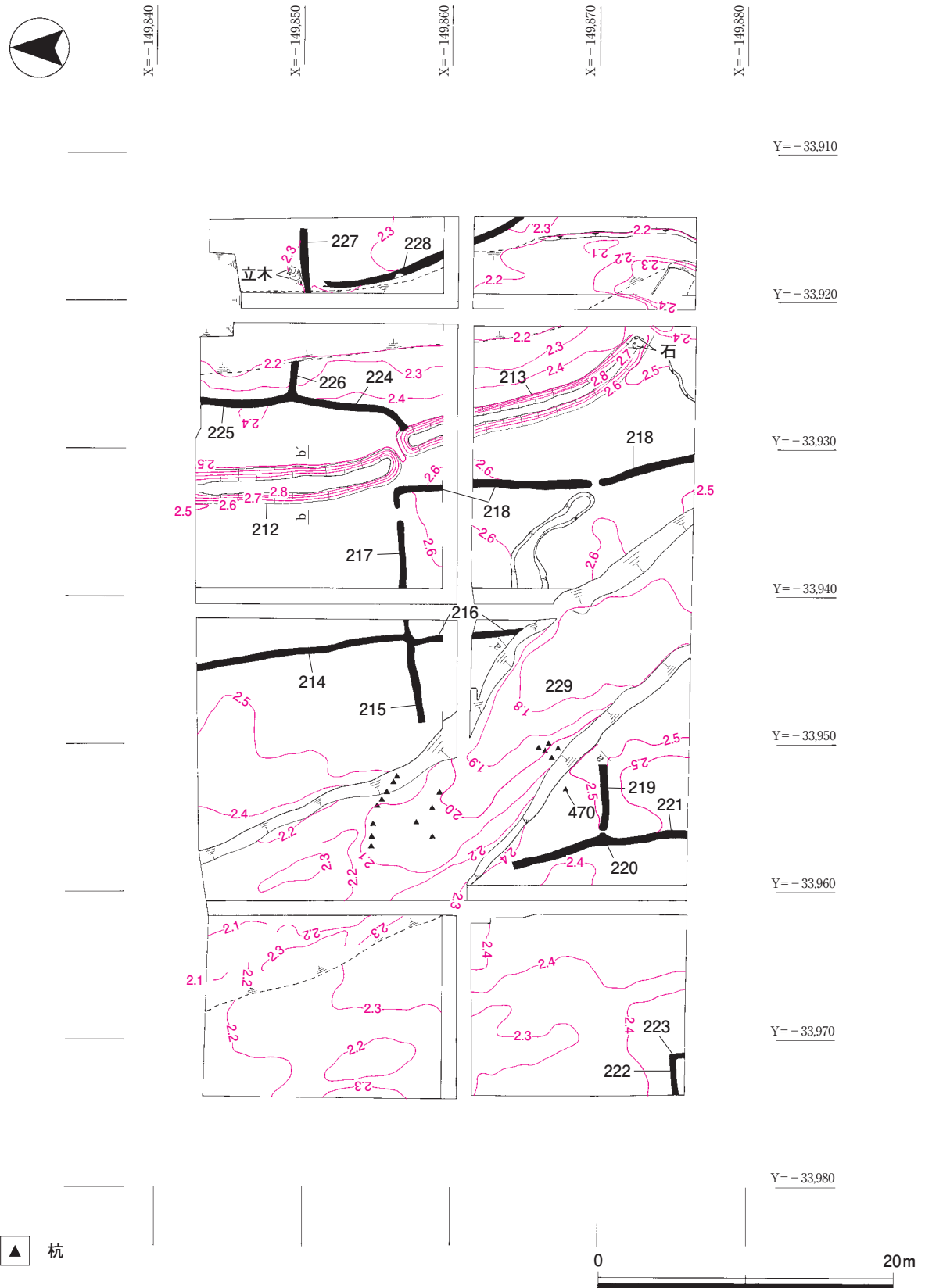


図36 第12面平面図

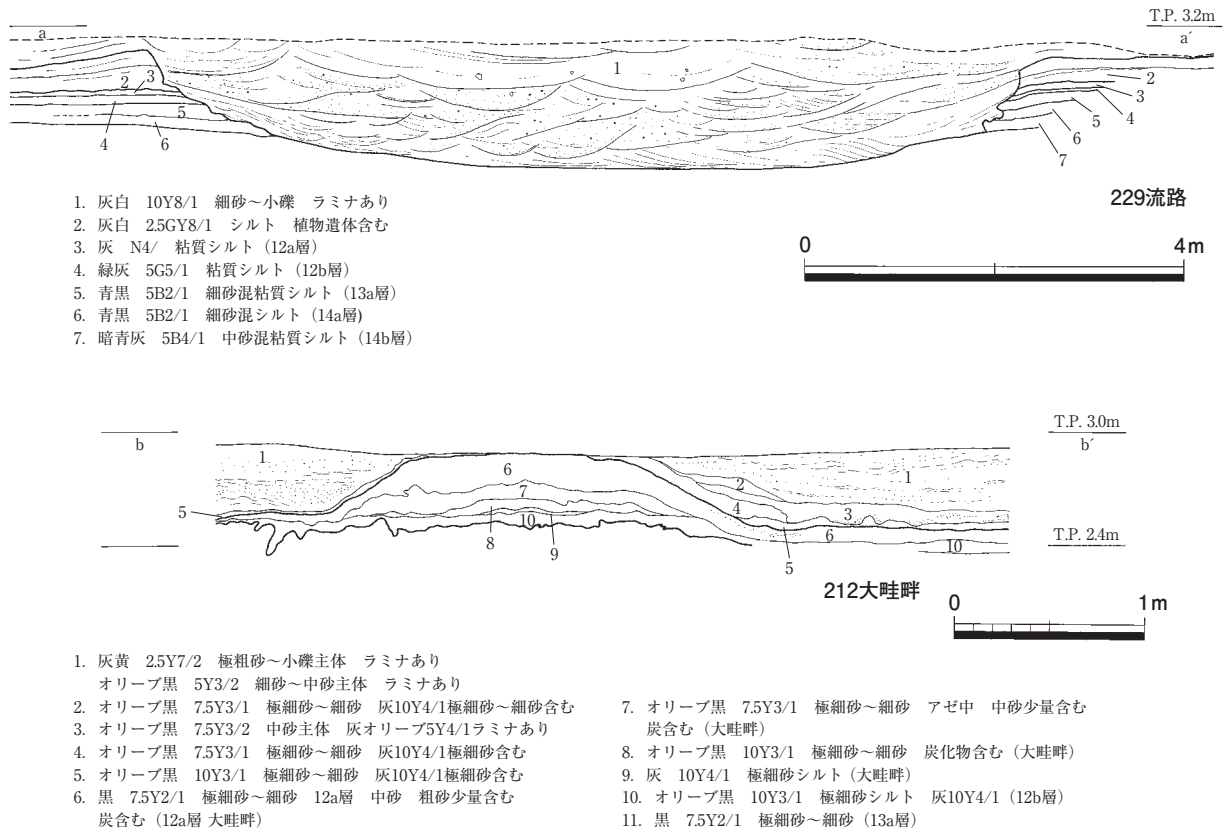


図37 第12面遺構図

第12面は、氾濫堆積物の第11 b層を除去して検出した遺構面である。第12層は、暗灰色～灰色の色調で粘性が強いシルトに極細砂が混じる土層である。従来、当遺跡で「第2 黒色粘土（泥）層」と呼称されている土壌に対応すると考えられる。

第12面の地形は、全体的に南東から北西に向かって標高を減じている。調査区の中央部に東西幅約20 mの自然堤防状の高まりが南北に延びており、南端の中央部付近が最も標高が高い。第12面で検出した大畦畔は、この高まりの東肩部付近に位置する。

第12面では、幹線畦畔である大畦畔と支線畦畔である小畦畔、水口などを検出しており、調査区のほぼ全域が水田として利用されていたと想定される。第12面は第11 b層の下部に堆積するシルト～極細砂の氾濫堆積物によって覆われているため、遺構の残りは良かったが、調査区の南端中央から北西端に向かって、第11 b層中の229流路が幅8.0～10.0mにわたって遺構面を削り込んで流下した痕跡を残す。第12面はこの229流路を挟んで東西に二分されている。調査区の東側 2 h の大畦畔が屈曲する箇所でも、洪水によって大畦畔や水田面が東西幅3.0～6.0mの範囲で削られた箇所があり、中央部 4 g の水田畦畔も洪水によって遺構面が削られている箇所が認められる。

以下、第12面検出遺構について詳述する。

229流路は、第11 b層中の流路で、南東から北西に遺構面を下刻しながら流下している。第12面で検出したのは、229流路が第12面以下の遺構面を削りながら、砂礫を堆積させた範囲である。流路の底面は第14-2 b層にまで達しており、この流路堆積物の下部から弥生土器、石棒、突帯文土器などが出土している（図38・39・93）。断面図（図37上）では第12面を覆うシルト～細粒砂の層を切り込んで、流路堆積物の砂礫層が堆積していることから、第11 b層の堆積活動が一時的に安定した後に、229流路が

流路堆積物を堆積させながら流れたことがわかる。

229流路の断面観察からは、流路堆積物の上部で、中砂や粗砂の堆積物の中に一辺5～8cm大のシルトブロックが認められることがわかった。調査区南法面の断面観察でも、229流路部分の砂層上部に掘り込みやブロック土の堆積が確認（財団法人東大阪市施設利用サービス協会松田順一郎氏による観察と教示による）されたことから、第11b層中のある段階で、229流路付近で人為的な活動があったことがわかる。第11b層中の遺構面の存在については、井上智博氏が福万寺I期地区との層の対比を考える上でも鍵になるものと指摘している（井上2007）。今回の調査では平面的に十分な確認はできなかったが、229流路の堆積物によって形成された自然堤防状の高まり周辺における人為的な活動痕跡（畠作などの痕跡）の検討については今後の調査課題となろう。

なお、229流路は古墳時代以降、近世に至るまで高まりとして残っており、古代・中世の土地利用に大きな影響を与えた。

6f・gの229流路の最下部で杭列を三箇所検出した。これらは、第14-2b層の調査段階で検出したものであるが、第12面、第13面、第14-2面の地形や、検出遺構からこの箇所に杭列をともなう構築物があったとは想定できず、三箇所の杭列は、第11b層中の段階につくられた堰などの施設と考えてよい。これも第11b層の堆積環境、景観復元を考えるとときに重要な遺構と考える。

212・213大畦畔は、水田面からの比高差が最大で0.44mを測り、上面は平坦である。水口部と調査区の東側で第11b層段階に流路によって削られているほかは、遺存状況は良好であった。この大畦畔のつくられた場所は、第14-2b層が堆積することによって形成された自然堤防の東の肩部にあたる。この箇所には第12面段階でも高まりと谷地形が残っており、土地利用に制約を与えていたことがわかる。213大畦畔はこの微地形に沿って調査区南側で屈曲する。この屈曲する箇所に第11b層の洪水砂が流入し大畦畔と水田面が削られている。なお、断定はできないが、高さ0.4mもの粘質シルトによって築かれた大畦畔が完全に削られた状況は考えにくいことから、ここに存在した水口に洪水砂が流れ込み、水口両側の大畦畔を削りながら北に流れたと考えるほうが蓋然性は高い。

212大畦畔の断面図（図37下）からは、大畦畔が傾斜変換点につられていることがわかる。また、第13層（断面図の10）の直上のシルトや極細砂～細砂の第12b層が堆積したのち、土壌化が弱い段階にその上に盛土を行って構築していることがわかる。

213大畦畔内の置石は213大畦畔が屈曲する3hで検出した。断面観察のトレンチの西側に位置し、壁面の崩落によって大畦畔から検出されたものであるが、周辺の土層の観察からは掘方は確認できなかった。旧地表の上に石を置き、その上に盛土を行って畦畔を築いたものと考えられる。用いられた石は、長軸49cm、短軸24cmと、長軸51cm、短軸27cmの長方体の2点で、いずれも花崗岩である。後述するように、第14-2面において、213大畦畔が位置する高まりの上から配石、土壙墓、木棺墓が検出されており、213大畦畔内の置石はそれらの遺構に由来するものであった可能性が高い。これらは、第12面の水田の造成にともなって出土した石を大畦畔内に置いたものと考えられるが、大畦畔が屈曲する箇所に位置することから、水田造成の目印になった可能性も推測される。

#### 水田と畦畔について

第12面の水田は、大畦畔の東側で4枚、西側で8枚以上を確認した。畦畔は水田面からの高さが0.1～0.5mほどである。検出段階では、炭化物を挟在するシルト層の第11b層と砂礫を含む第12面の畦畔が明瞭に区別できる状況であった。当調査区では水路を検出していないが、地形から判断して、南東か



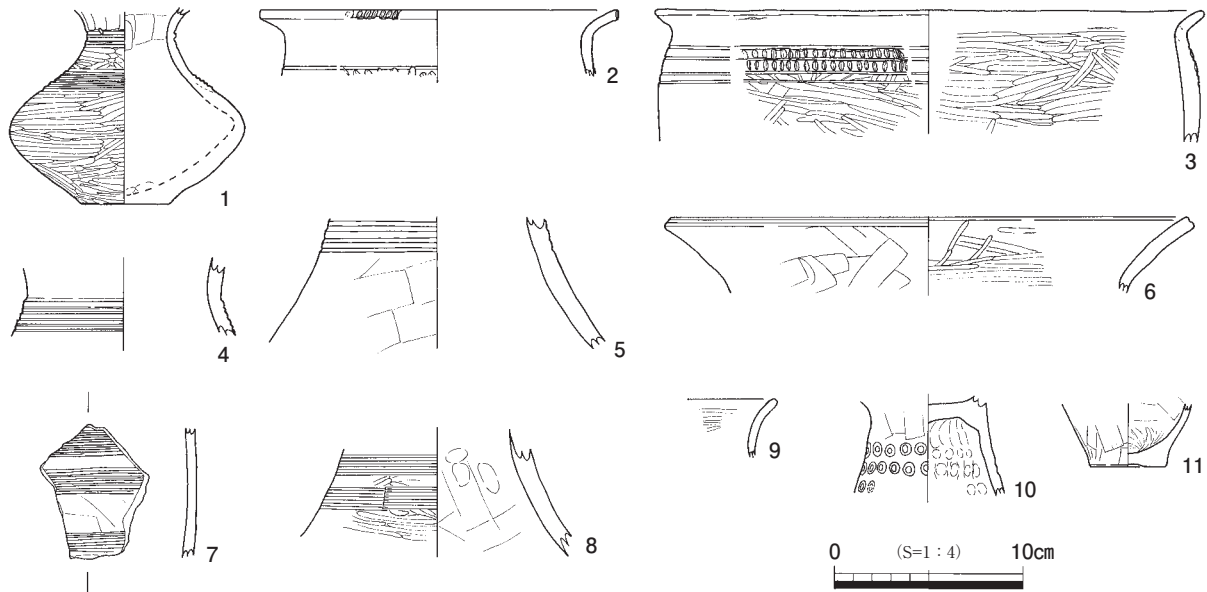


図38 第12面 (229流路) 出土遺物 (1)

ら北西に向かって配水していたと考えられ、畦畔には水口も確認できた。

調査区の東側は等高線が詰まった谷地形となっており、水田はこれに対応するために南北に細長い区画となっている。ここでも南から北に配水していたと考えられるが、北端の水田は大畦畔の水口を経由して配水している。大畦畔の西側では218畦畔と217畦畔の間に水口を検出した。調査区の西側については、229流路による削平の影響や、地震による変形構造が顕著で、遺構面が安定して検出できなかったことから、畦畔を検出しえたのは南西端部に限られている。しかしながら、地形的にはほぼ平坦であり、水田域であった可能性も考えて良い。隣接地の調査とあわせて検討が必要である。(内田)

#### 出土遺物 (図38~41、図版23・24)

第12面検出の遺構としては229流路がある。弥生時代 (図38) ~ 縄文時代 (図39) にかけての土器と石器が大量に出土した。従来の調査において、第12面の遺構や第12層は近畿第Ⅲ様式および第Ⅳ様式の遺物を含む弥生中期と認識されている。今回検出した229流路は第14-2b層を削り込んで流れていたために、縄文晩期~弥生前期の遺物を包含したものと考えられる。

弥生土器 (図38-1~11) のうち、(1・4・5・6) は広口壺である。(1) は胴部が大きく張り出す小型の広口壺である。口頸部には3条のヘラ描沈線を巡らす。胴部上半部には粘土帯を貼り付け、その上下を削り取り、上面に4条のヘラ描沈線を施す。外面は横方向のヘラミガキでていねいに調整する。河内I-2様式といえる。(4) の復元径はやや大きくなる可能性も残る。口頸部の上方を削って削出突帯をつくり、突帯上に5条のヘラ描沈線を施す。同じく河内I-2様式にあたる。(5) も口頸部に4条以上のヘラ描沈線を施す。細長い頸部をもつ河内I-3様式とみられる。(6) は大型の太頸の広口壺といえる。これらの広口壺は弥生前期中葉の時期と考えられる。

(2・3) は短く外反する口縁をもつ甕である。(2) は口縁端部に刻みを施し、頸部に沈線と刺突文を巡らせる。(3) は内外面に横・斜め方向を中心とするヘラミガキ調整を行う。口縁端部は無文で、頸部には4条のヘラ描沈線文を施し、上2段に刺突文を巡らす。(2・3) とともに生駒山西麓産の胎土で、河内I-2・3様式、弥生前期中葉である。(9) は弥生前期の鉢の口縁部とみられる。内外面に

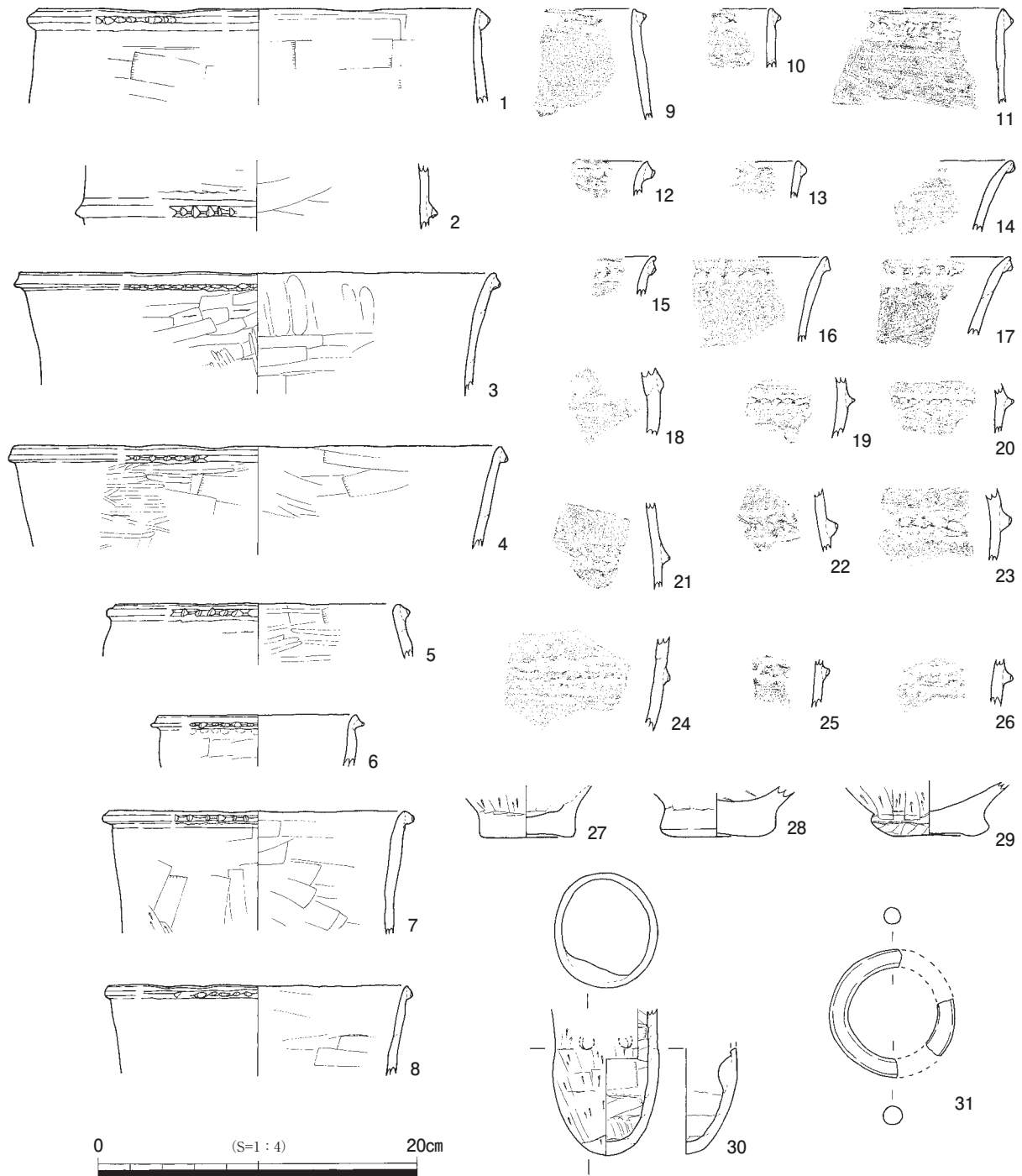


図39 第12面 (229流路) 出土遺物 (2)

横方向のヘラミガキ調整が残る。

(7・8)は長頸壺で、(7)は11~12本単位、(8)は8本単位の櫛描直線文を施す。前者は河内Ⅱ~Ⅲ様式、後者はⅡ様式とみられる。生駒山西麓産の胎土で、弥生中期前~中葉の土器である。(10)は台付鉢の台部で、外面から竹管を押し付け施文する河内Ⅳ様式、弥生中期後葉に属するものである。(11)は内面をヘラでナデ、外面を板ナデで調整する弥生土器甕の底部である。

突帯文土器の中心器種である深鉢(図39-1~29)のうち、(1~26)は口縁部と肩部片である。長原式に属する突帯文土器の器面の調整については、口縁部と肩部に2条の突帯を貼り付ける場合、頸部

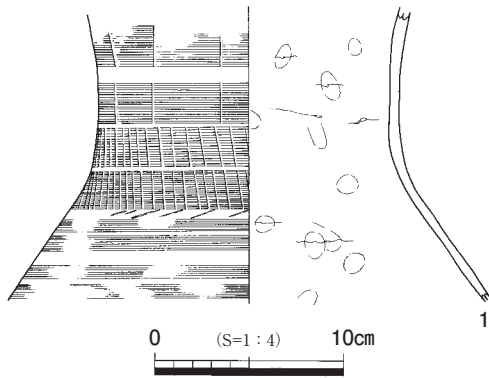


図40 第12面 (213大哇畔) 出土遺物

内外面は横方向の板ナデ、胴部外面は肩部に近い上部は横方向のヘラケズリ、中央部から下部にかけては底部から胴部へ向かう縦方向のヘラケズリを施すのを基本とする。そのため調整に関する記述は省略し、調整が異なる場合など必要に応じて記述する。胎土についても、大部分が生駒山西麓産およびその周辺地域とみられる胎土であるため基本的には省略する。また、突帯刻目の形状について使用している大D字形・小D字形・小O字形・小V字形などの用語については第6章の総括を参照されたい。

(1～4) は口縁部と肩部に各1条の突帯をもつ器形とみられる。(1) は内傾する頸部をもち、口縁端部に沿って貼り付けた突帯断面は三角形で、小D字形の刻目をもつ。(2) は肩部で屈曲せず、頸部が直立して口縁部にいたる。肩部の突帯断面は下向きの三角形で、大D字形の刻目をもつ。(3・4) は胴部からまっすぐに外上方に開いて口縁部にいたる。口縁部の突帯断面は下向きの三角形で、(3) は小O字形の、(4) は小D字形の刻目をもつ。外面は横方向の板ナデの上から、部分的に(3) は縦・斜め方向の、(4) は横方向のヘラミガキを施している。内面は、(3) は頸部上方を指ナデで、下方は横方向の板ナデで、(4) は横方向の板ナデで調整している。

(5～8) は口縁部に1条の突帯をもつ器形とみられる。(5) は底部から緩やかな球形をなして口縁部にいたるといえる。突帯は断面三角形で、小D字形の刻目を施す。内面は横方向の板ナデののち、横方向のヘラミガキを施す。(6) は底部から緩やかに半球形をなして口縁部にいたる器形とみられる。突帯断面は貼り付け時の突帯上・下面からのナデにより、外方に突出した三角形となっている。小D字形の刻目を施す。(7・8) は胴部からまっすぐに外上方に開き、口縁部にいたるといえる。突帯断面はほぼ三角形で、(7) は小V字形、(8) は小O字形の刻目を入れる。(7) の外面は縦方向の板ナデののち、一部、ヘラケズリを施している。

(9～17) の口縁部、(18～26) の肩部は小片のため、口径および胴径は不明である。このうち(9・19・21～23) は肩部で緩やかに屈曲して、頸部が内湾もしくは内傾する器形といえる。(19・21) の突帯断面は上から強くナデたため、前者は上部がくぼみ、後者は下向きの三角形を呈する。刻目は前者が小O字形、後者が小D字形を呈する。(22・23) は断面三角形の突帯で、一部欠損しているが、刻目は小D字形とみられる。

(10・11) は頸部が直立する器形である。口縁部は突帯を貼り付ける際の調整のために、先端が薄くなっている。(11) は断面三角形の突帯に小V字形の刻目を入れている。

(14・16・17・24～26) は底部からまっすぐに開き、口縁部にいたる器形とみられる。(16) は突帯下端を口縁部に押さえ込みながら貼り付けている。刻目はない。外面は横方向の板ナデののち、一部、横方向のヘラミガキがみられる。(18) は器壁が厚く、屈曲する肩部に突帯を貼り付け、内傾する粘土接合痕が内面に残る。突帯幅は1.3cmと幅広であり、突帯頂部が摩滅しているため刻目の形状が不明だが、長原式での古い様相を示すといえる。

(27～29) は突帯文土器深鉢の底部である。(29) が突帯文土器深鉢に通有のもので、底部側面の外方に張り出す器形をなす。(28) は底面の器壁が厚く、丸味を帯びる。(27) はより弥生土器の影響を受け、

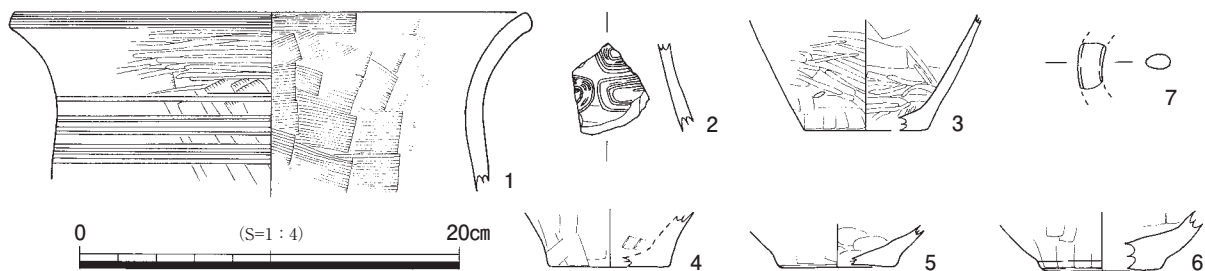


図41 第12層・12b層出土遺物

器形は甕の底部に近いものである。これらの底部外面の調整は胴部に向かい強いヘラケズリを施す。生駒山西麓産の胎土を用いている。

(30) は縄文土器の小型の深鉢である。尖底気味の底部から立ち上がり、胴部はほぼまっすぐ上方にのび、口縁部分は欠損している。残存高9.2cm、最大径6.7cmを測る。胴部の上半部に円孔2点が並ぶ。粘土紐の接合は内傾する。内面の円孔直下には丸く延ばした粘土を貼り付けており、何らかの補強を意図したものとみられる。器面は外面に上方向へのヘラケズリ、内面に横方向の板ナデで調整する。生駒山西麓産の胎土である。(31) は外径8.0cm、太さ1.3cmを測る輪状土製品である。外面をヘラでナデて器面を整える。生駒山西麓産の胎土である。輪状土製品は、東大阪市の久宝寺遺跡北地区、鬼塚遺跡、大阪市の長原遺跡など、縄文晩期後半～弥生前期の突帯文土器の包含層から出土している。端部に円孔を穿つなど、腕輪として用いたと推定される例もあるが、すべてに同一の用途は考えにくい。今回出土のものは径も小さく、何らかの祭祀的な道具であった可能性がある。

また、生駒山西麓産の胎土の径約10.5cm、高さ約7.5cmのいびつな球形のかたまりが出土している(図版24)。上面にはいくつかの孔があり、底面には籠目の圧痕と焼けた痕跡が残る。土器製作用の土とも考えられる。

同じく第12面の遺構である213大畦畔からは弥生土器の長頸壺(図40-1)が出土している。外面頸部には26本単位の櫛描簾状文、その上方には同じく26本単位の櫛描直線文、肩部には8～9本単位の細かい櫛描直線文を施す。生駒山西麓産の胎土をもつ河内Ⅳ様式前半、弥生中期後半の土器である。弥生中期の水田にとまなう畦畔内出土遺物である。

第12層および第12b層から出土した遺物(図41)には、弥生土器(1～4)、縄文土器(5・6)、輪状土製品(7)、石器がある。(1)は大型の太頸広口壺で、外面は口縁部に横方向のヘラミガキ、頸部から体部にかけて斜め方向の板ナデ、内面は横方向のハケで調整する。口縁端面と頸部には櫛描直線文を施す。河内Ⅱ様式、弥生中期前半頃の土器である。(2)は流水文を施した壺の肩部で、河内Ⅳ様式、弥生中期後葉といえる。(3・4)は弥生中期の甕の底部である。(4)は赤白灰色を呈する粗い胎土で、生駒山西麓産以外の胎土といえる。(5・6)は生駒山西麓産の胎土をもつ突帯文土器深鉢の底部とみられる。(7)は輪状土製品と考えられるが、229流路出土のものに比べ、断面がやや扁平である。同じく生駒山西麓産の胎土を用いている。

従来、池島Ⅰ期地区では第12面・12層は、中期中葉の遺構面として認識されてきた。具体的には、出土遺物が第Ⅲ様式～第Ⅳ様式前半頃の遺物であることを特徴とする。当調査区の状況もほぼ同様な状況といえよう。(林)

第12面ベース (第12b面) (図42~44、図版8)

遺構面の状況と検出遺構

第12b面は、土壌層の第12a層を除去して検出した遺構面である。第12面段階での高まりである調査

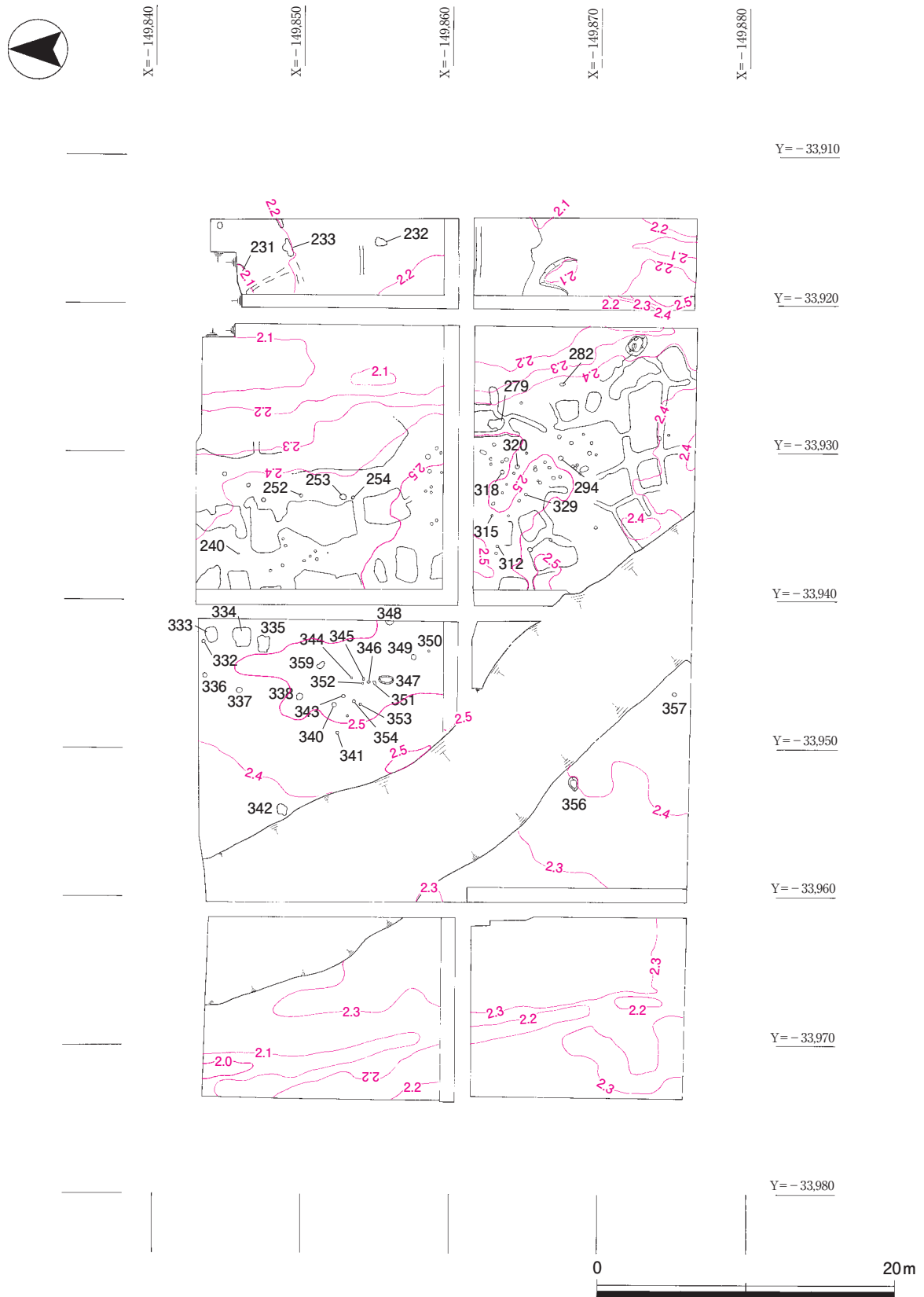


図42 第12b面平面図

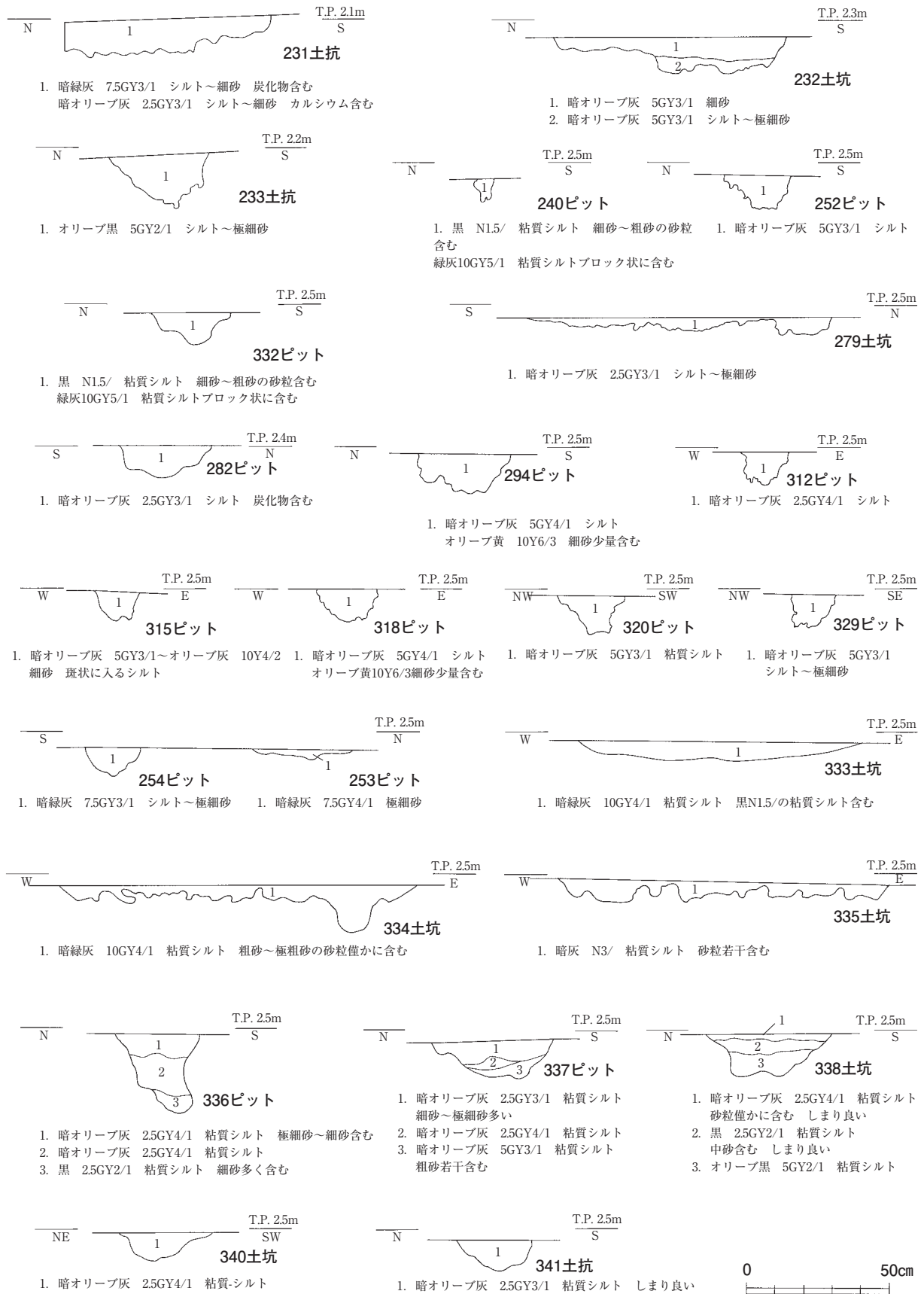


図43 第12b面遺構図 (1)

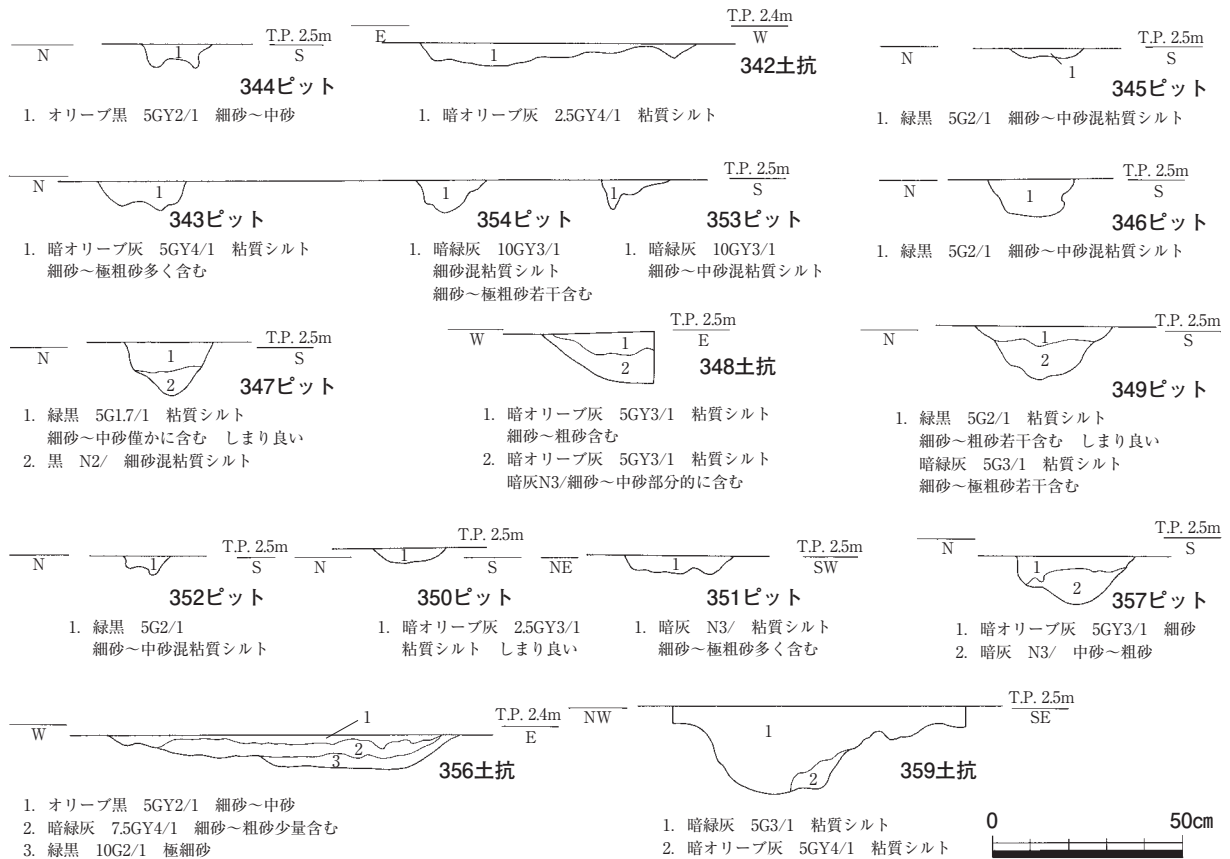


図44 第12b面遺構図 (2)

区中央部では、第12b層を形成する氾濫堆積物の供給が少ないため、第12a層と第13a層が接している箇所もあった。図42に示した第12b面の遺構には、調査段階では第13面検出の遺構と考えていたが、のちに遺構内の埋土の検討によって当該面に帰属すると判断したものも多い。特に、中央部の自然堤防状の高まり上で検出した土坑、ピットについては、遺構内埋土が第12b層由来のシルトや、第12a層であることから、第12層下面検出遺構と判断した。また、調査区の東側では、第12a層と第13a層が間層を挟まずに接している箇所が多く、第13層も明瞭に確認できない状態であった。これについては、第12面の耕作時に第13層ごと攪拌されている可能性が高く、これらの遺構についても帰属面を検討した。

調査区の北東部2eでは、帯状に土色の異なる範囲を破線で示している。これらは、第12面の227畦畔、228畦畔に隣接しており、畦畔の構築にともなう掘削によって、水田の土壌が深く入り込んだ状況であると判断できる。なお、これとは別に231土坑や232土坑は第12面の畦畔と方向が異なっており、232土坑は位置的に水田の中に位置していることから、第12面にともなうものかどうか判断が難しい。第13面にともなう遺構である可能性も考えられる。

調査区中央部では、南北に地形的な高まりが形成されており、第12面と第13面の間層が薄い。このため、第12a層を除去した段階で第13面が検出されたが、この段階で検出した遺構は、第13a層が小区画水田の畦畔のように網目状に広がり、その間に第12a・b層が堆積する状況であった。また、これと重複して径0.1～0.4mのピットが多数検出されている。これらの遺構は、上層からの耕作、踏み込みによって攪拌された痕跡であると判断でき、平面的な分布は第12面段階の耕作のあり方ある程度反映しているとみることができる。これらを第12面の水田畦畔と重ねると、213大畦畔の東側には小区画水田状の遺構が存在しないことが注目される。また、支線畦畔の位置とも重ならず、大畦畔の描く曲線に沿う

ように、連続して分布することにも注目したい。これらの状況を積極的に評価するならば、第12面として検出した水田とは別の水田区画が前段階に存在した可能性も考えられる。なお、調査区の南側では、遺構の並びが不定方向となっている。畦畔状の痕跡を重視するあまり、踏み込みや耕作による攪拌範囲の把握が不十分であった可能性があり、今後、隣接する調査区の成果を勘案した検討が必要である。

次に、土坑、ピットについてであるが、ピットは自然堤防状の高まりを中心に、規則性を持たずに分布していることがわかる。ピットの断面図を提示したが、断面形状が斜めになっていたり、埋土が比較的均質なシルトであったりするもの、第12 a 層や第12 b 層が入り込んだものが認められる。前者は、平面や断面の形状や、配置に規則性がみられないことから、生痕として判断できる。また、後者のうち、第12 a 面の畦畔と重ならないものについては、踏み込みであると判断できる。(内田)



3) 第13面 (図45・46、図版8)

遺構面の状況と検出遺構

第12層と第12b層を除去して検出した遺構面である。地形は全体的に南東から北西へと低くなるが、

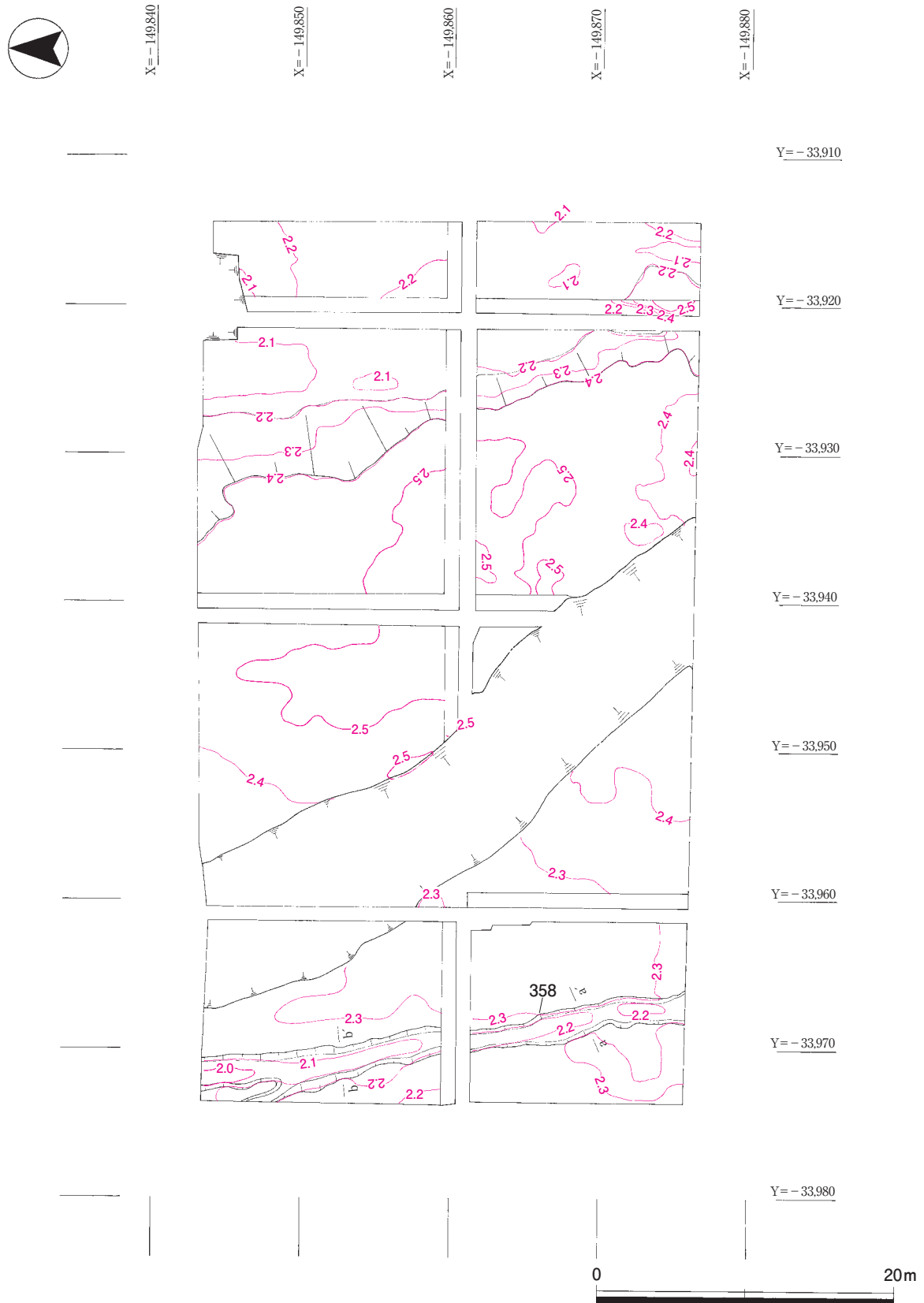


図45 第13面平面図

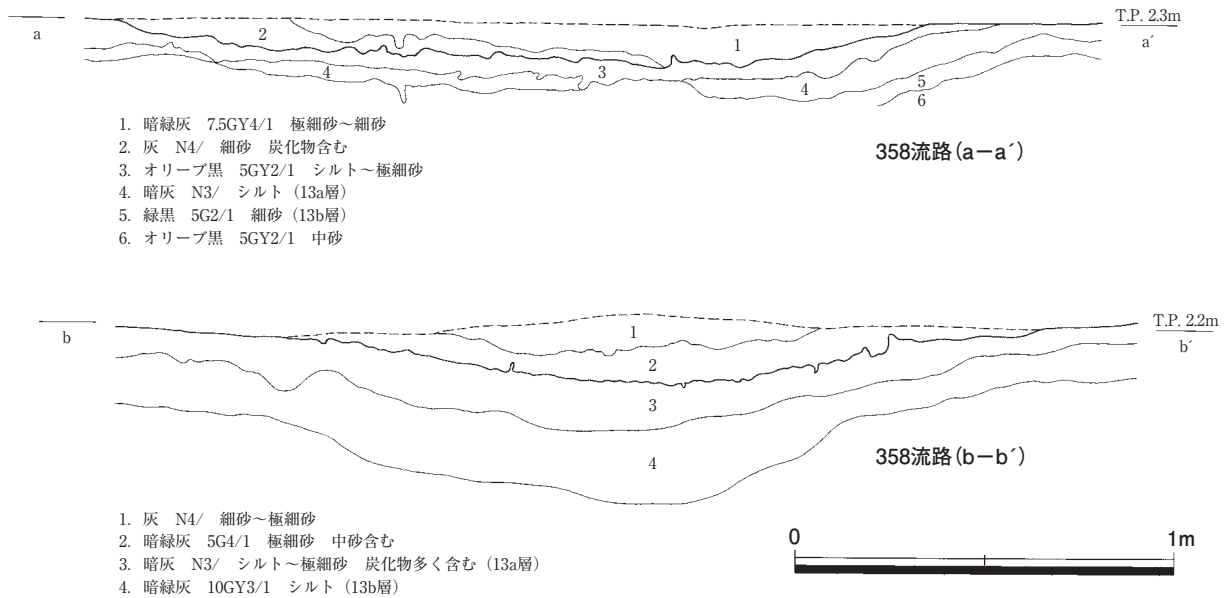


図46 第13面遺構図

調査区の中央部は、自然堤防状の高まりが南北にのびる。これは第14 b 層段階の地形を踏襲したものである。調査区の東側では、第12層と第13層が明瞭に分層できない状況であるが、先述の図42の 2 e の畦畔状の痕跡は第12面の支線畦畔とは重ならない方向のものが検出されており、第13面に帰属する可能性がある。しかし、先述のように層境の認識が難しいこともあり詳細は不明である。

調査区中央部の第13面の状況は、第12 b 層の層厚が薄いことに加え、第12 b 層下面遺構の存在によって錯綜した状況を呈しており、第13面に帰属する遺構を抽出することは難しい。

調査区の西側は、東の自然堤防状の高まりから緩やかに標高を減じ、全体的に平坦な地形となっており流路を検出した。

358流路は幅1.3m～3.0m、深さ0.1～0.15mである。調査区の北西隅 8 e で北と北西方向に流路が分岐している。流路の底面は、南から北に向かって標高が低くなっている。流路の断面図からは、下層の第14 - 2 層が溝状の地形そのままにたわんでおり、第13面にいたるまで、地形を踏襲していることがわかる。また、流路内埋土には、植物遺体などの炭化物を含むシルト質の暗色帯が第13層と連続する状況にあり（図46）、流路の両側にシャープな掘り込みの痕跡をもたない。これらのことから、358流路は自然地形とみて良い。（内田）

#### 出土遺物（図47・48、図版25・26）

第13面の遺構としては358流路がある。弥生土器（図47-1～18）および石器（19）が出土している。（1～5）は弥生土器の壺である。（1）は大きく外反する口縁をもつ広口壺で、口縁端部には面をつくり上下端に刻目を入れる。口縁部内外面は横方向のヘラミガキで調整している。河内Ⅱ様式もしくはⅠ-4 様式に遡る可能性がある。弥生前期末～中期前葉といえる。（2・3）は広口壺の口縁部片で内外面にススが付着する。弥生中期前葉に属する。（4）は壺の口縁部とみられる。（5）は外面に櫛描直線文を施す弥生中期の壺とみられる。

（6）は甕蓋で、内外面ともにていねいなヘラミガキで調整する。内面端部付近にはススが厚く付着する。生駒山西麓産の胎土をもつ。（7～9）は甕である。（7・8）は短く外反する口縁部に、張りをもたない体部が続く。横方向の板ナデで調整する。弥生中期前葉とみられる。（9）は口縁端部に刻目

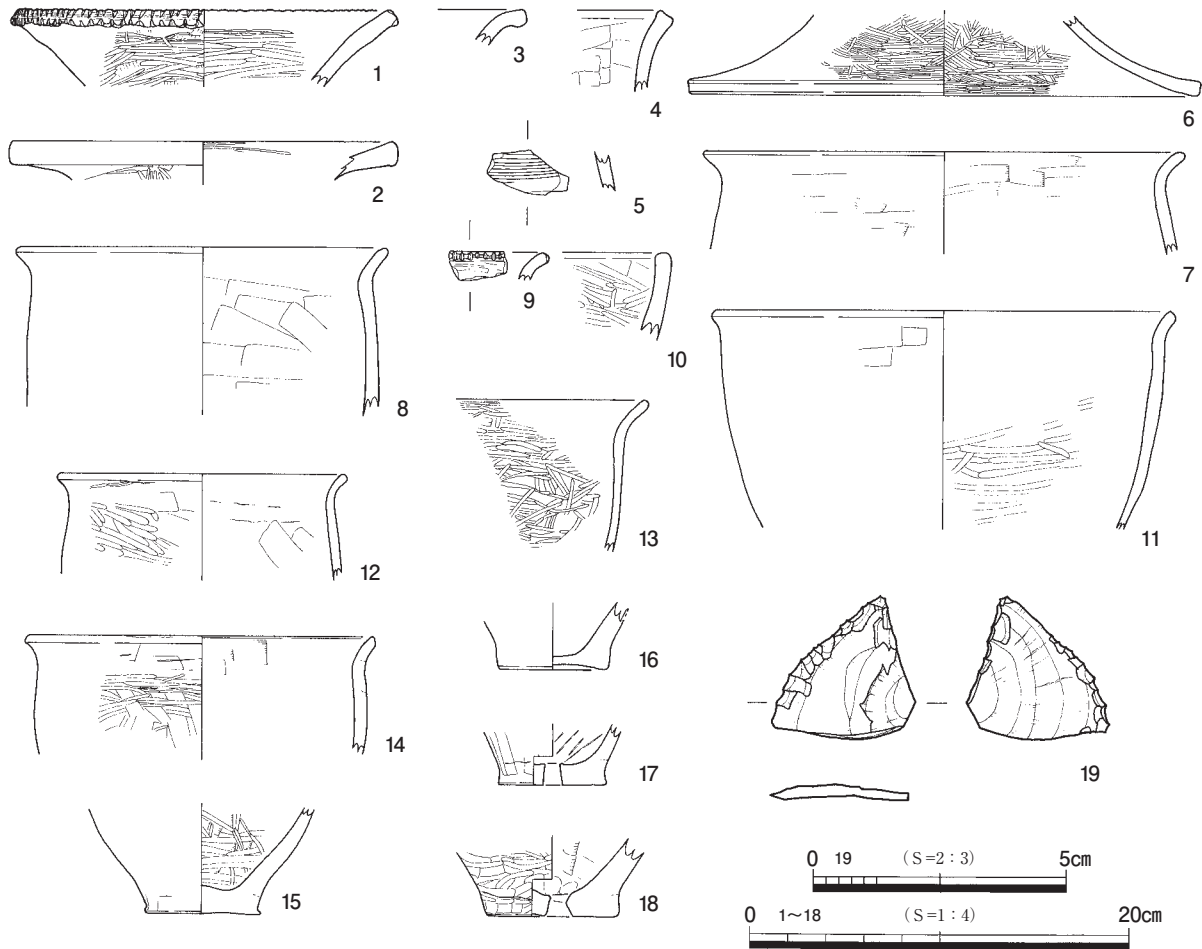


図47 第13面 (358流路) 出土遺物

を施す弥生中期前葉のものといえる。(10) は内湾する口縁をもつ鉢で、内外面はヘラミガキで調整する。弥生前期後半～中期前葉頃とみられる。(11～14) は外反する口縁をもつ、弥生中期前葉の甕である。外面は一部板ナデののち、横・斜め方向のヘラミガキで調整する。(13) は内外面にていねいなヘラミガキを施し、表面にはススが付着する。

(15～18) は弥生中期前葉の甕の底部である。(15) は内面に板ナデののちヘラミガキ、(17) は内外面に縦方向の板ナデを施す。(18) は内面を粗い板ナデ、外面を横方向のヘラミガキで調整する。(17) は底部外面から、(18) は底部内・外面の双方から穿孔している。(15～18) は生駒山西麓産および当遺跡周辺の胎土と考えられる。

(19) はサヌカイト製の打製石鏃の未成品である。長さ2.9cm、幅2.7cm、厚さ0.3cm、重さ2.1gを測る。縄文晩期～弥生前期のものとみられる。

第13面・第13層・第13b面・第13b層から出土した遺物(図48)には、弥生土器(1～9・23・24)、縄文土器(10～22)、石器がある。(1・2) は大きく外反する口縁をもつ広口壺である。(1) は口縁端面に波状文を施し、内外面は横方向のヘラミガキで調整する。(2) は口縁端面に6本を単位とする横方向の櫛描直線文を入れたのち、縦方向の櫛描直線文を加え、上面に黑色物質を塗布している。内外面は横方向の板ナデで調整する。ともに河内Ⅱ様式前半、弥生中期前葉の土器である。(3) は緩やかに外反する口縁をもつ広口壺で、頸部に1条の貼付突帯をもつ。突帯の上面には布巻棒圧痕を施

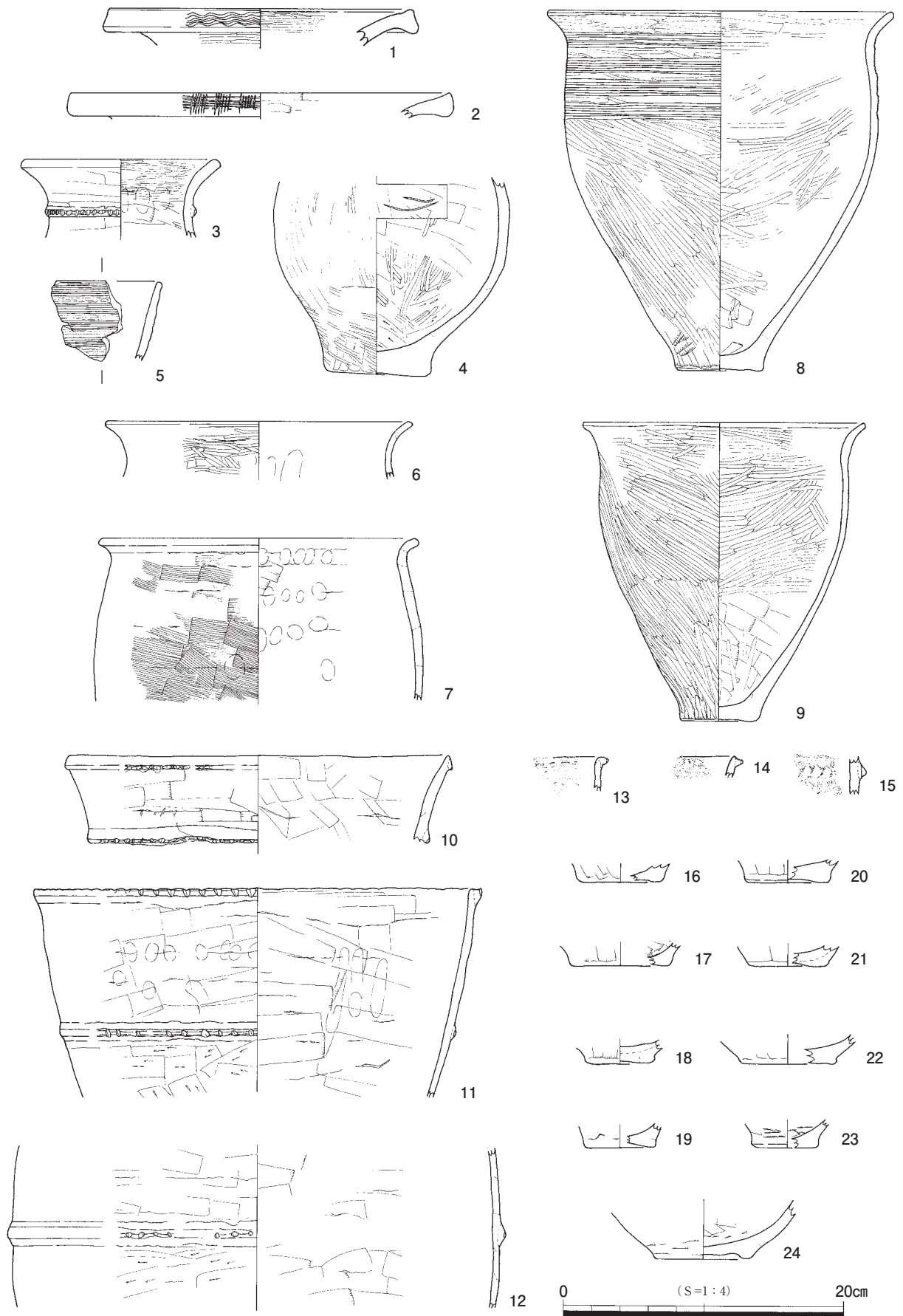


图48 第13面·13层·13b面·13b层出土遗物

す。外面は板ナデ、内面は横方向のヘラミガキで調整する。生駒山西麓産以外の胎土といえる。河内Ⅰ-4様式に属し、弥生前期後葉である。(4)は長頸壺で、底部から内湾してのびる胴部がつづき、器壁は全体に厚い。胴部に記号文状の線刻と推定される痕跡がある。外面はヘラミガキ、内面は板ナデなどのちヘラミガキで調整する。底部内面に炭化物が付着する。弥生中期前葉とみられる。(5)は6本を単位とする櫛描直線文を巡らす鉢で、同じく生駒山西麓産以外の胎土とみられる。弥生中期前葉といえる。

(6~9)は外反する口縁部をもつ甕である。(6)は外面に板ナデのちヘラミガキで調整している。弥生中期前葉といえる。(7)は外面を横方向のハケで、内面を指頭圧痕が残る粗雑な板ナデで調整する。河内Ⅱ-1様式、弥生中期前葉である。(8・9)は緩やかに外反する口縁部をもち、内外面をヘラミガキで調整する生駒山西麓産の胎土をもつ河内形の甕である。(8)は頸部から胴部上半部にかけて6条を単位とする沈線が4帯施されている。外面全面と内面底部上方にススが付着する。(9)は内面全面と外面上半部にススが厚く付着する。ともに河内Ⅱ-1様式、弥生中期前葉に属する。(23)はやや外方に張り出す弥生前期の甕の底部、(24)は底面がややあげ底を呈し、体部は内湾しながら立ち上がる弥生前期の壺の底部とみられる。ともに内外面は縦方向の板ナデで調整する。

(10~22)は突帯文土器の深鉢で、(10~15)は口縁部と肩部である。(10・11)は胴部からまっすぐに外傾して口縁部にいたる器形である。口縁端部は突帯を貼り付ける際の調整で器壁が薄くなっている。生駒山西麓産の胎土をもつ。(10)の口縁部と肩部の突帯断面は下向きの三角形、刻目は小D字形を呈するが、突帯形状や貼り付け方は粗雑で歪みがある。頸部外面は横方向の強い板ナデ、内面は横・斜め方向の板ナデで調整する。(11)の口縁部の突帯は特に下面から強くナデ上げている。ほぼ口縁端部の高さに、弥生前期の甕の刻目に類似した形状の小V字形の刻目を入れる。弥生土器からの影響がみられる。肩部の突帯断面はかまぼこ形で、刻目は小O字形をなす。内面と外面頸部は横方向の板ナデ、外面胴部上半は強い横・斜め方向のヘラケズリである。(12)は肩部が屈曲せず、頸部は直立して口縁部にいたる大型の深鉢である。肩部の突帯は、(11)と同じくかまぼこ形で、小O字形の刻目をもつ。器面の調整も(11)と同じである。(13)は口縁端部の上にかぶさるように突帯を貼り付ける。下からも強くナデるため横に突出した形状となる。刻目は小D字形である。流紋岩・輝石を含む淡褐色の胎土で加賀の可能性がある。

(16~22)は突帯文土器深鉢の底部とみられる。(18・22)は突帯文土器に通有の側面外方に張り出す底部である。残存する外面は縦方向の板ナデだが、この上方からヘラケズリを施すとみられる。(16・17・19~21)は底部から外上方にほぼ直線的に立ち上がる器形で、より弥生土器の底部に近い器形といえる。外面下部は同じく縦方向の板ナデで調整する。

従来の調査では、第13面の遺構面上からは河内Ⅰ-4様式の遺物を中心としてⅡ様式の遺物が出土しており、第13面は前期末~中期初頭の時期幅が想定されている。今回の調査区でも、358流路から出土した遺物や第13層関連遺物は、Ⅰ様式後半~Ⅱ様式を中心とする時期である。日常の煮沸に用いた甕などが残りの良い状態で出土しており、付近に弥生前期後葉~中期前葉にかけての安定した集落が存在していた可能性もある。ただし、今回の調査では、調査区の西端で南北方向の流路を確認したのみで、これ以外には遺構を検出していない。現在調査中の西接する06-2調査区では、この調査区に接する東端部分の狭い範囲であるが、第13b層上面で多数の土坑・ピットなどを検出している。出土遺物は少ないが、Ⅱ様式段階に一定期間居住域となっていたことが推定される。(林)

4) 第14-1面 (図49、図版9・10)

遺構面の状況と検出遺構

第14-1面は、第13層および部分的にみられた第13b層を除去して検出される面である。第13b層

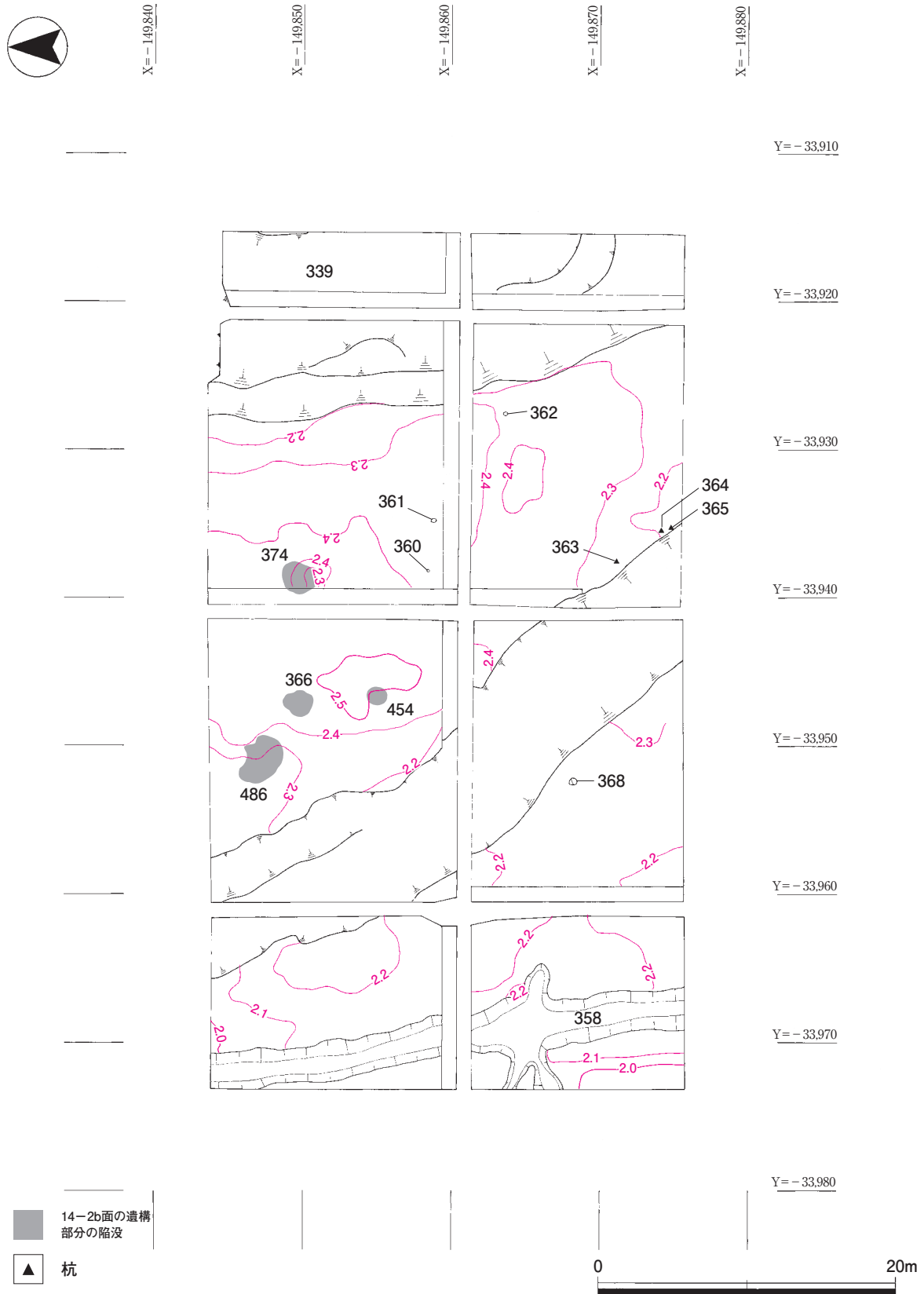


図49 第14-1面平面図

は、暗オリーブ灰色の色調で、粘性の強いシルト～極細砂の土質であるが、上層の攪拌によりほとんど遺存していなかったため、大部分では第13層を除去して検出されている。第14層は、先述のように2層に分層され、当面は第14-1層の上面である。第14-1層は、黒色の粘性の強い粘土～シルトの土層である。当面は、従来池島・福万寺遺跡で「第4黒色粘土（泥）層」と呼称されている第14-2層の上面と考えられる。

地形は、調査区中央部が南東から北西にかけて高く、東西方向になだらかに低くなっていく。標高はT.P.1.97～2.43mである。ただし、西側は先述の第11b層の氾濫堆積物により削平を受けている。また、調査区東端部には東端からやや北西にかけて大きな落ち込みが存在している。

遺構は、調査区中央部の高くなった部分において土坑・ピットなどが確認されている。また調査区西端部では若干方位を西に振った南北方向の流路が確認され、これに直交する溝状の遺構も確認されている。

358流路は、調査区西端部の南北に長い流路で、先述のように北に向かって若干西に寄っている。幅は2.5～3.0m程度で、X=-149,866付近で東西方向の溝状の落ち込みが直交する部分でやや幅が広がっている。深さは、0.3～0.4m程度である。第14-1面検出時に上層の第13b層が落ち込んでいることから検出されたもので、この部分では第14-1層がやや垂れ下がっていた。流水等の痕跡は確認されなかった。

360～365・368ピットは、当面で検出されたものであるが、このうち、360・362は埋土に第13層と考えられる土層があることから、上層に帰属する遺構である可能性が高い。361・363～365については、第13b層と考えられる土層が落ち込んでいる。このうち、361ピットは人頭大の石が落ち込んだものである。

また、363～365ピットは、当面で検出したものであるが注意を要する遺構である。いずれも細長く木質は遺存していないが杭跡に似ており、いずれも南から北方向に打ち込まれたような状況を呈している。これらの打設面については当調査では確認できなかった。これら3基のピットは、いずれもほぼ一直線である。また、並びは、先述の第11b層の氾濫堆積物によって削平された部分に沿うように並んでいる。こうしたことから考えて、これらのピットは第11b層の氾濫堆積物の堆積過程において打ち込まれたものであった可能性が高い。

第11b層の堆積状況を考えると、第12面廃絶後、第11b層下部の粘性のある粘土～シルトの堆積物が堆積した段階に樹木などが生えた状況があったことが明らかであることから、この段階に第12面の229流路部分に低くなるような地形が存在していた可能性が高い。この3基の杭はこの段階に打設されたものの可能性があると考えておきたい。

先述の東端部の339落ち込みは多くの問題がある遺構である。この部分は、先述の第13b層の氾濫堆積物が周辺の土壌を削りながら堆積したもので、粗粒および細粒堆積物と周辺の第14層相当の土壌が混じるように分厚く埋積していた。また、339落ち込み部分は、第14層に相当すると考えられる黒色の粘性のある粘土～シルトと粗粒の堆積物が交互に堆積したり混じりあったりしていた。このため、調査段階では第14層相当の部分を認識できずに、落ち込み下面まで大部分の第14-1層を第13b層とともに除去してしまった。その結果、西肩部の一部で第14層が確認されたが、大部分の第14層中に混じていた遺物が第13b層の遺物とともに出土する結果となった。ただし、後述するように第13b層中から遺物はほとんど出土しておらず、大半の遺物は第14層から出土したのと考えられる。

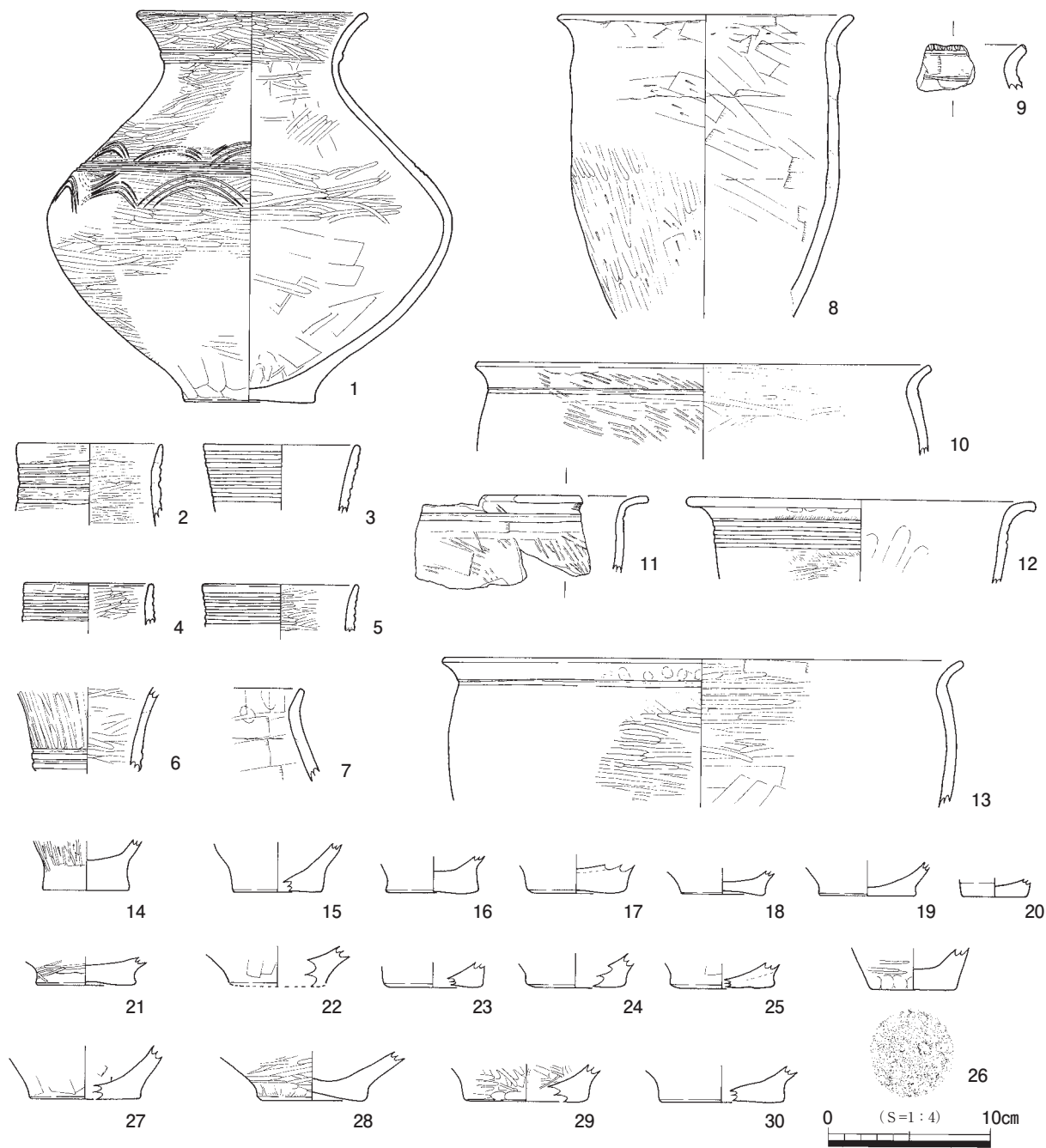


図50 第14-1面 (339落ち込み) 出土遺物 (1)

339落ち込みは、東肩が調査区外にあり、調査時に東法面が崩落したため、幅については不詳である。現状で東西幅は最大13.0m、断面から復元される第14-1層相当上面までの深さが最大で1.0mを測る。第14b層の氾濫堆積物の堆積状況からみて、第14-2b層の堆積段階にも当初から低まっていたものと考えられる。

また、この部分の断面等の観察を行なったところ、第14層および第14b層のブロック等が肩部にみられ、人為的な加工の痕跡とも考えられる状況が観察された。これについては軟X線写真による堆積構造の検討を「第5章 自然科学分析」で行なっており、人為的な影響がおよんでいる可能性が指摘されている。こうしたことから考えて、この339落ち込みについては、本来低くくぼんだ部分に何らかの人為的な加工を施されている可能性も考えておきたい。(廣瀬)



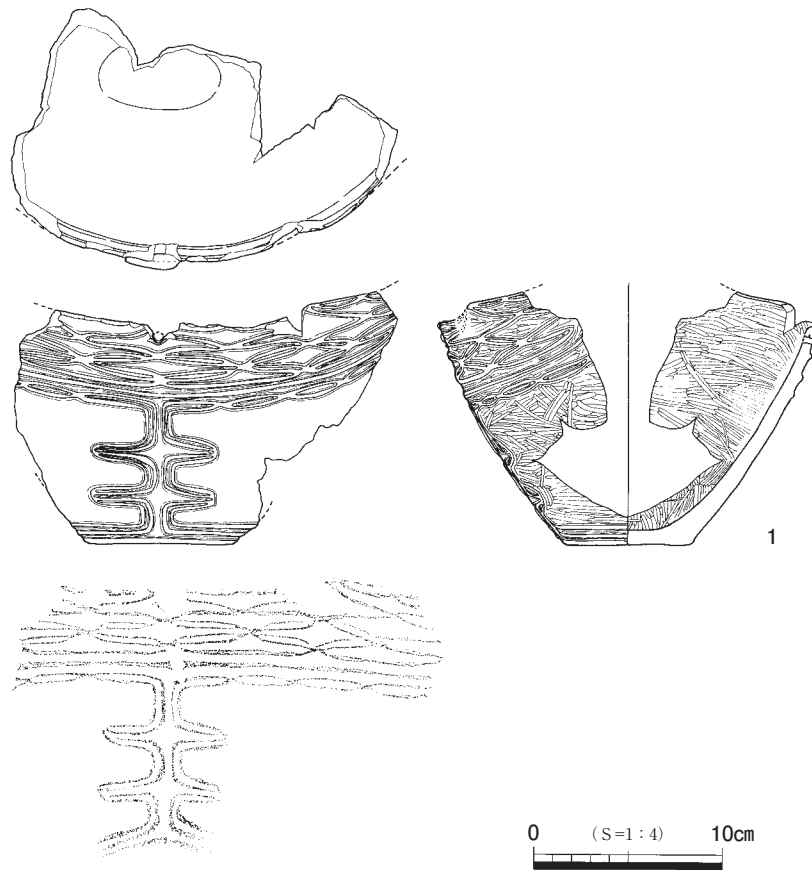


図51 第14-1面(339落ち込み)出土遺物(2)

#### 出土遺物(図50~61、図版27~38・40)

第14面検出遺構としては、調査区東部に位置し、東に向かって緩やかに傾斜する339落ち込みがある。今回の調査区出土遺物の大半がこの落ち込みに堆積していたものである。出土遺物は縄文晩期後半~弥生前期中葉の時期を主体とする。

遺物については、弥生土器(図50)、浮線文系土器(図51)、突帯文土器の深鉢(図52)、同 口縁部(図53)、同 肩部・底部(図54)、同 底部およびその他の深鉢・浅鉢・壺(図55)、土偶・ミニチュア土器などの祭祀関連遺物(図56)、石器に分けて掲載した。底部は図化可能なものはほぼ全て掲載したが、小破片については弥生土器か突帯文土器か判別しにくいものがある。器形の特徴の他、調整においては、突帯文土器の底部外面は縦上方に向かい強いヘラケズリを施すのに対し、弥生土器の底部外面は板ナデもしくはヘラミガキで平滑に仕上げる点を基準にした。

(図50-1~7)は弥生土器壺である。(1)は復元口径13.9cm、器高24.1cm、胴部最大径25.0cmを測る広口壺である。頸部に2条の沈線が施され、胴部には3条の沈線を挟んで、上帯と下帯に3条を単位とする10連の上向の重弧文を描いていたと推定できる。さらに、一部、下向の重弧文も施されている。内外面を板ナデののち、横方向を中心とするていねいなヘラミガキで調整する。生駒山西麓産の胎土で、外面には部分的に黒斑が残る。河内I-2様式、弥生前期中葉といえる。(2~5)は長頸壺の口頸部で、4条以上のヘラ描き沈線を巡らす。(3)は摩滅しているが、その他は内外面に横方向のヘラミガキを施す。当遺跡周辺の胎土とみられる。東大阪市の弓削ノ庄遺跡からも同様の器形をもつ土器が出土している。他地域の影響を受けた土器と考えられる。(6)は前期後半の広口壺とみられ、細い頸

部には2条以上の沈線を巡らす。外面は縦、内面は横方向のヘラミガキを施す。(7)は前期後半の無頸壺の口縁部で、内外面を板ナデで調整する。

(8~12)は甕である。(8)は緩やかに外反する口縁部をもつ。外面口頸部は板ナデ、体部上半部は横～斜め方向のヘラケズリ、下半部は縦方向のヘラケズリののち、ヘラミガキを施す。内面は板ナデで調整する。器面には粘土紐の接合痕が残り、調整は粗雑である。弥生前期に属する。(9・12)は短く外反する口縁部をもち、頸部に沈線を巡らす。(9)は口縁端部に刻目を施す。(12)は4条の多条沈線をもち、外面はハケののちヘラミガキで調整する。弥生前期後半～中期にかけての土器である。(10・11)および(13)は口縁部と胴部の境にはわずかに段を有する。(10・11)の外面は右下がりのタタキののち板ナデで調整する。鉢とみられる(13)は、外面にハケ、内面に板ナデののち、横方向のヘラミガキで調整する。河内I-2・3様式、弥生前期中葉といえる。

(14~30)は弥生土器の底部といえる。底部は器形によって、底部が側面外方にわずかに張り出し、外上方にのびるもの(1類)、底部がほぼ垂直に立ち上がり、外上方にのびるもの(2類)、底部からほぼまっすぐに外上方にのびるもの(3類)のおおむね3つの形状がみられる。これに基づくと、339落ち込み出土の弥生土器底部は、1類(14・16・19・21・25)、2類(15・20・23・24・28・30)、3類(17・18・22・26・27・29)に分類することができる。1類の(14)は甕の底部で、外面をヘラケズリののちヘラミガキで調整している。2類の(15)は内外面にナデ調整を行う甕の底部である。(28)は外上方に大きく開いて胴部にいたる壺といえる。外面は板ナデののちヘラミガキで調整する。3類の(26)は生駒山西麓産の胎土をもつ甕で、底部外面には糊圧痕がみられる。外面はヘラミガキ、内面はナデで調整する。(27)は弥生土器の典型的な形状を示す壺、(29)は内外面をヘラミガキで調整する壺の底部といえる。これらの底部は弥生前期に属すると考えられる。

(図51-1)は339落ち込み出土の浮線文系土器の舟形土器である。底部は楕円形で長径7.7cm、短径6.3cm、正面の器高は11.7cmを測る。口縁端部は波状を呈する。正面が低く、残存する右側は1段高くなり、その部分にはさらに眼鏡杵状の浮線文を施し、隙間を補っている。長径側の文様帯は口縁部と体部上方に浮線網状文とそれらを画する突帯からなる。その下方は正面に双翼形垂下文様が施されている。正面口縁部近くには焼成前の穿孔1点がみられる。調整は内外面に横方向の緻密なヘラミガキを施す。部分的に塗布された黒色顔料が残る。外底面には二次焼成の痕跡がある。胎土は溶岩・砂岩・輝石を含み、長野県の可能性が高い。中部高地を代表する縄文晩期後半の土器型式である離山～氷I式(古)段階に属する。近畿では縄文晩期末～弥生前期前葉の削出突帯以前に併行すると考えられている。

(図52-1~20)は口縁部から胴部にかけて残存する突帯文土器の深鉢である。先述したように、突帯文土器深鉢の多くは頸部内外面に横方向の板ナデで調整し、胎土は生駒山西麓産および当遺跡近隣のものを用いている。そのため、同様の調整と胎土については基本的に記述を省略する。

(1~7)は口縁部と肩部に突帯をもつ器形とみられる。(1)は肩部からやや外湾気味に内傾して口縁部にいたる。口縁端部に沿って貼り付けた突帯は断面三角形で、大D字形の刻目をもつ。頸部内外面は横・斜め方向の板ナデで調整する。(2)も同様に内傾する頸部をもつ。突帯を貼り付ける際の調整で、口縁端部の器壁が薄くなっている。突帯断面は三角形で小D字形の刻目を付ける。外面端部までスガが付着する。肩部に突帯のない器形の可能性もある。

(3・4)は肩部で屈曲せず、頸部は直立して口縁部にのびる。(3)の口縁部と肩部の突帯の貼り付けは粗雑で歪みがある。断面三角形で大D字・小D字形の刻目を入れる。胴部外面には横方向のヘラケ

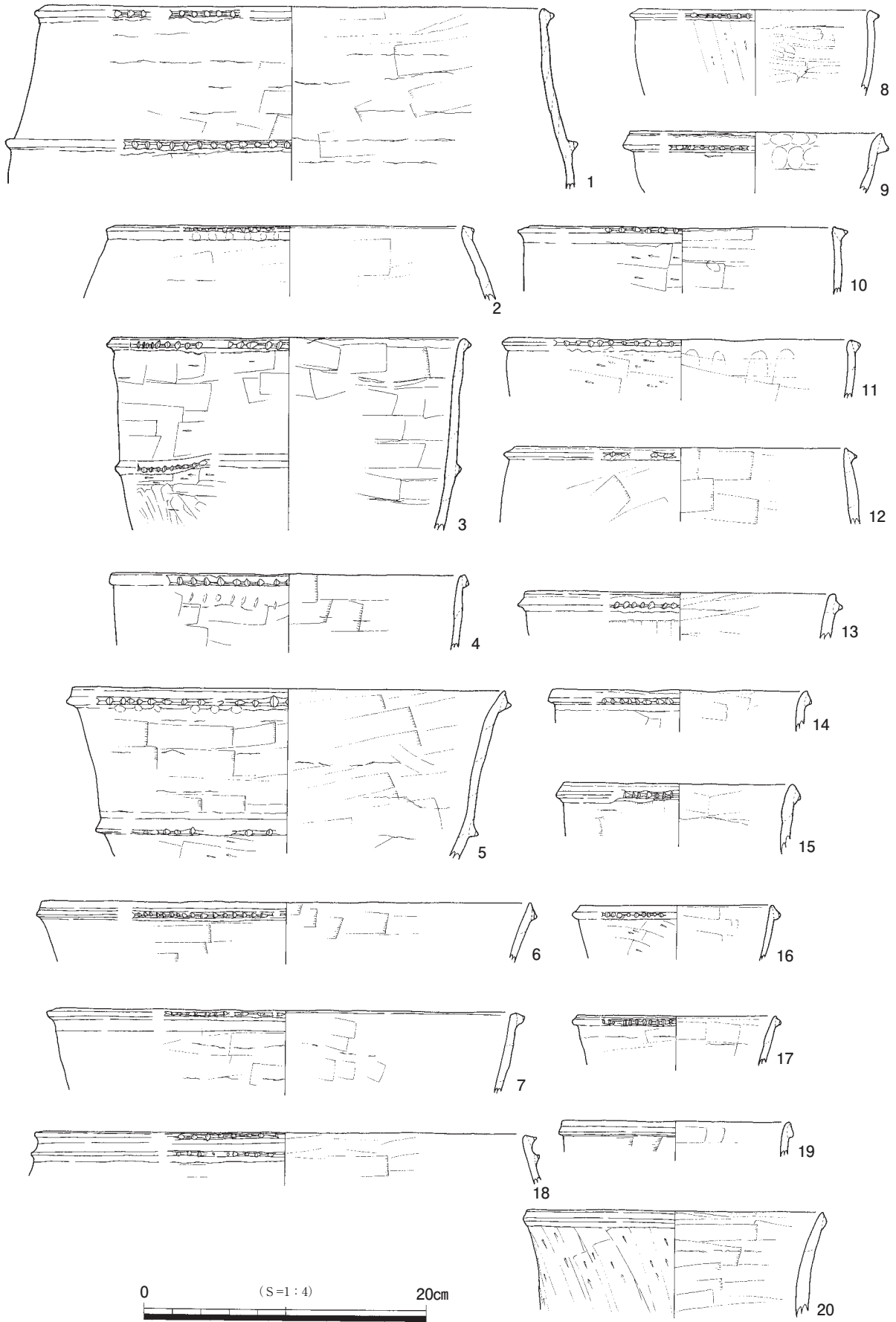


図52 第14-1面 (339落ち込み) 出土遺物 (3)

ズリののち、縦・斜め方向のヘラミガキを施す。(4)は突帯貼り付け後の調整は粗雑で、突帯上面に小V字形の刻目を入れる。頸部外面には刻目と同間隔の工具痕が残り、口縁部側から刻目を入れた状況がうかがわれる。

(5・6・7)は胴部から外傾して口縁部にいたる器形である。(5)の口縁部と肩部の突帯断面は、強いナデ調整のため、上部がくぼんでいる。刻目は大D字形だが、大きさは不統一である。胴部上方は横方向のヘラケズリで調整している。(6)も突帯上面からの強いナデにより、口縁端部と一体化している。小D字形の刻目を施す。(7)の突帯断面は下からのナデ上げにより、突出した三角形を呈する。小D字形の刻目を施す。

(8~17・19・20)は口縁部に1条の突帯をもつ器形と考えられる。(12)は底部から緩やかな球形をなして口縁部にいたる器形とみられる。突帯と口縁部内面とを挟んで貼り合わせているため、口縁端部断面が薄くなっている。突帯頂部には小D字形の刻目を施す。

(8~11)は底部から緩やかに半球形をなして口縁部にいたる器形といえる。突帯貼り付けの調整はおおむね粗雑で、(10)は口縁端部の上に突帯がかぶさっている。(8)は小V字形の刻目をもち、外面を縦方向のヘラケズリで削り上げ、内面は横方向の細い板ナデで調整する。(9)の突帯断面は強いナデのために上面がくぼむ。突帯頂部に小D字形の刻目をもち、口縁内面には指おさえの痕跡が残る。(10・11)の突帯断面は下からのナデ上げによって、上向きの三角形を呈する。突帯頂部に小D字形の刻目を施す。

(13~17・19)は底部からまっすぐに開いて口縁部にいたる器形と考えられる。(13)の突帯は口縁端部から下がった位置に貼り付ける。突帯断面は比較的大型の三角形を呈し、大D字形の刻目を施す。頸部の器壁は厚く、外面を縦方向の板ナデで調整する。(14・15・17)の突帯は口縁端部からわずかに下げて貼り付ける。(14)の突帯断面は下向きの三角形で、小D字形の刻目を入れる。(15)は小V字形の鋭い刻目を入れる。外面は縦方向のヘラケズリを施す。(16)は突帯を口縁端部にかぶさるように貼り付ける。突帯断面は上面からのナデで下向きの三角形となり、小D字形の刻目を入れる。外面は横方向のヘラケズリを施す。(17)の突帯断面は上面がくぼむ。小O字形の刻目を施す。(19)の突帯には刻目がない。(20)は胎土に結晶片岩を含むもので、阿波もしくは紀伊の胎土と考えられる。突帯断面はかまぼこ形を呈する。外面は上方に向けて縦方向のヘラケズリを施す。深鉢の口縁部とみられる。

(18)は口縁部に2条の突帯を貼り付ける器形である。突帯断面は上面・下面をナデで調整し、やや上向きの三角形を呈する。小D字形の刻目を施す。

(図53-1~57)は突帯文土器深鉢の口縁部片である。小片であるため、器形の判別はつきにくいものが多い。これらのうち、(1・4・5・10・18)は内湾もしくは内傾する頸部をもち、口縁部と肩部に突帯をもつとみられる。(1・4・5・18)は口縁端部に断面三角形の突帯を貼り付ける。(1)は小D字形の刻目、(4)は小V字形の刻目で、外面は強い板ナデで調整する。(5)の肩部の突帯は上面からのナデで、断面は下向きの三角形を呈する。小D字形の刻目を入れている。(18)は器壁が厚く、大型品とみられる。小D字形の刻目を施す。(10)は器壁が薄く、歪みがある。突帯は特に下面からのナデ上げで、上向きの三角形を呈する。刻目は小D字形である。

(9・12・13・17・20・22~24・31・32)は頸部が直立して口縁部にいたる器形とみられる。(11)は器壁が厚く、口縁部から少し下がった位置に突帯を貼り付ける。突帯は幅広で、上面を強くナデするため下向きで端部は丸い。刻目も大きく、大D字形を呈する。船橋式に属する可能性がある。(13)は口縁

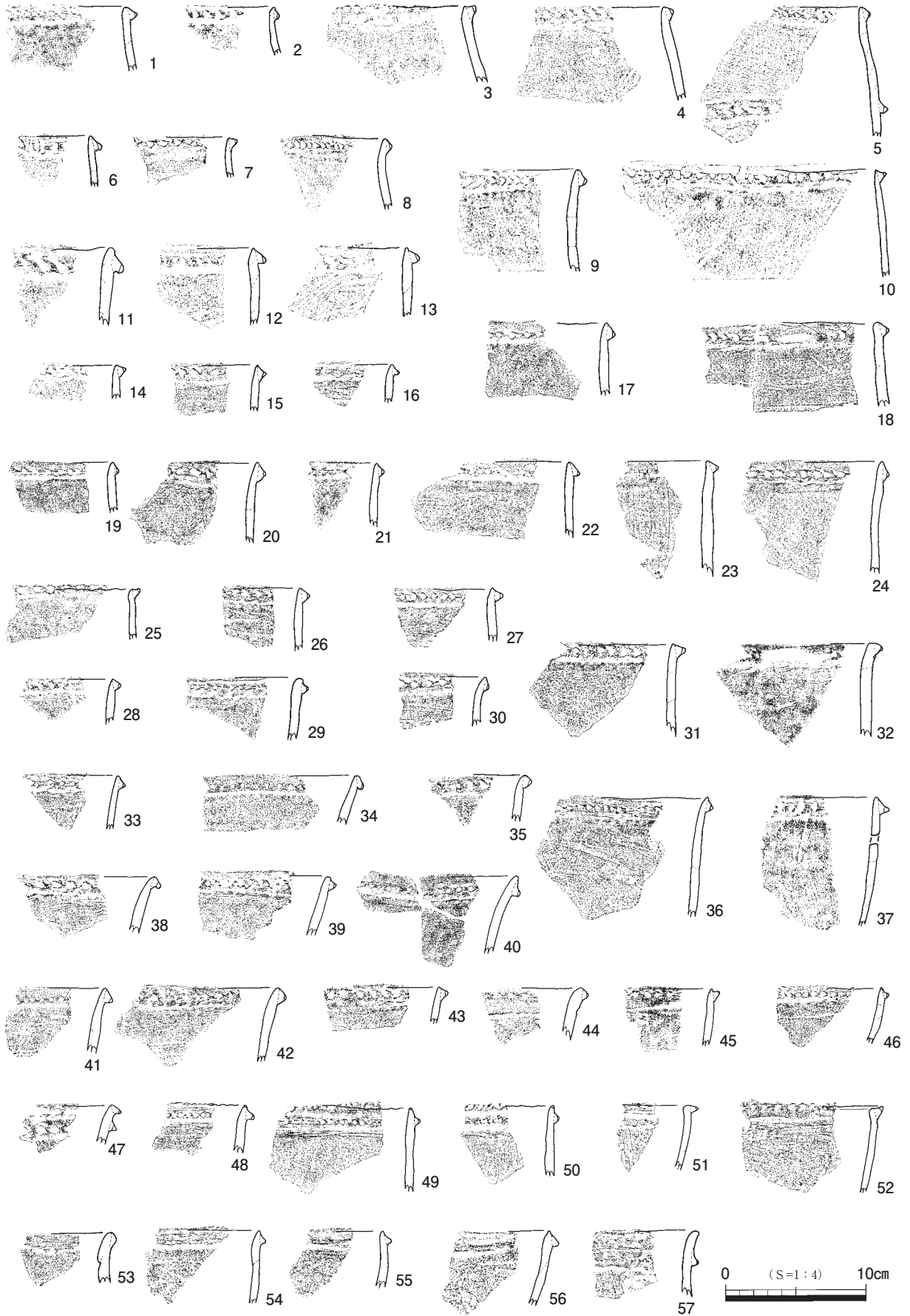


図53 第14-1面 (339落ち込み) 出土遺物 (4)

端部の器壁が特に薄い。外面は斜め方向に強い板ナデで調整する。(17・20)も口縁端部の器壁は先細りとなっている。突帯断面は三角形を呈する。(17)は小D字形、(20)は小V字形の刻目をもつ。(12・22)の突帯断面は下向きの三角形を呈する。(12)は小V字形、(22)は小O字形の刻目をもつ。(9・24)も口縁端部の器壁が薄くなり、突帯断面は上面がくぼんでいる。(9)は小D字形、(24)は小O字形の刻目をもつ。(31・32)は突帯を下からナデ上げて貼り付ける。(32)は口縁端部の上にも突帯がかぶさっている。ともに小D字形の刻目をもつ。(23)は外面に縦方向の板ナデを施す。

(29・36・38～40・42)は胴部からまっすぐに外傾して口縁部にいたる器形で、口縁部と肩部に突帯をもつものとみられる。(29)は口縁端部からわずかに下がった位置に突帯を貼り付けるが、そののち、端部にナデを施すため、突帯にかぶさり、粗雑なつくりになっている。小V字形の刻目を施す。(36・42)は口縁端部の器壁が薄くなっている。突帯は歪みがあり、小D字形の刻目をもつ。(36)は外面に板ナデののち、一部、粗いヘラミガキで調整する。(40)は上面のくぼんだ突帯に小D字形の小さい刻目がつく。(38・39)は口縁部にのみ突帯をもつ器形の可能性もある。小D字形の刻目を施す。

(3)は胴部が緩やかな球形をなして口縁部につづくともみられるが、突帯の条数は不明である。突帯断面は特に下面からナデ上げて上向きの三角形を呈する。小O字形の刻目をもつ。

(37・41・43～46・51～56)は底部からまっすぐに開いて、1条の突帯文をもつ口縁部にいたる器形とみられる。口縁端部の断面は、(51)以外は突帯貼り付けの調整で先細りになっている。(45・46・55)は半球形の胴部をもつ可能性もある。(41)の突帯断面は下向きの三角形で、小V字形の刻目をもち、(37・46)は突帯上面がくぼんでいる。(37)は突帯下1.5cmのところ、径0.7cmの円孔を穿つ。外面を縦方向の強い板ナデで調整する。(46)は器壁が薄く、小D字形の刻目をもつ。(44)は突帯貼り付け時の筋状のへこみが口頸部外面に残る。突帯には小O字形の刻目を入れる。(43・45・51・52)の突帯断面は上向きの三角形を呈する。(43)は小O字形、(45・52)は小D字形の刻目、(51)は口縁端部の上面に突帯がかぶさるように貼り付き、小V字形の小さい刻目を施す。(43・45・52)は外面を横方向のヘラケズリ、(51)は縦方向のヘラケズリで調整する。(51)は加賀の胎土とみられる。(53～56)の突帯には刻目は施されていない。(54～56)の突帯の形状は強いナデで上面がくぼんでいる。(53)の突帯断面はかまぼこ形で、突帯の貼り付けや、内面の調整は粗雑である。

(47)は口縁部に2条の突帯を貼り付ける器形である。2条ともに突帯上面から強くナデるため、断面は下向きの三角形を呈する。小O字形で刻目を施す。

(48～50)は口縁部に1条の刻目突帯をもつ他、口縁端部に刻目を入れるものである。口縁端部の器壁は薄くなっている。(48)は口縁端部からわずかに下がった位置に、断面が下向きの三角形を呈する突帯を貼り付け、小D字形の刻目を入れる。(49・50)は口縁端部よりかなり下がった位置に突帯を貼り付ける。突帯断面は三角形で、刻目は浅く、(49)は小D字、(50)は小V字形を呈する。3点とも突帯部の刻目は縦、口縁端部は斜め方向に入れる。胎土には角閃石を含むが、他に比べやや少量である。

(57)は口縁が緩やかに外湾するという特徴をもつ。端部のナデ調整は粗雑で平滑に仕上げていない。端部から1.3cm下がった位置に断面が下向きの三角形を呈する突帯を貼り付ける。頂部には小V字形の小さい刻目を入れている。

(図54-1～23)は突帯文土器深鉢の肩部である。(9・11・16・19・21)は内湾もしくは内傾する頸部をもつといえる。突帯断面はおおむね正三角形で、(21)が下向きの三角形を呈する。(19)は大D字形の刻目を施す。(21)は頸部に円孔がある。(7・10・12・18・22・23)は直立する頸部をもつ器形と

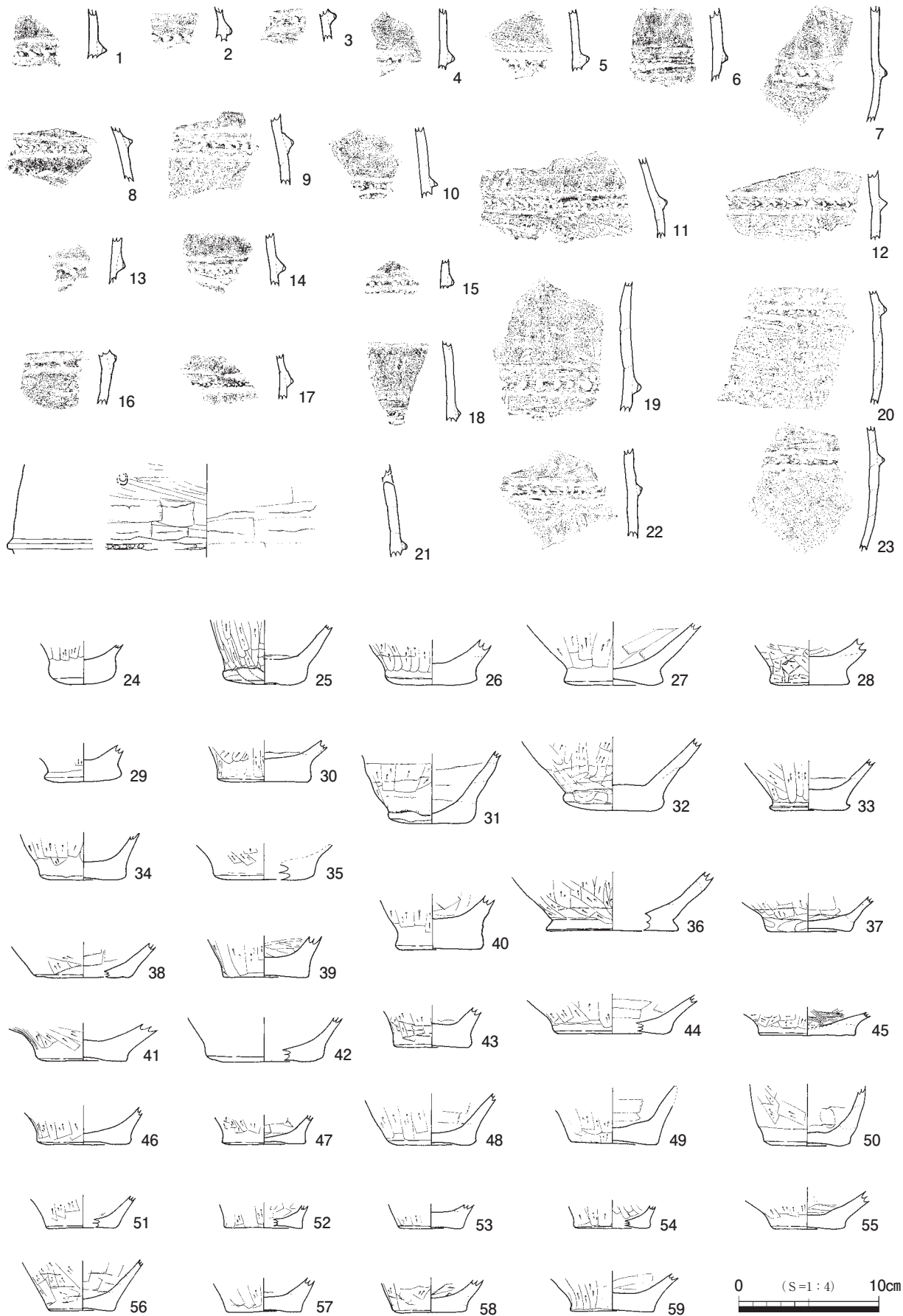


図54 第14-1面 (339落ち込み) 出土遺物 (5)

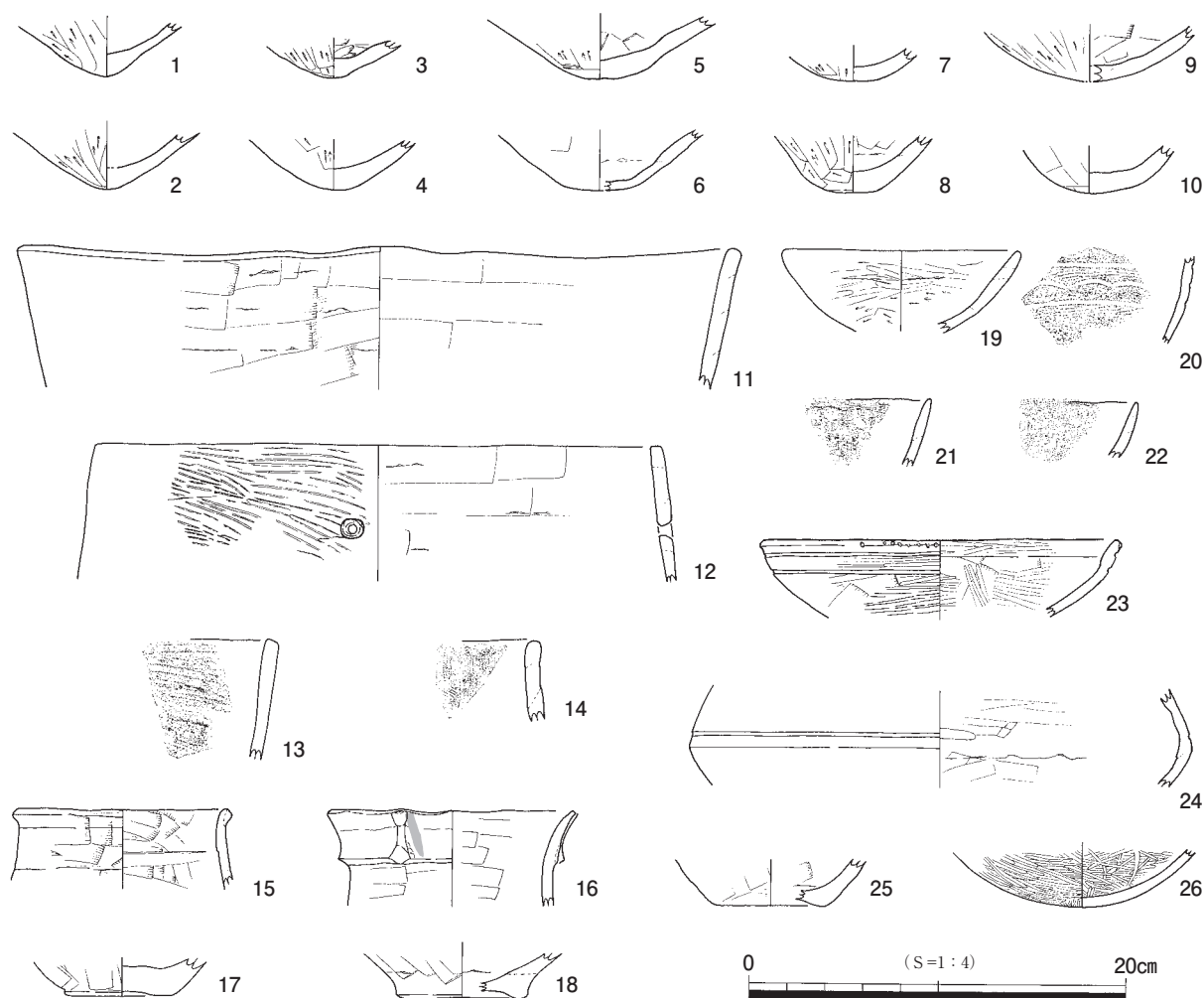


図55 第14-1面 (339落ち込み) 出土遺物 (6)

みられる。突帯断面は正三角形と下向きの三角形が混じる。(10)の胴部断面に粉圧痕が残る。

その他のものは小片のため、器形の分別はできないが、突帯断面は正三角形もしくは下向きの三角形、刻目は小D・O・V字形を呈している。

(24~59)は突帯文土器深鉢とみられる平底の底部である。(25~48)は突帯文土器深鉢に通有の側面外方に張り出す器形をなす。(24)は底面器壁が厚く、下方にやや丸く突出する。(49・51~59)は底部から外上方にほぼ直線的に立ち上がり、より弥生土器の甕の底部に近い器形といえる。底部外面には胴部に向けての縦方向の強いヘラケズリを施す。内面は横方向を中心とする板ナデもしくはナデを施す。(32)は外面にヘラケズリののち、一部ヘラミガキ、(45)は内面に一部ヘラミガキをくわえている。なお、(50)は突帯文土器以外の深鉢底部の可能性が残る。

(図55-1~10)は突帯文土器深鉢とみられる丸底の底部である。丸底の底部は器形によって、尖底に近いもの(1~4)と、半球形に近いもの(5~10)に分けることができる。底部外面の調整は胴部に向かう縦方向のヘラケズリで、内面は板ナデもしくはナデである。生駒山西麓産の胎土を用いているが、(4・5)は少量のチャートを含んでいる。

長原式突帯文土器の深鉢の底部といえる平底に対し、滋賀里IV式や船橋式にみられる丸底は形態的には古い様相を示す可能性がある。(図55)の丸底は、(図54)の平底と共伴して出土している。339落ち



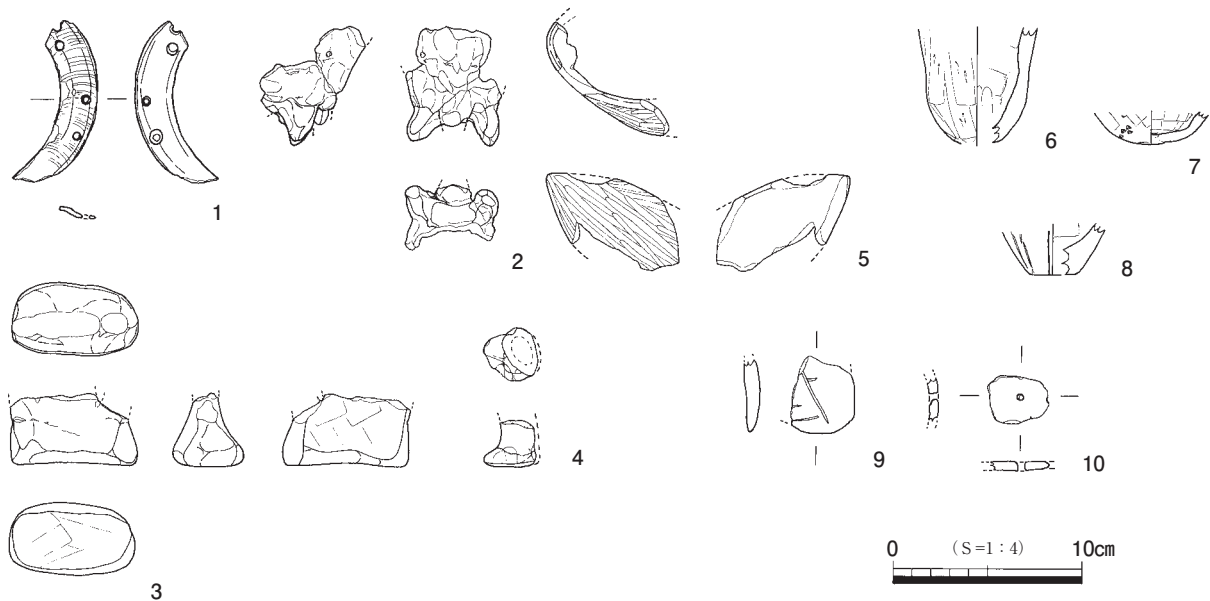


図56 第14-1面（339落ち込み）出土遺物（7）

込み出土の突帯文土器はほとんどが長原式であり、これら丸底の底部も長原式の底部とみられる。

(11~26) は長原式突帯文土器深鉢以外の縄文土器である。(11~15) は深鉢である。(11) は口縁部に向けて開く大型の深鉢といえる。口縁端部が波状を呈し、内外面は横方向の板ナデで調整する。外面にはススが付着する。縄文後期とみられる。(12) は内傾して口縁部にいたる深鉢で、口縁端部から4.1 cm下方に円孔が1点残存する。外面にはススが付着する。(12・13) は外面を巻貝による貝殻条痕、内面を板ナデで調整する。縄文後期中葉といえる。(15) は頸部がやや内傾して口縁部にいたる深鉢とみられる。口縁部には断面三角形の突帯を付ける。内外面は板ナデで調整する。長石・石英・チャートを含む粗い胎土を用い、長原式に併行する他地域の土器の可能性もある。(16) は小片のため口径の復元は明確でないが、壺の口縁部とみられる。口縁端部から1.1 cm下がった位置に突帯を貼り付け、上・下面からていねいにヨコナデを施して、鋭い頂部を作り出す。さらに突帯頂部と口縁部をヘラで押さえてくぼませている。口縁部外面には塗布された黒色物質が一部残る。(17) は外底面が凹面をなす壺の底部で、外面は板ナデで調整している。縄文晩期前半頃の土器とみられる。(18) も外底面を明確にくぼませ、外面を工具でナデた壺の底部である。

(19~23・25・26) は浅鉢である。(19・21・22) は内湾気味に外上方に開く口縁部をもつ。(19) は内外面上方はヘラナデ、下方はヘラケズリで調整する。縄文晩期とみられる。(20) は横沈線2条の間に連弧文を入れた有文土器である。内外面を横方向のヘラミガキで調整したのち、外面には巻貝による擬縄文を施し、上面に黒色物質を塗布している。元住吉山I式、縄文後期中葉の浅鉢である。(23) は内湾気味に外上方に開き、緩やかに屈曲して口縁部にいたる。外面に2条の沈線を巡らし、口縁端部に粗雑な刻目状の圧痕が残る。内外面は板ナデののちヘラミガキを施す。(24) は屈曲する胴部の上方に1条の沈線を巡らす注口土器である。内面は板ナデで調整し、外面には黒色物質を塗布する。元住吉山II式、縄文後期中葉とみられる。(26) は内外面にていねいなヘラミガキを施す黒色磨研土器の浅鉢である。内底面に一部赤彩がみられる。

(図56-1~10) は339落ち込み出土の祭祀に関連する遺物である。(1) はイノシシのオスの右下顎犬歯を用いた装身具である。残存長8.5cm、最大幅1.9cm、最大厚0.27cmを測る。基部側が大きく欠損し

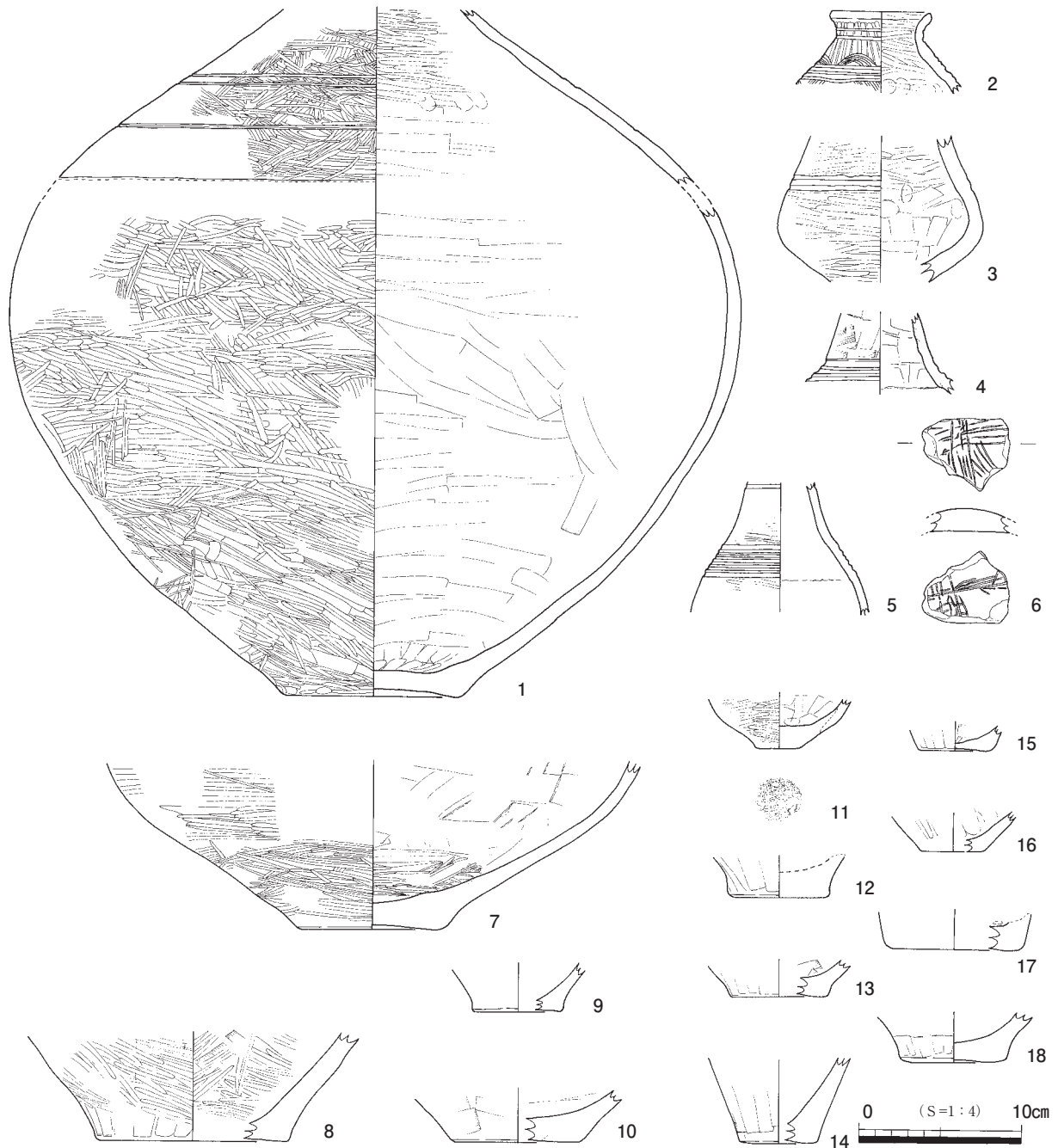


図57 第14-1面・14-1層出土遺物

ている。残存部のほぼ中央に径約0.4cmの両面から穿孔した円孔2点、基部側に内面から穿孔した径約0.5cmの円孔2点の2組4点の円孔が残る。外面には黒色物質を塗布していたとみられる。呪術的な意味をもつ装身具として、胸などに吊り下げたと考えられる。

(2)は3脚またはそれ以上の脚部をもつ手づくねの土製品で、脚付きの容器形土製品もしくは何らかの動物形土製品と推定される。残存高6.3cmで、生駒山西麓産の胎土を用いている。(3)は土偶である。脚部の作りを省略し、住居内などへの安置に適する安定した台座をもつ台式土偶である。長さ6.6×3.8cmの台部から立ち上がり、胴と腕の間の脇部分を表現する空間を設けている。当遺跡周辺の胎土とみられる。中河内において、台式土偶は縄文晩期後半の突帯文土器と共伴する。(4)は土偶の右足部分である。(5)は舟形土製品とみられる。外面は横方向のヘラミガキでていねいに調整している。

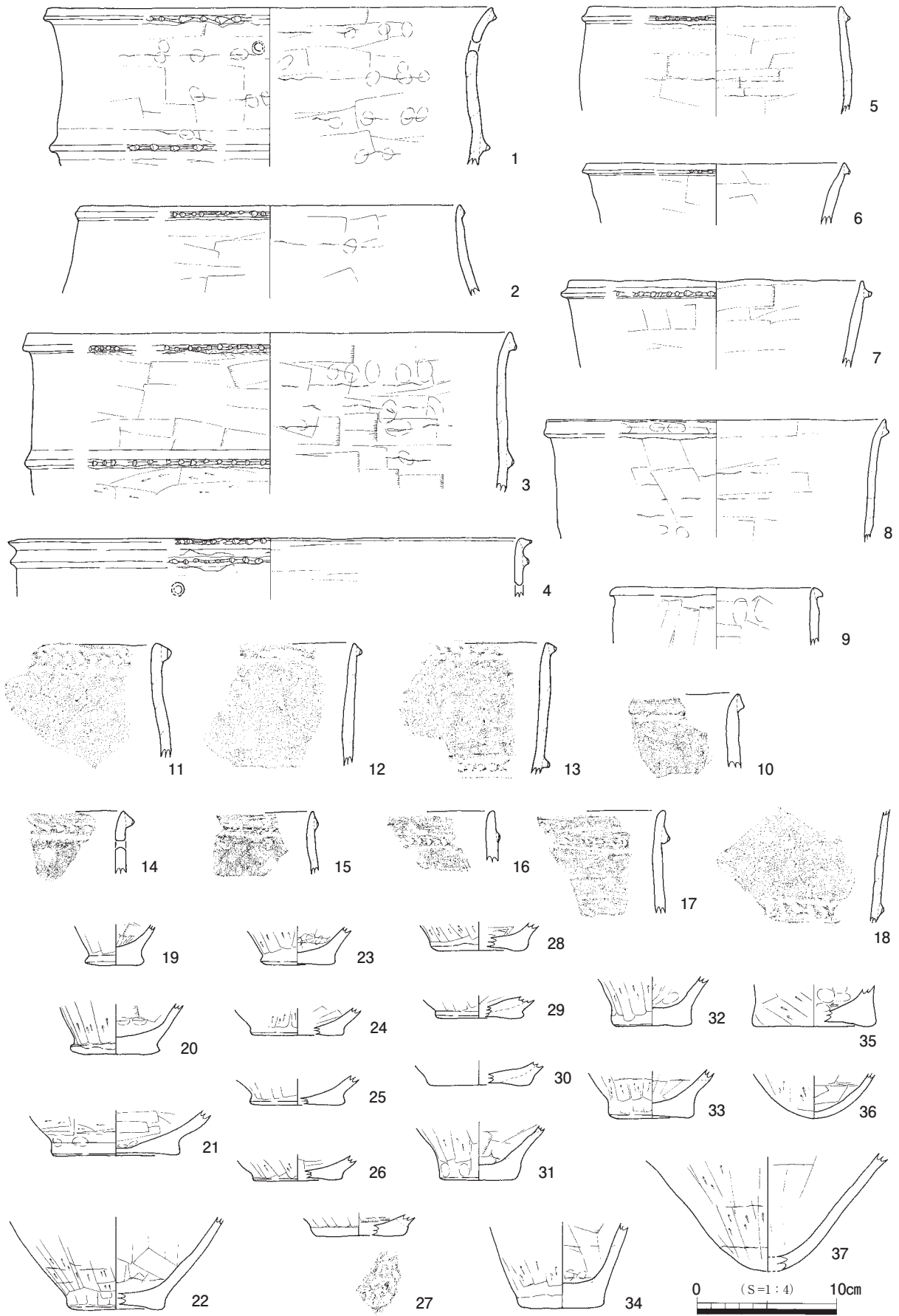


图58 第14-1面・14-1層・14層出土遺物

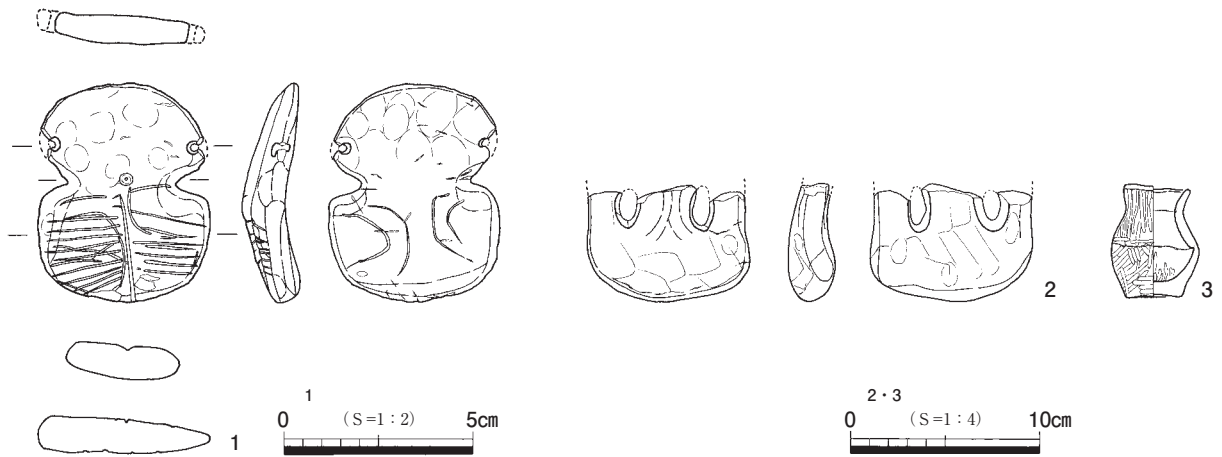


図59 第14-1層出土遺物

(6~8)はミニチュア土器と考えられる。(6)は尖底の深鉢で器壁は厚く、外面は縦方向のヘラケズリ・板ナデ、内面は板ナデ・ナデで調整する。(7)は半球形の底部とみられ、外面に刺突痕が残る。(8)は小片のため明確でないが、平底から外上方に立ち上がる土器といえよう。胴部から底面の一部にかけて線刻を入れており、底面を上にする半球状土製品のような祭祀具の可能性も残る。(9・10)は円板とみられる。(9)は外面に葉脈状の線刻をもつ。(10)は残存部中心に内面から焼成前の穿孔がみられる。

第14-1面・第14-1層・第14層から出土した遺物には、それぞれ、弥生土器(図57)、縄文土器(図58)、土偶・ミニチュア土器などの祭祀関連遺物(図59)、石器に分けて掲載した。(図57-1・5・18、図58-30)は第14-1面、その他は第14-1層・14層出土遺物である。また、第14層の包含遺物と確認できるものを第14層関連遺物として一括して掲載した(図60)。

(図57-1~5)は弥生土器の壺である。(1)は細い頸部から外反する口縁部が続く広口壺とみられる。大きく張り出した胴部の復元最大径は44.8cmである。底面はやや凹面をなす。胴部上半部には4条もしくはそれ以上のヘラ描沈線を巡らす。外面全面はていねいなヘラミガキ、内面上部はヘラミガキ、その他は板ナデで調整する。弥生前期中葉と考えられる。(2)は口径6.0cmの小型の広口壺で、頸部に2条、胴部に3条の沈線を巡らし、上帯には3条を単位とする上向の重弧文を描く。下帯には逆転有軸羽状文と推定される沈線がみられる。外面は縦方向の、内面は横方向のヘラミガキで調整する。生駒山西麓産の胎土といえる。河内I-2様式、弥生前期中葉とみられる。(3)は胴部下方に最大径をもつ厚手の広口壺といえる。上半部に2条の粗雑な沈線を巡らし、外面はヘラミガキで調整する。長石・石英・チャートを多く含む粗い生駒山西麓産以外の胎土である。河内I-4様式、弥生前期後半といえる。(4・5)は細い頸部となだらかな胴部をもつ広口壺である。頸部と肩部に3条以上の沈線が巡るとみられる。外面は(4)がハケ、(5)がヘラミガキで調整する。生駒山西麓産以外の胎土とみられ、弥生前期後半~中期前葉頃と考えられる。(6)は壺の蓋で、内外面ともにヘラ状工具による直線と斜線を組み合わせた線刻をもつ。

(7~18)は弥生土器底部である。(7)は径9.3cmの底部から内湾して大きく外上方に開く広口壺である。同一個体とみられる胴部上半部片には低い削出突帯がつくられ、突帯上に1条の沈線が施される。外面および内面底部、胴部上半部はヘラミガキで調整する。河内I-2様式、弥生前期中葉である。(8)は底部から外上方にまっすぐに開く広口壺の底部といえる。器壁は厚く、内外面はヘラミガキで

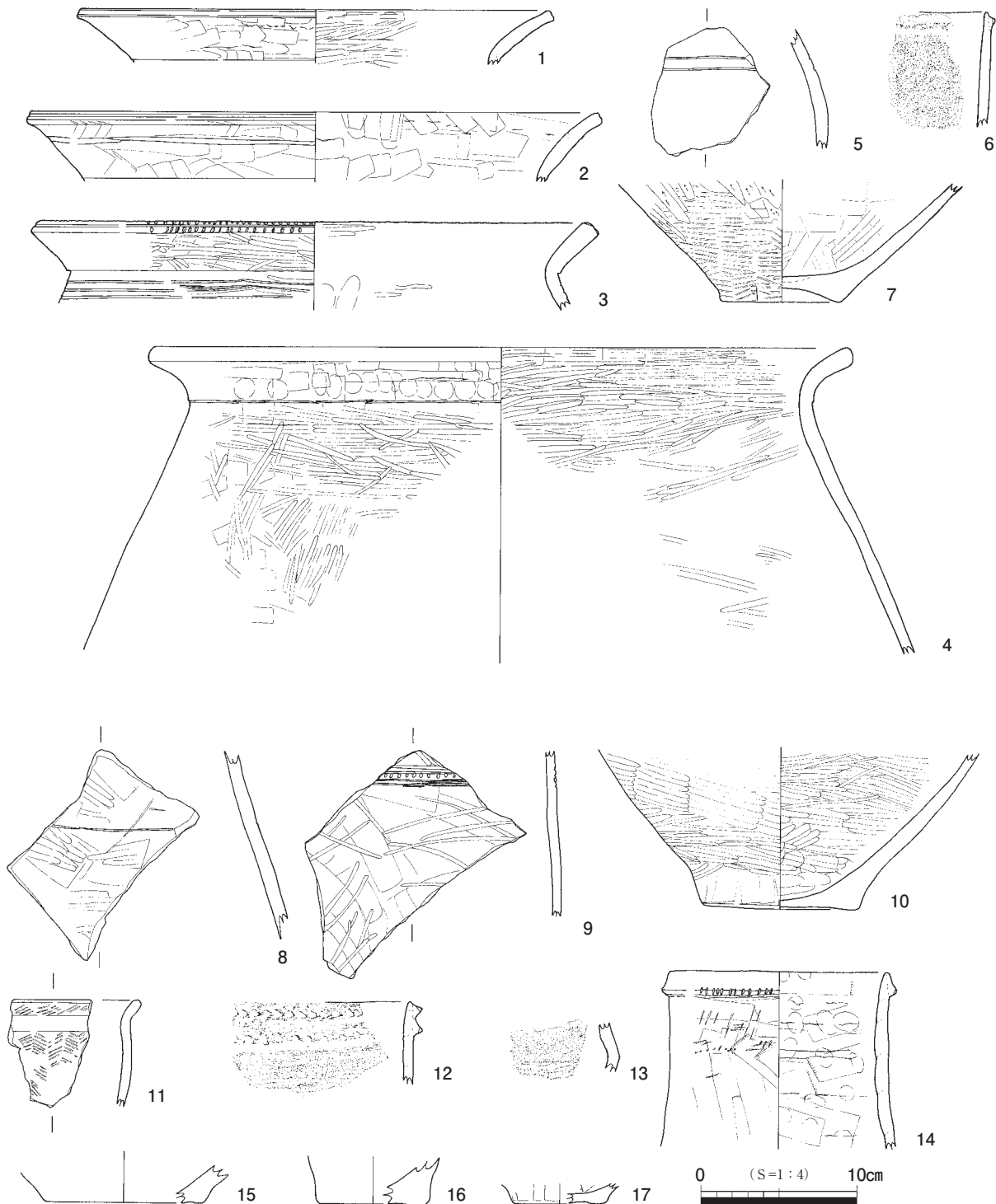


図60 第14層関連出土遺物

調整する。生駒山西麓産の胎土とみられる。弥生前期中葉と考えられる。(10)も同様の広口壺の底部とみられるが、生駒山西麓産以外の胎土である。(11)は底部から内湾して外上方に開く体部をもつ小型壺である。外面は横方向のヘラミガキ、内面は板ナデで調整する。外底面には粘圧痕が残る。弥生後期の土器の混入とみられる。(9・12~18)は甕の底部とみられ、判別しがたい小片を除くと、底部からほぼまっすぐに外上方にのびて胴部にいたると考えられる。内外面は板ナデもしくはナデで調整する。(16)は外面に一部ヘラミガキが残る。

(図58-1~18)は突帯文土器深鉢の口縁部および肩部である。(1・11)は肩部で屈曲し、頸部は外湾して口縁部にいたる。突帯断面は三角形で、口縁部突帯には大D字形の刻目を施す。全体に器壁は厚く、頸部内外面は横方向の板ナデで調整する。生駒山西麓産の胎土をもつものである。長原式の古相を示す深鉢である。(1)は肩部突帯に小O字形の刻目を施し、頸部上方に径0.9cmの穿孔がみられる。(2)は外湾せずに、まっすぐに内傾する頸部をもつ。口縁端部の器壁は先細り、突帯断面は下向きの三角形で、小D字形の刻目を施す。長原式の中相を示す深鉢といえる

(3・12~14)は頸部がほぼ直立して口縁部にいたる器形である。長原式の中相を示す深鉢である。(3・12・14)の突帯は上面からのナデのため、断面は下向きの三角形を呈する。ともに小D字形の小さい刻目を入れている。内面と外面頸部は横方向の板ナデ、(3)の外面肩下部は横方向のヘラケズリを施す。(14)は頸部上方部に穿孔を施す。(13)は口縁部の突帯断面は上向きの三角形で小D字形の、肩部は下向きの三角形で小O字形の刻目を施す。(18)は肩部からまっすぐに外傾して口縁部にいたるものといえる。肩部の突帯断面は下向きの三角形で、大D字形の刻目を施す。

(5)は胴部が緩やかな球形をなし、口縁部にのみ突帯をもつ器形とみられる。突帯断面は強いナデのため上面がくぼんでいる。小D字形の刻目を施す。(6~10・15)は外上方に直線的に開き、口縁部にのみ突帯をもつ器形とみられる。長原式の新相に含まれるといえる。これらの口縁端部の器壁は突帯貼り付けの調整のために薄い。(7)は突帯上面の強いナデで、部分的に突帯の厚みがなくなり、(9)は口縁端部上面に突帯の一部がかぶっている。また、突帯断面は下向きの三角形や上面がくぼむものが多い。刻目の形状は小さく、(8~10)には刻目がない。(9)は外面に縦方向の板ナデを施す。(15)の突帯断面は特に薄い下向きの三角形を呈し、頂部に小O字形のごく小さい刻目が残る。頸部外面には縦方向の線刻が施されている。

(16・17)は胴部から上方に直線的にのび、外反せずに口縁部にいたる。口縁端部から大きく下がった位置に突帯を貼り付ける突帯文土器である。口縁端部は丸くおさまり、長原式新相の深鉢のように口縁端部の器壁は薄くならない。(16)は口縁端部から突帯の上端まで約1.4cm、頂部まで1.9cm、(17)は同じく1.2cm、2.2cmを測る。(16)は突帯断面が下向きの三角形、小D字形、(17)は下向きの三角形、小V字形の小さい刻目を入れている。内外面は横方向の板ナデののち、(16)は内面に一部ヘラミガキ、(17)は内外面にヘラミガキ調整を加える。

(4)は口縁部に2条の突帯をもつタイプである。口頸部には穿孔が残る。口縁上端に接して貼り付け、断面が上向き三角形になるように下からナデ上げて調整したのち、2条目の突帯を貼り付けている。2条ともに小O字形の刻目を施す。

(19~37)は突帯文土器深鉢とみられる平底の底部である。このうち(19~30)は長原式突帯文土器の深鉢に多い側面外方に張り出すタイプである。また(31~33)は底部から外上方にほぼ直線的に立ち上がり、弥生土器の甕の影響を受けたと考えられるものである。底部外面は胴部に向けて縦方向の強いヘラケズリを施す。内面は横方向を中心とする板ナデもしくはナデを施す。(21)の外面下部は横方向のヘラケズリで調整する。(27)は底部外面に刳圧痕が残る。(34)は大型の突帯文土器とみられるが、内底面が水平で外上方にあまり外傾せず立ち上がるなど、類例は少ない。(35)は他地域の胎土とみられる縄文土器の深鉢であるが、突帯文土器とは断定はできない。

(36・37)は同じく丸底の底部で、(36)は半球形、(37)は尖底に近い様相を示す。平底のものと同様に、外面は縦方向のヘラケズリ、内面は板ナデで調整する。

(図59-1~3)は、第14-1層から出土した祭祀に関連すると考えられる遺物である。(1)は最大長5.8cm、最大幅4.55cm、最大厚0.9cmを測る土偶といえる。楕円形の粘土板の表面をやや張り出すように湾曲させ、上部は薄くなるようにつまみ、下部は厚目に指で成形しながらつくっている。表面は人の形を抽象化したものとみられ、中部分の左右をくぼませ腰とし、中心の臍を境に上半身と下半身の造作の一部を誇張している。上半身では両端の孔で耳を表現し、下半身では縦方向の直線によって正中線もしくは女性器を強調したと考えられる。縦方向の直線の両側に弓状の曲線を引いたのち、左側に10本、右側に7本の縁辺に向けた横方向の線刻を施す。裏面下部にも表面とほぼ同じ位置に簡略な弓状の曲線が引かれている。生駒山西麓産の胎土である。

(2)は脚部を抽象化した段階の土偶で、(図56-3)と同様の台式土偶の範疇に含まれる。残存部では長さ6.2cm、最大幅8.5cm、最大厚1.8cmを測る。表面をやや張り出させ、裏面をくぼめている。上部は欠損している。胴と腕の間の脇の表現として右側が約2.0×1.0cm、左側が約1.7×1.0cmの楕円形の空間を設けている。生駒山西麓産の胎土である。

(3)は完形の弥生土器のミニチュア壺である。口径3.3cm、底径2.9cm、器高5.9cmを測る。やや凹面をなす底部から外上方に立ち上がり、胴部中央部で内上方に屈曲して頸部にいたる。外面は板ナデののちヘラミガキ、口頸部内面も一部ヘラミガキで調整する。生駒山西麓産の弥生前期の壺である。

(図60-1~10)は第11b層掘削時に検出したが、この堆積には第14-2b層の混入があり、その中に含まれていた土器である。また、(11~17)は側溝掘削の際に第14層から出土した土器である。これらを第14層関連出土遺物として扱う。

(1~5・8~10)は弥生土器である。(1・2)は鉢の口縁部とみられる。頸部と胴部の境目にわずかに段をもつ。外面は横方向の板ナデ、内面は(1)がヘラミガキで、(2)が板ナデとナデで調整する。生駒山西麓産の胎土である。河内I-3様式、弥生前期中葉といえる。(3)は大型の太い頸部をもつ広口壺の口縁部で、頸部と胴部の境目に明瞭な段をつくる。口縁端部には一条の沈線を挟んで上下に刻目を入れる。頸部上方には3条以上の沈線を施す。残存部では沈線が重なる様子がみられる。内外面はヘラミガキで調整する。生駒山西麓産の土器である。河内I-2様式、弥生前期中葉とみられる。(4)は短く屈曲する口縁部をもつ広口壺で、頸部と胴部の境目は削り出して、段をつくる。口縁部外面は板ナデを施すが、指おさえの痕跡を残している。胴部内外面はヘラミガキで調整する。生駒山西麓産の土器で、河内I-3様式、弥生前期中葉と考えられる。(5・8)は広口壺の胴部とみられる。(5)は胴部上半に2条の沈線が施される。(8)は胴部上半を削り出して、段をつくる。内外面はヘラミガキで調整する。(9)は甕で、胴部上半には4条の沈線と刺突文を巡らす。外面はヘラミガキで調整する。弥生前期中葉といえる。(10)は底面から外上方に開く広口壺で、外面底部立ち上がり部は縦方向の板ナデ、胴部は内外面ともに横・斜め方向のヘラミガキを施す。生駒山西麓産の土器である。

(6・7)は縄文土器である。(6)は突帯文土器の深鉢で頸部は直線的に開く器形である。口縁部の突帯上面は強いナデのためくぼんでいる。(7)は縄文土器の深鉢で外底面は凹面をなす。胴部は底部からまっすぐに外上方に開く。外面は巻貝による貝殻条痕、そののち、一部は上方向のヘラケズリを施している。内面は板ナデで調整する。縄文晩期前半といえる。

(11)は短く外反する口縁部をもつ弥生土器の甕である。口縁部外面に右上がりの、胴部には7本を単位とするタタキ目が綾杉文状に残る。口縁部内外面にはススが付着する。(15~17)は弥生土器底部である。(16)は甕の底部とみられ、垂直気味に立ち上がる。

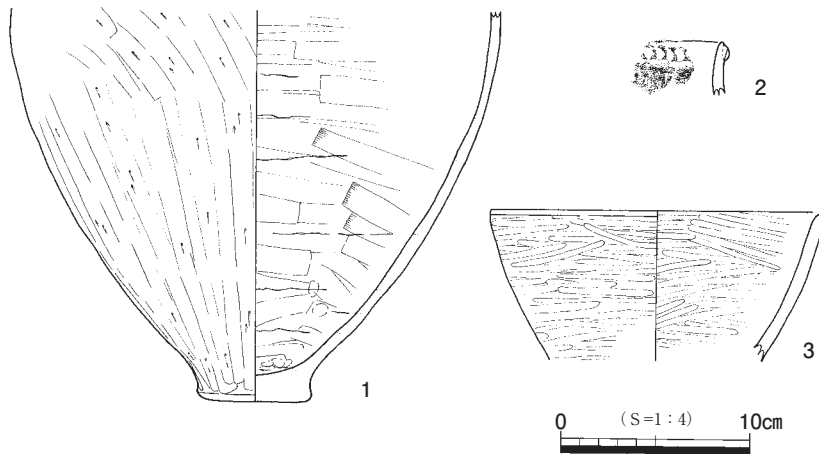


図61 第14-2層出土遺物

で、肩部が屈曲する。頸部内外面は板ナデ、胴部外面はヘラケズリで調整されススが付着している。滋賀里Ⅳ式とみられる。(14)は突帯文土器の壺である。口径13.6cmで、口縁端部の突帯は上面からの強いナデのため、断面は下向きの薄い三角形を呈する。頂部には小V字形の鋭い刻目を施す。頸部には口縁端部側から刻目を入れる際に付いた工具痕が残る。刻目から工具先端までの距離は約4.4cmである。外面は縦方向を中心とする板ナデ、内面は横方向の板ナデで調整する。

(図61-1~3)は第14-2層出土の土器である。(1・2)は突帯文土器の深鉢である。(1)は側面外方に張り出した底部から胴部が内湾気味に外上方にのびる。内傾あるいは直立する頸部がつくと考えられる。底径6.1cm、残存高20.7cmを測る。外面は上方へ縦方向のヘラケズリ、内面は横方向の板ナデののち、上部に一部ヘラミガキがみられる。外面は底面から約6cm上方から上部全面にススが付着する。生駒山西麓産の胎土といえる。(2)は口縁端部が貼り付け調整のため先細りとなっている。突帯断面はかまぼこ形を呈し、小D字形の刻目が施される。(3)は弥生土器の鉢である。やや内湾気味に外上方に立ち上がる。内外面を横方向のていねいなヘラミガキで調整する。河内Ⅰ-4様式、弥生前期後半頃とみられる。

従来の調査における第14-2面は今回の調査区の第14-1面に相当する。弥生前期中葉の河内Ⅰ-2~3様式の土器を中心に、少量の突帯文土器が出土した。また、従来の第14-2層は、縄文晩期後半の長原式段階を中心に、船橋式・宮滝式・滋賀里Ⅲ~Ⅳ式を含み、基本的に弥生土器は包含しないと考えられていた。それに対し、この層に相当する今回の第14-1・2層からは、長原式段階を中心に、河内Ⅰ-2~3様式の弥生土器も出土している。(林)

(12~14)は縄文土器である。(12)は口縁部に2条の刻目突帯をもつ深鉢である。(図58-4)の突帯の貼り付け方とは逆に、最初に2条目の突帯を上面から強くナデて貼り付け、そののち、1条目の突帯を口縁端部上端に沿わせ、下からナデ上げて貼り付けたとみられる。2条とも突帯上に小D字形の刻目を施す。(13)は縄文土器の深鉢



## 5) 第14-2面ベース (第14-2b面) (図62、図版10・11)

### 遺構面の状況と検出遺構

第14-2a層を除去して検出した遺構面で、第14b層としたオリーブ灰色～黒色の中砂～小礫・細砂混粘質シルトの上面に当たる。

地形は第14面と同じく東半の南東-北西方向に長い微高地を中心として西方向に低くなっている。この微高地は、第15面の調査で確認された流路が砂礫層で埋没することによって形成されており、標高はT.P.1.95～2.23mを測る。微高地を形成する第14b層は第15a層の直上から層厚0.5m以上の堆積が認められる砂礫質である。一方、調査区の西側は遺構が希薄で、ベースとなる第14-2b層はシルト質に細粒化しており、湿地の様相を呈する。

第14-2b面では、微高地を中心として縄文時代晩期末～弥生時代前期にかけての木棺墓・土坑墓・土器棺墓・掘立柱建物・ピット・土坑を検出した。木棺墓・土坑墓・土器棺墓は微高地上の北側やや西寄りで見出しており、ピットは微高地の東半を中心に見出している。これらのピットの中には柱痕が断面観察で確認されるものがあり、この中から2棟の掘立柱建物の復元を行っている。第14-2b面の遺構の中には第14-1面で検出された落ち込みに対応するものがあり、遺構が埋まりきらなかったか、木棺墓のように遺構内の空隙が木質の腐朽に伴う陥没によって落ち込みとして認識されたものと推定される。また、「第3章 基本層序と遺構面」でも記述したとおり、第14b面の遺構は本来第14-1・2a層が形成される過程で掘り込まれたものが大半であり、第14b面での遺構検出の目的は第14-1・2a層を除去することにより遺構の埋土とベースとなる地層を区別することにある。

なお、この面を形成する第14b層からは、縄文時代後期～晩期末を中心とした土器が出土している。

### 掘立柱建物1 (図63)

4e・fで見出した東西棟に復元される建物である。規模は、東西2間3.19m×南北2間4.11mである。柱間の平均は1.83mである。建物の主軸方向はほぼ正方位である。

柱穴掘方の平面形は円形・楕円形で、直径0.16～0.54m、深さ平均0.35mを測る。埋土は砂質シルト～粘質シルトを主体とする。494・503・507ピットでは柱痕の可能性のある粘質シルトを確認し、369ピットでは柱抜き取り穴の可能性のあるシルトを確認した。

掘立柱建物1に関連する遺物は出土しなかった。

### 掘立柱建物2 (図64)

3・4gで見出した東西棟に復元される建物である。規模は、東西2間3.51m×南北1間2.25mである。柱間の平均は1.91mである。建物の長軸方向は北に17.5°角度を振っている。

柱穴掘方の平面形は円形・楕円形で、直径0.24～0.45m、深さ平均0.26mを測る。埋土は砂質シルト～粘質シルトを主体とする。403・525ピットでは柱痕の可能性のある粘質シルトを確認した。

掘立柱建物2に関連する遺物は出土しなかった。

### 433木棺墓 (図65、写真5・6、図版14)

433木棺墓は5e・fの中央東寄りで見出した。433木棺墓の北側は444土坑の掘削に伴って消失しており、東側は南北方向の土層観察用のトレンチを設定した場所に当たっているが、木棺については全形を見出すことができた。平面形は南北に長い楕円形である。墓壙の規模は残存長2.00m、残存幅1.02m、検出面からの深さは中央部で0.02mである。棺材の小口板・底板・側板が見出された。遺存状況が悪いため以下に示す棺材の法量は残存値である。



X=-149,840

X=-149,850

X=-149,860

X=-149,870

X=-149,880

Y=-33,910

Y=-33,920

Y=-33,930

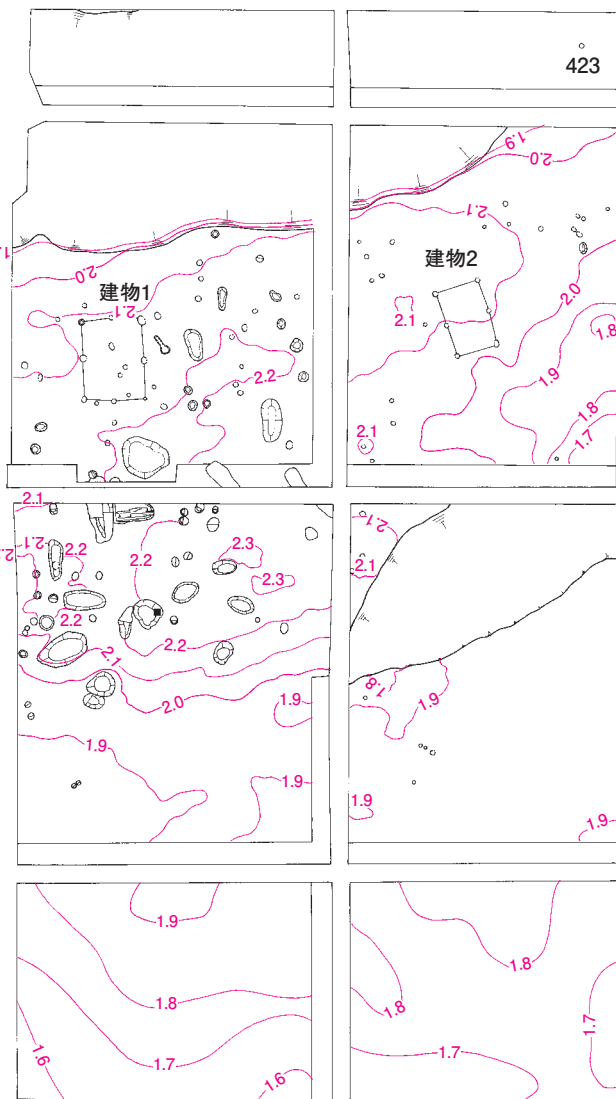
Y=-33,940

Y=-33,950

Y=-33,960

Y=-33,970

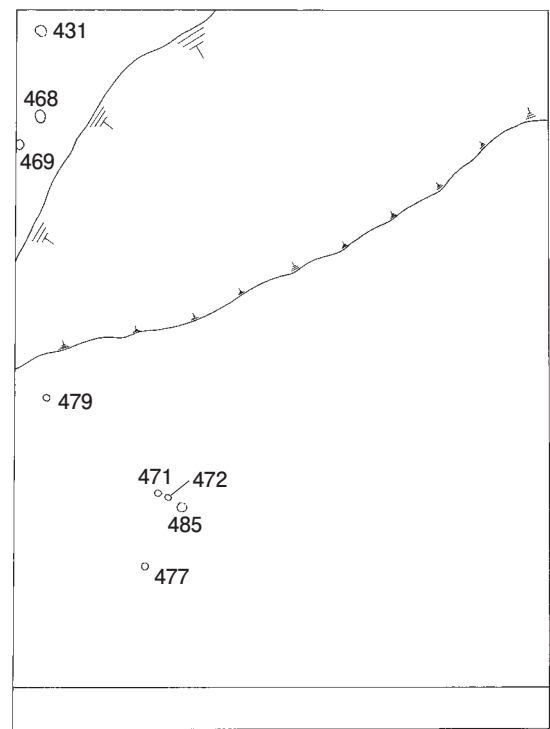
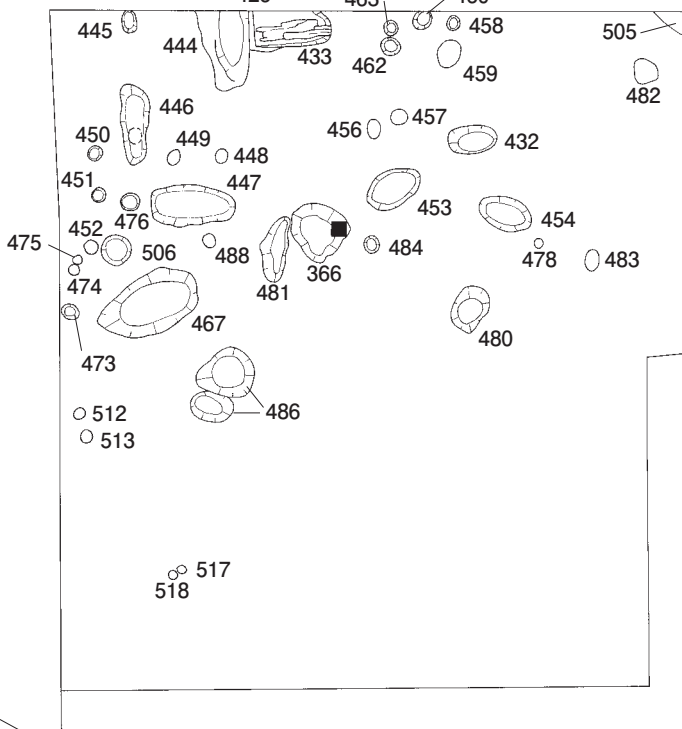
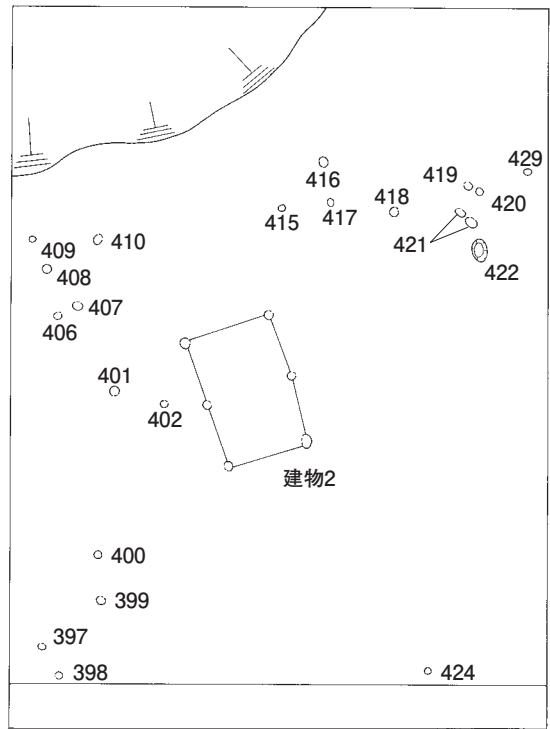
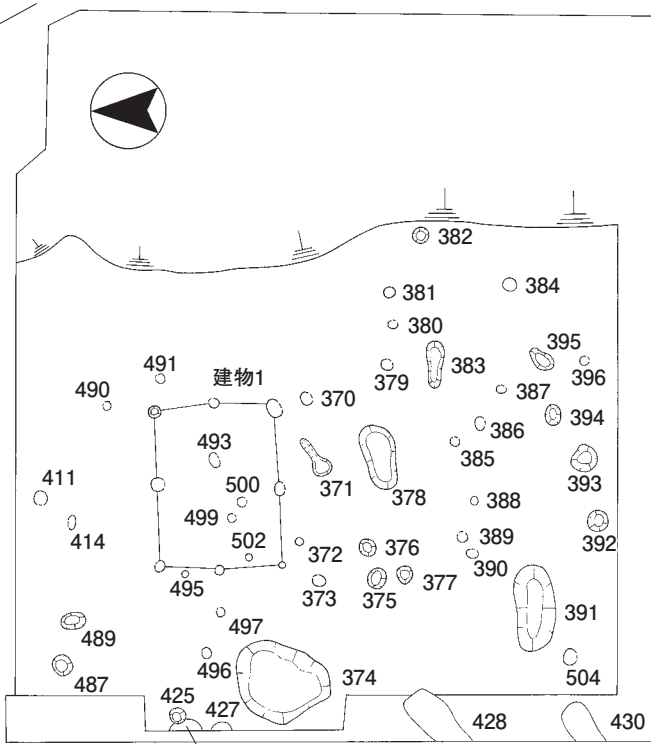
Y=-33,980



■ 土器

0 20m

图62 第14-2 b面 平面图



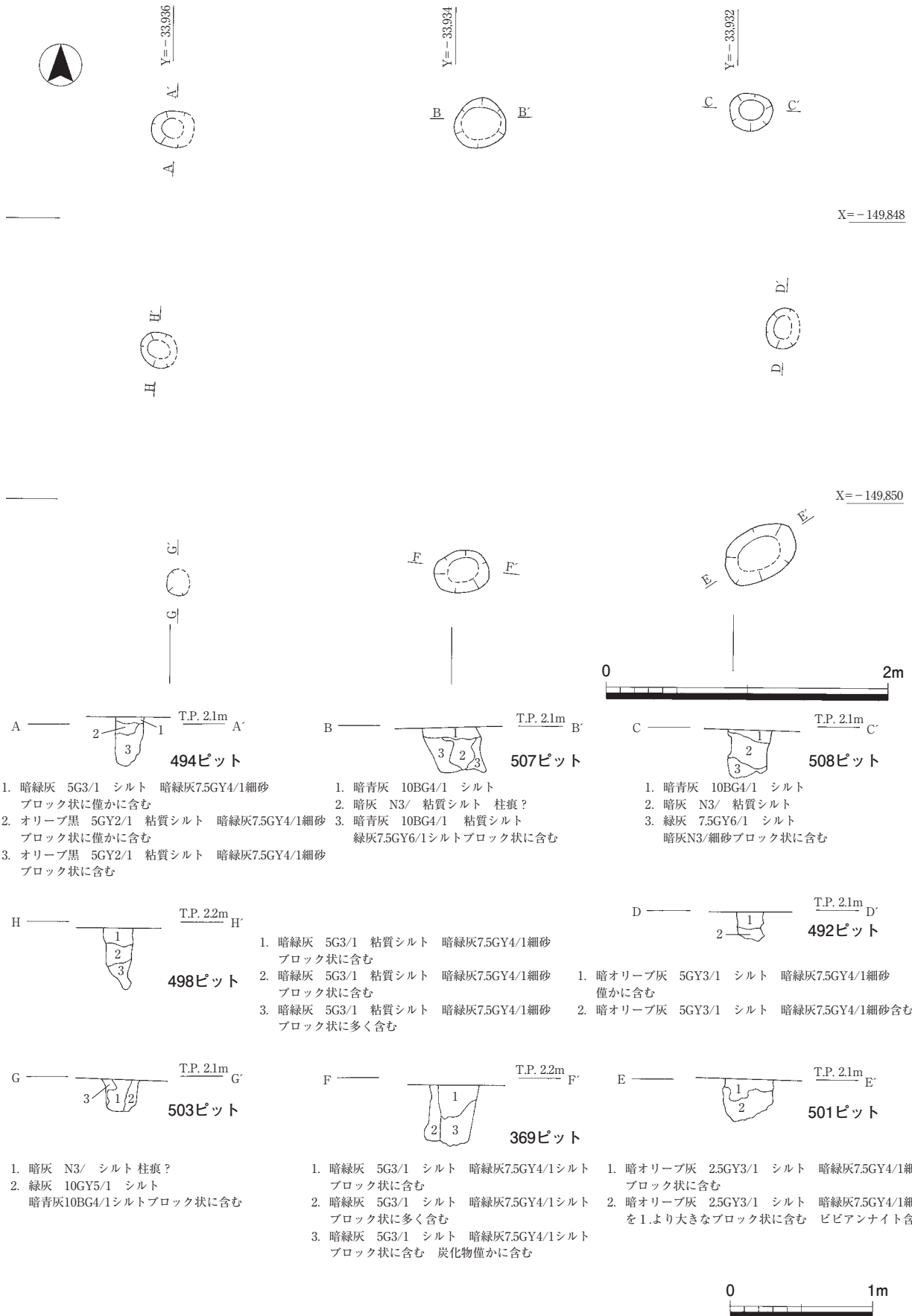


図63 第14-2 b面 掘立柱建物1遺構図

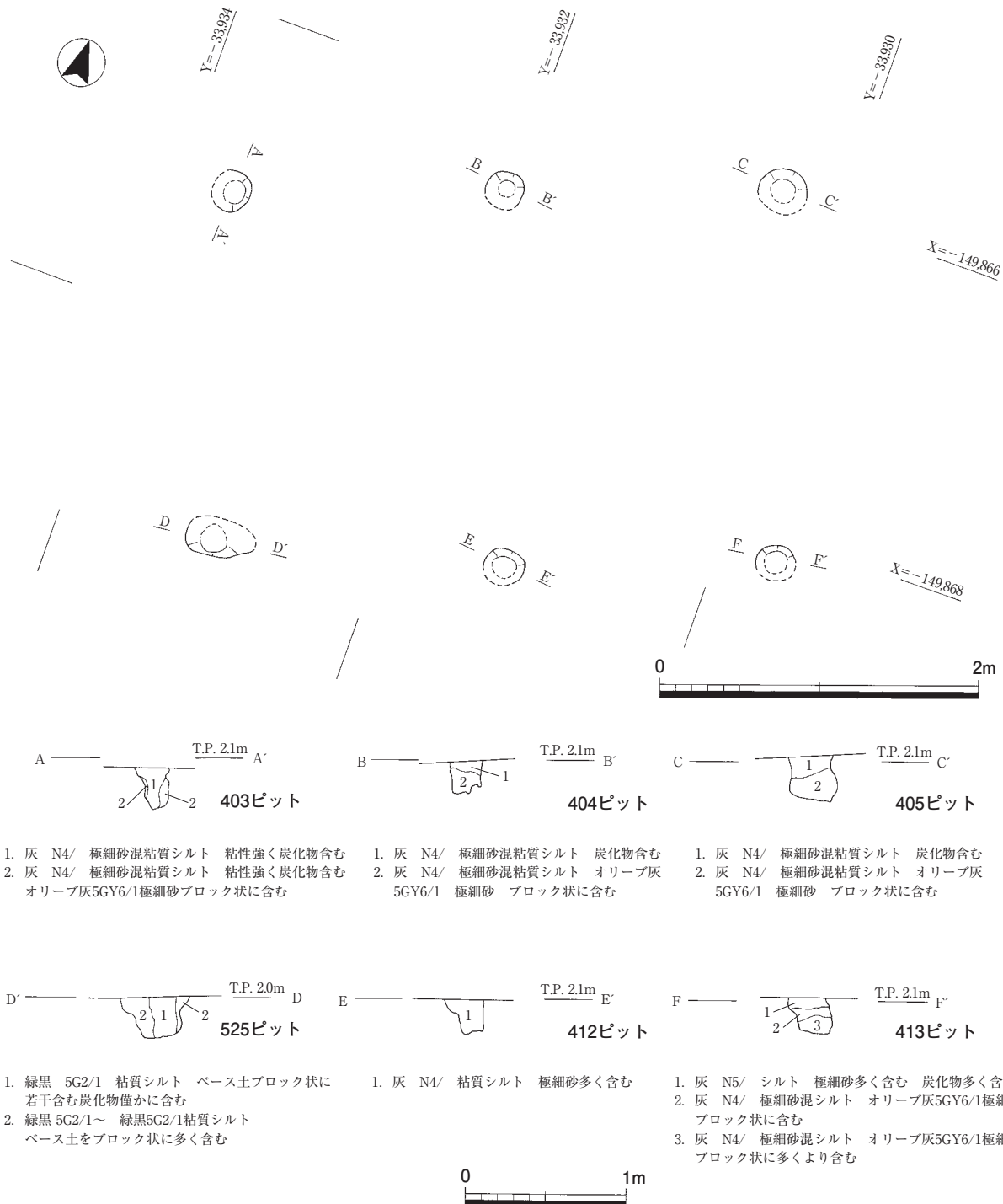


図64 第14-2 b面 掘立柱建物2遺構図

底板は第14-2 b層の直上に設置されており、墓壙の検出面から深さ0.04mに設置される。長さ1.30m、幅0.35~0.38m、厚み0.02mである。調査当初、側板の上端部とほぼ接する位置で確認されたため蓋板と判断したが、断面等の検討結果、底板であることが判明した。底板の直上に堆積する棺内の埋土は黒色粘質シルトで棺外の埋土との違いは明瞭ではなかった。

東西の側板は南北に長い楕円形を呈する掘方を設けて立てる。東側の側板は長さ0.91m、幅0.05m、厚み0.01mである。この掘方の規模は南北1.11m、東西0.07m、底板設置面からの深さは0.06mである。西側の側板は長さ1.58m、幅0.20m、厚み0.02mである。この掘方の規模は南北1.64m、東西0.10m、底板設置面からの深さは0.10mである。側板は辺材を使用しており、内側に向かって内湾しており、棺

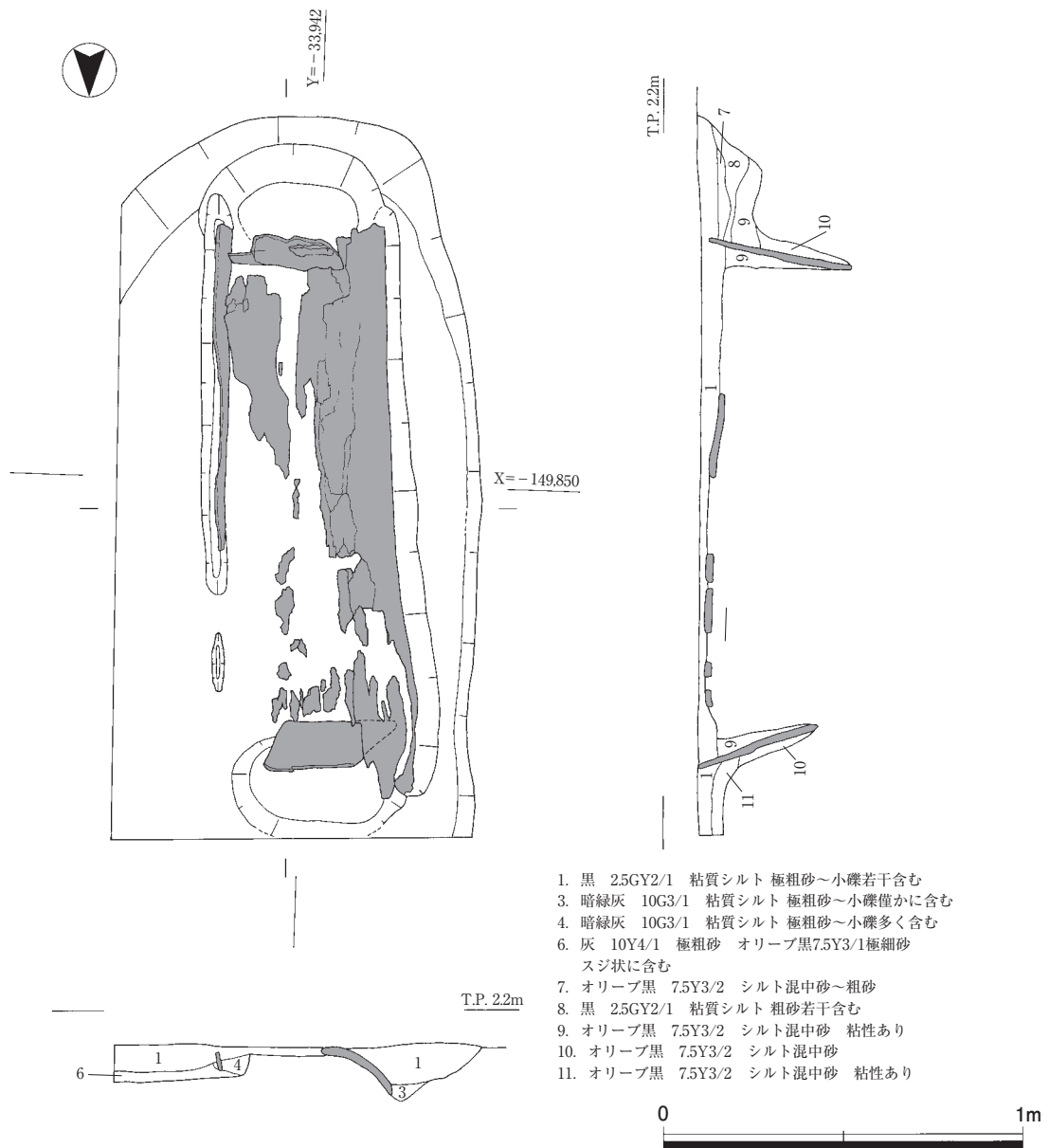


図65 第14-2 b面 433木棺墓遺構図



写真5 433木棺墓検出状況（北から）



写真6 433木棺墓小口断面（西から）



写真7 447木棺墓歯検出状況（南西から）

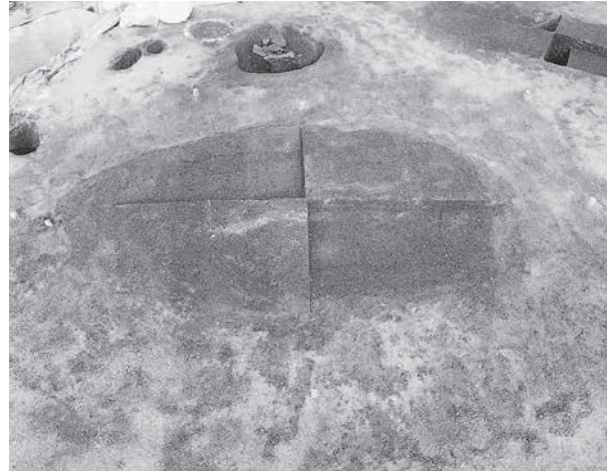


写真8 467木棺墓歯検出状況（西から）



写真9 467木棺墓断面（北東から）



写真10 467木棺墓歯検出状況（北西から）

内の空間はもともと直方体ではなく上部が湾曲するような構造であった可能性がある。

南北の小口板は、東西に長い楕円形を呈する掘方を設けて立てる。北側の小口板の掘方の規模は南北0.25m、東西0.50m、底板設置面からの深さは0.33mである。小口板は長さ0.30m、幅0.33m、厚み0.02mである。南側の小口板の掘方の規模は南北0.35m、東西0.52m、底板設置面からの深さは0.35mである。

小口板は長さ0.40m、幅0.40m、厚み0.02mである。側板と小口板はそれぞれシルト混中砂を主体とした裏込め土を用いる。

側板および小口板から想定される棺内の推定法量は長さ1.30m、幅0.38mで、面積は0.49㎡である。

433木棺墓から棺材以外に土器等の遺物は出土しなかった。

#### 447木棺墓（図66、写真7、図版11・12・15）

447木棺墓は5 e の北東部で検出した。平面形は南北に長い楕円形である。第14-2 a 層を除去した段階で木棺の腐朽部分が陥没した状態で検出されている。墓壙の規模は長さ2.17m、幅0.83~0.96m、検出面から底板設置面までの深さ0.28mである。棺材は腐朽によって失われていたが、棺材の消失した部分には極細砂が認められた。

蓋板は土層断面上で黒色細砂層を認めており、この部分が蓋板の腐朽した部分にあると想定される。蓋板の上部は中央部分が大きくくぼみ、上層の土が入り込んだ状態が断面上で確認されており、木

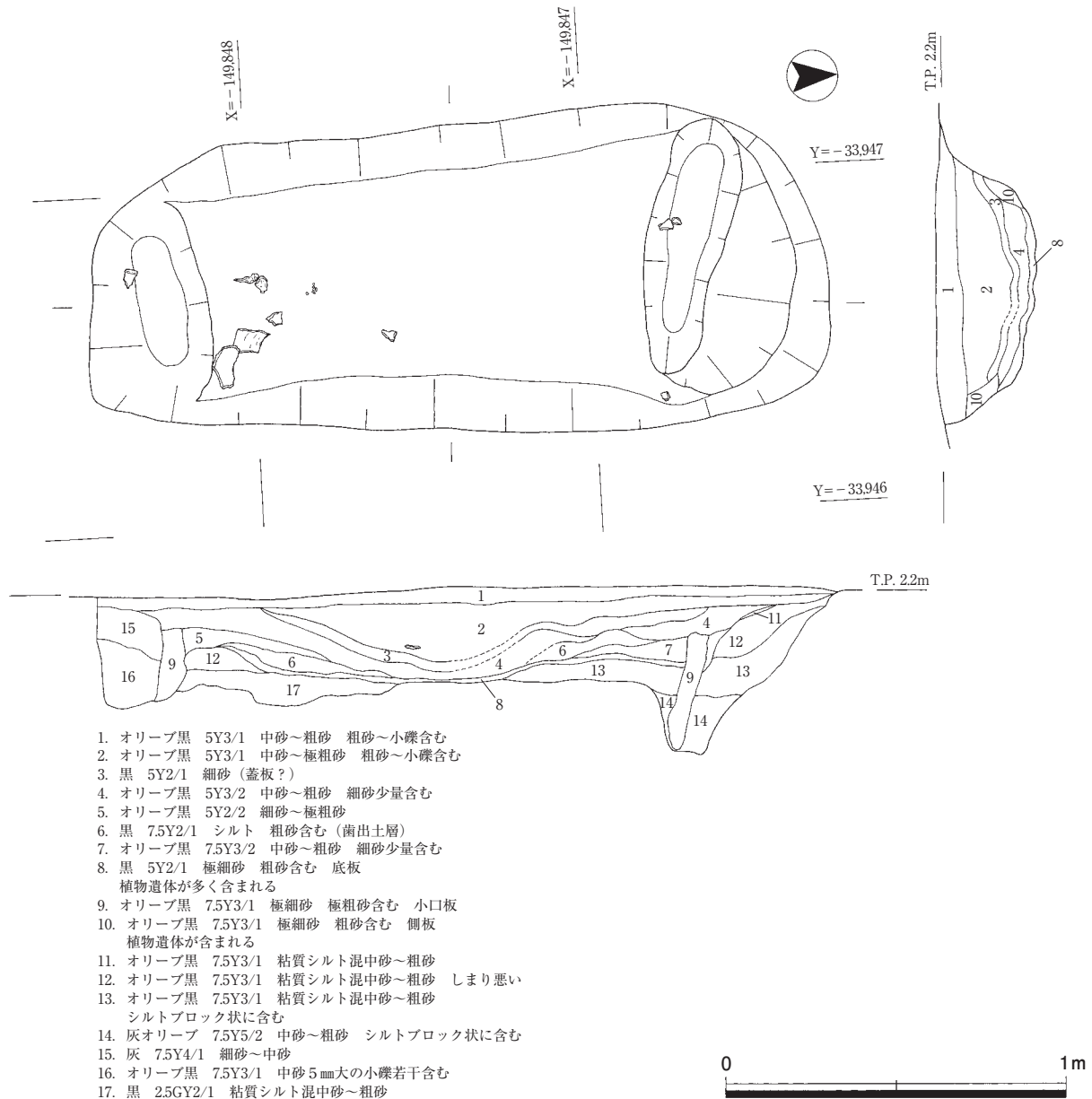


図66 第14-2 b面 447木棺墓遺構図

棺の腐朽に伴って陥没したものと考えられる。

東西の側板は、土層断面上では明瞭ではなかった。調査時には側板に該当すると考えられる部分に極細砂が認められるところもあった。

南北の小口板は、東西に長い楕円形を呈する掘方を設けて立てる。北側の掘方の規模は南北0.23m、東西0.75m、底板設置面からの深さは0.22mである。南側の掘方の規模は南北0.34m、東西0.67m、底板設置面からの深さは0.08mである。細～中砂を主体とした裏込め土を用いる。

底板は明瞭な痕跡は留めていないが、断面上で植物遺体を多く含む極細砂が墓壙の下部で観察されており、この部分が底板に該当する部分であったものと推測される。底板に相当する土層は断面上で中央部がややくぼみ、墓壙のベースとなる第14-2 b層の直上に堆積する状況が確認されている。これはやや湾曲する底板を使用したことに起因するののか、墓壙の底部を平坦に整地していなかったことに起因するののか不明である。

小口板および断面から想定される側板の推定位置から想定される棺内の推定法量は長さ1.27m、幅



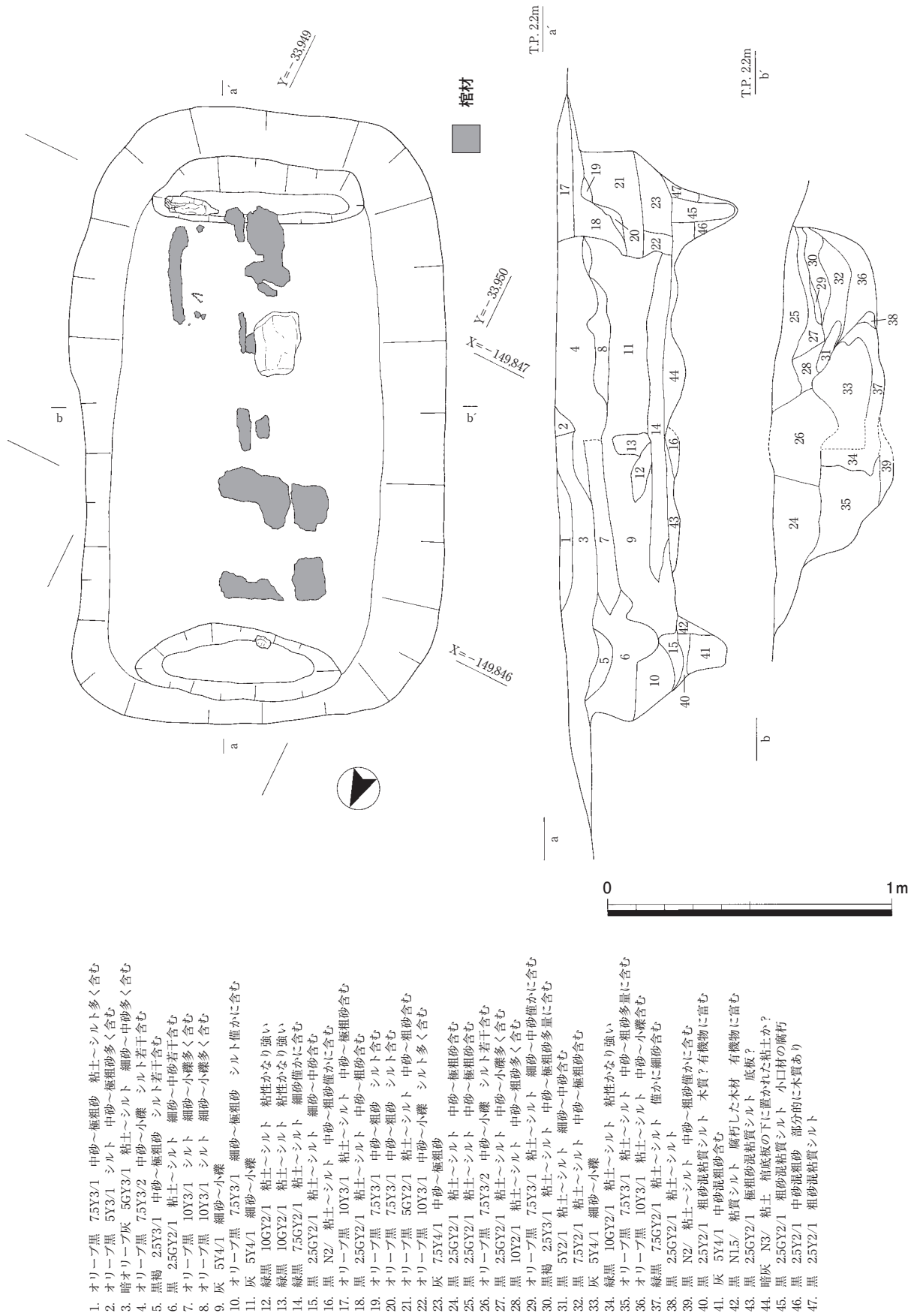


図67 第14-2 b面 467木棺墓遺構図

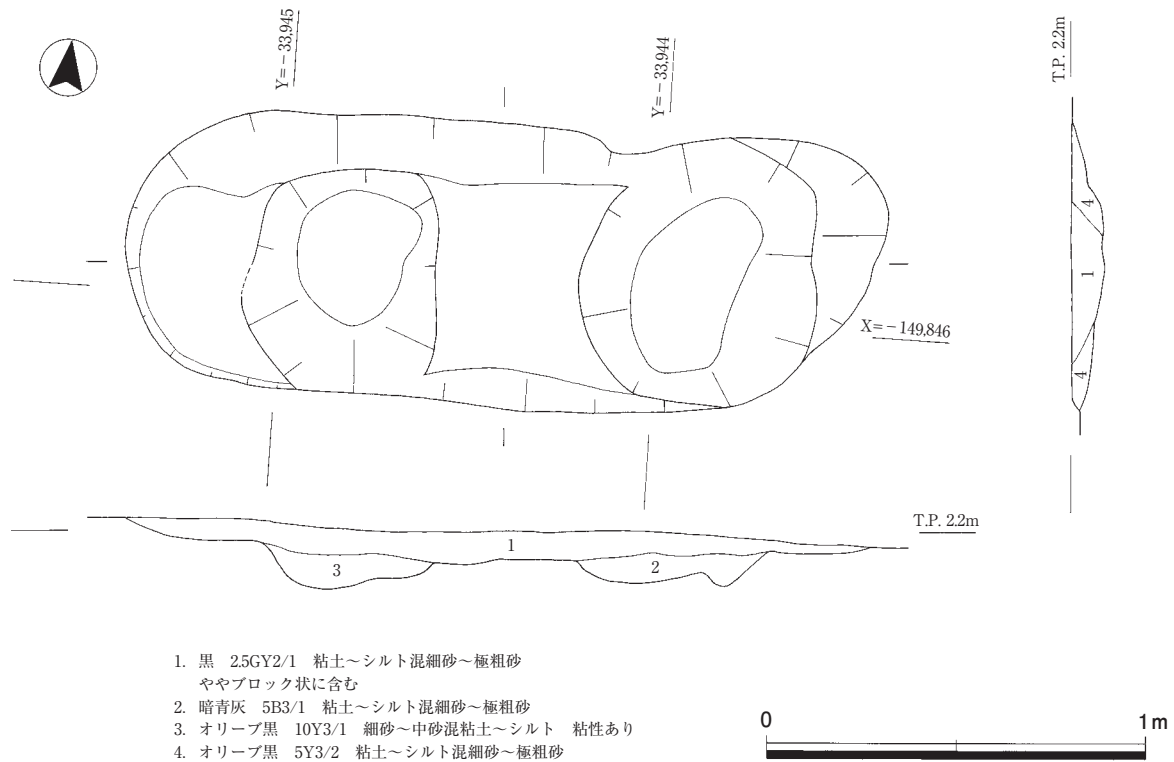


図68 第14-2 b面 446木棺墓遺構図

0.54mで、面積は0.69㎡である。

底板の直上では黒色シルト層を確認しており、この土層からは一体分の歯が出土している。歯は掘方の南側から0.63m離れたところで検出した。

447木棺墓からは南側の棺外を中心にして突帯文土器の壺口縁部・深鉢の破片が出土した。

#### 467木棺墓 (図67、写真8～10、図版11・12・17・18)

467木棺墓は、5・6 eの北側中央で検出した。平面形はやや不整形な隅丸方形である。墓壙の規模は長さ2.18m、幅1.33m、検出面からの深さ0.46mである。棺材の小口板・底板・側板および一体分に相当する歯が検出された。遺存状況が悪いため以下に示す棺材の法量は残存値である。

側板は南東隅で東側の側板に該当する可能性のある木片が検出されている。

南北の小口板は、東西に長い楕円形を呈する掘方を設けて立てる。北側の掘方の規模は南北0.27m、東西0.72m、底板設置面からの深さは0.20mである。南側の掘方の規模は南北0.23m、東西0.74m、底板設置面からの深さは0.23mである。側板と小口板はシルトを主体とした裏込め土を用いる。小口板を設置する南北の掘方では、小口板に該当する木片が検出されているが、遺存状況はきわめて悪い。

底板は墓壙の掘方底面に堆積する緑黒色粘土～シルトの直上で検出された。底板は断片的ながら南北の小口板の掘方の間、1.40mの範囲で検出されている。小口板および残存する底板、断面の木棺痕跡から想定される棺内の推定法量は長さ1.40m、幅0.60mで、面積は0.84㎡である。

墓壙の北側では木棺が検出された同一のレベルで、一体分に相当する歯がまとめて検出された。これらの歯のうち、2点は東側に離れた位置から出土しているが、木棺の腐朽にともなって棺内が陥没した際に動いた可能性が高い。

また、墓壙の中央やや北寄りでは長さ24.0cm、幅14.5cm、厚み10.8cmの礫が出土した。432土坑のように墓壙の上に置かれていたか、底板に接して出土している状況から棺内にもともと納められていた可

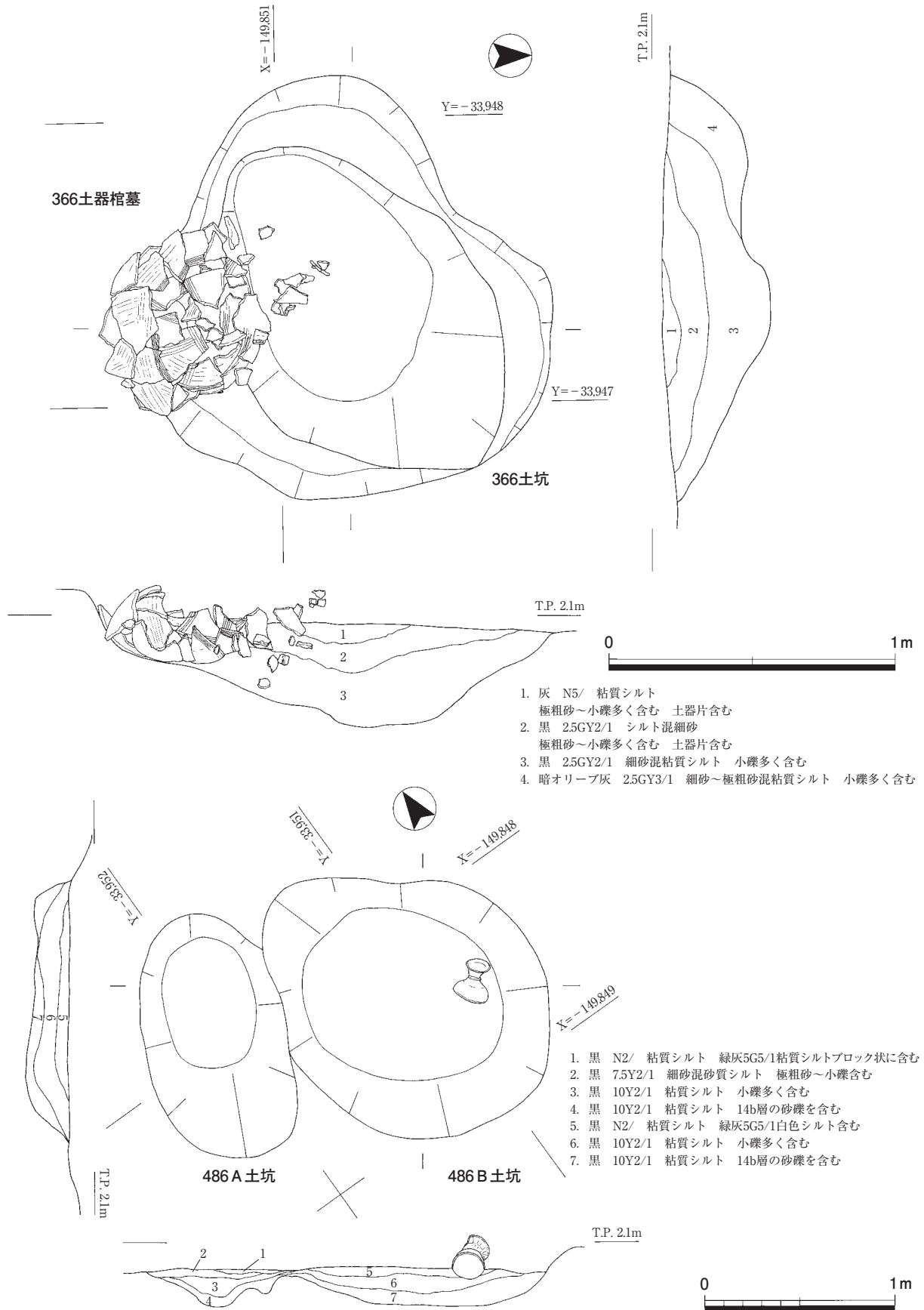


図69 第14-2 b面 366土器棺墓・366土坑・486A・B土坑遺構図

能性がある。

467木棺墓からは、墓壙内から突帯文土器および弥生土器体部の小片、石鏃1点が出土した。

#### 446木棺墓（図68、図版12・14）

446木棺墓は5 eの北東部で検出した。平面形はやや不整形で東西に長い隅丸方形である。墓壙の規模は長さ2.01m、幅0.76m、検出面からの深さ0.09mである。棺材は腐朽して遺存しておらず、断面等の観察においても木質等は検出することができなかったが、平面的な形状や規模、断面形状が他の木棺墓と同じく中央部が山形に盛り上がる形状をもつことから木棺墓と判断した。

南北に設けた土層断面から棺内の埋土は黒色粘土・シルト混細砂・極細砂である。小口板および側板を立てる際の裏込め土はオリブ黒色粘土・シルト混細砂・極細砂と考えられる。

小口板が設置されていたと考えられるのは、埋土の上層にあたる黒色粘土・シルト混細砂・極細砂を除去して検出された東西の凹みである。東側はやや不整形な楕円形の形状をしており、検出面からの深さは0.14mである。西側は南北に長い楕円形の形状をしており、検出面からの深さは0.15mである。また、底板が設置されたと考えられる平坦面が検出されており、東西0.39m・南北0.48mの範囲が平坦になっている。

446木棺墓からは、土器体部の細片1点およびサヌカイト剥片1点が出土した。

以上、木棺墓と断定できるのは3基で、木棺墓と想定されるものを含めると計4基である。いずれも墓壙の底部に小口板を設ける際の掘方が検出されており、433木棺墓では側板を設置する際の掘方が確認されている。棺材の遺存状況は総じて悪く、棺の構造を完全に復元できるものはないが、棺材の残存状況、小口板および側板を設置する際の掘方から、棺の構造は同形式であったものと推測される。しかし、433木棺墓のように側板を設置する際の掘方が明瞭なものもあり、棺の構造に違いがあった可能性も否定できない。木棺の規模は先述のとおりで、最大となるのは467木棺墓で最小となるのは446木棺墓である。これらの木棺墓が検出された範囲は5 e周辺に集中しており、土坑墓を含めると墓壙が集中するのは5 e・fで、基本的に重複しない。被葬者の歯が検出されたのは447・467木棺墓でいずれも墓壙の南寄りで検出されている。

#### 366土器棺墓・366土坑（図69、写真11、図版12・13）

366土器棺墓は5 fの中央部、366土坑の南肩で検出した。土器棺を据えた際の掘方は確認できなかったが、一個体でまとまって出土していることから第14-2 a層中から掘り込まれた土坑に埋納された可

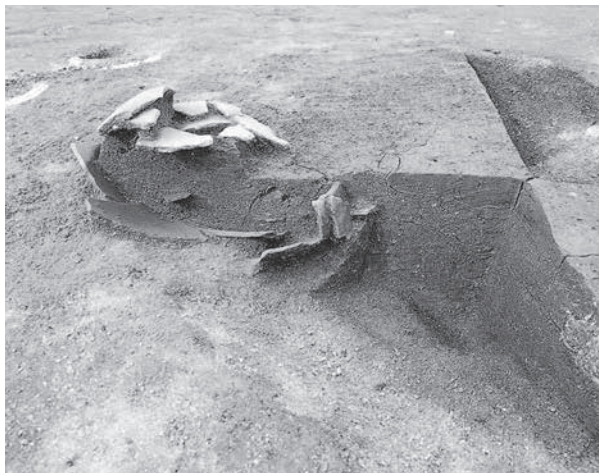


写真11 366土器棺墓断面（東から）



写真12 486 B土坑検出状況（北から）

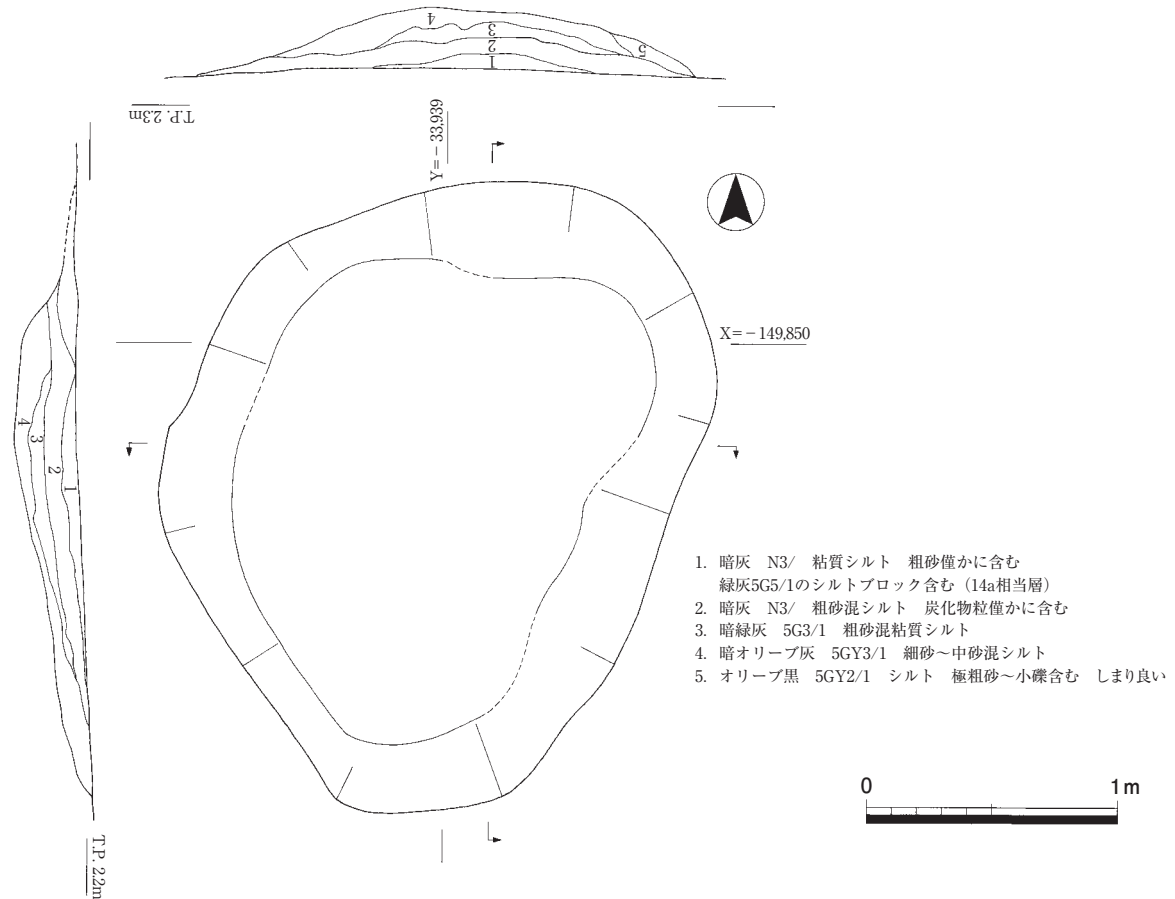


図70 第14-2 b面 374土坑遺構図

能性が高い。弥生時代前期中段階の広口壺を棺身として用い、小型の鉢を蓋として用いたと考えられる。

棺身として用いた広口壺は口径25.3cm、器高46.8cmで、底部を正位にして北側にやや傾いた状態で出土した。蓋として用いたとみられる鉢は第14-2 a層を掘削した段階で取り上げを行ったため出土状況は不詳である。口径24.5cm、器高23.6cmである。土器棺内からは歯・人骨等の出土はなかった。

366土坑は366土器棺墓とともに検出された。平面形は、西側に丸みを帯びて山形にふくらむ、南北に長い楕円形の形状である。規模は南北1.58m、東西1.49m、深さ0.36mである。埋土は下層から暗オリーブ灰色細砂～極粗砂混粘質シルト、黒色細砂混粘質シルト、黒色シルト混細砂、灰色粘質シルトで、全体的に粘性の強いシルトで埋め戻されている。若干の突帯文土器が出土している。

#### 486 A・B土坑 (図69、写真12)

486 A・B土坑は6 eの中央部北寄りで検出した。平面形は8の字に近い形状をしている。遺構検出時に2つの土坑として認識していたが、断面を検討した結果、一つの遺構と判断した。しかし、埋土が類似することから切り合い関係を完全に把握しきれなかった可能性がある。報告に当たって西側の北東から南西に長い楕円形部分をAとし、その東側のやや不整形な円形部分をBとして記述を行う。Aは長さ1.32m、幅0.76m、深さ0.19mである。埋土は黒色細砂混シルト～粘質シルトを主体とする。突帯文土器深鉢の口縁部の破片が出土した。Bは直径1.35m、深さ0.19mである。埋土は黒色粘質シルトである。北東よりの遺構検出面で、口縁部をやや下向きにして弥生時代前期中段階の高杯がほぼ完形で出土している。(後川)

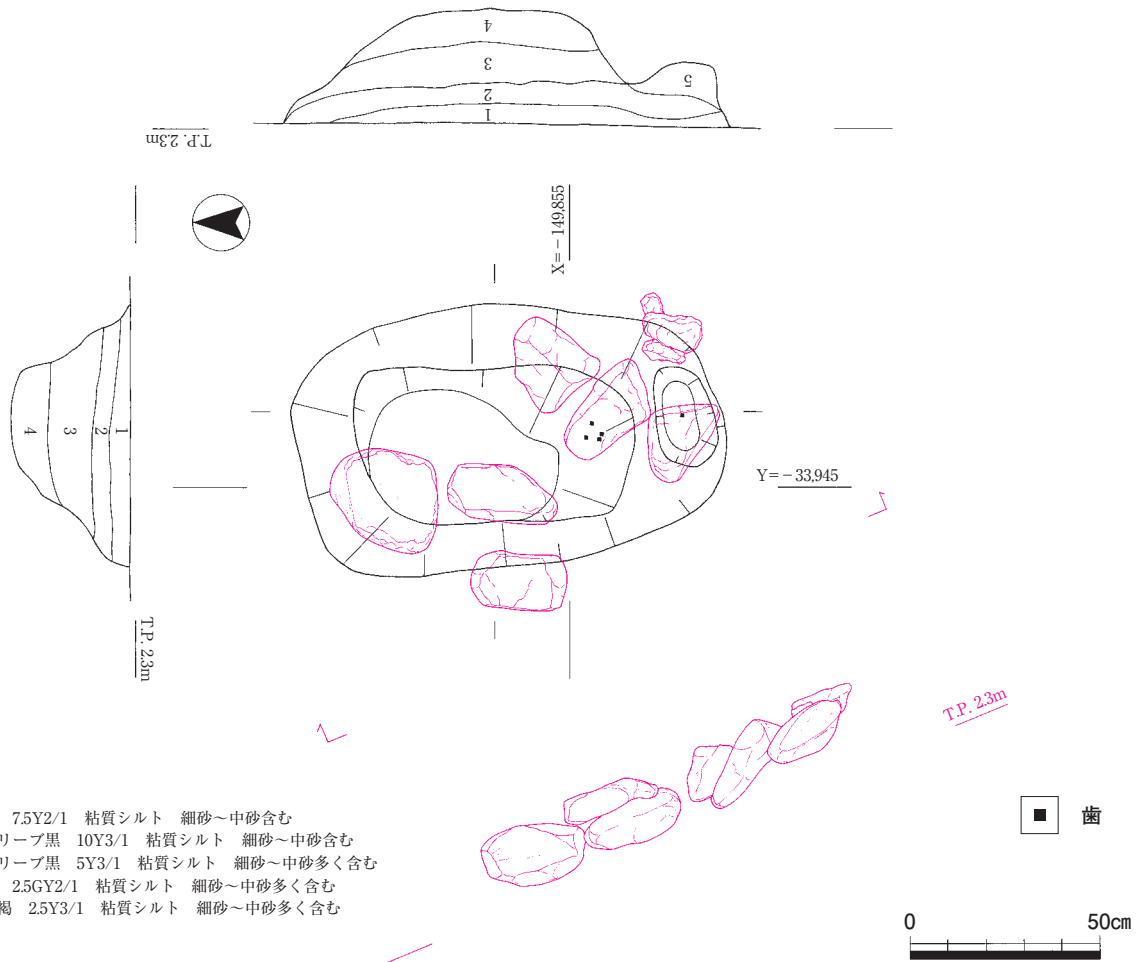


図71 第14-2 b面 432土坑遺構図

### 374土坑 (図70)

374土坑は4 e・fに位置しており、平面はややいびつな長楕円を呈する土坑である。南北方向に長く、長径2.45m、短径2.10m、深さは約0.35mを測る。埋土の最上層は第14-2 a層に相当する暗灰色の粘質シルトで、上層は暗灰色の粗砂混シルト、中層は暗緑灰色の粗砂混粘質シルトである。下層は暗オリーブ灰色細～中砂混シルトである。出土遺物は細片が多いものの突帯文土器深鉢・弥生土器広口壺2点が図化できた。



写真13 432土坑断面 (南西から)

### 432土坑 (図71、写真13、図版13)

432土坑は木棺墓に近接して南側、5 fに位置している。長さ1.15m、幅0.7mと南北に長軸をもつ隅丸方形を呈し、深さ0.3mを測る。土坑上部には20～30cm大の礫がまとまって出土した。厚みは0.1m前後といずれも扁平である。7点がそれぞれが重なることなく出土している。礫は第14-1面でその一部を検出しているが、礫の設置されていた高さはT.P. 2.35m前後で第14-2 a層中となる。土坑の掘方は下面(第14-2 b面)で検出しており、本来は礫設置面付近から掘り込ま

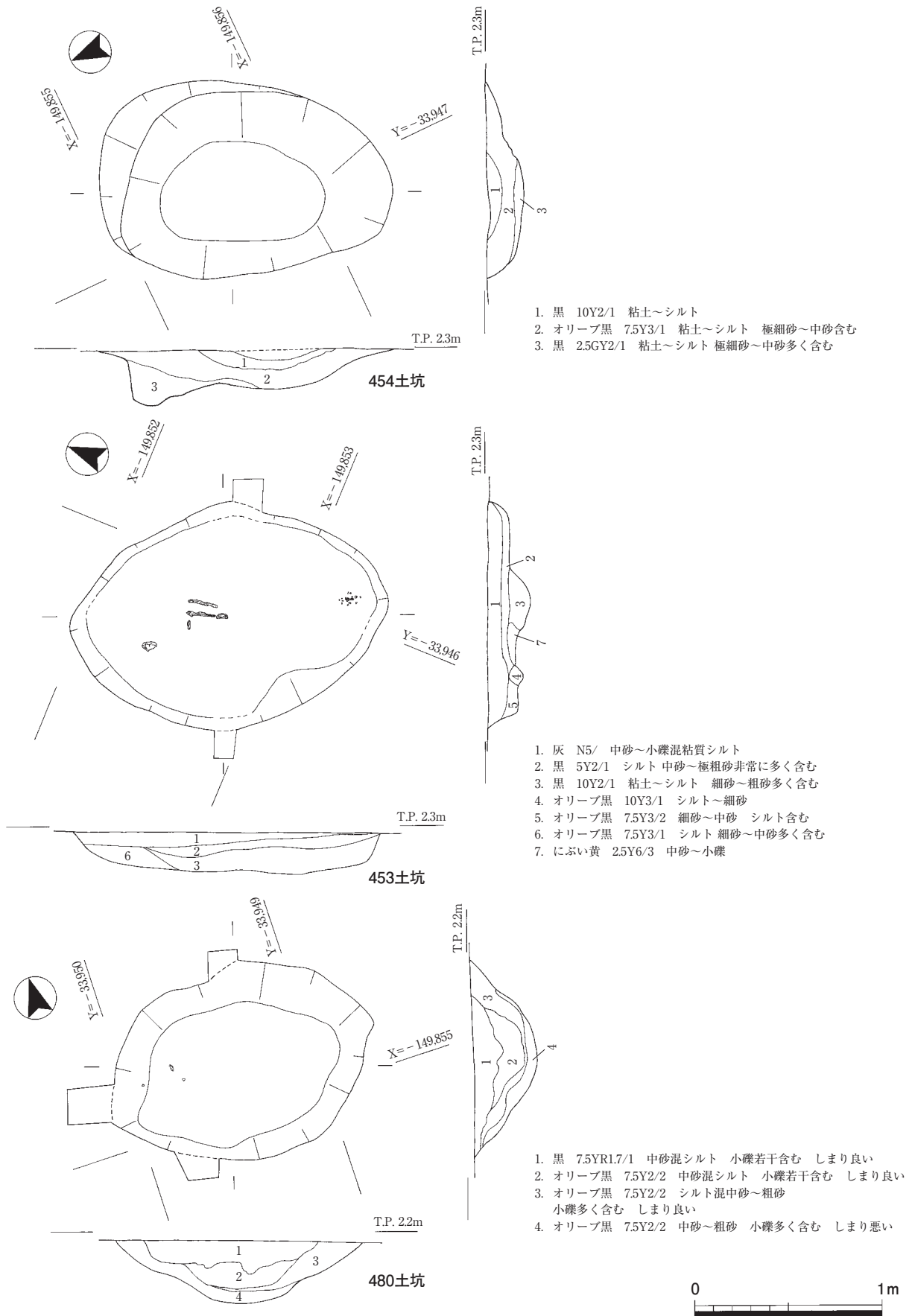


図72 第14-2 b面 454土坑・453土坑・480土坑遺構図

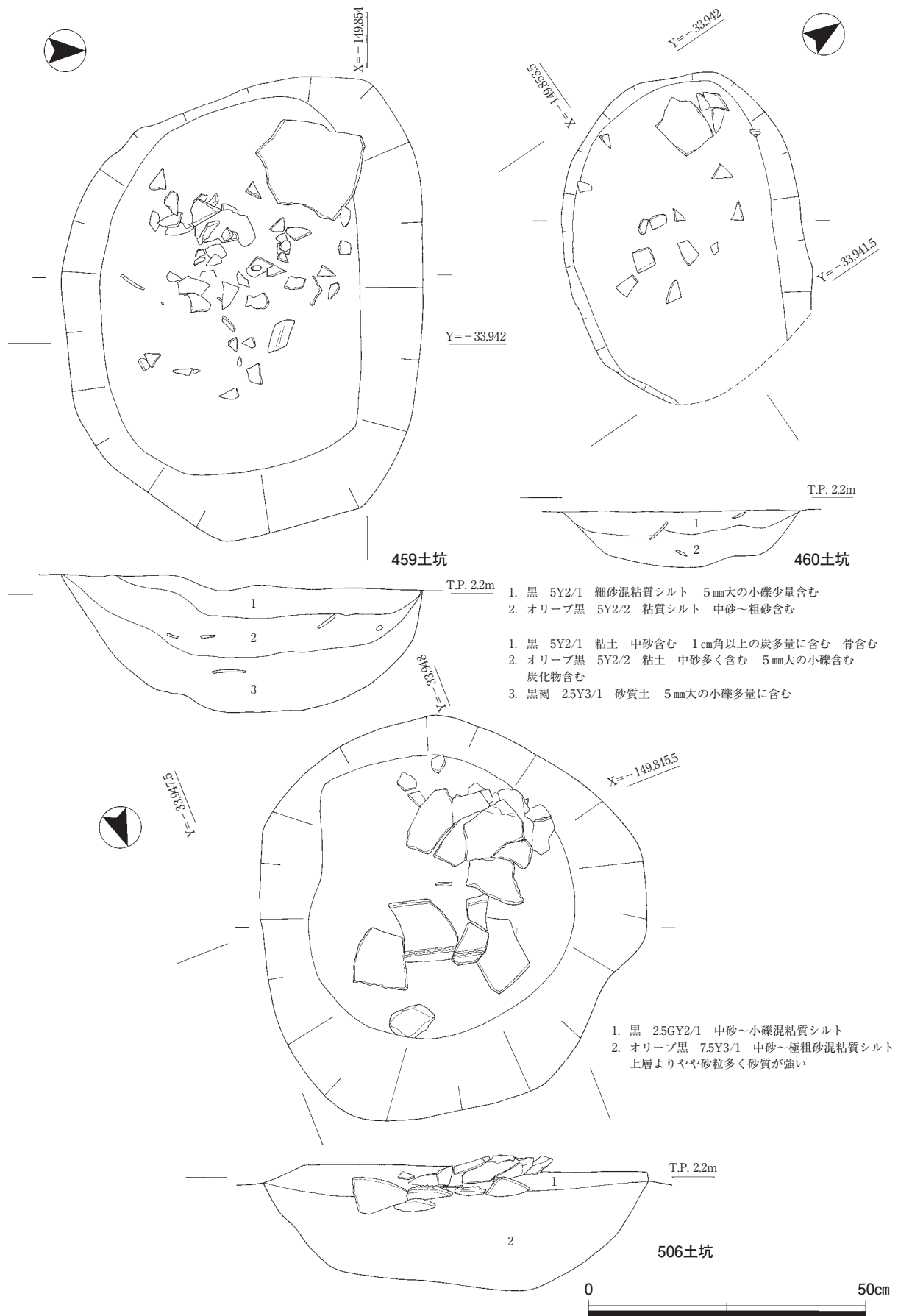


図73 第14-2 b面 459土坑・460土坑・506土坑遺構図



れたものと考えられる。

土坑は検出面から深さ約0.1mの部分で面をもち、北側は南北方向に長い隅丸方形に、南側は東西方向に長い楕円形状に落ち込んでいる。隅丸方形の部分は長さ0.75m、幅0.4mを測る。埋土はオリブ黒～黒色の粘質シルトで細砂～中砂を多く含む。底部は比較的平らである。この方形部分の上面南側で歯が出土した。歯は複数がまとまって出土しており、それぞれの部位は特定できていないが、概ね原位置を保っているものと考えられる。このような状況から配石を伴う土坑墓と考えられ、頭部を南に向けて埋葬されていた可能性が考えられる。

楕円形の部分は長さ0.3m、幅0.15mを測り、埋土は黒褐色の粘質シルトで細砂～中砂を多く含む。この上面でも同様に歯が出土しているが、これは単独で出土している。先の歯との関連は不明である。

出土遺物は細片が多く、図化できたのは底部1点である。

### 土坑

微高地北半、4・5fを中心として多くの土坑が検出された。土坑は長楕円形あるいは隅丸方形を呈する大形のもの、円形に近い小形のものがみられる。大形の土坑の中には先述の土坑墓に類似した規模を呈するものが含まれている。また、円形の土坑にはやや大形で土器が比較的まとまって出土したものがみられた。他は概して遺物の出土は少なく、細片がほとんどであった。

#### 454・453・480土坑 (図72、図版15・16)

454・453・480土坑は5fに位置する楕円形を呈する土坑である。平面形、規模とも類似している。ただし、長軸の方向は一定していない。

454土坑は長さ1.55m、幅1.05m、深さ0.20mを測る。長軸は北北東－南南西方向である。埋土は黒～オリブ黒色の粘土～シルトであり、下層は極細砂～中砂を多く含み、上層に比して砂質が高い。上面には第13b層と考えられる暗緑灰色の粘質シルトの堆積が確認でき、第14-1a面でも一部土坑状の落込みが確認できる。土坑内からは土器片が出土している。

453土坑は長さ1.65m、幅1.20m、深さ0.23mを測る。長軸は北北西－南南東方向である。埋土は黒色の粘土～シルトを主体とし、最下層にはオリブ黒色のシルト～中砂がみられる。土坑の南側、肩部から0.10～0.15m、土坑の底部から約0.03～0.05cm前後上部で歯が出土した。複数がほぼ同じ高さでまとまった状態で出土している (図版16)。部位等の特定はできていないが、原位置をほぼ保っているものと考えられる。他に人骨と考えられる骨片を土坑中央付近で検出した。このような状況から453土坑は土坑墓であると考えられる。頭蓋骨等は遺存していないが、歯の出土状況から、頭部を南に向けて埋葬されたものと推測できる。また、土坑北側では土坑底部よりやや上部で礫が出土した。礫は約8cmを測る。他に土器の細片がわずかに出土した。

480土坑は長さ1.30m、幅1.11m、深さ0.33mを測る。長軸は西北西－東南東方向である。断面形はU字状を呈し、上記2基に比して深い。上層は黒～オリブ黒色の中砂混シルト、下層はオリブ黒色のシルト混中～粗砂・中～粗砂で砂質が高い。土器片がわずかに出土した。

#### 459・460・506土坑 (図73、図版11・12・19)

459・460・506土坑は0.6～0.7m前後の円形あるいはやや楕円形を呈する土坑である。各土坑からは比較的まとまって土器が出土した。

459土坑は5fに位置している。南北0.65m、東西0.80mの楕円形を呈し、深さは約0.25mを測る。埋土は3層に細分でき、上層は黒色の粘土で炭を非常に多く含んでいる。また骨片もみられた。中層は

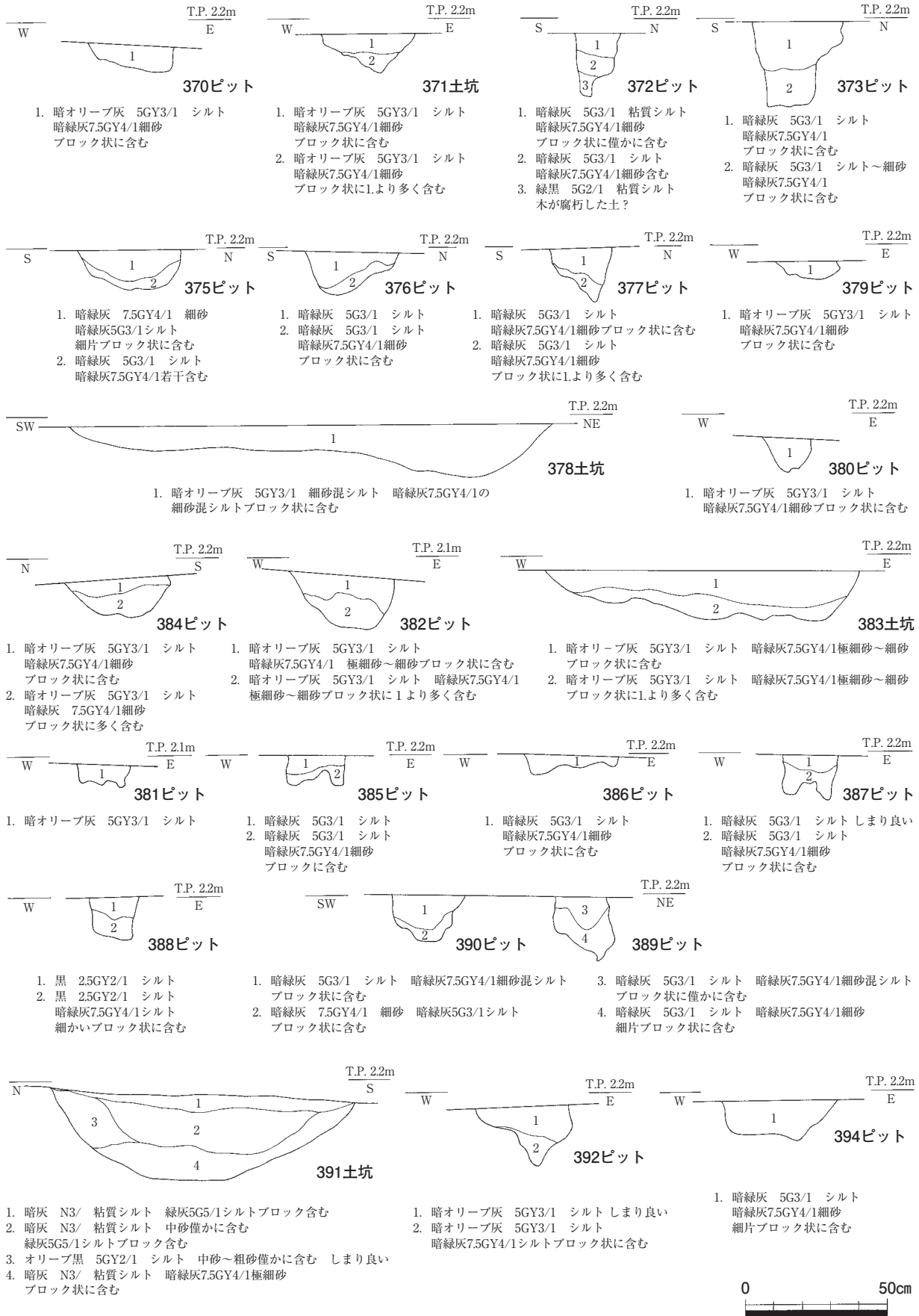


図74 第14-2 b面遺構図(1)

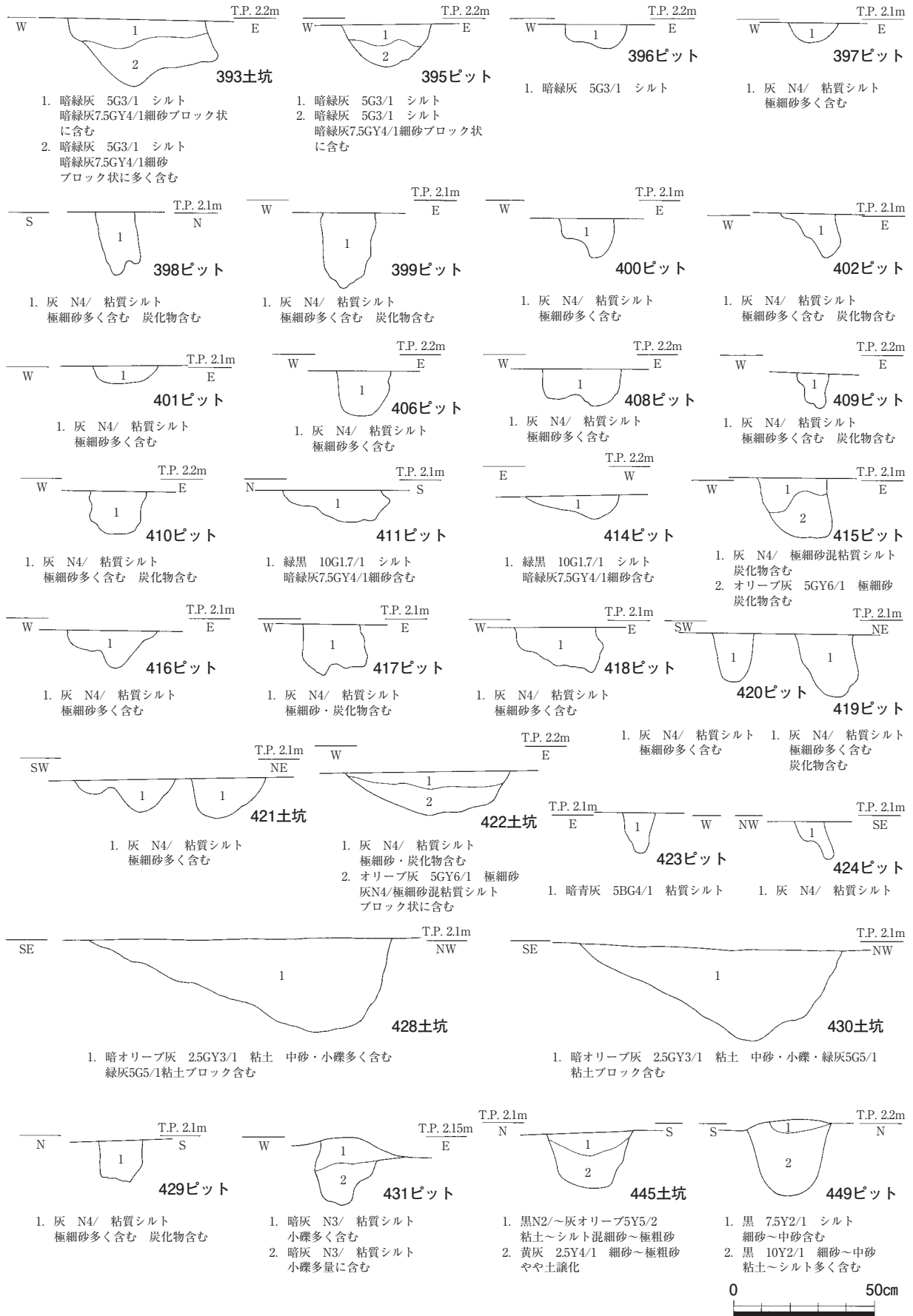


図75 第14-2 b面遺構図 (2)

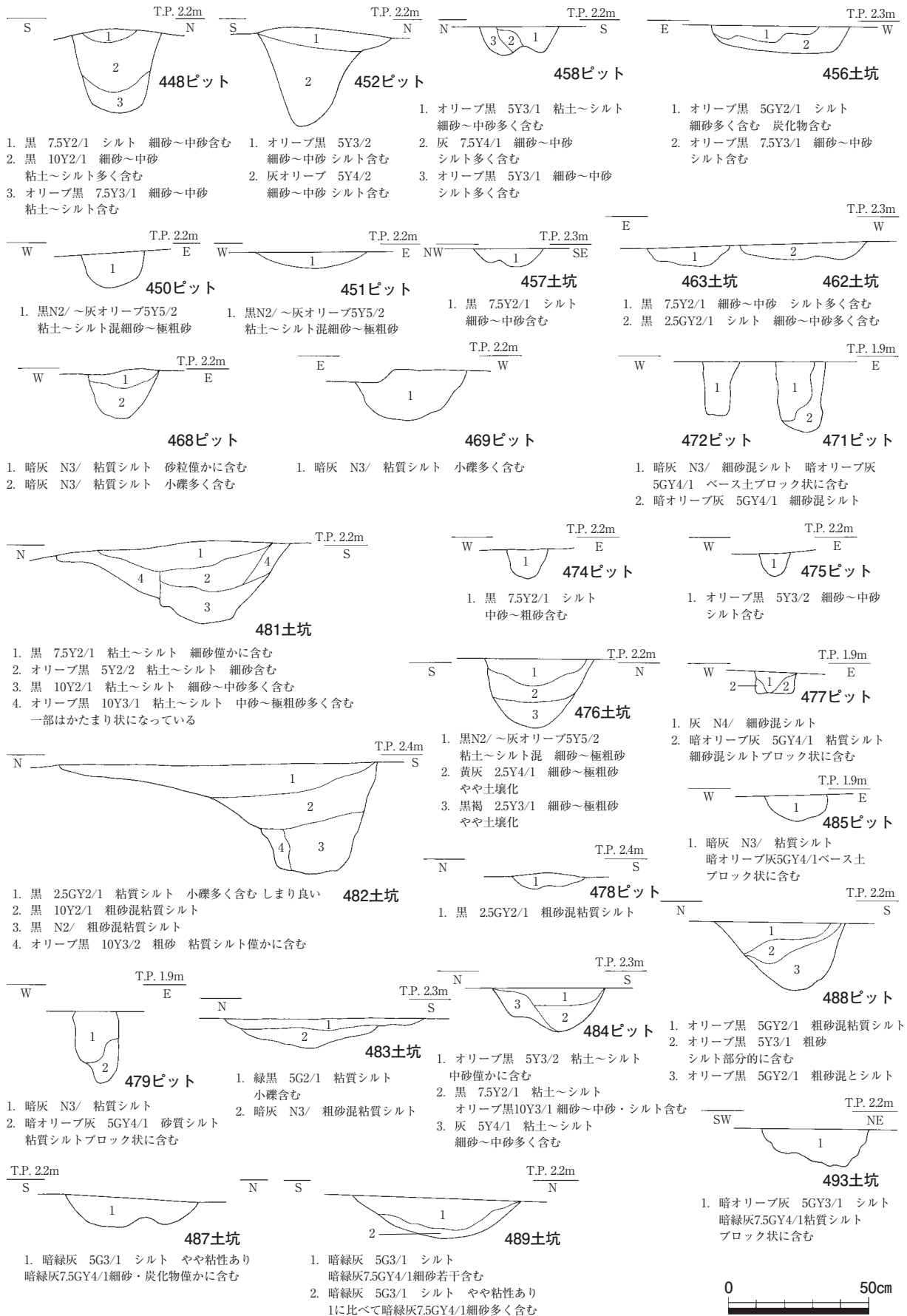


図76 第14-2 b面遺構図(3)

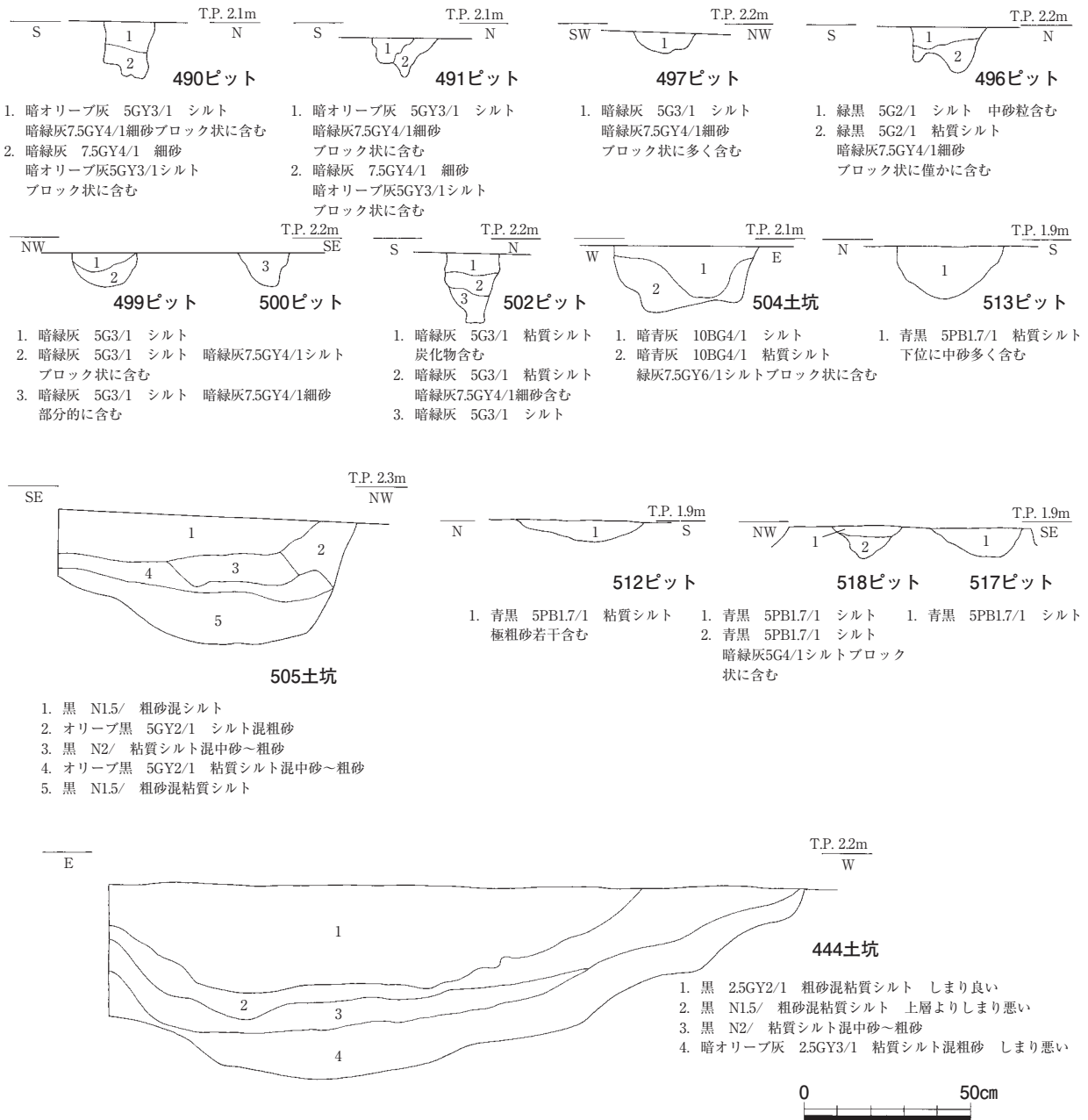


図77 第14-2 b面遺構図(4)

オリーブ黒色の粘土で中砂を多く含む。下層は黒褐色の砂質土で砂礫を多く含んでいる。土器片は上層、中層内では比較的細片であったが、下層では浅鉢の底部の大きな破片が内面を上に向けて出土している。出土遺物のうち図化できたのは突帯文土器深鉢・浅鉢5点である。

460土坑は459土坑の北東に近接して位置している。南北0.44m、東西0.59mの楕円形を呈し、深さは0.1mを測る。埋土の上層は黒色の細砂混粘質シルト、下層はオリーブ黒色の粘質シルトである。深鉢体部の比較的大きな破片が、内面を上に向けている。土坑底部には接しておらず、概ね上層から出土している。突帯文土器を含む深鉢3点が図化できた。

506土坑は土坑墓・木棺墓の集中している5 eに位置している。直径約0.7mの円形を呈し、深さは約0.2mを測る。突帯文土器深鉢の破片がまとまって出土した。埋土は2層に細分され上層は黒色の中砂~小礫混粘質シルト、下層はオリーブ黒色の中砂~極粗砂混粘質シルトで土器は下層上面で出土してい

る。大部分の破片は内面を上にした状況であった。僅かに口縁部の破片が外面を上にして出土している(図版19)。

出土した破片は同一個体のものであり、半分以上に復元できた。ただし、底部は含まれていない。土器と遺構検出面の高さが近いことから、土坑は上部を削平されているものと考えられ、本来は一個体の深鉢が口縁部を南側に向けて横位に置かれた土器棺墓である可能性も考えられる。

#### 378・383・391・444・481土坑(図74・76・77、写真14)

378・383・391・444・481土坑は東西方向に長い楕円形を呈する土坑である。383土坑は上記に比してやや規模が小さいもののやはり東西方向に長い楕円形を呈する。

378土坑は4 f に位置する。長さ1.75m、幅0.8m前後、深さ0.15mを測る。埋土は暗オリーブ灰色の細砂混シルトに暗緑灰色の細砂混シルトをブロック状に含む。土坑の底部は平らではなく凹凸が認められる。遺物は土器片がわずかに出土している。

383土坑は4 f に位置する。長さ1.2m、幅0.4m前後、深さ0.2mを測る。埋土は暗オリーブ灰色のシルトで、下部は上部に比べて暗緑灰色の極細～細砂ブロックを多く含む。土坑の底部は比較的凹凸がみられる。

391土坑は4 f に位置する。長さ2.30m、幅1.08m、深さ0.33mを測る。埋土の上層は暗灰色の粘質シルトで緑灰色のシルトブロックを含む。下層はオリーブ黒～暗灰色のシルト・粘質シルトで極細砂をブロック状に含む。

444土坑は433木棺墓と切り合い関係にあり、444土坑が後出する。残存長2.1m、幅1.3m、深さ0.60mを呈する。埋土は、上層は黒色の粗砂混粘質シルトで、中層は黒色の粘質シルト混中～粗砂、下層は暗オリーブ灰色の粘質シルト混粗砂である。

481土坑は5 e に位置する。長さ1.7m、0.8m前後、深さ0.3mを測る。埋土は黒～オリーブ黒色の粘土～シルトで砂を含み、4層に細分できる。遺物は土器片が出土している。

以上の土坑は全体に平面形が歪であり、378・383土坑のように底部の凹凸が著しいものがみられ、埋土にはベース土と考えられる比較的大きなブロック土を多く含んでいる。これまでの池島・福万寺遺跡では対応する面で「縄文土坑」と呼称される馬蹄形の土坑状の落込みを検出しており、地震による地形の変形と考えられている。これらはいずれも東西方向に長軸をもっており、南北方向に揺れた可能性が指摘されている。今回も噴砂の痕跡が確認されており、上記の土坑はいずれも東西方向に長軸をもってい

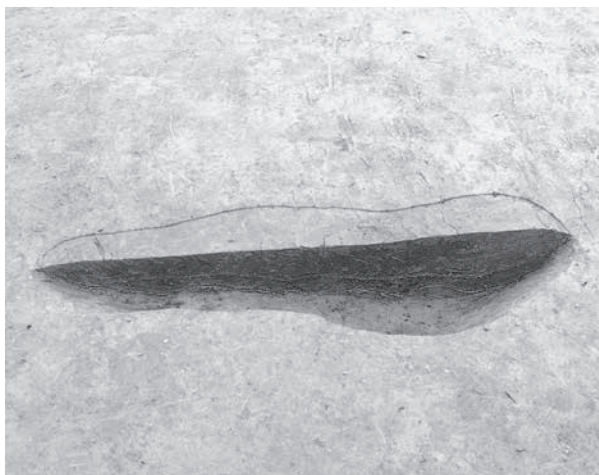


写真14 383土坑断面(南から)

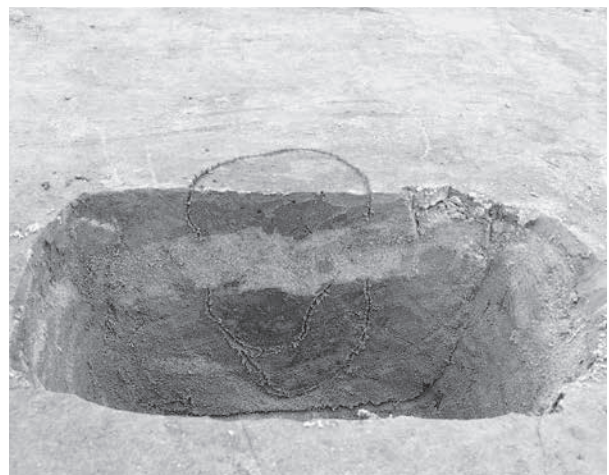


写真15 479ピット断面(南から)

ることから「縄文土坑」に類似した遺構の可能性も考えられる。

#### 428・430・505土坑（図75・77）

428・430・505土坑は近接して位置するが、いずれも調査区の土層観察用トレンチによって一部を削平されており、平面形は不明ではあるが、長軸が北東－南西の隅丸長方形、あるいは長楕円形を呈するものと考えられる。428・430土坑はいずれも幅0.7～0.8m、深さ0.3mを測る。428土坑は残存長で1.6m、430土坑は残存長で1.3mを測る。埋土は暗オリーブ灰色の粘土で緑灰色の粘土ブロックを含む。505土坑は深さ0.4mを測る。埋土の上層は黒色の粗砂混シルト、中層はオリーブ黒～黒色の粘質シルト混中～粗砂、下層は黒色の粗砂混粘質シルトである。

#### 482土坑（図76）

482土坑は5 f に位置する。上部は黒色の粘質シルトを埋土とする。下部は南側に偏って約0.5m前後の円形を呈し、埋土の上層は黒色の粘質シルト、下層は黒色の粗砂混粘質シルトを主体とする。深さは0.4mと比較的規模が大きく土坑である。

以下はほぼ円形に近い土坑である。規模は0.4～0.5m前後、深さは0.1～0.2m前後を測るものが多い。

#### 393・394・504土坑（図74・75・77）

393・394・504土坑は4 f に位置する土坑である。393土坑は直径0.5m、深さ0.25mを測る。埋土は暗緑灰色のシルトで下層は上層に比して細砂ブロックを多く含む。394土坑は393土坑の北東に近接して位置している。直径0.4m、深さ0.1m前後を測る。埋土は393土坑上層と同様である。504土坑は直径0.4m、深さ0.2mを測る。埋土は上層は暗青灰色のシルトで、下層は粘質シルトで緑灰色シルトをブロック状に含む。

#### 422・456・483・476・487・489・504土坑（図75・76）

422土坑は3 h に位置している。この部分ではピットはみられるものの、北側に比して遺構の密度は低い。直径0.6m、深さ0.15mを測る。埋土は上層が灰色の粘質シルトで極細砂を含む。下層はオリーブ灰色の極細砂で粘質シルトをブロック状に含む。

456・483土坑は5 f に位置している。456土坑は直径0.5m、深さ0.1mを測る。埋土の上層はオリーブ黒色のシルト、下層はオリーブ黒色の細砂～中砂である。遺物は細片ではあるものの、他の土坑に比して多くみられた。483土坑は直径0.7mを測り、深さは0.1mと浅い。埋土の上層は緑黒色の粘質シルト、下層は暗灰色の粗砂混粘質シルトである。遺物は土器片がわずかに出土している。

476土坑は5 e に位置している。直径0.4m、深さ0.25mを測る。埋土は上層は黒～灰オリーブ色の粘土～シルト混細砂～極細砂、下層は黄灰・黒褐色の細砂～極細砂である。

487・489土坑は4 e に近接して位置している。直径0.5～0.6mの円形を呈し、深さ0.15mを測る。埋土は暗緑灰色のシルトである。

#### ピット（図74～77、写真15）

調査区中央の微高地上では多くのピットを検出したが特に掘立柱建物の周辺に集中して位置している。ピット内からの遺物の出土は概して少なく、出土しても細片であり帰属時期を確定することは困難である。ピットは直径0.1～0.5mを測り、深さ0.1m以下の浅いもの、0.2mを越える深さのあるものがみられた。単層のものも多くみられたが、埋土が細分されるものも同様にみられた。掘立柱建物1周辺では、直径は0.3m前後と大きく、深さは0.2m前後のものも多くみられた。

掘立柱建物2周辺のピットは直径0.15m前後、深さ約0.1～0.25m、埋土は灰色の極粗砂を多く含む

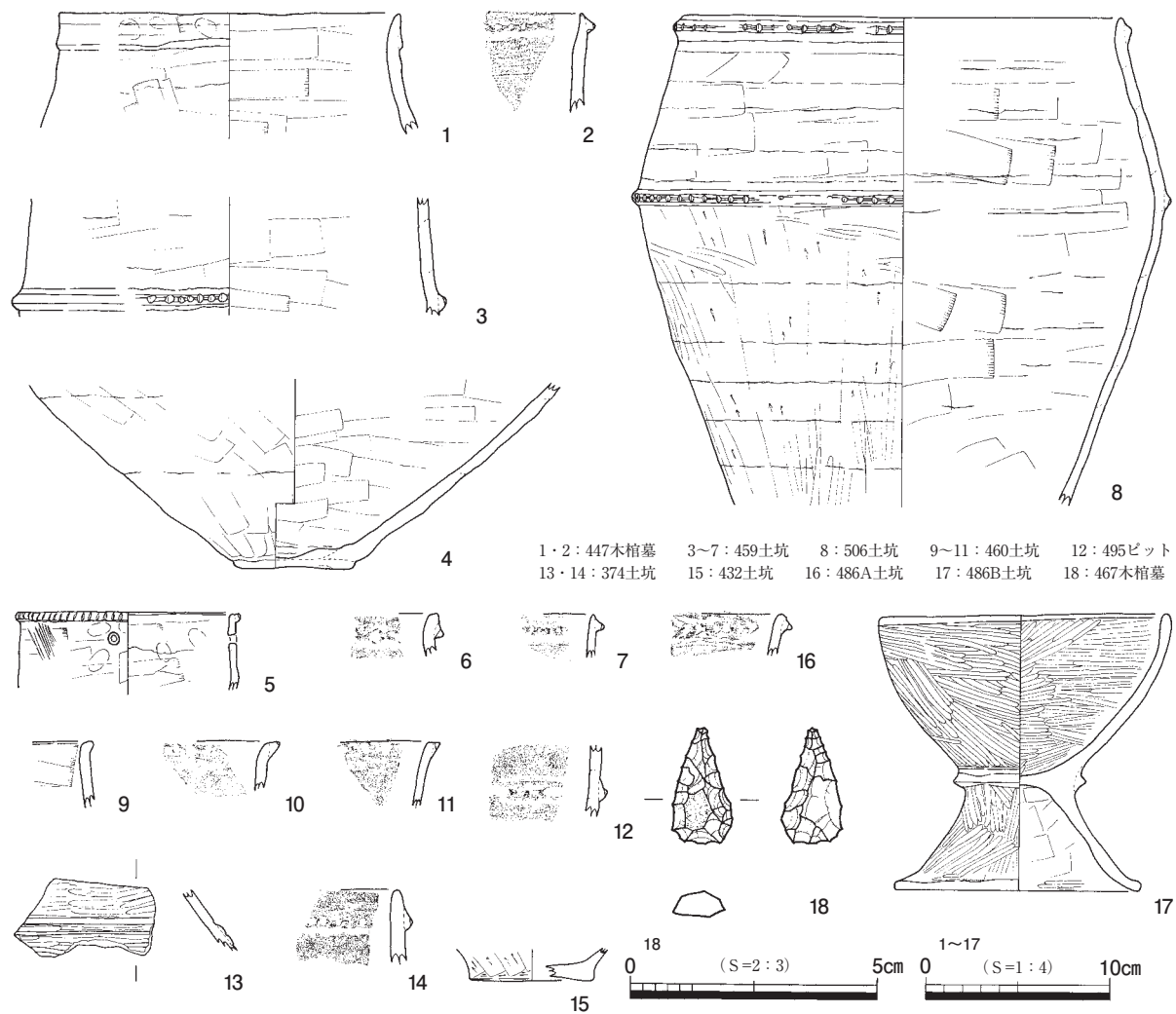


図78 第14-2 b面出土遺物

粘質シルトで炭化物を多く含む単層のピットが多くみられた（398・399・402・410・417・419・429ピット）。墓が集中する5 eでは東側の建物が位置する地区に比してピットは少ないものの、直径0.3～0.4m、深さ0.3m前後のピット（448・452・449ピット）がみられた。微高地南西側の5・6 gでは遺構は他の部分に比して希薄ではあったが、数基のピットを検出した。これらのピットは直径0.15～0.3m前後、深さ0.2～0.25mと比較的深さのあるものがみられた（431ピット・471・472・479）。479ピットでは第14-2 b層と考えられる細～粗砂が断面を横断している（写真15）。第14-1面では噴砂が多くみられた。472ピットの断面でも噴砂が確認されている。（島崎）

第14-2 b面出土遺物（図78～80、図版39～42）

第14-2 b面検出遺構のうち、447木棺墓、467木棺墓、433木棺墓、432土坑、366土器棺墓、366土坑、459土坑、460土坑、506土坑、374土坑、486A・B土坑、495ピットから出土した図化可能な遺物を掲載した。

図78は第14-2 b面の遺構出土の遺物である。（図78-1・2）は447木棺墓の木棺外の土坑埋土内出土遺物である。（1）は突帯文土器の壺とみられる口縁部である。鬼虎川・水走遺跡Cピット貝塚（第28-2層）からも同様の壺が出土している。頸部がやや外湾気味に内傾し、わずかに外反する口縁部にいたる。復元口径18.4cm、残存高6.5cmを測る。口縁端部に貼り付けた突帯は上面を強くヨコナデした





图79 第14-2 b面 (433木棺墓) 出土遺物

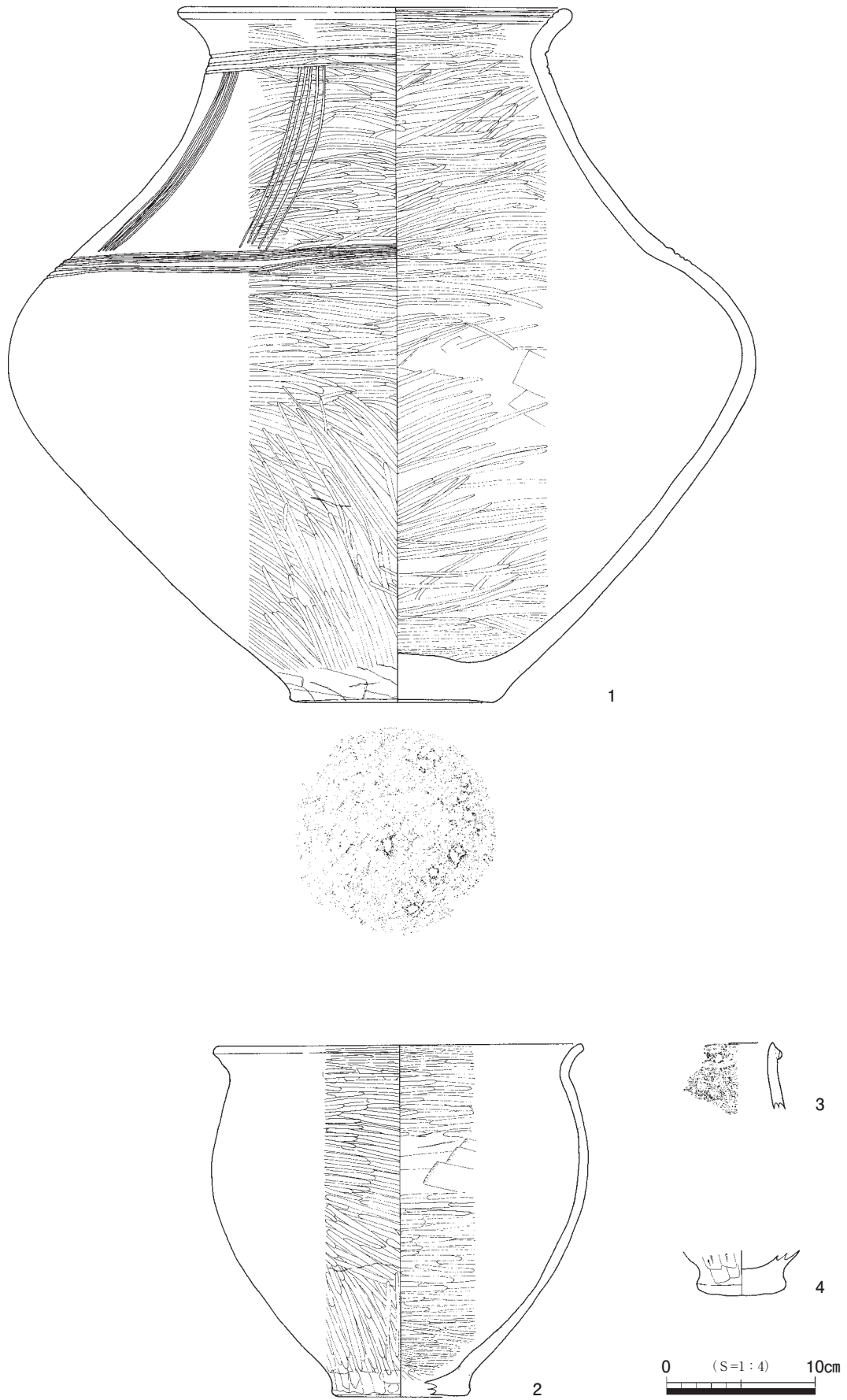


图80 第14-2 b面 (366土器棺墓·366土坑) 出土遺物

ため、端部から約0.6cm下までは口縁部と一体化している。断面は薄い下向きの三角形で、粘土の柔らかい時点で突帯部に触れたため、歪みや指頭圧痕が残る。刻目はない。内外面は横方向の板ナデののち、外面一部に縦方向の板ナデを施す。(2)はほぼ直立して口縁部にいたる深鉢片である。口縁端部にかぶさり気味に貼り付けた突帯の断面は下向きの三角形で、小O字形の刻目を入れる。内面に横方向の板ナデ、外面には縦方向の板ナデののち、ヘラミガキで調整したとみられる。

(3・5～7)は459土坑出土の突帯文土器の深鉢である。生駒山西麓産の土器である。(3)はほぼ直立して口縁部にいたる頸部をもつ。肩部の突帯はいびつであるが、上面からのナデ調整は強い。頂部に小D字形の刻目を入れる。内外面は横方向の板ナデを施す。長原式中相といえる。(4)は底部から外上方に大きく開く胴部につづく大型の浅鉢と考えられる。粘土円盤を底にし、さらに底部内面と外面の中央部にも円形粘土を貼り付けている。外面は縦から斜め方向の板ナデで調整しており、通常の深鉢の調整とは異なる。(5)は復元口径11.8cmの小型の深鉢である。口縁端部に沿って断面かまぼこ形の突帯を貼り付けたのち、口縁端面の突帯接合部に沈線を入れている。突帯頂部には小V字形の刻目を施す。頸部上方部に1ヶ所の穿孔がある。内外面に横方向の板ナデで調整する。(6)は口縁端部を面どりの深鉢の口縁部片である。口縁端部から0.6cm下がった位置に突帯を貼り付け、頂部に大D字形の深い刻目を入れている。内外面は横方向の板ナデを施している。滋賀里Ⅳ式の深鉢とみられる。(7)は突帯の貼り付け調整のため、口縁端部は先細りになり、突帯断面は上面がくぼんでいる。小D字形の小さい刻目をもつ。内外面は横方向の板ナデを施している。(6)のみ出土地点が異なるため埋土への混入と考えられるが、その他は長原式段階といえる。

(8)は506土坑で検出した突帯文土器の深鉢である。良好に残存しており、土器棺の可能性もある。底部から外上方に開き、肩部で緩やかに屈曲し、内湾気味に内傾して口縁部にいたる。口径23.6cm、最大径29.1cm、頸部高(口縁端部～肩部)9.8cm、残存高26.4cmを測る。口縁端部の器壁は厚みを保ち、丸くおさまる。口縁部・肩部の突帯断面はほぼ三角形で、小D字形の刻目を施す。内面と外面頸部は横方向の板ナデ、外面胴部は上方への縦方向の強いヘラケズリののち、上部は横方向の、中央から下部は縦方向のヘラミガキが部分的にみられる。外面にはススが付着する。生駒山西麓産の胎土である。長原式中相といえる。土坑内から突帯文土器の体部片の他、弥生土器とみられる体部細片1点が出土している。

(9～11)は460土坑出土の土器である。(9)は口縁端部がわずかに外反する深鉢とみられる。内面は横方向の板ナデで調整する。(10・11)は突帯文土器深鉢の口縁部である。同一個体の可能性がある。口縁端部上端に接して突帯を下面からナデ上げて貼り付ける。(11)の突帯断面は特に薄い上向きの三角形で、突帯が形骸化している段階といえる。弥生土器の甕の刻目と類似した小V字形の刻目を入れる。(12)は495ピット出土の突帯文土器深鉢の肩部である。突帯は上面から強くナデで貼り付け、頂部に小O字形の刻目を施す。内外面は横方向の板ナデで、生駒山西麓産の胎土である。

(13・14)は374土坑出土の土器である。(13)は弥生土器の広口壺である。胴部上半部に段をなして低い削出突帯をつくり、突帯上に1条の沈線を施す。外面はていねいなヘラミガキ、内面は横方向の板ナデののち、一部ヘラミガキを施す。削出突帯部分に赤彩が残る。河内Ⅰ-2様式、弥生前期中葉といえる。(14)は口縁端部から1.1cm下がった位置に突帯を貼り付ける。突帯断面は上面からの強いナデで、下向きの三角形をなし、頂部には小D字形の刻目を入れる。内外面は横方向の板ナデを施す。後述する「水走タイプ」に相当する。

(15)は432土坑出土の土器である。形態的には弥生土器の影響もみられるが、ヘラケズリによる器面

調整などを含めて突帯文土器深鉢の底部とした。生駒山西麓産の胎土である。

(16)は486A土坑、(17)は486B土坑出土の遺物である。(16)は突帯文土器の深鉢である。突帯の貼り付けは粗雑で、位置はずれ、口縁部の粘土は突帯上面にかぶっている。突帯頂部には小V字形の刻目が入り、内外面は横方向の板ナデで調整している。(17)は口径15.4cm、底径13.2cm、器高15.0cmを測るほぼ完形の弥生土器高杯である。杯部と脚部の境目には、頂部が鋭角的な断面三角形の突帯文が巡る。杯部内外面と脚部外面にていねいなヘラミガキ、脚部内面には板ナデののち、一部ヘラミガキを施す。生駒山西麓産の胎土である。河内I-2~3様式、弥生前期中葉といえる。

(18)は467木棺墓から出土した。長さ2.4cm、幅1.2cm、厚さ0.5cm、重さ1.3gを測るサヌカイト製打製石鏃である。木棺墓内から、突帯文土器体部の小片18点と弥生土器体部の小片1点が出土している。

図79は第14-2b面検出の433木棺墓で用いられた木棺材である。棺を展開した状態で図化しているが、各棺材の間隔は任意である。残存する数値と木材は以下の通りである。1はカヤ製の西側板で、長161.3cm、幅22.6cm、厚3.2cmを測る。2は東側板で、長64.3cm、幅8.2cm、厚2.0cmを測る。3は北小口板で、長26.0cm、幅27.7cm、厚2.4cmを測る。4はカヤ製の南小口板で、長37.2cm、幅は32.0cm、厚2.7cmを測る。底板は小片のため図化していないが、アカガシ(亜属)製である。放射線炭素年代測定については第5章を参照願いたい。

(図80-1~4)は第14-2b面検出の366土器棺墓・366土坑出土遺物である。(1)は弥生土器の広口壺で、底部を据えた状態で出土しており、土器棺とみられる。短く外反する口頸部と肩の張った胴部をもつ。口径25.3cm、胴部最大径50.0cm、底径13.4cm、器高46.8cmを測り、接合の際に若干の歪みはあったが、原形は口径の倍の大きさに最大径と器高を設定するという規格をもつと考えられる。外面は頸部に段を削り出し、段直下に1条の沈線を入れ、下に2条を加えて3条のヘラ描沈線文にしている。その下方には5条を一带とする縦方向の沈線を7帯施すが、帯の間隔は等しくない。肩上部にも段を削り出し、段直下に1条の沈線を入れ、下に4条を加えて5条のヘラ描沈線文にしている。内面は口縁部に3条のヘラ描沈線文を巡らせている。器面の調整はていねいなヘラミガキで、内面の全面、外面の頸部と体部上半は横方向、体部下半は斜め・縦方向に施す。底面の近くには板ナデの痕跡が残る。外底面には刳圧痕が残る。生駒山西麓産の胎土である。河内I-2~3様式の特徴をもち、弥生前期中葉といえる。

ほぼ完形に接合された土器片の多くは第14-2b面で出土した。その他、第13層、13b面、13b層、14-1層からも出土しており、土器棺の土坑の掘り込みは上層であった可能性が残る。

(2)は弥生土器の鉢で、破片が広口壺の内部や周辺から出土しており、土器棺の蓋にしていた可能性がある。広口壺に対して破片の残りは少ない。短く外反する口縁部と口径と同程度に張り出す胴部をもつ。口径24.5cm、胴部最大径25.3cm、底径9.0cm、器高23.6cmを測る。外面は口縁部から底部にかけて、横方向~斜め方向~縦方向のヘラミガキで調整し、底面の近くには板ナデを施す。内面は横方向のヘラミガキ、胴内湾部には板ナデを施す。外面全面と内面下半部にススが付着する。生駒山西麓産の胎土である。河内I-2~3様式、弥生前期中葉といえる。

(3・4)は土坑埋土から出土した突帯文土器深鉢片である。(3)は突帯の貼り付け調整のため、口縁端部の器壁が薄くなり、突帯断面も上面がくぼむ。頂部にはV字に近い鋭角的な小D字形の刻目を入れる。内外面は横方向の板ナデで調整する。(4)は器壁が厚く、側面外方に張り出す底部である。外面の底面近くは縦方向の板ナデ、その上方は縦方向のヘラケズリで調整する。2点とも生駒山西麓産の胎土である。土坑埋土からはこの他に突帯文土器の小片が出土している。(林)

6) 第15面 (図81、図版20)

遺構面の状況と検出遺構

第15-1 a層を除去して検出した遺構面で、第15-2 a層とした暗オリーブ灰色～黒色粘土の上面に

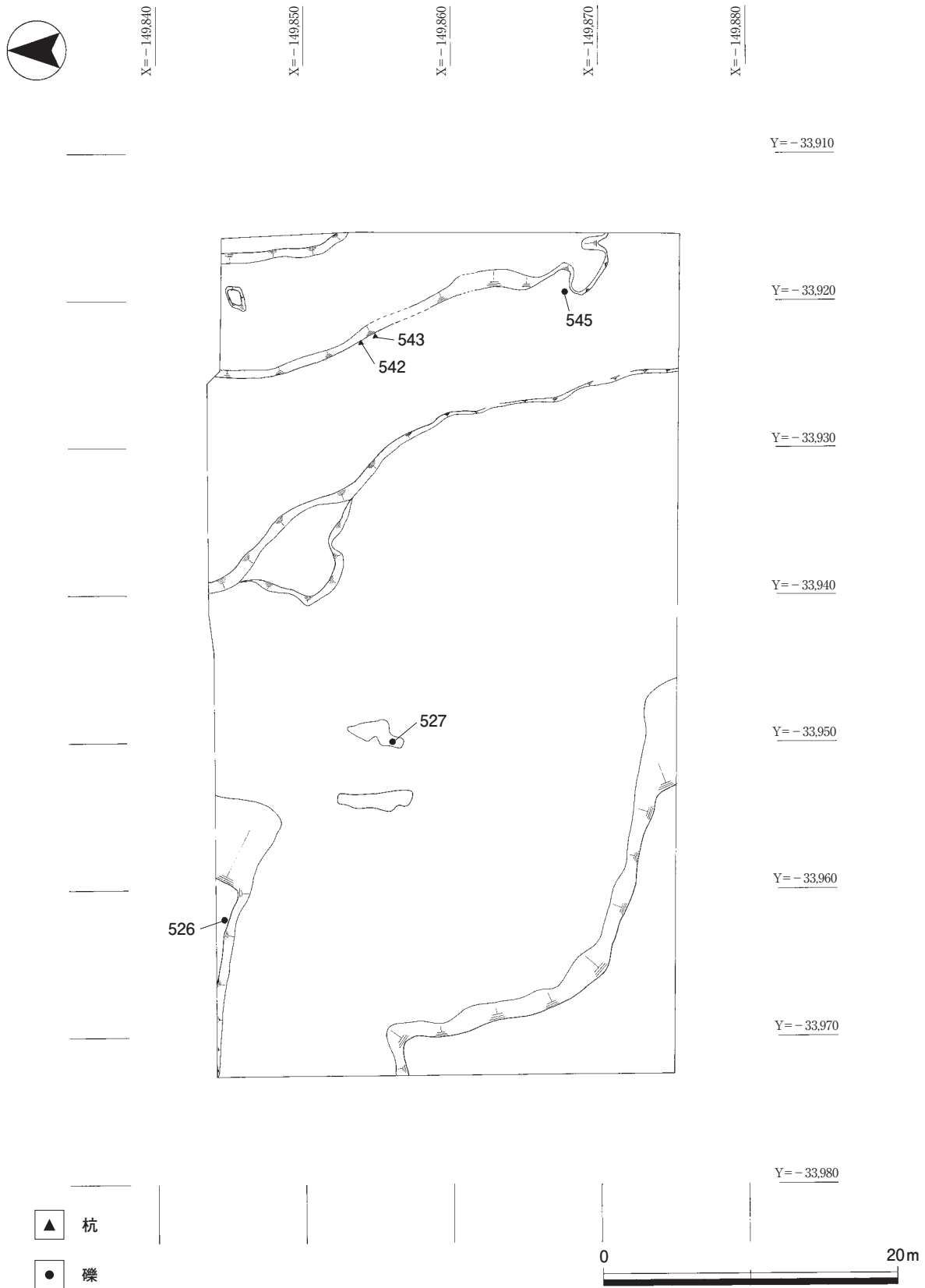


図81 第15面平面図

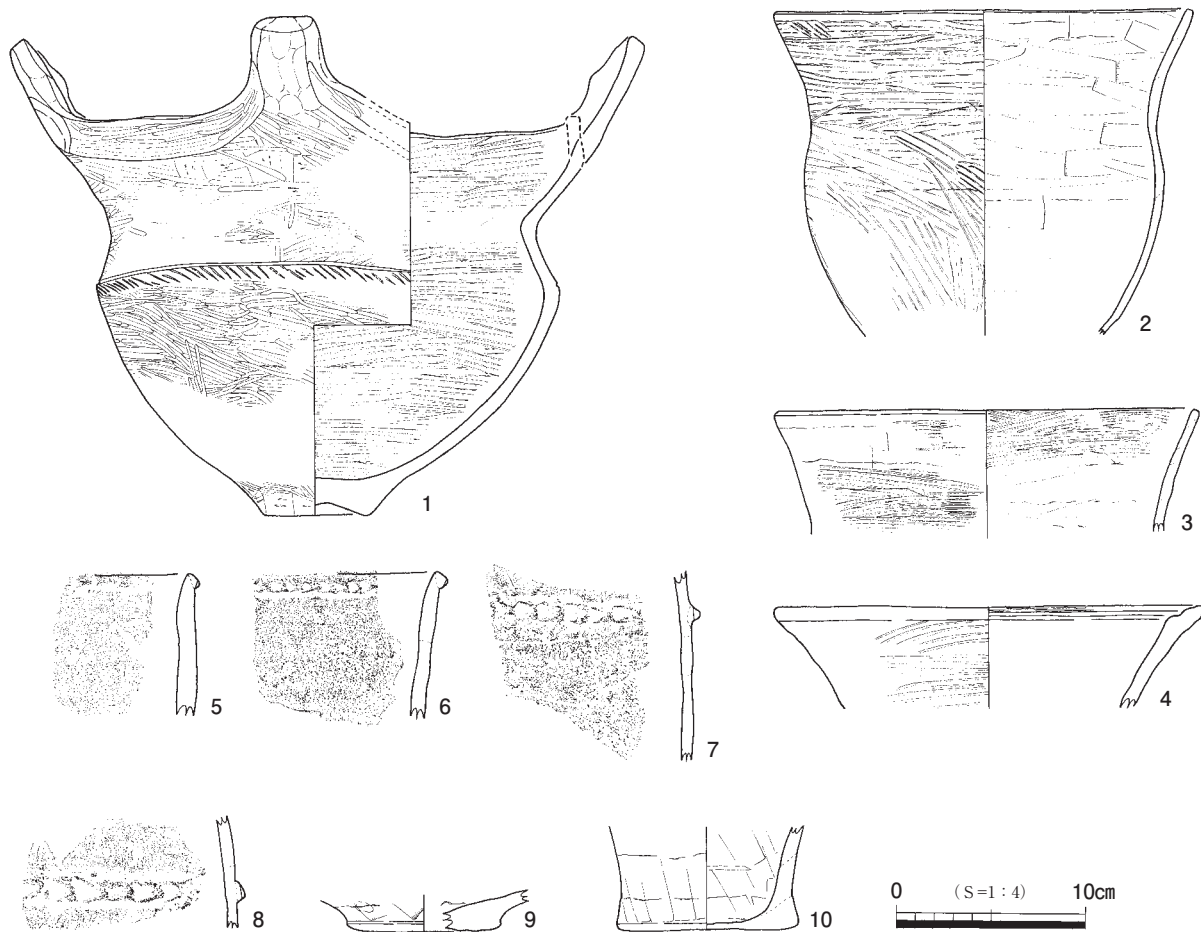


図82 第14-2b層出土遺物

当たる。第15-2a層は池島・福万寺遺跡で従来いわれてきた「第5黒色粘土（泥）層」の上面に相当する。第15面では調査区東側で杭2本を検出し、北西部と中央部で30cm以上の礫がそれぞれ出土している。地形は大部分が上面で検出された流路に侵食されているため詳細は不明である。ただし、ベースとなる粘土層より下層の堆積において砂層が認められることから、それら堆積物が形成した微地形を本遺構面は反映するものと考えられる。

第15面の3fで検出された杭は、第15面と上面で検出された流路の侵食部との境界で2本分が検出された。第15面精査時に検出されたため第15面の帰属としたが、流路の侵食が顕著な部分でもあるため、第15面より帰属する面が新しくなる可能性がある。礫は7eで砂岩が、5fで溶結凝灰岩が出土した。砂岩は長さ57.0cm、幅15.0cm、厚み18.2cmである。溶結凝灰岩は長さ36.5cm、幅17.5cm、厚み13.0cmである。いずれの礫も周辺で産出するものではなく人為的に運ばれたものと考えられる。

第15面からは調査区の東側で縄文時代後期前葉～中葉を中心とした土器が出土した。いずれも破片となって出土しているが、第15面直上から個体ごとにまとまった状態で出土している。（後川）

#### 出土遺物（図82～83、図版42・43）

図82は第14-2b層出土の遺物である。縄文土器（1～4・10）、突帯文土器（5～9）と石器が出土している。石器については後述する。（1）は縁帯文土器の深鉢である。口縁部は一辺約21.8cmの方形を呈し、四隅に外上方にのびる角状突起をもつ。頸部径は22.4cm、胴部最大径24.5cm、底径5.6cm、器高26.4cmを測る。胴部から頸部への屈曲部には沈線1条と細い刻目を巡らす。調整は外面全面に横～

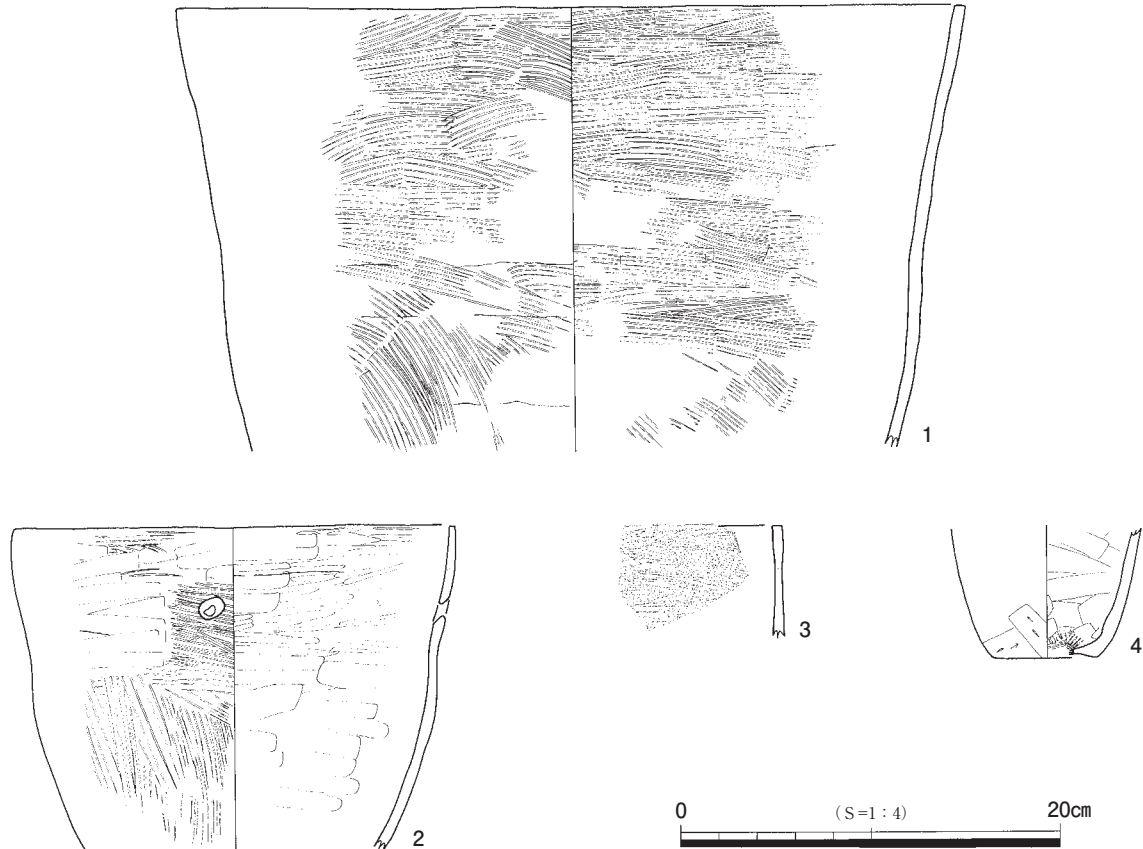


図83 第15-2面・15-2層・15-3 b層出土遺物

斜め方向のヘラミガキを施し、頸部上方、底部にはミガキ前のヘラケズリが残る。内面全面に横方向の貝殻条痕を施す。ススが体部下半を除く内外面にみられ、特に外面は厚く付着する。他地域の胎土をもつ。元住吉山Ⅱ式、縄文後期中葉といえる。(2・3)は頸部から緩やかに外上方に開く口縁部をもつ深鉢である。外面は頸部から口縁部にかけて横方向の、(2)の胴部は斜めから縦方向の巻貝の貝殻条痕がみられる。(2・3)ともに内面は条痕ののち、横方向の板ナデで調整する。内外面にはススが付着し、外面に一部赤彩らしき痕跡が残る。元住吉山Ⅰ式もしくはⅡ式、縄文後期中葉である。(4)は外上方に開く口縁部をもつ深鉢である。口縁部内面に1条の太い沈線を施す。外面と口縁部内面は横方向の条痕で調整する。彦崎KⅠ式、縄文後期前葉である。(10)は深鉢の底部である。底面の器壁は薄く、側面外方に張り出したのち、やや外上方に円筒状にのびる。内外面は縦方向の板ナデ調整を施す。縄文後期にみられる深鉢の底部である。

(5~9)は生駒山西麓産の胎土をもつ突帯文土器の深鉢片とみられる。(5)は頸部がほぼ直立し、突帯は口縁端部に一部かぶさる。断面は小さい下向きの三角形をなし、口縁部外面と突帯頂部の両面を刻むような小D字形の刻目をもつ粗雑なつくりの突帯文である。内外面は横方向の板ナデで調整する。(6)は頸部が外上方にまっすぐに開く。肩部に突帯をもつか否かは不明である。外面は口縁部にいたるまでススが厚く付着している。突帯貼り付けの調整で口縁端部の器壁は薄い。突帯断面は小さい三角形をなし、小D字形の刻目を施す。内外面は横方向の板ナデで調整する。(7・8)は大D字形の大きい刻目を入れた幅広の突帯をもつ肩部片である。内面は横方向の板ナデ、外面頸部は横方向の板ナデ、胴部には横方向のヘラケズリを施す。船橋式に属する可能性がある。(7)の外面にはススが厚く付着

する。(9)は大きく歪む底部で、外上方への開きが大きく浅鉢の可能性もある。

従来の調査においては、第14-2b層の上面から元住吉山式のほぼ完形の深鉢が出土しており、第14-2層の形成時期の上限を考える上で重要である。これらの突帯文土器は混入と考えられよう。また、この他に弥生前期の甕を検出したが、甕の出土地点は第11b層の氾濫堆積物によって第14層が削平を受けている部分なので、同じく上層の混入とみなせる。

図83は第15-2面(1・2)、第15-2層(3)、第15-3b層(4)出土の遺物である。(1・2)は緩やかに外上方にのびる深鉢である。(2)は体部上方に穿孔が1ヶ所残る。(1)の内外面上部には横方向の、下部には斜め方向の巻貝の貝殻条痕が施される。内外面にはススが付着している。(2)の外面上部には横方向の、下部には縦方向の巻貝の貝殻条痕を施したのち、上部をヘラナデで調整している。内面は横方向のヘラナデで器面を平滑にしている。内外面にススが付着している。ともに元住吉山IもしくはII式、縄文後期中葉といえる。(3)は深鉢で、口縁端面を含む内外面を小形の二枚貝の条痕で調整する。同じく元住吉山IもしくはII式、縄文後期中葉とみられる。

(4)は深鉢の底部とみられる。底面の器壁は薄く凹面をなし、やや外上方に円筒状にのびる。外面上方にはススが付着するため調整は不明確で、下方にはヘラケズリを施す。内面は横方向の板ナデ・ナデで調整する。縄文後期とみられる。(林)



## 7) 各遺構および包含層出土の石器と石製品

当調査区出土の主な石器・石製品（図84～96）には、石鏃、石槍、石錐、石匙、削器、楔形石器、剥片、石斧、叩石、磨石、台石、石錘および石棒がある。時期は（図84-1）の石鏃が弥生時代、（図95・96）の第15-2面出土の石錘、叩石、磨石が縄文後期である以外は、全てが縄文晩期～弥生前期に属する。そのため落ち込み・流路および包含層出土の石器と石製品については、種類ごとに図面を掲載した。

（図84）は未成品・破損品を含む打製石器である。229流路（1）、339落ち込み（11）、第12層（8）、第13面（9）、第13層（2）、第13b層（3・7・12）、第14-1面（5）、第14-1層（4・6・10）から出土した。（図84-8）の削器以外はサヌカイト製といえる。（1）は弥生時代の石鏃で、長さ2.9cm、幅1.9cm、厚さ0.5cm、重さ3.0gを測る。先端が一部欠損している。（2）は基部に丸みをもつ石鏃で、先端が欠損し裏面には原礫面が残る。長さ2.4cm、幅1.2cm、厚さ3.5cm、重さ1.1gを測る。（3・4）は石鏃の未成品で、（3）は長さ4.9cm、幅2.7cm、厚さ0.7cm、重さ9.9g、（4）は長さ4.0cm、幅2.9cm、厚さ0.6cm、重さ8.1gを測る。（3）は縁辺部に細かい調整剥離がみられる。（4）は原礫面が残り、調整剥離はあまりみられない。（5）は長さ2.8cm、幅0.85cm、厚さ0.6cm、重さ1.4gを測る。石槍の加工途上欠損品とみられるが、縦方向に欠損している。（6）は長さ3.6cm、幅6.0cm、厚さ0.9cm、重さ14.3gを測る石匙である。縁辺部に原礫面が残る。（7・8）は削器である。（7）は長さ4.7cm、幅6.6cm、厚さ1.0cm、重さ27.8gを測る。刃部に調整剥離はみられず、鋭利さに欠ける。（8）は長さ4.05cm、幅7.8cm、厚さ0.8cm、重さ42.0gを測り、流紋岩製とみられる。（9～12）は石錐である。（9）は長さ3.5cm、幅1.5cm、厚さ0.6cm、重さ2.8gを測るもので、縁辺部に細かい調整剥離がみられる。錐部の先端は欠損しているが、断面は不整形な六角形を呈する。（10）は長さ3.35cm、幅1.6cm、厚さ0.45cm、重さ1.8gを測る。錐部の一部に調整剥離がみられ、断面は不整形な四角形を呈する。（11）は長さ4.8cm、幅2.7cm、厚さ0.9cm、重さ8.1gを測る。錐部先端に原礫面が残る。断面は不整形な六角形を呈する。（12）は長さ4.8cm、幅1.6cm、厚さ0.6cm、重さ4.6gを測る。錐部は断面五角形を呈し、つまみ部分は断面三角形を呈する。錐部先端に原礫面が残る。調整剥離は多く認められない。

（図85・86）はサヌカイト製の楔形石器である。（図85-1～10）は229流路（1・2）、339落ち込み（3～10）から出土した。（4）は縁辺部に微細剥離がみられる。（1・4・6・8・9・10）は一部に原礫面・風化面が残る。また（図86-1～10）は包含層から出土したものである。（8）は縁辺部に微細剥離がみられ、（9・10）は縁辺部に潰れが確認できる。また、（1・4・5・7）は一部に原礫面・風化面が残る。

（図87-3）は339落ち込み出土の剥片（1・2）の接合資料である。（1）は横長、（2）は縦横の長さがほぼ同じである。接合後は長さ4.8cm、幅5.3cm、厚さ1.5cm、重さ24.4gとなる。微細な剥離はみられず、一部原礫面が残る。サヌカイト製である。（図87-4）は長さ9.7cmを測る大型の楔形石器もしくは石核の可能性もある。サヌカイト製である。（図88-3）は339落ち込み出土の剥片（1）と第13面出土の剥片（2）の接合資料である。接合後は長さ3.7cm、幅4.7cm、厚さ2.2cm、重さ43.2gとなる。広い範囲に原礫面を残す。サヌカイト製である。（図88-4）は板状剥片で石核としても使用できる。339落ち込みから出土した。広い範囲に原礫面を残す。金山東産のサヌカイト製の可能性がある。

（図89）は磨製石斧（1・2）と石斧の未成品（3）である。第13b層（1）、339落ち込み（2）、第14-1層（3）から出土した。（1）は大型蛤刃石斧で長さ8.2cm、残存幅5.5cm、厚さ3.3cm、重さ174.5gを測る。左上部が欠損している。刃部に最大幅をもつ。基部には敲打痕がみられ、上方には柄で擦れ

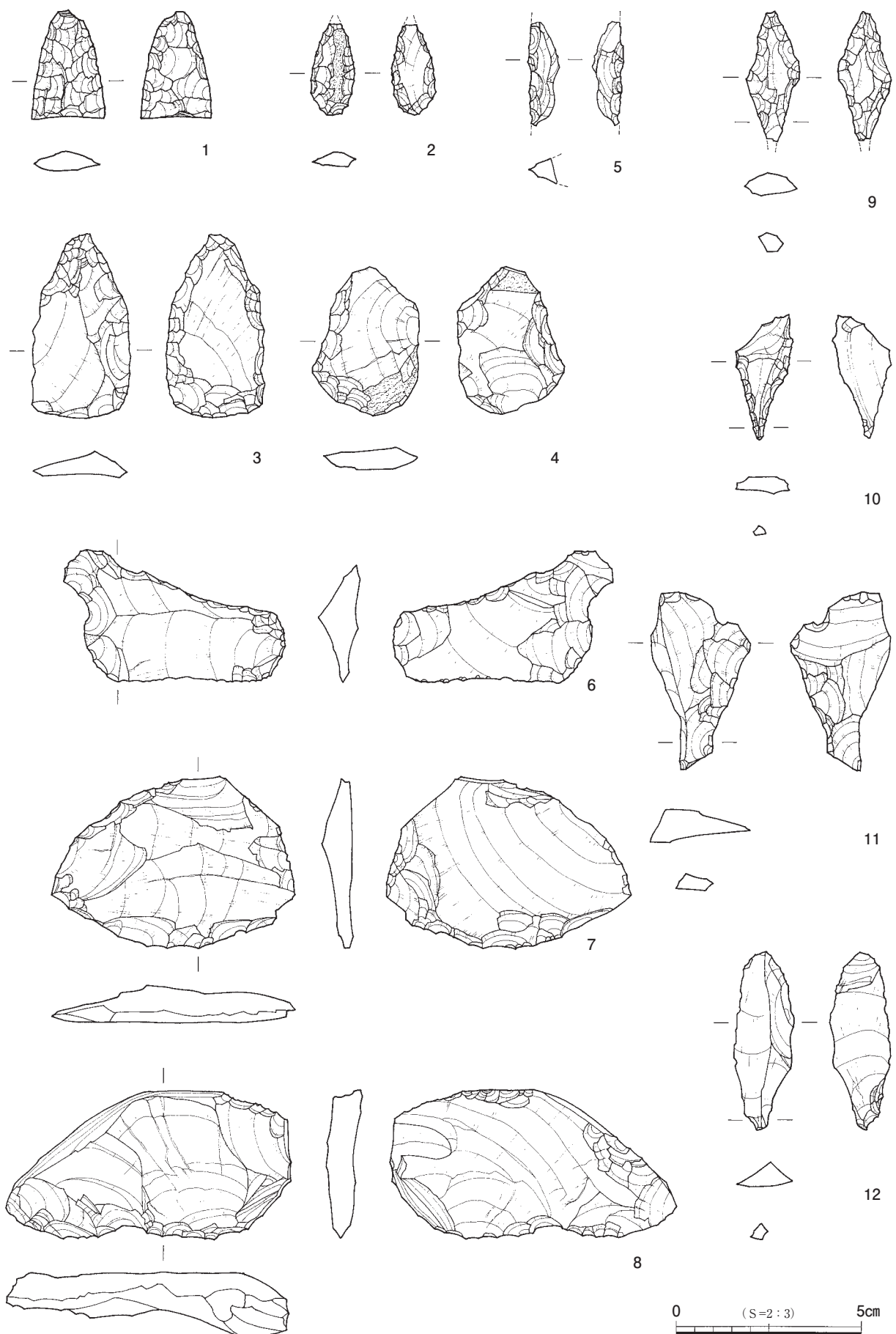


图84 石器 (1) 石鏃·石槍·石錐·石匙·削器

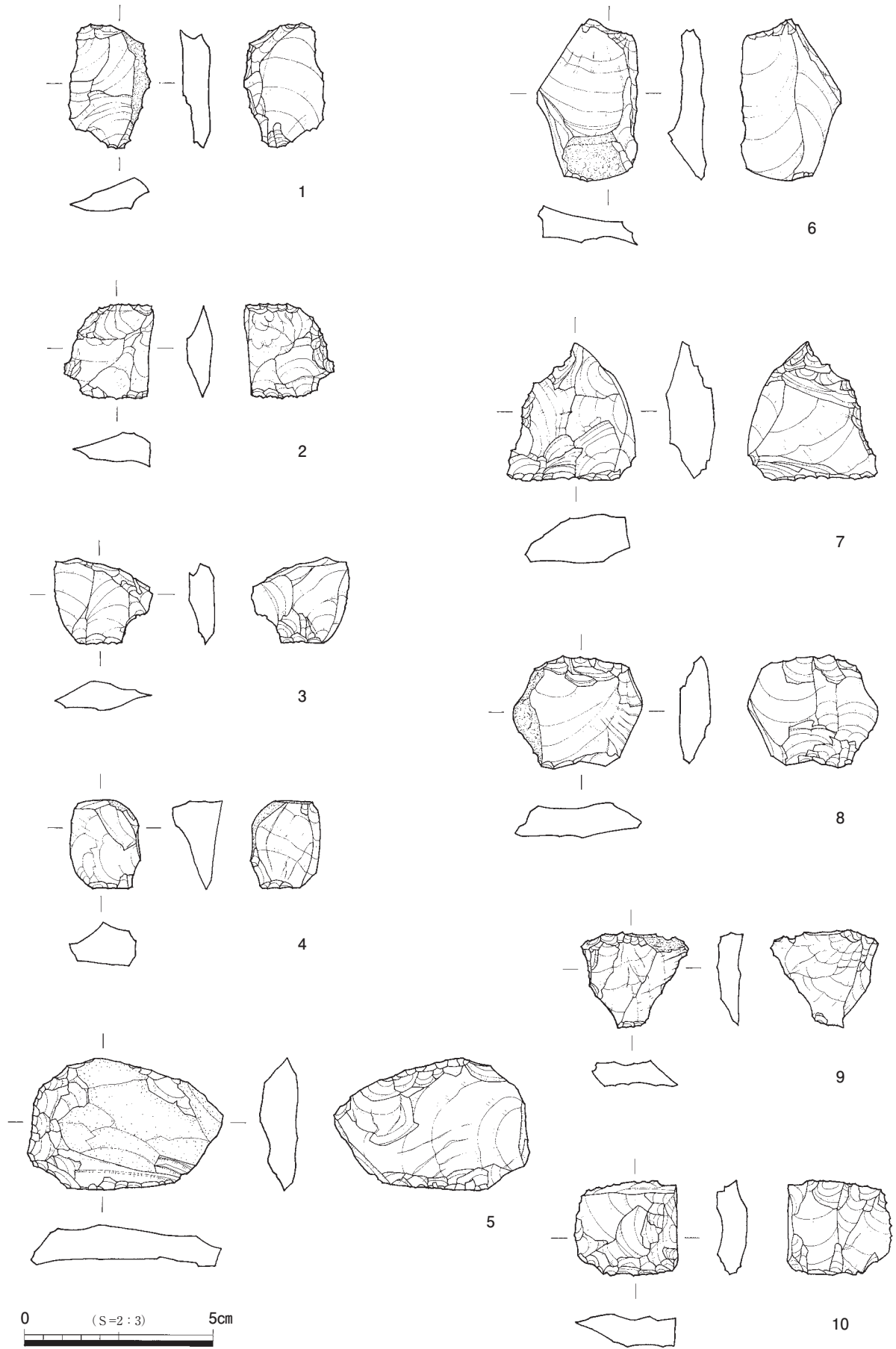


図85 石器(2) 楔形石器

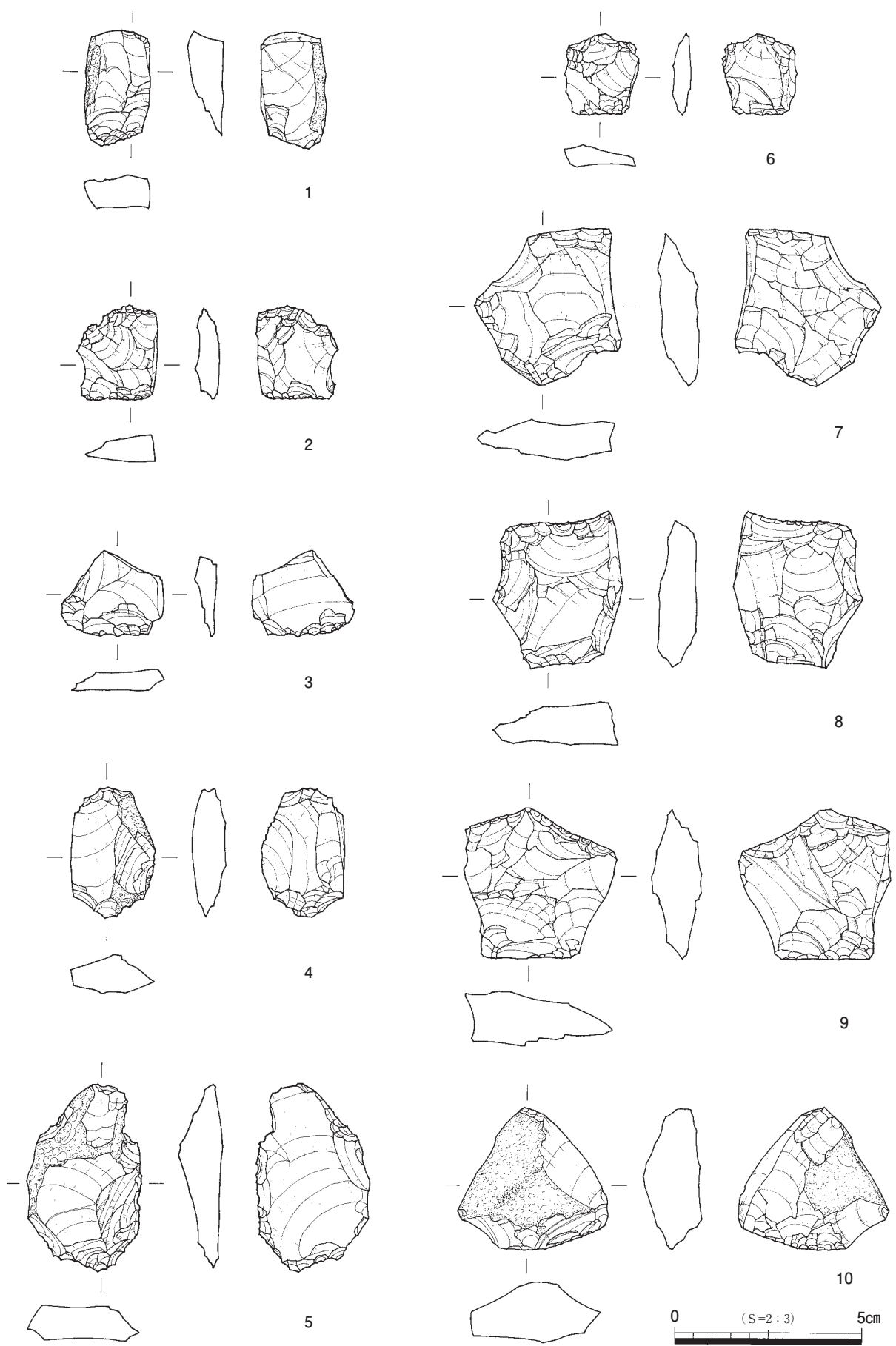


图86 石器 (3) 楔形石器

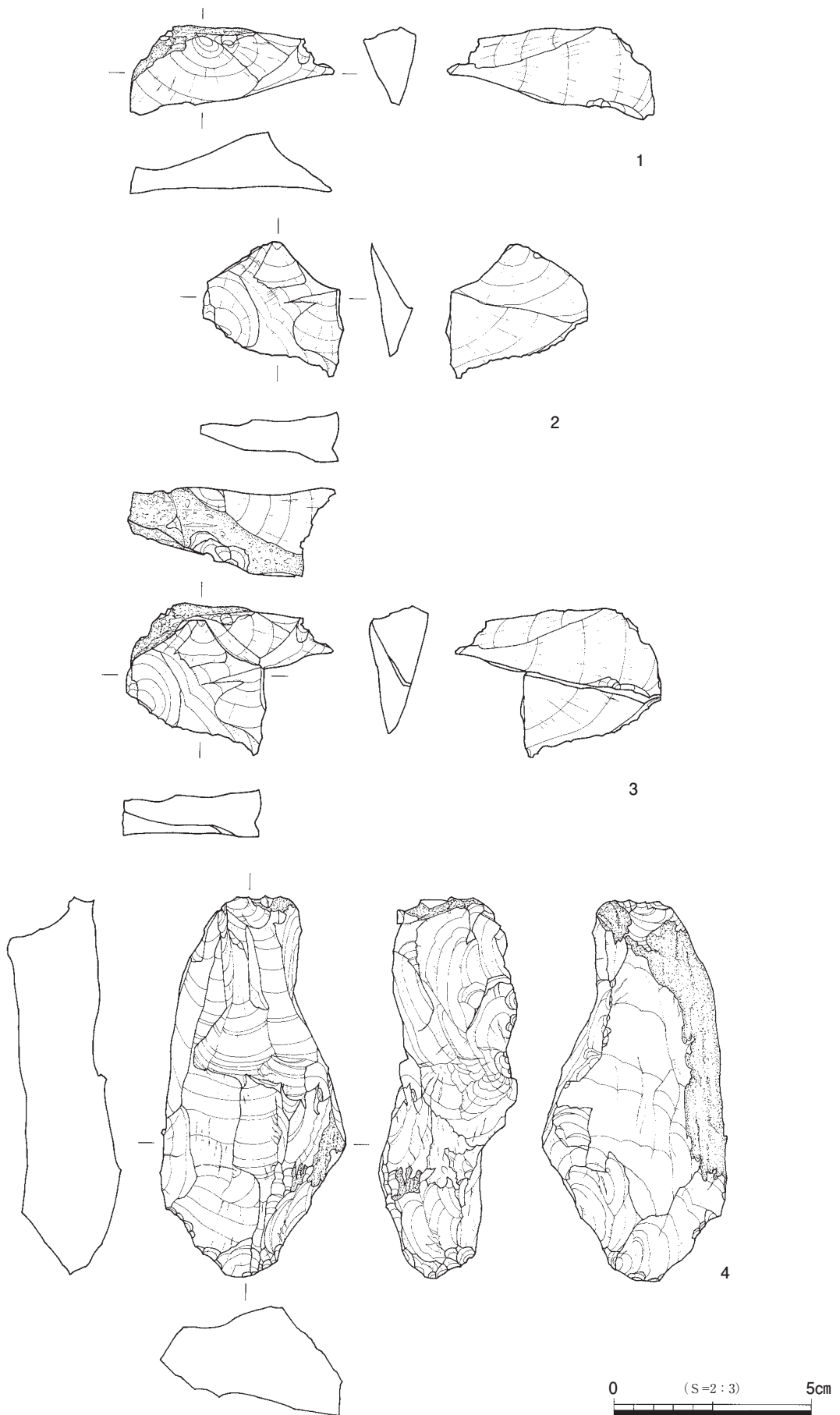


図87 石器（4） 楔形石器・剥片

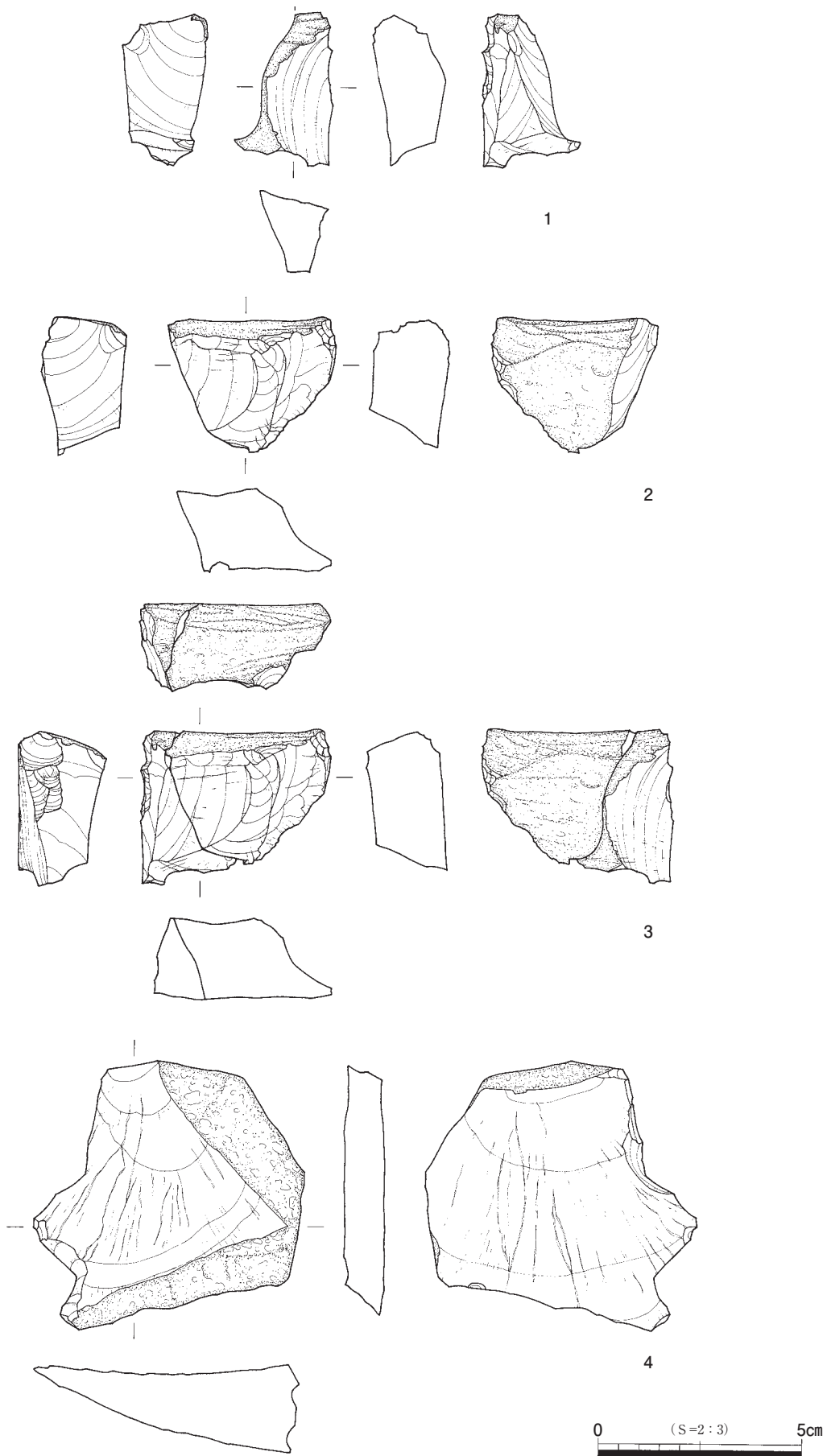


图88 石器(5) 剥片·板状剥片

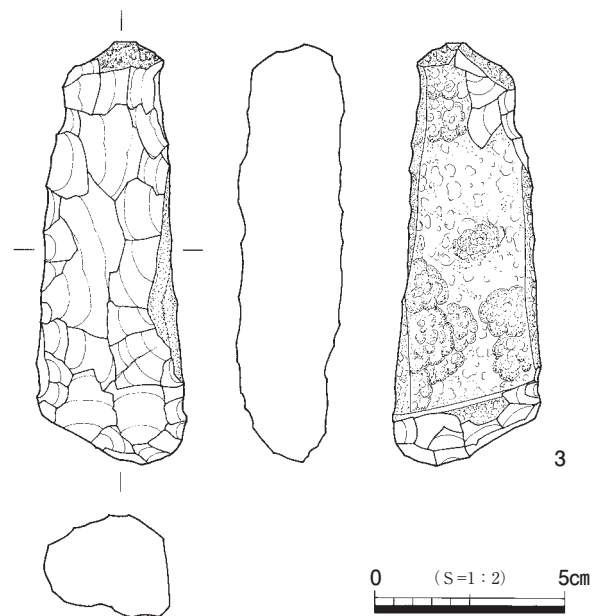
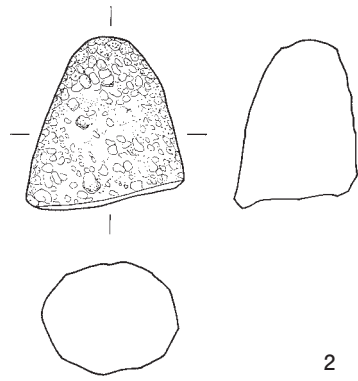
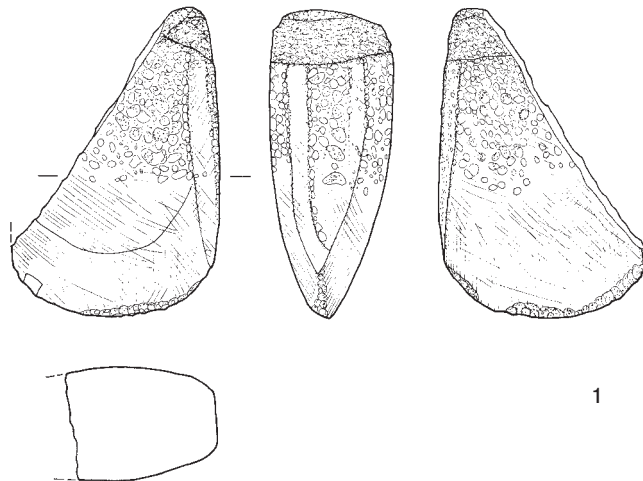


図89 石器(6) 石斧

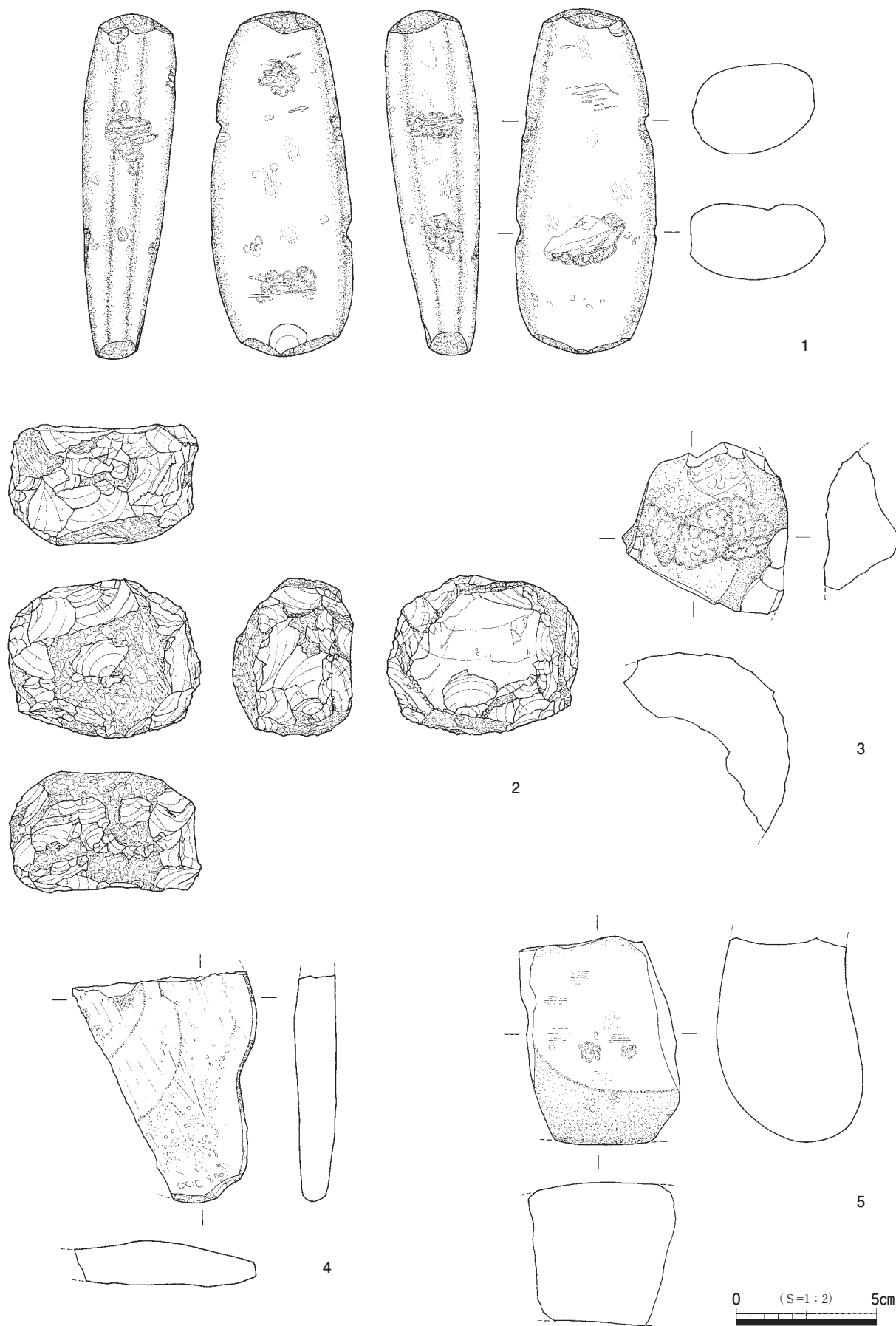


图90 石器(7) 叩石·石皿



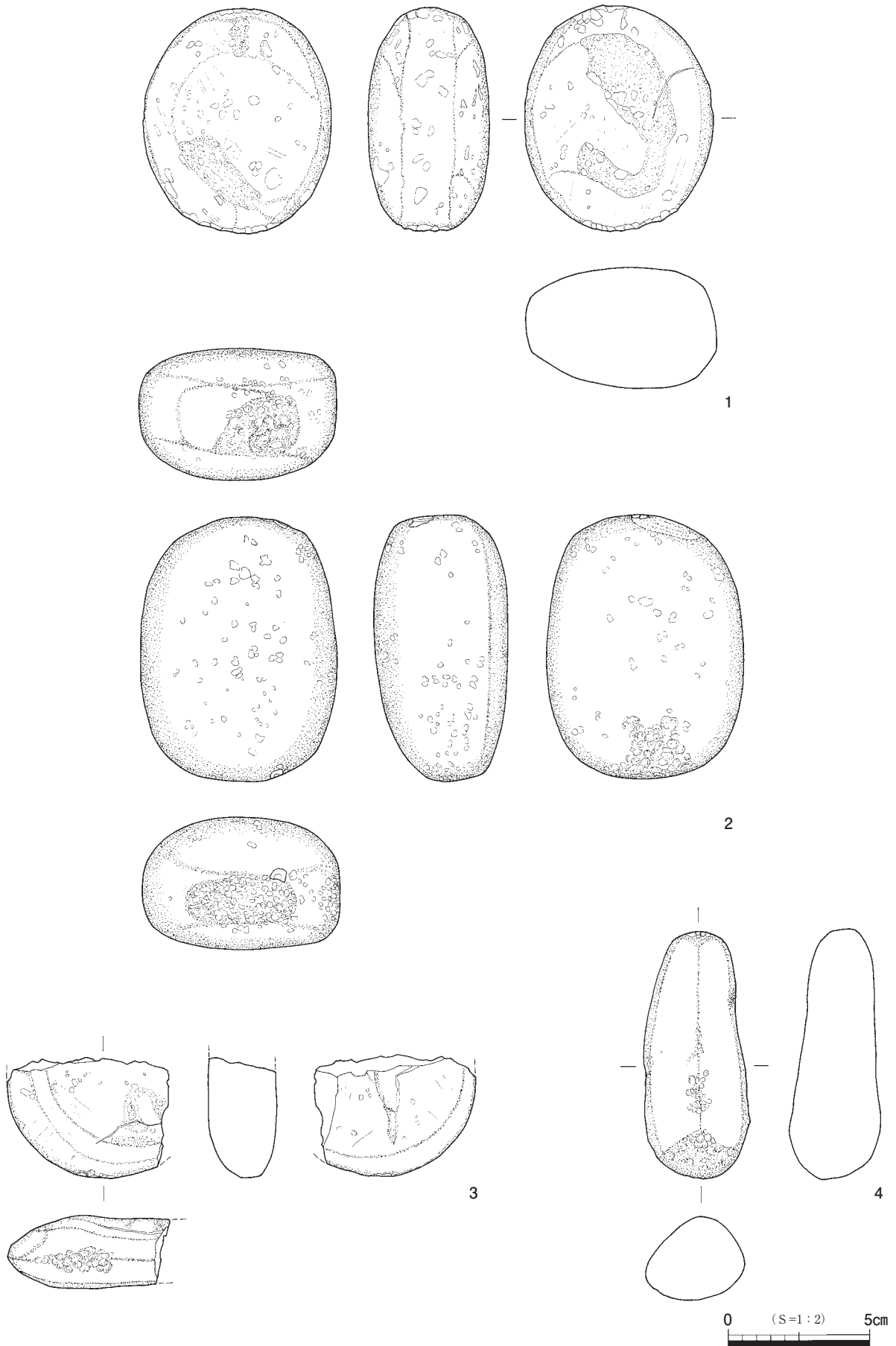


図91 石器(8) 叩石・磨石

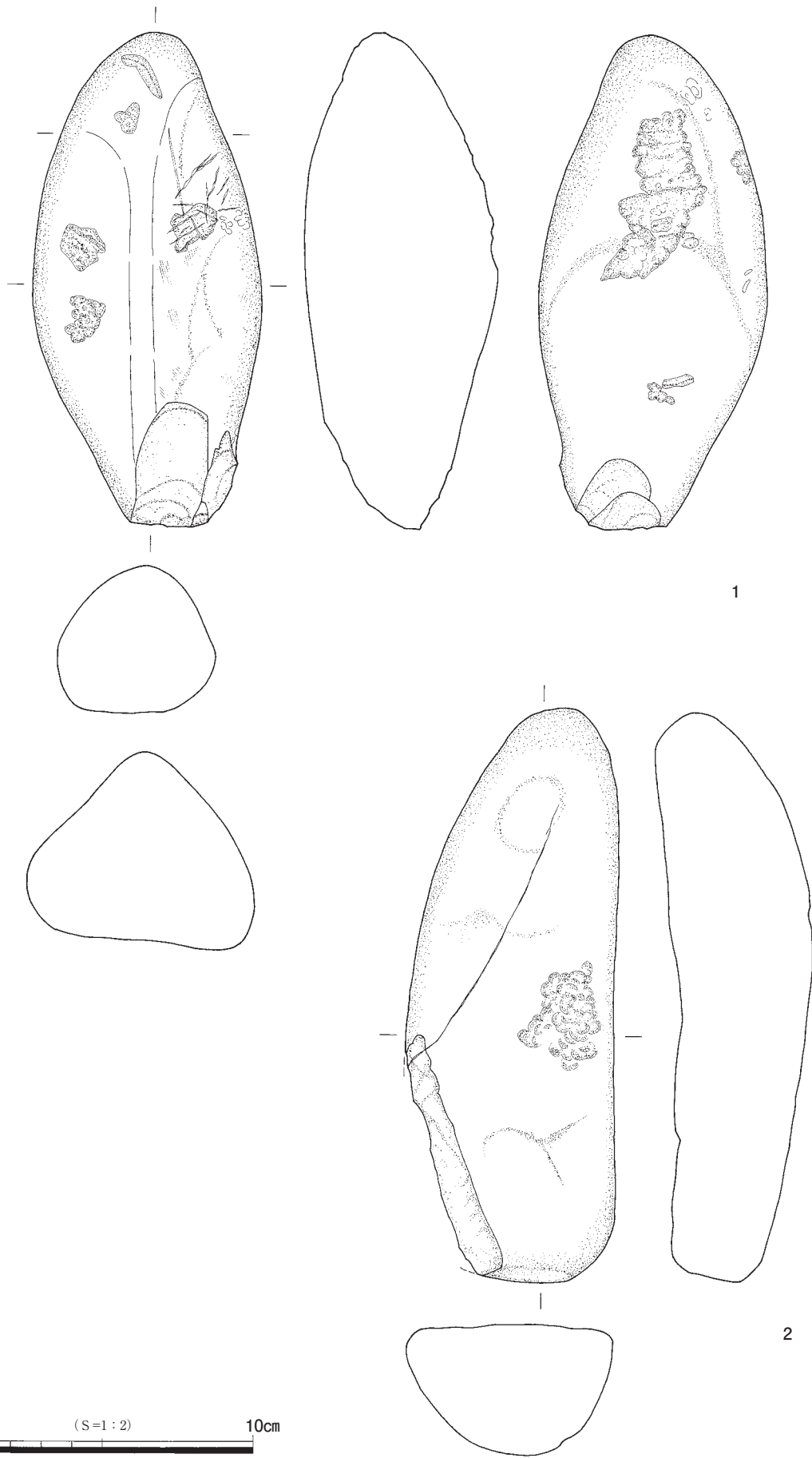


图92 石器(9) 叩石

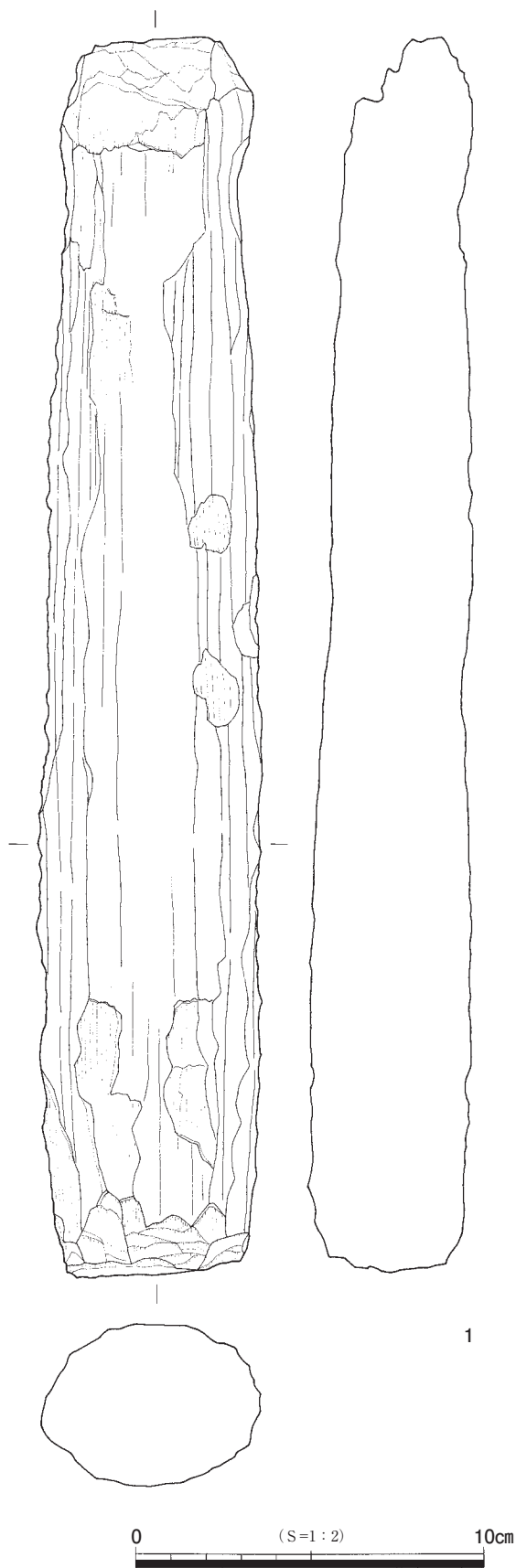


図93 石器 (10) 石棒

た痕跡が残る。(2)は基部のみ残存する。長さ4.6cm、幅4.1cm、厚さ3.1cm、重さ83.9gを測る。残存部全面に敲打痕が残る。蛇紋岩製とみられる。(3)は長さ11.2cm、幅3.9cm、厚さ2.7cm、重さ198.8gを測る。蛇紋岩製とみられる。

(図90~92)は礫石器類である。(図90-1~4)は叩石である。第14-1層(1)、第13b層(2)、339落ち込み(3)、第13面(4)から出土した。(1)の断面は楕円形で下部がやや扁平である。上・下面に敲打痕が残る。長さ12.4cm、幅5.0cm、厚さ3.2cm、重さ279.4gを測る。砂岩製である。(2)は多数の剥離痕の他、広い範囲で原礫面が残る。長さ5.7cm、幅6.8cm、厚さ4.3cm、重さ241.5gを測る。サヌカイト製である。(3)は敲打痕および火を受けた破裂痕が残る。砂岩製である。(4)は敲打痕を残す他、表面中央部には研磨痕がみられ、石皿もしくは砥石としても用いたといえる。(5)は表面が磨滅しており石皿を転用した台石とみられる。砂岩製である。第14-1層から出土した。

(図91-1・2・4)は磨石である。第14-2b層(1)、第14層(2)、第14-1層(4)から出土した。(1)の断面は楕円形の球形に近い礫を用いたもので、敲打痕と研磨痕がみられる。長さ8.0cm、幅6.7cm、厚さ4.3cm、重さ367.2gを測る。(2)も円礫を用いており、敲打痕がみられる他、上面には研磨痕が重なるように残る。長さ9.4cm、幅7.0cm、厚さ4.6cm、重さ519.5gを測る。(4)は長さ8.8cm、幅3.8cm、厚さ3.2cm、重さ127.2gを測る棒状の礫である。上下面に敲打痕と研磨痕が残る。(3)は砂岩の扁平な小円礫を用いた339落ち込み出土の叩石である。敲打痕が残る。(図92)は中央部断面が三角形を呈



图94 石器 (11) 石棒

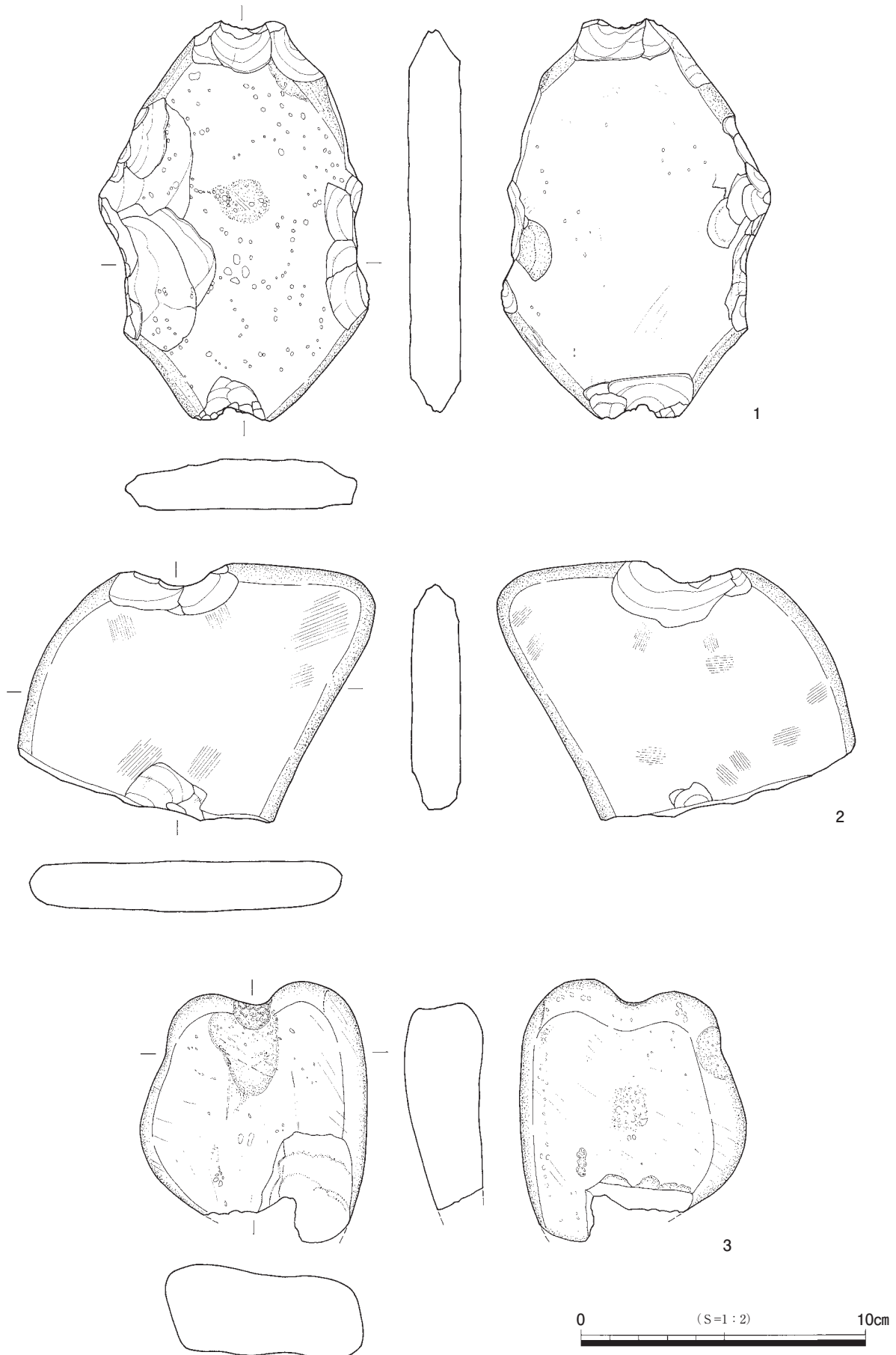


図95 石器 (12) 石錘

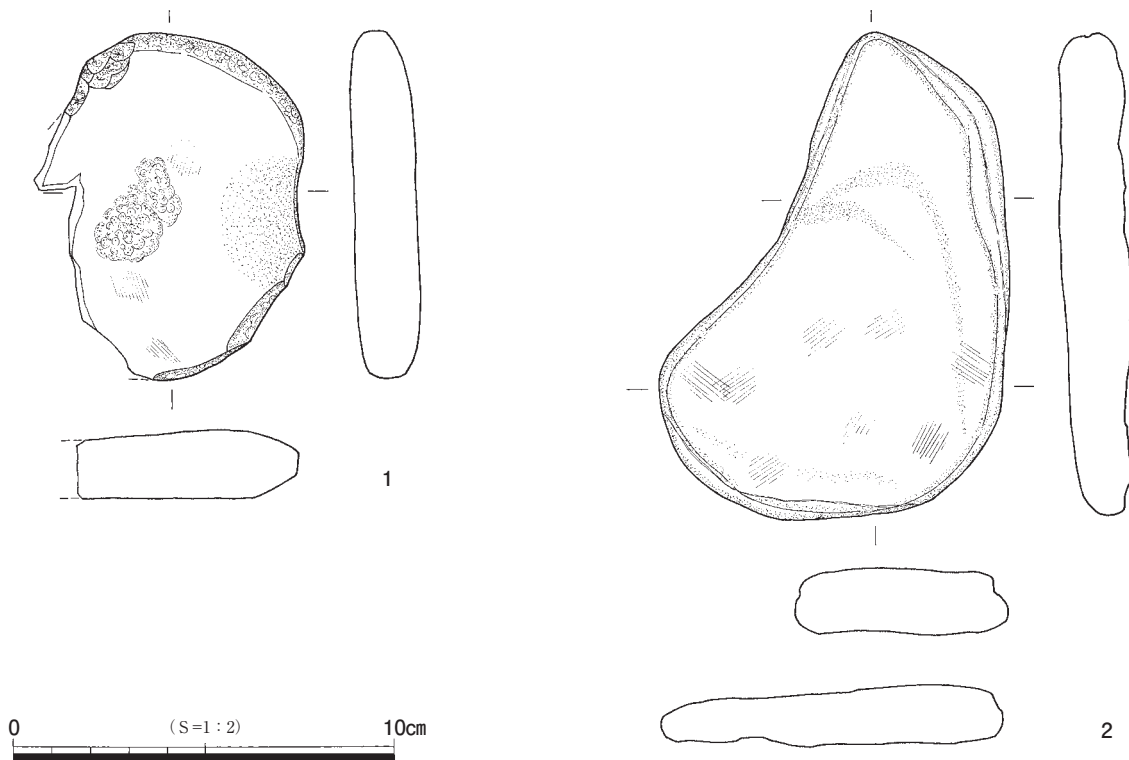


図96 石器 (13) 叩石・板状礫

する大型の礫を用いた叩石である。(1)は三面に敲打痕が残る。長さ16.4cm、幅7.6cm、厚さ6.4cm、重さ862.6gを測る。第13層から出土した。(2)は一面に敲打痕がみられる。長さ19.0cm、幅6.8cm、厚さ4.6cm、重さ862.5gを測る。第14-2b層から出土した。

当調査区から石棒7点が出土した。各石棒の石材については奥田尚氏の鑑定を得た。(図93-1)は229流路底部から出土した。頭部はわずかにくびれ、先端は欠損しているが丸味を帯びていたとみられる。断面状は楕円形を呈する。長さ35.85cm、幅6.5cm、厚さ4.7cm、重さ1758.3gで、遺存状態が良い。点紋片岩製である。(図94)の石棒は、339落ち込み(1・3・6)、第14-1層(2・4)、東側溝(5)から出土したものである。(1)の断面は円形に近い楕円形を呈し、頭部は自然に丸く仕上げていたとみられる。長さ16.7cm、幅6.9cm、厚さ5.0cm、重さ930.8gを測る。絹雲母片岩製である。(2)も(1)とほぼ同様の大きさとみられる。断面はやや扁平である。長さ15.1cm、幅6.9cm、厚さ2.8cm、重さ481.6gを測る。絹雲母片岩製である。(3)の断面も円形に近い楕円形を呈する長さ9.3cm、幅5.3cm、厚さ4.6cm、重さ275.5gを測る。緑色を帯びた点紋片岩製である。(4)は大きく欠損しているが、頭部は丸く、断面は円形であったと推定される。長さ13.5cm、幅2.4cm、厚さ4.7cm、重さ232.6gを測る。絹雲母片岩製である。(5)も同様に丸味をもつ頭部であったとみられる。表面に一部敲打痕が残る。長さ14.0cm、幅5.2cm、厚さ3.0cm、重さ343.3gを測る。点紋片岩製である。(6)はやや扁平な断面とみられる。長さ13.7cm、幅4.9cm、厚さ1.9cm、重さ190.9gを測る。絹雲母片岩製である。

(図95・96)は第15-2面出土の縄文後期の石器である。(図95)は扁平な礫を用いた石錘である。(1)は上下左右を打ち欠き挟りを入れている。凝灰岩製とみられる。(2)は対向する二辺を打ち欠く、うち一辺は礫の欠損部にあたる。(3)は小形の礫で、残存する片面には敲打痕が残る。(2・3)は砂岩製とみられる。(図96)も扁平な礫を用いた(1)は叩石、(2)は板状礫である。(1)は表面と上下面に敲打痕、右側面には研磨痕が残る。(2)は磨石として用いたとみられる。(林)

## 第5章 池島・福万寺遺跡04-2 調査区の自然科学分析

### 1. はじめに

自然科学分析は、弥生時代中期以前の古環境復元、実年代測定をする目的で行った。自然科学分析は池島・福万寺遺跡では、既往の調査区でも多数実施されているが、縄文時代晩期～弥生時代前期の古環境、特に古植生については植物化石の保存状態が悪く不明な点が多かった。今回の調査区では、当概期の植物遺体を多く含む堆積物が確認されており、当時の古環境に関する多くの情報が得られるものと期待された。分析は外部機関に委託し、ここでは分析結果と、それをまとめたものを報告する。行った分析は7種類で、古環境復元に関するものは珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析、軟X線写真撮影、大型植物遺体分析、動物遺体分析を行い、実年代測定は放射性炭素年代測定を行った。

また、分析結果表、動植物遺体に関しては財団法人大阪府文化財センターで保管している。

### 2. 自然科学分析の概要

自然科学分析調査は、調査区北東部の地点を中心に実施した(図97)。この地点では、縄文時代後期に埋没した流路とその河岸に形成された自然堤防、後背湿地に至る地形勾配が確認されている。1地点は、トラフ型斜交層理をなし極粗粒砂～細粒の細礫からなる縄文時代後期の流路充填堆積物と、これと同時異相をなすシルト質の砂による自然堤防堆積物で構成される。縄文時代後期の流路は、7・2・3地点の標高1.0m前後に累重する第5黒色粘土層に対比される第15a層以下の地層を下刻して累重する。また、縄文時代の流路および自然堤防堆積物の最上部には、6地点でみられる第4黒色粘土層に対比される第14a層の古土壌が形成されている。また、自然堤防の斜面部に相当する2地点では、層相から考えて第14a層相当層準において人為的営力によって形成されたと考えられる、偽礫(ブロック土)を含む非常に淘汰の悪い礫を含む砂質シルト層の分布が認められる。後背湿地に相当する3～5地点の第14a層相当層準は、非常に腐植質に富み、植物遺体を多く含むシルト～砂質シルトでなる堆積物で主に構成される。これらの腐植質の泥層には、4地点で見られるようなトラフ型斜交層理・葉理をなし極粗粒砂～細粒の細礫からなる極浅い流路ないし洪水堆積物が挟在する。

#### (1) 珪藻分析 (2) 花粉分析 (3) 植物珪酸体分析

これらの分析は、縄文時代後期に形成された第15a層が厚く堆積する7地点、縄文時代晩期～弥生時代前期に形成された第14a層が確認された6地点、第14a層相当層が確認された5地点の堆積物について実施した。分析層準は図97に示す21層準である。

#### (4) 軟X線写真撮影

軟X線写真撮影は、7・6・5地点の一部で、それぞれ第15a層を含む上下層、第13a・14a層を含む上下層、第13a・14a層相当層とその下層である。

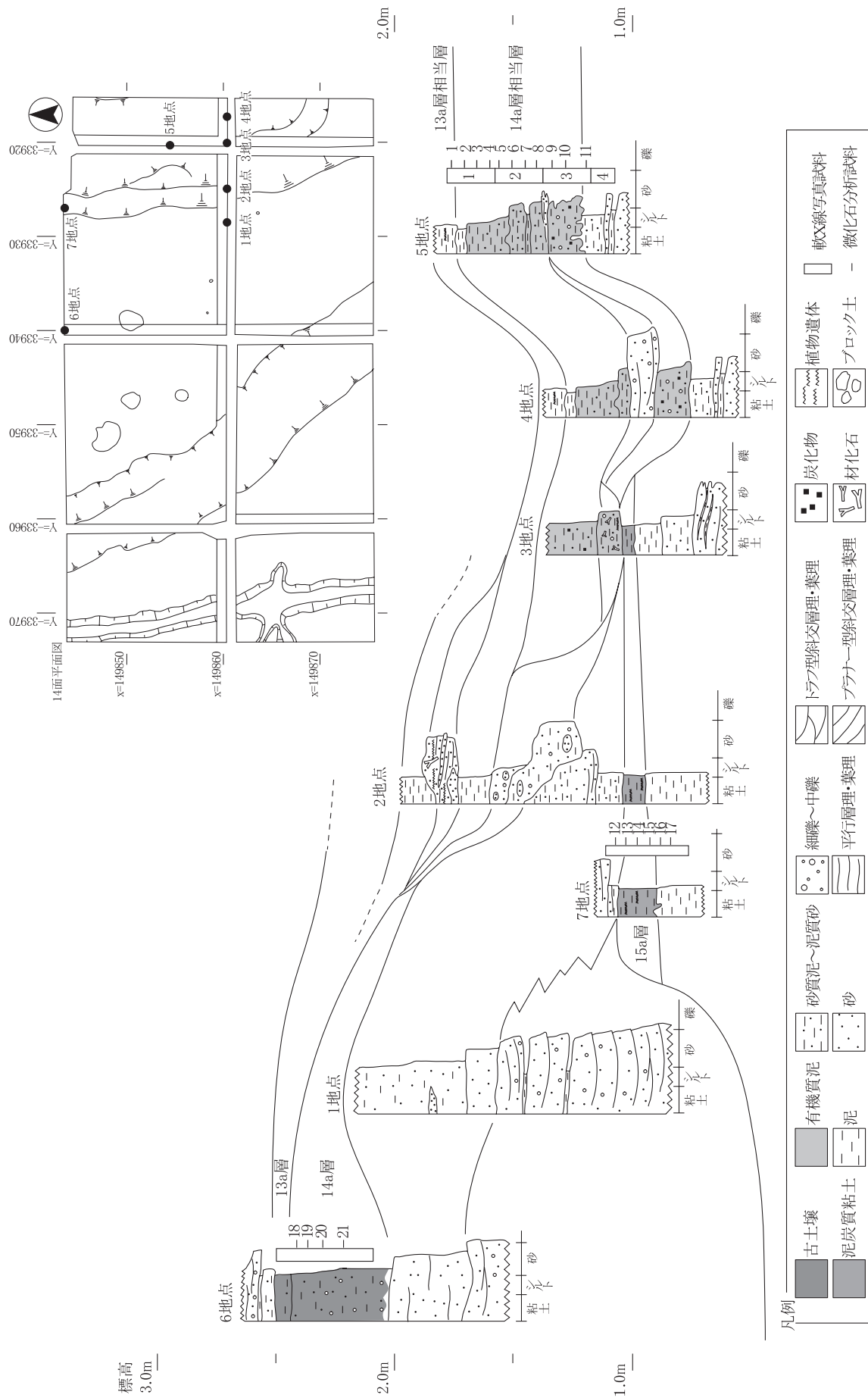


図97 調査地点の様式柱状図と分析試料採取地点平面図 (第14面)



### (5) 大型植物遺体分析

大型植物遺体の土壌サンプルは、2001土層断面サンプルA、2001土層断面サンプル⑤とした2箇所、第14-2a層から出土した水洗済みの植物遺体は同定分析を行なった。

### (6) 動物遺体分析

第14-1面検出の339落ち込みから出土した動物遺体に関して、同定分析を行なった(註1)。

### (7) 放射性炭素年代測定

8つの木質サンプルについて加速器質量分析計を用いて行なった。分析を行なったサンプルはPLD-6048・6049が第12面の立木、6050が第13b面の立木、6051が第15面の杭、6052~6055は第14-2b面の木棺部材である。

## 3. 各分析結果

### (1) 珪藻分析 (図98)

珪藻化石の産出頻度は比較的に良く、完形殻の出現率は全体的に60~70%で、産出した分類群は59属232分類であった。以下に、各地点ごとの分析結果を述べる。

#### ・7地点

第15a層にあたる試料13~15では、陸生珪藻、水生珪藻は50%ほどの同率で産出されるが、第15a層以下の試料16・17では、陸生珪藻が多数を占めている。反対に、第15a層の試料12では、水生珪藻が80%近い高率で産出されている。

産出された珪藻の中で多産するものは3種あり、それぞれ、陸域にも水域にも生育する陸生珪藻B群で沼沢湿地付着生種群でもある*Eunotia praerupta* var. *bidens*、耐乾性の高い陸生珪藻A群の*Luticola mutica*、流水不定性で水質のきれいな場所に生育する好清水性種の*Diploneis ovalis* var. *ovalis*がある。

#### ・6地点

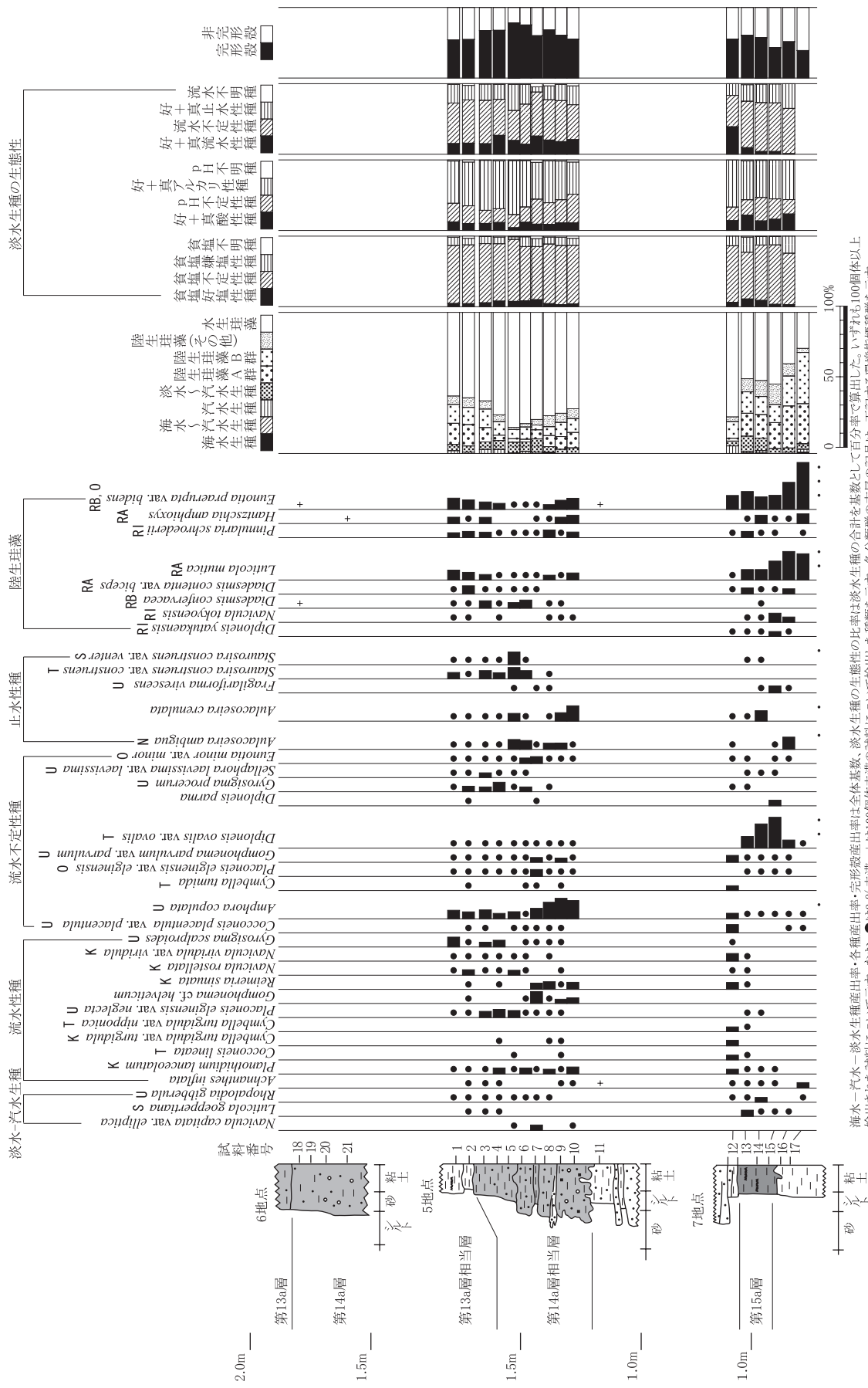
当地点から採取した土壌サンプルは乾燥した状態にあったため、分析に耐えられる珪藻が検出されなかった。

#### ・5地点

全体的に水生珪藻の割合が高いが、それも層位によって若干の増減がある。第14a層相当層の試料10から5に向かって水生珪藻が増加していき約80%となるが、以後第13a層相当層に近づくと約60%と減少する。産出された珪藻の中で特徴的なのは、流水性種、止水性種の水生珪藻の増減である。流水不定性種の*Amphora copulata*は、試料7~10ではやや多く産出されるが、試料6以降は減少する。それに伴って、止水性で偶来性浮遊性種(註2)の*Staurosira construens* var. *construens*や、偶来性浮遊性種で好汚濁性種の*Staurosira construens* var. *venter*、止水性種の*Aulacoseira crenulata*などが増加する。

### (2) 花粉分析 (図99)

産出された花粉は、木本は35種、草本は36種であったが、保存状態が悪いものも認められた。以下に、各地点ごとの分析結果を述べる。



海水-汽水-淡水性種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水性種の生態性の比を基数として百分率で算出した。いづれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は3%未満、+は100個体未満の試料について検出した種類を示す。各分群の末尾の記号は、下記する顕微鏡指標種群を示す。  
 K:中～下流性河川指標種, N:湖沼沼流地指標種, O:沼沢湿地付着性種(以上は安藤,1990) S:好汚濁性種, U:広域適応性種, T:好清水性種(Asai and Watanabe,1996)  
 R:陸生珪藻(RA:A群, RB:B群, RI:I区区分, 伊藤・堀内,1991)

図198 主要珪藻化石群集の層位分布



・ 7地点

第15 a層を含む試料12~16では、木本花粉の割合が高く、コナラ属アカガシ亜属、モミ属、スギ属が多産する。草本花粉では、ほかに比べてイネ科、カヤツリグサ科が多産する。また、サンショウモ、アカウキクサ属などの水湿地性植物の花粉・胞子が産出する。

・ 6地点

当地点から採取した土壌サンプルは花粉化石の保存状態が悪く、分析に耐えられる花粉が検出されなかった。

・ 5地点

第14 a層相当層以前の堆積層である試料11は、花粉化石の保存状態が悪かったが、7地点の試料12~16とはほぼ同じ産出率である。また、試料5・6では、花粉化石の保存状態が良好ではなかった。

全体に見て、花粉は木本、草本ともほぼ同率で産出される。木本で多産するのは、コナラ属アカガシ亜属、スギ属、モミ属、コナラ属コナラ亜属で、それらは層位によって産出量に違いが見られる。第14 a層相当層の下半にあたる試料9・10ではアカガシ亜属が産出量の大半を占めているが、第14 a層の中層にあたる試料8以降は徐々に減少し、第13 a ~14 a層相当層にあたる試料1・2の段階では元の半分ほどに減少する。それとともに、スギ属、コナラ亜属、モミ属が増加する。

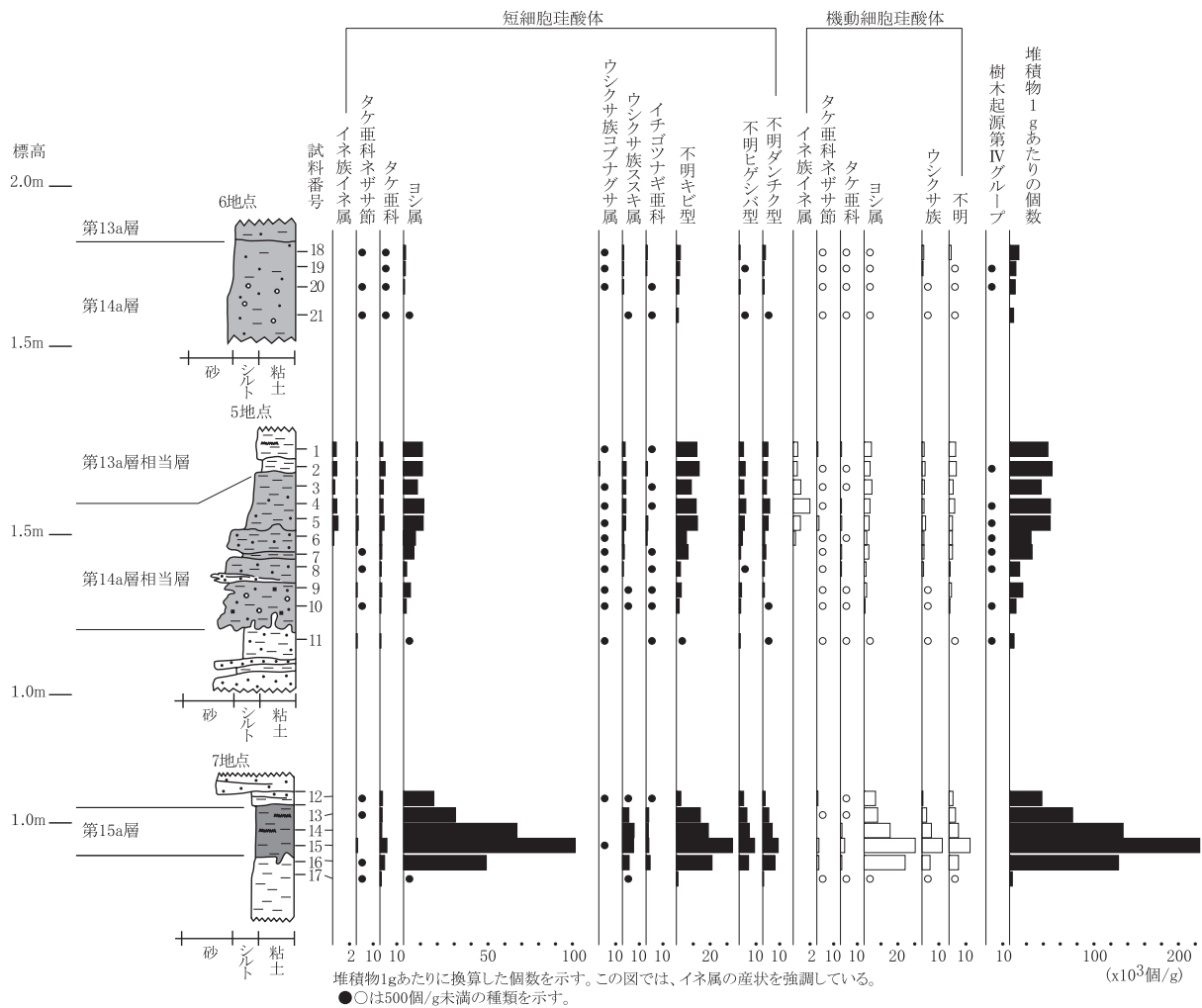


図100 植物珪酸体含量の層位分布

草本花粉では、イネ科、ヨモギ属、カヤツリグサ科が多産するが、層位によって増減がある。イネ科は、第15 a層を含む試料12~16でもやや多く産出されており、第14 a層の下半にあたる試料8まで同程度の産出量であるが、第14 a層の中層にあたる試料7で増加し、以降は一定の産出量を保持する。ヨモギ属は試料7~10において多産するが、それ以外では顕著ではない。試料7の段階でイネ科、ヨモギ属は最も多産するが、以降はヨモギ属が減少し、代わってカヤツリグサ科が多産するようになる。

### (3) 植物珪酸体分析 (図100)

各資料からは、一定量の植物珪酸体が検出されるが、全体的に保存状態が悪かった。検出された珪酸体は10種である。以下に、各地点ごとの分析結果を述べる。

#### ・ 7地点

3地点中、最も多くの植物珪酸体が検出された。その大半を占めるのはヨシ属で、特に第15 a層前後の試料13~16で多い。

#### ・ 6地点

検出量が少なく、良好な結果が得られなかったが、検出の割合は2地点のものに近い。

#### ・ 5地点

第15 a層では多数を占めていたヨシ属が第14 a層相当層の下半を含む試料8~11では減少する。試料6からは再び増加するが、それと同時にイネ属が検出され始める。イネ属は試料1まで連続して検出されるが、その量は少ない。

### (4) 軟X線写真撮影

#### ・ 7地点 (図101)

第15 a層を含む上下層を約23cmの柱状に整形して撮影した。層は上から順にA・B・C・Dの4層に大別され、C層が第15 a層、A・B層は第15 a層の上層、D層は第15 a層の下層である。分析結果としては第15 a層の上層と中・下層では構造が異なっており、上層はブロック土などが入り間隙が存在するが、中・下層は間隙が存在せず塊状であったことが確認された。また、A層下部~D層にかけて、不明瞭ながら擾乱ないし火焰状に流動変形している状況が観察された。これは、Matsuda (2000) により定義されている地震動による変形構造に類似するものである。Matsuda (2000)・松田 (1999) によると、泥質堆積物(註3)に認められる変形は、上から順に3種類に分けられる。

(1) 水と堆積物が乱流によって混ざり合い、ほとんど塊状を呈する液層の流動変形ユニット (liquidized deformation unit)

(2) 変形に際して引きずり上げられた下位層の羽毛状、火焰状(ただしフレイム構造とは別種)の流線パターンや細粒の中礫サイズ以細のブロックの散乱、下向きに凸な形に変形した葉理から構成される荷重痕(ロード)構造をなす含水塑性変形ユニット (hydroplastic deformation unit)

(3) 下向きのフィッシャーや微小断層がみられる脆性変形ユニット (brittle deformation unit)

今回の層準A下部とBが(1)、層準CからDが(2)に対応する可能性が高いが、古地震を特定するには充分でなく、発掘調査区全体での検討が必要である。なお、地震動イベントの年代は、変形ゾーン上端直上および直下の堆積物の年代によって決まる(Matsuda2000)ことから、A層形成期の弥生時代前期後半頃ということになる。

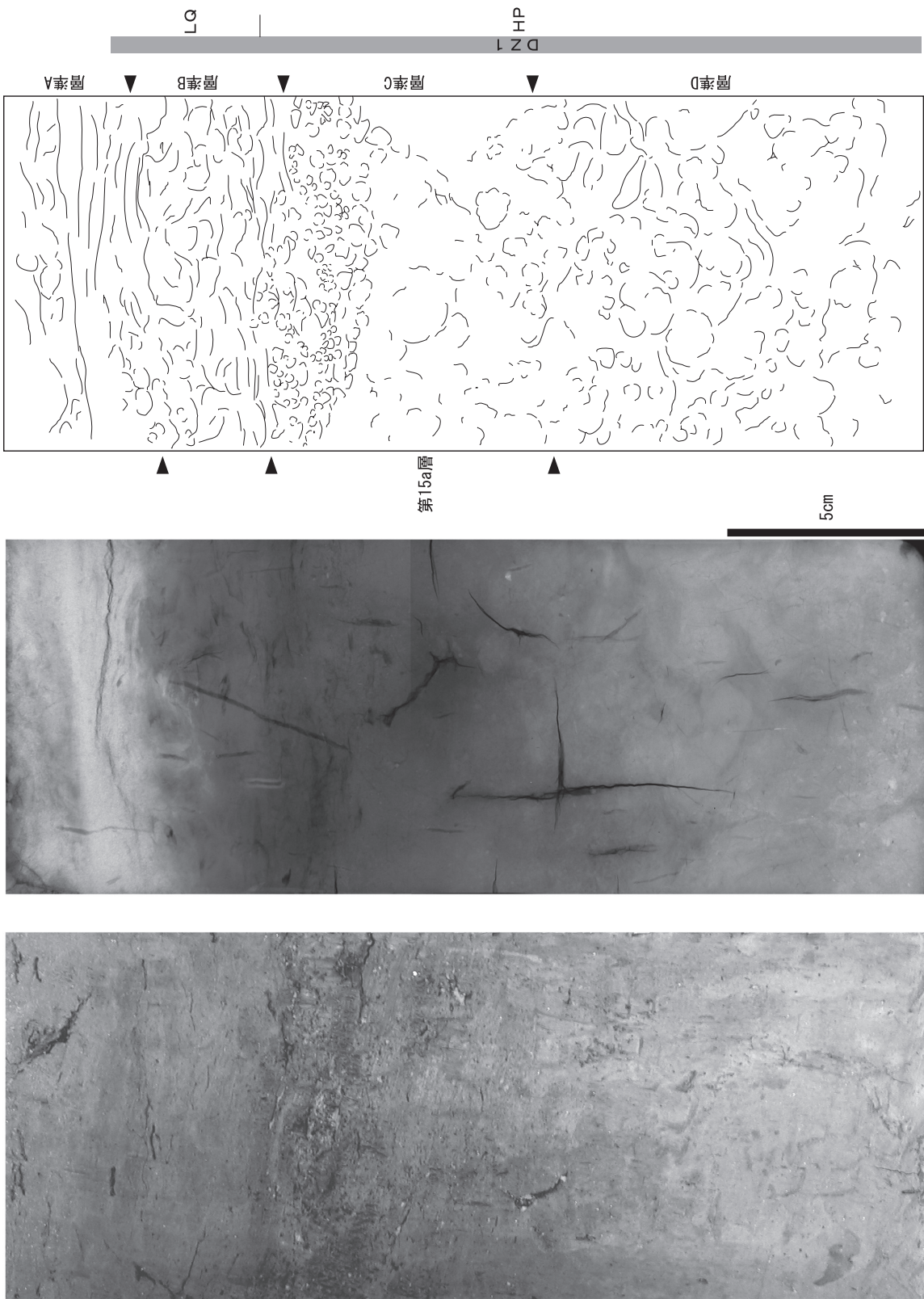


図101 7地点の軟X線写真と主な構造トレース図

#### ・6地点 (図102)

第13 a・14 a層を約42cmの柱状に整形して撮影した。層は上から順にA・Bの2層に大別され、A層が第13 a層、B層が第14 a層である。

分析結果として、A層とB層上部は大きさ5～10mm程度の集合体ないし偽礫（ブロック土）が多数分布していることが確認される。B層の中・下部は塊状をなし、顕著な間隙がほとんど確認されなかった。

このように第14 a層中の構造や粒径などは層位的に変化していることが確認されたことは、本層が長期間にわたって形成された堆積物であることを証明している。おそらく、塊状を示した中・下部層準も、本来上部のような構造を呈していたのだが、その後累積的に土壌が発達していく過程で間隙内が泥で充填されていった形成過程が考えられる。この変化の過程については、今後土壌薄片作製観察を行い、堆積物微細形態学的に検証することが大切と考える。

#### ・5地点 (図103)

第13 a・14 a層相当層とその下層を約70cmの柱状に整形して撮影した。層は上から順にA・B・Cの3層に大別され、A層が第13 a層相当層、B層が第14 a層相当層、C層が第14 a層相当層の下層である。

分析結果として、層準C上部から層準Aにかけて確認された一連の変形構造は、先述したMatsuda (2000) により定義されている地震動イベントによる変形構造に類似する。それによると、層準C上部層が先述の(3)、その上位から層準A直下までが(2)、層準A下部が(1)に対比できると判断される。これらの変形構造は、一回の地震動イベントにともなう変形構造と判断される。地震の発生層準は、変形構造の上限が層準Aであることから、弥生時代前期後半頃と推定される。

また、層準Cは第14 a層の下位堆積物に相当し、直上面に人為的影響がおよんでいる可能性が考えられたが、変形が著しいため、良好な分析結果が得られなかった。

#### (5) 大型植物遺体分析 (表1、図104)

4箇所採取地点から得られたのは、各種の核、種子、果実、芽、刺である。同定の結果、木本が10種、草本が12種、虫食い(註4)が確認された。表1がその同定結果と分類種である。木本はすべてが食用可能なものであったが、草本は食用に適さないものが大半を占める。以下に出土したうち、特徴的な植物遺体について述べる。

##### ・クルミ科

第14-2 a層中で出土した植物化石のうち、その半数を占める量が出土し、その多くはオニグルミである。完形核のほかに、人間による打撃痕が明瞭に認められ、割れているものがある。また、小片はすべて合わせても完形核の半分にもならない大きさであり、人為的に割った破片であることを推測させるものである。

##### ・クヌギまたはアベマキ、コナラ属、トチノキ

これら3種の木本は、すべての地点から果実、種子の破片のみが出土し、幼果、殻斗などの食用に適さない部分は出土しなかったため、人為的に果実、種子のみを採集したものと考えられる。また、クヌギまたはアベマキは、炭化したような果実が出土しており、人為的な影響が考えられる。

##### ・クリ

サンプル⑤、No.712から出土しており、比較的大型のものであるため、栽培された種であると考えられる。

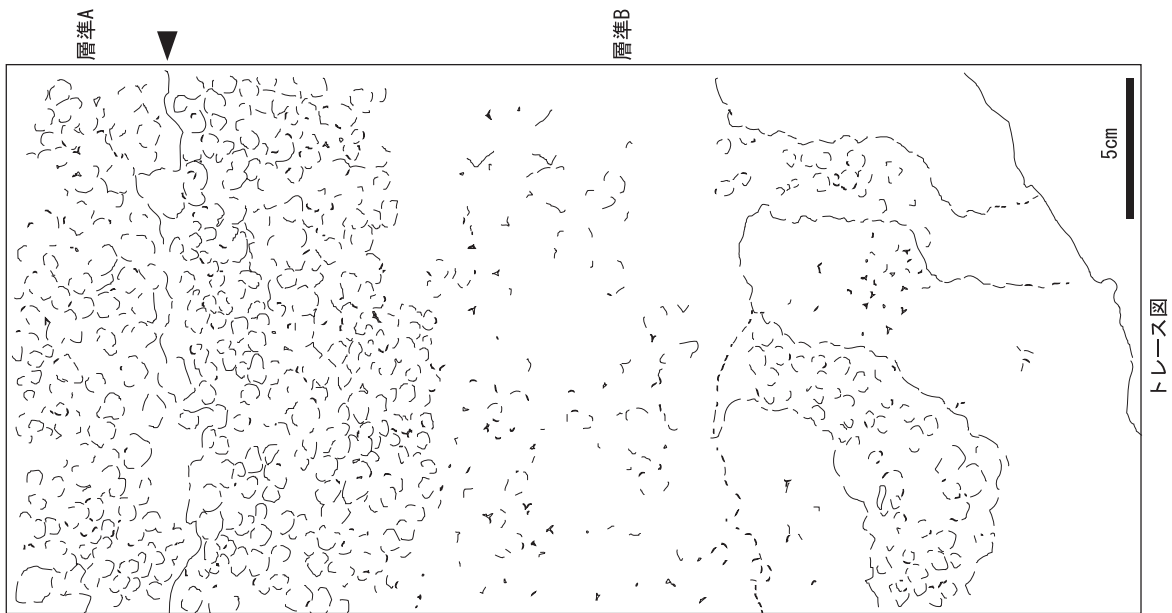
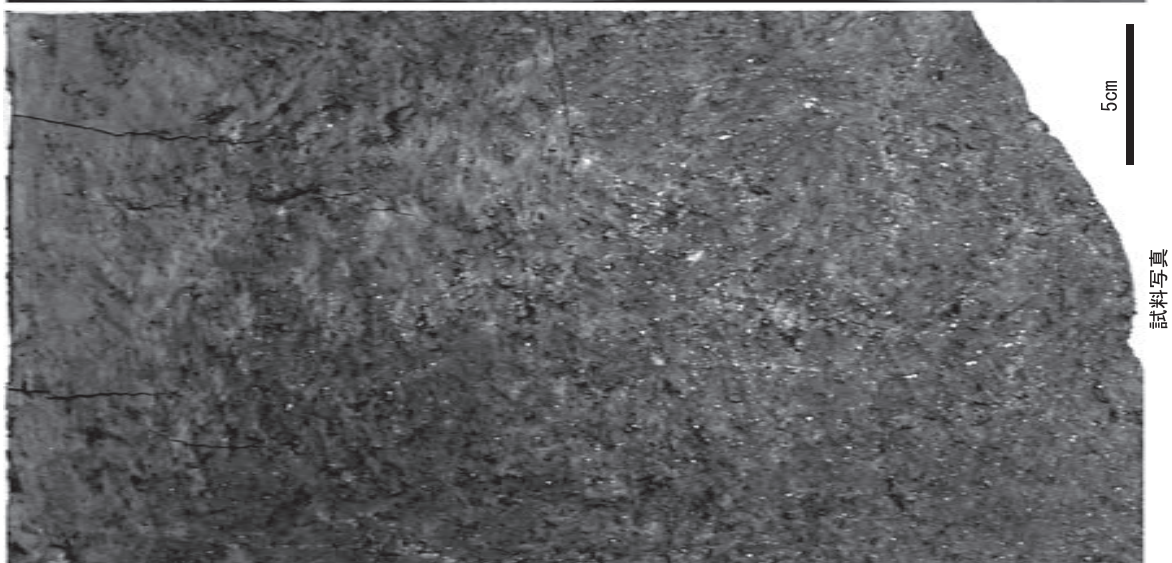
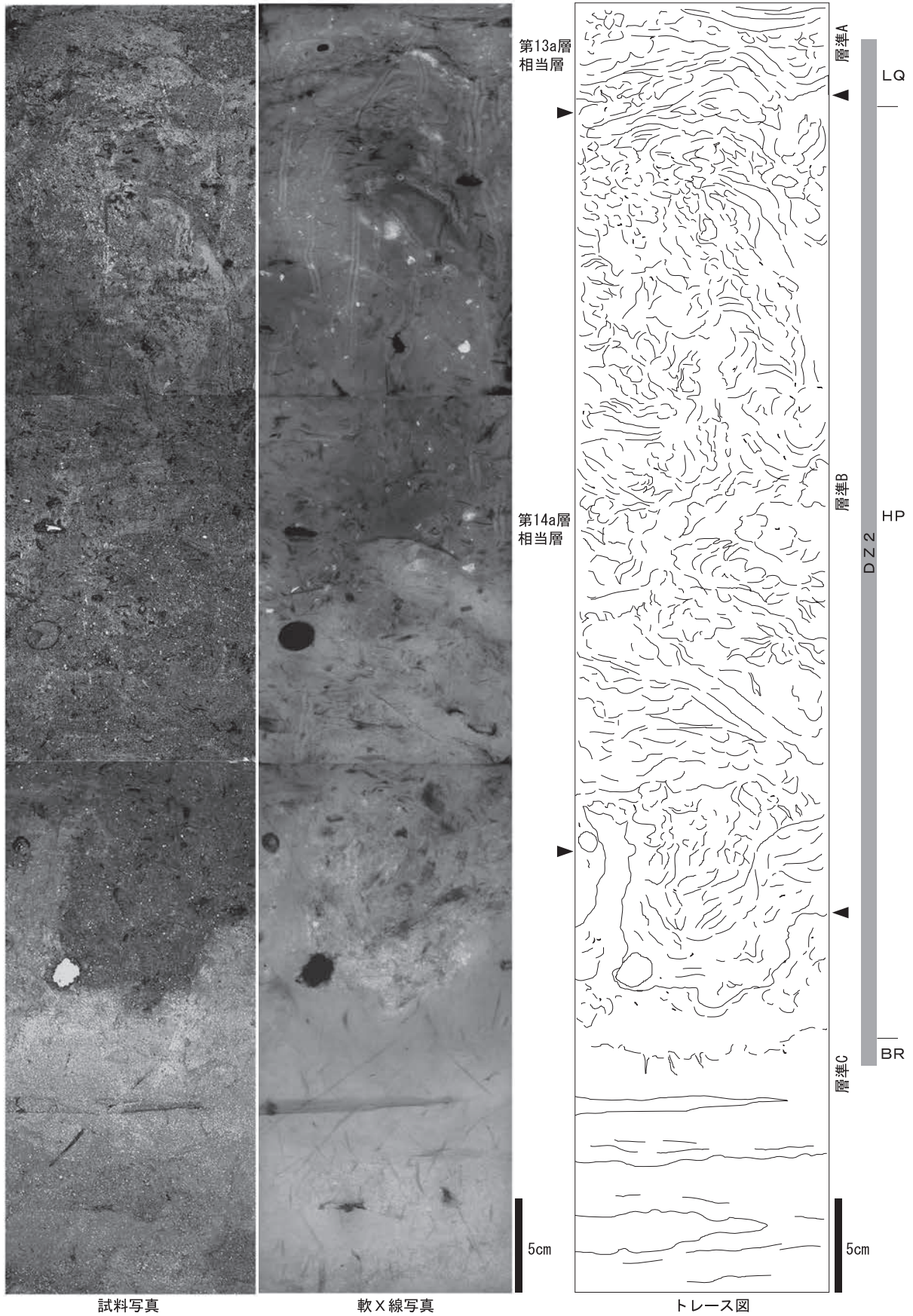


図102 6地点の軟X線写真と主な構造トレース図





試料写真

軟X線写真

トレース図

図103 5地点の軟X線写真と主な構造トレース図

表1 大型植物化石一覧表

	試料種別	堆積物	堆積物	水洗済み	水洗済み
	地区割	2001土層 断面	2001土層 断面	2001土層 断面	2010
	層位/ 遺構面			14-2a層	14-2a層
分類群・部位	登録番号	サンプルA	サンプル⑤	712	753
オニグルミ	核・完形			2	
	核・自然半割			(2)	
	核・打撃痕			(6)	(2)
	核・1/2片未満			(10)	
ヒメグルミ	核			1	
クヌギまたはアベマキ	炭化果実	(4)		(1)	
コナラ属	果実	(5)	(1)	(3)	
クリ	果実		(3)	(1)	
ブナ科	果実				(2)
キイチゴ属	核	1			1
トチノキ	種子		(2)	(4)	(1)
ブドウ属	種子	(2)	(4)		1
	炭化種子		1		
不明	芽	2(2)	(2)		2
	刺		1		1
スゲ属	果実	5	5		1
カヤツリグサ属	果実	2			
ウキヤガラ	果実	1			
クワクサ	果実	1			
カラムシ属	種子	1			
ヤナギタデ	果実		1		
タデ属	果実		(1)		(1)
カタバミ属	種子				1
ミズオトギリ	種子	1			
ノブドウ	種子		(2)		2
セリ科	果実	1			
イヌコウジュ属	果実		1		
	虫えい		1		

数字は個数、()内は半分ないし破片の数を示す

表2 動物遺体一覧表

出土遺構	シジミガイ科	イシガイ科	カワナ科	タニシ科	備考
339落ち込み	32(R+L)他ブロック状	L3 R5	12	2	クロベンケイガニ10点、スッポン・魚骨各1点

シジミガイ科はセタシジミ、イシガイ科はイシガイである可能性が高い

表3 貝類種名一覧表

門	軟体動物門 Mollusca		節足動物門 Arthropoda	脊椎動物門 Chordata
綱	腹足綱 Gastropoda	二枚貝綱 Bivalvia	甲殻綱 Crustacea	爬虫綱 Reptilia
科	カワナ科 Pleuroceridae	シジミガイ科 Corbiculidae		
	タニシ科 Viviparidae	イシガイ科 Unionidae		
同定			クロベンケイガニ <i>Chiromantes dehaani</i> (H. Milne Edwards)	スッポン <i>Pelodiscus sinensis</i> (Wiegmann)

・ブドウ属

サンプルA、⑤、No.753から出土し、特にサンプル⑤からは炭化したようなブドウ属の種子が完形で出土しており、人為的な影響も考えられる。

・ウキヤガラ、ヤナギタデ、ミズオトギリ

サンプルA、⑤から出土しており、沼のような水湿地や水辺に生える植物である。

・クワクサ、カタバミ属、イヌコウジュ属

サンプルA、⑤、No.753から出土し、やや乾燥した場所に生える植物である。

(6) 動物遺体分析 (表2・3)

339落ち込みからは貝類を中心に、カニ・スッポンなどの動物遺体が出土した。同定の結果は表に示した通りである(註5)。

貝類は30個体以上が出土したが、殻皮のみが残るものや土ごと取上げたものが多く、残存状態は悪

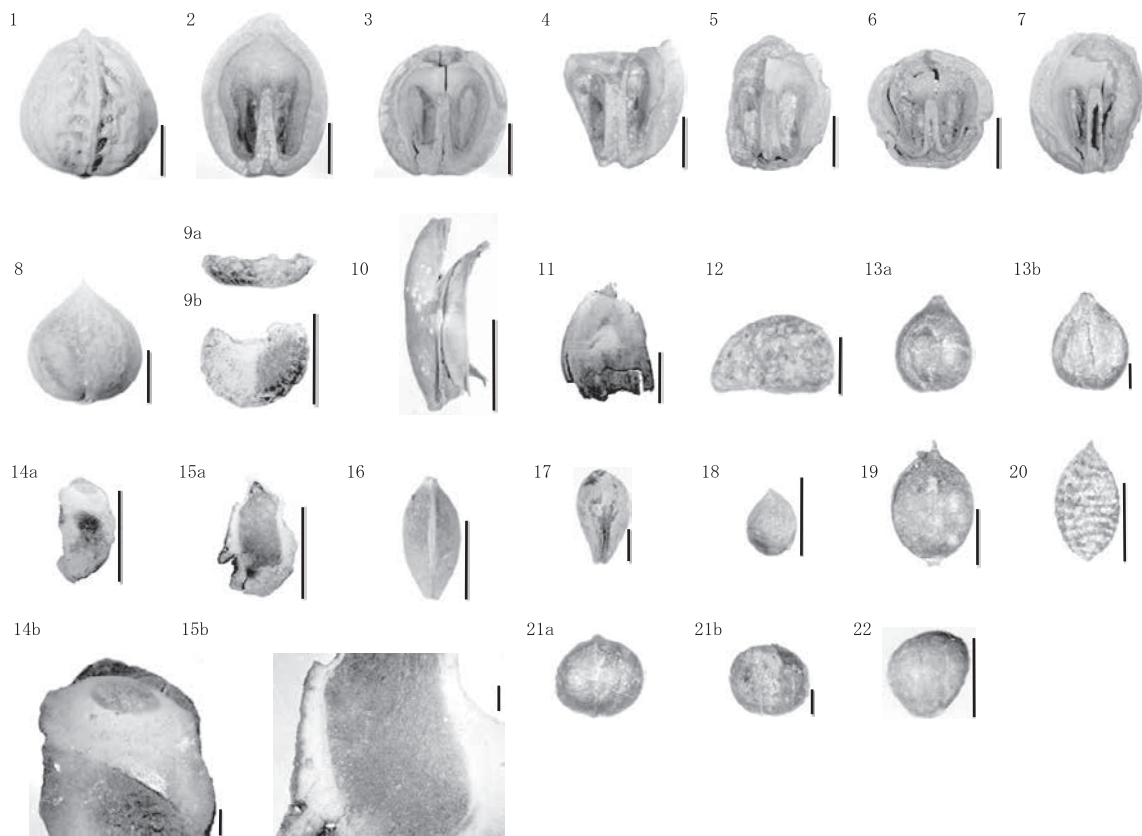


図104 出土した大型植物化石(スケールは1~11、14a、15aが1cm、12、13、14b、15b、16~22が1mm)

- |   |                            |
|---|----------------------------|
| 1. オニグルミ、核(完形)、No.712                         | 2. オニグルミ、核(自然半割)、No.712    |
| 3~5. オニグルミ、核(打撃痕)、No.712                      | 6、7. オニグルミ、核(打撃痕)、No.753   |
| 8. ヒメグルミ、核、No.712                             | 9. クスギまたはアベマキ、果実(尻)、No.712 |
| 10. コナラ属、果実、No.712                            | 11. クリ、果実、No.712           |
| 13. ブドウ属、炭化種子、サンプル⑤                           | 12. キイチゴ属、核、No.753         |
| 14、15. トチノキ、種子(1bは1a上半部の拡大、2bは2中央部の拡大)、No.712 |                            |
| 16. スゲ属、果実、サンプル⑤                              | 17. ウキヤガラ、果実、サンプルA         |
| 19. ヤナギタデ、果実、サンプル⑤                            | 18. カラムシ属、種子、サンプルA         |
| 21. ノブドウ、種子、No.753                            | 20. カタバミ属、種子、No.753        |
|   | 22. イヌコウジュ属、果実、サンプル⑤       |

い。同定された貝類はシジミガイ科・タニシ科・カワナ科に属する。このうち、イシガイ科の資料はイシガイで、シジミガイ科の資料は殻頂の発達などからセタシジミである可能性が高い。シジミガイ科の資料がセタシジミであれば、今回出土した貝類はすべて淡水性種である。貝類以外ではクロベンケイガニの鉗脚（ハサミ）の先端部が10点、スッポンと魚骨の破片が各1点出土している。

今回出土した動物遺体のうち、クロベンケイガニ以外は食用となりうるものである。しかしながら、貝類はすべて淡水性種で、クロベンケイガニについても海岸に近い内陸部には棲息していることから、明らかに遺跡外から持ち込まれたと判断できる資料は含まれていない。

## （7）放射性炭素年代測定（表4・5）

### ・測定方法

表5に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行った $^{14}\text{C}$ 年代、 $^{14}\text{C}$ 年代を暦年代に較正した年代範囲、暦年較正に用いた年代値を、図105～112に暦年較正結果をそれぞれ示す。

$^{14}\text{C}$ 年代（y r B P）の算出には、 $^{14}\text{C}$ の半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した $^{14}\text{C}$ 年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、測定の統計誤差、標準偏差などに基づいて算出され、試料の $^{14}\text{C}$ 年代がその $^{14}\text{C}$ 年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示すものである。

### ・暦年較正

$^{14}\text{C}$ 年代の暦年較正にはOxCal3.10（較正曲線データ：INTCAL04）を使用した。なお、 $1\sigma$ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された $^{14}\text{C}$ 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に $2\sigma$ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は $^{14}\text{C}$ 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。それぞれの暦年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

### ・年代測定結果

測定試料はすべて木質であるため、最外年輪部分が残存していないと正確な年代が不明となる。今回は、木棺部材であるP L D - 6052～6055は板材であるため最外年輪がなく、最も新しい年代を示した。その他のサンプルはいずれも最外年輪が残存していた。

第12面のP L D - 6048・6049立木の測定年代は、 $2\sigma$ 暦年代範囲において180 - 40 Cal B C（95.4%）であり、相対年代と一致する。

第13b面のP L D - 6050立木は、 $2\sigma$ 暦年代範囲において360 - 270 Cal B C（56.8%）であり、相対年代と概ね一致する。

第15面のP L D - 6051杭材は、 $2\sigma$ 暦年代範囲において770 - 520 Cal B C（95.4%）で年代範囲が広いものの概ね相対年代と一致する。

433木棺墓の試料は、側板（西）と床板および南小口板であるが、最も新しい年代値を示すP L D - 6055の南小口板では $2\sigma$ 暦年代範囲において550 - 400 Cal B C（88.4%）であった。同時期と思われる467木棺墓は、南小口板では $2\sigma$ 暦年代範囲において520 - 390 Cal B C（95.4%）であり両者とも相対年代と概ね一致する。

表4 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理	測定
PLD-6048	位置：04-2区 遺物No：立木② 層位：12面	試料の種類：生材(立木；ヤナギ属) 試料の性状：最外年輪 状態：wet カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo： NEC製コンパクトAMS・1.5SDH
PLD-6049	位置：04-2区 遺物No：立木⑦ 層位：12面	試料の種類：生材(立木；ヤナギ属) 試料の性状：最外年輪 状態：wet カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo： NEC製コンパクトAMS・1.5SDH
PLD-6050	位置：04-2区 遺物No：立木No.672 層位：13b面 その他：2002土層断面	試料の種類：生材(立木；ヤナギ属) 試料の性状：最外年輪 状態：wet カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo： NEC製コンパクトAMS・1.5SDH
PLD-6051	位置：04-2区 遺物No：743 (542杭) 層位：15面	試料の種類：生材(杭材；カヤ) 試料の性状：最外年輪 状態：wet カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo： NEC製コンパクトAMS・1.5SDH
PLD-6052	位置：04-2区 遺構：433木棺墓側板(西) 層位：14-2b面	試料の種類：生材(カヤ) 試料の性状：最外外部位不明 状態：wet カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo： NEC製コンパクトAMS・1.5SDH
PLD-6053	位置：04-2区 遺構：433木棺墓床板 層位：14-2b面	試料の種類：生材(アカガシ亜属) 試料の性状：最外外部位不明 状態：wet カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo： NEC製コンパクトAMS・1.5SDH
PLD-6054	位置：04-2区 遺構：467木棺墓711南小口板 層位：14-2b面	試料の種類：生材(アカガシ亜属) 試料の性状：最外外部位不明 状態：wet カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo： NEC製コンパクトAMS・1.5SDH
PLD-6055	位置：04-2区 遺構：433木棺墓南小口板 層位：14-2b面	試料の種類：生材(カヤ) 試料の性状：最外外部位不明 状態：wet カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo： NEC製コンパクトAMS・1.5SDH

表5 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	$^{14}\text{C}$ 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代を暦年代に較正した年代範囲		暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )
			1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲	
PLD-6048	-28.74 $\pm$ 0.19	2080 $\pm$ 25	160BC (14.1%) 130BC 120BC (54.1%) 50BC	180BC (95.4%) 40BC	2080 $\pm$ 23
PLD-6049	-27.41 $\pm$ 0.13	2090 $\pm$ 25	170BC (68.2%) 50BC	180BC (95.4%) 40BC	2091 $\pm$ 23
PLD-6050	-28.46 $\pm$ 0.20	2180 $\pm$ 25	360BC (50.3%) 290BC 230BC (17.9%) 190BC	360BC (56.8%) 270BC 260BC (38.6%) 170BC	2178 $\pm$ 23
PLD-6051	-29.55 $\pm$ 0.17	2490 $\pm$ 25	760BC (10.9%) 730BC 690BC (2.4%) 680BC 670BC (2.9%) 660BC 650BC (52.1%) 540BC	770BC (95.4%) 520BC	2492 $\pm$ 23
PLD-6052	-24.82 $\pm$ 0.12	2460 $\pm$ 25	750BC (28.4%) 680BC 670BC (10.8%) 640BC 600BC (29.0%) 510BC	760BC (30.2%) 680BC 670BC (55.1%) 480BC 470BC (10.2%) 410BC	2462 $\pm$ 23
PLD-6053	-28.18 $\pm$ 0.12	2500 $\pm$ 25	770BC (8.7%) 740BC 690BC (6.5%) 660BC 650BC (53.0%) 550BC	780BC (95.4%) 530BC	2500 $\pm$ 23
PLD-6054	-28.37 $\pm$ 0.14	2370 $\pm$ 25	490BC (18.0%) 460BC 450BC (5.8%) 430BC 420BC (44.4%) 390BC	520BC (95.4%) 390BC	2370 $\pm$ 23
PLD-6055	-25.26 $\pm$ 0.14	2410 $\pm$ 20	510BC (68.2%) 400BC	730BC (7.0%) 690BC 550BC (88.4%) 400BC	2412 $\pm$ 22

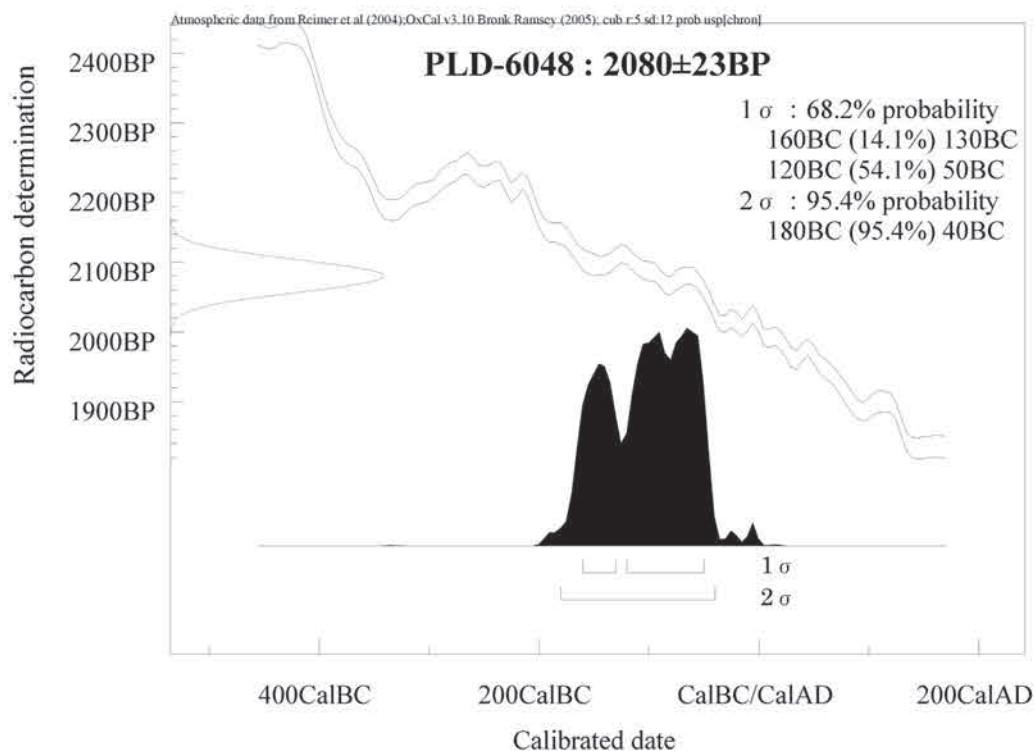


圖105 PLD6048曆年較正結果

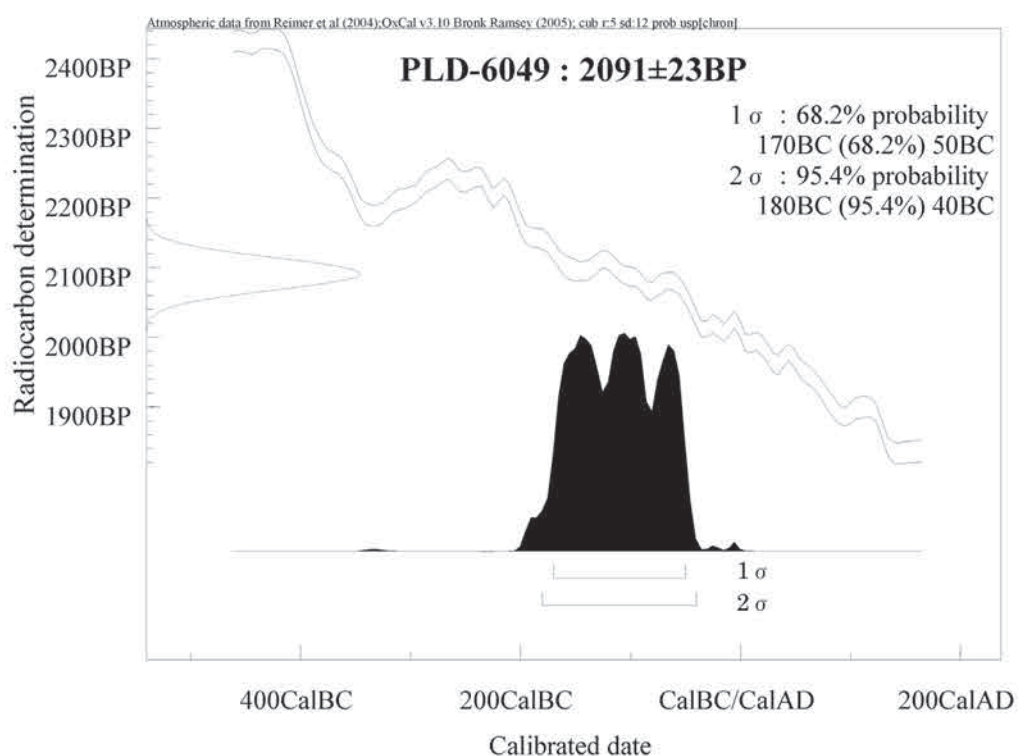


圖106 PLD6049曆年較正結果

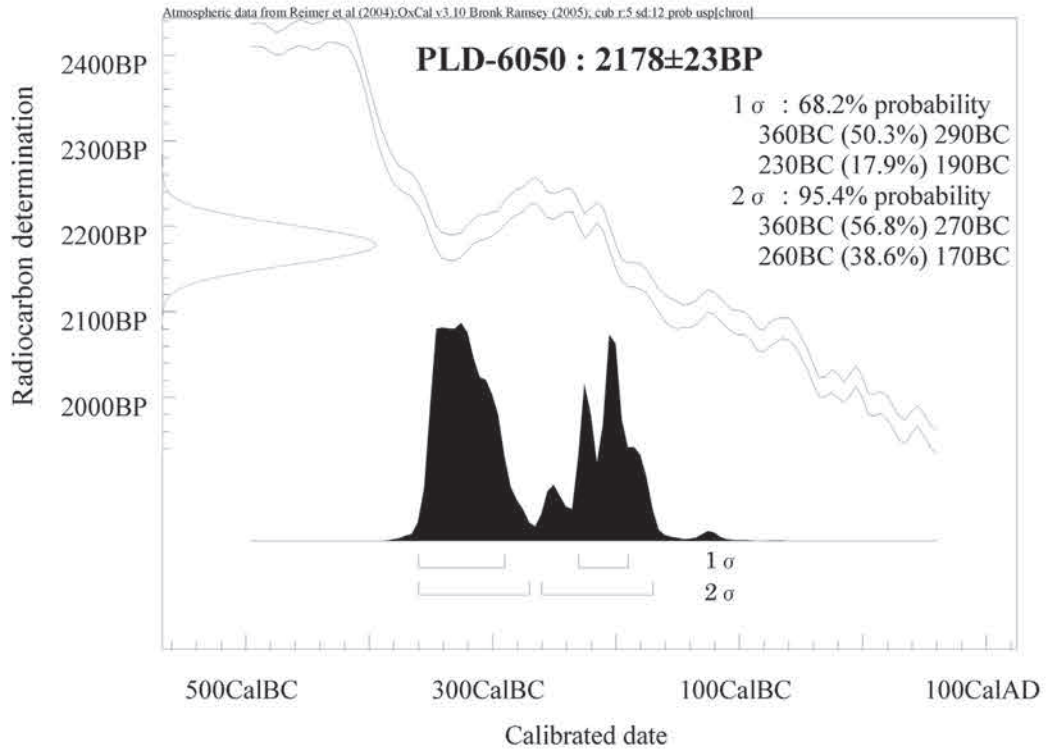


図107 PLD6050暦年較正結果

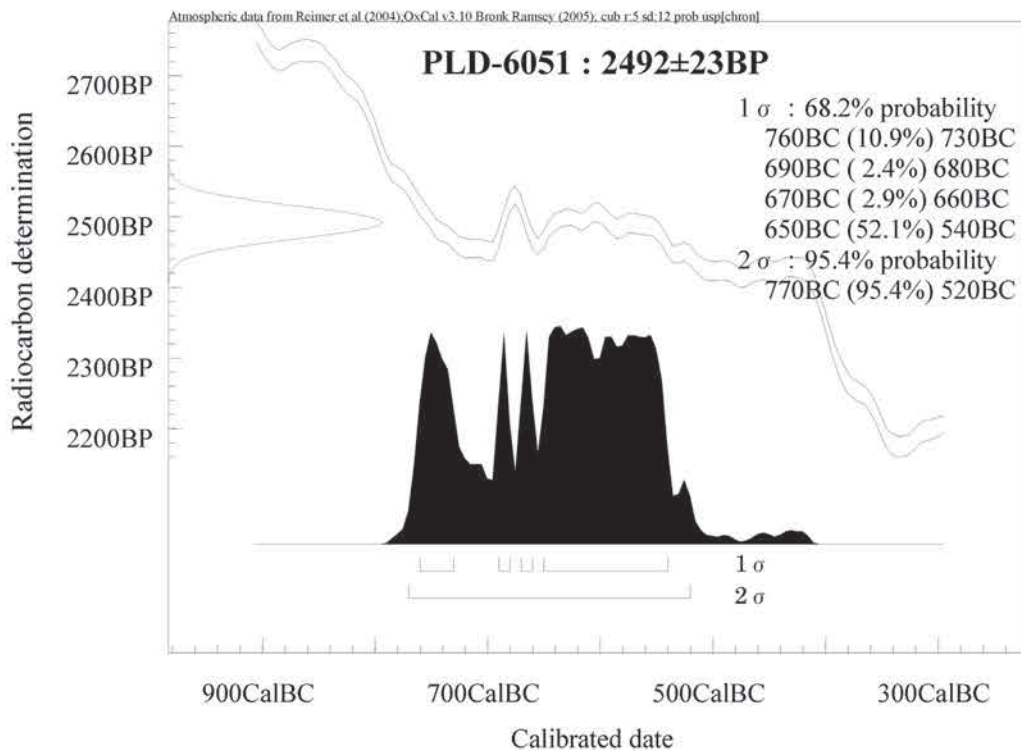


図108 PLD6051暦年較正結果

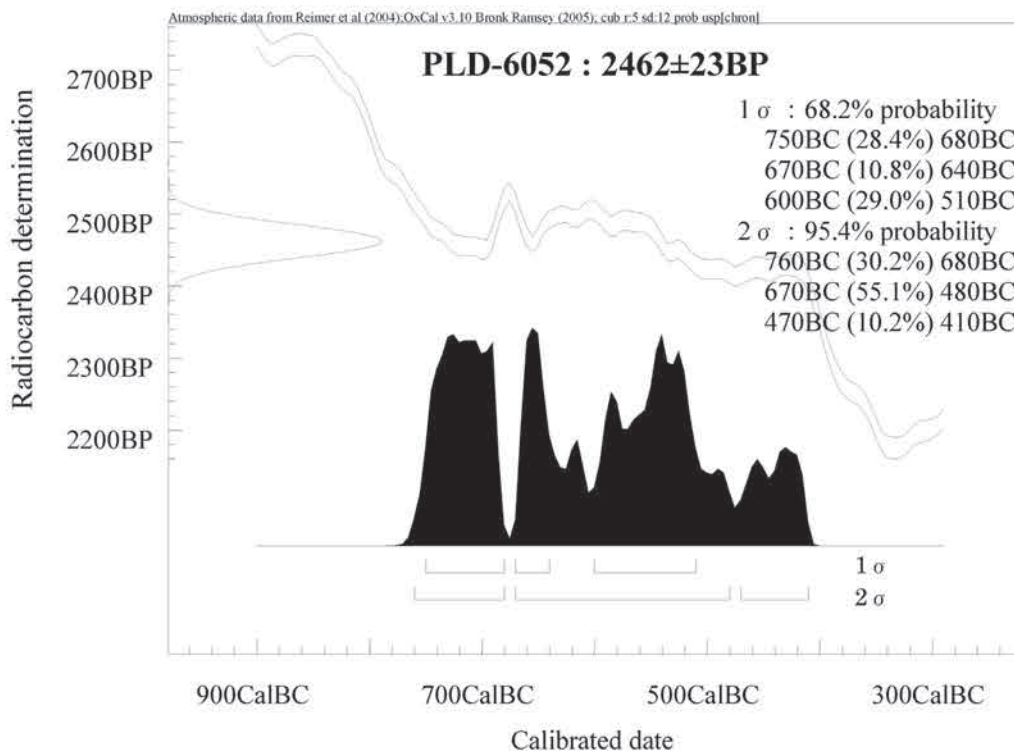


圖109 PLD6052曆年較正結果

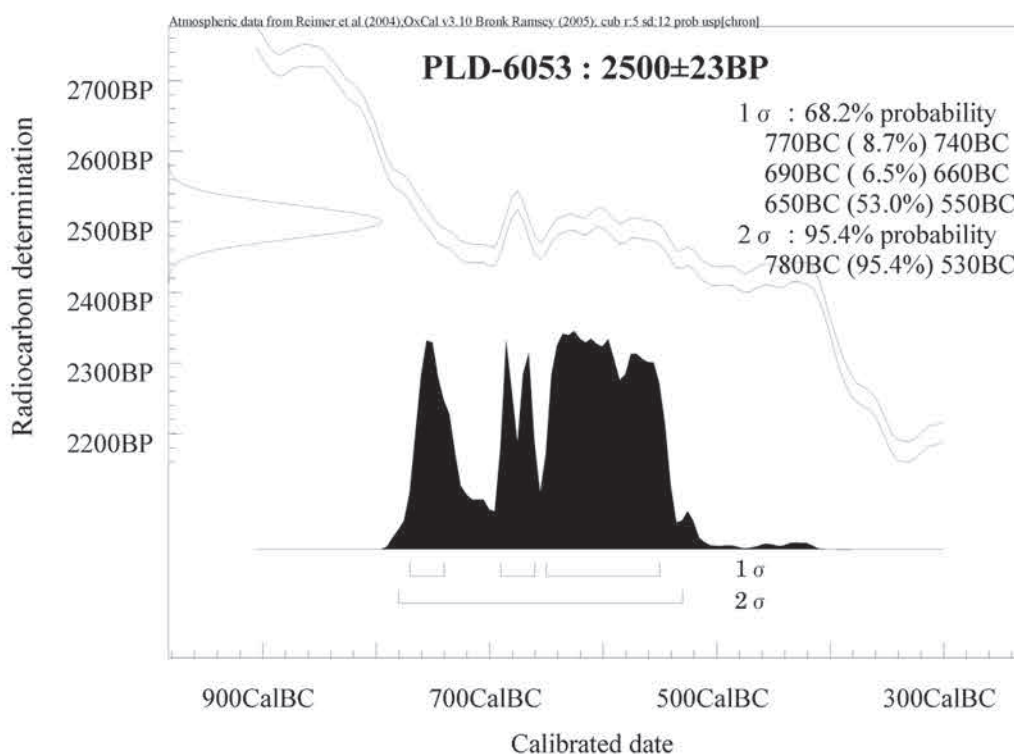


圖110 PLD6053曆年較正結果



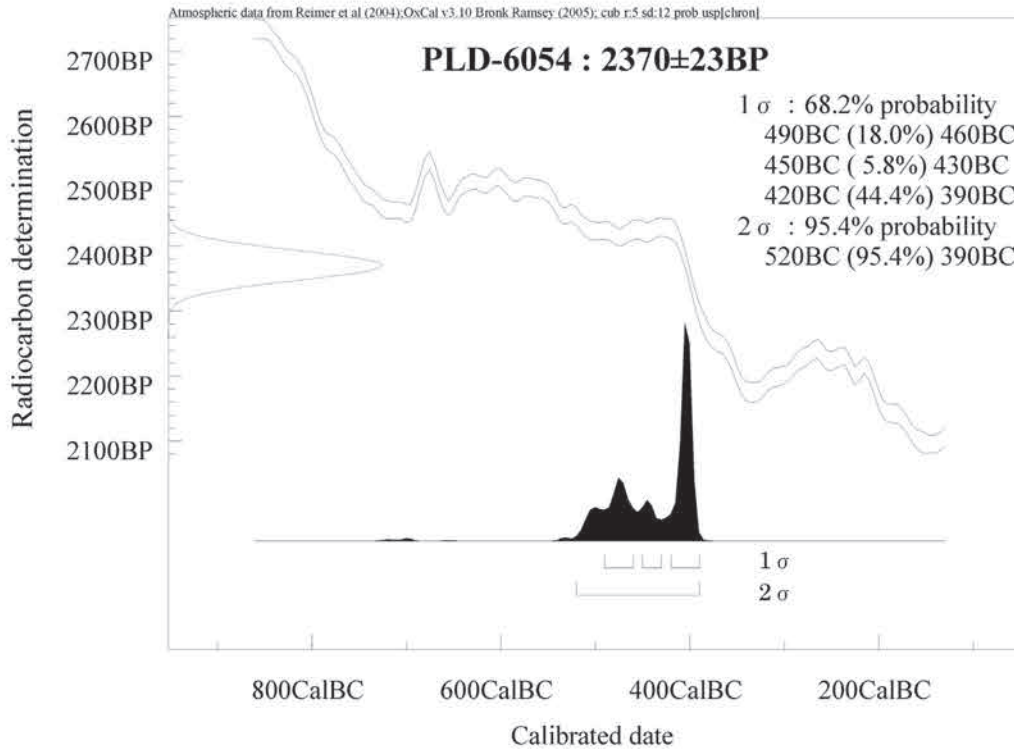


図111 PLD6054暦年較正結果

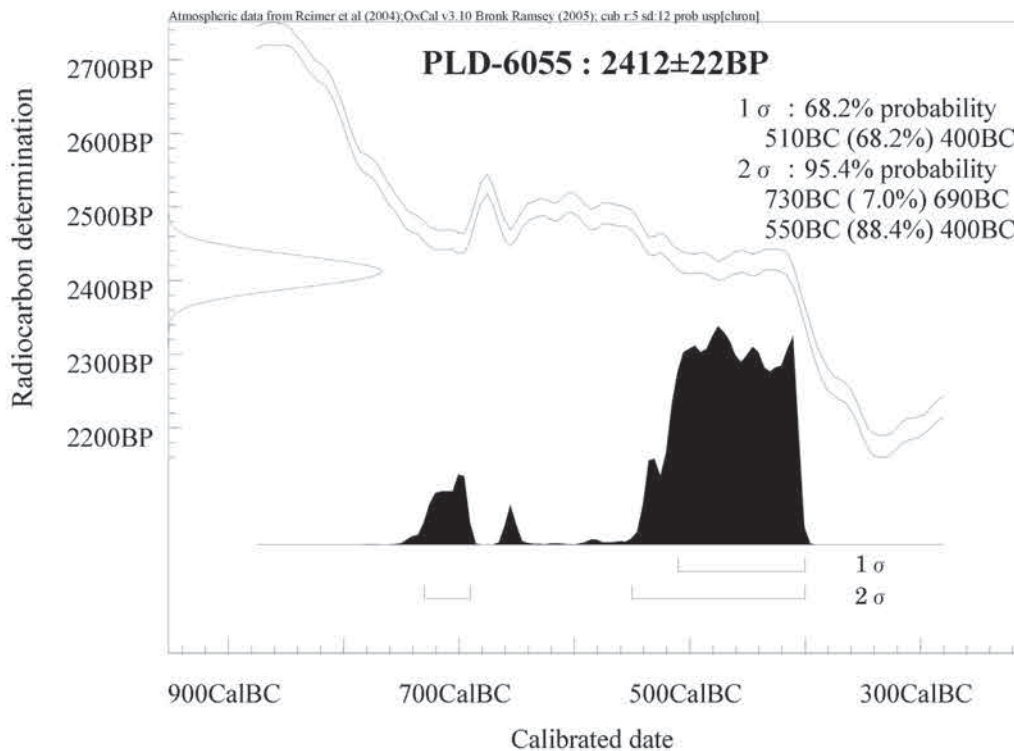


図112 PLD6055暦年較正結果

## 4. 自然科学分析の成果と検討

### (1) 堆積環境

調査区内における第15 a層形成期以前から第13 a層形成期にかけての堆積環境について、先述してきた各分析結果および堆積層の累重状況に基づいて検討する。

#### ・縄文時代後期（第15 a層形成期）

第15 a層の下層にあたる試料17の珪藻分析では、陸生珪藻B群であり沼沢湿地付着生種群の*Eunotia praerupta* var. *bidens*が優占し、陸生珪藻A群の*Luticola mutica*も多産した。また、これに付随して好流水性種の*Achnanthes inflata*も認められた。これらの群集の特徴から、第15 a層が形成される以前は、乾燥することもある湿地あるいは沼沢地のような環境であったことが考えられる。これは花粉分析の結果において、水生植物のサンショウモやミズアオイ属の花粉が産出したことと整合する。また、流水性種も産出していることから、多少の流水があったことも考えられる。

第15 a層を含む試料13~16の珪藻分析では、陸生珪藻と水生珪藻とが高い割合で混在していたが、陸生珪藻の約半数は沼沢湿地付着生種群とされるものであった。流水不定性種として多産した*Diploneis ovalis* var. *ovalis*は、好清水性種とされ水質のきれいな水域に生育するとされる。このことから、第15 a層段階では水質が比較的きれいで水深の浅い沼沢地が周囲に広がっていたと考えられる。また、試料14から産出した*Aulacoseira crenulata*は石灰分が多く貧栄養の小型水域に生育することが多く、湖沼などの規模の大きい水域にはめったに認められないとされている（Krammer and Lange-Bertalot, 1991 a）。さらに、試料16では湖沼沼沢湿地指標種群の*Aulacoseira ambigua*が比較的多く産出したことから、小規模の止水域も第15 a層が堆積する過程で存在した可能性が考えられる。これは植物珪酸体において大型の抽水植物であるヨシ属が多産し、花粉化石においてサンショウモ、コオホネ属、アカウキクサ属、ミクリ属、サジオモダカ属などが産出することと同調的であり、第15 a層は淡水域の浅い沼沢地や乾燥することもあるような湿地の堆積環境下で形成されたと考えられる。

ところが、第15 a層の上層にあたる試料12が堆積するころの珪藻分析では、中~下流性河川指標種群を含む流水性種が多産するようになる。よって、第15 a層の上部に堆積している層は洪水などによる流れ込みのある不安定な環境に変化したことが推定される。

今回の調査区における第15 a層直下層から直上層にかけての変化は、既往の池島I期地区や福万寺I期地区の分析結果（辻本・辻2004・2007）と調和的である。池島I期地区や福万寺I期地区の珪藻分析では、第15 a層直下の第15 b層から第15 a層にかけて、多産していた海水~汽水生種および汽水生種が認められなくなり、今回と同様な群集に変化している。これらの変化は、縄文時代後期に本遺跡における地形や水文環境が大きく変化したことを示唆し、各調査区の層相変化から、縄文海進最高海水準期以降の海退過程における海岸線の前進、すなわちデルタ形成（堀・斉藤2003）にともなう陸化過程を反映していると判断される。第15 a層形成後には、層相・珪藻化石の産状から、土壤が発達する時期を挟在しながらも氾濫原の堆積環境に変化したことが窺える。

#### ・縄文時代晩期~弥生時代中期（第14 a ~13 a層形成期）

縄文時代後期の流路充填堆積物上部に発達した土壤層である第14 a層は、軟X線写真の観察より、著しく擾乱されていることがわかり、土壤化が卓越する堆積環境で形成されたと考えられる。第14 a層からは珪藻化石・花粉化石がほとんど産出せず、僅かに産出した化石はいずれも保存状態が著しく悪く、

植物珪酸体も保存状態が悪かった。花粉化石は酸化条件下で分解消失し、珪藻化石は安定した地表面となり土壌発達認められる遺構検出面で産出が極めて不良となること（井上2003）から、土壌化に起因すると考えられる。以上のことから、縄文時代後期の流路充填堆積物上部から自然堤防堆積物上部で確認されている第14a層は、地表面へ腐植が蓄積し、土壌化が卓越する環境で形成されたと判断される。

一方、調査区東部の縄文時代後期に形成された流路の後背湿地にあたる部分に堆積する第14a層相当層下半の試料7～10の珪藻分析からは、中～下流性河川指標種群を含む流水性種が多産し、沼沢湿地付着生種群を含む流水不定性種、湖沼沼沢湿地指標種群を含む止水性種が産出した。よって、当層は流水の流れ込む沼沢や湿地のような不安定な場所であったと考えられる。なお、小規模止水域に出現する *Aulacoseira crenulata* も下部から比較的多く産出したことからすると、後背湿地堆積物の形成初期は安定した水域環境であり、その後は不安定となったと考えられる。すなわち、後背湿地の領域における堆積環境は、上位に向かって不安定となっていった可能性が高い。

流路の中央部付近に堆積し、第14a層相当層の上半にあたる試料2～6の珪藻分析では、試料4と試料5を境として2区分される。試料5～6は真+好止水性種が真+好流水性種を上回り、湖沼沼沢湿地指標種群や偶来性浮遊性種を含む止水性種が多産することから、小規模ながらも池沼～沼沢地のような止水域が形成されたと考えられる。

試料2～4の珪藻は特に多産する分類群もなく、陸生珪藻、真+好止水性種、真+好流水性種など、生育環境の異なる種類がほぼ同じ割合で混在している。このような群集は混合群集とよばれており、河川の氾濫などによって一気に堆積した一過性の氾濫堆積物や沖積低地などで認められる群集とされている（堀内ほか1996）。本層準に認められた珪藻群集もこれに近似するものであり、試料2～4形成期の流路内は、河川氾濫の影響を受ける頻度の高い湿地や沼沢地の環境であったと考えられる。

第13a層に相当する試料1の珪藻化石群集の構成は、第14a層相当層の試料2～4と同様な混合群集の特徴がみられる。よって、第13a層形成期には河川の氾濫の影響を受け、河岸の土壌などが流れ込む堆積環境であったことが推定される。

以上の第14a層～第13a層の堆積環境の変化は、既往の調査成果とも符合する（辻本・辻2004・2007）。今回の調査結果では、第14a層の形成にかかわる河川氾濫の影響の一端が確認されたことになる。

本遺跡が位置する河内平野では、縄文時代晩期になると、縄文時代後期に形成された潮上帯と潮間帯の堆積面が離水するとともに、多くの開析流路の下刻・充填が繰り返される地形環境に変化し、著しい基準面の低下が想定されている。この時期に低地の広い範囲では、開析流路の充填堆積物からなる沖積リッジ（註6）や後背湿地堆積物において土壌が発達することが確認されている（松田2006）。今回の調査区で確認された第14a層の堆積環境も、このような地形変化を指示する結果といえる。

## （2）森林植生

花粉化石群集の層位分布において、広域の森林植生を反映する木本類についてみると、産出する群集組成は第15a層、第14a～第13a層相当層の分析層準で類似し、暖温帯性常緑広葉樹林（いわゆる照葉樹林）の主要構成要素であるコナラ属アカガシ亜属が多産し、温帯性針葉樹と判断されるモミ属・スギ属なども全体的に多い傾向にある。モミ属、スギ属などは、ツガ属、コウヤマキ属、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科などと同様に暖温帯～冷温帯への推移帯に成立する中間温帯林の構成要素であるが、

暖温帯林の構成要素としても混生している。第15 a・14 a・13 a層形成期も周辺の生駒山地斜面などには、これらの樹種からなる暖温帯性の林分が成立していたことが推定される。

大阪平野における完新世の植生変遷は、大きくは7500–6000年前にナラ類からなる落葉広葉樹林から、シイ、カシなどの照葉樹林へと変遷し、6000年前以降照葉樹林の安定時代にはいる（古谷1979・前田1984・那須1989など）。考古遺跡における調査成果では、常緑広葉樹のアカガシ亜属は縄文時代中期の層準で急増する事例が多く、温帯性針葉樹の種類もこの時期に増加する場合が多い。この変化は、地形変化に起因する植生変化を反映していることが推定されている（辻本2007）。縄文時代中期前半から中頃には、扇状地から山麓部で開析流路が形成され、低地で海成粘土層の上位に沖積上部砂層下部に相当する堆積物が広範囲に累重する（松田2006）。これらの地形変化のうち、開析流路の形成は、流路河岸やその周囲の氾濫原における植生遷移の進行を促し、照葉樹林が発達した。開析流路から平野にかけての扇状地ロウブ（註7）などには新たな植生領域を成立させ、そのような場所に温帯性針葉樹が分布を上げた可能性が高いことが指摘されている（辻本2007）。また、温帯性針葉樹の要素が大阪平野の周辺山地に増加したことは、気候が悪化したこと、とりわけ多雨化したことを意味しているとされる（那須1989）。今回推定された縄文時代後期の古植生は、基本的には縄文時代中期以降に成立したものである可能性が高い。

第14 a層相当層では、アカガシ亜属がやや増加し、下位層で多産した温帯性針葉樹のモミ属が減少する。この変化も地形変化に起因する変化として認識される。先述したように縄文時代晩期には、基準面低下が想定され、開析流路の充填堆積物からなる沖積リッジや後背湿地堆積物において土壌が発達する（松田2006）。この土壌が発達する領域の拡大は、植生遷移を進行させ、極相としてのカシ林域の拡大を促したものと推定される。本遺跡の池島Ⅰ期地区では、第14 a層形成期に南西部の弥生時代前期の水田遺構が構築される沖積リッジ周縁部においてアカガシ亜属の林分が成立していたことが確認されている。また、この時期のアカガシ亜属の増加は、長原遺跡や鬼虎川遺跡など多くの遺跡でも確認されており、地域的な変化であった可能性もある。また、第14 a層相当層の本花粉組成では、アカガシ亜属などの暖温帯性の要素のほかに、オニグルミ属・トチノキ属・キハダ属などの冷温帯性の要素も認められる。これら落葉広葉樹の種類も当時の植生構成要素として普遍的に認められたものと判断される。

### (3) 低地の植生

#### ・縄文時代後期（第15 a層形成期）

低地の植生を反映する草本類を見ると、第15 a層堆積以前の層位および第15 a層では、イネ科、カヤツリグサ科が多産し、サナエタデ節–ウナギツカミ節、ヨモギ属などをともなう。植物珪酸体分析からは、ネザサ節、ヨシ属、コブナグサ属、ススキ属、イチゴツナギ亜科などのイネ科植物および樹木の生育がうかがえ、特にヨシ属の生育が目立つ。ヨシ属は河畔や湿地などの適湿地を好む種類であり、ガマ属、ミクリ属、サジオモダカ属、カヤツリグサ科の一部、イボクサ属、ミズアオイ属、ゴキヅル属、ミズワラビ属、サンショウモ、アカウキクサなどの、水湿地性植物に由来する花粉・胞子も検出される。これらのことと先述の堆積環境変化を踏まえると、縄文時代後期には調査区の地形や水文環境が大きく変化し、水生草本植物が繁茂するようになったと考えられる。

#### ・縄文時代晩期～弥生時代中期（第14 a～13 a層形成期）

第14 a層相当層下部にあたる試料8～11では、下位層の第15 a層と同様にイネ科が多く産出するもの

の、カヤツリグサ科の割合が減少し、ヨモギ属が高率で産出する。また、下位層で種類数が多く認められた水湿地生植物に由来する花粉・胞子も、ほとんど認められなくなる。ヨモギ属は比較的乾いた場所に生育する種を多く含む分類群である。植物珪酸体分析の結果を見ると、第15a層で顕著に認められたヨシ属は、第14a層・第14a層相当層ではその割合は低い。このように第15a層と第14a層では、草本由来の化石の産状が大きく異なっている。これは調査区の堆積環境や地形の違いに起因し、縄文時代後期末～弥生時代前期には流路充填堆積物からなるリッジ部分などの土壌発達領域が広がっており、そういった場所にヨモギ属や、木本花粉で認められたノブドウ属やブドウ属など、比較的高燥な場所に生育する草本類が分布していたと考えられる。一方、ガマ属などの水湿地性植物は、後背湿地などの水分条件の良い領域に分布していたと判断される。

第14a層相当層上部の試料2～4や第13a層相当層の試料1では、再びイネ科、カヤツリグサ科が多産し、ヨモギ属の割合は減少する。植物珪酸体分析ではヨシ属の割合が増加していき、花粉化石でも再びガマ属、ミクリ属、サジオモダカ属、オモダカ属、ミズアオイ属、ゴキヅル属、ミズワラビ属、サンショウモといった水湿地生植物の種類数が増加する。よって、弥生時代前期末～中期初頭にかけて、周辺において、これらの草本類が生育する水湿地の領域が拡大したことが示唆される。なお、増加する水湿地性植物の種類は、水田雑草となりうる種を含む分類群であり、栽培植物のイネ属の産状を踏まえると、当時の遺跡周辺で稲作が行われており、水田雑草として生育していた可能性もある。

#### (4) 食用植物

種子、果実が食用となる、クルミ属、クリ属、トチノキ属、コナラ属、ブドウ属、ノブドウ属は、第14-2a層をはじめとして、他の層からも大型植物遺体が多く確認されている。特にクルミの核が多く出土した第14-2a層のNo.712、No.753の層は、花粉分析などを行なった層とは異なっているが、第14a層相当層からは上記の花粉が少量ではあるが確認された。

多くの植物遺体が出土したクルミ属の花粉があまり多く検出されないということは、調査地の周辺にはクルミの木は生えておらず、遠くで飛散した花粉が堆積したと考えることができる。このような状況は、コナラ属以外で認められ、人が遠隔地より採集してきたものであると考えられる。コナラ属は、5地点の花粉分析で全体の過半数を占める多くの花粉が産出されているが、出土している果実は幼果、殻斗などの食用に適さない部分が出土しなかった。以上のことから、出土した果実は採集してきたものと考えられ、コナラ属の木は調査地の比較的近くに生えていたと考えられる。(乾)

#### 註

註1 分析に関しては大阪市文化財協会の池田研氏にご教示をいただいた。記して感謝したい。

註2 偶来性浮遊性種……普段は、水生植物などに附着して生育しているが、波などの物理的な影響を受けて基物から剥離した後は浮遊生活を営む種。

註3 泥質堆積物……上部ほど水分を多く含むとともに、圧密を受けていないため流動性に富む。より下位では粘性・可塑性に富み、最下部では剛性が高まる性質をもつ。

註4 虫えい……虫こぶとも。植物に昆虫などが産卵、寄生したために植物の組織が異常発達した部分の名称。

註5 貝類の同定作業には現生標本と図鑑〔吉良哲明1954、波部忠重・奥谷喬司1983〕を利用しており、大阪市立自然史博物館の石井久夫氏よりご教示を賜った。また、クロベンケイガニの同定は同博物館石田惣氏による。記して感謝したい。

註6 沖積リッジ…… (ridge) 河川の堆積作用によって形成される微高地。

註7 扇状地ロウブ…… (lobes) 扇端に形成され、傾斜方向に舌状に張り出した微高地。

## 引用文献

### ・花粉分析

安藤一男1990「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『東北地理』42, 73-88

Asai, K. & Watanabe, T., 1995, Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saphophilous and saproxenous taxa. *Diatom*, 10, 35-47.

古谷正和1979「大阪周辺地域におけるウルム氷期以降の森林植生変遷」『第四紀研究』18, 121-141

原口和夫・三友清史・小林 弘1998「埼玉の藻類 珪藻類」『埼玉県植物誌』 埼玉県教育委員会, 527-600

堀 和明・斎藤文紀2003「大河川デルタの地形と堆積物」『地学雑誌』112(3), 337-359

堀内誠示・高橋 敦・橋本真紀夫1996「珪藻化石群集による低地堆積物の古環境推定について - 混合群集の認定と堆積環境の解釈 -」『日本文化財科学会第13回大会研究発表要旨集』, 62-63

Hustedt, F., 1937-1939, Systematische und ökologische Untersuchungen über die Diatomeen - Flora von Java, Bali und Sumatra. *Archiv für Hydrobiologie, Supplement*, 15: 131-177, 15: 187-295, 15: 393-506, 15: 638-790, 16: 1-155, 16: 274-394.

伊藤良永・堀内誠示1991「陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用」『珪藻学会誌』6, 23-45

井上智博2003「目的と概要」『尺度遺跡Ⅱ - 国道165号(南阪奈道路)の建設に伴う発掘調査報告書 -』(財)大阪府文化財センター, 153

近藤鍊三2004「植物ケイ酸体研究」『ペドロジスト』48, 46-64

近藤鍊三・ピアスン友子1981「樹木葉のケイ酸体に関する研究(第2報) 双子葉被子植物樹木葉の植物ケイ酸体について」『帯広畜産大学研究報告』12, 217-229

小杉正人1988「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『第四紀研究』27, 1-20

Krammer, K., 1992, PINNULARIA. eine Monographie der europäischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND26. J.CRAMER, 353p.

Krammer, K. & Lange - Bertalot, H., 1986, Bacillariophyceae. 1. Teil: Naviculaceae. In: *Suesswasserflora von Mitteleuropa*. Band2/1. Gustav Fischer Verlag, 876p.

Krammer, K. & Lange - Bertalot, H., 1988, Bacillariophyceae. 2. Teil: Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae. In: *Suesswasserflora von Mitteleuropa*. Band2/2. Gustav Fischer Verlag, 536p.

Krammer, K. & Lange - Bertalot, H., 1991a, Bacillariophyceae. 3. Teil: Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae. In: *Suesswasserflora von Mitteleuropa*. Band2/3. Gustav Fischer Verlag, 230p.

Krammer, K. & Lange - Bertalot, H., 1991b, Bacillariophyceae. 4. Teil: Achnanthaceae, Kritische Ergänzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. In: *Suesswasserflora von Mitteleuropa*. Band2/4. Gustav Fischer Verlag, 248p.

Lowe, R.L., 1974, Environmental Requirements and pollution Tolerance of Fresh-water Diatoms. 334p.

In *Environmental Monitoring Ser. EPA Report 670/4-74-005*. Nat. Environmental Res. Center Office of Res. Develop., U.S. Environ. Protect. Agency, Cincinnati.

前田保夫1984「花粉分析学的研究よりみた近畿地方の洪積(更新)世後期以降の植生変遷」宮脇 昭(編著)『日本植生誌近畿』至文堂, 87-99

三宅 尚・中越信和1998「森林土壤に堆積した花粉・胞子の保存状態」『植生史研究』6, 15-30.

中村 純1967『花粉分析』 古今書院, 232p

那須孝悌1989「活動の舞台：概論」永井昌文・那須孝悌・金関 恕・佐原 真（編著）『弥生文化の研究1 弥生人とその環境』雄山閣出版, 119-130

Round, F. E., Crawford, R. M. & Mann, D. G. 1990, The diatoms. Biology & morphology of the genera. 747p. Cambridge University Press, Cambridge.

徳永重元・山内輝子1971『花粉・孢子・化石の研究法』 共立出版株式会社, 50-73

辻本裕也2001「I F J 97-3 調査区の花粉・植物珪酸体分析」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXVII-I F J 97-3 調査区の概要-』（財）大阪府文化財調査研究センター, 120-131

辻本裕也・辻 康男2002「池島・福万寺遺跡の古環境復元」『池島・福万寺遺跡2（福万寺I期地区）一級河川恩知川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書-分析・考察編』（財）大阪府文化財センター, 361-410

辻本裕也・田中義文・辻 康男・伊藤良永・馬場健司2004「小阪合（第2次）発掘調査に伴う花粉・珪藻・植物珪酸体分析」（財）大阪府文化財センター調査報告書第116集『小阪合遺跡（その2） 八尾団地（建替）埋蔵文化財発掘調査（第2次）』（財）大阪府文化財センター, 180-216

辻本裕也・辻 康男・伊藤良永・堀内誠示・田中義文・高橋 敦・松元美由紀・馬場健司2007「池島・福万寺遺跡の古環境変遷2」『池島・福万寺遺跡3』（財）大阪府文化財センター, 397-473

辻本裕也2007「1万年の植生史-大阪湾岸地域の考古遺跡における古植生調査を基に」『日本植生史学会第22回大会講演要旨集』

松田順一郎2006『第7回関西縄文文化研究会 関西縄文人の生業と環境』配付資料

渡辺仁治2005『淡水珪藻生態図鑑 群集解析に基づく汚濁指数DAIpo, pH耐性能』 内田老鶴圃, 666p

#### ・軟X線写真

Matsuda, J.-I. 2000, Seismic deformation structures of the post-2300 a BP muddy sediments in Kawachi lowland plain, Osaka, Japan, *Sedimentary Geology*, 135, 99-116.

松田順一郎1999「瓜生堂遺跡第45-2次発掘調査でみられた古地震痕跡」『都市計画道路大阪瓢箪山線建設に伴う瓜生堂遺跡第45次発掘調査概要報告』（財）東大阪市文化財協会, 233-242

森 他寸志2000「軟X線による非破壊土壌中の排水機構の解明」『土壌の物理性』No.83, 59-65

森 他寸志・滋賀撰子・岩間憲治・渡辺裕裕・丸山利輔1992「土地利用による土壌間隙構造の差異-軟X線による観察を中心として-」『土壌の物理性』No. 66, 19-27

成岡 市1993「土壌粗孔隙の形態とその測定法 土壌の不均一性と物質移動の研究前線」『日本土壌肥料科学雑誌』64-1, 90-97

成岡 市・岩田幸良・駒村正治2000「関東ローム層土における粗孔隙の透水, 通気および排水機能」『農業土木学会論文集』No.208, 63-71

高橋 学・山口誠治1997「旧地表面の軟X線分析」『日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨』, 72-73

徳永光一・佐々木長市・佐藤幸一・佐瀬 隆・加藤芳朗・工楽善通・井上智博2004「弥生時代水田土に残る稲の根跡に関する研究-池島・福万寺遺跡におけるX線立体造影法の適用例-」『考古学と自然科学』47, 35-55

#### ・動物遺体分析

吉良哲明1954『原色日本貝類図鑑』 保育社

波部忠重・奥谷喬司1983『学研生物図鑑 貝I・II』 学習研究社

#### ・炭素14年代測定

Bronk Ramsey C., 1995, Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program, *Radiocarbon*, 37, 425-430.

Bronk Ramsey C., 2001, Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon*, 43, 355-363.

中村俊夫2000「放射性炭素年代測定法の基礎」『日本先史時代の<sup>14</sup>C年代』, 3 - 20

Reimer PJ, MGL Baillie, E Bard, A Bayliss, JW Beck, C Bertrand, PG Blackwell, CE Buck, G Burr, KB Cutler, PE Damon, RL Edwards, RG Fairbanks, M Friedrich, TP Guilderson, KA Hughen, B Kromer, FG McCormac, S Manning, C Bronk Ramsey, RW Reimer, S Remmele, JR Southon, M Stuiver, S Talamo, FW Taylor, J van der Plicht, and CE Weyhenmeyer., 2004, IntCal04 Terrestrial Radiocarbon Age Calibration, 0-26 cal kyr BP, Radiocarbon, 46, 1029 - 1058.



## 第6章 総括

### 1. 検出遺構と遺構面

本調査は、先述のように池島・福万寺遺跡内に建設される恩智川治水緑地池島Ⅱ期地区のはじめての本格的な調査である。位置的には、池島Ⅰ期地区の東側約150m程のⅡ期地区中央部に位置する。北東端部に01-1調査区が位置していることから、若干の堆積環境の情報はあったものの、これまでの調査地域とは大きく相違する堆積環境が明らかとなった。層位的な連続性を把握してきた当遺跡の調査のなかで、既往の調査との層位的な連続性を確認できない状況であったため、調査段階ではこれまでの統一層序との整合性を確認できずに様々な問題を抱えた調査となった。

#### 1) 近世から中世

当調査区でも、池島・福万寺遺跡の調査でこれまで最も良好に遺構面の遺存していた第2-1面はこれまで同様に確認された。当調査区は「池島条里遺構」の条里型地割の河内郡字河十七ノ坪に位置し、『河内國第二大區四小區河内郡池之寫村地引圖』にみられる推定地域の様子は、調査において検出された島島などの土地利用とほぼ同様な様相を示しているものと考えられる。したがって、第2-1面の景観が近世末～近代初頭における土地利用の状況の一端を示していることが推定される。当面の島島は、これまでも当遺跡第2-1面で確認されてきた地下げ型の島島と考えられ、同様な土地利用が東側一体にも広がっていた可能性が強くなった。

これまでの調査では、近世と推定される第2層が4層に分層され、中世後期と考えられる第3層が3～5層に分層され、中世前期から古代と考えられる第4層～9層の各面というように10数面に及ぶ遺構面が確認されている。しかし、当調査区では第2-1層から鍵層となる第11b層の氾濫堆積物層の上部で部分的な層も含めて約10層に分層されるにとどまることが明らかとなった。

本書では、こうした状況については、当該層の土質・色調等から層序的な整合性について推定を行なった。現状の認識をまとめると当調査区付近は、後述する弥生時代の堆積が非常に厚く古代以降の堆積があまり活発ではない部分にあたるものと考えられる。古代以降の変遷を推定すると、従来粘性の強い粘土～シルトを主体とする第4層～第9層の各層にあたる堆積があまり認められず、中世後期以降のシルト～細砂などの細粒の堆積物によって構成される各層が認められた。こうしたことから、弥生時代後期（第11面）～中世後期（第5面）にかけては氾濫堆積物の供給が活発ではなかったものと推定される。

3層以下の各層は、中世後期～近世にかけての耕作地であったものと推定され、遺構は検出されていないが、条里型地割の景観が広がっていたものと考えられる。

この調査区付近は、中世後期以降に在地領主の居館が推定されるという見解もある池之寫の集落とも近い。現在の池島町の集落の北東数十mに位置するⅡ期地区の東を区画する堤防の外側に設置された用水路部分の調査では、池之寫の集落の南に位置すると考えられる生駒山系からの排水河川の水を引いた水路が確認されている（国乗・入江・田中2006）。この水路は、河内郡字河七ノ坪・八ノ坪の境を流れ、当調査区の北東に位置する十七ノ坪・十八ノ坪との交点で北に屈曲している。この水路は、概要報告書では中世後期の掘削と考えられている。狭い範囲の調査の制約もあり、厳密には掘削時期を特定できな

いが、こうした流路が中世後期には形成され、この時期以降付近の堆積環境が変化した可能性もあろう。

## 2) 古代から古墳時代

古代～古墳時代にかけては、当調査区における調査では遺構面の存在自体が明確ではない。第9・10面で検出された溝群は、これまでの調査などから古代の遺構面で検出された耕作に伴う溝群である可能性が高いが、層厚の薄さや上下層との識別の難しさなどから時期の特定が困難であった。実際、第9・10面において検出された溝群は第10層自体も全面には残っていないことから溝の一部が第9面の遺構である可能性も否定できない。しかし、西半部の溝群の見られなかった地域の第11層の掘削段階で7世紀代の土師器の坏が完形に近い形で出土している。こうしたことを考えると、当調査区付近の開発がこの時期に大規模に整地等の造成が行われた可能性は高く、この時期の開発に伴う耕作痕跡の結果と考えることが妥当であろう。

## 3) 弥生時代中期以降の各層

弥生時代の各層は、先述のように非常に特徴的な変遷を示している。当調査区付近は、縄文時代後期の氾濫堆積物によって形成された高まりが非常に高く、こののち弥生時代中期までこの微高地が氾濫堆積物の被覆を受けながらも非常に安定した状況を示し、周辺の埋積が進んだ弥生時代後期前後に大規模な氾濫堆積によって覆われ再び周辺部より高くなるというサイクルが読み取れる。

このため当遺跡で従来「第1黒色粘土（泥）層」と呼称されてきた弥生時代後期の土壌層は周辺部に比べて標高が高かったものと考えられ、古代以降の開発によって削平を受け、遺存していなかった。僅かに、東端部のやや低くなっていく部分で、微高地に平行する形で水路と考えられる南東から北西に延びる溝を検出したのみである。

弥生時代中期に関しては、従来「第2黒色粘土層」と呼称されてきた弥生時代中期の土壌層の上面で水田を良好に検出した。池島Ⅰ期地区においても当該面では全域で非常に良好に広大な水田域が検出されておりこうした水田域の広がりや当調査区付近まで延びていたことが確実となった。

一方、下層の第13層は第12層の水田の影響もあり、現状では水田畦畔を検出していない。この部分は下層の第14層段階から堆積物が少なく、上層からの攪拌によって削平を受けている。このため、当調査区では、従来「第3黒色粘土（泥）層」と呼称されてきた弥生時代前期末～中期初頭と考えられる遺構面で検出されてきた水田との関係は明瞭ではない。

## 4) 縄文時代晩期から弥生時代前期

当調査区における最も注目される遺構面が第14面及び第14-2b面である。当該層は、従来「第4黒色粘土（泥）層」と呼称されてきた層の上下面である。これまでの調査では、弥生時代前期後半と考えられる河内平野でも古層に属する水田を検出している層で、これらの遺構の広がりや注目されてきた。しかし、これまでこうした水田遺構が検出されてきた沖積低地内の微高地縁辺部に比べて地形的に高いことが明らかで、こうした部分の土地利用が非常に注目された。

第14面では、落ち込みや溝を検出した。地形的には、中央部から東にかけてが高く、西には低くなっていく。この西端で、南北方向の溝が検出されている。地形的には80mほど西の02-1調査区部分が高い部分であったことが調査で確認されており、この両調査区間には谷状の低い部分が位置しているもの

と推定される。

一方、東側は調査区東端部に南東から北西に若干振った放棄流路と考えられる幅12mほどと推定される落ち込みが確認された。第4章でも記述したように、第14-1面を検出する段階にこの部分の第13b層とともに第14層段階の放棄流路堆積物を掘削しており、この部分から大量の突帯文土器が検出されている。この339落ち込みからは、突帯文土器とともに若干の弥生土器も出土しているが、これらの第13b層の氾濫堆積物中から出土したものと考えられる状況である。一方、最下部に掘削を免れた第14層相当の堆積物が落ち込み肩部から出土していることから、突帯文土器は第14層相当からの出土と考えられる。

第14層（第14-1・14-2層）を除去した第14-2b面で今回報告した縄文時代晩期～弥生時代前期にかけての密集する墓と掘立柱建物やピット群を確認した。報告したように、当該面は土壤層を除去した下面であることから、これらの遺構は本来は第14-1層上面および部分的に分層された第14-2層上面、もしくは分層できなかった同層中の旧地表面などからの掘り込みと考えられる。

遺構としては木棺墓と推定されるもの4基、土壙墓と考えられるもの4基、土器棺1基、このほか土器棺の可能性のあるものなどである。このうち、確実に弥生時代に属するものは前期中頃の大型の壺をやや斜めに配置した土器棺1基のみで、これ以外は木棺墓や土壙墓と推定される土坑には突帯文土器片が僅かに含まれる程度である。唯一、506土坑は突帯文土器が半身以上出土していることから、当該時期の土器棺の可能性が高い。

これらの墓の空間的位置関係を見ていくと、この部分は、縄文時代後期末頃の氾濫堆積物によって形成された砂帯の部分に位置し、東西の周辺部に比べて一段高くなった部分である。東側には先述のように放棄流路と考えられる落ち込みが南東から北西方向に伸び、この落ち込みによって東を区切られている。墓と考えられる遺構は、当調査区内で最も地形的に高い部分の西半の幅20mほどの範囲に位置している。東側の最も高い部分には先述の掘立柱建物が位置している。

墓が集中する微高地の西半分の遺構の配置を見ると、木棺墓は当該区域の北側に位置し、土壙墓と推定される人骨や人歯の出土した土坑は南側に多い傾向にある。明らかに木棺と考えられる433・447・467木棺墓の3基はいずれもほぼ南北方向に軸を有している。配石をとともう土坑や楕円形の土壙墓と考えられる遺構についても厳密には方向が一定していないが、南北方向に長軸を向けているように見える。実際には、検出した範囲も狭くこの木棺墓北側の様相が明らかではないため、北側にも墓が広がるか不明である。このほか、先述の突帯文土器の土器棺は木棺墓間に位置している。

しかし、このほぼ10m四方に墓と考えられる遺構が多数検出される状況を考えると、少なくとも今回検出された遺構が一体として墓域を形成していたことは明らかなように思われる。時間軸における問題は別として、これらの遺構が何らかの有機的な関係性を有していたことが想定される。

上記のような遺構の状況のなかで、出土遺物との関係について若干の補足をしておきたい。第4章において明らかにしたように、当調査区では、第14層相当より大量の突帯文土器が出土している。当面関係の遺物量は、366土器棺を除けば、第14層中からは混入と考えられる程度しか出土していない。

第14層における出土遺物については、西側の池島I期地区においても第14面からは突帯文土器・弥生土器がともに良好な状況で出土することが明らかになるとともに、第14層中からは弥生土器がほとんど出土していない。これらのことから、第14層の形成時期を縄文時代晩期後半の突帯文土器段階とし、第14面自体はその廃絶時期は弥生時代前期とすることが妥当ではないかと考えられる。

当調査区でも、こうした状況は同様で、弥生土器が出土した遺構自体も、先述の土器棺以外は第14-1面で上層の自然堆積層の落ち込みが確認され第14-2b面で遺構として検出された374土坑から1点の削り出し突帯を持つ弥生前期の壺片が突帯文土器片とともに出土しているのみである。

こうした状況を考慮すると、366土器棺墓以外の多数の遺構は突帯文土器段階と考えることが相応と考えられなくもない。しかし、突帯文土器と弥生土器の共伴関係については、近年でも議論の多い問題であり注意を要する。当遺跡の突帯文土器については、次節で林が検討している水走タイプといわれる資料を含む長原式の段階であり、これらが河内I-2・3段階の弥生土器と細片ながらも同一遺構から出土した。ただし、厳密な意味で共伴を確認できる状況とは言えない。

近畿では、近年東大阪市弓削ノ庄遺跡や寝屋川市讃良郡条里遺跡、松原市池内遺跡など縄文～弥生移行期の遺跡の調査例が増加している。なかでも、讃良郡条里遺跡は中部瀬戸内海地域とも比較しうる古相の弥生土器が遺構から出土しており非常に注目を集めている。また、池内遺跡では、突帯文土器を含まない前期中頃の集落とそれに伴う水田が検出されている。

当遺跡の場合、先述のように当調査区第14-1面と層位的に連続する第14-2層上面から、前期中頃の遺物をともなって水田が検出されている。第14-2面上からは、同様に突帯文土器も出土しており、これらの共伴関係が重要となってくる。しかし、この第14-2層の形成時期については、土壌層中から船橋式・宮滝式・長原式が混在している状況から、この段階を含む非常に長い形成時期が想定できる。また、結果的には、第14-1面で検出した366土坑・374土坑・486A・486B土坑などの落ち込みにおいて、遺構の明確な輪郭を検出できず、下面において輪郭を確認した状況は、この遺構面が非常に継続時期が長く土壌化が進行していたことを物語っているものと考えられる。こうしたことを考えると、現段階の資料から、当調査区における弥生土器と突帯文土器の共伴関係については、可能性があるという判断にとどめておきたい。当遺跡では、現在も治水緑地の建設に伴う発掘調査が行われており、これらの調査における状況を見守りたい。(田中・廣瀬)

## 2. 突帯文土器の分類と変遷

縄文時代晩期後半には、各地で口縁部や肩部に突帯を巡らす突帯文土器が盛んに用いられるようになる。近畿における突帯文土器としては、滋賀里Ⅳ式、船橋式、長原式の土器型式が設定されている。これらのうち、当調査区から大量に出土した長原式土器は、特に大阪府の中東部にあたる中河内に集中する他、近畿の中央部に広く分布する型式である。

長原式を中心とする突帯文土器の分類と編年については、家根祥多（家根1981・1982・1984）、松尾信裕（松尾1983）、泉拓良（泉1990）、田中清美（田中2000）氏をはじめとする先学によって研究が進められてきた。さらに近年は、地域ごとに詳細な分析が試みられており、その実態が明らかになりつつある。この節では、これまでの研究を基に、当調査区出土資料の様相を加えて検討したい。

近畿において、突帯文土器の最終段階に出現する長原式土器の変遷を追うことは、突帯文土器と弥生土器という系譜を異にする土器のあり方の問題を含め、縄文から弥生時代への移行期の状況を把握するための大きな手がかりになると考えられる。

### 1) 突帯文土器深鉢の分類基準（図113・114）

分類は、長原式深鉢の時期的な特徴を示す器形、口縁部の突帯貼付位置、突帯断面形状、突帯刻目形状の4項目を設定しておこなった。まず、器形については、口縁部と肩部に各1条の突帯をもつものをA類、口縁部にのみ1条の突帯をもつものをB類とした。A類は1～4に細分した。A-1類は底部から内湾気味に開いて肩部で屈曲し、頸部は外湾して口縁部にいたる。先行する船橋式の伝統を残すもので、器壁は厚く、器高と胴部最大径の差が少ない安定した器形といえる。A-2類は胴部の内湾が弱まり、肩部でゆるやかに屈曲し、頸部は内湾または内傾する。器高が高く全体に不安定である。A-3類になると頸部がほぼ直立して口縁部にいたる。A-4類は底部から外上方にまっすぐに開いて口縁部にいたるもので、口縁部に最大径をもつ。

次に、A-1～4類と外形の対応するものとしてB-1～4類を分類した。このうち肩部で強く屈曲し頸部が外湾して口縁部にいたるB-1類については、主に滋賀里Ⅳ式に丸底のものが、船橋式に平底のものがみられるが、長原式の段階では基本的には製作されなかったといえる。そのため長原式土器としては、球形を呈するB-2類、半球形を呈するB-3類、底部から外上方にまっすぐに開いて口縁部にいたるB-4類の3種の器形が製作されていたと考えられる。

A・B類にみられるような器形の変遷は追えないものの、この他にC・D・E類を分類することができる。C類は口縁部に2条の突帯をもつもので、このうち主流は肩部にも2条の突帯をもつ器形とみられる。D類は突帯を口縁端部から少し下げて貼り付け、尖り気味の口縁端部に刻目を入れるものである。滋賀里Ⅳ式に類似した器形がみられるが、滋賀里段階の突帯文土器は器壁が厚く、口縁端部を面どりするなど、D類と土器の様相が異なり、今のところ直接的なつながりは見出しにくい。また、E類は口縁端部から1cm以上下がった位置に突帯を貼り付けるものである。突帯頂部の位置でみれば、口縁端部から1.8～2cm程度下がるものが多い。また、口縁端部は丸くおさめている。E類は家根祥多（家根1995）氏が、鬼虎川・水走遺跡出土の一群の土器を、長原式に後続する「水走」とされたものの一部に相当する。近年、「水走」は「水走式」や「水走段階」と称されることもある。今回の分類では、これらを一型式または典型的な長原式土器に連なる一段階としてではなく、形態の違いにとらえていた

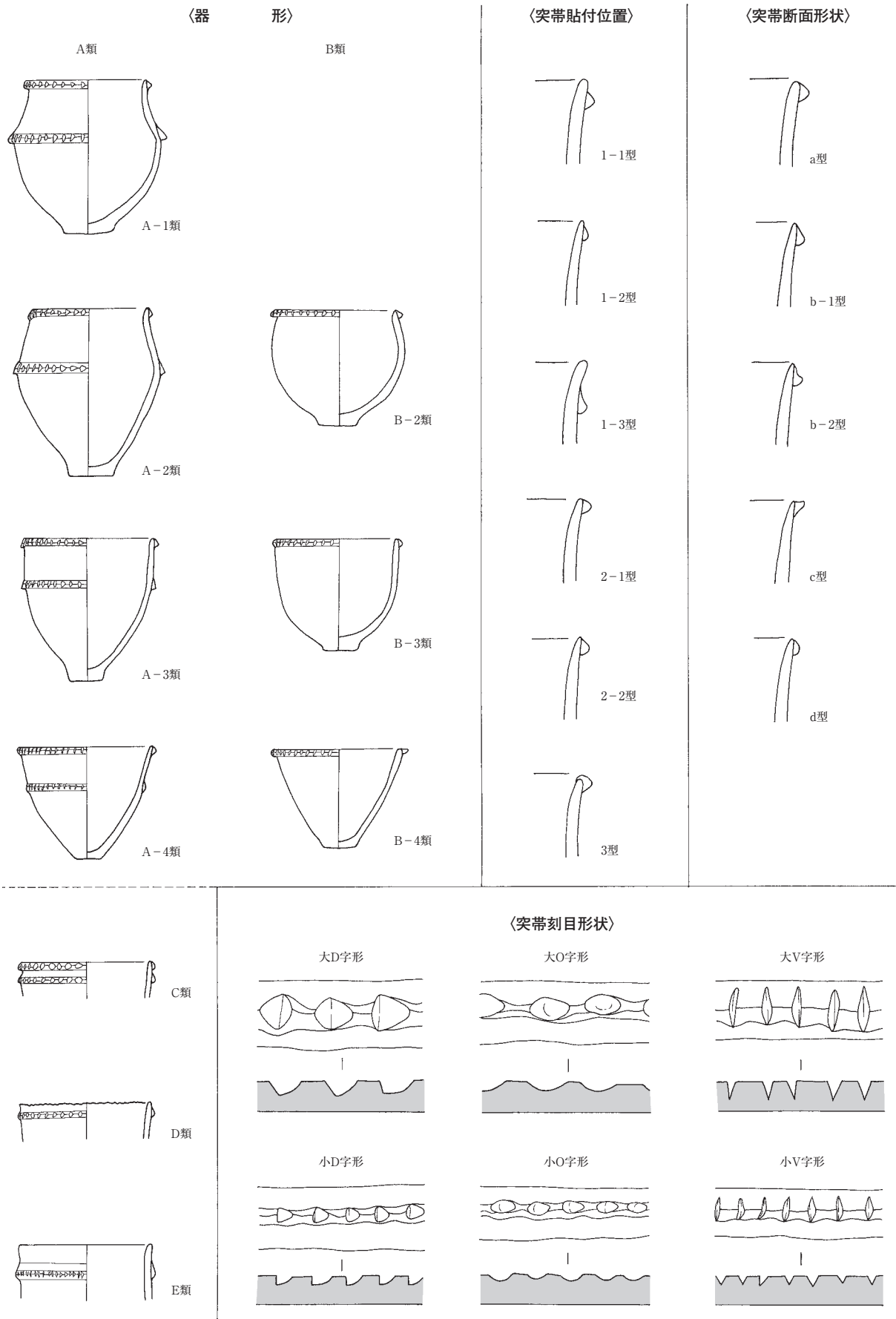


図113 突帯文土器の分類

め、別に器形E類を設定し、仮に「水走タイプ」と総称する。

次に突帯の各要素について分類する。口縁部の突帯貼付位置については、口縁端部と突帯の距離によって1～3型に分け、その中をさらに細分した。1型は突帯を口縁端部から下がった位置に貼り付けるもの、2型は口縁端部上端に接して貼り付けるもの、3型は口縁端部の上面にかぶせて貼り付けるものである。1型のうち、突帯を口縁端部から0.6cm程度下げて貼り付け、口縁端部が丸くおさまるものを1-1型、突帯を口縁端部から0.1～0.4cm程度、不規則に下げて貼り付け、口縁端部が薄く尖るものを1-2型、口縁端部から突帯まで1cm以上上げて貼り付け、口縁端部が丸くおさまるものを1-3型とした。同じく、2型のうち、口縁端部が丸くおさまるものを2-1型、口縁端部が薄く尖るものを2-2型とした。このうち、突帯貼付位置1-1型は船橋式の特徴であり、長原式にもその伝統を引くものがある。また1-3型は器形分類のE類に伴う特徴である。1-2型は口縁端部上端に突帯を沿わず意識がなくなり、粗雑な貼り付けによってずれ下がったもので、突帯の形骸化の段階に出現するといえる。

突帯の断面形状については、上下面からの均等なナデで正三角形を呈するa型、上面からの強いナデで下向きの三角形を呈するb-1型、さらに上面がくぼむものをb-2型、下面からの強いナデで上向きの三角形を呈するc型、表面全面へのナデでかまぼこ形を呈するd型とした。これらは口縁部に断面正三角形の突帯を正確に貼り付ける段階から、口縁部の調整と突帯貼り付けの調整を同時におこなう簡略化の過程で、b・c・d型がみられるようになる。このことは、突帯貼付位置における1-2型、2-2型、3型のあり方と有機的に関連するといえる。

突帯の刻目形状については、刻目の平面形と断面形をもとに分類した。断面方形の工具もしくはヘラ状の工具で刻み、刻目断面がほぼ直角三角形を呈するものをD字形、断面円形の工具を押し付けるか、もしくはヘラ状の工具をすべらせ、刻目断面が半円形を呈するものをO字形、工具を立てて鋭く刻み、刻目断面が鋭角な二等辺三角形を呈するものをV字形とした。そのうえ、0.7cmに基準を設け、刻目の縦もしくは横の長さが0.7cm以上のものを大、未満のものを小とした。従来D・O・V字形と称していたものは、おおむね大D・O・V字形となる。その他に刻目を省略したものを無とした。

また、底部の形状については、丸底をA類、平底をB類とした。A類には底面が尖底に近いA-1類、半球形に近いA-2類がみられる。B類は底面がやや丸く突出するB-1類、底面に粘土円盤を貼り付けるB-2類、底部側面が不整形に張り出したのち、外上方に立ち上がるB-3類、外上方に直線的に立ち上がるB-4類に細分した。このうちB-3類が長原式の主流となる底部であり、量的にも最も多いとみられる。B-4類はより形態的に洗練されており、弥生土器甕の影響を受けたものといえる。B類の底部外面は弥生土器の底部と異なり、縦上方に向けて強いヘラケズリで調整されている。また、底面の器壁が薄く凹面をなし、やや外上方に円筒状に立ち上がる底部（図83-4）については、突帯文土器にともなう可能性も考えたが、縄文時代後期の包含層である第15-3b層から出土していることも含め、突帯文土器出現以前の底部とした。

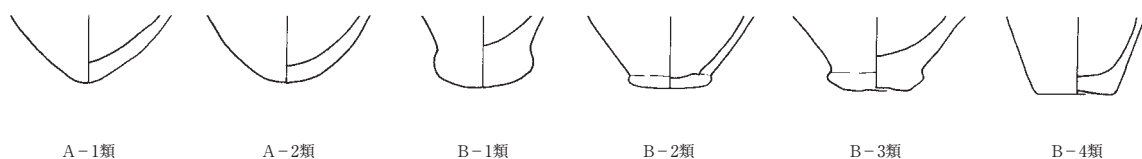


図114 底部形状

## 2) 突帯文土器深鉢の分類 —長原式を中心に—

### ①器形

A類：口縁部と肩部に各1条の突帯をもつ。

A-1類：底部から内湾気味に開いて肩部で屈曲し、頸部は外湾して口縁部にいたる。

A-2類：底部からやや内湾気味に開いて肩部で緩やかに屈曲し、頸部は内湾もしくは内傾して口縁部にいたる。

A-3類：底部からやや内湾気味に開き、頸部はほぼ直立して口縁部にいたる。

A-4類：底部から外上方にほぼまっすぐに開いて口縁部にいたる。

B類：口縁部に1条の突帯をもつ。

(B-1類：底部から内湾気味に開いて肩部で屈曲し、頸部は外湾して口縁部にいたる。)

B-2類：底部から緩やかな球形をなして口縁部にいたる。胴部上半部やや内湾する。

B-3類：底部から緩やかな半球形をなして口縁部にいたる。胴部上半はやや直立する。

B-4類：底部から外上方にほぼまっすぐに開いて口縁部にいたる。

C類：口縁部に2条の突帯をもつ。

D類：口縁部に1条の突帯をもち、口縁端部に刻目を入れる。

E類：口縁端部から大きく下がった位置に1条の突帯をもつ。

### ②突帯貼付位置

1型：口縁端部から下がった位置に貼り付ける。

1-1型：少し(0.6cm程度)下がる。

1-2型：わずかに(0.1~0.4cm程度)下がる。

1-3型：大きく(1cm以上)下がる。

2型：口縁端部上端に接して貼り付ける。

2-1型：口縁端部は厚めで、丸くおさまる。

2-2型：口縁端部は薄く、先に向かって尖り気味になる。

3型：口縁端部の上面にかぶせて貼り付ける。

### ③突帯断面形状

a型：上下面からほぼ均等にナデて貼り付ける。断面は正三角形に近い。

b型：特に上面から強くナデて貼り付ける。

b-1型：断面は下向きの三角形になる。

b-2型：断面は上面がくぼむ。

c型：特に下面からナデ上げて貼り付ける。断面は上向きの三角形になる。

d型：突帯表面全面をナデる。断面はかまぼこ形に近い。

### ④突帯刻目形状

D字形：断面方形の工具もしくはヘラ状の工具で刻む。刻目断面はほぼ直角三角形を呈する。縦もしくは横の長さが0.7cm以上を大D字形、未満を小D字形とする。

O字形：断面円形の工具を押し付けるか、もしくはヘラ状の工具をすべらす。刻目断面は半円形を呈する。縦もしくは横の長さが0.7cm以上を大O字形、未満をと小O字形とする。

V字形：工具を立てて鋭く刻む。刻目断面は鋭角的な二等辺三角形を呈する。縦もしくは横の長さ



が0.7cm以上を大V字形、未満を小V字形とする。

無 : 刻目のないもの。

### ⑤底部形状

A類：丸底

A-1類：底面が尖底に近い。

A-2類：底面が半球形に近い。

B類：平底

B-1類：底面の器壁は厚く、やや丸く突出する。

B-2類：底面に粘土円盤を貼り付ける。

B-3類：底面の器壁はやや厚く、側面外方に張り出した後、外上方に立ち上がる。

B-4類：底面の器壁はやや薄く、外上方に直線的に立ち上がる。

### 3) 各分類の特徴と組み合わせ

長原式を中心とする突帯文土器深鉢を分類するとともに、各分類の特徴ならびに器形と突帯要素の組み合わせを考える。なお、当調査区出土の突帯文土器深鉢は、口縁部片（口縁部から肩部まで残存するものを含む）346点、肩部片307点、底部片86点で、部位の判明した破片の総計は739点である。

#### ①器形

口縁部と肩部片の計653点のうち209点について器形分類が可能であった。肩部片を加えて各器形の点数を出すとA・B類の比率が実態と異なるため、ここでは口縁部片346点のうち、器形を分類できる133点についてみていきたい。これによるとA類の総計は66点で、内訳はA-1類4点（3%）、A-2類17点（13%）、A-3類25点（19%）、A-4類20点（15%）となる。また、B類の総計は51点で、内訳はB-2類7点（5%）、B-3類11点（8%）、B-4類33点（25%）である。その他にC類4点（3%）、D類3点（2%）、E類9点（7%）がみられる（図120）。

深鉢の大きさについては58点の口径が復元できた。そのうち器形分類の可能な48点の口径は以下の通りである（図119）。ここで口径15.0cm以下を小型、25.0cm以下を中型、25.1cm以上を大型とすると、A類は63%が大型品に含まれる他、小・中型と各種の深鉢を製作していたことがわかる。それに対し、B類は全てが小・中型となる。特にB-4類には何らかの規格があり、A-4類とは機能が異なっていた可能性がある。この段階における浅鉢の減少も含め、弥生土器の組成の影響を受けていたと考えられる。また、C類は肩部にも突帯を巡らす大型の深鉢であったとみられる。

#### ②突帯貼付位置（図115）

A-1類のすべてが口縁端部上端に接して突帯を貼り付ける2-1型である。船橋式を脱却して長原式特有の器形となるA-2類では、口縁端部が尖り気味の2-2型が多くみられる。A-3類にいたると、さらに2-1型が少なくなり、2-2型が70%近くを占める。突帯の貼り付けが粗雑な1-2型や突帯が口縁端部にかぶる3型も出現する。この組み合わせの比率はA-4類に引き継がれている。また、B類においても同様に2-1型は少なく、2-2型が過半数を占める。B類は突帯の形骸化が進んだ1-2型の割合が高いという特徴がある。その他にC類は2-2型、E類は1-3型と組み合わせられる。なお、D類について分類上では1型に属するが、今回は統計に入れていない。

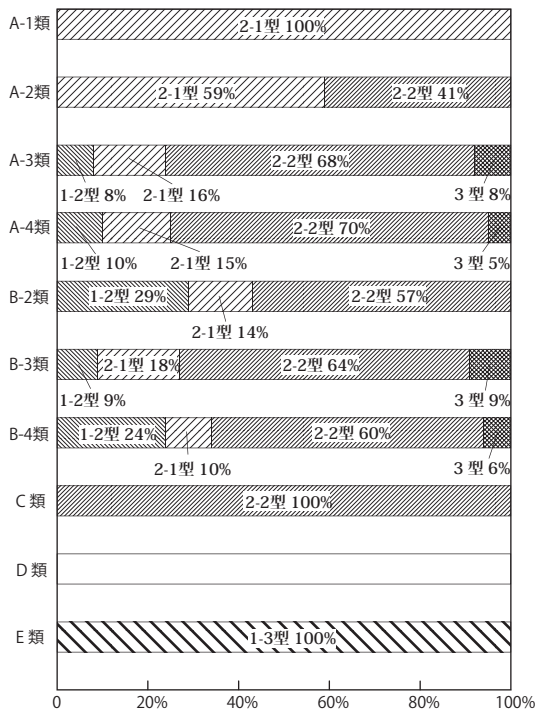


図115 器形別の突帯貼付位置 (口縁部)

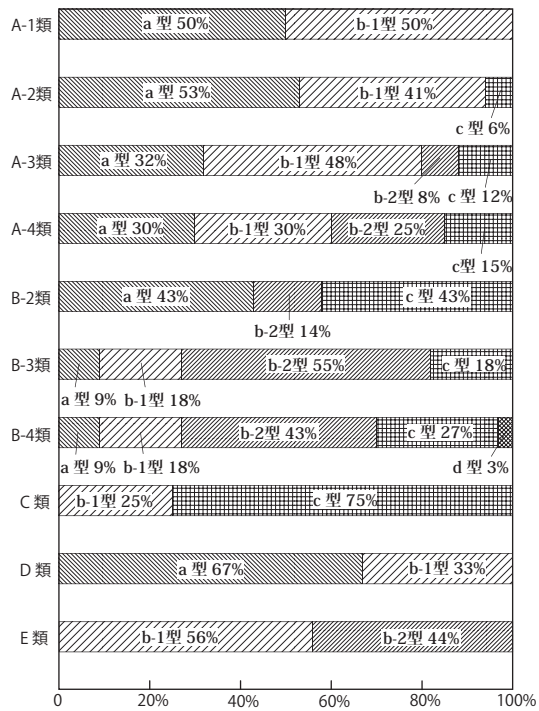


図116 器形別の突帯断面形状 (口縁部)

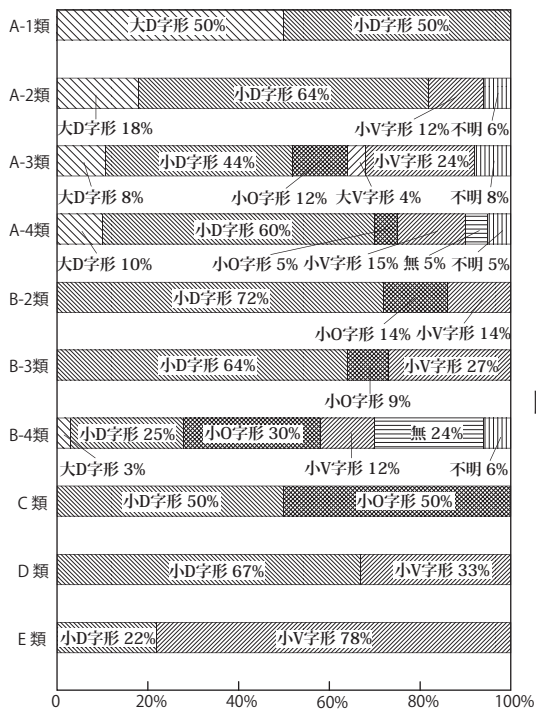


図117 器形別の突帯刻目形状 (口縁部)

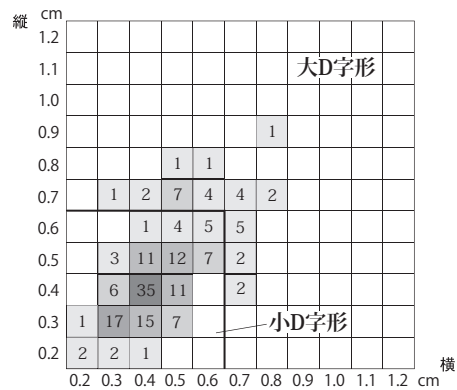


図118 突帯大・小D字形刻目の大きさ (器形不明分を含む全口縁部)

器形	5.1 ~ 10.0	10.1 ~ 15.0	15.1 ~ 20.0	20.1 ~ 25.0	25.1 ~ 30.0	30.1 ~ 35.0	35.1 ~ 40.0
A-1類						1	
A-2類		1		1	2		1
A-3類			1	2		1	
A-4類		1	1		2	5	
B-2類	1	1	2	2			
B-3類	1	1	2	2			
B-4類	2	3	7	3			
C類						1	1

図119 器形別の口径

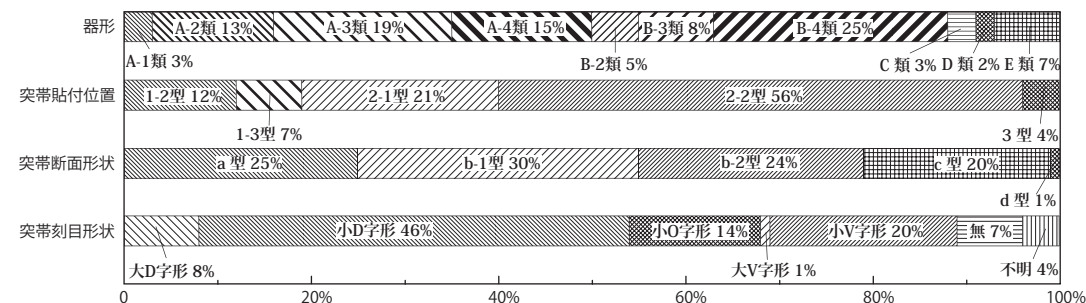


図120 器形・突帯貼付位置・突帯断面形状・突帯刻目形状 (口縁部)

### ③突帯断面形状 (図116)

A-1・2類では断面が正三角形に近いa型と下向きの三角形のb-1型がほぼ同数みられる。A-3類ではb-1型がa型を上回り、さらに形骸化したb-2型やc型がみられるようになる。A-4類になるとb-2型とc型の比率がさらに増える。B類では全体的にみて下面からナデ上げて、上向きの三角形を呈するc型の占める割合が高い。B-2類ではa型とc型が同数でこの器形の特徴を示す。B-3類ではb-2型が過半数を占める。最も出土点数の多いB-4類は粗雑なナデ調整のため断面形が歪んだb-2型とc型が主流となる。また、かまぼこ形の断面をなすd型が出現する。C類はc型が多い。D類は口縁端部断面は尖るもののa型の多い点が注目される。E類は突帯上面からの強いナデによりb-1・2型となる。

### ④突帯刻目形状 (図117)

A-1類では大D字形と小D字形がみられる。大O字形は船橋式に多く、04-2調査区からは器形不明肩部片の中に3点存在している。A-2類になると大部分が小D字形となる他、大D字形も残り、小V字形が出現する。A-3類では小D字形を中心に、小O字形や小V字形など各種の刻目形状がみられる。A-4類になると過半数が小D字形で刻目は小型化していく。刻目の間隔の狭い小D字形および小V字形は弥生土器甕の刻目の影響を受けている可能性が考えられる。B類では、B-2・3類は同様に小D字形が主流で、小O・V字形も一定量みられる。B-4類には各種の刻目形状がある中で、小O字形の多さが目立つとともに、刻目を入れない一群が含まれている。C類は小D・O字形、D類は小D・V字形がみられる。E類は小V字形もしくは横幅の狭い小D字形の刻目を入れるという特徴をもつ。

刻目の大きさについては、器形不明分を含む全口縁部の突帯刻目D字形でのあり方をみた(図118)。それによると、大D字形が32点、小D字形が140点であった。大D字形については、大・小の基準とした縦・横0.7cmに一定量の集中がみられる。小D字形では縦・横0.4cmに分布の中心がある。また、器形不明分を含めた全肩部の突帯刻目D字形をみると、小D字形128点は口縁部同様に、縦・横0.4cmに中心があるが全体にやや大きい。大D字形34点も大きく、口縁部突帯ほどの統一性はみられない。

### ⑤底部形状

底部86点のうち丸底A類は12点と全体の14%である。A-1類は5点(6%)、A-2類は7点(8%)である。これに対し平底B類は74点と全体の86%と大部分を占める。B-1類は1点(1%)、B-2類については浅鉢の底部(図78-4)が出土したのみで、深鉢の出土はみられなかった。B-3類は51点(59%)、B-4類は22点(26%)である。丸底A類は滋賀里IV式～長原式の深鉢にともなうもので、底部のみでは時期が確定できない。平底B類については、B-1類は底面が丸く不安定な、B-2類は粘土盤の底面をもつ安定した底部といえる。B-3類が典型的な長原式の底部である。B-4類は強いヘラケズリ調整が残るが、形状は弥生土器甕の底部に近い。

底部B-3類とB-4類のうち底径が復元できた69点について比較すると、B-3類は79%が5.6～7.5cmに集中し、B-4類は82%が5.1～6.5cmに集中する。B-4類がより洗練された形状を呈するためもあるが、全体的に小型化の傾向にあるといえる。

## 4) 突帯文土器深鉢の変遷

船橋式の系譜を引く長原式深鉢がしだいに弥生化する器形の変化を基軸とし、これに、簡略化・粗雑化・形骸化していく突帯各要素の変化を組み合わせて、その変遷を検討する。

### ①器形A類・B類の変遷

船橋式の伝統を残し、長原式の古い様相を示すA-1類を長原式古相、典型的な長原式の様相を示すA-2類およびA-3類を長原式中相、弥生土器甕の影響を受けて、長原式の新しい様相を示すA-4類を長原式新相ととらえる。B類についても同じく、B-2類およびB-3類を中相、B-4類を新相とする。器形A・B類においては、長原式の中で型式学的に土器の変遷を追うことができるが、実態としては、順次、新しい器形に変わるのではなく、時間的に一部併存していたと考えられる。

### ①器形と各要素の基本的な組み合わせ

まず、口縁部の突帯貼付位置については、A-1類に2-1型、A-2・3類に2-1型と2-2型、A-4類に1-2型と2-2型、一部3型がともなう。B-2・3類は2-1型と2-2型、一部1-2型、B-4類は1-2型と2-2型、一部3型が組み合わせられたとみられる。E類は1-3型となる。

次に、突帯断面形状については、A-1類にa型、A-2・3類にa型とb-1型、A-4類にb-1・2型がともなう。B-2・3類はa型、b-1、2型、c型と各種の突帯が付く。B-4類は主にb-2型とc型が組み合わせられる。E類はb-1型を中心にb-2型がともなうといえる。

また、突帯刻目形状については、A-1類には大D・小D字形、大O字形がともなうと考えられる。A-2・3類は小D字形を中心に大D字形、小O字形に一部大・小V字形が混じるとみられる。A-4類では小D字形を中心に、小O・V字形の小型の刻目が施される。B-2・3類は小D字形が中心で、小O・V字形の小型の刻目が多くともなう。B-4類は小D・O・V字形を施し、さらに刻目のないものも含まれる。E類は小V字形を中心に、細かい小D字形の刻目がともなう。

底部については、底部B-3類が器形A-2・3類およびA-4類の一部、器形B-2・3類およびB-4類の一部にともなうと考えられる。また、器形A-1類には大型で安定した底部B-3類がともなうと推定できる。底部B-4類は主に器形A-4類、B-4類の底部であったとみられる。

## 5) 長原式突帯文土器にみる様相

### ①04-2 調査区出土の突帯文土器 (図120・121)

当調査区出土の突帯文土器深鉢は器形分類可能な口縁部片133点のうち、長原式古相のA-1類が4点(3%)、中相のA-2・3類、B-2・3類が60点(45%)、新相のA-4類、B-4類が計53点(40%)となる。当調査区を生活域としていたのは長原式中～新相を中心とする時期と考えられる。

さらに、器形細分の不可能な口縁部片213点を加えた346点の突帯要素をみると、突帯貼付位置は1-2型が34点(9%)、2-2型が224点(65%)、3型が15点(5%)の計79%を占める。次に、突帯断面形状ではb-1型が147点(41%)、b-2型が84点(24%)、c型が44点(12%)、d型が19点(6%)

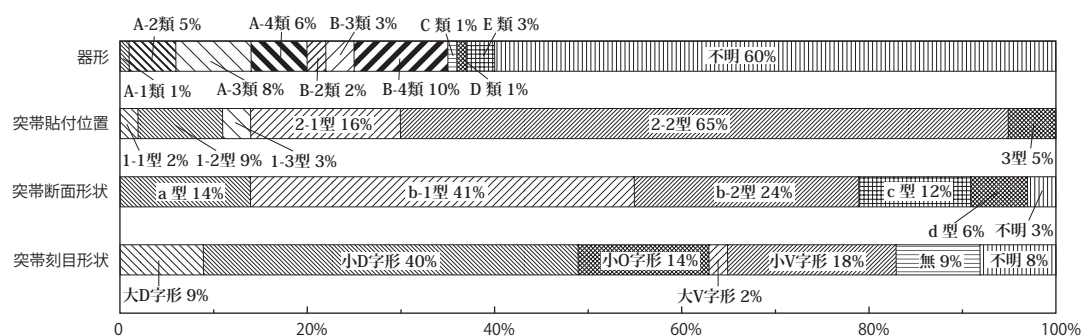


図121 器形・突帯貼付位置・突帯断面形状・突帯刻目形状 (器形不明分を含む全口縁部)

の計83%となり、突帯貼付位置と同様に、突帯の粗雑化段階の様相を呈しているといえる。また、突帯刻目形状は小D字形が140点（40%）で最も多く、小O字形が46点（14%）、小V字形が62点（18%）、無が33点（9%）と、長原式の新しい様相がみられる。これに、肩部突帯を加えた全ての突帯要素を総合すると、A-3・4類とB-4類を主流としていたことがわかる。

なお、突帯文土器深鉢片のうち底部を除く口縁部と肩部片の計653点の中には、滋賀里IV式とみられる口縁部片1点、船橋式とみられる小片10点が含まれる。

## ②器形E類（「水走タイプ」）について

当調査区出土の突帯文土器を肉眼観察すると、一部の搬入品を除くほぼ全点が、角閃石を多量に含む暗茶褐色の典型的な生駒山西麓産、または生駒山西麓域の各地点の胎土で製作されたものとみられる。そのうち、特に器形E類（「水走タイプ」）9点について奥田尚氏の鑑定を受けたところ、当遺跡周辺および当遺跡から約5km南の八尾市恩智あたりの胎土であるというご教示を得た。

E類が突帯文土器の全口縁部片346点中わずか9点（3%）しか出土していないのは、他地域の土器もしくはその影響下に成立した土器を当地で製作したため、またはE類の盛行期とこの地の集団が当調査区を生活域とした時期とが異なるため、などの理由が考えられる。E類の成立に影響を与えた地域の候補としては、口縁部突帯の貼付位置、断面形状、刻目形状の類似する土器が広がる播磨や紀伊が考えられる。また、「水走」に分類される如意形口縁甕状の深鉢に顕著な弥生土器の強い影響も、E類の成立の背景とみることができる。今後の出土資料の増加とともにE類の細分をおこなうことにより、時期の問題を含めた変遷過程が明らかになるとみられる。

## ③弥生時代前期の様相

当調査区から出土した長原式突帯文土器口縁部片と前期弥生土器片を単純に合計すると、総数は9：1の割合となる。これらの突帯文土器と弥生土器は包含層、および時期差のある遺物を含む落ち込み・流路にみられた。また、この他には374土坑から削出突帯をもつ河内I-2様式の広口壺小片と器形E類の深鉢小片、486A土坑から長原式深鉢小片、486B土坑から河内I-2～3様式の高杯、366土坑からは河内I-2～3様式の土器棺と長原式深鉢の小片が出土している。しかし、出土状況から考えて、これらの土器は考古学的に共伴の範疇ではとらえられないものといえる。

このように、当調査区では突帯文土器と弥生土器の共存についての確証を得ることはできなかった。また、当遺跡においても、弥生前期中葉の段階に長原式中～新相の突帯文土器と河内I-2～3様式の弥生土器が共存するか否かは、今後の調査の進展とともに、考古学的な検証を経て結論を出すべきであろう。他方、突帯文土器深鉢の変遷からみると、ある程度の長い期間にわたり弥生土器の影響を受けていたと推定することができる。時間的な重なりの問題は別にして、当調査区を生活域とする在地の縄文系集団が、地元の胎土を用いて長原式突帯文土器を製作している中で、新たに伝わった弥生土器を取り入れて当地で製作を始めたことは想像に難くない。他地域または他集団との緊密な交流を通して、当地の縄文社会に水田稲作農耕を中心とする複合的な弥生文化が流入していく過程で、二系統の土器が併存していた可能性は高いと考えられる。（林）

（参考文献 p172）

## 謝辞

調査の過程や、整理事業の過程で多くの方々にお世話になった。とくに、現地調査の木棺墓の検出段階には、ご指導を中村健二氏（財団法人滋賀県文化財保護協会）にいただいたほか、現地公開の折には多くの方々にさまざまなご教示をいただいた。

また、整理事業の過程では、大阪弥生遺跡検討会による縄文晩期から弥生前期の近年の調査成果と出土遺物の検討会を開催いただきご教示を得たほか、整理を通じて多くの方にご教示をいただいた。以下、ご氏名を列挙させていただいて、感謝の意を表したい。（敬称略）

奥田 尚（榎原考古学研究所共同研究員）、菅原章太（東大阪市教育委員会）、中西克宏（東大阪市立郷土博物館）、濱田延充（寝屋川市教育委員会）、原田昌則（財団法人八尾市文化財調査研究会）、福永信雄（東大阪市立埋蔵文化財センター）、豆谷和之（田原本町教育委員会）、米田敏幸（八尾市立山本図書館）、若林邦彦（同志社大学歴史資料館）、大野 薫・三好孝一（財団法人大阪府文化財センター）

### 引用・参考文献（50音順・敬称略）

- 秋山浩三・朝田公年編2000『池島・福万寺遺跡1』（財）大阪府文化財調査研究センター
- 阿部嗣治・上野利明1981「北島池遺跡・池島遺跡発掘調査概要」『東大阪市遺跡保護調査会発掘調査概報集1980年度』東大阪市遺跡保護調査会
- 池田 研編2002『瓜破遺跡発掘調査報告Ⅱ』（財）大阪市文化財協会
- 市村慎太郎2006「位置と環境」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要34』（財）大阪府文化財センター
- 市村慎太郎2006「中田遺跡群の具体（1）」『大阪文化財研究』第29号（財）大阪府文化財センター
- 市村慎太郎2007「中河内における条里遺構の最近の調査」『条里制・古代都市研究』第22号 条里制・古代都市研究会
- 伊野近富1995「土師器皿」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 井上伸一1996「池島遺跡第14次調査概要」『東大阪下水道事業関係発掘調査概要報告-1994年度-』（財）東大阪市文化財協会
- 井上正雄1921『大阪府全志』巻之四 清文堂出版株式会社
- 井上智博1993「池島・福万寺遺跡における水稻農耕の始まり」『大阪文化財研究』第4号（財）大阪文化財センター
- 井上智博1995「八尾市福万寺地区における現景観の形成過程-池島・福万寺遺跡（福万寺I期地区）の調査から-」『大阪文化財研究』第9号（財）大阪府文化財調査研究センター
- 井上智博1998「遺構面の認識と基本層序」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXI』（財）大阪府文化財調査研究センター
- 井上智博1999 a 「鳥島の考古学的研究-池島・福万寺遺跡の事例の再検討-」『光陰如矢』「光陰如矢」刊行会
- 井上智博1999 b 「池島・福万寺遺跡の形成過程と景観変遷」『研究報告』第2集（財）大阪府文化財調査研究センター
- 井上智博編2002『池島・福万寺遺跡2』（財）大阪府文化財センター
- 井上智博2002「第三章 遺構面の認識と基本層序」『池島・福万寺遺跡』2（財）大阪府文化財センター
- 井上智博2002「古代～近世における耕作地景観の動態」『池島・福万寺遺跡2』（財）大阪府文化財センター
- 井上智博2004「照葉樹林帯・海岸平野の水田（2）-瀬戸内・近畿・東海西部」『考古学ジャーナル』518号 ニュー・サイエンス社
- 江浦 洋編1991 a 「池島・福万寺遺跡発掘調査概要」（財）大阪文化財センター
- 江浦 洋1991 b 「河内潟東南部における弥生時代前期の集落と水田-池島・福万寺遺跡の評価-」『各地における米づくりの開始』Ⅲ分冊 埋蔵文化財研究会
- 江浦 洋1991 c 「古墳時代集落の変遷と特質-池島・福万寺遺跡の古墳時代集落の評価をめぐる予察-」『池島・福万寺遺跡発掘調

- 査概要』Ⅱ（財）大阪文化財センター
- 江浦 洋1992「糸里型水田面をめぐる諸問題」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要』Ⅶ（財）大阪文化財センター
- 江浦 洋1996「古代の土地開発と地鎮め遺構」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第7集 帝京大学山梨文化財研究所
- 江浦 洋編2002『大坂城址Ⅱ』（財）大阪府文化財調査研究センター
- 江戸遺跡研究会編2001『図説 江戸考古学研究事典』 柏書房
- 大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター1991『河内平野遺跡群の動態Ⅱ－北遺跡群 旧石器・縄文・弥生時代前期編－』
- 大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター1992『河内平野遺跡群の動態Ⅴ－南遺跡群 旧石器・縄文・弥生時代前期編－』
- （財）大阪府文化財調査研究センター1996『巨摩・若江北遺跡発掘調査報告－第5次－』
- （財）大阪府文化財センター編2005『久宝寺遺跡 発掘調査成果－2001～2004年度調査のまとめ－』
- 大阪府立近つ飛鳥博物館編2007『河内古代寺院巡礼』（大阪府立近つ飛鳥博物館図録44）
- 大野 薫1997「生駒山西麓域の縄紋集落」『河内古文化研究論集』 柏原市古文化研究会
- 大橋康二1989『肥前陶磁』考古学ライブラリー55 ニュー・サイエンス社
- 荻田昭次ほか1973『池島町の糸里遺構－調査概報－』 東大阪市遺跡保護調査会
- 梶山彦太郎・市原実1986『大阪平野のおいたち』 青木書店
- 河角龍典1999「池島・福万寺遺跡およびその周辺地域の地形」『調査研究報告』第2集（財）大阪府文化財調査研究センター
- 河角龍典2000「沖積層に記録される歴史時代の洪水跡と人間活動－大阪府河内平野池島・福万寺遺跡の事例－」『歴史地理学』42巻1号 歴史地理学会
- 河角龍典2002「池島・福万寺遺跡および周辺の地形環境」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要XXⅥ』（財）大阪府文化財調査研究センター
- 岸本道昭1988a「86－3・87－1調査区の調査結果」『池島遺跡発掘調査概要・Ⅲ』 大阪府教育委員会
- 岸本道昭1988b「86－4調査区の調査結果」『池島遺跡発掘調査概要・Ⅲ』 大阪府教育委員会
- 川口宏海1990「16世紀における大和型土釜の動向」『中近世土器の基礎研究』Ⅵ 日本中世土器研究会
- 岸本道昭編1988『池島遺跡発掘調査概要・Ⅲ』 大阪府教育委員会
- 金田章裕1985「条理地割り内部における島畠景観の形成」『条里と村落の歴史地理学的研究』 大明堂
- 金田章裕1996『微地形と中世村落』 吉川弘文館
- 金関 恕・大阪府立弥生文化博物館編1995『弥生文化の成立』 角川書店
- 工楽善通1991『水田の考古学』 東京大学出版
- 五井若葉2001「楽音寺遺跡第1次発掘調査報告」『楽音寺遺跡第1・2次発掘調査報告』（財）東大阪市文化財協会
- （財）古代学協会・古代学研究所編1994『平安京提要』 角川書店
- 古代の土器研究会編1992『古代の土器1 都城の土器集成』
- 古代の土器研究会編1993『古代の土器2 都城の土器集成Ⅱ』
- 古代の土器研究会編1994『古代の土器3 都城の土器集成Ⅲ』
- 古代の土器研究会編1996『古代の土器4 煮沸具（近畿編）』
- 阪田育功1997「河内平野低地部における河川流路の変遷」『河内古文化研究論集』 柏原市古文化研究会
- 佐藤 隆編2000『難波宮址の研究』第11（財）大阪市文化財協会
- 才原金弘2000「楽音寺遺跡の第4次調査」『東大阪下水道事業関係発掘調査概要報告－平成11年度－』 東大阪市教育委員会
- 寒川 旭2002「池島遺跡で検出された液状化現象の痕跡」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要28』（財）大阪府文化財センター
- 寒川 旭2002「池島遺跡で検出された液状化現象の痕跡」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要29』（財）大阪府文化財センター
- 信田真美世1995「453 墨書土器」『摂河泉発掘資料精選』（財）大阪府文化財調査研究センター
- 下村晴文1976『馬場川遺跡発掘調査概要Ⅳ』 東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報16 東大阪市教育委員会
- 下村晴文・福永信雄・芋本隆裕1977『馬場川遺跡発掘調査報告Ⅴ』 東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報17 東大阪市教育委員会
- 下村晴文・菅原章太1987『西の口遺跡第1次発掘調査概要』（財）東大阪市文化財協会
- 下村晴文1995「中河内の弥生時代と遺跡」『弥生時代の大阪湾沿岸・河内地域史・弥生編－』 大阪経済法科大学出版部
- 菅原章太1990「西の口遺跡第2次発掘調査概報」『（財）東大阪市文化財協会概報集1989年度』（財）東大阪市文化財協会

菅原正明1983「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』 奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集、

菅原康夫・梅木謙一編2000『弥生土器の様式と編年 四国編』 木耳社、

鋤柄俊夫1988「畿内における古代末～中世の土器－模倣系土器生産の展開－」『中近世土器の基礎研究』Ⅳ 日本中世土器研究会、

高萩千秋ほか1987a『小阪合遺跡－八尾都市計画事業南小阪合土地区画整理事業に伴う発掘調査－〈昭和57年度第1次調査報告書〉』（財）八尾市文化財調査研究会報告10

高萩千秋ほか1987b『小阪合遺跡－八尾都市計画事業南小阪合土地区画整理事業に伴う発掘調査－〈昭和58年度第2次調査・第3次調査報告書〉』（財）八尾市文化財調査研究会報告11

高萩千秋1989「水越遺跡（第1次調査）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告23』（財）八尾市文化財調査研究会

高萩千秋1991「第4次調査（SH88-4）発掘調査報告」『成法寺遺跡〈第1次調査～第4次調査・第6次調査報告書〉』（財）八尾市文化財調査研究会報告33

高萩千秋1997「水越遺跡第3次調査（MK89-3）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告57』

高橋 裕1990『河川工学』 東京大学出版会

高橋 学1991～1997「河内平野の地形環境分析Ⅰ～Ⅵ」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要Ⅰ・Ⅱ・Ⅶ・Ⅺ・ⅫⅢ・ⅫⅤ』（財）大阪文化財センター・（財）大阪府文化財調査研究センター

田中義昭1977「弥生時代における耕地と集落」『日本考古学を学ぶ』（3） 有斐閣

田辺昭三1966『陶器古窯址群Ⅰ』 平安学園研究論集第10号

田嶋明人1995「土器と「古墳時代」」『北陸古代土器研究』第5号 北陸古代土器研究会

田中龍男・瀧口洋美2006「02-7の調査」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要33』（財）大阪府文化財センター

地学団体研究会大阪支部編1999『大地のおいたち』 築地書館

中世土器研究会編1995『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社

辻 美紀1999「古墳時代中・後期の土師器に関する一考察」『国家形成期の考古学』 大阪大学考古学研究室10周年記念論集

都出比呂志1983「古代水田の二つの型」『展望東アジアの考古学』 新潮社

寺沢 薫1986「稲作技術と弥生の農業」『日本の古代4 縄文・弥生の生活』 中央公論社

寺沢 薫1986「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』 奈良県立橿原考古学研究所

寺沢 薫・森井貞雄1989「河内地域」『弥生土器の様式と編年 近畿編1』 木耳社

寺沢 薫・森岡秀人編1989『弥生土器の様式と編年 近畿編1』 木耳社、

寺沢 薫・森岡秀人編1990『弥生土器の様式と編年 近畿編2』 木耳社、

外山秀一・中山誠二1990「中部日本における稲作農耕の起源とその波及（序論）－プラント・オパール土器胎土分析法による試み」『帝京大学山梨文化財研究所報』第3集

直木孝次郎・森杉夫編1986『大阪府の地名Ⅱ』日本歴史地名大系28 平凡社

中川 寧2006「山陰地域－出雲－」『古式土師器の年代学』（財）大阪府文化財センター

永島暉臣慎編1980『瓜破北遺跡』（財）大阪市文化財協会

中西克宏1997「貝花遺跡第2次発掘調査報告」『東大阪市埋蔵文化財発掘調査概要－1995年度調査（1）－』（財）東大阪市文化財協会

中西克宏1999『貝花遺跡第3次発掘調査報告書』（財）東大阪市文化財協会

長嶺正秀・末永弥義編1985『下稗田遺跡』行橋市文化財調査報告書第17集 下稗田遺跡調査指導委員会

奈良国立文化財研究所1980『平城宮発掘調査報告Ⅹ』 奈良国立文化財研究所学報第39冊

中村 浩1978「和泉陶窯出土遺物の時期編年」『陶器Ⅲ』 大阪府教育委員会

中村幸代1998「河内系軒瓦からみた平等院の様相」『橘史学』第13号 京都橘女子大学歴史文化学会

中山誠二1997「灌漑型水稲作の波及・定着論」分析ノート『西相模考古』第7号 西相模考古学研究会

中山誠二1999「日本列島における稲作の受容・稲作開始期の重層性と画期」『食料生産社会の考古学』 朝倉書店

中山誠二2004「日本列島における稲作農耕の波及と定着」『中部弥生時代研究会第9回例会発表要旨集』 中部弥生時代研究会

西村公助1997「水越遺跡第2次調査（MK89-2）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告57』（財）八尾市文化財調査研究会

西村公助・樋口 薫1997『大竹西遺跡第3次発掘調査－現地説明会資料－』（財）八尾市文化財調査研究会



- 畑 暢子編1998『河内平野遺跡群の動態Ⅳ』 大阪府教育委員会・(財)大阪府文化財調査研究センター
- 原田昌則1993「久宝寺遺跡」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告37』 (財)八尾市文化財調査研究会
- 東大阪市遺跡保護調査会1973『池島町の条里遺構－調査概要－』
- 東大阪市遺跡保護調査会1975『池島町の条里地割－48年度・49年度発掘調査概要－』
- 東大阪市教育委員会2001『－わが街再発見－東大阪市の古墳(改訂版)』
- (財)東大阪市文化財協会2004『生駒山西麓の王と水』 東大阪市立郷土博物館
- (財)東大阪市文化財協会2005『なぞの城－発掘調査からみた若江城－』 東大阪市立郷土博物館
- 樋口 薫2007「小阪合遺跡の発掘調査」『大阪府埋蔵文化財研究会(第55回)資料』 (財)大阪府文化財センター
- 枚岡市史編纂委員会1965『枚岡市史』第二巻 別編 大阪府枚岡市役所
- 枚岡市史編纂委員会1966a『枚岡市史』第三巻 史料編(一) 大阪府枚岡市役所
- 枚岡市史編纂委員会1966b『枚岡市史』第四巻 史料編(二) 大阪府枚岡市役所
- 枚岡市史編纂委員会1967『枚岡市史』第一巻 本編 大阪府枚岡市役所
- 廣瀬時習編2007『池島・福万寺遺跡3』 (財)大阪府文化財センター
- 福田英人・米田敏幸・嶋村友子1986『成法寺遺跡発掘調査概要・Ⅰ』 大阪府教育委員会
- 深野信之1999「弥生時代における水田の変遷」『網干善教先生古希記念論文』
- 藤井直正1983『東大阪の歴史』 松籟社
- 藤井直正・都出比呂志1966「第1部各節」『原始・古代の枚岡』 東大阪考古学研究会
- 藤城 泰・三輪若菜・若松博恵1999「東大阪市内出土の土偶・土製品」『光陰如矢－荻田昭次先生古希記念論集－』「光陰如矢」刊行会
- 藤原宏志・佐々木章・俣野敏子1989「先史時代水田の区画規模決定要因に関する検討」『考古学と自然科学』21号 日本文化財科学会誌
- 本間元樹・鹿野 壘編2002『志紀遺跡(その2・3・5・6)』 (財)大阪府文化財調査研究センター
- 松田順一郎2001「楽音寺遺跡北東部における弥生時代後期以後の遺構・遺物帯と堆積・土壌層序」『楽音寺遺跡第1・2次発掘調査報告』 (財)東大阪市文化財協会
- 三好孝一1998「西日本出土の浮線紋土器Ⅱ」『水遺跡発掘調査資料図譜第三冊』水遺跡発掘調査資料図譜刊行会
- 村本 薫編2001『南谷遺跡 遺物編1(木製品図版編)』 浜岡町埋蔵文化財調査報告書第8集
- 盛 峰雄2000「陶器の編年 1. 碗・皿」『九州陶磁の編年－九州近世陶磁学会10周年記念』九州近世陶磁学会
- 森岡秀人1996「初期水田の拡大と社会の変化」『弥生文化の成立』(角川選書265) 角川書店
- 森岡秀人・西村 歩・竹村忠洋・駒井正明編2003『古墳出現期の土師器と実年代 シンポジウム資料集』 (財)大阪府文化財センター
- 森島康雄1990「河内の羽釜」『中近世土器の基礎研究』Ⅵ 日本中世土器研究会
- 森本 徹・廣瀬時習・島崎久恵・市村慎太郎2007「摂河泉地域における古墳時代集落の基礎研究」『調査研究報告』第5集 (財)大阪府文化財センター
- 八尾市教育委員会文化財室・(財)八尾市文化財調査研究会1990『大竹西遺跡－現地説明会資料Ⅰ－』
- (財)八尾市文化財調査研究会1992「大竹西遺跡第1次調査(OTN90-1)」『平成3年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』
- (財)八尾市文化財調査研究会1995「郡川遺跡第3次調査(KR94-3)」『平成6年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』
- (財)八尾市文化財調査研究会1996「水越遺跡第5次調査(MK95-05)」『平成7年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』
- 八尾市立歴史民俗資料館1995『河内の中世考古学』 八尾市教育委員会
- 安村俊史編1994『船橋遺跡』柏原市文化財概報1993-Ⅳ 柏原市教育委員会
- 山田隆一1994「古墳時代初頭前後の中河内地域」『弥生文化博物館研究報告』第3集 大阪府立弥生文化博物館
- 吉田珠己2000「福万寺遺跡(98-357)の調査」『八尾市内遺跡平成11年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告42 平成11年度国庫補助事業 八尾市教育委員会
- 吉岡 哲他1988『八尾市史(前近代)本文編』 八尾市史編纂委員会
- 吉留秀敏2004「照葉樹林帯・海岸平野の水田(1)－九州北部」『考古学ジャーナル』518号 ニュー・サイエンス社

米田敏幸・徳谷尚子1990『福万寺遺跡』（財）八尾市文化財調査研究会報告24  
米田敏幸1990「中河内内の『布留系』土器群について」『考古学論集』第3集 考古学を学ぶ会  
米田敏幸1991「土師器の編年 近畿」『古墳時代の研究6 土師器と須恵器』 雄山閣  
米田敏幸1994「河内における庄内式土器の編年」『庄内式土器研究』Ⅶ 庄内式土器研究会  
米田敏幸1997「中河内弥生集落遺跡群の変遷」『河内古文化研究論集』 柏原市古文化研究会  
若松博恵・上野利明2002「水走遺跡の遺構と遺物」『神並・西ノ辻・鬼虎川・水走遺跡 調査報告書 国道308号関連調査の成果』  
（財）東大阪市文化財協会・東大阪市教育委員会

## （第6章 総括 2. 突帯文土器の分類と変遷 参考文献）

秋山浩三1999「近畿における弥生化の具体相」『論争 吉備』 考古学研究会  
秋山浩三2000「「刻目段甕」型式変遷の効用」『突帯文と遠賀川』 土器持寄会論文集刊行会  
泉拓良・山崎純男1989「凸帯文系土器様式」『縄文土器大観4』 小学館  
泉拓良1990「西日本凸帯文土器の編年」『文化財學報 第8集』 奈良大学文学部文化財学科  
大木要・後川恵太郎2007「私部南遺跡出土土器の基礎分析－縄文時代晩期～弥生時代前期を中心にして－」『私部南遺跡Ⅰ』（財）  
大阪府文化財センター  
関西縄文文化研究会2007『関西の突帯文土器』 関西縄文文化研究会  
（財）東大阪市文化財協会1997『鬼塚遺跡第8次発掘調査報告書』  
（財）東大阪市文化財協会・東大阪市教育委員会1997『水走遺跡第3次・鬼虎川遺跡第21次発掘調査報告』  
島崎久恵ほか2005「第3節弓削ノ庄遺跡 第2項調査成果」『弓削ノ庄遺跡他』（財）大阪府文化財センター  
田中清美2000「河内湖周辺における弥生文化の着床過程」『突帯文と遠賀川』 土器持寄会論文集刊行会  
田畑直彦1997「畿内第Ⅰ様式古・中段階の再検討」『立命館大学考古学論集Ⅰ』 立命館大学考古学論集刊行会  
中村健二2000「播磨系突帯文深鉢について」『突帯文と遠賀川』 土器持寄会論文集刊行会  
中村友博1977「和歌山県瀬戸遺跡の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和51年度』 京都大学農学部構内遺跡調査会・  
京都大学理学部付属瀬戸臨海実験所構内遺跡調査会  
野口哲哉1993「近畿地方縄文時代晩期終末突帯文土器の二態」『古代』第95号  
濱田延充2003「弥生集落遺跡から出土する突帯文土器の意味－高宮八丁遺跡出土の突帯文土器－」『立命館大学考古学論集Ⅲ』 立  
命館大学考古学論集刊行会  
深澤芳樹2000「刻目段甕のゆくえ－前期弥生土器における広域編年の試み－」『突帯文と遠賀川』 土器持寄会論文集刊行会  
東大阪市教育委員会・（財）東大阪市文化財協会1998『水走・鬼虎川遺跡発掘調査報告』  
松尾信裕1983「第Ⅳ章考察 第1節縄文時代から弥生時代の遺構と遺物の検討 第ⅰ項長原式土器深鉢A類にみる器形の変化」『長  
原遺跡発掘調査報告Ⅲ』 財団法人大阪市文化財協会  
豆谷和之2000「大和の凸帯文」『突帯文と遠賀川』 土器持寄会論文集刊行会  
三好孝一1996「河内湖における遠賀川系土器の始原－若江北遺跡第5次調査の成果から－」『巨摩・若江北遺跡発掘調査報告－第5  
次－』（財）大阪府文化財調査研究センター  
家根祥多1981「近畿地方の土器」『縄文時代の研究4 縄文土器Ⅱ』 雄山閣  
家根祥多1982「第Ⅴ章出土遺物 第2節第ⅰ項縄文土器」『長原遺跡発掘調査報告Ⅱ』（財）大阪市文化財協会  
家根祥多1984「縄文土器から弥生土器へ」『縄文から弥生へ』 帝塚山考古学研究所  
家根祥多1993「刻目突帯文土器研究の現状と課題」『突帯文土器から条痕文土器』 突帯文土器研究会  
家根祥多1995「近畿地方の突帯文土器出現期の様相」『第6回中四国縄文研究会』資料 中四国縄文研究会  
若林邦彦2000「河内湖沿岸地域における弥生文化成立期の様相」『弥生文化の成立』 埋蔵文化財研究会

# 揭載遺物一覽表

挿図 図	番号	写真 図版	器種	層序	遺構	時期	法量	特徴	実測番号 (登録番号)
7	1	21	陶磁器 碗		1b土坑内	17c末～18c末	残存高:4.45cm 高台径:4.75cm (2/3)	外:施釉(貫入あり)・山水文・回転ヘラケズリ・削出高台・高台部回転ナデ・露胎・底面刻印 内:施釉(貫入あり) 肥前京焼風山水文碗	543(8)
7	2		陶磁器 碗		1b土坑内	17c末～18c末	残存高:2.25cm 高台径:4.8cm(完)	外:施釉(貫入あり)・回転ヘラケズリ・削出高台・高台部回転ナデ・露胎・底面刻印 内:施釉(貫入あり) 肥前京焼風碗	542(12)
7	3		陶磁器 碗		1b土坑内	17c末～18c末	残存高:5.1cm 高台径:4.5cm(完)	外:施釉(貫入あり)・削出高台・高台端部露胎・離れ砂付着 内:施釉(貫入あり) 肥前呉器手碗	545(14)
7	4		陶磁器 碗		1b土坑内	17c中	残存高:3.2cm 高台径:4.2cm(完)	外:施釉(貫入あり)・網目文・削出高台・高台端部露胎 内:施釉(貫入あり) 肥前網目文碗(初期伊万里か)	544(11)
7	5	21	陶磁器 青磁碗		1b土坑内	13c中～14c初	残存高:2.3cm 高台径:6.8cm (3/5)	外:施釉・削出高台・底面ヘラケズリ・一部露胎 内:草花文 龍泉窯系青磁草花文碗	532(8)
7	6		陶磁器 青磁皿		1b土坑内	17c中～17c後半	口径:13.0cm(1/8) 残存高:2.45cm	外:施釉 内:施釉 波佐美青磁折縁皿	534(8)
7	7		土師器 羽釜		1b土坑内	14c	口径:18.0cm(1/8) 残存高:1.7cm	外:工具ナデ(横) 内:工具ナデ(横)・工具痕	539(10)
7	8		土師器 小皿		1b土坑内	16c	口径:11.2cm (11/12) 残存高:1.55cm	外:ナデ(横)・一部工具ナデか 内:一部工具ナデか	535(13)
7	9		瓦質土器 搦鉢		1b土坑内	14c	残存高:3.65cm	外:板ナデ(斜め)・ヘラケズリ(横) 内:板ナデ(横)	537(10)
7	10		瓦質土器 搦鉢		1b土坑内	14c	残存高:2.95cm 底径:10.0cm(1/4)	外:タタキカ・底面ナデ 内:搦目(3本/cm)	533(10)
7	11	21	土錘		1b土坑内	不明	残存長:1.9cm 残存最大幅:1.15cm 孔径:0.3cm	外:ナデ	525(14)
11	1		陶磁器 青磁皿	第4層		16c	口径:13.4cm(1/5) 残存高:2.4cm	外:施釉(貫入あり)・蓮弁文 内:施釉(貫入あり)・蓮弁文 龍泉窯系青磁輪花皿	441(25)
11	2		須恵器 壺	第4層		平安時代か	残存高:2.05cm 高台径:7.3cm (1/4)	外:回転ナデ・貼付高台・底面糸切り痕 内:回転ナデ	445(28)
11	3		瓦器碗	第4層		12c末～13c初	残存高:0.9cm 底径:4.2cm(1/3)	外:ヨコナデ・貼付高台・底面ナデ 内:ヘラミガキ	447(33)
11	4		瓦器碗	第4層		13c	口径:14.0cm (1/12) 残存高:2.85cm	外:ヨコナデ・指押さえ 内:ヘラミガキ(横) 和泉型	446(36)

挿図 図	番号	写真 図版	器種	層序	遺構	時期	法量	特徴	実測番号 (登録番号)
13	1	21	陶磁器 白磁碗	第5層		12c	口径:16.4cm (1/12) 残存高:5.1cm	外:施釉 内:施釉	444(43)
13	2		瓦質土器 羽釜	第5層		15c～16cか	残存高:5.6cm	外:ヨコナデ 内:ハケ(10本/1.7cm・横)	442(55)
15	1		須恵質土器 練鉢	第6層		13c	口径:30.0cm (1/12) 残存高:4.15cm	外:回転ナデ 内:回転ナデ 東播系	456(84)
15	2		須恵質土器 皿	第6層		13c	口径:12.6cm(1/8) 残存高:2.0cm	外:回転ナデ・不定方向ナデ 内:ナデ 東播系か	457(76)
15	3	21	土師器 羽釜	第6層		14c後半	口径:28.0cm (1/12) 鏝径:33.6cm 残存高:5.3cm	外:ヨコナデ・ヘラケズリ(横)・スス付着 内:ハケ(5本/cm・横)・スス付着	462(97)
15	4		瓦器椀	第6層		13c	残存高:0.8cm 高台径:5.8cm (1/4)	外:ヨコナデ・貼付高台・底面ナデ 内:平行線状暗文 和泉型	458(81)
15	5		陶磁器 白磁皿	第6層		13c後半～14c 初	残存高:0.7cm 底径:6.0cm(1/4)	外:施釉・底面露胎 内:施釉	466(72)
18	1		瓦質土器 羽釜	第7層		14c末	口径:19.6cm 鏝径:25.0cm(1/8) 残存高:4.4cm	外:ヨコナデ・凹線3・ヘラケズリ 内:板ナデか・ハケ(5本/cm・横)・ヘラケズリ(横)	463(117)
18	2		瓦質土器 鉢	第7層		14c末か	口径:22.4cm(1/8) 残存高:5.25cm	外:ヨコナデ・工具ナデ(横)・ヘラケズリ(横一部縦) 内:ハケ(6本/cm・11～12本/cm・斜め)	461(115)
18	3		須恵質土器 練鉢	第7層		12c中～12c後半	口径:26.2cm (1/14) 残存高:2.1cm	外:回転ナデ 内:回転ナデ 東播系	448(116)
18	4		土師器 羽釜か	第7層		13c	残存高:3.8cm	外:ヨコナデ 内:ハケ(12～13本/cm・横)・口縁端部沈線2	465(114)
18	5	21	瓦質土器 香炉	第7層		江戸時代か	残存高:3.1cm 底径:3.2cm(1/2)	外:ヘラミガキ(縦)・回転ヘラケズリ・削出高台・3足・底面回転ナデ 内:ナデ・底面回転ヘラケズリ 有三足半筒形輪高台香炉	452(135)
18	6		陶磁器 合子	第7層		13c中か	残存高:2.1cm 底径:2.8cm(1/2)	外:回転ヘラケズリ・施釉・底面露胎 内:回転ナデ・施釉 古瀬戸合子	449(124)
18	7		陶磁器 天目茶碗	第7層		15c	残存高:2.6cm 底径:4.3cm(完)	外:回転ヘラケズリ・施釉・削出高台・高台部露胎・高台端部糸切り・底面回転ヘラケズリ 内:施釉 瀬戸天目茶碗	451(131)
18	8		土師器 杯	第7層		13c中	口径:11.6cm(1/8) 残存高:2.5cm	外:ナデ(横)・底面ナデ 内:ナデ(横)	453(137)

挿図 図	番号	写真 図版	器種	層序	遺構	時期	法量	特徴	実測番号 (登録番号)
18	9		黒色土器 椀	第7層		10c中葉	残存高:1.05cm 底径:8.6cm(1/6)	外:ナデ・貼付高台・ヨコナデ・底面ナデ・ 朱塗布 内:ヘラミガキカ	450(129)
18	10	21	金属製品 錢貨	第7層		—	錢径:2.3cm 郭径:0.6cm×0.5cm 厚さ:0.1cm	開元通寶(南唐初鑄960年)	48(86)
18	11	21	碧玉製 勾玉	第7層		古墳時代か	残存長:1.7cm 残存幅:0.8cm	外:一部朱付着	45(400)
21	1		土師器 羽釜	第8層		14c	口径:15.7cm (1/10) 残存高:5.0cm	外:ヨコナデ・スス付着 内:ヨコナデ・ハケ(横)後ヨコナデ・ハケ (8本/cm・横)・スス付着	487(168)
21	2		瓦質土器 鉢	第8層		14c～15c	口径:27.2cm (1/16) 残存高:4.1cm	外:ヨコナデ・ヘラケズリ(横) 内:ハケ(6本/cm・斜め)	485(163)
21	3		瓦質土器 鉢	第8層		14c～15c	口径:22.8cm (1/12)残存高:4.0 cm	外:ヨコナデ・ナデ(横)・ヘラケズリ(横) 内:板ナデ(横)	483(155)
21	4		瓦質土器 播鉢	第8層		14c～15c	口径:27.4cm (1/16) 残存高:3.5cm	外:ヨコナデ・ヘラケズリ(横) 内:ハケ(7本/cm・斜め)・播目(6本/cm)	490(175)
21	5		陶磁器 播鉢	第8層		13c	口径:23.7cm(1/12 弱) 残存高:5.75cm	外:回転ナデ 内:回転ナデ・播目(7本/2.4cm) 備前播鉢	484(163)
21	6		須恵質土器 練 鉢	第8層		14c前半	口径:35.2cm (1/12) 残存高:5.2cm	外:回転ナデ 内:回転ナデ 東播系	482(155)
21	7		須恵質土器 練 鉢	第8層		12c末～13c初 頭	残存高:3.7cm 底径:9.0cm(1/4)	外:回転ナデか・底面糸切り痕・スス付着 内:回転ナデか 東播系か	455(145)
21	8		陶磁器 青磁碗	第8層		13c前半～13c 中葉	残存高:2.5cm 高台基部径:7.7cm (1/12)	外:施釉(貫入あり)・蓮弁文 内:施釉(貫入あり) 龍泉窯系青磁碗	486(167)
21	9		瓦器 椀	第8層		13c中葉～13c 後半	残存高:0.7cm 高台径:4.4cm (1/5)	外:ナデ・貼付高台・底面ナデ 内:ナデ後ヘラミガキ 大和型か	489(171)
21	10		土師器 小皿	第8層		13c	口径:9.3cm(1/10) 器高:1.0cm	外:ヨコナデ・底面ナデ 内:ヨコナデ・ナデ	488(176)
21	11		土師器 甕	第8層		8c	口径:11.0cm (1/10) 残存高:3.6cm	外:磨減 内:ヨコナデ・板ナデ(横)	454(142)
25	1		須恵器 平瓶		024溝	8c	残存高:5.45cm	外:回転ナデ 内:回転ナデ	524(169)

挿図 図	番号	写真 図版	器種	層序	遺構	時期	法量	特徴	実測番号 (登録番号)
25	2		土師器 鉢か		071土坑	不明	残存高:3.25cm	外:ヨコナデ・ハケ(縦)か・黒斑 内:ハケ後ヨコナデ・ハケ(11本/1.5cm・横)	531(193)
25	3		須恵器 杯蓋	第9層		6c前半	口径:13.2cm(1/8) 残存高:4.35cm	外:回転ヘラケズリ・回転ナデ 内:回転ナデ MT15型式	340(186)
25	4		須恵器 杯身	第9層		6c末~7c初頭	口径:13.0cm(1/8) 受部径:15.6cm 残存高:3.15cm	外:回転ナデ・回転ヘラケズリ 内:回転ナデ TK209型式	341(184)
25	5		土師器 甕	第9層		庄内	口径:12.0cm(1/5) 残存高:3.75cm	外:ヨコナデ・工具痕 内:ヘラケズリ(横)	343(191)
25	6		須恵器 高杯	第9層		7c前半	口径:12.0cm(1/4) 受部径:14.2cm 残存高:3.5cm	外:回転ナデ・回転ヘラケズリ・工具痕 内:回転ナデ・一定方向ナデ TK217型式	346(204)
25	7	21	陶磁器 青磁碗	第9層		13c中葉~14c初頭	残存高:4.0cm 高台径:5.9cm (1/4)	外:施釉・蓮弁文・削出高台・高台端部露胎 内:施釉・見込み草花文 龍泉窯系青磁草花文碗	345(196)
26	1		須恵器 杯蓋	第9層関連		6c中	口径:12.3cm(1/3) 器高:3.75cm	外:回転ヘラケズリ・回転ナデ 内:回転ナデ・回転ナデ後不定方向のナデ TK10型式	427(296)
26	2		須恵器 杯身	第9層関連		5c後半	口径:12.3cm(1/5) 受部径:14.8cm 器高:4.8cm	外:回転ナデ・回転ヘラケズリ 内:回転ナデ・底部ナデ・同心円タタキ TK47型式	372(293)
26	3	21	須恵器 杯蓋	第9層関連		7c前半	口径:11.15cm (4/5) 器高:3.65cm	外:回転ヘラケズリ・回転ナデ 内:回転ナデ後一定方向ナデ・回転ナデ・ヘラ記号 TK217型式	426(296)
26	4	21	須恵器 高杯	第9層関連		7c前半	口径:12.9cm(2/3) 受部径:15.95cm 基部径:4.9cm 残存高:4.5cm	外:回転ナデ・回転ヘラケズリ・方形透し3方向 内:回転ナデ後一定方向ナデ・回転ナデ TK217型式	428(296)
26	5	21	土師器 高杯	第9層関連		庄内	口径:18.4cm(完) 残存高:6.25cm	外:ヨコナデ・ハケ(4本/cm・縦)・指押さえ後ナデ 内:ヨコナデ・一部板ナデ後ナデ・ハケ(6本/0.5cm・横)	421(297)
26	6		土師器 高杯	第9層関連		6c	基部径:2.35cm (1/3) 残存高:5.45cm	外:ヨコナデ・面取り 内:ヘラナデ	365(299)
26	7	22	土師器 杯	第9層関連		6c末~7c初頭	口径:14.0cm(1/4) 残存高:3.9cm	外:ヨコナデ・ナデ 内:ヘラミガキ(横)	422(296)
26	8	21	土師器 杯	第9層関連		8c初か	口径:11.1cm(2/5) 器高:3.2cm	外:ヨコナデ・指押さえ後ナデ・一部工具ナデか・黒斑・一部朱塗布か 内:ナデ・ヘラ記号	424(296)
26	9	22	土師器 杯	第9層関連		8c初か	口径:10.3cm(4/5) 器高:3.0cm	外:ヨコナデ・指押さえ後ナデ・ナデ・黒斑 内:ヨコナデ・板状工具ナデか・放射状暗文・焼成後ヘラ記号	423(293)

挿図 図	番号	写真 図版	器種	層序	遺構	時期	法量	特徴	実測番号 (登録番号)
26	10	22	土師器 杯	第9層関連		7c中葉	口径:17.3cm(4/5) 器高:4.9cm	外:ヨコナデ・ヘラミガキ(横) 内:口縁端部ヘラミガキ(横)・放射状暗文・見込み連結輪状暗文	425(291)
26	11	22	瓦器碗	第9層関連		12c中葉	口径:14.3cm(2/3) 器高:6.15cm 高台径:6.25cm	外:ヨコナデ・ヨコナデ後ヘラミガキ(横)・指押さえ・貼付高台・高台部ヨコナデ・底面ナデ 内:ヘラミガキ(横)和泉型	419(301)
31	1	22	弥生土器 水差し 形土器		116土坑	弥生中期後葉	口径:11.0cm(1/8) 残存高:4.9cm	外:ヨコナデ・ナデ・沈線6・スス付着 内:ナデ同一個体とみられる把手片あり	538(262)
31	2	22	弥生土器 長頸 壺		177溝	弥生後期	口径:9.2cm(1/6) 残存高:5.8cm	外:ヨコナデ・ハケ(4本/0.8cm・横)・ヘラミガキ(縦) 内:ナデか	520(237)
31	3		弥生土器 壺		153溝	弥生後期	残存高:1.4cm 底径:2.95cm(3/4)	外:工具痕・底面葉脈痕 内:磨減	521(245)
31	4		土師器 高杯		178溝	5c前半	基部径:2.6cm(1/3) 残存高:1.8cm	外:ヘラミガキか 内:磨減	519(236)
31	5		土師器 高杯		111溝	4c中	基部径:2.45cm(完) 残存高:5.1cm	外:ヨコナデ・面取り 内:杯部ナデ・脚部ヘラケズリ(横)	530(209)
31	6		土師器 杯		126溝 166溝	8c	口径:11.8cm(1/8) 残存高:3.4cm	外:ヨコナデ・ヘラミガキ(横)・指押さえ・黒斑 内:板ナデ(斜め)・ヘラミガキ(横)	522(244)
31	7		土師器 甕		126溝 166溝	布留	残存高:1.95cm	外:磨減 内:磨減	527(243)
31	8		須恵器 杯身		100溝	6c末~7c初頭	口径:11.4cm(1/7) 受部径:14.4cm 残存高:3.0cm	外:回転ナデ・回転ヘラケズリ 内:回転ナデ TK209型式	518(207)
31	9		弥生土器 甕		142溝	弥生	残存高:2.7cm	外:ナデ 内:ハケ(6本/cm・横)	529(222)
31	10	22	土製品 土玉		104溝	不明	径:2.45~2.4cm 高:1.9cm 孔径:0.55cm 内径:0.25cm 孔長:1.65cm	外:ナデ 未貫通孔	46(210)
31	11	22	土師器 甕	第10層		古墳前期	口径:18.0cm(1/4) 残存高:11.9cm	外:ヨコナデ・ハケ(7本/cm・縦)後ヨコナデ・ハケ(7本/cm・横・斜め)・黒斑 内:ハケ(6本/cm・横)・黒斑・ヘラケズリ(横)	420(317)
31	12		土師器 甕	第10層		古墳前期	口径:15.5cm(1/9) 残存高:5.0cm	外:ヨコナデか・工具痕・スス付着 内:磨減・口縁部スス付着	348(260)
31	13	22	弥生土器 高杯	第10層		弥生後期か	基部径:3.6cm(3/5) 残存高:6.7cm	外:ハケ(4本/cm・斜め)後ヘラナデ(横)・ハケ(4本/cm・縦) 内:杯部板ナデ(横)・脚部ヘラケズリ(横)	347(261)



挿図 図	写真 番号	器種	層序	遺構	時期	法量	特徴	実測番号 (登録番号)
33	1	弥生土器 広口壺		208溝	弥生中期末～後期初	口径:17.0cm(1/8) 残存高:1.85cm	外:ヨコナデ 内:磨減	540(282)
33	2	土師器 甕		208溝	古墳前期	残存高:2.2cm	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	536(282)
33	3	弥生土器 甕	第11b層		弥生前期	残存高:1.9cm 底径:6.0cm(完)	外:板ナデ(縦)・底面磨減 内:磨減・工具痕か	376(292)
33	4	弥生土器 甕	第11b層		弥生中期後葉	残存高:8.7cm 底径:4.35cm(完)	外:ハケ(7本/1.2cm・縦)・スス付着 内:板ナデ(横～斜め)・底部指ナデ・スス付着	315(286)
38	1	23 弥生土器 広口壺		229流路	弥生前期中葉	最大胴部径:12.3cm(4/5) 残存高:10.35cm 底径:4.75cm(完)	外:板ナデ(縦)・沈線3・ヘラミガキ(横～斜め)・沈線4・板ナデ(横)後ヘラミガキ(横)・底面板ナデか・黒斑 内:板ナデ(横)後ヘラミガキ・ナデ	9(320)
38	2	弥生土器 甕		229流路	弥生前期中葉	口径:18.9cm(1/14) 残存高:3.45cm	外:口縁端部刻目・沈線1・刺突文 内:磨減	56(306)
38	3	23 弥生土器 甕		229流路	弥生前期中葉	口径:28.8cm(1/9) 残存高:6.9cm	外:ヘラミガキ(縦)後ナデ・ヘラミガキ(横・斜め)・沈線4・刺突文・黒斑 内:板ナデ後ナデ・ヘラミガキ(横)・黒斑	49(313)
38	4	弥生土器 広口壺		229流路	弥生前期中葉	頸部径:10.2cm(1/20) 残存高:3.9cm	外:磨減・削出突帯・沈線5 内:剥離	59(316)
38	5	23 弥生土器 広口壺		229流路	弥生前期中葉	残存高:6.95cm(1/20)	外:沈線4以上・板ナデ(斜め) 内:剥離	60(308)
38	6	弥生土器 広口壺		229流路	弥生前期中葉	口径:27.0cm(1/10) 残存高:4.0cm	外:ヨコナデ・板ナデ(横) 内:ヘラミガキか(横・縦)	54(313)
38	7	弥生土器 長頸壺		229流路	弥生中期前～中葉	残存高:6.85cm	外:櫛描直線文(11～12本)・板ナデか 内:板ナデ(横)	63(316)
38	8	23 弥生土器 長頸壺		229流路	弥生中期前葉	残存高:6.7cm(1/6)	外:櫛描直線文(8本)・ヘラミガキ(横) 内:板ナデ(斜め)・黒斑	61(318)
38	9	弥生土器 鉢か		229流路	弥生前期	残存高:3.1cm	外・内:ヘラミガキ(横)・スス付着	66(318)
38	10	23 弥生土器 台付鉢		229流路	弥生中期後葉	基部径:6.1cm(完) 残存高:5.25cm	外:板ナデ(縦)・竹管文 内:ナデ	429(290)
38	11	弥生土器 甕		229流路	弥生	底径:4.2cm(完) 残存高:3.3cm	外:板ナデ(縦) 内:板ナデ(横)・ヘラナデ	73(483)

挿図 図	番号	写真 図版	器種	層序	遺構	時期	法量	特徴	実測番号 (登録番号)
39	1	23	縄文土器 深鉢		229流路	縄文晩期後半 (長原式)	口径:27.6cm (1/20) 残存高:6.0cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(横)内:板ナデ (横)・黒斑 〈A-2類・2-1型・a型・小D字形〉	74(483)
39	2		縄文土器 深鉢		229流路	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:4.1cm	外:板ナデ(横)・刻目貼付突帯内:板ナデ (横) 〈A-3類・-・b-1型・大D字形〉	79(483)
39	3	23	縄文土器 深鉢		229流路	縄文晩期後半 (長原式)	口径:30.0cm (1/10) 残存高:7.8cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(横)後一部ヘラ ミガキ(縦) 内:指ナデ後板ナデ(横)・黒斑 〈A-4類・2-2型・b-1型・小O字形〉	50(313)
39	4	23	縄文土器 深鉢		229流路	縄文晩期後半 (長原式)	口径:30.4cm (1/20) 残存高:6.45cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(横)後一部ヘラ ミガキ(横) 内:板ナデ(横) 〈A-4類・2-2型・b-1型・小D字形〉	76(483)
39	5	23	縄文土器 深鉢		229流路	縄文晩期後半 (長原式)	口径:17.6cm (1/20) 残存高:3.5cm	外:刻目貼付突帯・板ナデか 内:板ナデ(横)後一部ヘラミガキ(横) 〈B-2類・1-2型・a型・小D字形〉	82(483)
39	6	23	縄文土器 深鉢		229流路	縄文晩期後半 (長原式)	口径:12.3cm (1/10) 残存高:3.2cm	外:刻目貼付突帯・ヨコナデ・板ナデ(横)・ スス付着 内:ナデか 〈B-3類・2-1型・b-2型・小D字形〉	67(315)
39	7	23	縄文土器 深鉢		229流路	縄文晩期後半 (長原式)	口径:18.8cm (1/10) 残存高:7.75cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(縦)・一部ヘラ ケズリ(縦) 内:板ナデ(横)・黒斑 〈B-4類・2-1型・a型・小V字形〉	53(313)
39	8	23	縄文土器 深鉢		229流路	縄文晩期後半 (長原式)	口径:18.8cm (1/20) 残存高:5.5cm	外:刻目貼付突帯 内:板ナデ(横) 〈B-4類・2-2型・a型・小O字形〉	75(483)
39	9		縄文土器 深鉢		229流路	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:7.0cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(横)内:板ナデ (横) 〈A-2類・2-1型・a型・-〉	78(483)
39	10		縄文土器 深鉢		229流路	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:3.7cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(横) 内:板ナデか 〈A-3類・2-2型・a型・-〉	92(483)
39	11	23	縄文土器 深鉢		229流路	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:5.95cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(横)・黒斑 内:板ナデ(横)・一部黒斑 〈A-3類・2-2型・a型・小V字形〉	55(313)
39	12		縄文土器 深鉢		229流路	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:2.25cm	外:刻目貼付突帯・ナデ・スス付着 内:磨滅・スス付着 〈-・2-1型・a型・小D字形〉	81(483)
39	13		縄文土器 深鉢		229流路	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:2.3cm	外:貼付突帯・ヘラケズリ(横) 内:板ナデか 〈-・1-2型・a型・無〉	90(483)
39	14		縄文土器 深鉢		229流路	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:4.5cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(横)・スス付着 内:板ナデ(斜め) 〈A-4類・2-2型・b-1型・-〉	65(313)
39	15		縄文土器 深鉢		229流路	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:2.5cm	外:刻目貼付突帯・板ナデか 内:板ナデ(横) 〈-・1-2型・b-2型・小D字形〉	89(483)

挿図 図	番号	写真 図版	器種	層序	遺構	時期	法量	特徴	実測番号 (登録番号)
39	16		縄文土器 深鉢		229流路	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:5.25cm	外:貼付突帯・板ナデ(横)後一部ヘラミガキ(横)・黒斑 内:板ナデ(横・斜め)・黒斑 〈A-4類・2-2型・b-2型・無〉	51(313)
39	17	23	縄文土器 深鉢		229流路	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:4.7cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(横)・スス付着 内:板ナデ(横)・口縁部スス付着 〈A-4類・2-2型・a型・大D字形〉	213(483)
39	18		縄文土器 深鉢		229流路	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:4.75cm	外:刻目貼付突帯・板ナデか(横) 内:板ナデ(横) 〈A-1類か・-・b-1型・-〉	97(483)
39	19		縄文土器 深鉢		229流路	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:4.05cm	外:刻目貼付突帯・ナデ・ヘラケズリ(横) 内:板ナデ(横) 〈A-2類・-・b-2型・小O字形〉	80(483)
39	20		縄文土器 深鉢		229流路	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:3.25cm	外:板ナデ(横)・刻目貼付突帯・ヘラケズリ(横) 内:板ナデ(横)・スス付着 〈-・-・c型・小D字形〉	85(483)
39	21		縄文土器 深鉢		229流路	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:5.4cm	外:板ナデ(横)・刻目貼付突帯・スス付着 内:板ナデ(横)・スス付着 〈A-2類・-・b-1型・小D字形〉	83(483)
39	22		縄文土器 深鉢		229流路	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:4.1cm	外:板ナデ(横)・刻目貼付突帯・ナデ(横) 内:板ナデ(横) 〈A-2類・-・a型・小D字形〉	64(309)
39	23		縄文土器 深鉢		229流路	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:4.65cm	外:板ナデ(横)・刻目貼付突帯・板ナデ(横)・ヘラケズリ(横) 内:板ナデ(横) 〈A-2類・-・a型・小D字形か〉	87(483)
39	24		縄文土器 深鉢		229流路	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:6.0cm	外:板ナデ(横)・刻目貼付突帯・板ナデ(横)・ヘラケズリ(横)・スス付着 内:板ナデ(横)・一部縦～斜め 〈A-4類・-・a型・小D字形〉	77(483)
39	25		縄文土器 深鉢		229流路	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:3.3cm	外:刻目貼付突帯・板ナデか 内:板ナデか 〈A-4類・-・a型・-〉	88(483)
39	26		縄文土器 深鉢		229流路	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:3.7cm	外:板ナデ(横)・刻目貼付突帯・板ナデか 内:板ナデ(横) 〈A-4類・-・a型・小O字形〉	84(483)
39	27	24	縄文土器 深鉢		229流路	縄文晩期後半	残存高:3.2cm 底径:5.3cm(完)	外:ヘラケズリ(縦)・底面板ナデ 内:板ナデ(縦)・ナデ・焦げ付着	62(309)
39	28	24	縄文土器 深鉢		229流路	縄文晩期後半	残存高:3.1cm 底径:7.2cm(完)	外:板ナデ(縦)・底面板ナデ 内:工具ナデ・工具痕	126(483)
39	29	24	縄文土器 深鉢		229流路	縄文晩期後半	残存高:3.45cm 底径:7.45cm(完)	外:ヘラケズリ(縦)・底面板ナデ・ナデ 内:ナデか・剥離	52(313)
39	30	24	縄文土器 深鉢		229流路	縄文晩期後半	残存高:9.2cm 体部最大径:6.7cm (完)	外:ヘラケズリ(縦)・穿孔2 内:板ナデ(横)・ナデ・底部付近ヘラナデ(縦) ミニチュア土器か	467(310)

挿図 図	番号	写真 図版	器種	層序	遺構	時期	法量	特徴	実測番号 (登録番号)
39	31	24	輪状土製品		229流路	縄文晩期後半	内径:5.6cm 外径:8.0cm 残存率(3/4)	外・内:ナデ・一部ヘラナデ	550(313)
40	1	24	弥生土器 長頸壺		213大畦畔	弥生中期後半	頸部径:15.8cm (1/3) 残存高:15.55cm	外:櫛描直線文(26本)・櫛描廉状文(26本)・櫛描直線文(8~9本)・板ナデ(斜め) 内:指押さえ・ナデ	314(360)
41	1	24	弥生土器 広口壺	第12層		弥生中期前半	口径:27.0cm(1/8) 残存高:9.5cm	外:櫛描直線文(4本)・板ナデ(横)後ヘラミガキ(横)・板ナデ(斜め)・櫛描直線文(2本・6本・6本) 内:ハケ(8本/cm・横)	298(411)
41	2		弥生土器 壺	第12b層		弥生中期後葉	残存高:4.6cm	外:板ナデ(横)後流水文 内:ナデか	378(353)
41	3		弥生土器 甕	第12b層		弥生中期	残存高:6.05cm 底径:6.6cm(1/4)	外:ヘラナデ(横)・板ナデ(横)・底面板ナデか 内:板ナデ(横)・ヘラナデ(横)	369(358)
41	4		弥生土器 甕	第12b層		弥生中期	残存高:2.9cm 底径:6.4cm(1/3)	外:板ナデ(縦)・底面板ナデ 内:板ナデか・工具痕	368(355)
41	5		縄文土器 深鉢か	第12b層		縄文晩期後半	残存高:2.25cm 底径:6.0cm(1/4)	外:板ナデか・工具痕・底面工具ナデ 内:指押さえ	388(405)
41	6		縄文土器 深鉢	第12b層		縄文晩期後半	残存高:3.15cm 底径:6.4cm(1/5)	外:板ナデ(縦)か・底面板ナデか 内:板ナデ(横)か	371(403)
41	7		輪状土製品か	第12b層		縄文晩期後半	残存長:2.4cm	外・内:磨減	551(403)
47	1	25	弥生土器 広口壺		358流路	弥生前期末~中期前葉	口径:19.7cm (1/10) 残存高:4.0cm	外:口縁端面上下刻目・ヨコナデ・板ナデ(斜め)後ヘラミガキ(横) 内:ヨコナデ・ヘラミガキ(横)	72(471)
47	2		弥生土器 広口壺		358流路	弥生中期前葉	口径:20.0cm (1/20) 残存高:2.0cm	外:ヨコナデ・板ナデ(横)後一部ヘラミガキ(縦)・スス付着 内:ナデ・一部ヘラミガキ(横)か・スス付着	71(471)
47	3		弥生土器 広口壺		358流路	弥生中期前葉	残存高:1.9cm	外:ヨコナデ・スス付着 内:ヨコナデ・スス付着	38(359)
47	4		弥生土器 壺		358流路	弥生	残存高:4.35cm	外:ヨコナデ・板ナデ 内:ナデ・板ナデ(横)	40(359)
47	5		弥生土器 壺		358流路	弥生中期	残存高:2.15cm	外:櫛描直線文(6本)・ナデ 内:ナデ	35(359)
47	6		弥生土器 甕蓋		358流路	弥生	口径:26.8cm (1/12) 残存高:4.2cm	外:ヘラミガキ(斜め~横)・裾部端面工具ナデ(横)・スス付着 内:ヘラミガキ(斜め~横・一部縦)・スス付着	69(438)

挿図 図	番号	写真 図版	器種	層序	遺構	時期	法量	特徴	実測番号 (登録番号)
47	7		弥生土器 甕		358流路	弥生中期前葉	口径:25.2cm (1/10) 残存高:5.3cm	外:ヨコナデ・板ナデ(横)・スス付着 内:板ナデ(横)・ナデ・スス付着	43(359)
47	8	25	弥生土器 甕		358流路	弥生中期前葉	口径:19.2cm(1/7) 残存高:8.9cm	外:ヨコナデ・磨滅 内:ヨコナデ・板ナデ(横)・スス付着	301(435)
47	9		弥生土器 甕		358流路	弥生中期前葉	残存高:1.45cm	外:刻目・板ナデか 内:ヘラミガキ(横)	33(359)
47	10		弥生土器 鉢		358流路	弥生前期後半 ～中期前葉	残存高:4.55cm	外:ヨコナデ・板ナデ(斜め)後ヘラミガキ (横・縦)・スス付着 内:板ナデ(斜め)後ヘラミガキ(斜め)・一 部スス付着	41(359)
47	11		弥生土器 甕		358流路	弥生中期前葉	口径:24.4cm (1/10) 残存高:11.45cm	外:板ナデか・スス付着 内:ヘラミガキ(横)	42(359)
47	12		弥生土器 甕		358流路	弥生中期前葉	口径:15.0cm(1/8) 残存高:5.55cm	外:ヨコナデ(横～斜め)・板ナデ・ヘラミ ガキ(斜め) 内:板ナデ(横～斜め)・こげ付着	68(436)
47	13	25	弥生土器 甕		358流路	弥生中期前葉	残存高:8.05cm	外:ナデ(横～斜め)・ハケ後ヘラミガキ (横～斜め)・スス付着 内:工具ナデ後ヘラミガキ(横・斜め)・こ げ付着	179(471)
47	14		弥生土器 甕		358流路	弥生中期前葉	口径:18.2cm (1/13) 残存高:6.1cm	外:ヨコナデ・板ナデ(横)・板ナデ(縦・斜 め)後ヘラミガキ(横)・黒斑 内:板ナデ(横)	32(359)
47	15	25	弥生土器 甕		358流路	弥生中期前葉	残存高:6.6cm 底径:6.2cm(2/3)	外:板ナデか・工具ナデ・底面ヘラナデ・ス ス付着 内:板ナデ(横)後ヘラミガキ(横・縦)・ス ス付着	18(359)
47	16		弥生土器 甕		358流路	弥生中期前葉	残存高:3.55cm 底径:5.9cm(1/2)	外:剥離 内:板ナデか	21(359)
47	17		弥生土器 甕		358流路	弥生中期前葉	残存高:3.2cm 孔径:1.0cm 底径:5.7cm(1/2)	外:板ナデ(縦)・ナデ・底面板ナデか 内:板ナデ(縦)・ナデ・工具痕・底部焼成前 穿孔1(外から)	17(351)
47	18	25	弥生土器 甕		358流路	弥生中期前葉	残存高:4.2cm 孔径:内1.2cm 外1.5cm 底径:7.0cm(完)	外:板ナデ(縦)・ヘラミガキ(横)・底面工 具ナデ 内:板ナデ(横)・底部穿孔1(外・内から)	70(438)
47	19	25	石鏝		358流路	縄文晩期～弥 生前期	長:2.9cm 幅:2.7cm 厚:0.3cm 重:2.1g	サスカイト	623(438)
48	1	25	弥生土器 広口 壺	第13面		弥生中期前葉	口径:21.6cm (1/10) 残存高:2.6cm	外:波状文・ヨコナデ・ヘラミガキ(横) 内:ヘラミガキ(横)	497(761)
48	2	25	弥生土器 広口 壺	第13b層		弥生中期前葉	口径:27.0cm (1/12) 残存高:1.8cm	外:櫛描直線文(6本・横)・櫛描直線文(6 本・縦)・板ナデ(横)・黒色物質塗布 内:板ナデ(横)	302(439)

挿図 図	番号	写真 図版	器種	層序	遺構	時期	法量	特徴	実測番号 (登録番号)
48	3	25	弥生土器 広口壺	第13層		弥生前期後葉	口径:13.8cm(1/4) 残存高:5.55cm	外:板ナデ(横)・ヨコナデ・貼付突帯 内:板ナデ(横)後ヘラミガキ(横)・ナデ	367(390)
48	4	26	弥生土器 長頸壺	第13b層		弥生中期前葉	残存高:14.3cm 底径:7.6cm(完)	外:板ナデ(縦)後ヘラミガキ(斜め~縦)・ 線刻か・スス付着・底面板ナデ 内:板ナデ(横~斜め)後ヘラミガキ(縦)・ ヘラケズリ(縦)後ヘラミガキ(斜め)・炭 化物付着か	321(427)
48	5		弥生土器 鉢	第13層		弥生中期前葉	残存高:5.75cm	外:ヘラミガキ(横)・櫛描直線文(6本) 内:板ナデ(横)	375(373)
48	6		弥生土器 甕	第13層		弥生中期前葉	口径:21.6cm (1/12) 残存高:4.05cm	外:ヨコナデ・板ナデ(横)後ヘラミガキ (横)・指押さえ・スス付着 内:ナデ・磨減	370(373)
48	7	25	弥生土器 甕	第13層		弥生中期前葉	口径:22.2cm(1/8) 残存高:11.6cm	外:ハケ(8本/cm・横) 内:ヨコナデ・板ナデ(横)・スス付着	300(413)
48	8	26	弥生土器 甕	第13b層		弥生中期前葉	口径:24.6cm (7/10) 器高:25.8cm 底径:6.4cm	外:沈線(6本)4・ヘラミガキ(横~斜め)・ 板ナデ(斜め)後ヘラミガキ(斜め)・スス 付着・黒斑・底面工具ナデ 内:板ナデ(横)・工具ナデ後ヘラミガキ (横~斜め)・こげ付着	3(426)
48	9		弥生土器 甕	第13層		弥生中期前葉	口径:19.85cm (1/20) 器高:21.4cm 底径:5.2cm(完)	外:ヘラミガキ(縦~斜め・横)・板ナデ(斜 め)・底面板ナデ・ヘラナデ・スス付着 内:板ナデ(横~斜め)後ヘラミガキ(横~ 斜め・縦)・こげ付着	4(759)
48	10	26	縄文土器 深鉢	第13層		縄文晩期後半 (長原式)	口径:27.0cm (1/10) 残存高:6.25cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(横)・スス付着 内:板ナデ(横~斜め)・黒斑 〈A-4類・2-2型・b-1型・小D字形〉(口 縁部) 〈A-4類・-・b-1型・小D字形〉(肩部)	374(398)
48	11	26	縄文土器 深鉢	第13面		縄文晩期後半 (長原式)	口径:31.8cm(1/7) 残存高:14.9cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(横)・ヘラケズ リ(横~斜め・縦) 内:板ナデ(横)・一部ナデ 〈A-4類・2-2型・c型・小V字形〉(口縁部) 〈A-4類・-・d型・小O字形〉(肩部)	299(412)
48	12	26	縄文土器 深鉢	第13面		縄文晩期後半 (長原式)	突帯部径:35.6cm (1/7) 残存高:11.6cm	外:板ナデ(横)・刻目貼付突帯・ヘラケズ リ(横) 内:板ナデ(横) 〈A-3類・-・d型・小O字形〉	330(466)
48	13		縄文土器 深鉢	第13面		縄文晩期後半 (長原式)	残存高:2.6cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(横) 内:磨減 〈-・3型・c型・小D字形〉	310(463)
48	14		縄文土器 深鉢	第13層		縄文晩期後半 (長原式)	残存高:1.4cm	外:刻目貼付突帯・磨減 内:板ナデ(横) 〈-・2-2型・c型・小V字形〉	510(422)
48	15		縄文土器 深鉢			縄文晩期後半 (長原式)	残存高:2.7cm	外:板ナデ(横)・刻目貼付突帯 内:板ナデ(横) 〈A-3類・-・a型・大D字形〉	508(421)
48	16		縄文土器 深鉢	第13面		縄文晩期後半	残存高:1.3cm 底径:5.6cm(1/5)	外:板ナデ(縦)・底面板ナデ 内:磨減	313(468)
48	17		縄文土器 深鉢	第13b面		縄文晩期後半	残存高:1.7cm 底径:7.0cm(1/2)	外:板ナデ(縦)・底面板ナデ 内:板ナデ(横)	309(459)

挿図 図	番号	写真 図版	器種	層序	遺構	時期	法量	特徴	実測番号 (登録番号)
48	18	26	縄文土器 深鉢	第13b面		縄文晩期後半	残存高:1.7cm 底径:5.0cm(完)	外:板ナデ(縦)・スス付着・底面板ナデ 内:板ナデ(横)	308(458)
48	19		縄文土器 深鉢	第13面		縄文晩期後半	残存高:1.7cm 底径:5.1cm(1/6)	外:磨減 内:磨減	339(466)
48	20	26	縄文土器 深鉢	第13面		縄文晩期後半	残存高:1.65cm 底径:6.2cm(1/2)	外:板ナデ(縦)・黒斑・底面板ナデか 内:板ナデ(横)	373(357)
48	21		縄文土器 深鉢	第13b層		縄文晩期後半	残存高:1.5cm 底径:5.2cm(1/2)	外:板ナデ(縦)・底面板ナデ 内:板ナデ(縦)・スス付着	324(429)
48	22		縄文土器 深鉢	第13b層		縄文晩期後半	残存高:2.1cm 底径:6.4cm(1/4)	外:板ナデ(縦)・工具痕・底面板ナデ 内:磨減	312(462)
48	23		弥生土器 甕	第13面		弥生前期	残存高:2.05cm 底径:4.85cm(3/4)	外:板ナデ(縦)・底面ナデ 内:板ナデ(縦)	328(466)
48	24	25	弥生土器 壺	第13b層		弥生前期	残存高:4.2cm 底径:7.0cm(完)	外:板ナデ(縦)・工具痕・底面ナデ・指ナデ 内:板ナデ(縦)	338(512)
50	1	27	弥生土器 広口 壺		339落ち込み	弥生前期中葉	口径:13.9cm(3/5) 最大胴部径:25.0 cm 器高:24.1cm 底径:8.1cm	外:ヘラミガキ(横)・沈線文(頸部2・体部 3)・重弧文・工具ナデ(縦)・黒斑・底面工具 ナデ後ヘラミガキ 内:ヘラミガキ(横)・ナデ後ヘラミガキ (横・斜め)・板ナデ(横)後ヘラミガキ (横)・ナデ・黒斑	8(665 673 684)
50	2	27	弥生土器 長頸 壺		339落ち込み	弥生前期	口径:8.8cm 残存高:5.0cm	外:ヘラミガキ(横)・沈線4 内:ヘラミガキ(横)	284(694)
50	3	27	弥生土器 長頸 壺		339落ち込み	弥生前期	口径:9.4cm(1/8) 残存高:4.2cm	外:板ナデか・沈線7 内:板ナデ(横)か	295(723)
50	4	27	弥生土器 長頸 壺		339落ち込み	弥生前期	口径:8.0cm(1/8) 残存高:2.5cm	外:工具ナデ・ヘラミガキ(横)・沈線4 内:ヘラミガキ(横)	181(615)
50	5	27	弥生土器 長頸 壺		339落ち込み	弥生前期	口径:9.4cm(1/12) 残存高:2.7cm	外:ヘラミガキ(横)か・沈線5 内:ヘラミガキ(横)	226(522)
50	6		弥生土器 広口 壺		339落ち込み	弥生前期後半	頸部径:6.8cm (1/6) 残存高:5.1cm	外:ヘラミガキ(縦)・沈線2 内:ヘラミガキ(横)	236(527)
50	7		弥生土器 無頸 壺		339落ち込み	弥生前期後半	残存高:5.7cm	外:板ナデ(横) 内:板ナデ(横)	283(688)
50	8	27	弥生土器 甕		339落ち込み	弥生前期	口径:17.6cm(1/6) 残存高:18.6cm	外:ヨコナデ・板ナデ(横)・ヘラケズリ(横 ～斜め)・ヘラケズリ(縦)後ヘラミガキ (縦)・黒斑 内:板ナデ(横～斜め)	332(479)

挿図 図	番号	写真 図版	器種	層序	遺構	時期	法量	特徴	実測番号 (登録番号)
50	9		弥生土器 甕		339落ち込み	弥生前期	残存高:2.7cm	外:刻目・板ナデ(横)・沈線1・スス付着 内:板ナデ(横)	239(523)
50	10	27	弥生土器 甕		339落ち込み	弥生前期中葉	口径:27.6cm(1/7) 残存高:5.5cm	外:ヨコナデ・タタキ(斜め)後ヨコナデ・ 段・タタキ(斜め)後板ナデ(横)か・スス付 着 内:ヘラミガキ(横)・スス付着	216(522)
50	11		弥生土器 甕		339落ち込み	弥生前期中葉	残存高:4.7cm	外:ヨコナデ・タタキ(横・縦)後ヨコナデ・ 段・タタキ(斜め～縦)後板ナデ(横)・スス 付着 内:ヘラミガキ(横)・板ナデ(横)	223(522)
50	12	27	弥生土器 甕		339落ち込み	弥生前期後半 ～中期	口径:20.6cm (1/10) 残存高:5.0cm	外:ハケ(10本/cm・斜め)後指ナデ・ハケ (10本/cm・斜め)後ヘラミガキ(横)・沈線4 内:ヨコナデか・ナデ・口縁部スス付着	263(503)
50	13	27	弥生土器 鉢		339落ち込み	弥生前期中葉	口径:31.6cm(1/5) 残存高:9.0cm	外:ハケ(3本/cm・斜め)後ヨコナデ・段・ヘ ラナデ(横)・ハケ(3本/cm・斜め)後ヘラミ ガキ(横) 内:板ナデ(横)・板ナデ(横)後ヘラミガキ (横)・板ナデ(横～斜め)・スス付着	276(686)
50	14	27	弥生土器 甕		339落ち込み	弥生前期	残存高:3.2cm 底径:5.2cm(完)	外:ヘラケズリ(縦)後ヘラミガキ(縦)・ナ デ・底面工具ナデ・スス付着 内:ナデ・スス付着	111(527)
50	15		弥生土器 甕		339落ち込み	弥生前期	残存高:3.1cm 底径:5.5cm(1/4)	外:ナデ・底面ナデ 内:ナデ	163(686)
50	16	27	弥生土器 甕		339落ち込み	弥生前期	残存高:2.3cm 底径:5.65cm(完)	外:ナデ・底面ナデ 内:ナデ	139(695)
50	17		弥生土器 壺		339落ち込み	弥生前期	残存高:1.7cm 底径:6.1cm(1/2)	外:ヘラミガキ(斜め)・底面ナデ 内:ナデ・黒斑 接合痕隙間植物混在	116(527)
50	18		弥生土器 甕		339落ち込み	弥生前期	残存高:1.5cm 底径:5.05cm(完)	外:ナデ・底面ナデ・スス付着 内:ナデ	158(687)
50	19		弥生土器 壺		339落ち込み	弥生前期	残存高:2.1cm 底径:5.8cm(1/4)	外:ナデ・底面ナデ 内:ナデ	121(522)
50	20		弥生土器 甕		339落ち込み	弥生前期	残存高:1.1cm 底径:4.0cm(1/4)	外:ナデ・底面ナデ 内:ナデ	148(686)
50	21		弥生土器 壺		339落ち込み	弥生前期	残存高:1.2cm 底径:6.1cm(完)	外:ヘラミガキ(横)・黒斑・底面工具ナデ 内:ナデ・スス付着	113(527)
50	22		弥生土器 壺		339落ち込み	弥生前期	残存高:2.55cm 底径:6.0cmか	外:板ナデ(縦)後ナデか 内:ナデ	136(494)
50	23		弥生土器 甕		339落ち込み	弥生前期	残存高:1.55cm 底径:6.2cm(1/4)	外:ナデ・底面ナデ 内:ナデ	122(522)



挿図 図	番号	写真 図版	器種	層序	遺構	時期	法量	特徴	実測番号 (登録番号)
50	24		弥生土器 甕		339落ち込み	弥生前期	残存高:2.0cm 底径:6.1cm(1/5)	外:ナデ・底面ナデ 内:ナデ	152(678)
50	25		弥生土器 甕		339落ち込み	弥生前期	残存高:1.55cm 底径:6.4cm(1/4)	外:ヘラケズリ(縦)後ナデか・底面ナデか 内:ナデ・スス附着	117(523)
50	26	27	弥生土器 甕か		339落ち込み	弥生前期	残存高:2.55cm 底径:5.3cm(完)	外:ヘラミガキ(横)・指押さえ後ナデ・こ げ附着・底面ナデ・糊圧痕 内:ナデ・底部に植物痕	107(522)
50	27		弥生土器 壺		339落ち込み	弥生前期	残存高:3.3cm 底径:6.8cm(1/3)	外:板ナデ(縦)・底面ナデ 内:板ナデ(横)・工具痕	331(479)
50	28		弥生土器 壺		339落ち込み	弥生前期	残存高:3.0cm 底径:6.8cm(1/4)	外:板ナデ(縦)後ヘラミガキ(横)・底面ナ デ 内:ヘラミガキか・スス附着	145(528)
50	29		弥生土器 壺		339落ち込み	弥生前期	残存高:2.3cm 底径:7.6cm(1/4)	外:一部板ナデ(横)後ヘラミガキ(斜め・ 横)・底面ナデ 内:ヘラミガキ(斜め)	118(527)
50	30		弥生土器 壺		339落ち込み	弥生前期	残存高:2.2cm 底径:7.6cm(1/4)	外:ナデ・底面ナデか 内:板ナデか	153(530)
51	1	28	縄文土器 舟形 土器		339落ち込み	縄文晩期末～ 弥生前期前葉	器高:11.7cm 底径:6.3cm～7.7cm	外:ヘラミガキ(横)・眼鏡枠状浮文～横方 向浮文～双翼形垂下浮文・焼成前穿孔1・ 黒色物質塗布・底面磨減 内:ヘラミガキ(横) 浮線文系土器	2(526)
52	1	28	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	口径:35.4cm(1/8) 残存高:12.8cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(横)・刻目貼付 突帯・ヘラケズリ(斜め)か 内:板ナデ(横) 〈A-2類・2-1型・a型・大D字形〉(口縁部) 〈A-2類・-・c型・大D字形〉(肩部)	286(694 695)
52	2	29	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	口径:24.6cm (1/10) 残存高:5.3cm	外:刻目貼付突帯・指押さえ・板ナデ(横)・ スス附着内:板ナデ(横) 〈B(A)-2類・2-2型・c型・小D字形〉	219(528)
52	3	28	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	口径:24.8cm(1/6) 残存高:13.6cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(横)・刻目貼付突 帯・ヘラケズリ(横)後ヘラナデ(横～斜め) 内:板ナデ(横) 〈A-3類・1-2型・a型・大D字形〉(口縁部) 〈A-3類・-・a型・小D字形〉(肩部)	405(665 684)
52	4	29	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	口径:25.0cm(1/8) 残存高:5.3cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(横)・工具痕 内:板ナデ(横) 〈A-3類・2-2型・b-1型・小V字形〉	260(518)
52	5	28	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	口径:30.6cm(1/3) 残存高:12.0cm	外:刻目貼付突帯・指押さえ・板ナデ(横)・ 刻目貼付突帯・ヘラケズリ(横)・スス附着 内:板ナデ(横・斜め)・スス附着 〈A-4類・1-2型・b-2型・大D字形〉(口縁部) 〈A-4類・-・b-2型・大D字形〉(肩部)	242(527)
52	6	29	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	口径:34.6cm (1/11) 残存高:4.3cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(横)・スス附着 内:板ナデ(横)・スス附着 〈A-4類・2-2型・b-2型・小D字形〉	186(677)
52	7	29	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	口径:32.6cm (1/10) 残存高:5.75cm	外:刻目貼付突帯・ナデ・板ナデ(横)後ナ デ・スス附着 内:工具ナデ・板ナデ(横) 〈A-4類・2-1型・c型・小D字形〉	168(528 532)

挿図 図	番号	写真 図版	器種	層序	遺構	時期	法量	特徴	実測番号 (登録番号)
52	8	29	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	口径:16.6cm (1/10) 残存高:6.2cm	外:刻目貼付突帯・ヘラケズリ(縦)・スス 附着 内:板ナデ(縦)後細い板ナデ(横)・スス付 着 〈B-3類・2-2型・a型・小V字形〉	172(528)
52	9	29	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	口径:17.8cm(1/9) 残存高:4.3cm	外:ナデ・刻目貼付突帯・板ナデ(横)・スス 附着 内:磨減 〈B-3類・2-2型・b-2型・小D字形〉	279(687)
52	10	29	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	口径:21.6cm (1/12)残存高:4.8 cm	外:刻目貼付突帯・ヨコナデ・ヘラケズリ (横) 内:板ナデ(横) 〈B-3類・3型・c型・小D字形〉	254(503)
52	11	29	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	口径:24.2cm(1/8) 残存高:4.1cm	外:刻目貼付突帯・ヘラケズリ(横) 内:ナデ(縦)後板ナデ(斜め・横) 〈B-3類・2-2型・c型・小D字形〉	248(494)
52	12	29	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	口径:23.4cm (1/12) 残存高:5.4cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(斜め)・スス付 着 内:板ナデ(横) 〈B-2類・1-2型・a型・小D字形〉	232(523)
52	13	29	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	口径:21.8cm (1/10) 残存高:3.15cm	外:ヨコナデ・刻目貼付突帯・ヨコナデ・板 ナデ(縦)・スス附着 内:板ナデ(横) 〈B-4類・1-2型・a型・大D字形〉	206(527)
52	14	29	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	口径:18.0cm(1/9) 残存高:2.85cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(横) 内:板ナデ(横) 〈B-4類・1-2型・b-1型・小D字形〉	281(687)
52	15	29	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	口径:16.2cm (1/10) 残存高:5.0cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(縦・一部横)内: 板ナデ(横) 〈B-4類・1-2型・b-1型・小V字形〉	196(677)
52	16	29	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	口径:13.6cm(1/9) 残存高:3.9cm	外:刻目貼付突帯・ヘラケズリか(横)・ス ス附着 内:板ナデ(横)・スス附着 〈B-4類・3型・b-1型・小D字形〉	280(687)
52	17	29	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	口径:14.0cm(1/8) 残存高:3.5cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(横) 内:板ナデ(横) 〈B-4類・1-2型・b-2型・小O字形〉	287(694)
52	18	29	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	口径:34.2cm (1/10) 残存高:3.5cm	外:刻目貼付突帯(口縁部2条)・板ナデ (横)・黒斑 内:板ナデ(横) 〈C類・2-2型・c型・小D字形〉	289(695)
52	19	29	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	口径:16.0cm (1/10) 残存高:2.35cm	外:貼付突帯・板ナデ(横) 内:板ナデ(横) 〈B-4類・2-2型・b-2型・無〉	291(728)
52	20	29	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半	口径:21.0cm(1/4) 残存高:7.5cm	外:貼付突帯・ヘラケズリ(斜め) 内:板ナデ(横)	241(523)
53	1	30	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:4.6cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(横)・スス附着 内:板ナデ(横) 〈A-2類・2-1型・a型・小D字形〉	189(665)
53	2		縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:3.5cm	外:刻目貼付突帯・ナデ・スス附着 内:板ナデ(斜め~横)・スス附着 〈-・1-2型・b-2型・小D字形〉	173(528)

挿図 図	番号	写真 図版	器種	層序	遺構	時期	法量	特徴	実測番号 (登録番号)
53	3	30	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:5.5cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(横) 内:板ナデ(横) 〈B(A)-2類・2-2型・c型・小O字形〉	288(694)
53	4	30	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:6.6cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(横・斜め) 内:板ナデ(横) 〈A-2類・2-2型・a型・小V字形〉	278(520)
53	5	30	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:9.3cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(横)・刻目貼付 突帯・ヘラケズリ(横) 内:板ナデ(横) 〈A-2類・2-2型・a型・小D字形〉(口縁部) 〈A-2類・-・b-1型・小D字形〉(肩部)	293(529)
53	6		縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:3.75cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(横)・スス付着 内:板ナデ(横) 〈-・2-2型・b-1型・大V字形〉	188(673)
53	7		縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:2.9cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(横) 内:板ナデ(横) 〈-・2-2型・c型・小D字形〉	275(686)
53	8		縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:5.4cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(横)・スス付着 内:板ナデ(横) 〈-・2-2型・b-1型・小D字形〉	267(519)
53	9	30	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:7.3cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(横) 内:板ナデ(横) 〈A-3類・2-2型・b-2型・小D字形〉	227(522)
53	10	30	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:7.7cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(横) 内:板ナデ(横) 〈A-2類・2-2型・c型・小D字形〉	273 (686694)
53	11	30	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (船橋式か)	残存高:5.6cm	外:刻目貼付突帯・スス付着 内:板ナデ(横) 〈-・1-1型・b-1型・大D字形〉	212(527)
53	12		縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:5.6cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(斜め)・スス付着 内:板ナデ(横) 〈A-3類・1-2型・b-1型・小V字形〉	240(523)
53	13	30	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:4.9cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(斜め) 内:板ナデ(横)後ナデ 〈A-3類・2-2型・a型・-〉	255(503)
53	14		縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:2.5cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(横)・スス付着 内:板ナデ(横) 〈-・2-2型・a型・小O字形〉	231(522)
53	15		縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:3.4cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(横) 内:ナデ 〈-・2-2型・a型・小D字形〉	250(494)
53	16		縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:2.7cm	外:刻目貼付突帯・ヘラケズリ(横)・スス 付着 内:板ナデ(横) 〈-・2-2型・b-2型・-〉	192(665)
53	17	30	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:5.2cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(横) 内:板ナデ(横) 〈A-3類・2-2型・a型・小D字形〉	271(686)

挿図 図	番号	写真 図版	器種	層序	遺構	時期	法量	特徴	実測番号 (登録番号)
53	18	30	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:6.0cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(横) 内:板ナデ(横) 〈A-2類・2-2型・a型・小D字形〉	270(521)
53	19		縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:3.6cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(横) 内:磨減 〈-・2-2型・b-1型・小D字形〉	234(528)
53	20		縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:5.8cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(横) 内:板ナデ(横) 〈A-3類・2-2型・a型・小V字形〉	266(518)
53	21		縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:4.7cm	外:刻目貼付突帯・板ナデか 内:板ナデ(横) 〈-・2-2型・b-1型・小D字形〉	268(519)
53	22	30	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:5.4cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(横) 内:板ナデ(横) 〈A-3類・2-2型・b-1型・小O字形〉	235(528)
53	23	30	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:8.3cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(縦) 内:板ナデ(斜め・横) 〈A-3類・2-2型・a型・小V字形〉	246(488)
53	24	30	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:8.0cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(斜め・縦) 内:板ナデ(横) 〈A-3類・2-2型・b-2型・小O字形〉	252(494)
53	25	30	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:3.6cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(斜め) 内:ヨコナデ・板ナデ(横) 〈-・2-2型・c型・小O字形〉	249(494)
53	26		縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:4.45cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(横)・スス付着 内:板ナデ(斜め)・口縁端部スス付着 〈-・2-2型・a型・小D字形〉	187(665)
53	27		縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:3.8cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(横) 内:板ナデ(横) 〈-・2-2型・b-1型・小D字形〉	285(694)
53	28		縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:3.2cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(横)・スス付着 内:板ナデ(斜め) 〈-・2-2型・a型・小D字形〉	238(528)
53	29	30	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:4.4cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(横)・スス付着 内:板ナデ(横) 〈A-4類・1-2型・a型・小V字形〉	229(522)
53	30		縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:3.5cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(横) 内:板ナデ(横) 〈-・2-2型・b-1型・小D字形〉	230(522)
53	31	30	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:6.6cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(横)・スス付着 内:板ナデ(横) 〈A-3類・2-2型・c型・小D字形〉	269(520)
53	32		縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:6.7cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ・スス付着 内:板ナデ(横) 〈A-3類・3型・c型・小D字形〉	221(528)

挿図 図	番号	写真 図版	器種	層序	遺構	時期	法量	特徴	実測番号 (登録番号)
53	33		縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:3.8cm	外:刻目貼付突帯・板ナデか 内:板ナデ(横) <B-4類・2-2型・b-2型・小O字形>	290(695)
53	34		縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:3.5cm	外:刻目貼付突帯・磨滅 内:板ナデ(横) <-・2-2型・b-1型・小V字形>	253(495)
53	35		縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:3.3cm	外:刻目貼付突帯・ヘラケズリ(横)・黒斑 内:板ナデ(横) <-・2-2型・b-1型・大D字形>	207(527)
53	36	30	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:8.5cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(横)・板ナデ (横)後一部ヘラミガキ(斜め)・スス付着 内:板ナデ(横)後指ナデ・ナデ <A-4類・2-2型・a型・小D字形>	265(503)
53	37	30	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:9.2cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(縦) 内:板ナデ(横) <B-4類・2-1型・b-2型・小D字形>	251(494)
53	38		縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:4.0cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(横)・指押さえ 内:板ナデ(横) <A(B)-4類・2-2型・b-2型・小D字形>	199(682)
53	39		縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:4.3cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(横)・黒斑 内:板ナデ(横) <A(B)-4類・2-1型・a型・小D字形>	224(522)
53	40	31	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:5.45cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(横) 内:板ナデ(横) <A-4類・2-2型・b-2型・小D字形>	201 (682 686 694)
53	41		縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:4.65cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(横)・スス付着 内:板ナデ(横) <B-4類・2-2型・b-1型・小V字形>	184(677)
53	42	31	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:5.25cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(縦後横) 内:板ナデ(横) <A-4類・2-2型・a型・小D字形>	200(684)
53	43		縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:2.6cm	外:刻目貼付突帯・ヘラケズリ(斜め)・ス ス付着 内:板ナデか <B-4類・2-2型・c型・小O字形>	282(687)
53	44		縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:3.75cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(横) 内:板ナデ(横) <B-4類・2-2型・c型・小O字形>	185(666)
53	45		縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:4.1cm	外:刻目貼付突帯・ナデ・ヘラケズリ(横)・ スス付着 内:板ナデ(横) <B-4(3)類・2-2型・c型・小D字形>	208(527)
53	46		縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:3.9cm	外:刻目貼付突帯・板ナデか 内:板ナデ(横) <B-4(3)類・2-2型・b-2型・小D字形>	274(686)
53	47	31	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:2.7cm	外:刻目貼付突帯(口縁部2条)・板ナデ (横)・黒斑 内:板ナデ(横) <C類・2-2型・b-1型・小O字形>	203(684)

挿図 図	写真 図版 番号	器種	層序	遺構	時期	法量	特徴	実測番号 (登録番号)
53	48	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:3.35cm	外:刻目(口縁端部)・刻目貼付突帯・板ナ デ(横)・スス附着 内:板ナデ(横) 〈D類・-・b-1型・小D字形〉	198(681)
53	49	31 縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:6.2cm	外:刻目(口縁端部)・刻目貼付突帯・板ナ デ(横) 内:板ナデ(横) 〈D類・-・a型・小D字形〉	264(503)
53	50	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:5.2cm	外:刻目(口縁端部)・刻目貼付突帯・板ナ デ(横)・スス附着 内:板ナデ(横) 〈D類・-・a型・小V字形〉	272(686)
53	51	31 縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:4.6cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(横)・ヘラケズ リ(縦) 内:板ナデ(横) 〈B-4類・3型・c型・小V字形〉	402(687)
53	52	31 縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:6.2cm	外:刻目貼付突帯・ヘラケズリ(斜め～ 横)・スス附着 内:板ナデ(横・斜め) 〈B-4類・2-2型・c型・小D字形〉	209(528)
53	53	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:3.7cm	外:貼付突帯・板ナデ(横) 内:ナデ・指押さえ 〈B-4類・2-2型・d型・無〉	259(503)
53	54	31 縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:5.2cm	外:貼付突帯・スス附着 内:板ナデ(横)・板ナデ(斜め) 〈B-4類・1-2型・b-2型・無〉	195(677)
53	55	31 縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:4.1cm	外:貼付突帯・スス附着 内:板ナデ(横) 〈B-4(3)類・2-2型・b-2型・無〉	323(728)
53	56	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:5.3cm	外:貼付突帯・ヘラケズリ(斜め)・スス付 着 内:板ナデ(横)・スス附着 〈B-4類・1-2型・b-2型・無〉	225(522)
53	57	31 縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 〔水走タイプ〕	残存高:4.8cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(縦) 内:板ナデ(横)・ナデ 〈E類・1-3型・b-2型・小V字形〉	258(496)
54	1	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:3.6cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(横)・ナデ・スス 附着 内:板ナデ 〈-・-・a型・小D字形〉	175(528)
54	2	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:2.45cm	外:板ナデ(横)・刻目貼付突帯 内:板ナデ(横)・スス附着 〈-・-・b-1型・小D字形〉	178(528)
54	3	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:2.2cm	外:刻目貼付突帯・ヘラケズリ(横～斜 め)・スス附着 内:ナデ 〈-・-・a型・小V字形〉	171(528)
54	4	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:4.45cm	外:板ナデ(横)・刻目貼付突帯・ナデ 内:板ナデか 〈-・-・a型・小D字形〉	176(528)
54	5	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:4.5cm	外:板ナデ(横)・刻目貼付突帯 内:板ナデ(横) 〈-・-・c型・(小D)字形〉	169(528)

挿図 図	番号	写真 図版	器 種	層 序	遺 構	時 期	法 量	特 徴	実測番号 (登録番号)
54	6		縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:5.2cm	外:板ナデ(横)・刻目貼付突帯・ナデ・ヘラケズリ(横) 内:板ナデ(横) 〈---b-1型・(小O)字形〉	205(686)
54	7	31	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:8.3cm	外:板ナデ(縦)・刻目貼付突帯・ヘラケズリか 内:板ナデ(横) 〈A-3類・--a型・小D字形〉	194(677)
54	8		縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:4.0cm	外:板ナデ(横)・刻目貼付突帯・板ナデ(横 ~斜め)・スス付着 内:板ナデ(横) 〈---a型・小D字形〉	183(677)
54	9		縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:5.2cm	外:板ナデ(横)・刻目貼付突帯・ヘラケズリ(横) 内:板ナデ(横) 〈A-2類・--a型・小D字形〉	166(528)
54	10	31	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:5.1cm	外:板ナデ(横)・刻目貼付突帯・板ナデ(横) ・スス付着 内:板ナデ(横) 断面糊痕 〈A-3類・--b-1型・小V字形〉	204(684)
54	11	31	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:5.5cm	外:板ナデ(横)・刻目貼付突帯・ヘラケズリ(横)か・スス付着 内:板ナデ(横) 〈A-2類・--a型・小V字形〉	165(528 529)
54	12	31	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:5.0cm	外:板ナデ(横)・刻目貼付突帯・ヘラケズリ(横) 内:板ナデ(横) 〈A-3類・--a型・小D字形〉	220(528)
54	13		縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:3.1cm	外:板ナデ(横)・刻目貼付突帯・ヘラケズリ(横)・スス付着 内:板ナデ(斜め) 〈---a型・小D字形〉	170(528)
54	14		縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:4.0cm	外:板ナデ(横)・刻目貼付突帯・ヘラケズリ(横)・スス付着 内:板ナデ(横) 〈---b-1型・小V字形〉	167(528)
54	15		縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:2.2cm	外:板ナデ(横)・刻目貼付突帯・スス付着 内:板ナデか 〈---a型・小O字形〉	164(528)
54	16		縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:4.0cm	外:刻目貼付突帯・ヘラケズリか・スス付着 内:板ナデ(横) 〈A-2類・--a型・-〉	218(527)
54	17		縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:3.4cm	外:板ナデ(横)・刻目貼付突帯・板ナデ(横)・スス付着 内:板ナデ(横)か・スス付着 〈---b-1型・小D字形〉	174(528)
54	18		縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:5.85cm	外:板ナデ(横)・刻目貼付突帯・スス付着 内:板ナデ(横)・こげ付着 〈A-3類・--b-1型・小D字形〉	177(528)
54	19	31	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:9.3cm	外:板ナデ(横)・刻目貼付突帯・ヘラケズリ(横) 内:板ナデ(横) 〈A-2類・--a型・大D字形〉	222(527)
54	20	31	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:8.7cm	外:刻目貼付突帯・ヘラケズリ(横)・スス付着 内:板ナデ(横) 〈---a型・小D字形〉	211(528)

挿図 図	写真 番号	器種	層序	遺構	時期	法量	特徴	実測番号 (登録番号)
54	21	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	突帯部径:28.6cm (1/9) 残存高:6.6cm	外:板ナデ(横)一部ヘラミガキ(斜め)・刻 目貼付突帯・穿孔1(外・内から) 内:板ナデ(横) 〈A-2類・-・b-1型・(小O)字形〉	277(518)
54	22	31 縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:6.5cm	外:板ナデ(横)・刻目貼付突帯・ヘラケズ リ(斜め)・スス付着 内:板ナデ(横) 〈A-3類・-・a型・小V字形〉	228(522)
54	23	31 縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:8.8cm	外:・板ナデ(横)・刻目貼付突帯・ヘラケズ リ(斜め) 内:板ナデ(横)・スス付着 〈A-3類・-・b-1型・小D字形〉	193(673)
54	24	32 縄文土器 鉢か		339落ち込み	縄文晩期後半	残存高:2.9cm 底径:4.25cm(完)	外:板ナデ(縦)・ヘラケズリ(縦)・ナデ・底 面ナデか 内:ナデ	144(686)
54	25	32 縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半	残存高:4.6cm 底径:5.9cm(完)	外:ヘラケズリ(縦)・底面ナデ 内:ナデ	112(527)
54	26	32 縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半	残存高:3.2cm 底径:6.6cm(完)	外:ヘラケズリ(縦)・ナデ・スス付着・底面 ナデ 内:ナデ・スス付着	104(527)
54	27	縄文土器 深鉢 か		339落ち込み	縄文晩期後半	残存高:4.45cm 底径:7.2cm(1/4)	外:ヘラケズリ(縦)・ナデ・スス付着・底面 ナデ 内:板ナデ(縦・斜め)・ナデ	114(523)
54	28	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半	残存高:3.4cm 底径:5.7cm(完)	外:ヘラケズリ(横)・底面板ナデ・黒斑 内:板ナデ(横)・スス付着	335(486)
54	29	32 縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半	残存高:2.7cm 底径:5.8cm(完)	外:ヘラケズリ(縦)・ナデ・スス付着・底面 ナデか 内:ナデか	103(527)
54	30	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半	残存高:3.0cm 底径:6.7cm(完)	外:ヘラケズリ(縦)・板ナデ(縦)・ナデ・底 面ナデ 内:ナデ	101(528)
54	31	32 縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半	残存高:5.1cm 底径:6.3cm(完)	外:ヘラケズリ(縦)・板ナデ(縦)・底面ナ デか 内:板ナデ(横)か・スス・炭化物付着	108(503)
54	32	32 縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半	残存高:5.25cm 底径:7.15cm(完)	外:ヘラケズリ(縦)後一部ヘラミガキ (横)・ナデ・底面ナデか 内:ナデ	98(527)
54	33	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半	残存高:3.7cm 底径:5.7cm(完)	外:ヘラケズリ(縦)・スス付着・底面ナデ 内:ナデ・こげ付着	102(528)
54	34	32 縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半	残存高:3.3cm 底径:6.2cm(完)	外:ヘラケズリ(縦)・ナデ・底面ナデか 内:ナデ・こげ付着	109(522)
54	35	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半	残存高:2.5cm 底径:7.1cm(1/3)	外:ヘラケズリ(斜め)・ナデ・スス付着・底 面ナデ 内:欠損	131(482)



挿図 図	写真 図版 番号	器種	層序	遺構	時期	法量	特徴	実測番号 (登録番号)
54	36	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半	残存高:4.2cm 底径:9.4cm(1/5)	外:ヘラケズリ(斜め~縦)・ナデ・底面未調整 内:表面剥離・こげ付着	215(503)
54	37	32 縄文土器 深鉢 か		339落ち込み	縄文晩期後半	残存高:2.45cm 底径:6.15cm(完)	外:ヘラケズリ(縦)・底面ナデ 内:板ナデ(横)・ナデ・スス付着	100(528)
54	38	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半	残存高:2.1cm 底径:7.1cm(1/10)	外:ヘラケズリ(斜め)後ナデ・底面ナデか 内:板ナデ(横)	159(695)
54	39	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半	残存高:2.95cm 底径:6.05cm(完)	外:ヘラケズリ(縦)・底面板ナデ・こげ付着 内:板ナデ(横)・ヘラナデ(横)・スス付着	292(529)
54	40	32 縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半	残存高:3.85cm 底径:6.35cm(完)	外:ヘラケズリ(縦)・一部工具ナデ・底面ナデ 内:板ナデ(縦)・ナデ	99(527)
54	41	32 縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半	残存高:2.65cm 底径:6.5cm(完)	外:ヘラケズリ(斜め)・板ナデ(縦)・底面ナデ 内:板ナデか	149(686)
54	42	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半	残存高:3.2cm 底径:8.3cm(1/4)	外:ヘラケズリか・黒斑 内:ナデ・スス付着	115(523)
54	43	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半	残存高:2.9cm 底径:5.7cm(完)	外:ヘラケズリ(縦)・ナデ・底面ナデ 内:ナデ・スス付着	110(522)
54	44	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半	残存高:2.85cm 底径:8.4cm(完)	外:ヘラケズリ(斜め~縦)・ナデ・底面ヘラケズリ後ナデか 内:ナデ・板ナデ(横)	156(687)
54	45	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半	残存高:1.75cm 底径:7.0cm(1/2)	外:ヘラケズリ(縦・横)・底面ナデ 内:ハケ(斜め~横)後ヘラミガキ(横・縦)	143(528)
54	46	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半	残存高:2.7cm 底径:6.7cm(完)	外:板ナデ(縦)・ヘラケズリ(縦)・底面板ナデ・ナデ 内:ナデ	154(688)
54	47	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半	残存高:2.1cm 底径:6.0cm(1/4)	外:ヘラケズリ(縦)・ナデ・底面板ナデ 内:板ナデ(横)・スス付着	400(681)
54	48	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半	残存高:3.7cm 底径:5.1cm(完)	外:ヘラケズリ(縦)・ナデ・底面ナデ 内:ナデ・板ナデ(横)・スス付着	128(487)
54	49	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半	残存高:4.2cm 底径:6.4cm(完)	外:板ナデ(縦)・ヘラケズリ(縦)・黒斑・底面板ナデ 内:ナデ・板ナデ(横)	127(482)
54	50	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半	残存高:4.35cm 底径:6.15cm(完)	外:ヘラケズリ(斜め)・板ナデ(斜め)・底面工具ナデ・工具痕 内:指押さえ後ナデ・スス付着	150(686)

挿図 図	写真 番号	写真 図版	器 種	層 序	遺 構	時 期	法 量	特 徴	実測番号 (登録番号)
54	51		縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半	残存高:2.3cm 底径:5.3cm(1/4)	外:ヘラケズリ(縦)・黒斑・底面ナデ 内:板ナデ(縦)・ナデ	155(694)
54	52		縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半	残存高:1.7cm 底径:5.6cm(1/4)	外:板ナデ(縦)・ヘラケズリ(縦)・底面ヘ ラケズリ・こげ付着 内:板ナデ(斜め~縦)・スス付着	161(687)
54	53		縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半	残存高:1.7cm 底径:4.3cm(完)	外:ヘラケズリ(縦)後ナデ・底面ナデ 内:ナデ・スス付着	129(496)
54	54		縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半	残存高:1.65cm 底径:5.2cm(1/5)	外:ヘラケズリ(縦)・底面ナデ・工具痕 内:板ナデ(縦)	162(687)
54	55		縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半	残存高:2.7cm 底径:5.35cm(完)	外:ヘラケズリ(縦)・ナデ・底面板ナデ 内:板ナデ(横)	399(681)
54	56		縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半	残存高:3.7cm 底径:4.8cm(完)	外:ヘラケズリ(斜め~縦)・底面ナデ 内:板ナデ(横)・こげ付着	120(522)
54	57		縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半	残存高:2.45cm 底径:5.3cm(完)	外:ヘラケズリ(縦)・板ナデ(縦)・底面ナ デ 内:ナデか	134(495)
54	58	32	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半	残存高:2.35cm 底径:5.3cm(完)	外:ヘラケズリ(縦)・板ナデ(縦)・スス付 着・底面板ナデ 内:板ナデ(縦)・ナデ後板ナデ(縦)	334(486)
54	59	32	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半	残存高:2.8cm 底径:5.95cm	外:ヘラケズリ(縦)・板ナデ(縦)・スス付 着・底面ナデ・黒斑 内:ナデ・板ナデ(横)	133(494)
55	1	32	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半	残存高:3.0cm 底部(完)	外:ヘラケズリ(縦)・スス付着 内:ナデか・スス付着	106(522)
55	2		縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半	残存高:3.0cm 底部(完)	外:ヘラケズリ(縦) 内:ナデ	137(494)
55	3		縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半	残存高:2.0cm 底部(完)	外:ヘラケズリ(縦) 内:板ナデ(縦・横)・こげ付着	123(522)
55	4		縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半	残存高:2.7cm 底部(完)	外:ヘラケズリ(縦)か 内:ナデ	140(695)
55	5	32	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半	残存高:3.35cm 底径:1.4cm(完)	外:ヘラケズリ(縦)・底面ナデか 内:板ナデか	336(486)
55	6		縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半	残存高:3.25cm 底径:3.0cm(1/4)	外:板ナデか 内:ナデ	135(496)

挿図 図	番号	写真 図版	器種	層序	遺構	時期	法量	特徴	実測番号 (登録番号)
55	7		縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半	残存高:1.8cm 底径:2.1cm(完)	外:ヘラケズリ(縦)・一部板ナデ 内:ナデ・一部板ナデ	125(522)
55	8	32	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半	残存高:2.95cm 底径:3.05cm(完)	外:ヘラケズリ(縦) 内:板ナデ(縦)か	142(695)
55	9		縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半	残存高:2.4cm 底部(1/5)	外:ヘラケズリ(縦) 内:板ナデ(斜め～横)・スス付着	130(482)
55	10		縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半	残存高:2.6cm 底部(1/5)	外:板ナデか 内:ナデ・スス付着	157(694)
55	11	33	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文後期	口径:37.6cm (1/10) 残存高:7.5cm	外:板ナデ(横)・スス付着 内:板ナデ(横)	202(684)
55	12	33	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文後期中葉	口径:30.0cm(1/8) 孔径:1.3～0.5mm 残存高:7.1cm	外:板ナデ(横)・条痕・スス付着 内:板ナデ(横)有孔1(内外面穿孔)	294(529)
55	13	33	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文後期中葉	残存高:6.4cm	外:条痕(横～斜め)・ヨコナデ 内:板ナデか	191(676)
55	14	33	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文後期	残存高:4.3cm	外:板ナデ(縦)・一部斜め 内:板ナデ(横)	233(528)
55	15	33	縄文土器 深鉢		339落ち込み	縄文晩期後半	口径:11.0cm(1/8) 残存高:4.3cm	外:貼付突帯・板ナデ(横)・スス付着 内:板ナデ(斜め～横)・スス付着	190(677)
55	16	33	縄文土器 壺		339落ち込み	縄文晩期	口径:12.8cm(1/8) 残存高:5.05cm	外:貼付突帯・ヨコナデ・板ナデ(横)・黒色 物質塗布 内:板ナデ(横)	210(527)
55	17	33	縄文土器 壺		339落ち込み	縄文晩期前半	残存高:2.0cm 底径:6.1cm(完)	外:板ナデ(縦)・底面板ナデ 内:板ナデか	329(428)
55	18	33	縄文土器 壺		339落ち込み	縄文晩期後半	残存高:2.4cm 底径:7.0cm(1/4)	外:ナデ・工具ナデ・底面ナデ 内:ナデ	141(747)
55	19	33	縄文土器 浅鉢		339落ち込み	縄文晩期	口径:12.4cm(1/8) 残存高:4.3cm	外:ヘラナデ(横)・ヘラケズリ(斜め)・ス ス付着 内:ヘラナデ(横)・ヘラケズリ(横)	182(676)
55	20	33	縄文土器 浅鉢		339落ち込み	縄文後期中葉 (元住吉山Ⅰ 式)	残存高:4.6cm	外:ヘラミガキ(横)後擬縄文(巻貝)・沈線 2・連弧文・黒色物質塗布 内:ヘラミガキ(横) 有文土器	555(495)
55	21	33	縄文土器 浅鉢		339落ち込み	縄文	残存高:3.6cm	外:ヘラケズリか・スス付着 内:板ナデ(横)	217(527)

挿図 図	番号	写真 図版	器種	層序	遺構	時期	法量	特徴	実測番号 (登録番号)
55	22	33	縄文土器 浅鉢		339落ち込み	縄文	残存高:3.0cm	外:ナデ・スス付着 内:ナデ	237(528)
55	23	33	縄文土器 浅鉢		339落ち込み	縄文	口径:18.6cm (1/10) 残存高:4.1cm	外:刻目か・板ナデ(斜め)後ヘラミガキ (横)・沈線2 内:板ナデ(縦・横)後ヘラミガキ(縦・横)	180(665)
55	24	33	縄文土器 注口 土器		339落ち込み	縄文後期中葉 (元住吉山Ⅱ式)	胴径:26.6cm (1/10) 残存高:5.3cm	外:沈線1・黒色物質塗布 内:板ナデ(横)	333(486)
55	25	33	縄文土器 浅鉢 か		339落ち込み	縄文後期か	残存高:2.5cm 底径:5.6cm(1/4)	外:板ナデ(斜め) 内:板ナデ(横)	214(519)
55	26	33	縄文土器 浅鉢		339落ち込み	縄文晩期か	残存高:3.15cm 底部(完)	外:ヘラケズリ後ヘラミガキ(横) 内:ヘラミガキ(縦・横)・底面赤彩か黒色 磨研土器	146(530)
56	1	34	猪牙製装身具		339落ち込み	縄文晩期	長:8.5cm 最大幅:1.9cm 最大厚:0.27cm	穿孔4	1(570)
56	2	34	容器形土製品か		339落ち込み	縄文晩期	残存高:6.3cm	手づくね・ナデ 脚部3脚残存	546(629 523)
56	3	34	土偶		339落ち込み	縄文晩期	残存高:3.8cm	ナデ・板ナデ 底面一部板ナデ	472(528)
56	4		土偶		339落ち込み	縄文晩期	残存高:2.5cm	右足部分	548(486)
56	5	34	舟形土製品		339落ち込み	縄文晩期	残存高:4.0cm	外:ヘラミガキ(横) 内:ナデ	470(695)
56	6		縄文土器 深鉢 ミニチュア土器		339落ち込み	縄文晩期	残存高:6.1cm	外:ヘラケズリ(縦)・板ナデ(縦) 内:板ナデ(横)・ナデ・底部付近ヘラナデ (縦)	468(686)
56	7		ミニチュア土器		339落ち込み	縄文晩期	残存高:1.8cm 底径:3.4cm(1/2)	外:板ナデ(斜め)・刺突痕内:板ナデ(横)	124(518)
56	8		ミニチュア土器		339落ち込み	縄文晩期	残存高:2.7cm 底径:2.4cm(1/4)	外:一部板ナデ(縦)か・線刻 内:板ナデ(横)	553(488)
56	9	34	円板		339落ち込み	縄文晩期	残存長:4.0×3.3cm	外:沈線文・ナデ 内:ナデ後板ナデ	552(480)
56	10	34	円板		339落ち込み	縄文晩期	残存長:2.4×3.3cm	外:磨滅 内:板ナデ(横)か 焼成前穿孔	547(694)

挿図 図	番号	写真 図版	器種	層序	遺構	時期	法量	特徴	実測番号 (登録番号)
57	1	34	弥生土器 広口壺	第14-1面		弥生前期中葉	頸部径:11.6cm 最大胴部径:44.8cm 残存高:42.3cm 底径:11.0cm	外:板ナデ後ヘラミガキ(横・斜め・縦)・沈線4・ヘラミガキ(横・斜め・縦) 内:ヘラミガキ(横)・板ナデ(横)	44(392・456・484・485・497・502・508・548)
57	2	34	弥生土器 広口壺	第14-1層		弥生前期中葉	口径:6.0cm(1/2) 残存高:5.0cm	外:ヨコナデ・ヘラミガキ(縦)・沈線5残存重弧文 内:ヘラミガキ(横)	469(568)
57	3	34	弥生土器 広口壺	第14-1層		弥生前期後半	体部最大径:12.6cm(1/4) 残存高:9.0cm	外:ヘラミガキ(横)・沈線2 内:ヘラミガキ(横)・板ナデ(縦・横)	408(568)
57	4		弥生土器 広口壺	第14-1層か		弥生前期後半～中期前葉	残存高:5.0cm	外:板ナデ(横)・沈線3残存・工具痕 内:板ナデ(横)	401(693)
57	5	34	弥生土器 広口壺	第14-1面		弥生前期後半～中期前葉	残存高:8.4cm	外:ヘラミガキ(横)・沈線7残存 内:ナデか	337(510)
57	6	34	弥生土器 壺蓋	第14-1層		弥生前期	残存長:5.4cm	外:線刻 内:線刻・板ナデ・ナデ	549(574)
57	7	35	弥生土器 広口壺	第14-1層		弥生前期中葉	残存高:10.4cm 底径:9.3cm(3/4)	外:ヘラミガキ(横)・スス付着・底面ヘラミガキ 内:ヘラミガキ(縦・横)・板ナデ(縦・横)	407(574)
57	8		弥生土器 広口壺	第14-1層		弥生前期中葉	残存高:6.7cm 底径:11.6cm(1/3)	外:ヘラミガキ(斜め)板ナデ(縦)・底面ヘラミガキ 内:板ナデ(斜め)後ヘラミガキ(横・斜め)	432(576)
57	9		弥生土器 甕	第14-1層		弥生前期	残存高:3.0cm 底径:5.6cm(1/4)	外:ナデ・底面ナデ 内:ナデ	147(665)
57	10		弥生土器 広口壺	第14-1層		弥生前期	残存高:3.2cm 底径:7.6cm(1/4)	外:板ナデ(横)・底面板ナデ 内:板ナデ(横)	316(535)
57	11	35	弥生土器 小型壺	第14-1層		弥生後期	残存高:3.3cm 底径:2.7cm(完)	外:ヘラミガキ(横)・底面ナデか・糊圧痕 内:板ナデ(縦)	317(547)
57	12	35	弥生土器 甕	第14-1層		弥生前期	残存高:2.5cm 底径:6.2cm(完)	外:板ナデ(縦)・底面ヘラケズリか 内:剥離	386(561)
57	13		弥生土器 甕	第14-1層		弥生前期	残存高:2.2cm 底径:5.8cm(1/4)	外:板ナデ(縦)・底面板ナデ 内:板ナデ(横)	392(564)
57	14		弥生土器 甕	第14-1層		弥生前期	残存高:5.2cm 底径:4.8cm(1/2)	外:板ナデ(縦)・磨滅・底面板ナデ 内:ナデ(縦)・磨滅	397(542)
57	15		弥生土器 甕か	第14-1層		弥生前期	残存高:1.6cm 底径:4.4cm(1/4)	外:板ナデ(縦)・底面板ナデか 内:板ナデ(横)	389(562)

挿図 図	写真 図版 番号	器種	層序	遺構	時期	法量	特徴	実測番号 (登録番号)
57	16	弥生土器 甕か	第14-1層		弥生前期	残存高:2.5cm 底径:3.8cm(1/6)	外:ヘラミガキ(斜め)・底面板ナデ 内:ナデ	435(588)
57	17	弥生土器 甕	第14-1層		弥生前期	残存高:2.2cm 底径:8.6cm(1/8)	外:磨減 内:磨減	391(564)
57	18	弥生土器 甕	第14-1面		弥生前期	残存高:3.1cm 底径:6.6cm(完)	外:板ナデ(縦)・スス付着 内:板ナデ・スス付着	304(449)
58	1	縄文土器 深鉢	第14-1層		縄文晩期後半 (長原式)	口径:31.8cm(1/8) 残存高:11.3cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(横)・刻目貼付 突帯・ヘラケズリ(横) 内:板ナデ(横)焼成後穿孔1残存 〈A-1類・2-1型・a型・大D字形〉(口縁部) 〈A-1類・-・a型・小O字形〉(肩部)	358(558)
58	2	縄文土器 深鉢	第14-1層		縄文晩期後半 (長原式)	口径:27.0cm(1/8) 残存高:6.5cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(横)・磨減・黒斑 内:板ナデ(横) 〈A-2類・2-2型・b-1型・小D字形〉	383(559)
58	3	縄文土器 深鉢	第14-1層		縄文晩期後半 (長原式)	口径:34.6cm(1/5) 残存高:11.5cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(横)・刻目貼付 突帯・ヘラケズリ(横)・スス付着 内:板ナデ(横) 〈A-3類・2-2型・b-1型・小D字形〉(口縁部) 〈A-3類・-・b-1型・小D字形〉(肩部)	319(552)
58	4	縄文土器 深鉢	第14-1層		縄文晩期後半 (長原式)	口径:36.0cm(1/10) 残存高:4.3cm	外:刻目貼付突帯(口縁部2条)・板ナデ (横) 内:板ナデ(横)焼成前穿孔か1残存 〈C類・2-2型・c・b-1型・小O字形〉	363(538)
58	5	縄文土器 深鉢	第14-1層		縄文晩期後半 (長原式)	口径:18.2cm(1/8) 残存高:7.7cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(横)・スス付着 内:板ナデ(横) 〈B-2類・2-2型・b-2型・小D字形〉	318(552)
58	6	縄文土器 深鉢	第14-1層		縄文晩期後半 (長原式)	口径:18.4cm(1/8) 残存高:4.4cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(横) 内:板ナデ(横) 〈B-4類・2-2型・b-1型・-〉	351(558)
58	7	縄文土器 深鉢	第14-1層		縄文晩期後半 (長原式)	口径:20.8cm(1/8) 残存高:6.2cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(横)・スス付着 内:板ナデ(横) 〈B-4類・1-2型・b-2型・小D字形〉	385(559)
58	8	縄文土器 深鉢	第14-1層		縄文晩期後半 (長原式)	口径:24.0cm(1/8) 残存高:8.7cm	外:貼付突帯・ヘラナデ(横)・板ナデ(縦)・ スス付着 内:板ナデ(横) 〈B-4類・2-2型・b-2型・無〉	384(559)
58	9	縄文土器 深鉢	第14-1層		縄文晩期後半 (長原式)	口径:14.0cm(1/8) 残存高:4.2cm	外:貼付突帯・板ナデ(縦)内:板ナデ(横)・ スス付着 〈B-4類・2-2型・c型・無〉	325(535)
58	10	縄文土器 深鉢	第14-1層		縄文晩期後半 (長原式)	残存高:5.3cm	外:貼付突帯・板ナデ(斜め・横) 内:板ナデ(横) 〈B-4類・2-2型・b-2型・無〉	327(552)
58	11	縄文土器 深鉢	第14-1層		縄文晩期後半 (長原式)	残存高:8.2cm	外:刻目貼付突帯・磨減 内:磨減 〈A-1類・2-1型・a型・大D字形〉	320(553)
58	12	縄文土器 深鉢	第14-1層		縄文晩期後半 (長原式)	残存高:8.7cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(横) 内:板ナデ(横) 〈A-3類・2-2型・b-1型・小D字形〉	431(574)

挿図 図	番号	写真 図版	器種	層序	遺構	時期	法量	特徴	実測番号 (登録番号)
58	13	36	縄文土器 深鉢	第14-1層		縄文晩期後半 (長原式)	残存高:9.3cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(横)・スス付着・ 刻目貼付突帯 内:板ナデ(横) 〈A-3類・2-2型・c型・小D字形〉(口縁部) 〈A-3類・-・b-1型・小O字形〉(肩部)	355(558)
58	14	37	縄文土器 深鉢	第14-1層		縄文晩期後半 (長原式)	残存高:4.5cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(横) 内:板ナデ(横)焼成前内外面から穿孔1残 存 〈A-3類・2-2型・b-1型・小D字形〉	350(558)
58	15	37	縄文土器 深鉢	第14-1層		縄文晩期後半 (長原式)	残存高:4.5cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(横)斜め・工具 痕・線刻 内:板ナデ(横) 〈B-4類・2-2型・b-1型・小O字形〉	352(564)
58	16	37	縄文土器 深鉢	第14-1層		縄文晩期後半 〔水走タイプ〕	残存高:3.7cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(横) 内:板ナデ(横)後ヘラミガキ(横) 〈E類・1-3型・b-1型・小D字形〉	326(536)
58	17	37	縄文土器 深鉢	第14-1層		縄文晩期後半 〔水走タイプ〕	残存高:7.4cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(横)後一部ヘラ ミガキ(横) 内:板ナデ(横)後ヘラミガキ(横) 〈E類・1-3型・b-1型・小V字形〉	434(577)
58	18	36	縄文土器 深鉢	第14-1層		縄文晩期後半 (長原式)	残存高:8.1cm	外:板ナデ(横)・刻目貼付突帯・ヘラケズ リ(横)・スス付着 内:板ナデ(横) 〈A-4類・-・b-1型・大D字形〉	356(558)
58	19	38	縄文土器 深鉢	第14-1層		縄文晩期後半	残存高:2.9cm 底径:4.2cm(完)	外:板ナデ(縦)・底面板ナデ 内:板ナデ(横)・底面ヘラナデ(縦)	379(558)
58	20	38	縄文土器 深鉢	第14-1層		縄文晩期後半	残存高:3.6cm 底径:6.4cm(完)	外:ヘラケズリ(縦)・底面板ナデ 内:板ナデ(横)	380(558)
58	21	38	縄文土器 深鉢	第14-1層		縄文晩期後半	残存高:3.2cm 底径:9.2cm(完)	外:ヘラケズリ(横)・ナデ・底面板ナデ 内:板ナデ(横)	478(715)
58	22	38	縄文土器 深鉢	第14-1層		縄文晩期後半	残存高:6.6cm 底径:7.0cm(1/2)	外:ヘラケズリ(縦)・板ナデ(縦)・スス付 着・底面板ナデ 内:板ナデ(斜め・縦)・スス付着	404(702)
58	23	38	縄文土器 深鉢	第14-1層		縄文晩期後半	残存高:2.8cm 底径:4.9cm(完)	外:ヘラケズリ(縦)・底面板ナデか 内:板ナデ(横)・スス付着	382(559)
58	24		縄文土器 深鉢	第14-1層		縄文晩期後半	残存高:2.0cm 底径:6.6cm(1/4)	外:ヘラケズリ(縦)・底面板ナデ 内:板ナデ(横)・スス付着	409(568)
58	25		縄文土器 深鉢	第14-1層		縄文晩期後半	残存高:2.1cm 底径:6.8cm(1/4)	外:板ナデ(横)か・磨減・底面板ナデ 内:磨減	410(568)
58	26		縄文土器 深鉢	第14-1層		縄文晩期後半	残存高:1.7cm 底径:6.4cm(1/4)	外:ヘラケズリ(縦)・底面板ナデ 内:板ナデ(横)	430(571)
58	27		縄文土器 深鉢	第14-1層		縄文晩期後半	残存高:1.5cm 底径:6.4cm(1/4)	外:板ナデ(縦)・底面板ナデ・靱圧痕 内:板ナデ(縦)	479(715)

挿図 図	写真 図版 番号	器種	層序	遺構	時期	法量	特徴	実測番号 (登録番号)
58	28	縄文土器 深鉢	第14-1層		縄文晩期後半	残存高:2.0cm 底径:7.0cm(1/3)	外:ヘラケズリ(縦)・底面板ナデ 内:板ナデ(横)	364(538)
58	29	縄文土器 深鉢	第14-1層		縄文晩期後半	残存高:1.6cm 底径:6.0cm(1/4)	外:板ナデ(縦)・底面板ナデか 内:板ナデ(縦)	433(577)
58	30	縄文土器 深鉢	第14-1層		縄文晩期後半	残存高:1.8cm 底径:7.4cm(1/4)	外:磨滅 内:板ナデ(横)・スス付着	303(446)
58	31	38 縄文土器 深鉢	第14-1層		縄文晩期後半	残存高:3.9cm 底径:5.5cm(完)	外:ヘラケズリ(縦)・底面板ナデか 内:板ナデ(横)	354(558)
58	32	38 縄文土器 深鉢	第14-1層		縄文晩期後半	残存高:3.6cm 底径:5.6cm(完)	外:ヘラケズリ(縦)・底面板ナデ 内:ナデ・スス付着・底部小枝痕か	381(559)
58	33	38 縄文土器 深鉢	第14-1層		縄文晩期後半	残存高:3.5cm 底径:6.1cm(完)	外:板ナデ(縦)・ヘラケズリ(縦)・底面板 ナデ 内:板ナデ(縦)・スス付着	393(564)
58	34	38 縄文土器 深鉢	第14-1層		縄文晩期後半	残存高:6.1cm 底径:6.2cm(完)	外:ヘラケズリ(縦)・底面板ナデか 内:板ナデ(横・斜め)・スス付着	353(558)
58	35	38 縄文土器 深鉢	第14層		縄文晩期後半	残存高:2.95cm 底径:8.5cm(1/2)	外:ヘラケズリか(斜め)・底面ヘラケズリ 痕 内:ナデ・指押さえ	366(328)
58	36	縄文土器 深鉢	第14-1層		縄文晩期後半	残存高:3.1cm 底部(1/2)	外:ヘラケズリ(縦)・ナデ 内:板ナデ(横)	398(550)
58	37	38 縄文土器 深鉢	第14-1層		縄文晩期後半	残存高:8.4cm 底部(完)	外:ヘラケズリ(縦) 内:板ナデ(縦)か・スス付着	322(552)
59	1	37 土偶	第14-1層		縄文晩期後半	全長:5.8cm 最大幅:4.55cm 最大厚:0.9cm 円孔直径:約0.2cm	外:左右円孔2(貫通)・中央部円孔1(未貫 通)・線刻・工具痕・指押さえ・ナデ 内:線刻・指押さえ・ナデ	244(565)
59	2	37 土偶	第14-1層		縄文晩期後半	最大幅:8.5cm 最大厚:1.8cm 残存長:6.2cm	外・内:ナデ・上半部欠損	471(590 591)
59	3	35 弥生土器 チュア壺	ミニ 第14層		弥生前期	口径:3.3cm(完) 器高:5.9cm 底径:2.9cm	外:一部板ナデ後ヘラミガキ(縦・横～斜 め)・黒斑・底面ナデ 内:ナデ(横)後一部ヘラミガキ(縦)	7(334)
60	1	弥生土器 鉢	第14層関連		弥生前期中葉	口径:30.0cm(1/7) 残存高:3.5cm	外:板ナデ(横)・板ナデ後ナデ・段 内:ヘラミガキ(横～斜め)・板ナデ(横)	14(653)
60	2	弥生土器 鉢	第14層関連		弥生前期中葉	口径:36.2cm(1/4) 残存高:4.45cm	外:板ナデ(横)・ヨコナデ・段 内:板ナデ(横～斜め)・一部ナデ(縦)	16(645)



挿図		写真 図版	器種	層序	遺構	時期	法量	特徴	実測番号 (登録番号)
図	番号								
60	3	35	弥生土器 広口壺	第14層関連		弥生前期中葉	口径:34.6cm(1/9) 残存高:5.55cm	外:刻目・沈線1・板ナデ(横)後ヘラミガキ(横)・段・沈線3 内:ヘラミガキ(横)・ナデ(縦)	261(653)
60	4	35	弥生土器 広口壺	第14層関連		弥生前期中葉	口径:44.4cm(1/6) 残存高:19.55cm	外:ヨコナデ・板ナデ(横)・段・板ナデ(横)後ヘラミガキ(横・縦) 内:板ナデ(横)後ヘラミガキ(横)・黒斑	297(658)
60	5		弥生土器 広口壺	第14層関連		弥生前期	残存高:7.3cm	外:沈線2・磨減 内:板ナデ(斜め)	15(653)
60	6		縄文土器 深鉢	第14層関連		縄文晩期後半(長原式)	残存高:7.4cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(横) 内:板ナデ(横)か (B-4類・2-2型・b-2型・(小O)字形)	13(653)
60	7	38	縄文土器 深鉢	第14層関連		縄文晩期前半	残存高:7.7cm 底径:7.65cm(1/2)	外:条痕後一部ヘラケズリ(縦)・底面ナデ 内:板ナデ(縦～横)・スス附着	10(653)
60	8		弥生土器 広口壺	第14層関連		弥生前期	残存高:13.5cm	外:板ナデ(斜め)後ヘラミガキ(斜め)・段 内:板ナデ後ヘラミガキ・黒斑	20(645)
60	9		弥生土器 甕	第14層関連		弥生前期中葉	残存高:14.5cm	外:沈線4・刺突文・板ナデ(横～斜め)後ヘラミガキ(縦～斜め)・黒斑 内:板ナデ(斜め)後ヘラミガキ	19(645)
60	10	35	弥生土器 広口壺	第14層関連		弥生前期	残存高:10.1cm 底径:10.15cm(完)	外:板ナデ(縦)後ヘラミガキ(横～斜め)・磨減・黒斑・底面板ナデ 内:ヘラミガキ(横～斜め)・ナデ・スス附着	12(653)
60	11	35	弥生土器 甕	第14層関連		弥生	残存高:6.8cm	外:タタキ(斜め)・ヨコナデ・綾杉文タタキ(7本/1.5cm) 内:磨減・スス附着	403(700)
60	12	38	縄文土器 深鉢	第14層関連		縄文晩期後半(長原式)	残存高:5.4cm	外:刻目貼付突帯(口縁端部2条)・板ナデ(横)・黒斑 内:板ナデ(横) (C類・2-2型・c・b-1型・小D字形)	307(451)
60	13	38	縄文土器 深鉢	第14層関連		縄文晩期後半(滋賀里IV式)	残存高:3.0cm	外:板ナデ(横・斜め)・ヘラケズリ(横)・スス附着 内:板ナデ(横)	627(452)
60	14	38	縄文土器 壺	第14層関連		縄文晩期後半	口径:13.6cm(1/7) 残存高:11.4cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(横・斜め・縦)・工具痕 内:板ナデ(横)	305(451)
60	15		弥生土器 壺	第14層関連		弥生前期	残存高:2.4cm 底径:10.4cm(1/10)	外:板ナデか・底面板ナデ 内:磨減	496(760)
60	16		弥生土器 甕	第14層関連		弥生前期	残存高:3.0cm 底径:7.0cm(1/3)	外・内:磨減	494(760)
60	17		弥生土器 壺か	第14層関連		弥生前期	残存高:1.3cm 底径:5.8cm(1/4)	外:板ナデ(縦)・底面板ナデか 内:板ナデ(横)	495(760)

挿図 図	番号	写真 図版	器種	層序	遺構	時期	法量	特徴	実測番号 (登録番号)
61	1	40	縄文土器 深鉢	第14-2層		縄文晩期後半 (長原式)	残存高:20.7cm 底径:6.1cm(完)	外:ヘラケズリ(斜め~縦)・スス附着 内:板ナデ(横)・一部ヘラミガキ(横)・ス ス附着	406(594)
61	2		縄文土器 深鉢	第14-2層		縄文晩期後半 (長原式)	残存高:2.9cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(横) 内:板ナデ(横) 〈-・2-2型・d型・小D字形〉	439(609)
61	3	40	弥生土器 鉢	第14-2層		弥生前期後半	口径:17.4cm(1/4) 残存高:7.9cm	外:ヘラミガキ(横) 内:ヘラミガキ(横)	493(757)
78	1	39	縄文土器 壺		447木棺墓(棺 外)	縄文晩期後半	口径:18.4cm(1/8) 残存高:6.5cm	外:貼付突帯・ナデ・板ナデ(横・一部縦)・ スス附着 内:板ナデ(横)	415(690)
78	2	39	縄文土器 深鉢		447木棺墓(棺 外)	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:5.4cm	外:刻目貼付突帯・ヘラミガキ(横)・スス 附着 内:板ナデ(横) 〈-・3型・b-1型・小O字形〉	414(690)
78	3	39	縄文土器 深鉢		459土坑	縄文晩期後半 (長原式)	突帯最大径:23.4 cm(1/8) 残存高:6.5cm	外:板ナデ(横)・刻目貼付突帯 内:板ナデ(横) 〈A-3類・-・b-1型・小D字形〉	417(623)
78	4	39	縄文土器 浅鉢		459土坑	縄文晩期後半	残存高:10.1cm 底径:6.4cm(完)	外:板ナデ(斜め~縦)・底面板ナデ 内:板ナデ(横)・スス附着	418(623)
78	5	39	縄文土器 小型 深鉢		459土坑	縄文晩期後半 (長原式)	口径:11.8cm(1/4) 残存高:4.2cm	外:刻目貼付突帯・穿孔1(外面から)・板ナ デ(横)・一部工具痕(縦~斜め) 内:板ナデ(横)・口縁端部沈線か 〈-・2-1型・d型・小V字形〉	395(623)
78	6	39	縄文土器 深鉢		459土坑	縄文晩期後半 (滋賀里IV式 か)	残存高:2.4cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(横) 内:板ナデ(横) 〈-・1-1型・b-1型・大D字形〉	396(652)
78	7	39	縄文土器 深鉢		459土坑	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:2.3cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(横)・スス附着 内:板ナデ(横) 〈-・2-2型・b-2型・小D字形〉	416(623)
78	8	39	縄文土器 深鉢		506土坑	縄文晩期後半 (長原式)	口径:23.6cm(3/5) 残存高:26.4cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(横)・刻目貼付突帯・ヘラ ケズリ(縦)後ヘラミガキ(縦~一部横)・スス附着 内:板ナデ(横)・黒斑 〈A-2類・2-1型・a型・小D字形〉(口縁部) 〈A-2類・-・a型・小D字形〉(肩部)	394(616)
78	9	40	縄文土器 深鉢		460土坑	縄文	残存高:3.5cm	外:ヨコナデ・ナデ(横)か内:板ナデ(横)	513(637)
78	10	40	縄文土器 深鉢		460土坑	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:2.6cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(横)・スス附着 内:板ナデ(横) 〈-・2-2型・c型・小V字形〉	514(624)
78	11	40	縄文土器 深鉢		460土坑	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:3.45cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(横) 内:板ナデ(横) 〈-・2-2型・c型・小V字形〉	515(624)
78	12	40	縄文土器 深鉢		495ピット	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:4.2cm	外:板ナデ(横)・刻目貼付突帯 内:板ナデ(横) 〈-・-・b-2型・小O字形〉	624(580)

挿図 図	番号	写真 図版	器種	層序	遺構	時期	法量	特徴	実測番号 (登録番号)
78	13	40	弥生土器 広口壺		374土坑	弥生前期中葉	残存高:4.3cm	外:ヘラミガキ(横)・段・削出突帯・沈線1 残存・赤彩・黒斑 内:板ナデ(横)後ヘラミガキ	411(583)
78	14	40	縄文土器 深鉢		374土坑	縄文晩期後半 〔水走タイプ〕	残存高:4.0cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(横) 内:板ナデ(横) (E類・1-3型・b-1型・小D字形)	412(583)
78	15	40	縄文土器 深鉢		432土坑	縄文晩期後半	残存高:1.7cm 底径:6.8cm(1/5)	外:ヘラケズリ(斜め・横)・スス付着 内:ヘラケズリ(横)・スス付着	413(586)
78	16	40	縄文土器 深鉢		486A土坑	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:2.2cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(横) 内:板ナデ(横) 〈-・1-2型・a型・小V字形〉	516(618)
78	17	40	弥生土器 高杯		486B土坑	弥生前期中葉	口径:15.4cm(完) 突帯部径:7.2cm (完) 器高:15.0cm 底径:13.2cm(3/4)	外:ヘラミガキ(横~斜め)・貼付突帯・板 ナデ(斜め)後ヘラミガキ(縦~斜め・一部 横)・黒斑 内:ヘラミガキ(横~斜め)・板ナデ(横)後 ヘラミガキ(横)・黒斑	6(613)
78	18	40	打製石器 石鏃		467木棺墓	縄文晩期~弥 生前期	長:2.4cm 幅:1.2cm 厚:0.5cm 重:1.3g	サヌカイト	622(663)
79	1	41	木棺		433木棺墓	—	残存長:161.3cm 幅:22.6cm 厚:3.2cm	木棺側板(西)	22
79	2	41	木棺		433木棺墓	—	残存長:64.3cm 幅:8.2cm 厚:2.0cm	木棺側板(東)	23
79	3	41	木棺		433木棺墓	—	残存長:26.0cm 幅:27.7cm 厚:2.4cm	木棺小口板(北)	24・31
79	4	41	木棺		433木棺墓	—	残存長:37.2cm 幅:32.0cm 厚:2.7cm	木棺小口板(南)	25
80	1	42	弥生土器 広口壺		366土器棺墓	弥生前期中葉	口径:25.3cm (9/10) 体部最大径:50.0 cm 器高:46.8cm 底径:13.4cm	外:ヘラミガキ(横)・段・沈線3・ヘラミガ キ(横)・沈線5(縦方向7ヶ所)・段・沈線5・ ヘラミガキ(横・斜め~縦)・板ナデ(横)・ 底面ナデ・底部粗圧痕・黒斑 内:沈線3・ヘラミガキ(横)・板ナデ後ヘラ ミガキ(横)・底部ナデ(横)	296(390・ 429・456・ 568・607・ 619・650)
80	2	42	弥生土器 鉢		366土器棺墓	弥生前期中葉	口径:24.5cm (6/10) 体部最大径:25.3 cm 器高:23.6cm 底径:9.0cm	外:ヘラミガキ(横~斜め~縦)・板ナデ (縦)・スス付着・底面板ナデ後ヘラミガキ 内:板ナデ(斜め)・ヘラミガキ(横)・スス 付着	5(619・650)
80	3		縄文土器 深鉢		366土坑	縄文晩期後半 (長原式)	残存高:4.4cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(横) 内:板ナデ(横) 〈-・2-2型・b-2型・小D字形〉	628(650)
80	4		縄文土器 深鉢		366土坑	縄文晩期後半	残存高:3.0cm 底径:6.0cm(1/2)	外:ヘラケズリ(縦)・板ナデ(縦)・底面板 ナデか 内:板ナデ	512(607)
82	1	42	縄文土器 深鉢	第14-2b層		縄文後期中葉 (元住吉山II 式)	口径:方形(一辺) 21.8cm(9/10) 体部径:24.5cm 器高:26.4cm 底径:5.6cm	外:波状口縁(角状突起4単位)・突起部分 ナデ・ヘラケズリ(横・縦)後ヘラミガキ (横)・沈線1・刻目・底面工具調整後ナデ・ スス付着 内:貝殻条痕(横)後一部ナデ・スス付着	247(657)

挿図 図	番号	写真 図版	器種	層序	遺構	時期	法量	特徴	実測番号 (登録番号)
82	2	42	縄文土器 深鉢	第14-2b層		縄文後期中葉 (元住吉山 I か II 式)	口径:21.9cm(1/3) 残存高:17.1cm	外:貝殻条痕(横・斜め~縦)・一部板ナデ か(斜め・縦)・スス付着・赤彩か 内:貝殻条痕(横)後板ナデ(横)・スス付着	306(701)
82	3	42	縄文土器 深鉢	第14-2b層		縄文後期中葉 (元住吉山 I か II 式)	口径:22.0cm(1/5) 残存高:6.5cm	外:貝殻条痕(横)・スス付着 内:貝殻条痕(横)後板ナデ(横)	475(644)
82	4	42	縄文土器 深鉢	第14-2b層		縄文後期前葉 (彦崎 K I 式)	口径:22.2cm(1/8) 残存高:5.4cm	外:貝殻条痕(横) 内:貝殻条痕(横)・沈線1	477(703)
82	5	43	縄文土器 深鉢	第14-2b層		縄文晩期後半 (長原式)	残存高:7.5cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(横) 内:板ナデ(横) 〈A-3類・3型・b-1型・小D字形〉	437(596)
82	6	43	縄文土器 深鉢	第14-2b層		縄文晩期後半 (長原式)	残存高:7.7cm	外:刻目貼付突帯・板ナデ(横)スス付着 内:板ナデ(横) 〈A(B)-4類・2-2型・a型・小D字形〉	361(516)
82	7	43	縄文土器 深鉢	第14-2b層		縄文晩期後半 (船橋式か)	残存高:10.0cm	外:板ナデ(横)・刻目貼付突帯・ヘラケズ リ(横)・スス付着 内:板ナデ(横) 〈---a型・大D字形〉	360(516)
82	8	43	縄文土器 深鉢	第14-2b層		縄文晩期後半 (船橋式か)	残存高:5.9cm	外:板ナデ(横)・刻目貼付突帯・ヘラケズ リ(横) 内:板ナデ(横) 〈---b-1型・大D字形〉	359(516)
82	9	43	縄文土器 深鉢 か	第14-2b層		縄文晩期後半	残存高:2.2cm 底径:8.0cm(1/3)	外:板ナデ(縦)・底面板ナデか 内:磨減	438(596)
82	10	43	縄文土器 深鉢	第14-2b層		縄文後期	残存高:5.5cm 底径:9.4cm(完)	外:板ナデ(縦)・底面板ナデか 内:板ナデ(縦)	481(719)
83	1	43	縄文土器 深鉢	第15-2面		縄文後期中葉 (元住吉山 I か II 式)	口径:41.0cm (1/10) 残存高:23.3cm	外:貝殻条痕(横~斜め)・スス付着 内:貝殻条痕(横~斜め)・スス付着	498(735)
83	2	43	縄文土器 深鉢	第15-2面		縄文後期中葉 (元住吉山 I か II 式)	口径:23.0cm(1/8) 残存高:17.1cm	外:貝殻条痕(横・斜め・縦)後一部ヘラナ デ(横)・穿孔1(内・外面から)・スス付着 内:貝殻条痕(横)・ヘラナデ(横)・スス付 着	491(727)
83	3	43	縄文土器 深鉢 か	第15-2層		縄文後期中葉 (元住吉山 I か II 式)	残存高:5.9cm	外:貝殻条痕(横) 内:貝殻条痕(横)	480(718)
83	4	43	縄文土器 深鉢 か	第15-3b層		縄文後期か	残存高:6.8cm 底径:5.4cm(1/4)	外:条痕か・板ナデか・ヘラケズリ(斜め)・ スス付着・底面板ナデ 内:板ナデ(横)・ナデ・ヘラナデ(縦)か	492(752)
84	1	44	石鏃		229流路	弥生	長:2.9cm 幅:1.9cm 厚:0.5cm 重:3.0g	サヌカイト	556(307)
84	2	44	石鏃	第13層		縄文晩期~弥 生前期	長:2.4cm 幅:1.2cm 厚:3.5cm 重:1.1g	サヌカイト	557(413)

挿図 図	番号	写真 図版	器種	層序	遺構	時期	法量	特徴	実測番号 (登録番号)
84	3	44	石鏃	第13b層		縄文晩期～弥生前期	長:4.9cm 幅:2.7cm 厚:0.7cm 重:9.9g	サヌカイト	560(489)
84	4	44	石鏃	第14-1層		縄文晩期～弥生前期	長:4.0cm 幅:2.9cm 厚:0.6cm 重:8.1g	サヌカイト	561(535)
84	5	44	石槍か	第14-1面		縄文晩期～弥生前期	長:2.8cm 幅:0.85cm 厚:0.6cm 重:1.4g	サヌカイト	558(510)
84	6	44	石匙	第14-1層		縄文晩期～弥生前期	長:3.6cm 幅:6.0cm 厚:0.9cm 重:14.3g	サヌカイトか	562(541)
84	7	44	削器	第13b層		縄文晩期～弥生前期	長:4.7cm 幅:6.6cm 厚:1.0cm 重:27.8g	サヌカイト	564(513)
84	8	44	削器	第12層		縄文晩期～弥生前期	長:4.05cm 幅:7.8cm 厚:0.8cm 重:42.0g	流紋岩	566(409)
84	9	44	石錐	第13面		縄文晩期～弥生前期	長:3.5cm 幅:1.5cm 厚:0.6cm 重:2.8g	サヌカイト	567(455)
84	10	44	石錐	第14-1層		縄文晩期～弥生前期	長:3.35cm 幅:1.6cm 厚:0.45cm 重:1.8g	サヌカイト	565(552)
84	11	44	石錐		339落ち込み	縄文晩期～弥生前期	長:4.8cm 幅:2.7cm 厚:0.9cm 重:8.1g	サヌカイト	563(520)
84	12	44	石鏃	第13b層		縄文晩期～弥生前期	長:4.8cm 幅:1.6cm 厚:0.6cm 重:4.6g	サヌカイトか	559(512)
85	1	45	楔形石器		229流路	縄文晩期～弥生前期	長:3.3cm 幅:2.15cm 厚:0.75cm 重:5.7g	サヌカイト	568(483)
85	2	45	楔形石器		229流路	縄文晩期～弥生前期	長:2.5cm 幅:2.3cm 厚:0.7cm 重:5.0g	サヌカイト	570(483)
85	3	45	楔形石器		339落ち込み	縄文晩期～弥生前期	長:2.3cm 幅:2.6cm 厚:0.7cm 重:4.2g	サヌカイト	572(695)
85	4	45	楔形石器		339落ち込み	縄文晩期～弥生前期	長:3.3cm 幅:1.9cm 厚:1.3cm 重:5.2g	サヌカイト	574(686)
85	5	45	楔形石器		339落ち込み	縄文晩期～弥生前期	長:3.5cm 幅:5.1cm 厚:1.0cm 重:20.5g	サヌカイト	575(528)

挿図 図	番号	写真 図版	器種	層序	遺構	時期	法量	特徴	実測番号 (登録番号)
85	6	45	楔形石器		339落ち込み	縄文晩期～弥生前期	長:4.3cm 幅:2.7cm 厚:0.9cm 重:12.4g	サヌカイト	569(520)
85	7	45	楔形石器		339落ち込み	縄文晩期～弥生前期	長:3.65cm 幅:3.4cm 厚:1.2cm 重:15.9g	サヌカイト	571(527)
85	8	45	楔形石器		339落ち込み	縄文晩期～弥生前期	長:2.9cm 幅:3.4cm 厚:0.8cm 重:9.4g	サヌカイト	573(520)
85	9	45	楔形石器		339落ち込み	縄文晩期～弥生前期	長:2.5cm 幅:2.9cm 厚:0.7cm 重:5.2g	サヌカイト	576(522)
85	10	45	楔形石器		339落ち込み	縄文晩期～弥生前期	長:2.5cm 幅:2.7cm 厚:0.8cm 重:7.1g	サヌカイト	577(503)
86	1	46	楔形石器	第12層		縄文晩期～弥生前期	長:3.1cm 幅:1.75cm 厚:1.0cm 重:7.1g	サヌカイト	578(375)
86	2	46	楔形石器	第13面		縄文晩期～弥生前期	長:2.5cm 幅:2.2cm 厚:0.7cm 重:4.8g	サヌカイト	580(412)
86	3	46	楔形石器	東側溝		縄文晩期～弥生前期	長:2.3cm 幅:2.75cm 厚:0.6cm 重:4.2g	サヌカイト	582(486)
86	4	46	楔形石器	第14面		縄文晩期～弥生前期	長:2.45cm 幅:2.25cm 厚:1.0cm 重:9.1g	サヌカイト	584(532)
86	5	46	楔形石器	第13b層		縄文晩期～弥生前期	長:4.95cm 幅:3.1cm 厚:1.15cm 重:17.4g	サヌカイト	586(511)
86	6	46	楔形石器	第14-1層		縄文晩期～弥生前期	長:2.2cm 幅:2.0cm 厚:0.6cm 重:2.8g	サヌカイト	579(562)
86	7	46	楔形石器	第13面		縄文晩期～弥生前期	長:4.2cm 幅:3.8cm 厚:1.1cm 重:17.7g	サヌカイト	581(464)
86	8	46	楔形石器	南法面		縄文晩期～弥生前期	長:4.3cm 幅:3.5cm 厚:1.1cm 重:19.9g	サヌカイト	583(760)
86	9	46	楔形石器	第13b層		縄文晩期～弥生前期	長:4.0cm 幅:4.1cm 厚:1.3cm 重:23.0g	サヌカイト	585(509)
86	10	46	楔形石器	南法面		縄文晩期～弥生前期	長:3.8cm 幅:4.0cm 厚:1.6cm 重:22.5g	サヌカイト	587(760)

挿図 図	番号	写真 図版	器種	層序	遺構	時期	法量	特徴	実測番号 (登録番号)
87	1	47	剥片		339落ち込み	縄文晩期～弥生前期	長:2.3cm 幅:5.3cm 厚:1.4cm 重:15.7g	サヌカイト	589(695)
87	2	47	剥片		339落ち込み	縄文晩期～弥生前期	長:3.4cm 幅:3.6cm 厚:0.8cm 重:8.7g	サヌカイト	588(527)
87	3		剥片			縄文晩期～弥生前期	長:4.8cm 幅:5.3cm 厚:1.5cm 重:24.4g	サヌカイト (図87-1・2接合)	590 (527695)
87	4	47	楔形石器か		339落ち込み	縄文晩期～弥生前期	長:9.7cm 幅:4.7cm 厚:2.5cm 重:139.9g	サヌカイト	591(684)
88	1	47	剥片		339落ち込み	縄文晩期～弥生前期	長:3.8cm 幅:2.4cm 厚:2.1cm 重:15.0g	サヌカイト	592(694)
88	2	47	剥片	第13面		縄文晩期～弥生前期	長:4.0cm 幅:3.2cm 厚:2.0cm 重:28.2g	サヌカイト	593(414)
88	3		剥片			縄文晩期～弥生前期	長:3.7cm 幅:4.7cm 厚:2.2cm 重:43.2g	サヌカイト (図88-1・2接合)	594 (414694)
88	4	47	(板状)剥片		339落ち込み	縄文晩期～弥生前期	長:6.3cm 幅:6.6cm 厚:2.2cm 重:86.9g	サヌカイト	595(527)
89	1	48	石斧	第13b層		縄文晩期～弥生前期	長:8.2cm 幅:5.5cm 厚:3.3cm 重:174.5g		602(493)
89	2	48	石斧		339落ち込み	縄文晩期～弥生前期	長:4.6cm 幅:4.1cm 厚:3.1cm 重:83.9g	蛇紋岩か	604(522)
89	3	48	石斧	第14-1層		縄文晩期～弥生前期	長:11.2cm 幅:3.9cm 厚:2.7cm 重:198.8g	蛇紋岩か	605(552)
90	1	48	叩石	第14-1層		縄文晩期～弥生前期	長:12.4cm 幅:5.0cm 厚:3.2cm 重:279.4g	砂岩	606(547)
90	2	48	叩石	第13b層		縄文晩期～弥生前期	長:5.7cm 幅:6.8cm 厚:4.3cm 重:241.5g	サヌカイト	607(513)
90	3	48	叩石		339落ち込み	縄文晩期～弥生前期	長:5.8cm 幅:5.9cm 厚:2.6cm 重:135.0g	砂岩	608(494)
90	4	48	叩石	第13面		縄文晩期～弥生前期	長:8.3cm 幅:6.6cm 厚:1.5cm 重:106.4g	石皿もしくは砥石転用か	609(466)

挿図 図	番号	写真 図版	器種	層序	遺構	時期	法量	特徴	実測番号 (登録番号)
90	5	48	石皿(台石)	第14-1層		縄文晩期～弥生前期	長:7.4cm 幅:5.3cm 厚:5.1cm 重:309.6g	砂岩	610(552)
91	1	49	磨石	第14-2b層		縄文晩期～弥生前期	長:8.0cm 幅:6.7cm 厚:4.3cm 重:367.2g		611(614)
91	2	49	磨石	第14層		縄文晩期～弥生前期	長:9.4cm 幅:7.0cm 厚:4.6cm 重:519.5g		612(696)
91	3	49	叩石		339落ち込み	縄文晩期～弥生前期	長:4.3cm 幅:5.7cm 厚:2.4cm 重:82.4g	砂岩	613(527)
91	4	49	磨石	第14-1層		縄文晩期～弥生前期	長:8.8cm 幅:3.8cm 厚:3.2cm 重:127.2g		614(546)
92	1	49	叩石	第13層		縄文晩期～弥生前期	長:16.4cm 幅:7.6cm 厚:6.4cm 重:862.6g		615(704)
92	2	49	叩石	第14-2b層		縄文晩期～弥生前期	長:19.0cm 幅:6.8cm 厚:4.6cm 重:862.5g		616(709)
93	1	50	石棒		229流路	縄文晩期～弥生前期	長:35.85cm 幅:6.5cm 厚:4.7cm 重:1758.3g	点紋片岩	603(312)
94	1	50	石棒		339落ち込み	縄文晩期～弥生前期	長:16.7cm 幅:6.9cm 厚:5.0cm 重:930.8g	絹雲母片岩	596(527)
94	2	50	石棒	第14-1層		縄文晩期～弥生前期	長:15.1cm 幅:6.9cm 厚:2.8cm 重:481.6g	絹雲母片岩	597(593)
94	3	50	石棒		339落ち込み	縄文晩期～弥生前期	長:9.3cm 幅:5.3cm 厚:4.6cm 重:275.5g	点紋片岩	598(695)
94	4	50	石棒	第14-1層		縄文晩期～弥生前期	長:13.5cm 幅:2.4cm 厚:4.7cm 重:232.6g	絹雲母片岩	599(684)
94	5	50	石棒	東側溝		縄文晩期～弥生前期	長:14.0cm 幅:5.2cm 重:343.3g 厚:3.0cm	点紋片岩	600(450)
94	6	50	石棒		339落ち込み	縄文晩期～弥生前期	長:13.7cm 幅:4.9cm 厚:1.9cm 重:190.9g	絹雲母片岩	601(522)
95	1	51	石錘	第15-2面	533集石	縄文後期	長:14.1cm 幅:9.6cm 厚:1.8cm 重:356.2g	凝灰岩か	617(733)



挿図		写真 図版	器種	層序	遺構	時期	法量	特徴	実測番号 (登録番号)
図	番号								
95	2	51	石錘	第15-2面	533集石	縄文後期	長:11.0cm 幅:9.1cm 厚:1.8cm 重:255.1g	砂岩办	618(731)
95	3	51	石錘	第15-2面	534集石	縄文後期	長:9.2cm 幅:8.0cm 厚:3.1cm 重:282.2g	砂岩	619(732)
96	1	51	叩石	第15-2面		縄文後期	長:9.2cm 幅:7.0cm 厚:1.8cm 重:156.3g		620(736)
96	2	51	板状礫	第15-2面		縄文後期	長:12.9cm 幅:9.1cm 厚:1.7cm 重:240.4g	磨石办	621(737)

# 写 真 图 版



第2面東半 全景（東から）

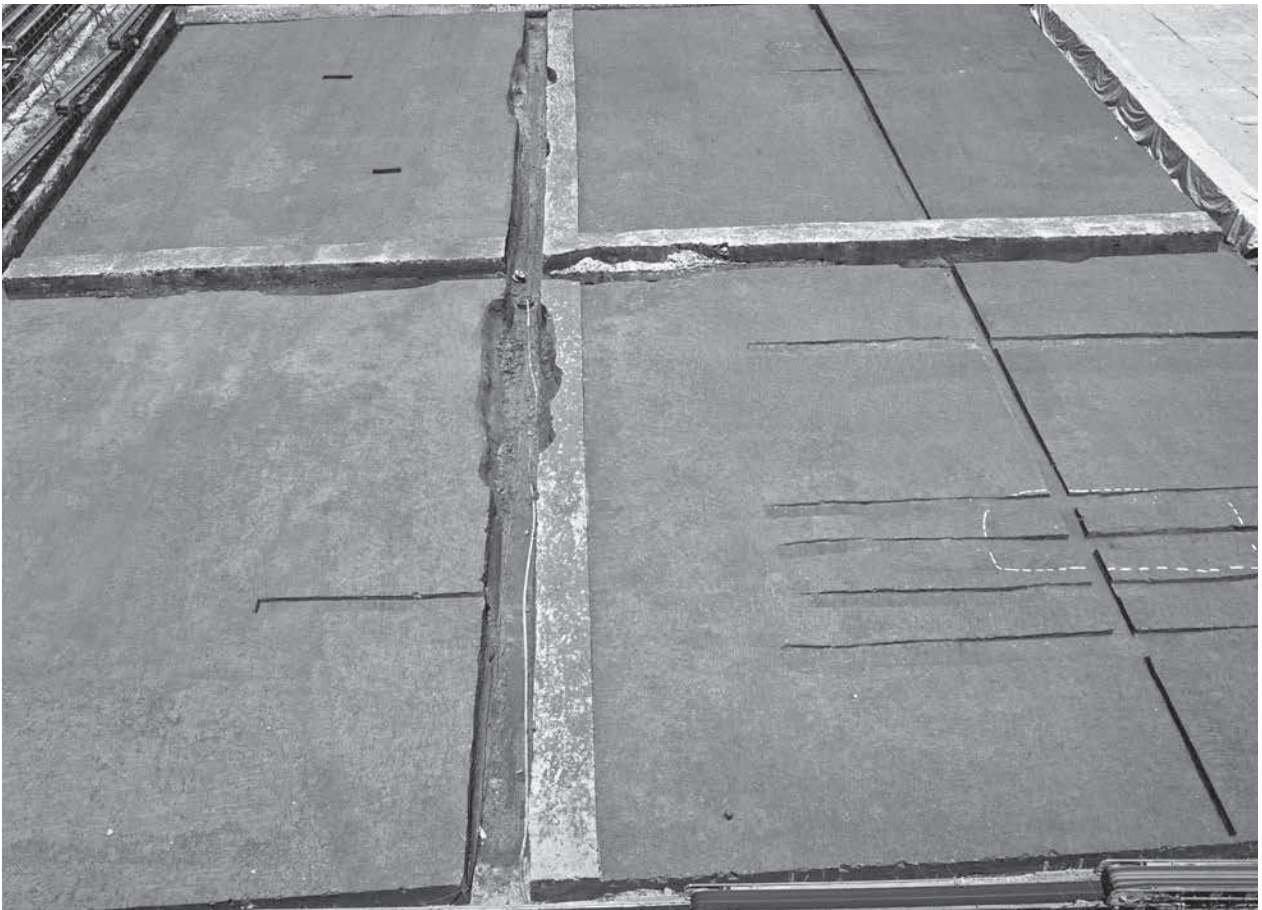


第2面西半 全景（南から）

図版2 遺構



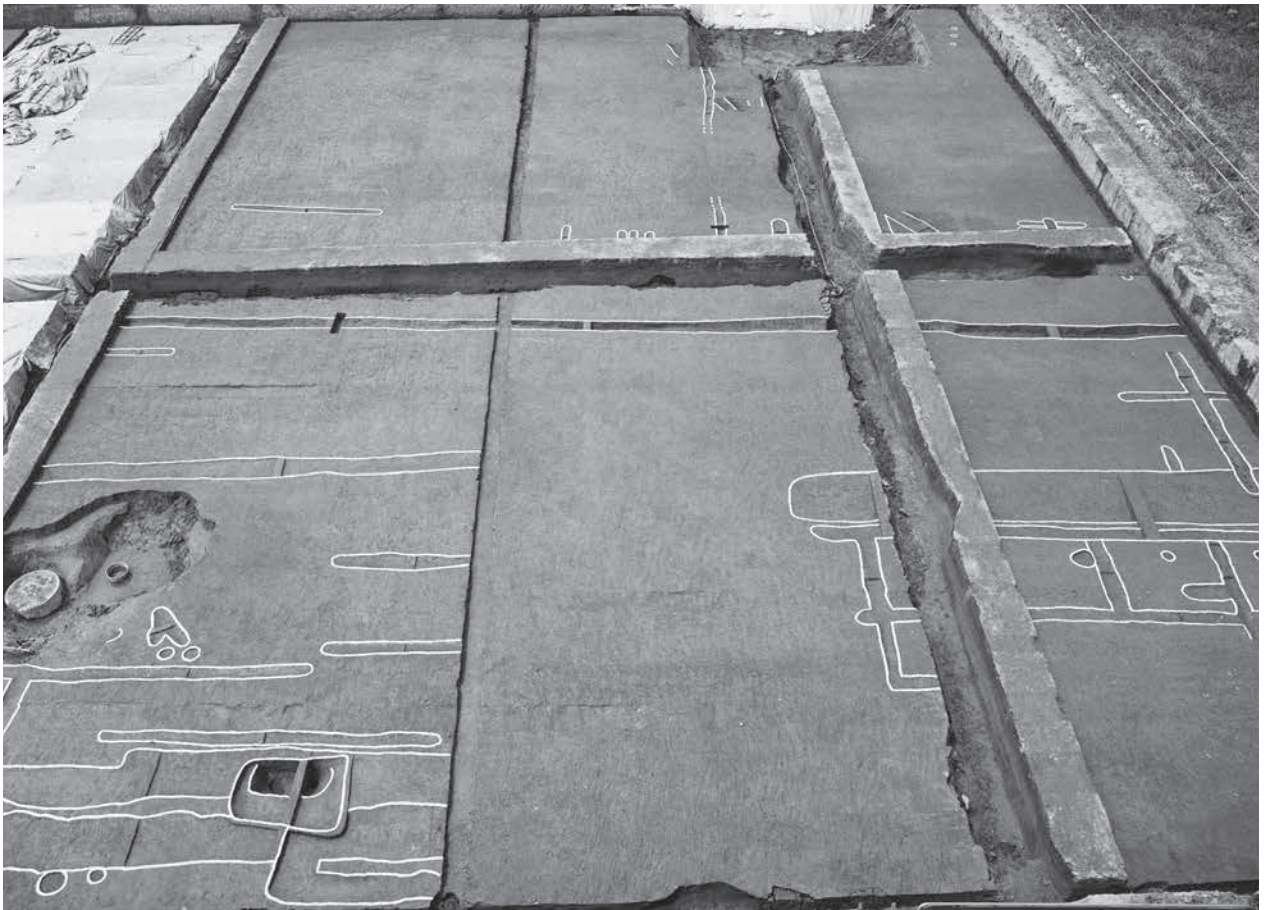
第5面西半 全景（南から）



第7面西半 全景（南から）



第8面西半 全景（南から）

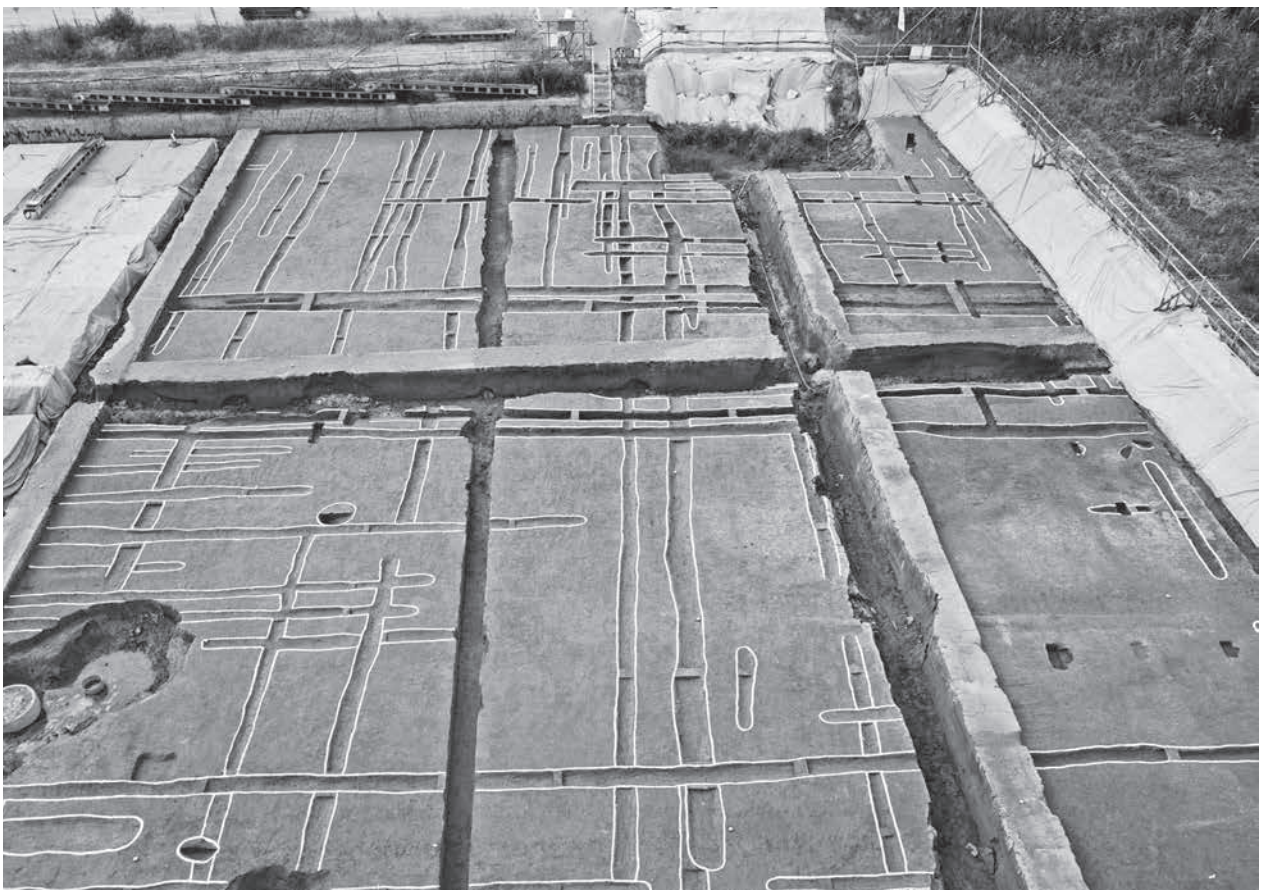


第9面東半 全景（南から）

図版4 遺構



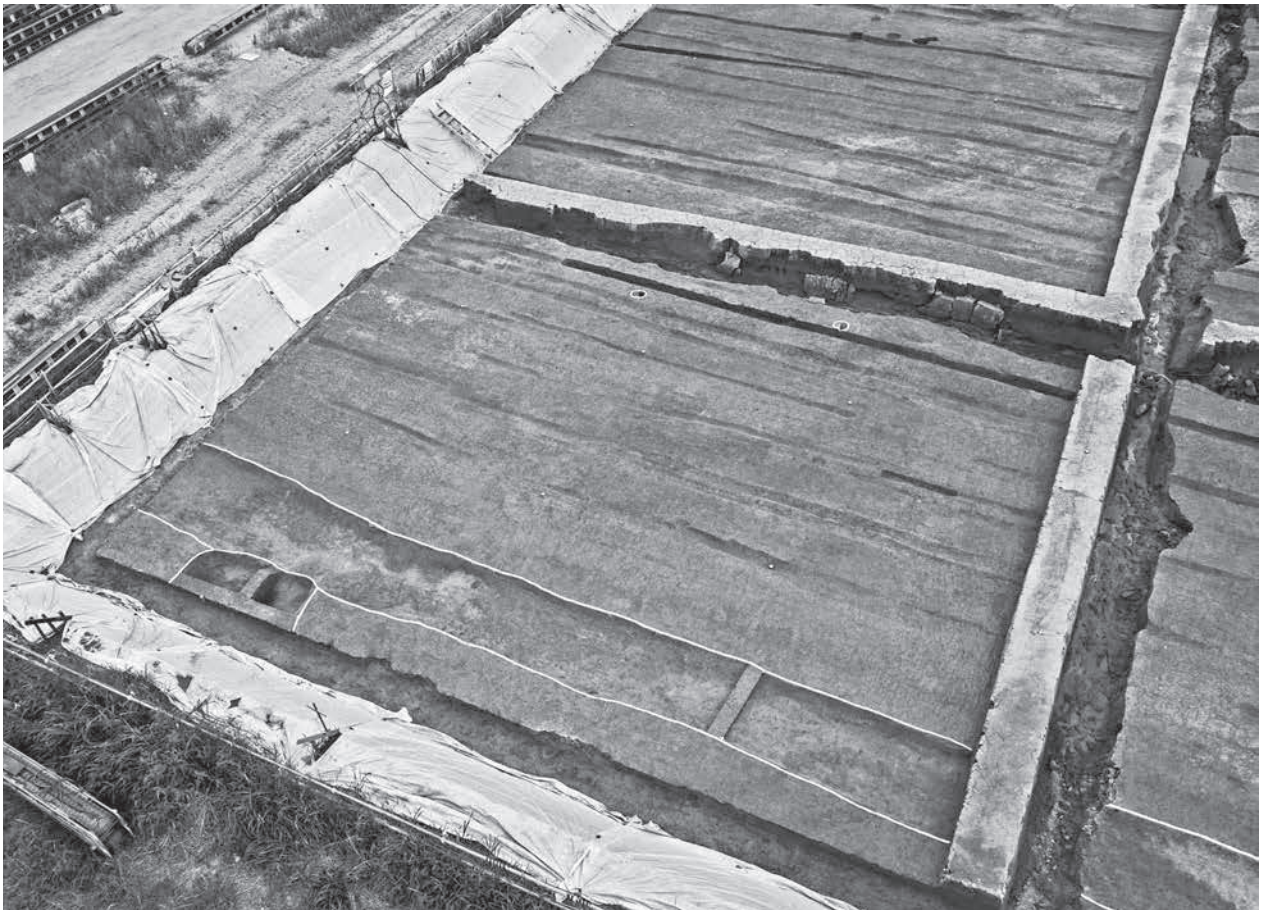
第9面西半 全景（南から）



第10面東半 全景（南から）



第10面西半 全景（南から）



第11面西半 全景（西から）

図版6 遺構



第11b面東半 全景（南から）



第12面東半 全景（東から）





第12面西半 全景（西から）

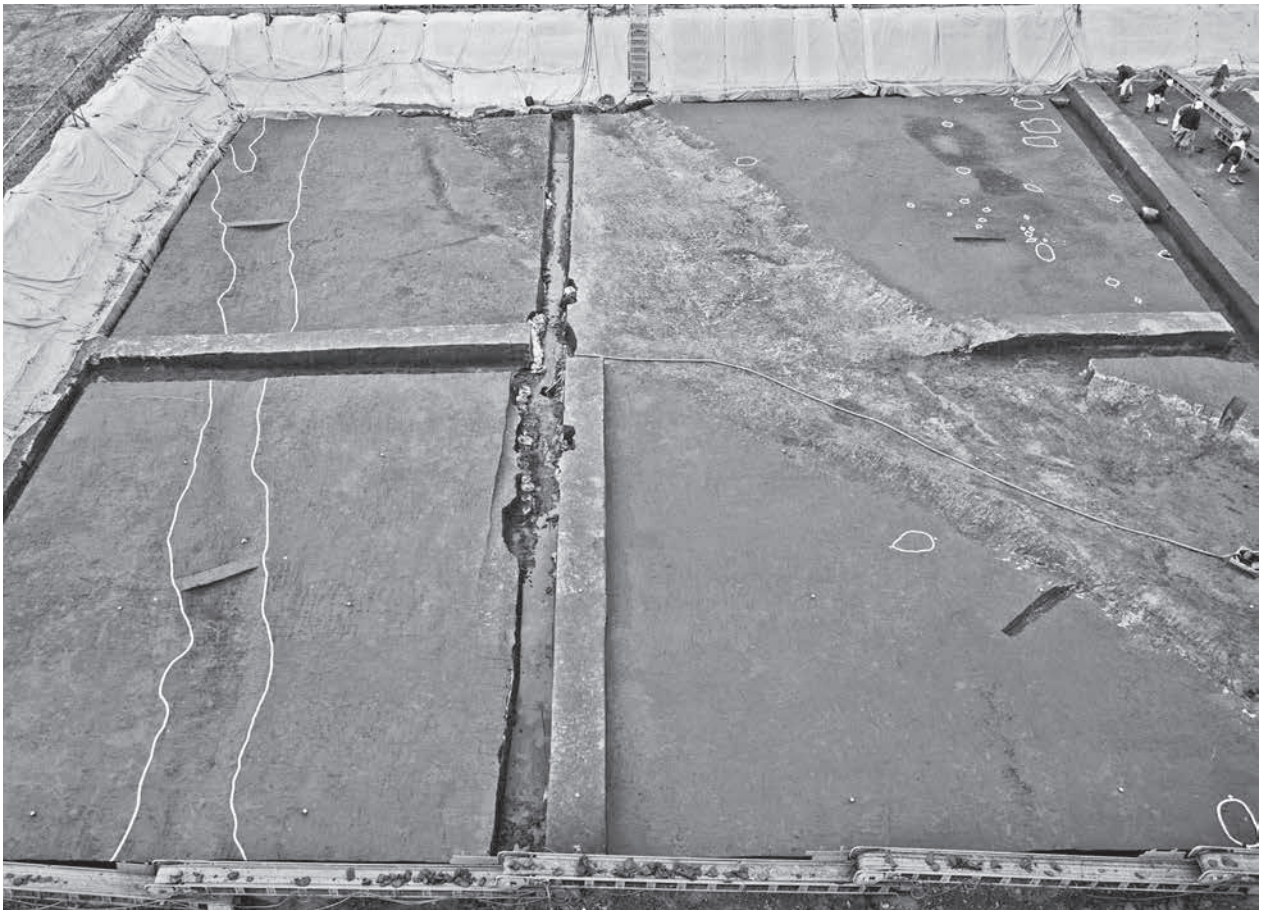


229 流路断面（南から）

図版8 遺構



第12b面東半 全景（南から）



第13面西半 全景（南から）



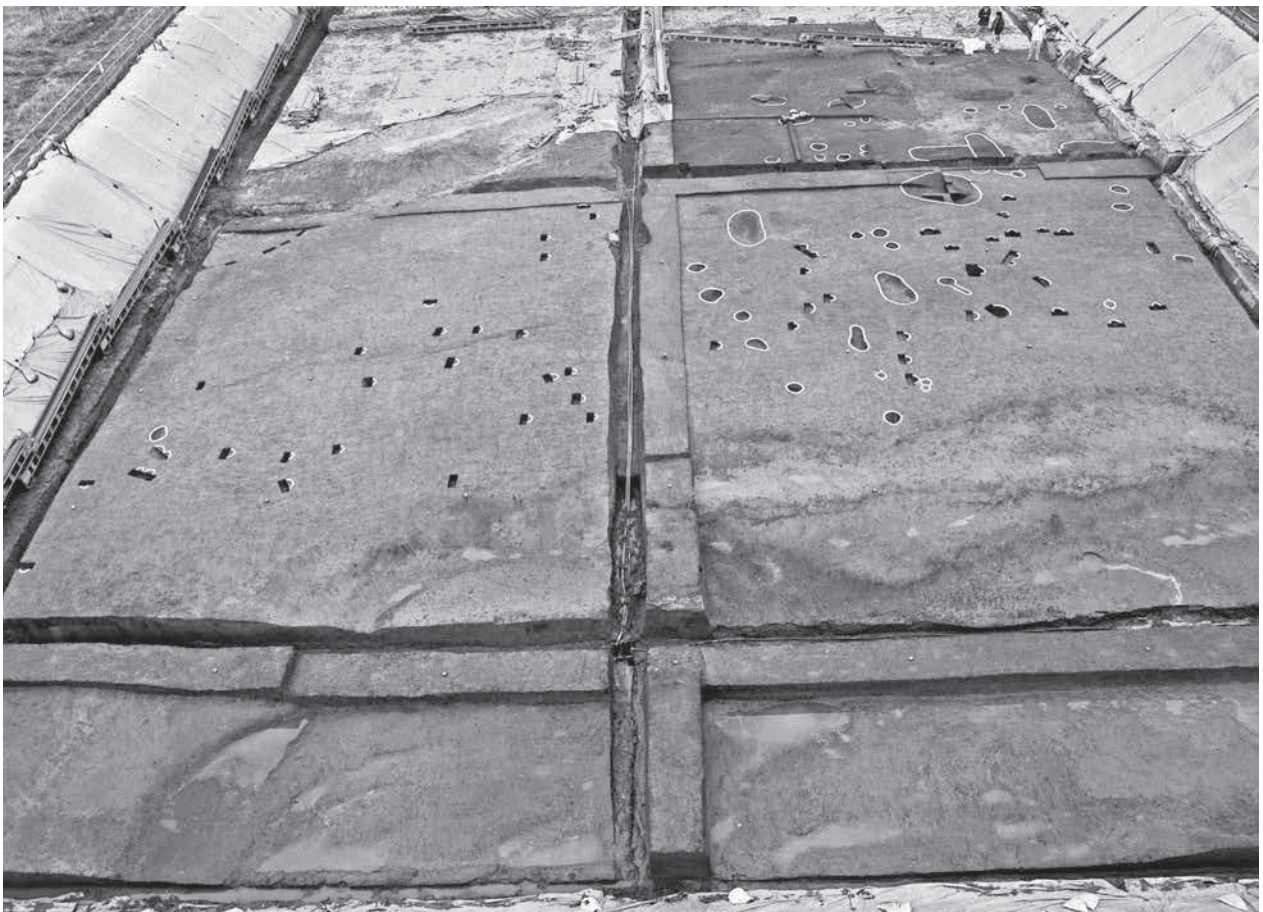
第14-1面東半 全景（東から）



第14-1面西半 全景（南から）



側溝内 土器出土状況（東から）



第14 - 2b 面東半 全景（東から）



第 14 - 2b 面西半 遺構検出状況 (北から)



第 14 - 2b 面西半 467・447・506 土坑検出状況 (北西から)

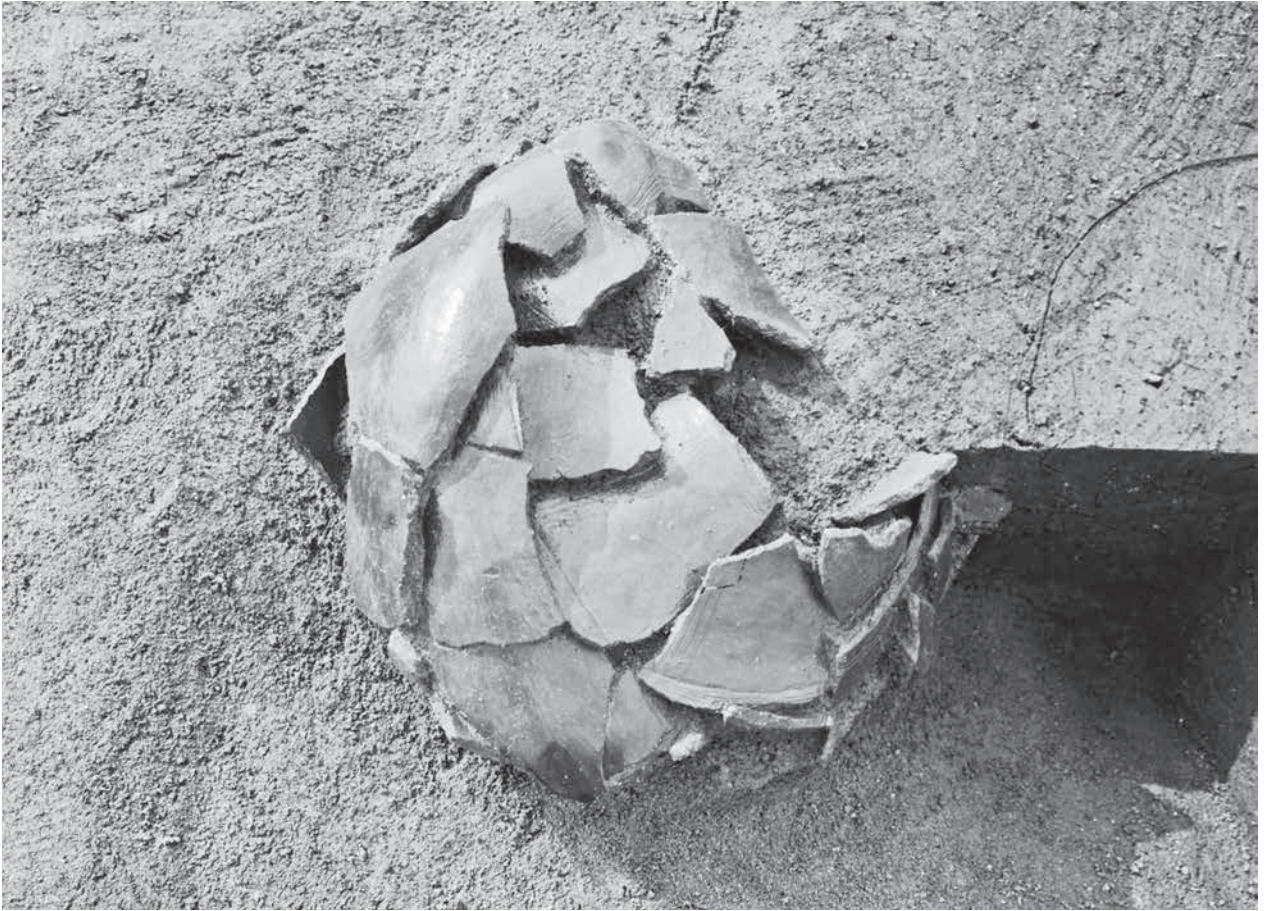
図版12 遺構



第14 - 2b 面西半 467・447・446・506 土坑検出状況（東から）



第14 - 2b 面西半 366 土器棺墓・366 土坑検出状況（東から）



第14 - 2b 面西半 366 土器棺墓検出状況 (東から)



第14 - 2b 面西半 432 土坑検出状況 (南東から)

図版14 遺構



第 14 - 2b 面西半 433 木棺墓木棺検出状況（西から）



第 14 - 2b 面西半 446 土坑検出状況（北から）





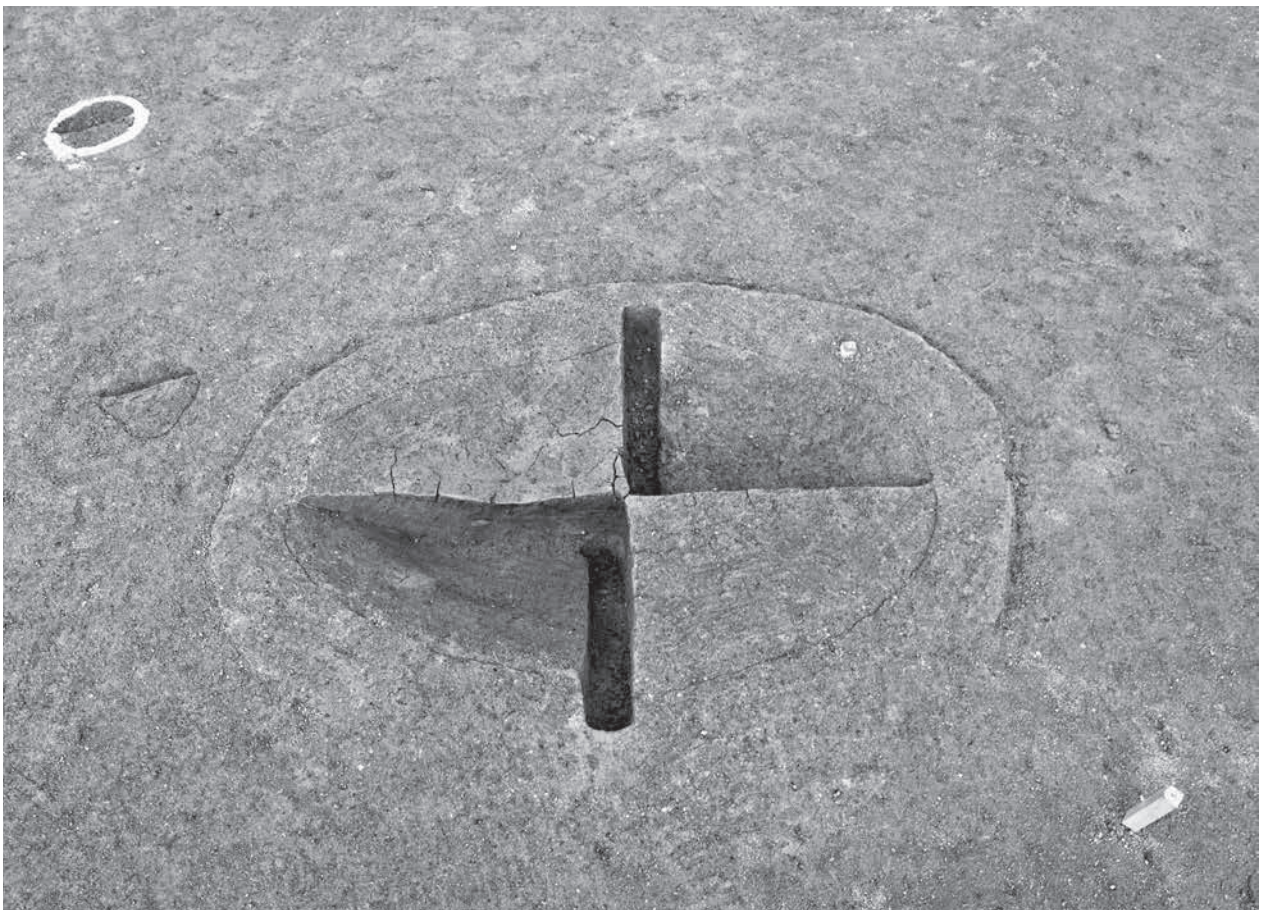
第 14 - 2b 面西半 447 木棺墓完掘状況 (北東から)



第 14 - 2b 面西半 453 土坑検出状況 (東から)



第14 - 2b 面西半 453 土坑歯検出状況 (東から)



第14 - 2b 面西半 454 土坑検出状況 (東から)



第 14 - 2b 面西半 467 木棺墓検出状況 (西から)



第 14 - 2b 面西半 467 木棺墓断面 (東から)



第 14 - 2b 面西半 467 木棺墓木棺検出状況 (東から)



第 14 - 2b 面西半 467 木棺墓完掘状況 (東から)



第14 - 2b 面西半 506 土坑土器出土状況 (北から)



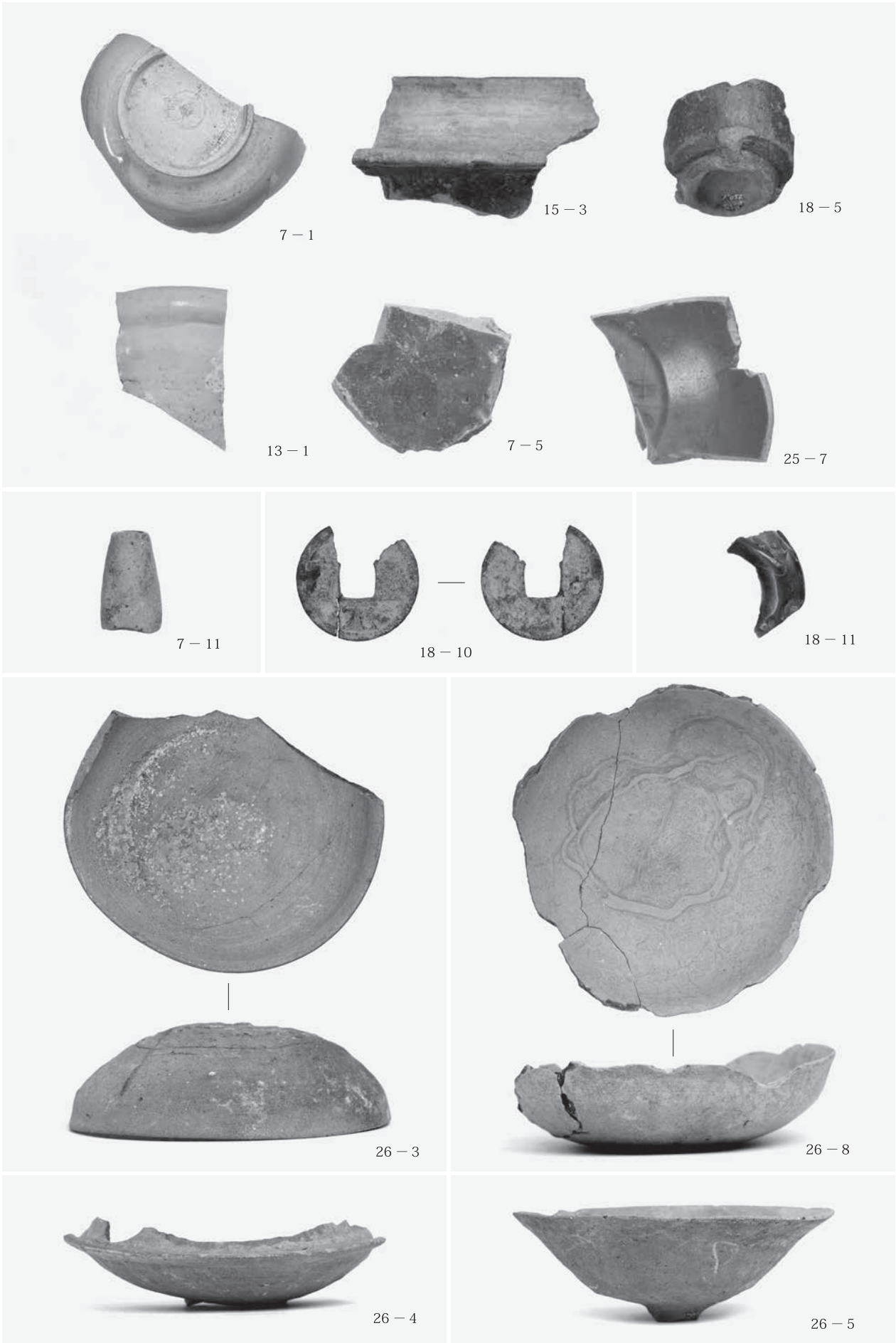
04 - 2 調査区北側 砂堆積状況 (西から)



第15面西半 全景（南から）



調査区南法面（北から）



第1b面(1b土坑)・5・6・7・9層出土遺物  
第9層関連出土遺物

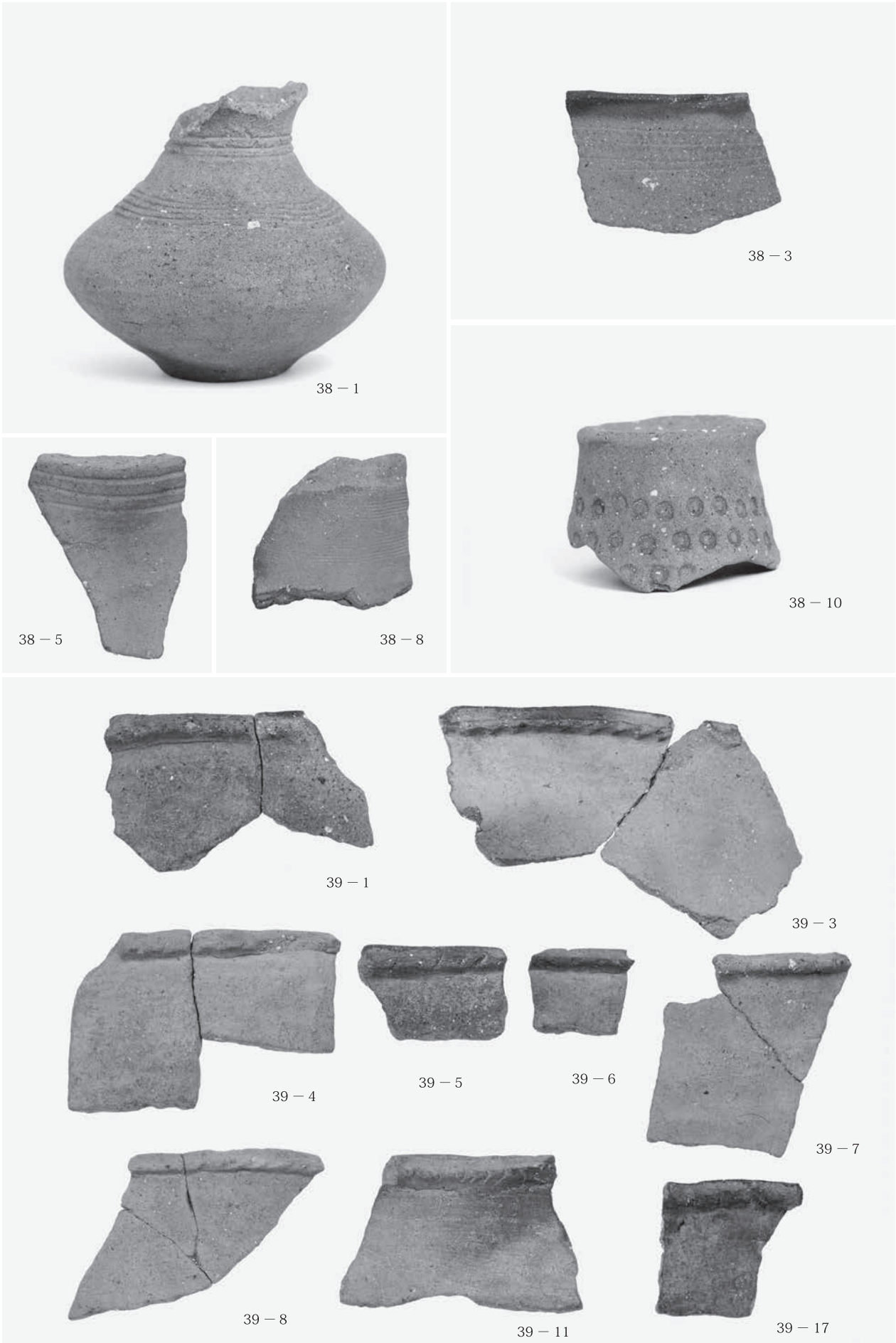
図版22 遺物



第9層関連出土遺物

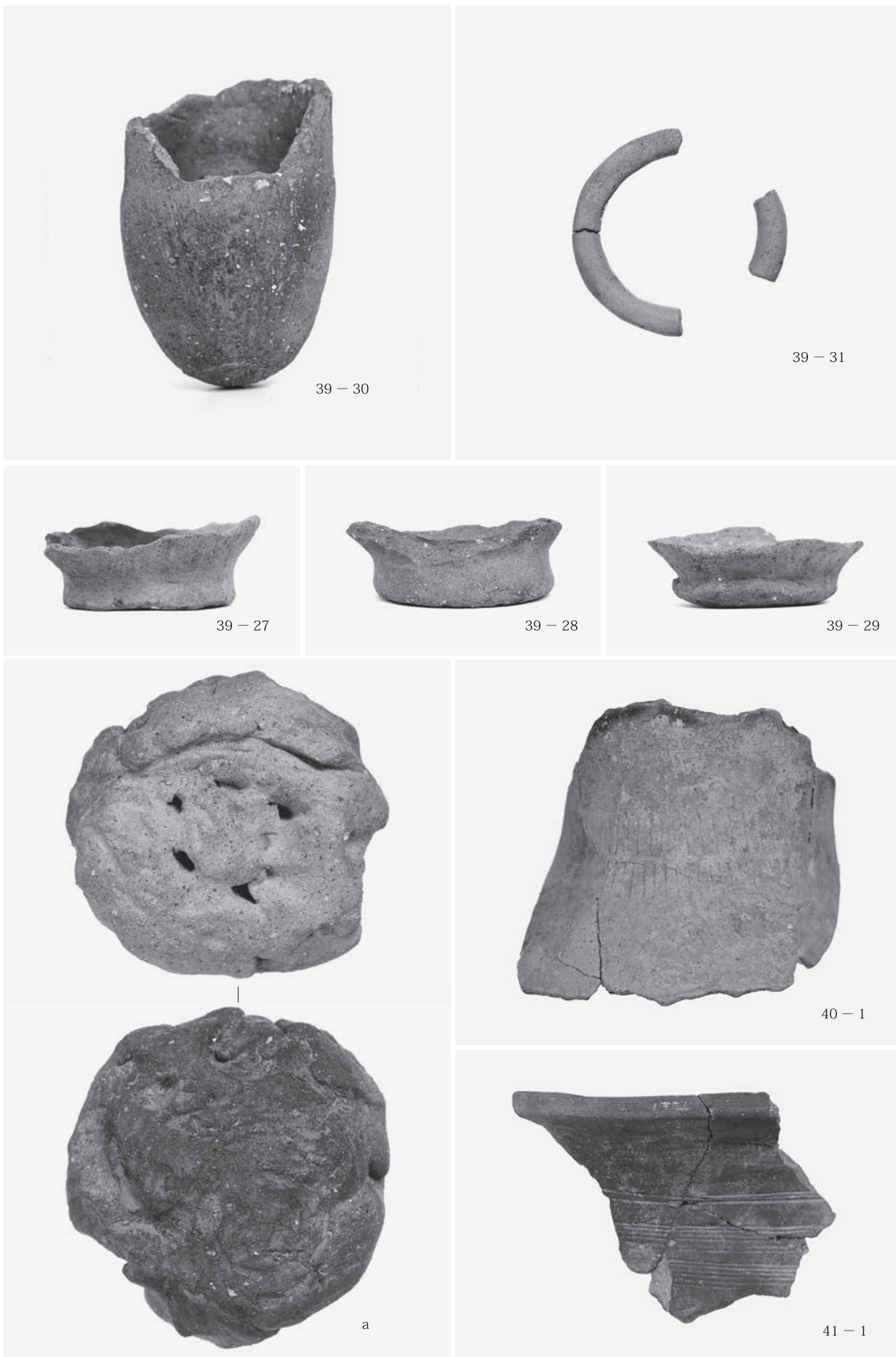
第10面 (116土坑・177溝・104溝)・10層出土遺物



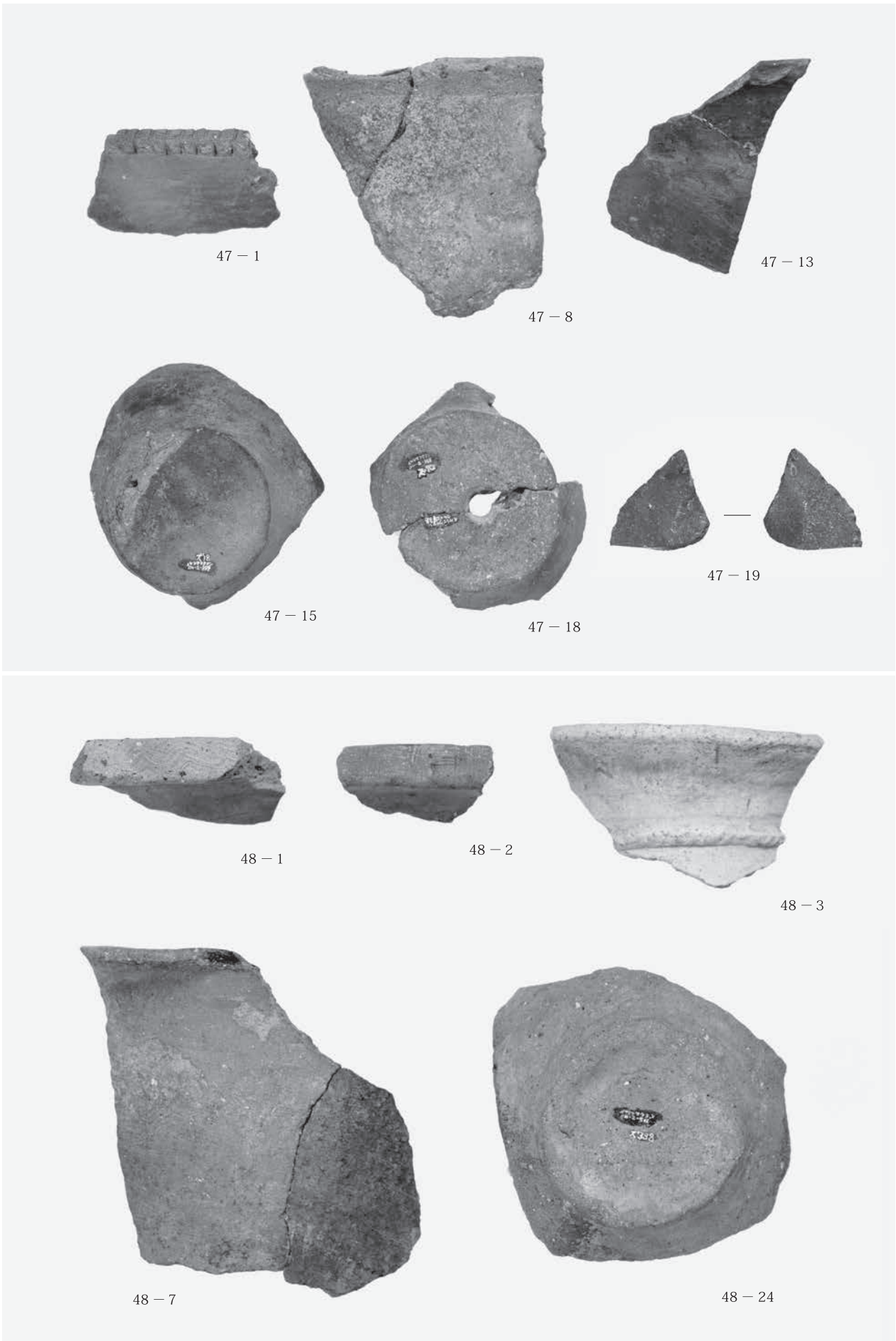


第12面(229流路)出土遺物

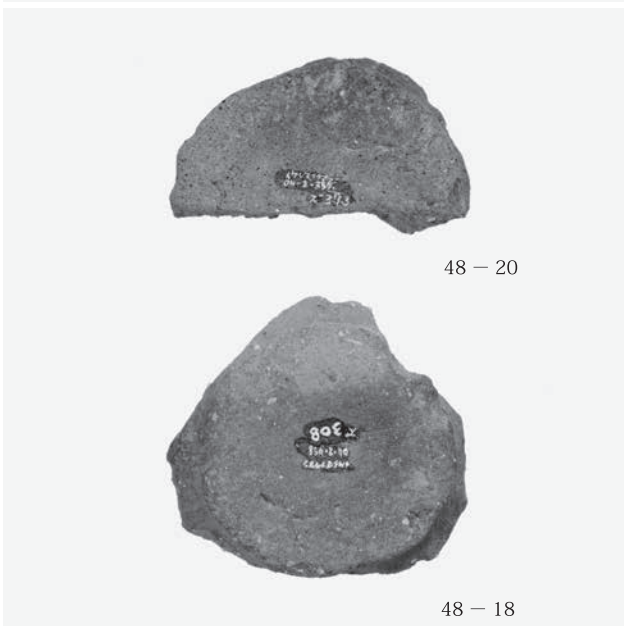
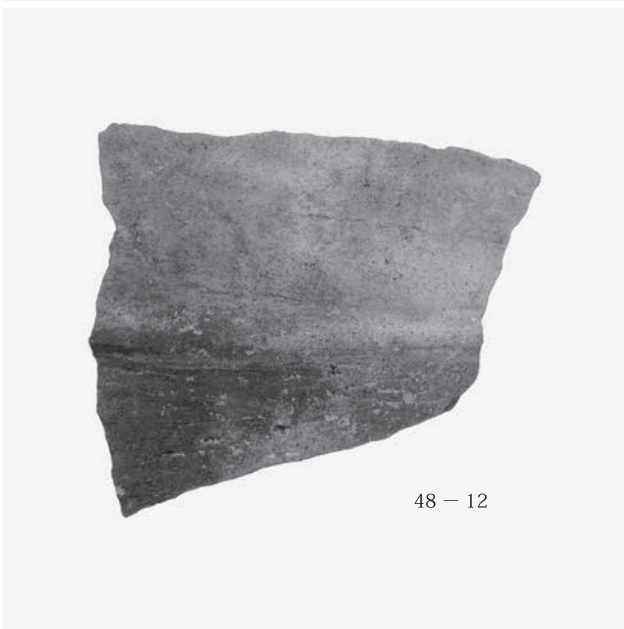
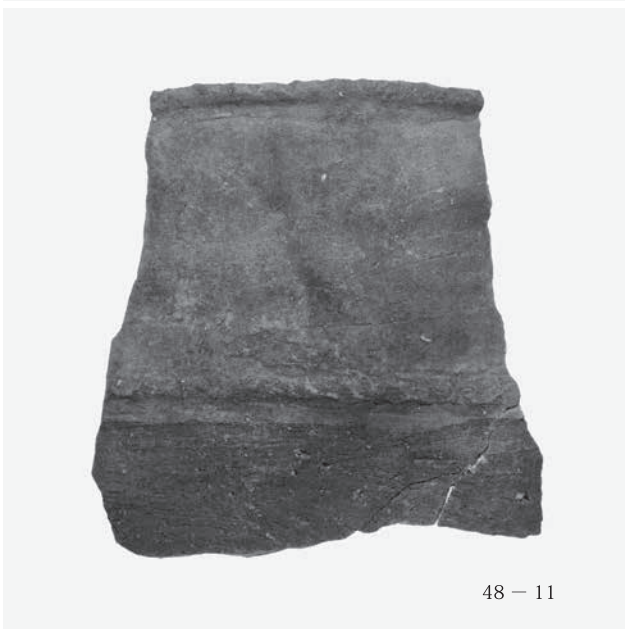
図版24 遺物

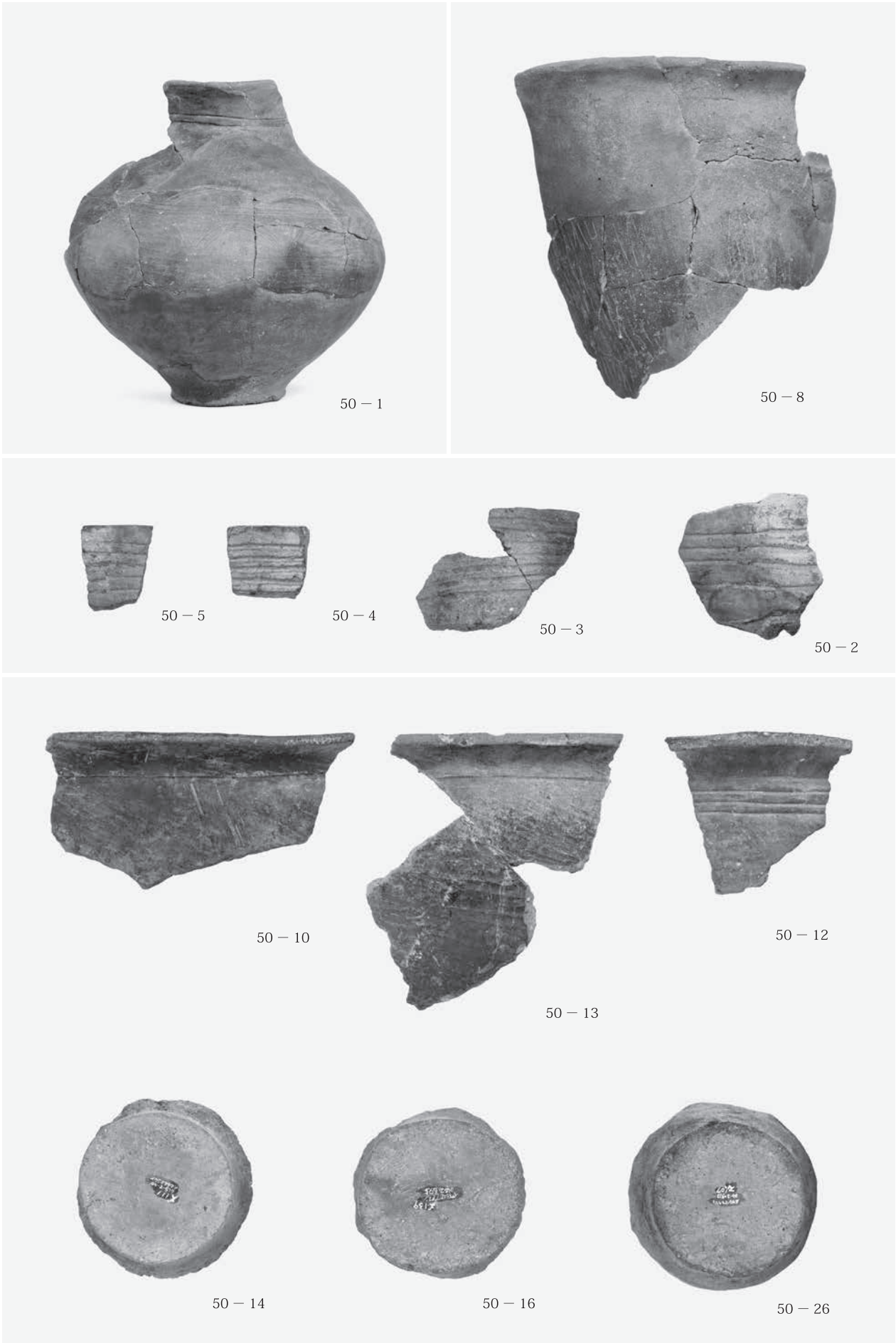


第12面 (229 流路・213 大畦畔)・第12層出土遺物



第13面(358流路)出土遺物  
第13面・13層・13b層出土遺物





第 14 - 1 面 (339 落ち込み) 出土遺物

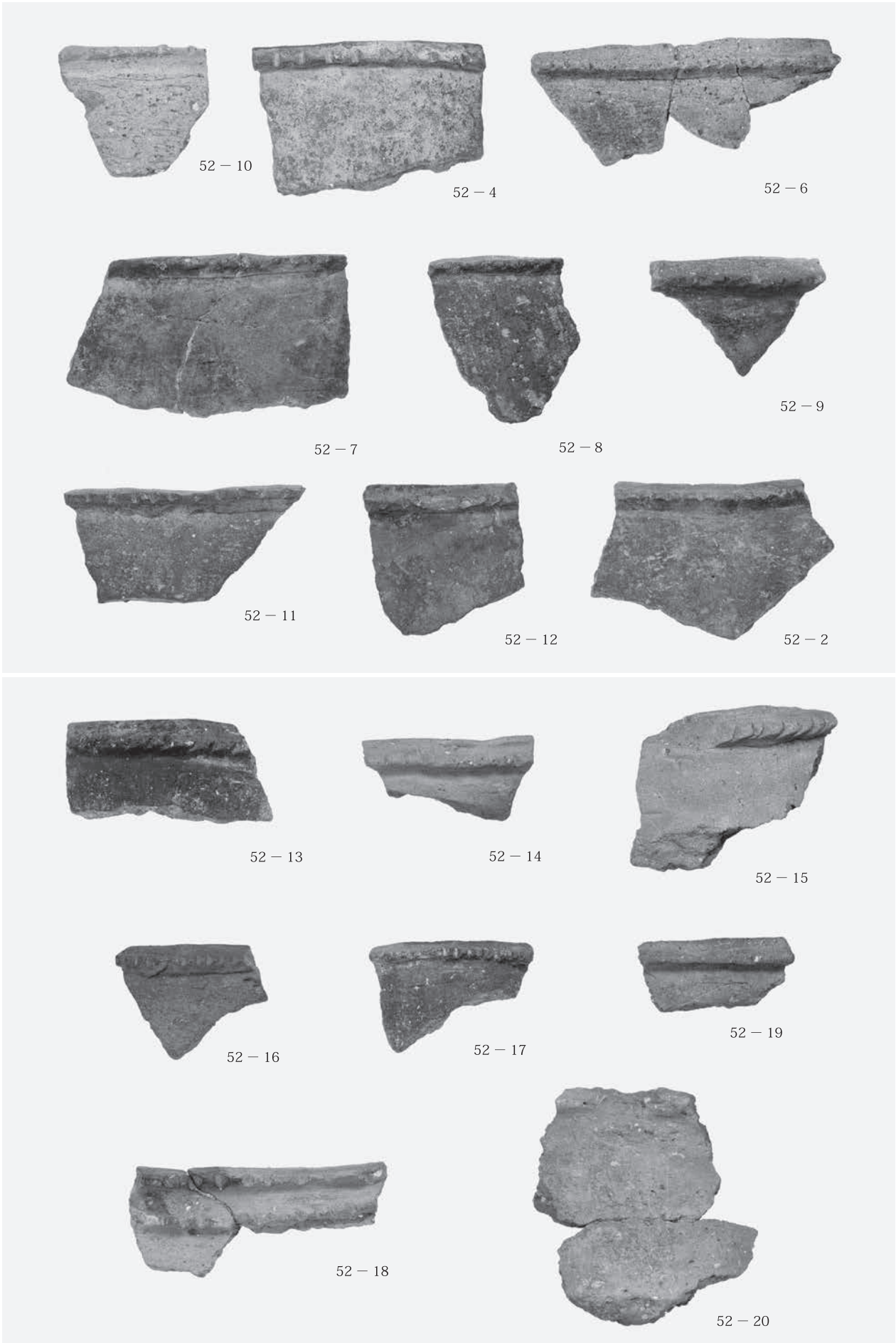


51-1

52-1

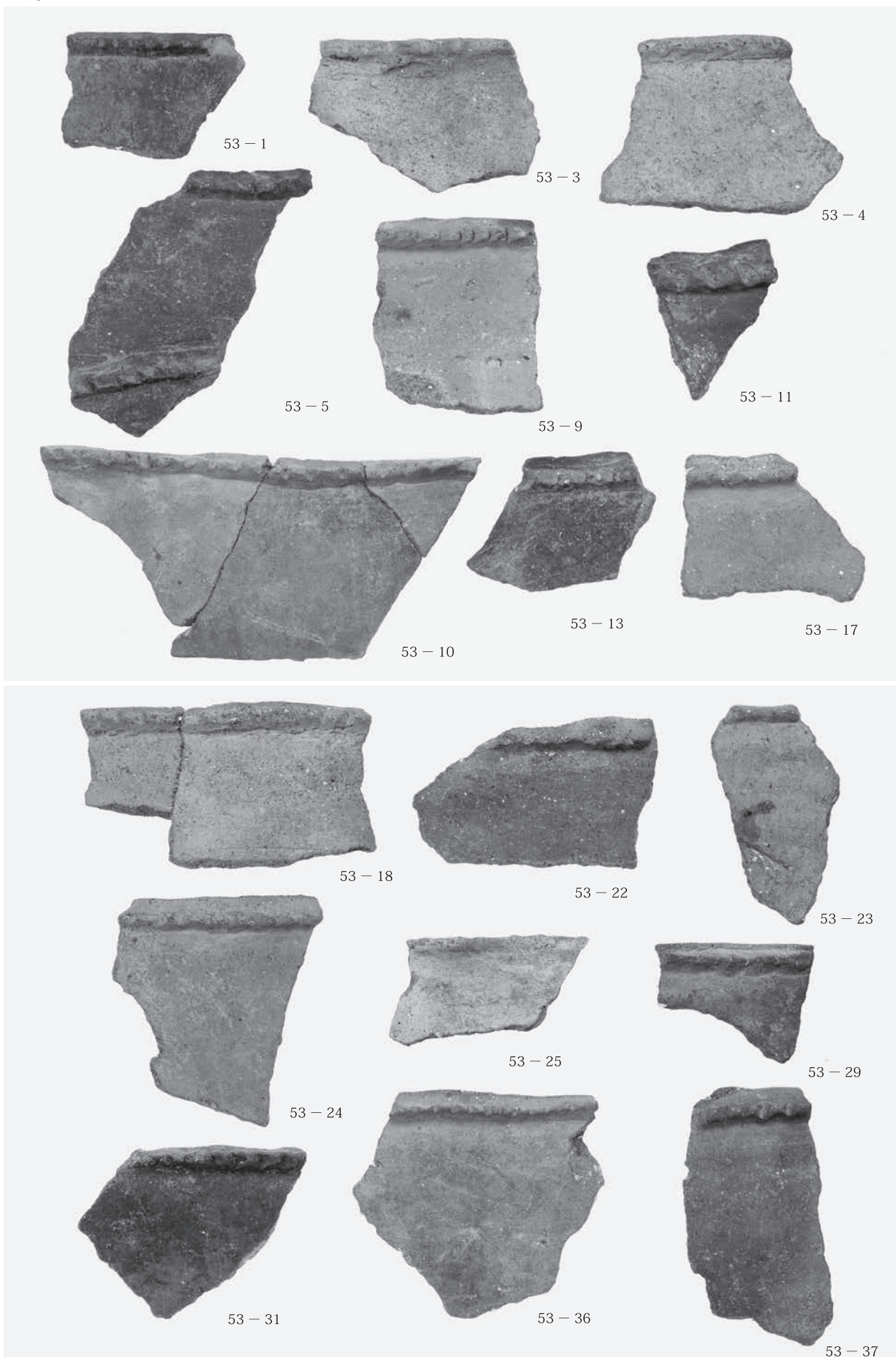
52-3

52-5



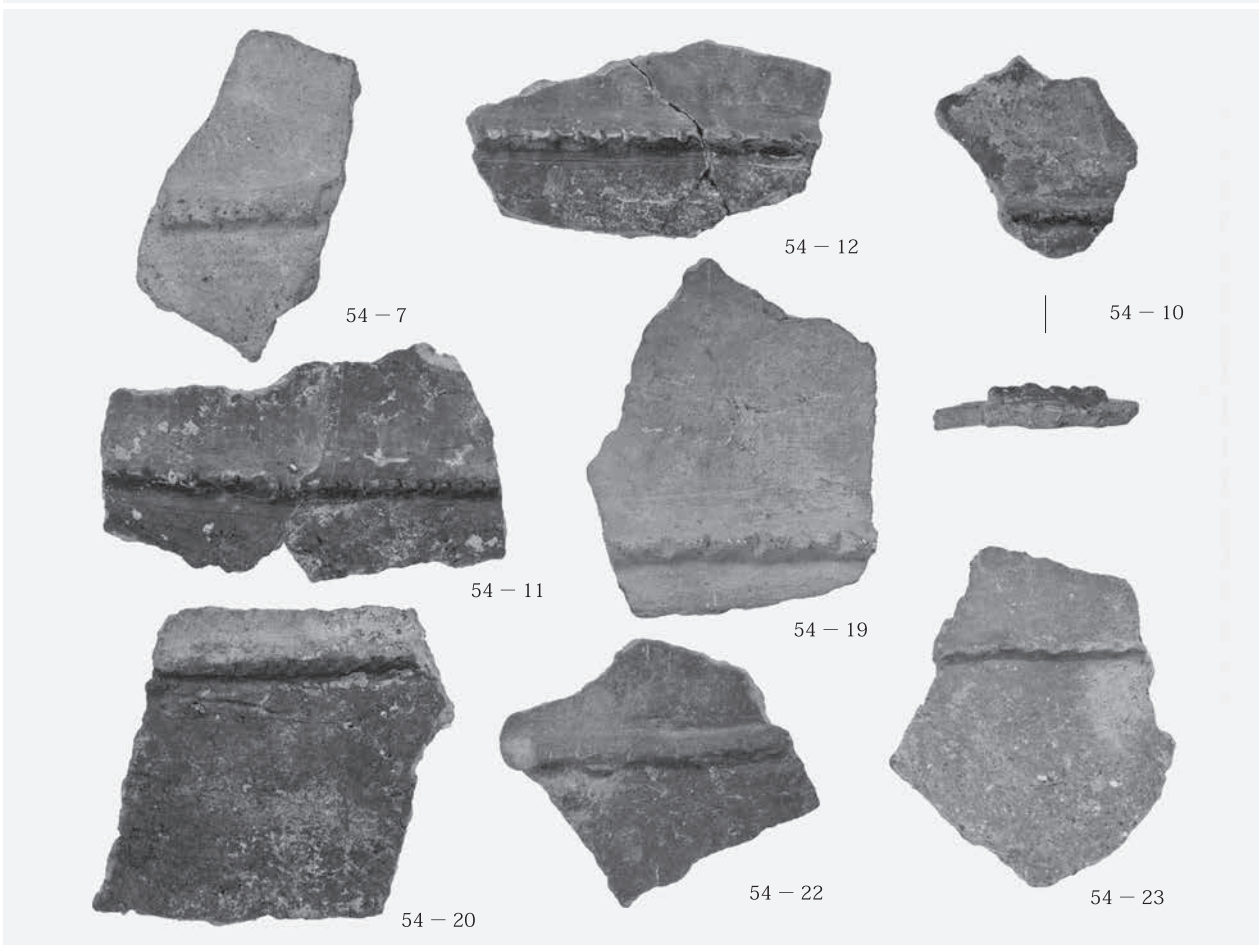
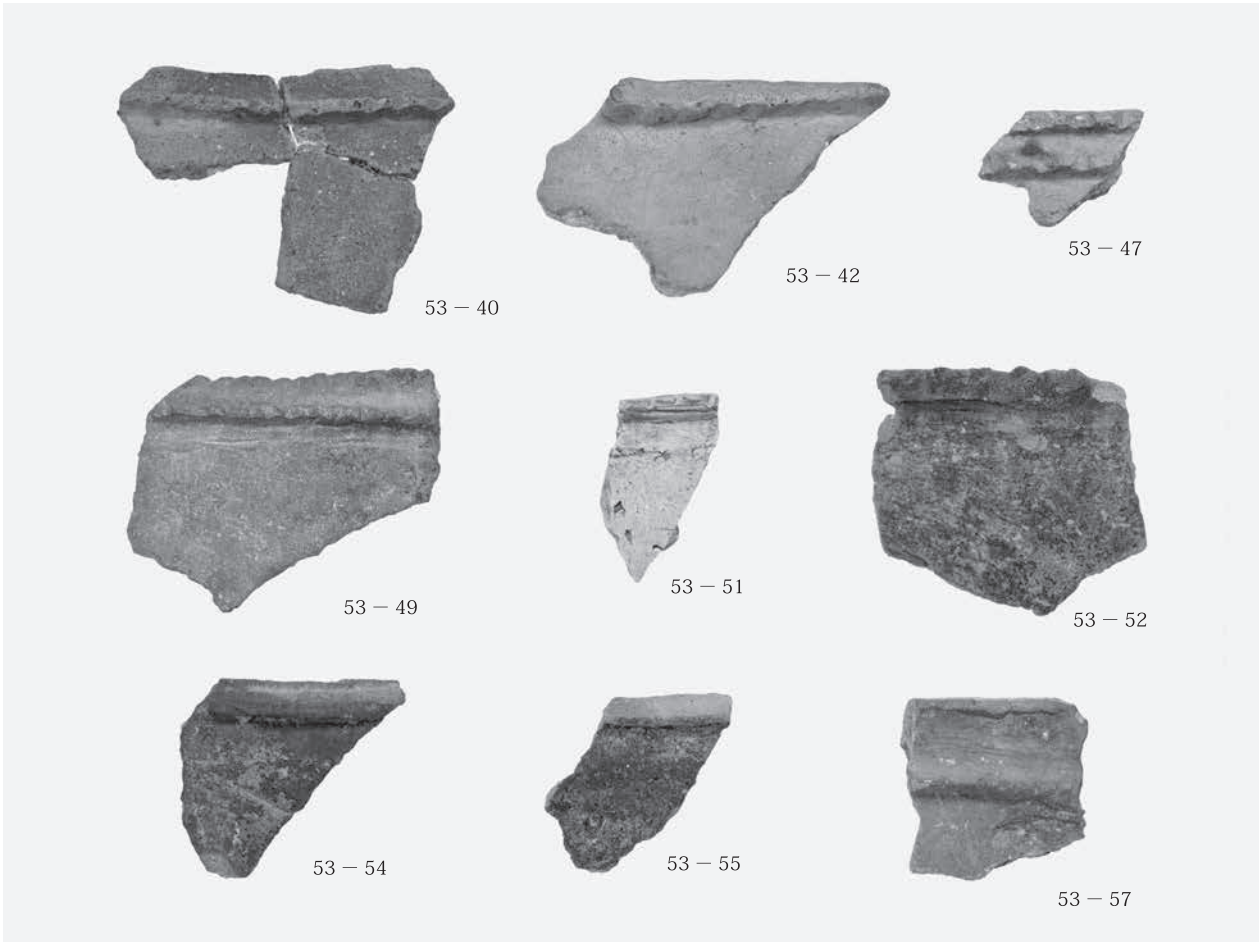
第14-1面(339落ち込み)出土遺物

図版30 遺物



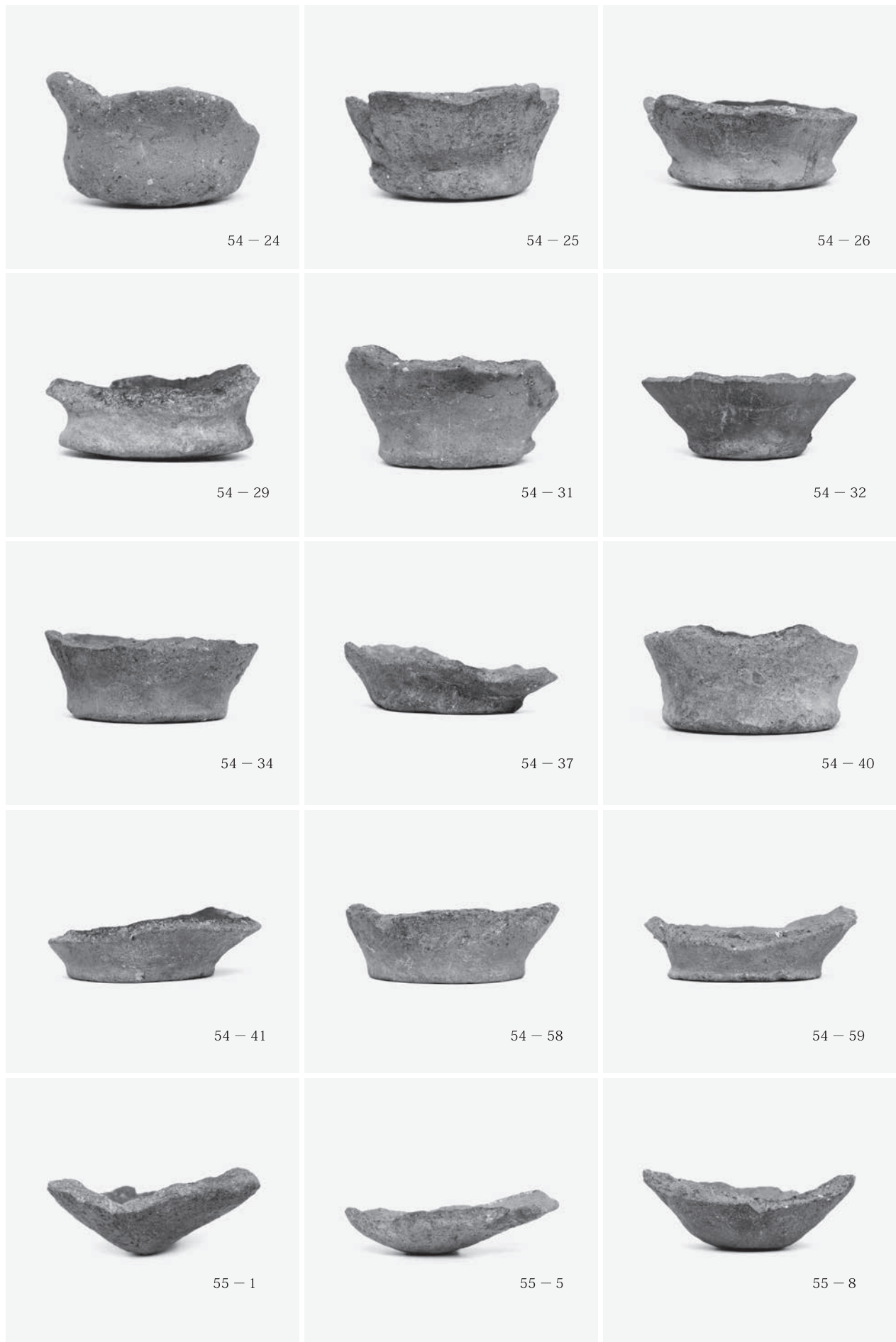
第14-1面(339落ち込み)出土遺物

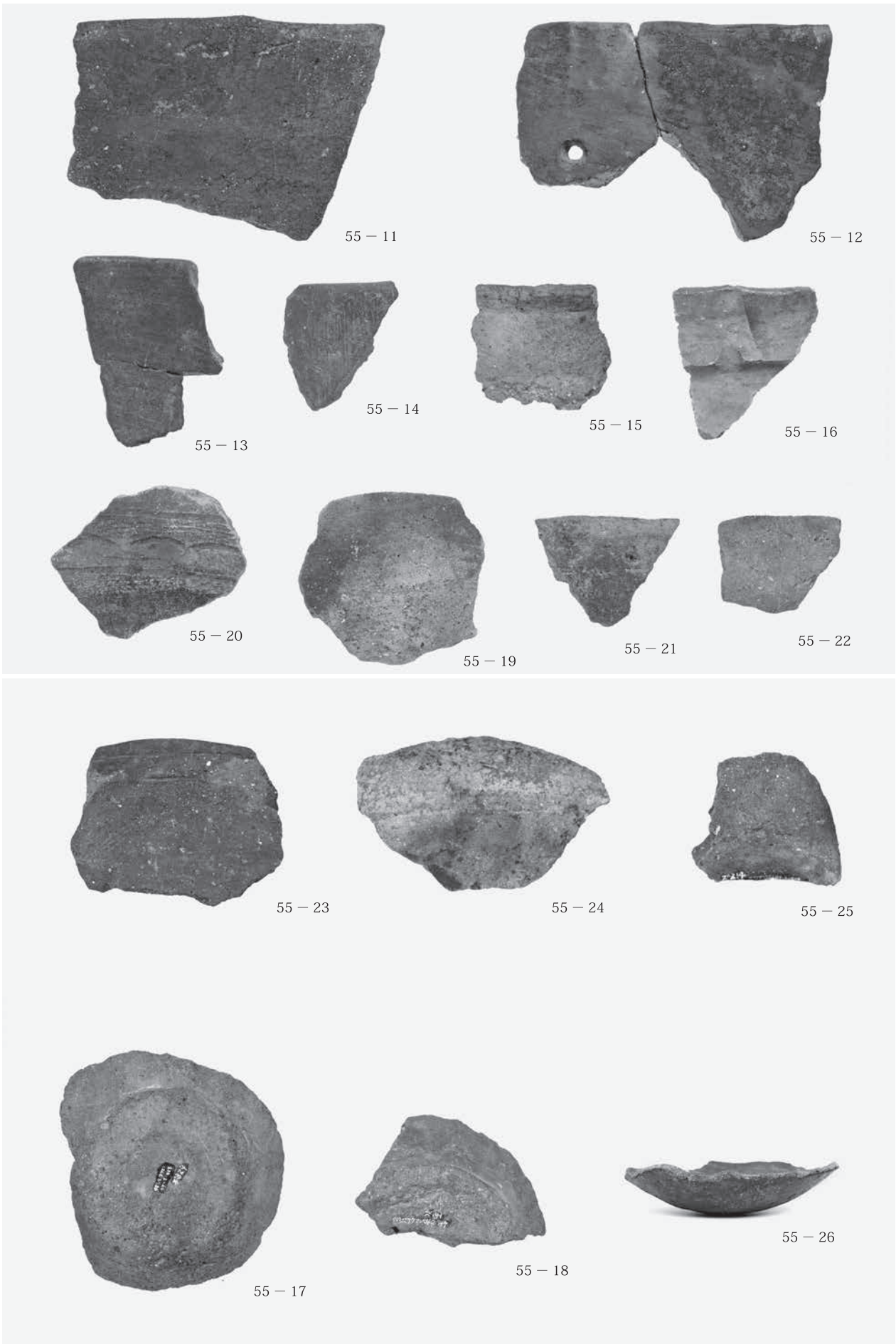




第14-1面(339落ち込み)出土遺物

図版32 遺物





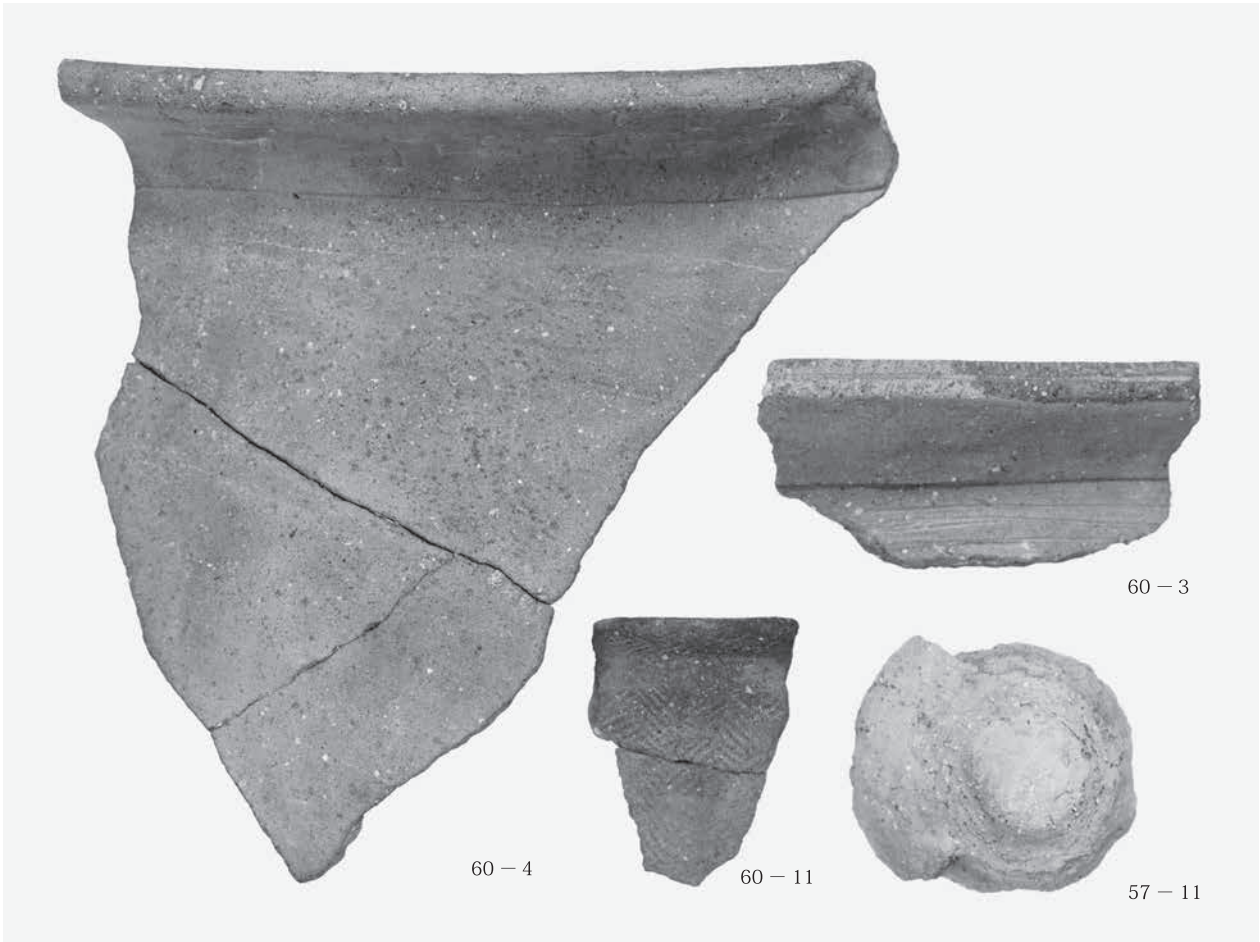
第14-1面(339落ち込み)出土遺物

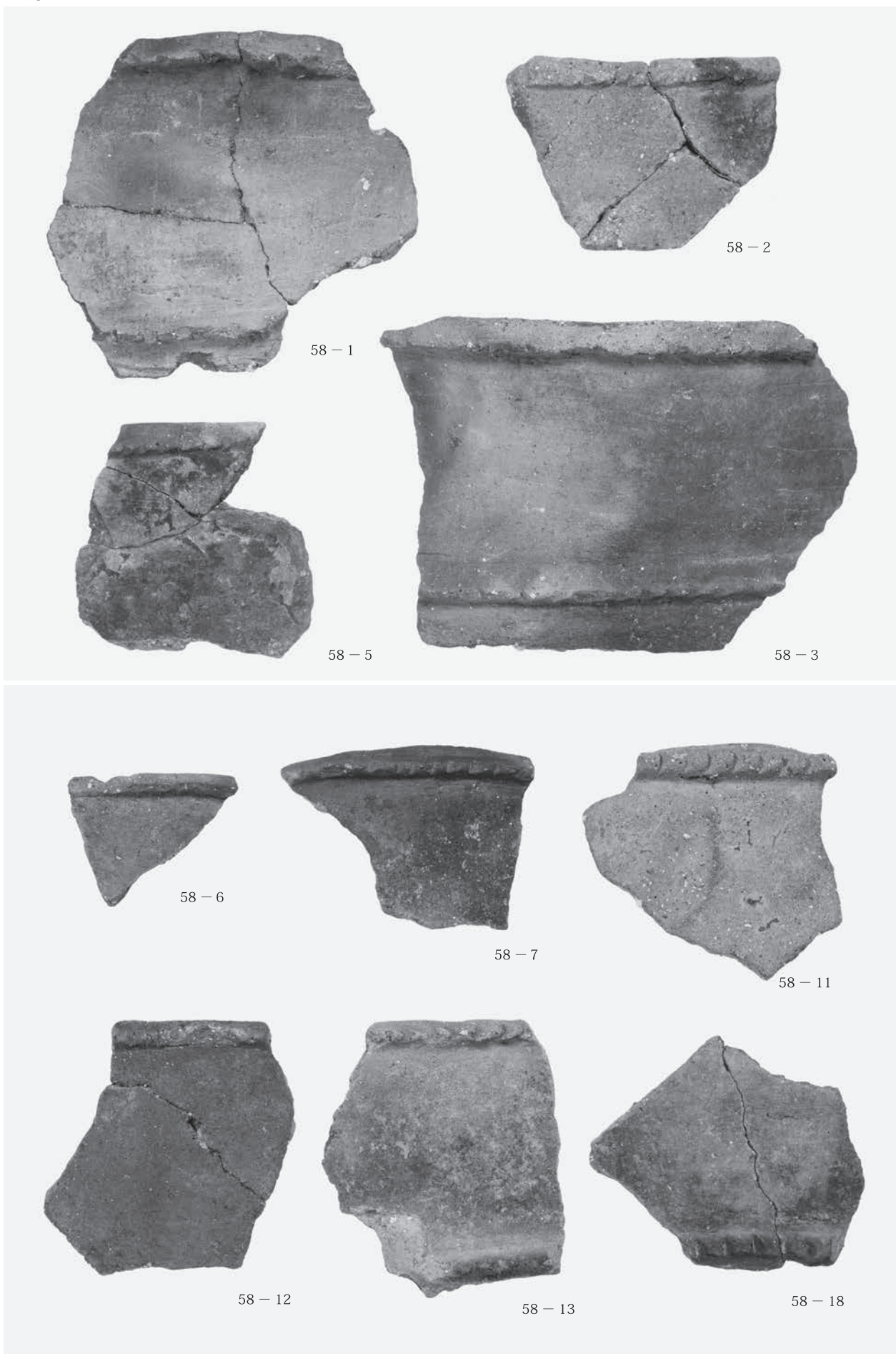
図版34 遺物

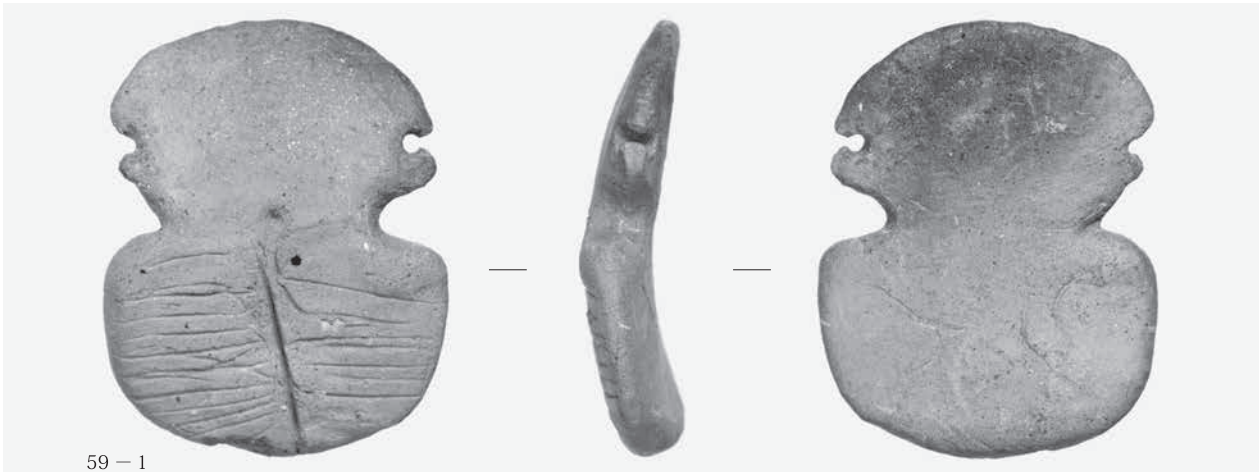
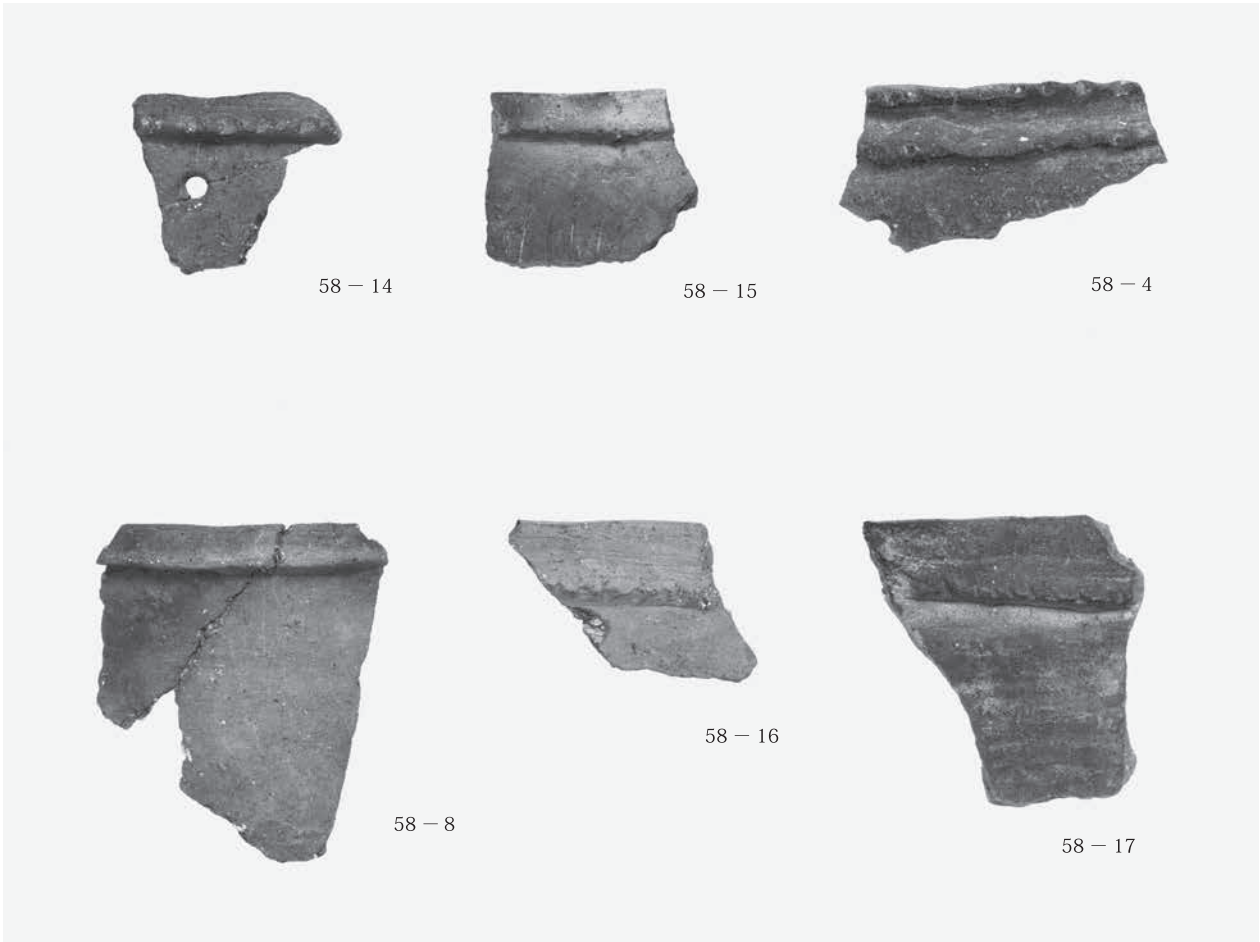


第 14 - 1 面 (339 落ち込み) 出土遺物

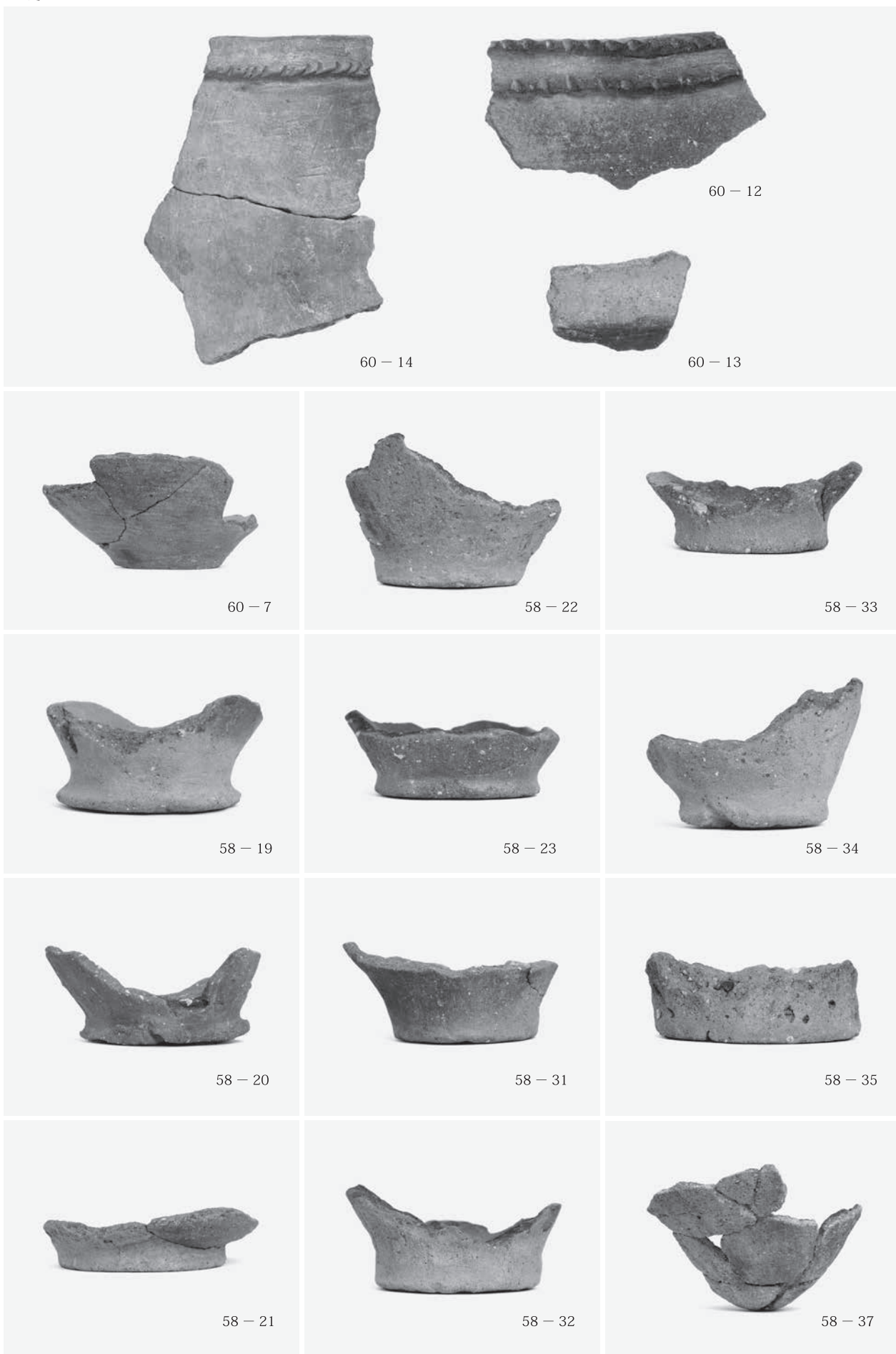
第 14 - 1 面・14 - 1 層出土遺物





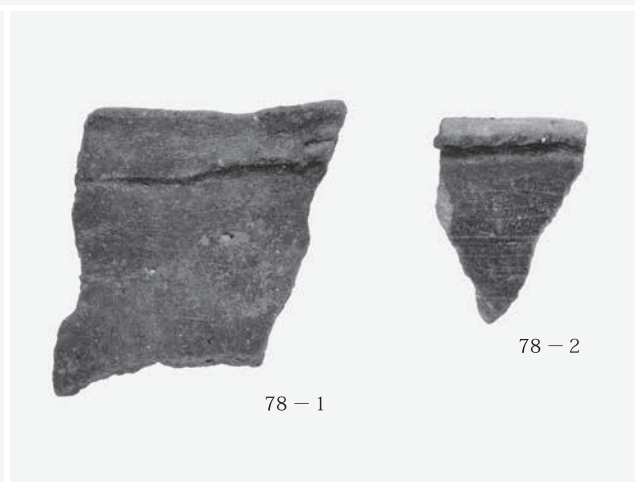
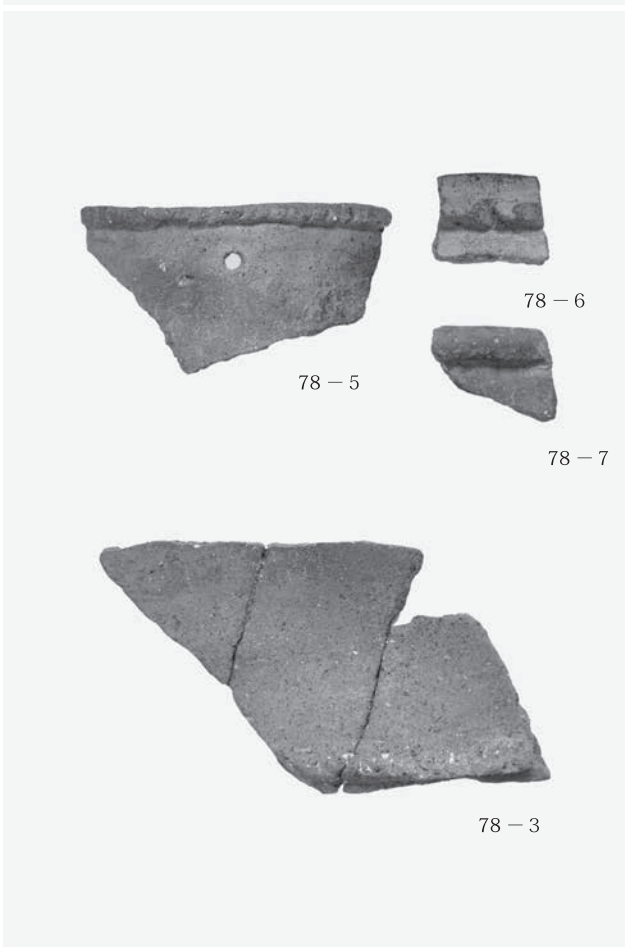


図版38 遺物



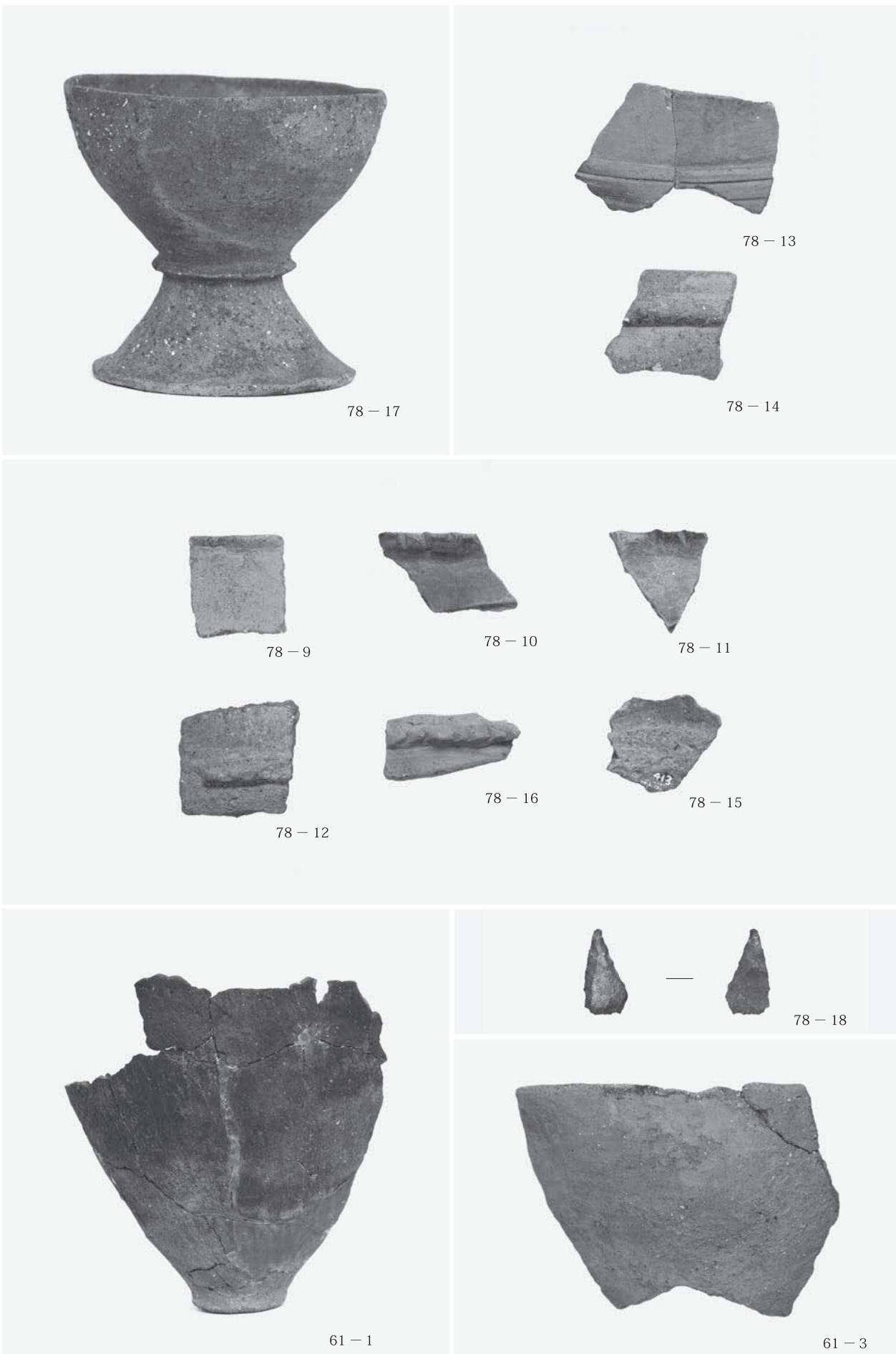
第 14 - 1 層・14 層・14 層関連出土遺物





第14-2b面(506土坑・459土坑・447木棺墓)出土遺物

図版40 遺物



第14-2b面(486A・B土坑・374土坑・460土坑・432土坑・467木棺墓・495ピット)・14-2層出土遺物



79-1



79-3



79-2



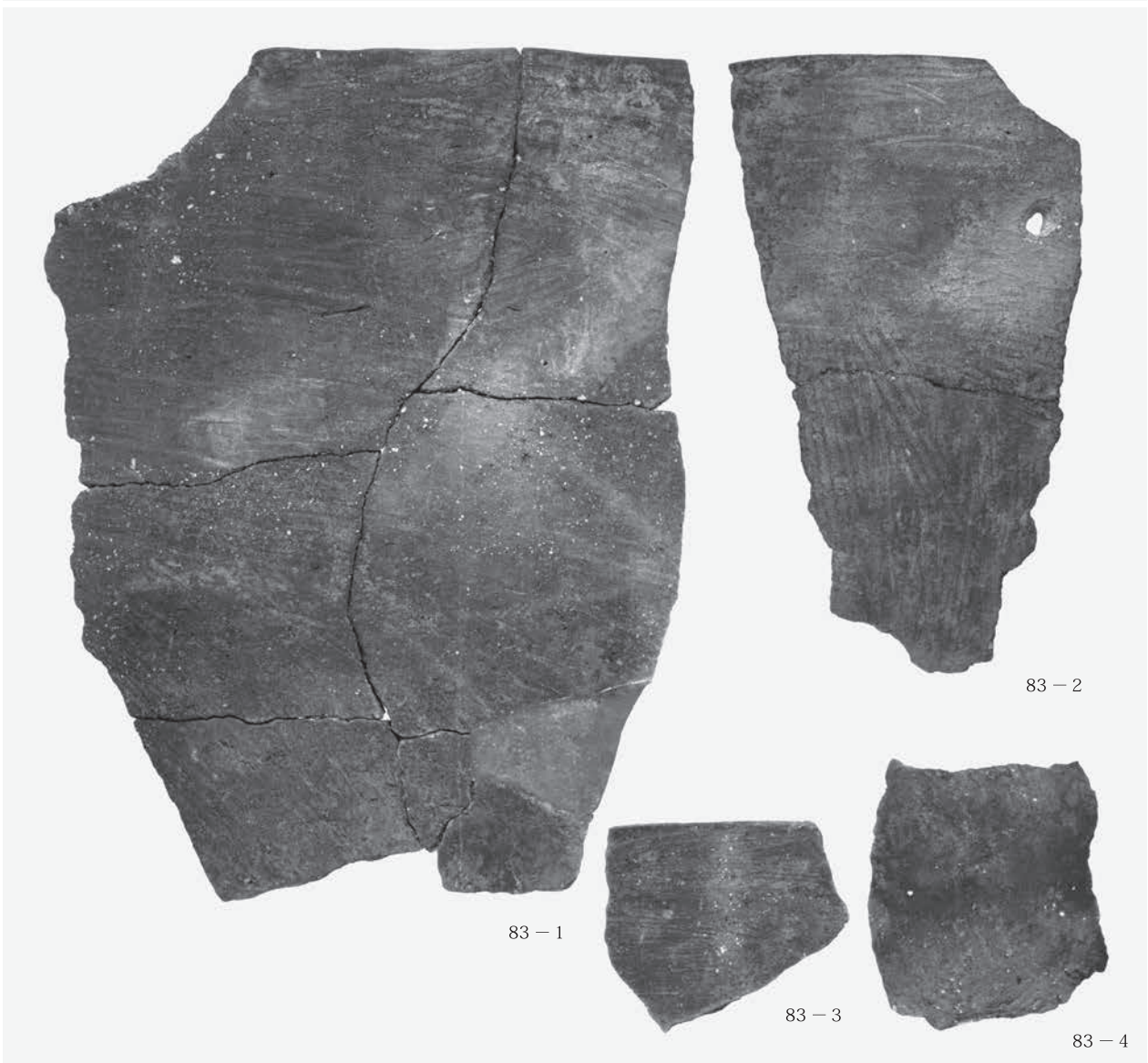
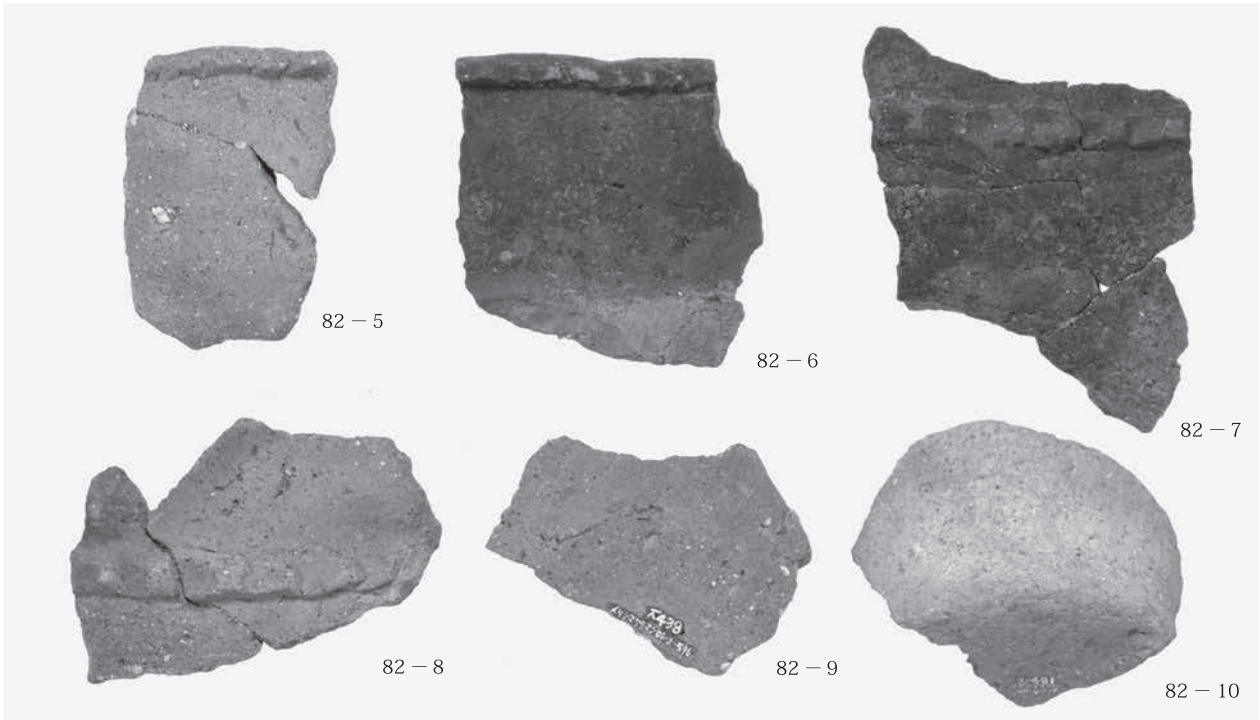
79-4

第 14 - 2b 面 (433 木棺墓) 出土遺物

図版42 遺物



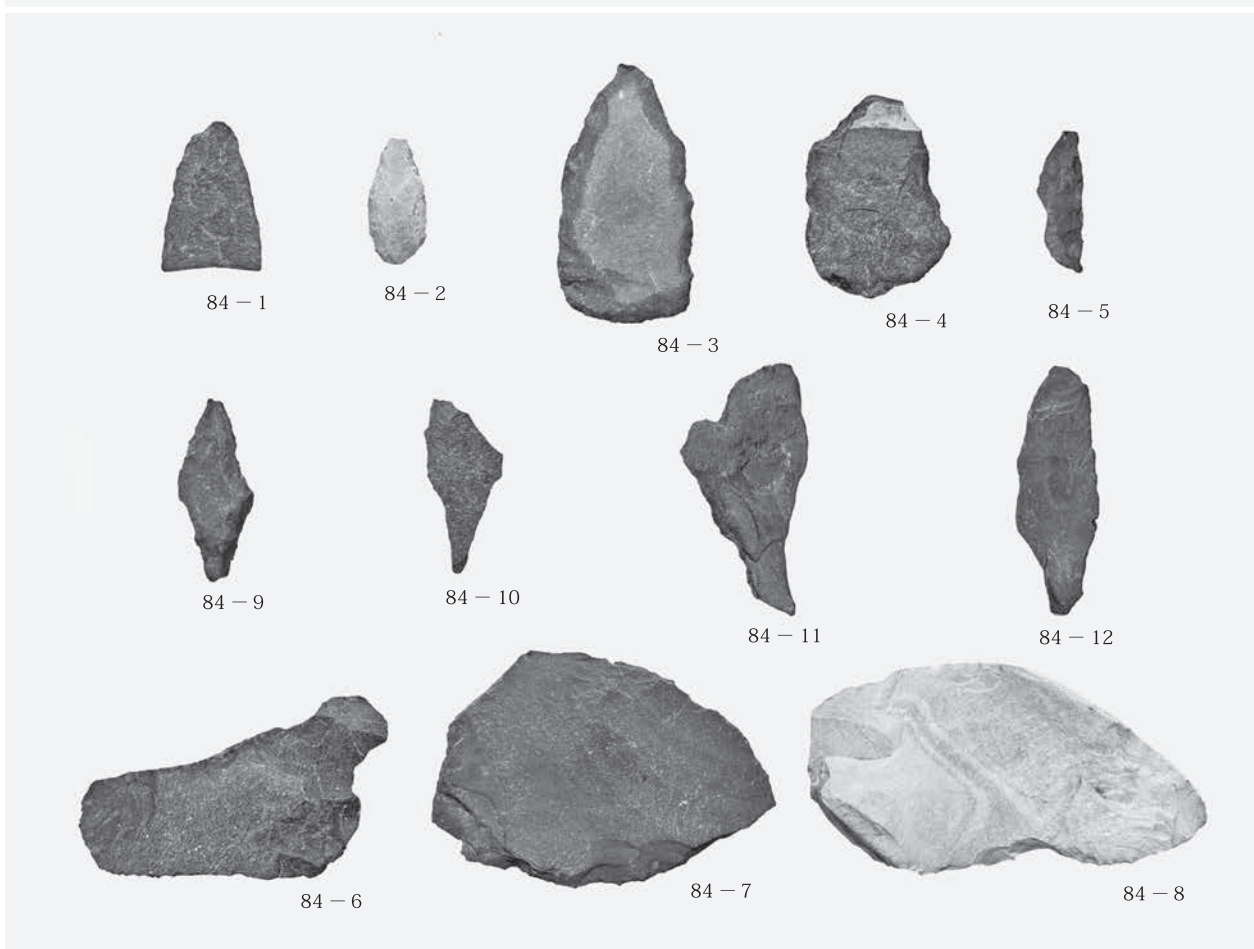
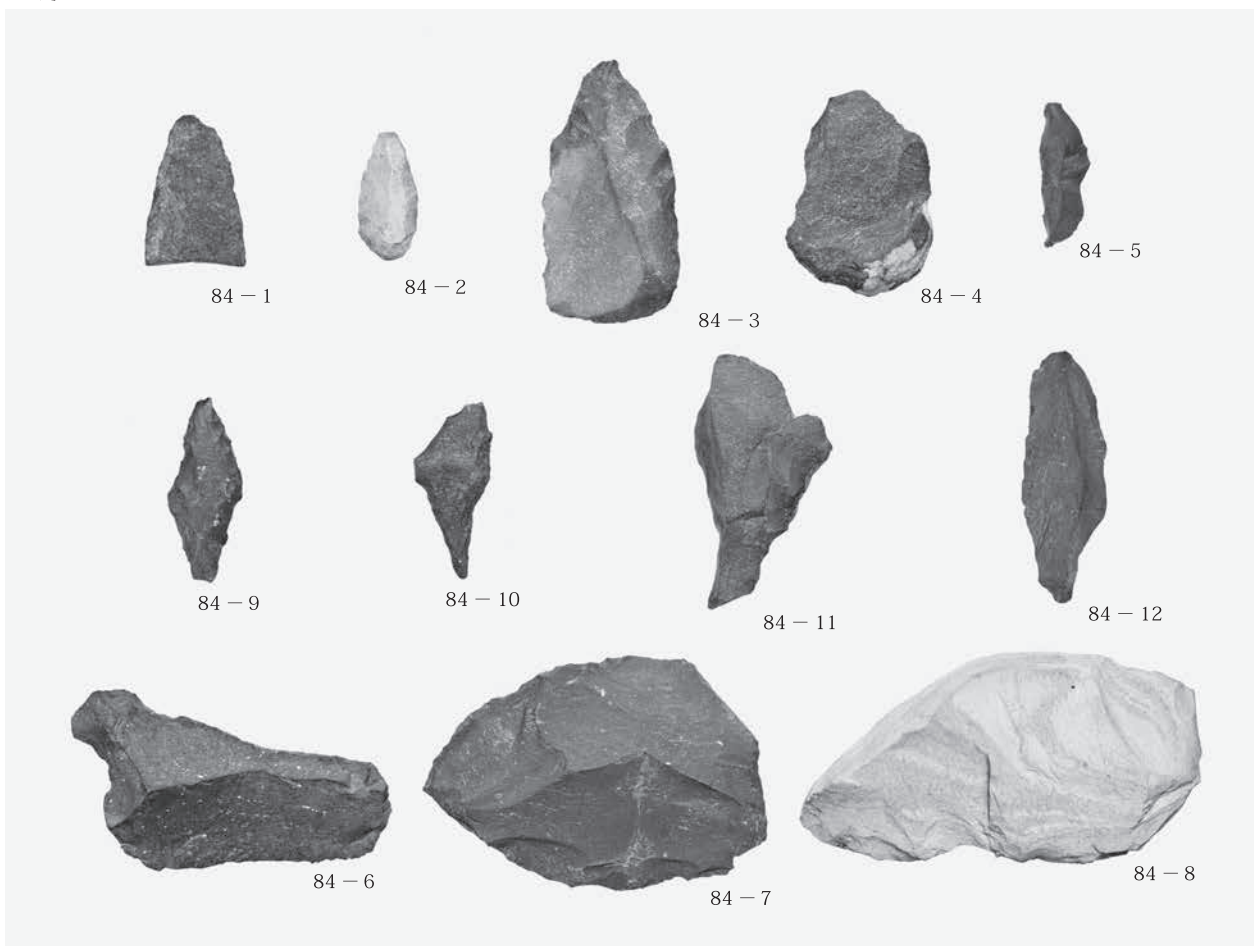
第14-2b面(366土器棺墓)・第14-2b層出土遺物



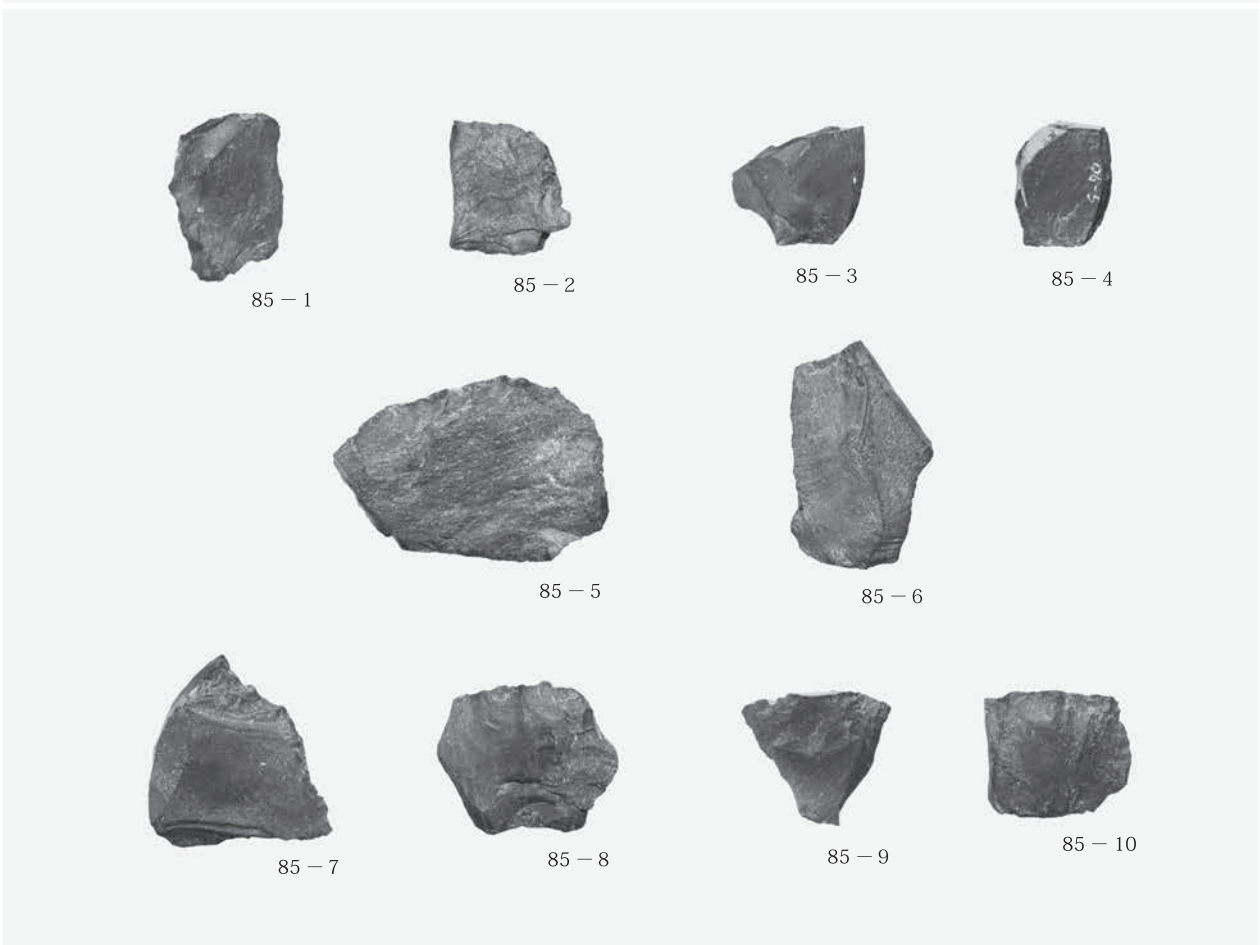
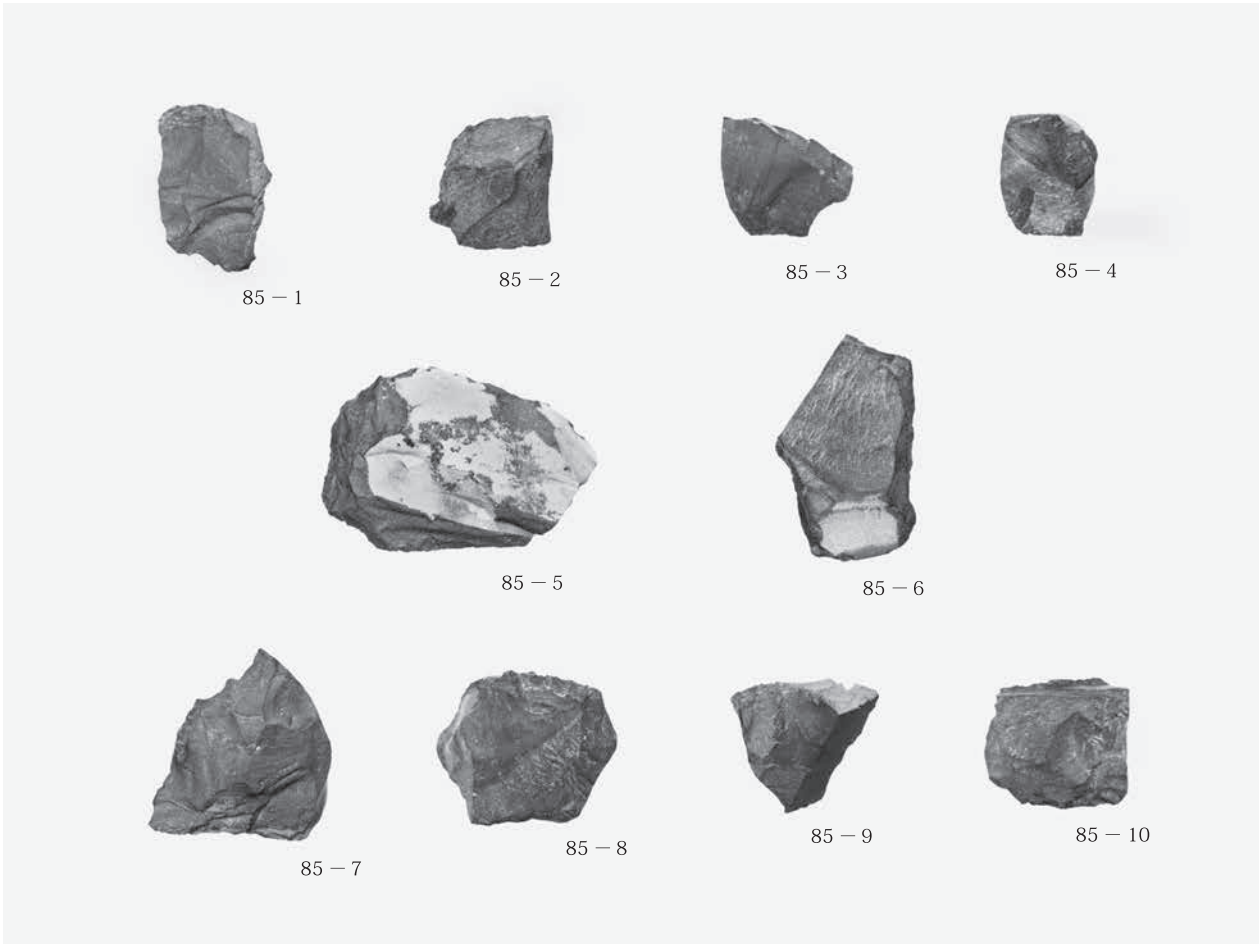
第 14 - 2b 層出土遺物

第 15 - 2 面・15 - 2 層・15 - 3b 層出土遺物

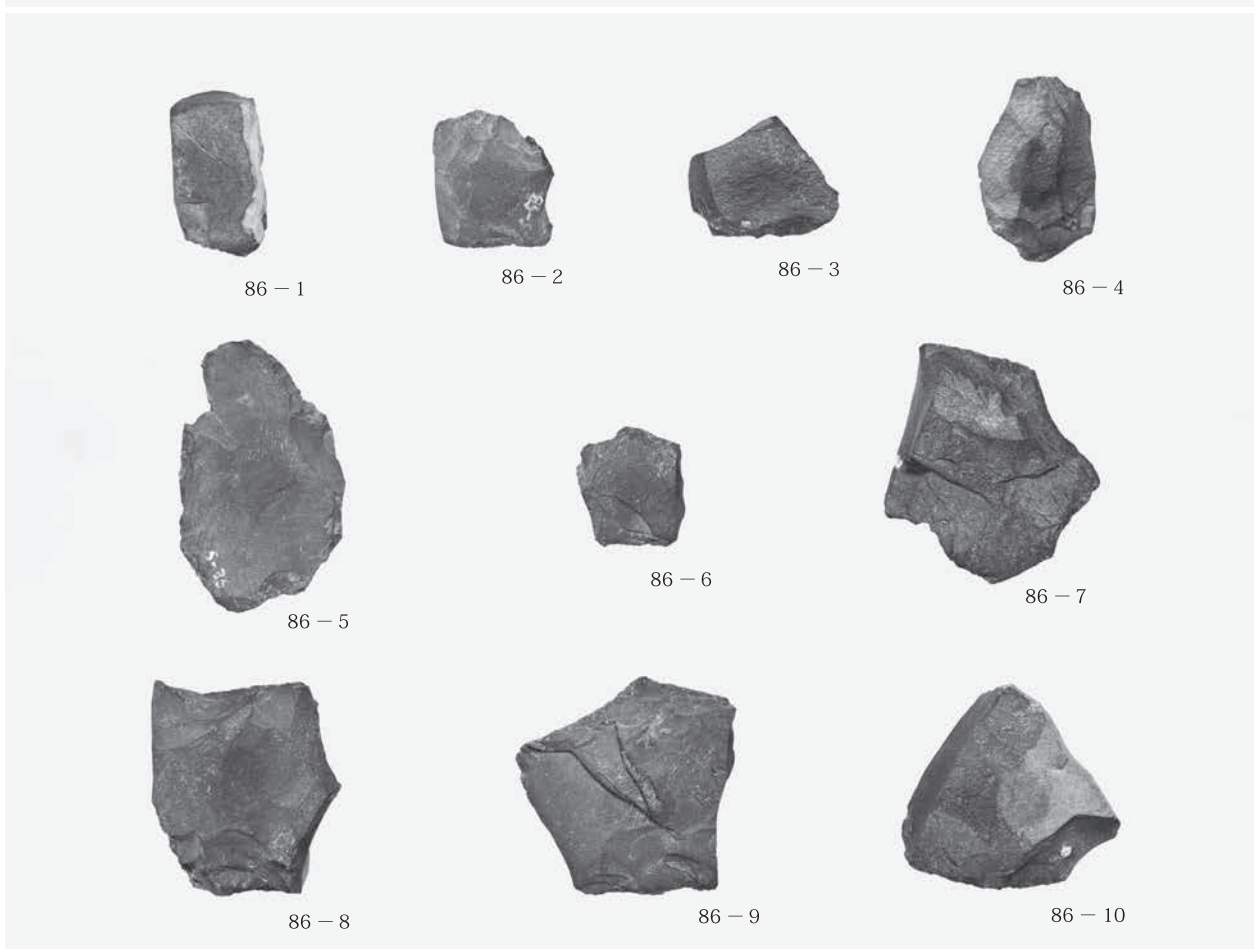
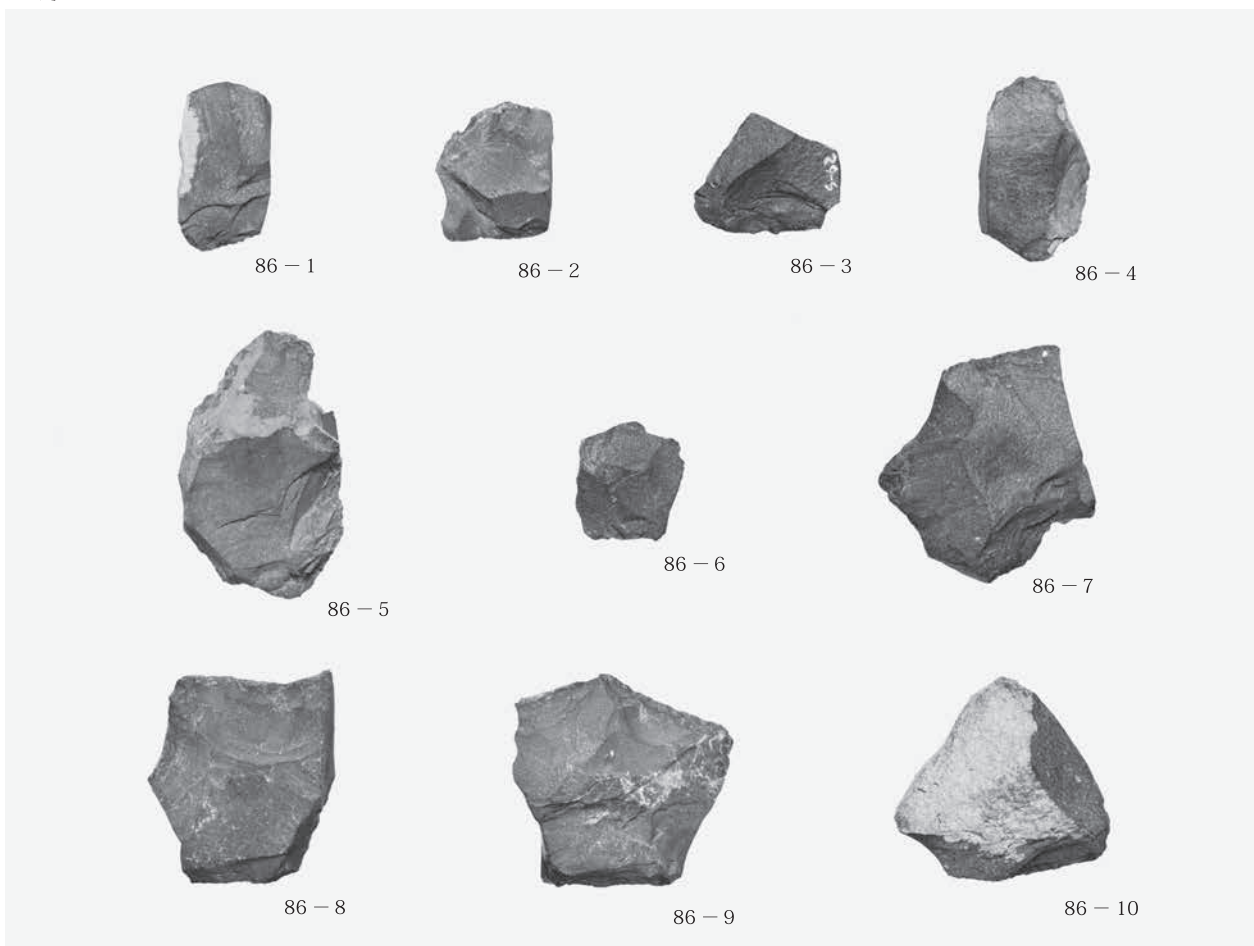
図版44 遺物



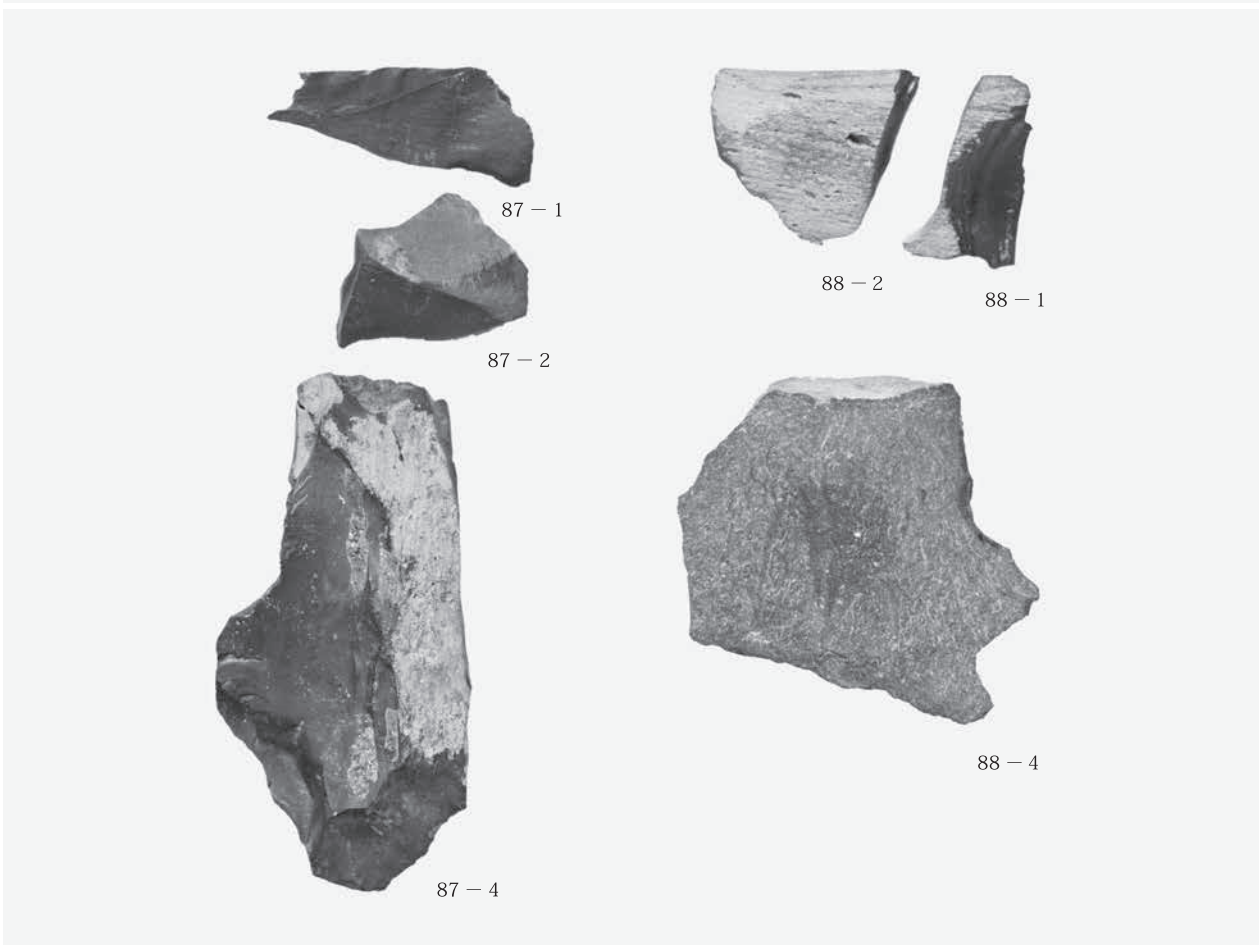
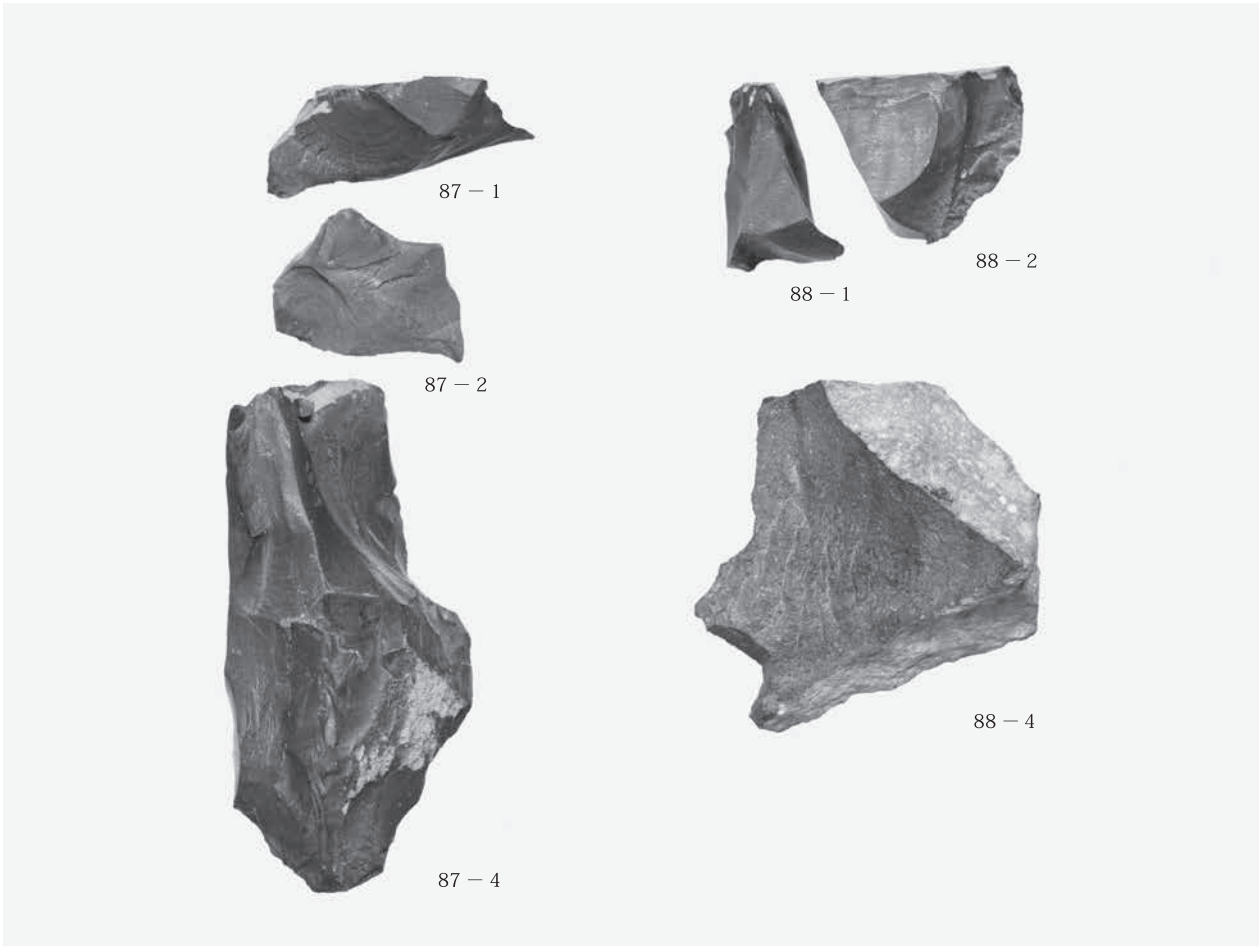
石器（石鏃・石槍・石錐・石匙・削器）



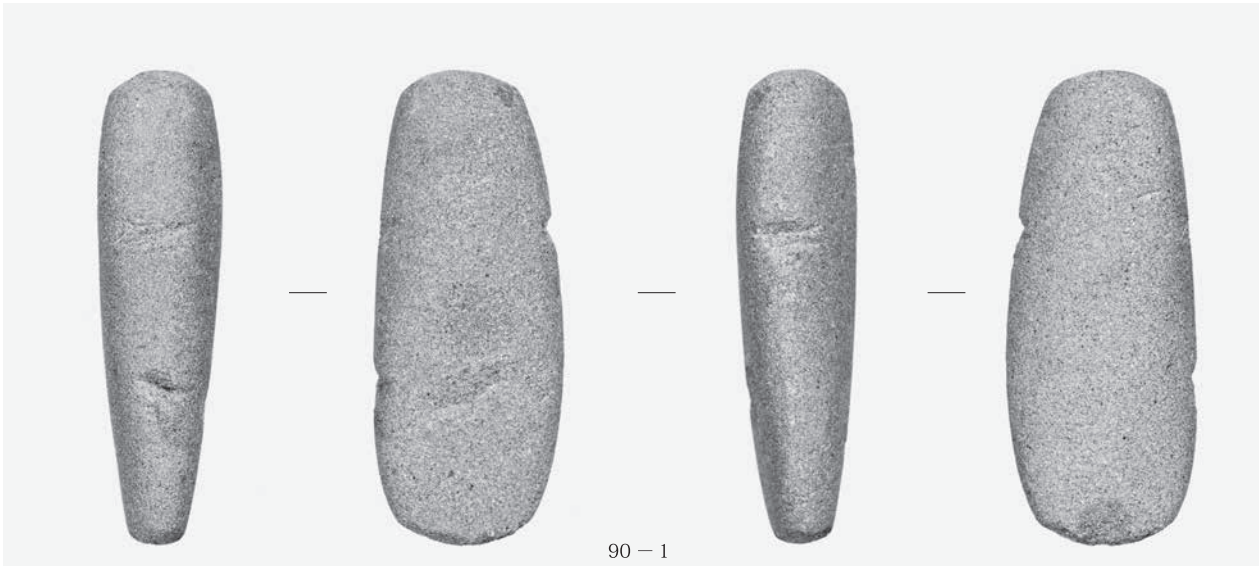
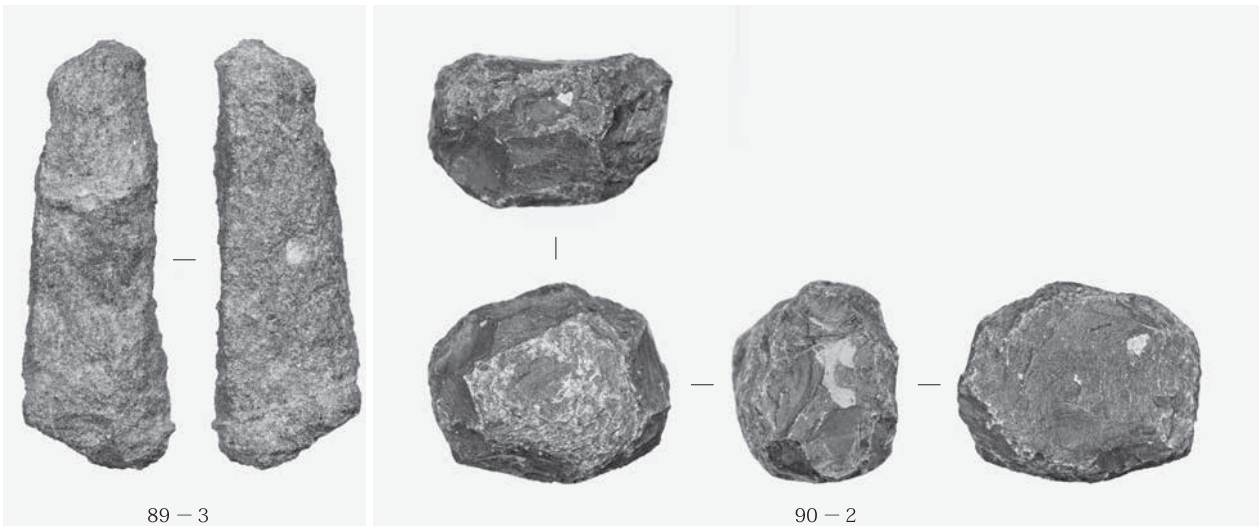
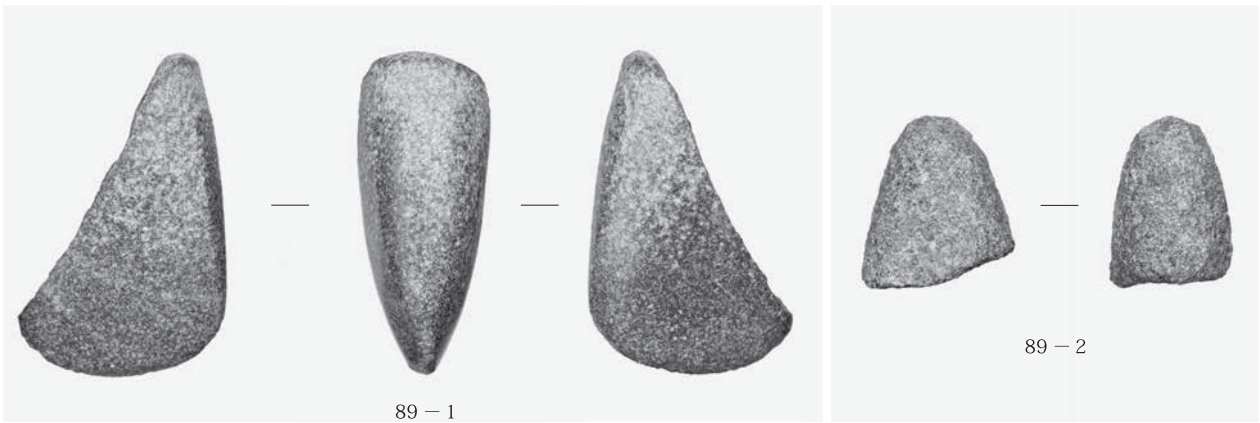
石器（楔形石器）







石器（楔形石器・剥片・板状剥片）





91-1



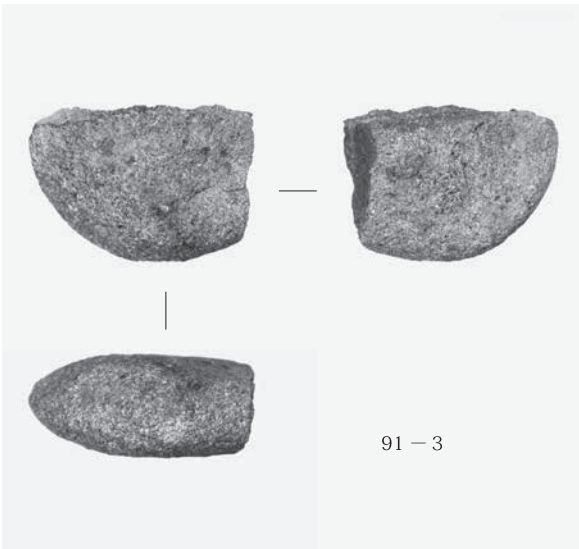
91-4



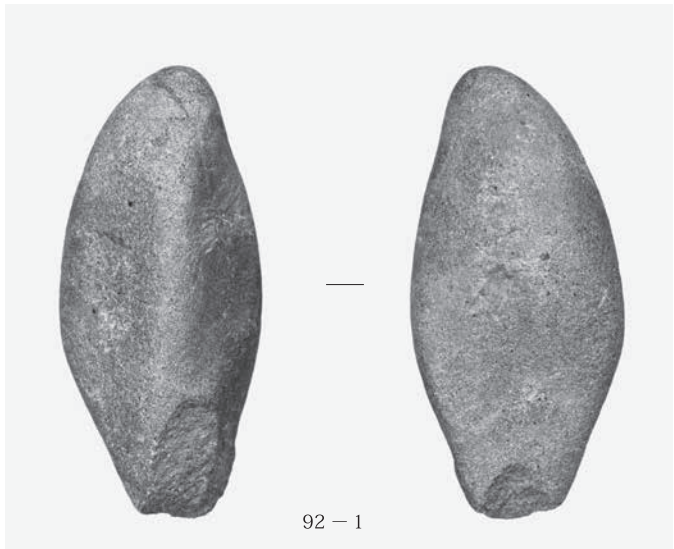
91-2



92-2

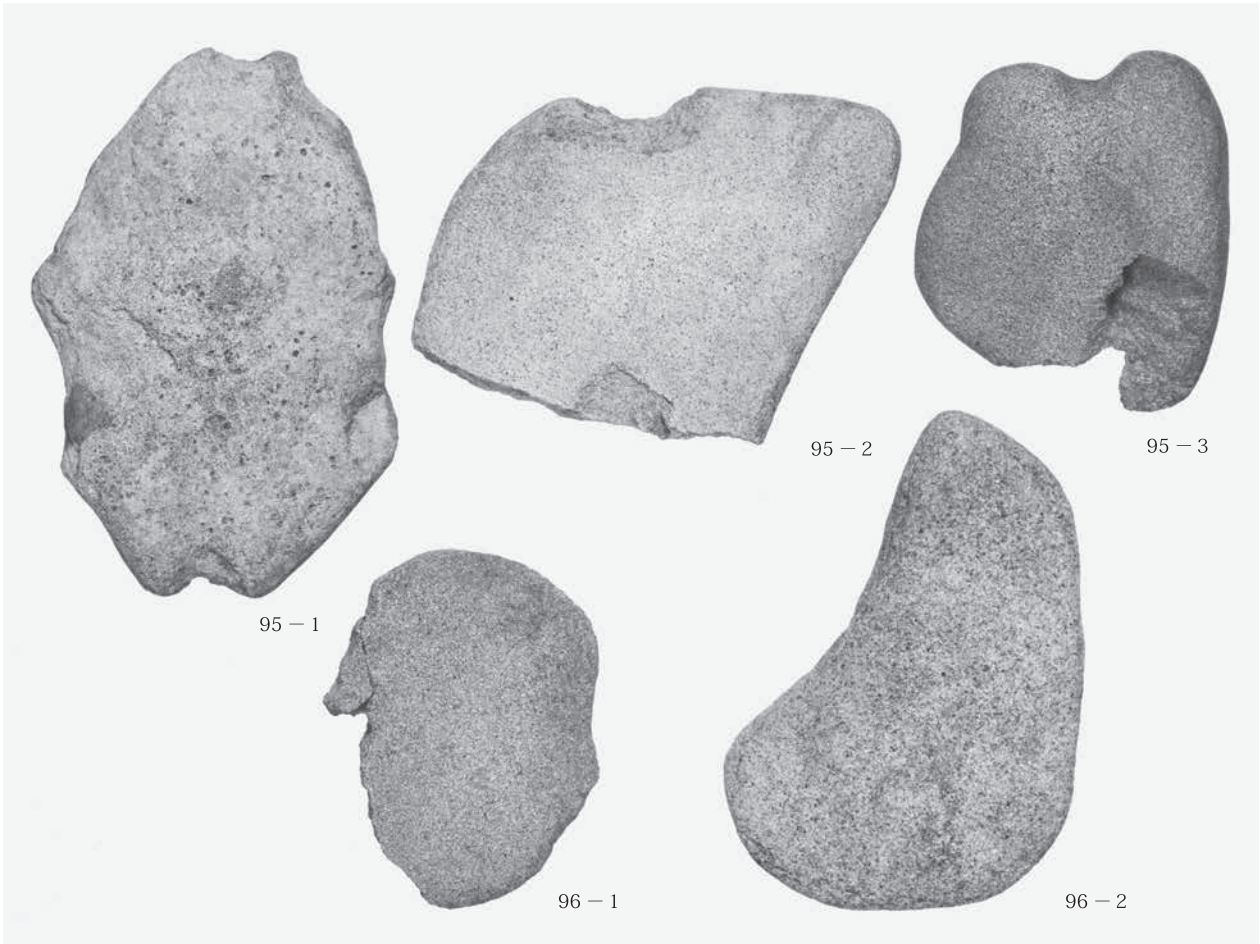


91-3



92-1





石器（石錘・叩石・板状礫）

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	いけしま・ふくまんじいせき5							
書名	池島・福万寺遺跡5							
副書名	一級河川恩智川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書（池島Ⅱ期地区04-2調査区）							
シリーズ名	（財）大阪府文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第179集							
編著者名	田中龍男・林日佐子・廣瀬時習（編集）・島崎久恵・後川恵太郎・内田真雄・飯田浩光・乾哲也							
編集機関	財団法人 大阪府文化財センター							
所在地	〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号 TEL072-299-8791							
発行年月日	2008年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いけしま・ふくまんじ 池島・福万寺 いせき 遺跡	おおさかふびがしおおさかし 大阪府東大阪市 いけしまちょうちない 池島町地内	27227	93	34度38分 55秒	135度37分 47秒	2004年12月8日 ) 2006年8月7日	1915㎡	恩智川治 水緑地の 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
池島・福万寺 遺跡	田畠	現代～古代	鳥畠・溝・ピット	陶磁器・瓦器・土師器・須恵器・銭貨				
	集落	古墳時代	溝・土坑・ピット	土師器・須恵器		微高地上に溝・土坑・ピット		
	水田	弥生時代	大畦畔・畦畔（水田）	弥生土器		弥生時代の地形変遷と各時期の水田の変遷		
	集落	縄文～弥生時代	溝・土坑・ピット	弥生土器・突帯文土器・浮線文系土器・縄文土器・石鏃・石棒・土偶・土製品・ミニチュア土器・イノシシ犬歯装身具		微高地上に溝・土坑・ピット		
	墓	縄文～弥生時代	木棺墓・土器棺墓・土壙墓	弥生土器・突帯文土器・石鏃		微高地上に墓域		
要約	<p>当遺跡における発掘調査は、1981年に発掘調査が開始され現在も継続中である。当調査区は、池島Ⅱ期地区の最初の本格的な調査である。既往の調査において、条里地割の変遷や、古墳時代～弥生時代前期中頃の水田面などの農耕関連遺構と古墳時代の初頭～前期および古墳時代中期後半～後期にかけての集落関連遺構などが重層的に検出されている。今回の調査は、縄文時代から弥生時代にかけての堆積物が非常に厚く、その他の堆積各時期の人為的行為によって大きく削平を受けており、古墳時代以降の各遺構面は遺存状況が悪かった。一方弥生時代についても、既往の調査で検出されてきた各時期の水田面のうち、中期後半の水田面は良好に検出したが、それ以外の時期については検出されなかった。しかし、当調査区では従来弥生時代前期中頃とされている土壌層を除去した第14-2b面から縄文時代晩期～弥生時代前期にかけてと考えられる遺構群が検出された。検出された遺構は、掘立柱建物・木棺墓・土器棺墓（弥生土器壺）・土壙墓などである。また、掘立柱建物東側の落ち込み部分では、弥生土器は僅かであったが大量の突帯文土器が出土している。当調査区で出土した当該時期の遺物は、弥生土器はほぼ完形の土器棺以外には少なく、突帯文土器が大半を占めている。木棺墓は、共伴遺物がなく時期が特定できないが、縄文～弥生時代への移行期の様相の一端を示す良好な資料と考えられる。</p>							

(財) 大阪府文化財センター調査報告書 第179集

## 池島・福万寺遺跡5

——級河川恩智川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書——  
(池島Ⅱ期地区04-2調査区)

発行年月日：2008年3月31日

編集・発行：財団法人 大阪府文化財センター  
大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号

印刷・製本：三星商事印刷株式会社  
京都市中京区新町通竹屋町下ル弁財天町300